

---

# 出歩いて...落っこちて...

QOL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

出歩いて…落っこちて…

### 【コード】

N0923H

### 【作者名】

QOL

### 【あらすじ】

穴に落っこちて、気が付いたら森の中にいた五十嵐君のお話。

## 序章（前書き）

初めてですので、見苦しい個所があっても、温かい目で見てください。尚、主人公君は最強になる予定です。

## 序章

「出歩いて…落っこちて・序章」

「お、おたすけええええ！！」

「やあ皆さん初めまして。」

「僕の名前は五十嵐 かなめ、女の子ツポイ名前だけどれっきとした男の子だ。」

「そして今現在、僕はピンチに陥っている。」

「今日はホントに運が無かった。」

「朝起きれば、冷蔵庫の中は空だったことを忘れ朝食抜き。」

「おまけに寝坊もしていた為、学校に急いで行くつもりとして野良イヌの尻尾を踏み（結構デカイ犬）追いかけてまわされ、学校に逃げ込んだ。」

「だが、時すでに遅く大遅刻。」

「当然教師に叱られ、同級生の前で恥をかいた。」

「おまけに、抜き打ちでテストがあり、普段それほど勉強していた訳ではない僕が良い点を取るには競馬で1000円を10万円にするくらいムリがある。」

「つまり散々な結果だったってワケ。」

「そういう訳で憂鬱な気持ちで学校から帰ろうと思った所、また尻尾を踏んだ…おまけに同じ犬の。」

“もう許さんぞワレエー！匂いは覚えたかな！！”みたいな感じで追っかけられた僕は必死で逃げ切り何とか家に逃げ込むことに成功したのだ！

だが、僕の運の無さは続いていたらしい。

今日はいつもお世話になっている喫茶店のバイトの日だったんだよね…。

こないだ急に休みを入れた為、今日は休む訳にもいかない。

だけど、嫌な予感がしてしょうがない。

今日はろくな目に会っていない僕は、このまま家を出ればまた何かトラブル（主に犬関係）に巻き込まれそうな気がした。

しかし、休む訳にはいかないと思い、あの犬に出会わないことを願い、恐る恐る愛おしい我が家（築20年のアパートメント）を後にした。

そして、僕は神様に嫌われていたらしい…。

2度ある事は3度あるってヤツですか？

あとちよつとでバイト先に着く！

そう思い十字路に差し掛かった時だった。

曲がり角からあの犬が突如として現れたのだ！

“おこつてる？”

“モチ”

こんな感じのアイコンタクトが成立した俺達は、某ネズミと猫の追いかけてつこよろしく駆けだした。  
初めて別の動物との意思疎通ができた瞬間だと思う。

「いやあああ!!」

「ガウガウガウ!!」

今日何度目か解らない全力疾走の俺、後ろからは素敵な歯並びをした  
“ テメエ!ク・イ・コ・ロ・ス!” 全開なワンちゃん…不幸すぎる。

「こ、この路地を抜ければ!」

「グルルルル…(逃がすかあ!)」

なんだか幻聴が聞こえた気がしたが気にしない。

僕は路地を抜ければすぐそこにあるバイト先へ逃げ込む為、路地を  
一気に駆け抜け…

「うわああああ!!」

「ガウウウウ?!」

そのまま、物陰に隠れて見えなかったマンホールだと思つ穴に落下  
した…犬も一緒に。

「で、こいこいよ。」

「く〜ん（おめっ）」

気が付けばそこは、鬱蒼とした森の中でした。

## 第1章（前書き）

やや、強引かも知れません。



## 第1章

「出歩いて…落っこちて・第1章」

「さてさて、こいつは困った」

「わふ（そうだな…）」

周りを見渡しても木ばっかりで何処まで行っても緑緑緑緑緑のオンパレードでまるで人気がありません。落ちてきたはずの頭上は、どこまでも広がりそうな蒼い空。天井なんて無いし当然穴もございません。

なんで妙に落ち着いているって？八八違うよ？

もう驚きを通り越してるだけで、いつ取り乱してもおかしくないんだ。

現に心臓はどっくんどっくんと血圧が随時上昇中って感じ。

「しっかし、お前も災難だなあ、まさか俺と一緒にココに来ちゃうなんて…」

僕は不安を紛らわす為、つつい隣でお座りしている赤毛が特徴の犬に話しかける。

この犬さんはあれだ。冒頭で僕を追いかけ回していたあのワンちゃん。ただ現状で唯一の知り合い(?)な訳だから……うん、もう混乱絶頂って感じたな。でも一人で無くて良かったよ、これで犬が喋れたら良かったんだけどさ……。

「がう(確かに……ココじゃ飯も期待できそうにないなあ)」

「飯って……まあ確かにココじゃ無理そうだよねえ……」

「わふ?(どした?)」

「ねえ……なんで僕、犬が喋っている事が解るんだろうね?」

「わう(ソレを何故犬である俺に聞く?つーか、さつきから普通に受け答えしてるじゃねーか)」

「そ、そう言えばそうだった……」

ううん、どうやら大分頭がまいってるみたいだ……犬の言葉が聞こえるなんて。

あまつさえソレが理解できてしまうなんて……病院はどこですか?

「あれ?でも、さつき追っかけてきた時は聞こえなかったような?」

「わふん(あんときは今より頭回らなかった。オマエ マルカジリって感じだったんだぜ?)」

「……とりあえず何度も尻尾踏んだこと謝っとくよ……もう追いかけられるのはごめんだしね」

「く〜ん(大丈夫だ。なんでだか知らないけど、頭すっきりしたら

なんだかもう怒って無いし」

「そいつは有り難い・・・はは、僕何してんだろう？」

あれ、何故かこの異常事態に順応してる自分があるよ？ヤバくない？  
しまいには幽霊とか妖精とかが見え始めるんだ。きつとそうだ。ほ  
ら、あそこに道への扉が

OK、とりあえず落ち着こう。このままじゃ完璧に発狂した  
変人みたいだからね。

しかし、この状況。本当にココはどこ何だろうか？僕の住んでいた  
地域に、こんな森は無いし・・・。  
とりあえず、まずは現状において、置かれている自身状況を冷静に  
整理してみよう。

こう言った時は焦ってはいけないんだ。しんだ爺ちゃんもそう言っ  
てた。

「ココはどうやら、広大な森の中らしい」

「(だな)」

「そして、周りに人の気配は無し・・・今の所動物も」

「(そうだな)」

「どうするべきだろうか？」

「(いや、俺に聞くなよ・・・)」

あ、いや、他に呟くべき人というか、相手がいなかったもんで。

ふーむ・・・そう言えば僕を持ちモノで何か役に立ちそうなモノ  
は無いだろうか？

とりあえず持つてるモノを確認してみよう。

「えーと、持ち物は・・・鞆一つに中に財布、それと携帯・・・携帯!？」

そうだ!携帯!もしかしたら電波が入る

「・・・んな訳も無し。圏外か」

ですよねー。山の中ですもん。完全に圏外です。電波が無いところで、携帯に意味はありません。

「後は以前から入れっぱなしのライター・・・なんで入れてるんだろっ?」

うーんと、うーんと・・・そう!以前キャンプした時にしまったんだ!

・・・って、ソレ以来入れっぱなし?使えるんだろうか?

カチ、カチ、カチ      シュボ

「ライターは使えるのか・・・」

地味に嬉しくて、何回か点けたり消したりしてた。だが、ガスがもつたいなくて火を点けるのをやめた。もしかしたら、野宿も有り得る訳だし、火を熾せるものは大事に取っておくべきだろう。さて、残ったモノは

「後は十得ナイフ                      それと、何これ？」

色々と便利そうで購入したのは良いモノの、案外使い道が無かった十得ナイフ。

あとは持ち物の中に、見覚えが全くない手帳の様なノートらしきモノが入っていた。

僕は携帯に予定書く人間なので、あまり手帳は持ち歩かないし、愛用の手帳は我が家に置きっぱなしであるから、こんな手帳は持っていない筈なんだが。

「ねえ犬さん、コレなんだと思う？」

「（手帳じゃねえのか？つーか犬さん言うな）」

まあ、手帳に見えるよね。でも僕も普通にとりやりの犬さんに話しかけたな。

でも、もう犬相手でもいいや、話しが出来るならば……。会話でもしてないと、絶叫して走りだしそうなくらい不安なのだ。

「そう言えば自己紹介がまだだったね。僕は五十嵐かなめって言うんだ。君は？」

「（俺か？俺ア・・・まあ、ずっと野良犬やってたからな。アカ坊とか紅ベニとか呼ばれてたな）」

紅ね？・・・きっとその赤毛の感じから来たんだろうね。

元の犬種は解らないけど、立派な毛並みだとは思う。

「じゃあ、紅さんって呼ぶよ？それでいいかい？」

「（紅で良いよ。さん付けだとしっくりこねえからな。その代わりにこっちもかなめって呼ぶぜ？）」

「解った。それじゃあ紅、よろしくね」

「（おう、よろしく）」

さて、これで一応挨拶はすんだ訳なんだが・・・。

「さて、取り出したるはこの手帳。一体なんなんだろうね？」

「（開いてみたらいいじゃね〜か？何か書いてあるかもよ）」

「・・・それもそうか」

いやー、なんかあやしいの一言でどうにかなりそうなくらい怪しい手帳で。

ってどんな手帳だよと。まあとりあえず開いてみる事にした。

最初の1P目を開けてみると、何とまあびっしりと色々と書かれて

いる。

「ん」と、何々?“ まずは五十嵐君、君には大変申し訳無いことをした” へ?”

そして驚いたことに、手帳に書かれた言語の冒頭には、何故か僕死で謝罪文が載っていた。

この手帳を僕に持たせた人物は、少なくとも僕の事を知っていると  
言う事なのか?

この時、亡国のスパイが!?とか考えた僕は悪くないと思う。  
そういうニュースよくテレビでやってたし・・・ソレはさて置き。

「(続きは?)」

「あ、うん“この文を読んでいるという事は、無事にそちらの世界に着き、またこの手帳がある事に気がついたという事だろう。まあそうなるようにしておいたのだがね。さて、紹介が遅れたが、この文を書いた私の名前は“監視者”君達の言うところの、いわば神にちかい存在だ” ・・・?”」

なんだか訳がわからないぞ?!ココに来て急に神さまですか?!  
いや、神さまに近いってことは、厳密には神さまじゃないのかな?  
と、とにかく続きを読んでみよう

「“困惑していると思うが、そうとでしか君達が理解できる呼称が無かった為勘弁してほしい”」

あ、やっぱり。でも自分のことを神さまとか・・・頭病んでる人？  
それともマジ？

「あとココからが本題だが君達が何故いきなり見知らぬ土地・・・  
というか異世界だ。そこに居るのかというと私に色々と責任がある  
」

はい、異世界入りました。すさまじく読む気力が減少していきます。  
・・・ドッキリと書かれたプラカードは無いか！？とか考えつつ  
も続きを読む。

これ以外の情報が無い以上、読むのをやめる訳にも行かないのである。

「(ふ)ん、イセカイね？かなめ、イセカイってなんだ？食い物か  
？」

「えと、まあ後でね？ “大変申し訳ないのだが、君達は私が消  
し忘れてしまった“覗き穴”と呼ばれる所に偶然落下してしまつた  
” 覗き穴？”

覗き穴って何だ？名前からすると、覗く為の穴・・・だよな？

「 “あのマンホールみたいな穴の事だ”」



ああ、そう言う事・・・でも何故に地面に覗き穴？  
何を覗く気でいたんだろうか？・・・まさかねえ？  
っーか、こんな事態に陥って、そんな考えが浮かんでしまう自分に  
ビックリだわ。

「あの穴は私がいる空間につながっていたのだが、そこでは君達の  
様な脆弱な肉体では存在する事が出来ない。まあそう言う訳で君  
達は一度死んでいる”・・・パターン」

僕は静かに手帳を一度閉じた。さて、今の言葉を信じるなら、僕は  
一度死んでいるらしい。

訳が解らない事のオンパレードで、慣れない環境にすぐ適応する流  
石の僕も雄たけびを上げたい気分だったが、そう言う訳にも行かず、  
湧き上がる何かを押さえつけるのに精いっぱいだ。

ここで取り乱したら、事態が悪化するというのは、本能的に理解し  
ていたのかも知れない。

僕はため息を吐きながらも、もう一度手帳に手を伸ばし、先程閉じ  
たページを開ける事にした。

せめて、最後に“ドッキリでした”という言葉がある事を祈って

「はあゝ。よし “まあ普段は一ミリにも満たない穴なのだが、  
時々もつと周りを見ようと人が通れるサイズの“覗き穴”を作っ  
て、周辺を見ていたのだがね。

そうして見ていた所、突然君たちが落っこちて来たのだ。最初は驚いたぞ？人が殆ど来ない場所なのは確認済み。

人が近寄れない様にもしておいた筈なのに、何処をどう通ったのか君達は・・・

まあ過ぎた事を言ってもしょうがないか。

とにかく、誰も来ないと高を括っていた私にも原因があった為、今回は特別に君達を、覗き穴の向う側でも生きられる様にして、生き返らせることにした。

だが、そこで問題が起こった。

君達を生き返らせたのは良かったのだが、

今度は覗き穴の向うでも生きられる様にした為、

君達と言う存在を元のあの世界に戻す訳にも行かなくなってしまった。理由としては

”

ココから先は、何と云うか・・・僕にもよく解らないのだが、所謂  
ガイア理論的な感じで・・・。

まあ世界は生き物？とかそういう感じですよ。

だから、必要以上にパワーアップした僕らは居られないのだそうなの。つまりは元の世界において僕らは歩く爆弾だと言いたい訳なのだろ  
う。

うーん、難し過ぎてよく解らん。とりあえず読めるところまで飛ば  
そう。

パラパラっと。

「 “ ” と言う訳なのだが、そう言う訳で君達を元の世界には

戻せない。

身体をあの世界に用に戻したいところだが、そんなことをすれば、また死んでしまう。

考えに考えた結果が、君たちがいても平気な世界へと送ると言うものだった。

運良くそう言った世界も監視対象だったのが幸いだったと思う。

そう言う訳で、唯一君達が行ける世界はそこしかなかったのだが、そこは君達の世界で言うところの中世くらいにしか発達していない。

おまけに魔獣やらモンスターやらが徘徊する世界でもある。

さすがの私も鬼と言う訳では無い、神に近い存在ではあるがな。

そう言う訳で君達には最初ある程度の力を与えることにした。

その力については、五十嵐君の頭の中からヒントを得たモノだから扱いやすいと思う。

詳しい事はこの手帳に出るし、ちょっとだけ色を付けといた。

あとこの世界の言語も解るようにしたし、文字も書ける様にしてある。

肉体能力も前とダンチだ。だがココまでしか私には出来なかった。どうか頑張ってくれ……。

P / S

紅ちゃんについては、君が寂しく無い様に、

その世界の種族の中で近い存在へと、彼女の身体を変化させる力を与えておいた。

確かドワーフとかいう種族だったかな。

今は無理だが、彼女が意識を集中すれば身体を人型へと変化させることも可能だ。

では、もう会う事のない私が言うのも何だろうが、

どうか君達の歩む道が平穏であるように・・・グッドラック」

・・・何だこれは？つまりはココは“異世界”僕たちは“超人”にされた。

だから元の世界に戻せないし、居場所も無い。

“異世界”なら問題無い程度だから、そっちでよろしくやって欲しい。

と言う事なのだろうか・・・っーか。

「紅って・・・女の子？」

「（言わなかったか？）」

「聞いて無いよ？」

だつてねえ、喋り方がアレだしねえ・・・ってそうじゃない。

さつきから異世界と書かれていたが、アレは本気なのだろうか？

今の段階では、突如この森の中に置き去りにされたと言う風にしか感じられない。

つまりは半信半疑、この手帳らしきモノに記された事の半分以上信用できない。

唐突に森の中にいなければ、何だこの頭痛い話と笑っていた事だろ

う。

こういつ時に取り乱さない、自らの精神に実に感謝したいね。

「しかし・・・力、ねえ？」

あの神さまに近い人、まあ自称神としておこうか？

彼の言う事を信じるなら、僕らには力が与えられているという。

だが、今の所そんなを感じることは出来ないんだが・・・そういえば。

「詳しいことは手帳に・・・書いてあるんだっけ？」

半信半疑、だがもしかしたらと思い、僕は手帳にページをめくって行く。

そして、恐らくはそのページだと思われる個所を見つけたのだが・・・

「これは・・・冗談、なんかじゃないのか？」

そこ描かれていたのは、どう見てもTVゲームとかのRPG系ゲームで見る様なステータス表。

他にもスキル、アビリティ、技と続きそして最も気になったのは、魔法という言葉が刻まれていた事だった。僕の頭にあった知識と言うのは、どうやらそう言った類の事だったらしい。

「……………」

その事で、リアルに口を半開きにして、呆然と意識を飛ばしかけた僕は……多分悪くない。

つーか、自らの能力が数値化されるといいうのは、恐ろしく不思議に感じられるものだろう。

ちなみに今装備しているのは黒のタートルネック長袖とGパンで、どうやら初期装備らしく武器は所持していない。

それと手帳に書かれた現在の僕のステータスはこんな感じ。

HP (体力)	……………	200 / 200
MP (精神力)	……………	2000 / 5000
LV (現在のレベル)	……………	LV 1
EXP (現在の経験値)	……………	0 / 50
STR (力の強さ)	……………	17
INT (知性)	……………	8000
DEX (器用さ)	……………	24
AGL (素早さ)	……………	90
ATK (物理攻撃力)	……………	60
MAG (魔力)	……………	8000
CON (耐久力)	……………	40
HIT (命中率)	……………	36
AVD (回避力)	……………	90

R D M (物理防御力)	.....	4 4
R S T (魔法防御力)	.....	7 0 0
L U C (幸運)	.....	9
A P (アビリティの装備容量)		3 8
C P (技及び魔法の装備容量)	...	5 0

さて、さっそくだが有り得ない事になってるね。

つい、何であんなにM PとI N TとM A Gが馬鹿高いのだろうか？  
他ののは結構普通な癖に、あれですか？魔道師にでもなれとでも？

これは恐らく、手帳に書かれていた色をつける・・・と言う事なん  
だろう。

確かに色をつけといたとか書いてあったが、これは明らかにやり過  
ぎでしょう・・・。

これが本当だとするなら、どうせならH PとかC O Nを上げといて  
欲しかった。おまけに幸運が低い。

しかしなんでM Pはフルチャージじゃ無いんだ？半分も無いぞ？そ  
れでも多いけど。

と、とりあえず次だ次！お次は・・・

スキル (体験で習得)

- ・ 家事 A
- ・ 悪運 E X

(他はまだ習得していない)

まあ仕方ない。僕は普通の一般人。

どごその小説じゃあるまいし、暗殺技能やら戦闘技能やらなんて習得してません。

精々出来て家事くらいです。でも悪運EXって……幸運が低い代わりとか？

お次お次……。

アビリティ（装備品の付属効果を習得）

・経験値入手UP	必要AP 5	習得まで0 / 50
・警戒	必要AP 2	習得まで0 / 20

これはまた随分なアビリティな事で、いきなり最初から経験値UP系は随分と胡散臭い。

ちなみに効果は、経験値入手量がおよそ五倍になるんだそうなの。というか経験値って何さ？

「ん？」

ページをめくって行くと、恐らくは魔法の事に関するページに辿り着いた。

そこには、魔法の使い方らしき事が書かれている。

その後の魔法に一覧にある最初の魔法は、ブラストと呼ばれる初期



魔法らしい。

ちなみに紹介文は、こんな感じでした。

【魔力放出で敵を吹き飛ばす。だが熟練者が収束させれば大砲を超える威力を持たせることが可能】

最下級魔法・射程 中〜超遠距離 基本消費魔力20  
必要CP15

「……………これをやれと？」

これは確かにゲームだ。だがあまりにも胡散臭い。

こんなので本当に魔法が使えるとでも言うのだろうか？

むしろジョークと言われた方が、この場合まだ信用性が出てくる。  
だが

(どうしよう？普通ココまで手の込んだ事はしないだろうし……)

悪戯にしても、これは度が過ぎる。

見知らぬ人間を誘拐して、あまつさえ見知らぬ土地に放置して、こんな手帳を与える。

それに何の意味があるのだろうか？誘拐されたのならまだ解ると言うものだろう。

(……………試して、みるか？)

だが、現状本当にどうにもならない以上、試してみるのも悪くない。ふと、そう思った。これが本当なら、少なくとも手帳に書かれた内

容が本物であると言う事になる。  
そうなれば、身を守る術が必要となつて来ることは明白だった。  
出来なかつたら、犬と喋れるというのは確認できたから、獣医もやるか？とか考えつつも、手帳に書かれた魔法を発動させる工程を踏んでみる事にした。

\*\*\*

「（おい、なんか落ち込んでいるが、大丈夫なのか？）」  
「……うん」

さて、しばらくしてだが、色々と書かれていたので呼んでみたものの、結局良く解らなかつた。  
試したいのだが、書かれてあることが魔力を手に込めてとかで……まず魔力って何さって話である。  
しかも、最初の魔法以外は思い付きで習得とか書いてあるし、親切なのか不親切なのか……。  
一応、なんとなく力んでみたものの、特に何か変わった事が起こる気配も無かつた。

（うーん、イメージすると、魔力ってどんなんだ？）

魔力とか言われても解らないが、なんとなくボヤクとした感じの何かエネルギーが集まると考えればいいのだろうか？目をつぶり、こうなんとなく、何かモヤツとかぼんやりした“ナニカ”を集めてみるイメージを試してみる。

「（お、光った）」

「え？何か言った？」

紅が何か言った為、何かあったのかと思いい目を開いたのだが、周辺に何かあった形跡は無い。

・・・何かを見間違えたんだろうか？でも、森の中で何か光るモノを見るとか・・・どこか不気味な気もしないでも無い。

「光ったって何が？」

「（いや、かなめが目をつぶって、なんかしてたら一瞬ぼんやりと身体が光ってたぜ？）」

「身体が？」

どういう事だろうか？魔力を使えるようにする事と関係があるのだろうか？

良く解らないが、それならばと思い、今度は目を開けた状態で同じことをしてみる。

要は、よく解ないけど不思議な力あつまれー！って感じ。

すると

「ッ！？なに、これ？」

成程、確かに薄ぼんやりとだけど、腕が光っている。

正確には見える範囲全部の身体の部分も光っているように見えた。  
もしかしたら、これが

「腕、腕・・・いや手に」

手に集まると、身体を纏っているソレが移動するようにイメージすると、ソレらは本当に動いた。  
そして考えた通り、手へと収束していくのが見て取れる。  
ソレらは手に集まると、以前どこかで見た・・・そう、セントエルモの火のように、手から噴き出している様に見える。どうやらこれが

「これが、魔力？」

と言う事になるのだろうか？

正直自身の身に起こった怪奇現象に、戸惑っていたのだが、徐々にそれに慣れて行った僕は、その光景が面白くて、ドンドン集まるようにイメージした。魔力が大きくなって行くのが面白かったからである。

「（・・・おい、なんか手に集まってるけど大丈夫なのか？一度消した方がよかないか？）」

「・・・消し方解んない」

「（おい!?!?)」

「ははは・・・どうしよう?」

「ただ、すこし調子に乗り過ぎて、ある程度は拡散出来たけど、手に魔力が集まったまま戻らなくなってしまった。光が強くて目立つ事この上ない。灯りに苦労しないだろうが、手が使えないので物が持てない為、この状態ではすこぶる不味い。」

「えーと、確か手帳には・・・」

「確か魔法を使おうとしていた事を思い出し、この状態なら出来るかなと思ひ、魔法を使う事にした。ブラストのやり方はすこぶる簡単、魔力を集めた腕を対象に向けて、放てば良いらしい。」

「・・・放つってどうすればいいの?」

「ふと思ったのだが、魔力を解放できないから困っている訳で・・・。放つというイメージをすればいいのか? と、そう思った瞬間!

バシユッ!

「(うわっ! あぶねえ!)」

腕の先に溜まっていた魔力が、急に解放されてしまったのだ。しかもまるで如雨露から水を出した時のように、拡散して周囲に放たれてしまった。何も考えずに放たれたソレは、殆どが拡散したが中心の一番密度があつたと思われる部分だけは直進し続けて、木々を幾つか貫通して行ったのであつた。

「こ、これが魔法!？」

驚きつつも手帳を見た所、2000あつたMPが1980になつている。どうやら今のが魔法らしい。

太い木の幹を突き抜け、後ろにあつた木をも粉碎し、更に奥にあつたの岩にまで穴をあけている所を見ると、かなりの威力である事が解る。恐らく魔力を使う魔法であるから、あの自称神に変に手が付け加えられた僕のステータスが、これほどの威力をはじき出しているのだと思う。

あと何故だか知らないけど、習得した途端頭の中に謎の言葉や公式が浮かんできた。

これは恐らく呪文や魔法陣とかだと思う、これが自称神が言っていた手を加えたと言う事なのか  
だが、まさか僕がこんなことが出来るようになっていたとは…信じられない。

とか、考えていると

「（これが魔法！？じゃねえ〜！！）」  
ガブツ！！

「　　ツ！！いつてえええええツ！！！！」

怒り心頭の紅に頭に噛みつかれた！紅の牙が頭に突き刺さる！  
痛い痛い！牙が食い込んでるって！ナニ力で怒り心頭の紅にしばらく噛みつかれ続けた僕だった。

「（いきなりで驚いたじゃねえ〜か！）」  
「ごめん本当にごめんなさい。痛いから許して！もう噛みつくのは  
簡便」

この後3分も噛みつかれ、何とか許して貰う頃にはHPが半分以下  
になっていた。

ちなみに本人曰く軽く噛んだだけらしい　それにしてもはいたかつ  
たけどなあ。

お怒りになられた原因は、拡散した魔力が当たりそうになったから  
らしい。

ここはなんとかですが、謝っておいたほうが良いと感じた僕は、ひ  
たすら頭を下げていた。

はた目から見たら、犬相手に頭を下げると言う光景・・・シユール

だ。

別に噛みつかれるのが、怖かっただけでは無いと思いたい。そして何とか落ち着いたので、僕達はこれからの話をする事にした。

「(で、これからどうすんの?)」

「うん、これでこの手帳の中に書かれた事は、少なくとも魔法に關してだけは本物だった。だから、この世界って魔物がいるらしいから、とにかく移動しようと思う」

もうそろそろ暗くなってくる。この世界での生き方はいずれ考えるとして、その前に野宿できそうな場所を見つけないと思う。

「(ふ〜ん、解った。まあ俺はかなめについて行くだけなんだけどな)」

「あれ、一緒に来てくれるの? てっきりさっきの事で愛想尽かされたかなって思ったんだけど?」

「(アレは驚いただけだ。別にもう怒って無い。それになんて言うか、ナカマイシキってヤツか? 難しい事は解らないけど、前の世界からの知り合いだし? 一緒に行動しようかなあ〜て・・・な、なんとなくだ! なんとなく! それに、かなめは危なかつしいからな。近くで見てた方が安心だ。あ、後別に一人でこの森に居るのが怖いからとかじゃねえーからな!)」



ぶっきらぼうな言い方だが、どことなく心配しているのが伝わってくるその言葉に、僕は有り難いと思った。

「ありがとう紅、正直前の世界の事知っている君が別れようなんて言って、そのまま別れたら不安でしょうがなかったよ」

「(い、イイってことよ)」

こうして、僕達は仲間として行動する事になった。

とにかく今の状況は危険すぎる。武器も防具も、医薬品すら持っていないのだ。

とりあえず人の居る所へ行つて、何とかしなければ……そう言えは。

「なあ紅」

「(なんだ?)」

「この先もよろしくな」

「(……ああ、こちらこそ)」

そして、とりあえず最初に現れた森の広場みたいなところから移動したのであった。

第1章（後書き）

改訂済み。

## 第2章（前書き）

やっと少し戦闘：+大幅増量&改訂しました。

## 第2章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第2章 ↓

さて、突然ですが皆さん。人が森で遭難する原因をご存じですか？

ある一説によると、森の景色は同じなため、本人がまっすぐ歩いているつもりであっても徐々にずれている事があるそうです。その所為で同じところをぐるぐるぐるぐる廻り、そのまま力尽きるといふ事が起こるらしいです。

。で、何故今になってそんなことを話題に出したのかというと…

「ねえ紅、道解ってる？」

「（へ？かなめが知ってたんじゃないのか？）」

「いや、僕は紅が前を歩いているから、それに付いて来たただけ  
ど？」

「（俺はかなめが行きそうな方向に歩いて来ただけだし、それにコ  
コは異世界だから道なんて知らないぞ？）」

どうやらお互いにお互いの進行方向へと自然に足を向けていたら  
しい。

何と言つ無計画、先の動揺がまだ抜けきつていなかったようだ。  
そして同時に、とある事実に気が付き、途端顔が青ざめる僕。

「落ち着こう、こういう時は慌てたらいけない。死んだ爺ちゃ  
んも言っていた」

「（お前の爺さん何モンだ？つーかよおかなめ、）」

「……なあに？」

「（迷ったのか？）」

「………そうなんです」

もう、いきなり異世界で初遭難ですか?!と、地団太を踏んだところでもうにもならない。

遭難した時に一番してはいけない事は慌てることだ。

慌てたヤツから、深刻な事態に突入してしまう。状況を整理しなければ……。

とにかくやることは一つ、しんこきゅーしんこきゅー、スーハー!

しばらくして落ちついたは良いが、どちらにしろ事態は好転して無い訳で

「むう、暗くならない内に森を出たかったけど、もうすぐ日が暮れちゃうよ」

「(俺は暗くても平気だけど、かなめは人間だからそうもいかないよなあ)」

「……とりあえず、もう少しだけ進もう。暗くなる前に森を抜けられなかったら木の枝でも集めて焚き火でもするさ」

「(焚火ね……どうやらもっと早くに気が付いた方が良かったみたいだぜ)」

まあ、この後どうするかも決まり、いざ行こうとした時だった。

突然紅が辺りを警戒し始めたのである。一体何なのかこの時の僕には解らなかった。

だがソレもすぐに訳を知ることとなった。

ガサガサ…

「「！」「」

何かが動く気配、いままで全く生き物には合わなかったからこれが初遭遇だ。

しかし、薄暗い森の中で聞く、木々が擦れる音と言つのは、どこか凄まじく薄ら寒い物がある。

これは原初の恐怖とでも言えばいいのか、とにかく恐ろしく感じられる。

【グルルル…】

しかも、どう考えても友好的な感じもしない…。

むしろ対面したら頭からマルカジリなイメージが脳内を駆け巡るという不吉な感じしかない。

これはもうこの後の行動は決定されたね。

「ま、まさか猛獣？それとも魔獣？！ どちらにしても良い事な

ーい！」

「（）どうするかなめ、戦うのか？逃げるのか？」

「そんなの決まってるでしょ！」

僕は音のする方を確認し、両足脚に力を込める。いつでも動ける様に足を軽く開き、今この場でどうすべきかを考え、それをすぐさま実行できるようにした。・・・そして。

「戦術的撤退だああ！！！」

「（お、おい！・・・たくしゃーねえな）」

思いつきり反対方向へと逃げだした。だって怖いんだもん。人気の無い暗い森の中で何かが近寄ってくるだけでも怖すぎるんだよ。

紅も後から僕を追いかける様にして駆けだし、僕らは音の下方の反対へと逃亡したのだった。

\*\*\*

さて、あの場から離れる為に走り始めてから気が付いたんだけど、やっぱり自称神が言っていた、僕の身体に手を加えたというのは本当らしい。さつきからかなりのスピードで、かれこれ40分も走ってるのだが、体力の限界はおるか全然息切れが来ないのだ。感じ的にまだまだ走り続けられそう。



紅もどうやら同じらしく、自分の肉体の変化にちょっと戸惑っている。

そう言っている僕も信じられないくらいの身体能力の上昇に戸惑っている。

今まで水中の中で錘付きの手枷をつけられて生活していたのを、唐突に外したらこんな感じじゃないだろうかと思っただけだ。

それと、どうやら身体能力の向上にあわせて反射神経とかも能力が向上しているらしく、木と木の間をすり抜ける際、スピードを落とさずそのまま走りぬけることが出来る。これが元々居た世界なら“すっごい！ 僕忍者！？”と歓喜して喜んだところだろうが、残念ながらココは異世界。

そう思うと・・・なんかちょっと落ち込む。

とりあえず、さっきの場所からかなり離れたので、もういいだろうと思えばスピードを落とす。辺りはもう暗くなり始めていたが、あれだけは知っても森を抜ける気配が無かったので、どうやらココは相当大きな森らしい事が解った。

森の開けた所を歩いて行くと、足元が砂利のようになり近くから水の流れる音が聞こえてきた。音の感じからすると川らしい。やみくもに歩きまわっていても、埒が明かない為、飲み水が確保できる

かも知れないと思い、水の流れる音が聞こえるほうへと足を向けた。

しばらく進むと、小川へとたどり着いた。どうやら豊富な水源から湧水溢れてが川を作っているらしく、川底から水がボコボコ湧いて出てきており、とても澄んだ水だった。喉が渴いており、若干生水を飲むことに抵抗があつたが、ええいままよ！と言う感じで、湧水を飲んだ。

息切れはして無かつたとはいえ、それなりに運動した程度の疲労感があつた僕の身体に、冷たい湧水はしみこむように感じられた。もつとも、紅はそんな事お構いなしにがぶがぶ飲んでいたんだからね。

とりあえず、一息付けたって感じで、近くにあつた岩の上に腰かけた。

むう、しかし日が暮れて来た。暗い森の中を動き回るのは危険かな？

幸いライターはある。火を起すことくらいは出来る。

くらいと不安だがある程度灯りがあれば、それも少しは安らぐかな？

「 紅、今日はココでキャンプしようか？ 」

「 (さんせい、もうクタクタだぜ) 」

無謀な事にキャンプ用品も無しでキャンプ宣言。こういった場合は野宿が正しいと思うんだけど、なんとなく気分的にキャンプと言

いたかったのでキャンプと言う事にした。別につらい現実から目を逸らしたいと言う訳では無い。断じて違つと・・・思いたい。

だが皆さん知っているだろうか？

水飲み場というモノは得てして生き物が集まりやすい。

そしてその生き物は草食獣だけでなく・・・

ガサ・・・ガサ・・・ブホブホ・・・

「「！」「」

草食獣を狙う      肉食獣も多いと言う事を・・・

草が擦れる音が聞こえ慌てて森のほうへ振り向くと、藪から巨大

な牙を持つイノシシの様な生き物が、にゅっと顔を出した。だが、普通のイノシシより4倍は大きく、目が紅く光っており、恐らく魔獣だと思う。そいつは鼻をフゴフゴと動かし辺りの匂いを嗅いでいたのだが、風向き的にこちらの匂いを感じ取ってしまったのだろう。

【・・・ブギヤアアアアアア！！！！！！】

唐突に辺りの草木が震えて、木の葉が舞うほどの大声で雄たけびを上げたのだ。

あまりの声のでかさに、耳がキーンとして体がガクガクと震えてくる。

今まで生きて来て感じたことが無い感覚。逃げなければと本能が叫び声をあげていた。

だが問題は・・・後ろは川で前には魔獣のお陰で逃げられないというこの現実。

文字通りの背水の陣なのだ。

川を越えて逃げたいところであるが、小川とは言え湧水が湧きでている為それなりに深い。

おまけに辺りが暗いので、流石に飛び込むのは自殺行為だ。おまけに気温的に絶対寒い。

今の時間帯に体が濡れることは体力の低下が著しい・・・ってなことを考えている余裕なんてない。

只単に寒いからいやとまだまだ考えていたからだっただけ。

命の危険が伴っていた為変な風に思考がズレていたのである。

【ブゴオオオ・・・】

イノシシは足をカツカと地面に突き立て、途端此方へ向けて突進してくる。

そのスピードは車と同じくらいかそれ以上で恐ろしく早い。

僕はヒッ！と声を上げてかたまる事しかできなかった。

「ワン！（かなめ！このバカ！）」

ドンと押しのけられる感覚と共に、僕は横に吹き飛ばされた。

紅がタツクルをしてくれたらしい。その直後

ドンガラガツシャーン！！！！

突進してきたイノシシが、今まで僕が乗っていた岩をモノの見事に小石へと変換してくれた。

あと数秒遅ければ僕もあの岩同様に、潰されていたかもしれない。

腰が抜けていないだけマシだが、恐怖に縛られて身体が震える・・・

・怖い。

「がっう！！ぐるるるるる

！！！！」

牙をむき出しにした紅がイノシシを威嚇する。

だがイノシシはそれに全く動じず、再び蹄を鳴らしてこちらへと突進してきた。

今度は自分で横に避けるが、砂利に足を取られてスライディングしてしまった。

お腹が擦れて地味に痛くて涙が出る。

「（余所見すんな！来るぞ！）」

だが、イノシシは待つてはくれない。

見ればすでにまた突進しようとする身構えている最中だった。

「そ、そうだ魔法！！」

ふと自分は魔法が使えたことを思い出す。木々を貫通する威力があるのだ。

当てればあのイノシシですら殺せる筈だ。そう思った僕は拳を前に突き出し、「ブラスト」と魔法を唱える。だが魔法が発動しない。

「あ、あれ？ブラスト、ブラストオー！」

何度やっても発動しない。おかしい、あのときは確かに発動したのに！

そう思いつつも手をかざして声を荒げるが、その手から魔法が放

たれる事は無かった。

突進してくるイノシシを前に、怖くて声が震えてくる。

気が付けばもう避けられない程近くにイノシシが迫って来るのが見えた。

イノシシは恐怖ですくんで動けない僕目がけて、まるで暴走特急の如く突進し……。

「（ッ！かなめ！）」

「へ？」

いきなり紅に突き飛ばされた。驚いて紅の方を振り向くと

「ぎゃいん！」

赤いモノが飛び散るのを見た。イノシシの牙の先から紅との間に赤いモノが線を引いている。

今まで僕がいた場所をイノシシが通り過ぎ、そこから逃がす為に紅が僕を突き飛ばしたのだ。

その赤いモノの正体は……紅の血液。

「え？べ、べに？」

「（ バカ野郎……ぼうつとしてねえで、逃げ、ろ）」

息も絶え絶え、血が沢山流れている。

に、逃げろって言われても、紅を置いて逃げるなんて・・・できないよう。

「（いって、逃げる・・・俺あこう言ったのに、なれ、てるからよ！）」

「だって、でも！」

「（どうせ、今日会ったモン同士、じゃねーか。別にそれ程の間柄じゃ、ねえだろ？）」

その時、僕には紅が何処か笑っている様に見えた。

犬の顔が笑っている様に見えるというのもおかしいのかもしれない。

だけどその時は確かに笑っている様に見えたんだ。

【ブゴオ、ブギユルルル　　！！】

「（ほれ、奴さん、も殺る気まんまんだ・・・お前だけでも逃げとけ）」

そういうと紅は僕をかばうかのよつに、震えながらその身を起した。



なんで？なんでさ？口ではそう言っておいて、なんで僕を“守る”かのように立つのぞ。

紅に読心が出来るとは思わない、だけど僕が思っていることが解るかのように紅が笑う。

「（・・・ま、袖触れ合うも、何かの縁さ・・・見ればわかるだろ？俺の傷結構深い）」

ハツとなって紅の傷口を直視する。

イノシシの牙によって、まるで刃物で切られたかのように一文字に傷跡が見える。

そしてそこから止まることなく赤い液体が流れ落ちているのも見えてしまう。

もしも、あの時に紅がかばってくれなかったら？

そうなれば血まみれで倒れていたのは僕かもしれない。

いま、逃げることは簡単だ。イノシシの意識は手負いの紅に向いている。

・  
・  
イノシシを刺激しない様にゆっくりと下がって森の中に逃げ込めば・

少なくともあの突進は木々が邪魔するから出来なくなるから逃げられる。

「ッ」

今僕は一人で逃げようと思った？

このたった一匹で、敵に立ち向かっている紅を見捨てて？

心の奥からソレで良いのかと疑問が浮かぶ。

……だけど、怖い。獣でしか無い筈のイノシシがたまらなく怖い。

掌は汗で濡れてるし、脚がかくかく震えている。

い、命の危機を感じているって事なの？

【 ブギ、ブギ……ブギイイイイ！！！！ 】

唐突に突進を再開したイノシシ。

土埃を上げて走るソレはまるで戦車のようだ。

「……はやく、にげろって」

「……」

紅が僕に逃げろという。  
僕の中の本能も逃げろとわめく。  
そして、そんな中で僕は

【ヴギィィィィィ！……！！】

「うわあああああ……！！」

「（ば、か。捨てて、にげるよ）」

僕は、あつたばかりの僕を守ってくれた紅を抱え、森の  
中に逃げ込んだ。

「ハア・・・ハア・・・」

森の中に飛びこんだ僕は、息を整えながら茂みに隠れ、イノシシが追いかけて来ないか様子をつかがう。強化された肉体だったけど、周りは既に夜。流石に暗い森を駆け抜け抜けられる程じゃ無かった。

そして僕の横には苦しそうにしている紅が居る。上に来ていた服を脱いで、包帯代わりに傷口に巻きつけてあるけど、医者じゃない僕はコレしかできなかった。

元々黒い服だったから余り目立たないが、血で湿り気を帯びていた。

「ハア・・・ハア・・・（落ちつけ、落ちつくんだ僕・・・あの時、どうやって魔法を使った？）」

茂みに隠れながら、僕は魔法を使った時のことを思い出そうと必死だった。

焦り、と言っても良いのかもしれない。

こちらにゆっくりとだが確実に近づくと何かを感じていたからである。

ソレが気配を察知するという事であったのだが、まだこの肉体に慣れていない僕が知る由も無い。

「魔法は・・・ビームみたいだった。んで最初は・・・上手く出来無くて・・・」

そう、手帳に、手帳に書かれたことを実践したんだ。

その事を思い出し手帳は何処かと思っただが、手帳は何と紅に巻き付けた服の中だった。

あれでは取り出せないだろう、そうになるとやった事を思い出すしかない。

やった事は、そうイメージだ。魔力という何かを集めるイメージ。僕はとにかく願った。魔力よ集まってくれ！思わず右手を凝視する。

するとどうだろう、覚えがある感覚を感じた。

集まれ集まれと、ただ集めるイメージを強く思い描く。

最初は小さいソレは大きくなる。やがて手は見覚えのある光りで覆われた。

ソレは漠然と解る、腕に宿るセントエルモの火の様な光、それが魔力・・・。

【　　ウギイイイイ！　　】

「不味い！見つけた！」

すぐ近くで響く鳴き声、僕は紅を抱き寄せようとするが、その時に気がついた。

血が流れ過ぎている、服を当てた程度の止血じゃ間に合わない。

そして気がついた、イノシシはこの血の匂いを辿って来たのだと  
・  
・  
・

たかが犬だ。捨ててけばいいじゃん。

紅は命の恩人、ソレを捨てて行くなんて

死ぬのとどっちが良いんだ？ただ置いて行くだけさ

・  
・  
・  
見捨てて逃げるなんて出来ない

一瞬の葛藤、相変わらず僕は臆病だ。

イノシシという敵を相手にして、逃げることはかり考えている。

本当に怖いのだ、こちらに向かって来るイノシシが向ける牙。

ソレを見ただけで紅がやられた瞬間が脳裏に浮かぶ。

そして次は自分もそうなるのではと、思い浮かべてしまう。

「……でも、逃げない」

ココまで連れて来たのだ。逃げていゝなら最初から逃げてゐるさ。大体この暗い森の中、何処に逃げるって言うのさ。暗い夜道を走って逃げ回することは、今の僕には出来ない。死にたくないなら、戦うしか無い。

僕は河原で拾っていた木の棒を思わず握りしめる。あの巨体相手に木の棒一本で挑むなんてバカみたい。だけど無いよりはましな筈。

僕は逸らしたくなる目を逸らさず、キッとイノシシを見据えた。奴が、イノシシが走って来るのが解る。森だからか、突進程の速さでは無い。

以前なら見えなかっただろうソレも、今の僕には見ることが出来る。怖いけど、身体が震えるけど、止めなきや。

【バオオオオオオオ！！！！】

「……………そこ！」

イノシシは真っ直ぐ僕へと走って来る。牙を叩きつける気なのだろう。

鋭利な刃物の様に鋭い牙が叩きつけられれば、僕の身体を簡単に切り裂く。

牙が迫った時、震える身体をなんとか動かし、僕は横に跳んだ。恐怖ですくんでいたからか、思ったよりも避けられない。

ドンッ！

足に走る衝撃、イノシシ牙が足に触れたのだ。

そして足から液体が出ている感じがしたが、無理矢理思考から追い出した。

認識すれば、余計に身体が委縮してしまうと無意識で感じたからだ。

イノシシはそのまま木々へと頭をぶつけて木々をなぎ倒した。

突進と言う訳では無いので、木々が粉碎されてるといった事は無く、そのまま真っ二つに折れる。

だけどその一瞬、間違いなくイノシシは停止していた。

「い、けえっ！ブラスト！！」

解放のイメージ、途端僕の腕から光りが伸びてイノシシへと迫る。

魔力を集めることをイメージすると、ソレを吐きださないと何時までも堪り続ける。

攻撃を受けている間も、僕は魔力を手に入め続けていた。

そして腕から出た魔力は拡散しつつもイノシシへと直進し

ドーンッ！！！！



腕の太さ程度の光りの棒がイノシシの腹をつきぬけていた。

\*\*\*

「紅！大丈夫か！起きて！寝たらダメだつて！」

イノシシは倒したけど、紅が結構な重傷だ。  
血も結構流れているし、かなり苦しそうなのが見てわかる。

「（うるせえな・・・クソ、ところどころイテエ。というか魔法使  
うなら最初から使え阿呆）」  
「うう、ゴメン・・・」

早いとこ治療を施さないと、このままじゃ紅が危険だ。  
その時、胸からまたあの軽い音が聞こえた。手帳を見ると、どうやらレベルが上がったらしい。  
ただし一気にレベル6になっていた。あのイノシシを倒したから  
だと思う。

「なに？スキル？・・・も覚えたのか？」

・スキル魔力操作 A

【このスキルはイメージによる魔力の操作を容易にする。今まで以

上の威力の魔法が使用可能】

これは間違いない。僕は魔法使いへの道を進んでいる。

しかしなあ、思いつきとかイメージで魔法を作り上げるのか？

明確にイメージすればもしかしたら幾つか覚えられるかもしれない。

「(うぐう、イテエ)」

「は！そうだ紅！」

どうしよう。怪我の治療の仕方なんて僕は知らない。

こういう時に魔法が使えたら・・・。

「・・・試してみよう」

ダメ元で試すことにする。そう言えば魔法を使った時にはイメージが大切だった。

もしかしたら強いイメージをすれば、回復魔法くらい使えるかも知れない。

必要なのは回復魔法！何でもいい、兎に角傷を癒せる力を意識するんだ。

僕はそう思いつつ、紅の傷に手をかざした。イメージはこうゲームで良くある感じで・・・。

腕を対象に近づけてそこから緑もしくは白い光を出して、傷を治す。

呪文を入れてもいい「癒しの風よ、癒せ。」みたいな感じで……

ただ死なせたくない一心で、イメージを強めたのだった。

「……おい、何したんだ？傷がどんどん治っていくんだけど？」

「

へ？」

見れば傷口が動いて……うぷ。ちょっとグロテスクである。

でも、どうやらイメージはアレで良かったらしい。

僕の手から光が溢れ紅の傷を覆い、徐々に傷を癒していくのが感覚でわかった。

「（有り難いな。正直動くのも痛かったんだ。ありがとうかなめ）」

「あ、いやそれ程でも無いけど。」

そしてまた手帳から、あの独特の音が聞こえた。

手帳を見れば魔法の欄に新しく魔法が追加されている。

・回復魔法キュアウィンド 消費MP 60 必要CP30

【癒しの力のある風を対象に向けて放ち傷を治療する】

やっぱり直感やイメージで魔法を構築する事が出来るらしい。  
そして一度構築した魔法の術式やらが脳内に叩きこまれていくの  
が解る。

これは実に良い発見だ。これで色々な問題が解決できるとおもつ。

「（おーい、考えてないで出来れば治療を続けてくれ）」

「あ、うん。解った」

この後しばらくキュアウィンドを使い、とりあえず紅の治療を終  
えた。

なんとか紅を助けられて人汗ぬぐったり、服が大変なことになっ  
て泣きそうな僕だった。

しかし、安心したのも束の間、とても大切で大変な問題にブチあ  
ったった。

「お、おなか減った・・・」

「（俺もだ。血が足りねえ・・・）」

現在僕は猛烈な空腹に襲われています。

「ま、魔法使った副作用かな？」

兎に角お腹が空いてくる。まるで錐で腹を突かれているみたいである。

背中とお腹がくっ付いたという歌って、案外的を得ていると感じたほどだ。

しかし、残念なことに今僕は食べるモノを持っていない。

おまけに既に周りは夜である。食べ物を探しに行ける状況でも無かった。

「（……なあかなめ、あのイノシシ食えないのか？）」

「え、……アレを？」

どうしようか悩んでいると、紅がそう提案してきた。

いや確かに見た目は動物だけど……あれって魔獣だよ？

僕だつて動物はさばいたこと無いし……でも物凄い飢餓感……

背に腹は代えられないか。

「ええい、ままよ！」

懐から十得ナイフと取り出した僕は、イノシシの死体に突き刺した。

新品であった事もあり、何度か突き付けてなんとか分厚い毛皮を切る事に成功した。

少しずつ肉を削り、股関節と思われる部分の筋を切り、脚を切り落とす。

イノシシの血液が僕に降りかかり、非常に気持ち悪かった。

だけどそれよりも食べたいという欲求が強かった。

なんとか切り落とした4本の脚を持つて、その場を後にした。

そしてあの河原にまで戻って来た僕は、そこらの枯れ木を集めた。乾燥して軽くなっていた大きな木の下に、これまた乾燥した枝を敷き、ライターで火をつける。

パチ、パチパチ・・・

よく乾燥していたお陰か、簡単に火がついた。

そして火がついたのを見て、僕はどこか安堵感を得た。

火と言うのは使い様に寄っては便利だし、動物が近寄って来ない事を知っている。

だから安堵出来たのかもしれない。

ある程度火が大きくなったら、適当に拾ってきた枝に、川の水で洗った肉をブチ刺す。

血抜きの方方なんて知らないから、ただ洗っただけだ。

血が付いて不快だった服も上とかを川で一応洗い、現在火の近くに置いて乾燥中である。

ある意味元祖ステーキを造りつつ、しばらく火の前で待った。

良く火を通さないと危険な気がした為、表面が焦げるくらいにまであぶった。

しばらくして表面が完全に焦げた焼き肉が完成した。

「(かなめ、食べねえのか?)」

「……うーんと、なんて言うか」

飢餓感に耐えかねてココまでやってしまったが、考えてみれば塩とか調味料無しである。

只焼いただけの肉なんて食べたことが無い……た、食べれるんだろうかコレ？

「(腹減ってんだったら食べばいいだろうが、食い物があるならとりあえず食ってから考えろ)」

そう言っつて紅は肉をそげ落したイノシシの骨にくらいついていた。そのワイルドさ、少し分けて欲しいよホント。

紅に言われて、手にした串焼き肉の焦げた部分をナイフで削り取った。

中には脂が乗り、よく火が通った肉がたき火に照らされて見えて  
いる。

見た目だけならば、かなり美味しそうだ。

「……南無さん!」

意を決した僕は、そのまま肉にくらいついた。

あふれ出る肉汁が口いっぱいに広がっていくが、血抜きがされていないので臭い。

だが、我慢すれば食べれない程でもなかった。

この時本当にお腹が減っていたんだと思う。

とにかく口に頬張った肉を咀嚼し、胃の中に送りこむだけしか考えなかったのだ。

そして、最後の串焼き肉を平らげて、川の水を飲んで一息入れた。

「……ごちそうさまでした」

「(な?食ってから考えりゃいいんだ。そうすりゃ大抵上手いく)

」

「うん、まあね。思ったほど不味くは無かったかな」

魔獣の肉は普通に食べれることが判明した。

確かに見た目動物だし、案外味も似たり寄ったりなのかもしれない。

しかし、やはり味には不満があるので、なんとかしたいところがある。

さて食事を終えて一休みしている時、僕は紅にある提案を試みることにした。

「ねえ紅」



「（ん、なんだ？）」

「僕、今日の事で思ったんだけど・・・しばらくココを拠点に活動した方がいいと思うんだ」

「（そいつは野宿とかそう言うのをするって事か？俺は良いけどかなめは人間だろ？大丈夫なのか？）」

「うん、実を言えば野宿なんてしたことは無いんだけど・・・」

「思ったんだけどさ。例えば森から出て、何処に行けばいいのか解らないんだ。もし人の町があるとしても、何処にあるか分からないなら行きようが無い。それに、さっきみたいな魔獣が同宙現れたら今度こそ死んじゃうと思う」

「イノシシは群を作ることがある生き物だったと思う。」

「もし、森の外であるイノシシ並に強力な魔獣が群を作ったら確実に食われる。」

「流石にソレだけは遠慮したいのだ。」

「森の中なら隠れ場所もあるし、あの厄介な突進とかはして来れないと思うしね。」

「今の僕達のLVじゃあこの先何があるか解らないし、もし、何かあったら対処できないと思う」

「まあ確かになあ・・・あのイノシシ並みの奴が沢山いたら、この先苦労するかもなあ」

「広い草原みたいところで、あんなイノシシに集団で襲われたら、今の僕たちなら簡単に殺されるだろうしね。」

「（様するにかなめはココでＬＶを上げようってんだな？）」

「うん、ココなら身を隠せる所もいっぱいあるし、森の中ならあの突進もあまり使えないと思うんだ。もしかしたらもうチヨイ弱いヤツもいるかもしれないし、ＬＶを上げるとして損はないと思う。」

レベルアップのシステムがあるのはさっきの戦闘で確認してある。その恩恵からか、レベルアップ前よりも感覚が鋭くなった気がするのだ。

今ならイノシシを倒す前よりも早くイノシシを倒せると思う。

そう伝えると、紅は少し考えている仕草をする（多分だけどね）  
そしてすぐに答えを出してくれた。

「（いいぜ、別にどこか行かなきゃならないって訳じゃねえしな。それに俺も、あのイノシシにはふっ飛ばされた恨みがある。その礼をアレの同族に帰してやりてえからな。）」

そう言つと紅は動猛な笑みを浮かべた。

さ、流石はもと野良犬さん・・・ちよっと怖い・・・。

「話が早くて助かるよ」

結構、紅は恨みもつタイプだと理解した・・・注意しろ。

「(で、ココでレベル上げするのはイイとして、これからどうするんだ?)」

うーん、そうだな。

「とりあえず雨風防げる場所を探そうと思う。今日はいいけど雨とかに濡れるのは身体に悪いしね」

「(賛成だ、いつまでも寝床無しじゃ辛いからな)」

「じゃあ、明日する事は住处探して決まりだね！」

「(そうだな・・・ところで今日はもう休まないか？俺もう眠いんだ)」

「じゃあしばらく僕が火の番をするから、しばらく経ったら交代ね？」

「(ふわぁ・・・りょうかい)」

とりあえず明日に備えて、交代で火の番をしながら休むことにした。

幸い河原には沢山の枯れ枝が乾燥した状態で落ちている。

その中でも丸太の様に太い木の枝を探し出し、火の勢いが強い内に焚火にくべた。

消えないか心配だったが、乾燥していたお陰で丸太にも火が燃え移った。

コレでしばらくの間、枝をくべる必要が無いから安心だろう。

紅が寝息を立てているすぐ横に座った僕は、日本ではそうそう見られないであろう星空を眺めながら、今日の事を思い返していた。異世界に来て最初の夜、今日だけでかなりいろんなことがあった。正直、生き残れるかは微妙だけどこの世界に魔王でもいなければ問題は無いと思う。

そんな存在はいない事を願いつつ、火の番に徹する事にしたのであった。

## 第2章（後書き）

文字カウントが11111111字になってらww

### 第3章（前書き）

・前書き

この話：今更ながらですが主人公は最強さんです。その事を頭の隅にでも置いてご覧ください。

11月6日改訂

### 第3章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第3章 ↓

異世界二日目。

「（んん）、よく寝たぜ。くあゝ・・・」

「おはよう紅、ぐっすり眠れたみたいだね。」

「（オスかなめ。お前に回復して貰ってから調子がいいみたいだ）」

そう身体をほぐしながら言う紅。そう、それは良かったね。

僕が夜中に見張りを交代して貰おうと思って起そうとしてもピクリともしなかったもんね？

・・・そう思うとなんか釈然としないなあ。

さて、朝食に昨日残したイノシシの肉の残りを少し食べて河原を後にした。

只焼いただけのお肉、せめて塩だけでも見つけないと人としての味覚が無くなりそうである。

発見森の野生児！なんていうのは流石に洒落にならない。そうなる気も無い。

兎に角、周囲警戒をしながら川沿いに進み、昨日決めた様に住処に出来そうな場所を探す事にする。

しばらく散策をしていて気がついたのは、昨日のイノシシはどうかからこの辺の主であったという事だろう。

何故かという遭遇する敵のほとんどが蛇やカエルや大きいハチ。

偶にちよつと大きなウサギ等しか出てこなかったからだ。

これならばまだ発動させるには拙すぎる魔法を使わなくても、拾った木の棒だけで十分対処できた。

最初こそ生き物を殺すと言つソレに若干戸惑いを覚えてはいたが、何度か殺している内に慣れた。

別に無差別に殺して回りたい訳ではないのだが、襲ってくる以上仕方が無いのである。

とはいえ懐の手帳からは、何匹か倒すごとにレベルアップ時に聞こ



えたあの音が響く事から、魔獣を殺すことで経験値を貰えるらしい。変なシステムを組み込んで貰ったと思うが、倒せば倒すだけ強くなれるというこの状況はある意味でありがたい。

今の敵はなんとか自分で対処できるレベルなのだから。

一応紅のほうからも、レベルアップ音に似た音が聞こえたのを聞いたので、多分紅も僕と同じ様にLVが上がるんだと思う。

ただ、今のところそれを確かめる術が無い。

というか確かめるって言ってもどうやってと言う話である。

手帳に書かれている能力表は己の分しか記載されていないのだ。

せめてチュートリアルでも欲しいところである。じゃないと余計に訳が解らない。

こういう風に今だ判らない事があるが、そう言ったのを後回しにして森の散策を続行する。

ちなみに倒した魔獣でウサギだけは持ち帰りにした。これもまた皮を剥いで焼けば食糧になる。

ああ、でもコレを捌くのって僕だよねえ？・・・川に持ち帰ってからやろっ。

「なかなか、見つからないモノだね」

「（まあそう簡単に見つければ世話はねえさ。のんびりいじりゃいい）」

「まあ、どうせ時間だけは腐りそうなくらいあるしね。」

前の世界に戻れないし、何処に行けばいいのか判らないしね。

此処で生きていくなら森の中に何があるのか知りたいのである。

「果物でも見つからないかな」

「（あんな水っぱいモン食べるのか？）」

「果物にはビタミンや色々な栄養が含まれてる。人間である以上僕はソレを摂取しなければならぬのだ」

「（・・・腹、下すなよ）」

「・・・気をつける」

考えてみれば野生の果物を生で食べて大丈夫なのだろうか？

第一この森で果物は見つかるだろうか？不安は堪る。

とりあえず川への目印を木々に刻みながら奥へ奥へと進んでいった。

がさがさ

「ん？」

「（何か居たな。あれは・・・なんだ猿か）」

「に、ニホンザルじゃないけど、ね・・・」

探索を続けていた僕たちのすぐ近くに生き物の気配を感じた。

「ただ、なんて言うか・・・そうしいて言うならゴリラ？の様な猿がいた。」

「この世界における名称が判らないのでゴリラと言う風に呼ぶ事によろ。見た目ほぼ同じだし。」

「丁度、僕たちの少し前の方をノツシノツシと群れで移動しているのが見えた。」

「何処に向かっているんだろう？」

ふと、日常では見ない光景に好奇心がわいた。

集団で何処かへ移動しているゴリラの群、もしかしたら食べられる果物のありかを知っているのかも知れない。

そう思った僕はゴリラたちをつけて見ようと紅に提案した。

「まあ追いかけるのは構わないが・・・かなめ、連中を刺激はするなよ？あの群を相手にするのは骨が折れそうだしな。多分一定以上近づかなけりゃ大丈夫だろうよ」

と、僕には無い野生のルールを囁いてくれる紅。

僕はその忠告に従い、ある程度距離を持って彼らの後をつけた。

しばらくすると、ゴリラの群は隆起によって地層がむき出しになった崖の元に集まった。

何でまたこんな所に？そう思い様子を見てみると、なんとゴリラ達がいきなり崖から土を抉り食べ始めたのである。

最初はその行動に驚いたけど、ふと観察していて思い出した。

こういう風に野生動物が普段とれないナトリウムやミネラルを補充する為に岩塩の様な鉱物が眠る土を食べることがあると言うのを、以前テレビで特集を組んで放送していた事をだ。

なるほど、野生の知恵ってヤツなのだろう。人間の様にサプリメントがある訳ではないのだ。

僕は猿たちがそうやって土や石を喰らうのを見続け、彼らが満足して去るまでそこにいた。

猿たちが森の中へ消えたのを見計らい、猿たちがいそいそと抉っていた崖へと向かう。

僕が考えた仮説があっているのか確かめたかったのだ。

そんな訳で試しに土を少し抉り、口に含んでみた。

結果は大当たり、土は僅かばかりだったが確かにしょっぱさを持っていた。

つまりこの崖の土にはナトリウム、すなわち塩分が含まれているのである。

これはありがたい、近くに海がある訳ではないので塩が手に入るか分からなかった今の状況においては重畳である。

とはいえ、流石に料理には使えない事だろう。

泥を食物にして食べる原住民族料理というのを聞いた事はあるが、流石にこの崖の土では無理だ。

そう言えばあのゴリラの何匹かは石も口に入れていたと言うのを思い出した僕はいそいそと石を探してみた。

見つけたには見つけたが砂岩だったと言う風に、何度かハズレを引いたりしたモノの、しばらく探しているうちに頭大の岩塩を発見す

る事に成功した。

岩でたたいたりして取れた欠片は確かに塩っ辛かった。

いいモノを見つけたと小躍りしそうになった位である。

その所為で紅に奇異の目で見られたけど、別に気にはしなかった。

とはいえ流石に大きすぎて今運ぶのは難しそうだったが、この場所は覚えたので後で取りに来ることにした。

コレであるの焼くだけの原始料理が、ある程度は文明っぽい料理にはなる事だろう。

そう思いつつ、僕はこの塩の崖を後にしたのであった。

さて、この後も出てくる魔獣を倒しながら森の奥へと進んだ。

夜はそれ程でもないが何故か昼間はエンカウント率が高い気がした。

昼行性の奴が多いのだろうか？地球とは違う世界だからよくわからない。

そして一度川まで引き返して休憩した後、再度森へと戻り探索を行

った。

今度は岩塩を見つけた崖とは違う方角へと向かって歩いた。

違うルートとはいえ魔獣は相変わらず襲い掛かってくる。

そのたびに撃破して僕のLVが14を超える頃、少し開けた場所に出た。

森の中の4mくらいの高さの壁の様に立つ崖の一角で、周囲はテニスコートくらいの広さがある。

あの塩を見つけた崖とは違い、完全に岩で出来た崖であった。

兎に角その崖沿いに進んで行くと、突如崖にぽっかりと口をあけている洞穴らしき穴に遭遇した。

「これは・・・」

見た感じ人が十分通れるほどの穴。

中は暗い為奥の方が見えないが蝙蝠等の生き物がいる気配はしない。

だが、なんとなくく入るのは憚られる感じがする・・・だって真っ暗なんだもん。

どうしようかなと思っていると、ふと隣にいた紅と目があつた・・・コレだ。

「ねえ紅？」

「（中を見てこいつてか？）」

「出来る？」

「（ぞうさもねえよ。ちょっと待ってる。）」

そう言っただけで恐れず中に入っていく紅。

いいねえ動物さんは、暗いところは怖くないんだから。

「（おーい！かなめっ！中は大丈夫だ！入って来い！）」

意外と早く紅が僕を呼んだ。

5分も掛からなかった所を見ると案外この穴の中は狭いのかもしれない



そんな訳で僕はライターの火をかざしながら洞穴へと降りて行く。  
ちよつと油がもつたいない気もしたが、暗くて転ぶよりかは万倍も  
いい。

洞穴は入口こそやや小さいが天井が意外と高く、床は何故か地面で  
は無く砂であつた。

そして鍾乳石みたいなものは一切無く、意外とさっぱりとした造り  
だつた。

出来てからまだ時間がそれ程立っていないのかもしれない。

「うん、いいんじゃないかな？湿り気も無いみたいだし。」

「（それに砂が柔らげえ…）」

ごろごろ転がる紅、結構気持ちよさそうだなあ。僕もココはかなり  
の高物件だと思う。

見た所空気とか澱んでないので住処としてはうってつけである。

だが良い物件だと思つたその時、とある疑問が浮かんだ。

これだけの高物件なのに他の生き物の住処では無いのかと？

「ねえ、ここって別の生き物の住処じゃ無いよね？」

「（匂いからすると、ココ昨日倒したあのイノシシの住処っぽいぜ？）」

ああ道理で他の生き物が近づかない訳だ。あのイノシシ多分この森の主だもん。

他の魔獣はどう考えてもゲームで言うところの序盤に登場しそうな連中ばかりなのだ。

つまり食物連鎖の頂点に居たのがこの間のあのイノシシなのである。

そんなヤツが住処にしている穴に近づく生き物はこの森には居ないのだろう。

しばらくはイノシシの匂いも残る事だろうし、良い魔獣避けにもなること間違いなし。

……うん、やっぱりいい物件だわ。

「とりあえず、ココを拠点にしようか？」

「（賛成だ、あのイノシシに勝ったんだし、ここを使っても問題ないだろう）」

て言うか良く生き残れたよね僕たち……。

僕はあのイノシシと対峙した時の事を思い出してガクブルする。

武器が効かない敵は怖いです。

「（かなめ、床に敷き詰める布団になりそうな葉っぱとか取りに行こうぜ！）」

「・・・そうしようっか」

僕たちは、これまでの戦闘で得たウサギをとりあえず置くと寝床に出来そうな草を探しにいった。

藁でもあれば楽なのだが、流石にそう言ったのは無さそうなので枯れ草を探しに行く。

序でに薪になりそうな枯れ枝や枯れ木も持ち帰った事をココに書いておく。

「さてと、住処も見つけたし・・・紅はどうする？僕一度河原に戻って修業してみるつもりだけど」

「（俺もついてく。此処だと暇だ）」

さて寝床を整えて入口を木の枝で隠すと河原へと向かった。

この住処意外と川に近いのも高得点だ、おまけに洞穴の近くには水がわき出ている所もある。

竹みたいなので水道みたいに水を引いてもいいかもしれない。

まあでも道具が今のところ十得ナイフしかないから、あまり無理出  
来ないけどね。

河原に着いた僕たちはそれぞれ己のやるべきことをする事にした。

肉体派の紅はこの近くで敵を狩り、食糧集めに自身の肉体を鍛える  
事にしたらしい。

序でに食べられそうな生き物も探してきてもらうことにした。

うさぎダケって言うのもレパートリーが偏りそうな気がしたからで  
ある。

僕は僕で、一人この河原で魔法の特訓だ。せめて戦いの中で利用で  
きないと辛いものがある。

せっかく使える魔法を使わない手は無いしね。炎をとか出せないだ  
ろうか？

そんな訳で修業とかする前に、僕はとりあえず自分のステータスを  
確認する事にした。

HP (体力)	.....	2180 / 2180
MP (精神力)	.....	5130 / 5130
LV (現在のレベル)	.....	LV14
EXP (現在の経験値)	.....	670 / 1503
STR (力の強さ)	.....	37
INT (知性)	.....	8052
DEX (器用さ)	.....	43
AGL (素早さ)	.....	90
CON (耐久力)	.....	40
ATK (物理攻撃力)	.....	83
MAG (魔力)	.....	8052
HIT (命中率)	.....	56
AVD (回避力)	.....	123
RDM (物理防御力)	.....	54
RST (魔法防御力)	.....	726
LUC (幸運)	.....	9
AP (アビリティの装備容量)	.....	50 / 50
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	73 / 73

見事に歪である・・・おまけにレベルアップでステは上昇しているのに幸運が上昇してない・・・。

魔力なんて基本値が高すぎて、成長したのかどうか微妙すぎである。

極端すぎてある意味笑うしかない。

そう言えばこの下にあるAPとかCPってなんのことなのだろう？

もしかしてアビリティポイントとか言うヤツとかだったりするのだろうか？

そう思った僕は手帳をめくって調べてみる。するとアビリティと書かれた項目が確かにあった。

アビリティねえ？どうやって使うのさ……。

そう思いつつアビリティと書かれた文字に触れると、突然その文字が変化し追加項目と思わしき文字が浮かび上がってきた。

どうやら触れたりこうしたいと思うと手帳の文字が変化するらしい。

仕組みはよくわからないがユビキタス式の携帯の様なものと自分を納得させた。

そしてアビリティのメニューを開き、とりあえず経験値UPに触れてみる。

すると“装備しますか？”の文字が浮かび上がるのをみた。

多分、これもあの自称神が与えたチート機能の一つなんだろう。

ゲームの様に、自分のアビリティの付け替えが出来る所なんて特に  
そうである。

気を取り直して、とりあえず初期で覚えていた経験値UPと  
警戒を装備してみる。

APの表示が50から43へとかわったところを見ると装備された・  
・・らしい。

経験値UPについては体感できる者でも無いのでよく判らなかつた  
が、警戒の方はさっそく効果が出ているらしく、何だか五感が鋭敏  
になっている気がした。

意識を集中し音や気配を探ってみると、ココから700mほどの向  
うの森のなかで、今紅が3匹のウサギを狩っている。

つか凄いいぞこれ？意識さえ集中させれば正確な位置が特定できる  
なんて・・・。

ちなみに今ある二つのアビリティの性能はこんな感じ。

・警戒

【装備している間、五感が研ぎ澄まされ気配を探ることが可能にな  
る。長く装備すると感覚を覚えスキルへと昇華する】

・経験値UP

【敵を倒した際の経験値が上昇、さらに鍛冶等の作成スキル系熟練度にも効果あり】

なかなか便利なシステムに驚きつつ、今度は魔法と書かれた文字に触れてみる。

案の定項目が変化し文字が追加された為、魔法を装備すると言つのを選択してみた。

魔法を装備とか良く解らなかったのだが、装備して魔法を使ってみるとその効果がたちどころに理解出来た。

発動が非常に楽なのだ。それこそ魔法を放ちたい方向へと意識を向けて手をかざすだけでいい。

たぶん今までのやり方が、ゲームで言うところのキャンブメニューから一々魔法を選んでいたようなもので、装備した事でコマンドからショートカットが可能になったって感じかな？

そして最後に昨日から僕を魔獣から守ってくれていたこの木の棒。

これを偶々見つけた装備枠と言う所に出た装備しますかと言う問いに装備すると応えると、何故か表示がオークスタッフ（仮）に変った。

どうやらこの木の枝は<sup>オーク</sup>櫛の木の枝だった様である。



（仮）というのは、多分この棒がまだ木の葉とか横枝がくっついて  
いるせいだと思う。

あとで、ナイフで削り、ちゃんとした杖にしたててみようと思う。  
格好悪いし。

ソレはさて置き、このオークスタッフ（仮）を装備してみた所、若  
干だがステータスが上昇していた。

つまり装備枠に装備させないと、どんな武器でも効果を発揮しない  
という事になる。

剣を装備枠に装備しなければ、素手で殴ったのと変わらない攻撃力  
位にしか為らないという事だ。

敵に武器を壊された時が大変そうだ。

これでは一々戦闘中に手帳開いて武器枠に装備しないといけない。

これではかなりの隙が生じてしまう。ある意味、デメリットだとお  
もう。

あと不思議な事にオークスタッフ（仮）を装備した状態だと魔法は  
杖の先から出た。

コレは仕様って事なのだろうか？でもまあ杖がある方が狙いが付け  
やすいので問題無し。

そしてスキルの方は持っているとおパッシブ。

つまり常時効果を発揮するらしく、つけたり外したりは出来ないという事も解った。

家事A等もそうだが、悪運EXはあるのは心強い。

あれの効果は説明によると

【どんな困難な状況に巻き込まれても生き残る。EXになると隕石の直撃ですら大丈夫！すごいね！】

と言ったまるで電波の様な紹介分であった。つまり、余程の事が無い限り死なないという事だ。

まあこっちが生きようとしなければ効果は発揮されないみたいだけど。

とりあえず一通りの確認も済んだので、今度は新しい魔法の習得に入ることにした。

と言っても、魔法の修業の仕方なんて僕が知る訳が無い。

仕方なしにゲームやアニメや本などの魔法を意識してみる事にした。

それ以外やり方を知らんのだし、あっているかもわからない。

ただどやらないよりかはマシだと思っし、修業法もそう言うのをお手本に試してみる。

岩の上に胡坐をかいて座り、目を閉じて集中する。所謂坐禅や瞑想と呼ばれるモノだ。

意識を集中させ、自身の中にある何かを感じるといふ。ある種の厨二的な行動である。

この年になってやるとは思わなかったが、もしかしたら何か判るかもしれない。

そんな感じで普段話したらどん引きしそうな事を実際にやってみた。

そして50分くらい経っただろうか？

すでに時間がどれほど経ったのか解らなくなっていた。

だが、さっきまで聞こえていた川の流れる音が徐々に遠ざかっていくのを感じる。

更に目を閉じ意識を集中させると音がまるで聞こえ無くなった。

こりゃスゲエと思ったたら集中が途切れたのか音が聞えて来たけどもう一度挑戦する。

何度か挑戦していると周囲から音が消える様な状態に持って行けるようになった。

もしもその間に魔獣とか出たら不味い状況だったのだが、そんなことに気が付かない僕は瞑想を続行する。

そして音が消えた中、僕の奥底にあるナニカ・・・それが脈動しているのを感じた。

最初は心臓だと思ったが、その脈動とはまた違うナニカがそのリズムと共にある事が解る。

それが魔力であるという事を僕は漠然と、そして自然とそう感じ取っていた。

魔法が無い世界に居たのだから、こつちの世界に来て、僕はそういった感覚に敏感になったのかも知れない。

それともあの自称神による改変・・・有り得そうだけど置いておこう、何かヤダし。

とりあえず僕はその魔力に意識を向け、引っ張り出そうとする。

イメージは投網で魚を引っ張るソレだ。ヨイセー！ヨイセー！ってなもんである。

気合を入れてやったのだが、意外とすんなり引っ張り出す事に成功した。

少しは抵抗があるかと思ったんだけどな。こういったのってマンガとかだとね……。

まあ簡単に引き出せたのはありがたい。そう思った僕は更に魔力を引きだす作業に没頭した。

何度か引つ張り出すことを身体で覚えさせた後、黙想を止めてからその感覚を使って魔力を引きだしてみる。

若干集中力が必要であったが感覚は既に覚えたのでコレも比較的楽だった。

今度はその引つ張り出した魔力を全身に巡らせてみる。

まずは一番集中しやすい腕の方に巡らせてみると、やはりと言っべきかすぐに纏うことが出来た。

ソレもそうだ。魔法を使うの発射口が掌だったのだから感覚的に覚えていても不思議じゃない。

今度はそれが出来たら脚の先から身体の表面に通してみる。

腕、頭頂部をめぐり最後に基の位置に戻るよう意識させながら魔力を動かしてみた。

結果としてはこれも比較的簡単に身体に這わせることが出来た。

その要領で手に持ったオークスタッフ（仮）にも、すんなりと魔力のラインを通す事が出来る。

そうやってしばらくの間魔力を流す感覚を練習する事にした。

最初は未知の感覚に戸惑いを感じたが、徐々に魔力操作の感覚を掴んでいった。

そして、何度か練習がてら撃っていた初級魔法プラストを、手帳を使って装備枠から外してみる。

若干何か抜け落ちた様な感じは受けたが、今までの訓練で魔力の流し方を体で覚えたからか、最初の時に比べて大分魔力の動きがスムーズである。

そして気が付いたが魔力の細かな制御は装備しない方がやりやすかった。

これはオートマからマニュアルに切り替えたと言えはいいのだろうか？

装備すると発動は簡単だが、自動的に発動する為魔法を掴むと言う感じでは無いのだ。

そんな訳でマニュアル状態で自由に魔力を動かせる今、今度はその魔力をどれだけ魔法に込める事が出来るのかも試してみる。

オークスタッフ（仮）を装備し、そこに魔力を込めて魔法の起点にしてみた。

魔法を装備していた時よりも多めに流し込むイメージで魔力をとどめるよう意識する。

ゆっくりと慎重にやったからか時間が掛ったが、少しして魔法を装備した時に込めた魔力を越えた。

そのまま更にその感覚を維持し続けると、明らかに普通の時より光が強くなっていった。

この時に止めておけばよかったものを、僕はそのまま溜め続けてしまった。

そして気が付いた時には、溜まった魔力の余波で大気が振動し始めるレベルになってしまっていた。

おいおい、何処まで込められるんですか!?!と驚いてしまう。

ゴゴゴゴゴゴゴ

・・・と言うかヤバい、流石に自分を中心に波紋の様に風が巻き起こっているのを見ると、コレは非常にまずいのでは?という考えが脳裏に浮かんでしまう。

当然のことながら水平に撃つものなら大変なことになりそうな予感がした。

その為、僕は杖を空に掲げて、虚空に目がけて撃ち上げる事にした。これなら上空に大きな鳥とか飛行機でも飛んでいない限り被害は無い筈である。

そう言う訳で僕は杖を空に向けて、せき止めていた魔力の拘束を解除した。

束縛から解き放たれた魔力はまるで極太のレーザーの如く進路上の雲を吹き飛ばしてしまった。

ところで僕は言いたい　　これって初級の魔法の筈だよね？

だがコレはどう考えても衛星兵器並みのレーザーです。戦術核以上です。街ひとつぶつ壊せそうです。

三つとも見たことは無いけど、イメージ的にソレ位ヤバいと言うことをお伝えしたいくらいだ。

コレは絶対に必要以上魔力込めないようにしなきゃと僕は思ったのだった。

\*\*\*

さて魔力の恐ろしさを実感し、適当な威力に調節するまでに大体2時間30分くらいかかった。



とりあえずいい加減疲れた為、ここまで出来た所で修業を止める事にした。

やや頭がぼーっとするのは魔力の使い過ぎなのだろうか？

兎に角、使い方が判ったアビリティの警戒を用いて周囲に居る筈の紅の気配を探る。

すると前に感じた所よりも若干森の奥の方に移動していた。

それでも意外と近い位置に居たので、そのまま呼びに行くことにした。

「紅、今日はもう帰ろう」

「（おう！解った！・・・あと、かなめクン。これ持って帰るの手伝って欲しいのだが・・・）」

そう言っつて紅が前足で指示した先には、大量の生き物が死屍累々の山を築いていた。

「・・・ねえ紅、やり過ぎじゃね？」

「（結構いい運動になったぜ！・・・けど次回から自重しようかな？）」

そう言うと紅はウサギを二羽啜えた。流石に全部は持ちきれないが、捨てていくのももったいない。

そんな訳で僕も持てるだけの死骸を手に取り、新しく造った住処へと輸送する事にした。

ああ、また解体を自分の手でしなければならぬのか・・・そう思うと少し鬱になる。

でも食わないと生物は生きていけないのだし、割り切らないといけないだろう。

幸い血を見ても特に怖がるとかいうのは僕は持っていないのだし、少しすればコレも慣れるだろう。

そして河原で死骸の肉を解体した後、あの洞窟の前で原住民料理を作ったのであった。

## 次の日。

午前中は食糧集め兼魔獣を倒すことで経験値を稼いだ。

警戒のアビリティを手に入れてから敵となる生物の位置がすぐに特定できる。

ちなみにどうして敵なのかと言うのが解るのかという仕組みはよく解らなかった。

午後は僕のほうはまた魔法の訓練をすることにした。

ちなみに紅は昨日と同じように周辺で狩りをするそうだ。

でも紅に狩りに行く前にウサギなどを取り過ぎないように注意して貰うことにした。

ウサギの肉は比較的食べやすかったが、取り過ぎて全滅されると困る。

なので倒すのはなるべく蛇系にして貰うことにしたのだ。

ゲテモノ食いも偶には良い・・・そう思いたいですハイ。

とにかく、美味しいお肉は貴重品なんです。

さて場面が変わってココは河原。

今日は魔法の定番である炎系魔法を使う為、炎をイメージしてみる事にした。

燃え盛る炎を意識して、スタッフの先に魔力を集めてそれが燃える

様にイメージする。

魔力が燃料になって炎を生むというイメージに意識を集中させた。

しかしなかなかどうして難しい。

始めてから二時間ほどたったが、火花が出た位でまだ火を出すところまでいかない。

下手に魔力を込めると、周りが火の海になる可能性がある。

その為安易に魔力を込める事は出来ないのである。

アレかな？呪文でも詠唱しないとダメなのかな？

しかし、僕は残念ながらルーン文字とか梵字とかは知らない。勿論ラテン語もだ。

どうしようか悩む事40分。坐禅を組みながら考えていると、ぴきーンと脳裏に考えが浮かんだ。

そうだ、すでに覚えている魔法の呪文を思い出して参考に見よう！

「たしか〜プラストオオ！！」

ドォ〜ンっ！！

岩が消し飛んだぜ！……じゃなくてえ！！

コレではダメである。飽く迄思い出したいのは魔法の呪文なのだ。

無意識で無詠唱だったとか、僕って恐ろしい子！

「えと、呪文、呪文……たしかブラスト覚えた時に頭に流れたヤツ……」

冗談はさて置き、真面目に呪文と言うのが無かったかと思いだすことに意識を傾ける。

え〜と集中集中……身体の奥から響く言葉……なんかあったっけ？

「“集まりし力は魔力、轟音と共に敵を屠れ、ブラスト”……だったかな？」

ドオオーンッ！！！！

おお、今度は川が一瞬干上がった。まあそれは置いて、さっきの言葉が呪文かな？

「集まりし」が魔力を集中させる言葉で、「魔力」が現れるもの、「轟音と共に」が打ち出すってこと？」

ちなみに口から出た言葉は日本語では無かった。

意味は判るんだけど、日本語では無い何かの言語である。

使えるのだから良いんだが、何だかおかしな気分だ。

そう考えているとまたもや手帳から音が響く。

見れば手帳に新たなスキルを覚えたという文字が浮かんでいた。

そして覚えたのがコレ。

スキル

・ 魔術理解 A+

【魔法やそれに関するモノへの理解度が深まる。 B以上なら立派な魔法使いレベル】

・・・狙ってやって無い？随分とタイミングが良い様な気もしないでも無いんだけど？

あまりのタイミングの良さに、そう勘繰ってしまうのも仕方ないと思う。

でも、まあ呪文が解ったというのはめっけモンだと思うし、ソレに

関して文句は無い。

とりあえず“集まりし”はそのままでもいいから、次の“魔力”を“炎”に変換して、“轟音と共に”で炎を打ち出してみればいいんだ。

例え失敗しても、ココは河原だから被害は最低限で済む筈である。

まずは身体の中の魔力を集める。

オークスタッフ（仮）に魔力をつなげてラインが引かれたというイメージを持つ。

十分に集まったのを感じたら、呪文を口に出してみよう。

「集まりし力は炎、轟音と共に敵を焼け」

杖の先から轟ツという音と共に紅蓮の炎がたいまつのように浮かんでいた。

勿論杖が燃えている訳では無く、杖にまとわりつくかのように火が浮かんでいるだけである。

「ッ！！？？」

そして魔法を発動させた途端、急に魔法陣やらなんやの構図や公式

が浮かび上がってきた。

余りに膨大な知識が瞬時に脳内に収まっていく感覚はある意味乗り物酔いの様だった。

痛くは無いのだが脳みそを押されていると言つ感覚と言えはいいのか？気持ちが悪くなりそうだ。

そしてそれが止んだ所で、頭の中でナニカがストーンとはまったかのような感覚を感じた。

「魔法：また覚えられたんだ…」

手帳を見ると、魔法の欄にnewの文字が現れていた。

## new魔法

・フレイムブラスト

【ブラストに炎属性を付加した魔法。直線状の炎が目標を燃やす。込める魔力量で強弱可】

最下級魔法・射程 近々遠距離 基本消費魔力量30  
必要CP20

なるほど、ブラストの呪文を基本にしたから、炎属性付加のブラストになったのね。



この新しく覚えた魔法を色々試した所、覚えたら一々呪文を詠唱しなくても平気らしい。

ブラストとかフレイムブラストを思い浮かべながら口で言うだけで済む。

これは非常に有り難い、敵に会うごとに詠唱してたんじゃ身動きが取れない。

ただ詠唱するしないにかかわらず、魔法の名前を頭に浮かべるか口に出すかしないと魔法が発動しないことも解った。

多分、名称が魔法発動のトリガーになっているからだと思う。

今回の事で解ったのはひらめきや直感だけじゃ無くて、覚えた魔法の呪文をちよっと弄くるだけで他の呪文として使用可能だって事である。

さっきのは炎系だったけど、例えば呪文の“炎”の所を“氷”に変換してやれば氷が造れるという具合に色々応用がきく事が解っただけでなくも行幸だ。

そう言う事が解った所で今日のところは止める事にした。

明日からは紅と一緒に魔獣を倒しながら実践で覚えて行くことと思う。

しかし、そろそろ丸焼き系の料理に飽きてきた。

炎くらい操れるようになっただし、粘土でも見つけて土器でも作ってみようかな？

土器を使った鍋料理・・・野菜が欲しいなあ。

### 第3章（後書き）

・あとがき

考えてみると初めて書くなコレ…

どうもQOLです。初めてあとがき書きます。

なにぶん小説を投稿するのは初めてなもんですから  
生温かい目で見守って貰えれば幸いです。  
でわでわ。

## 第4章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第4章 ↓

バキン…!!

朝靄が漂う森の中… 突然金属が折れる音が響く。

そして…

「ナ、ナイフが折れたああ!!」

… 一人の男の叫ぶ声も響いた。

なんて、小説の冒頭みたいに言ってみただけ、別にそうしたい問題じゃないです。あ、でも案外死活問題かな？

自称神に異世界に渡らされて、ココに住みついて早一週間…。

これまで騙し騙しに使い、料理や肉の解体等に大活躍してくれていた十得ナイフ君が、いきなり根元からポツキリと逝っちゃいました。多分金属疲労ってヤツです。

そう…僕がああの河原で炎の魔法を覚えてから、すでに一週間が経過しました。

ココでの生活にもすっかり慣れ、最近はおっぱら魔法と素手で魔獣を捕まえたりして食料を確保し、地道にレベルを上げています。

現在の所、すでにLV28になっていて、もう森の魔獣は素手で倒せるくらいに成長していました。

この服に付いていた経験知UPのアビリティも習得し終え、オークスタッフ（仮）だった棒も、

以前、今回寿命を迎えてしまったナイフで削り出して、オークスタッフへとジョブチェンジを果たしている。

こうして結構順調に進んだと思ったところで、ナイフが壊れるって言う新しい問題が現れたんだよねえ。

「ぎょっしょっ…」

「（おいかなめ！どうした！叫び声が聞こえたけど？）」

僕の声を聞きつけて、今や相棒になってくれた紅が心配して駆け付

けてくれました。

「ああ、紅…ナイフが折れちゃったんだよ…」

「（なんだよ。そんなことかあ）。てつきり魔獣にでも襲われちゃまったんじゃねえかって思っっちゃまったぜ。まあ、ここの魔獣で俺達を倒せる奴はもういないけどなあ！」

「はは、そんなことかあ。案外僕にとっては結構死活問題だったりするんだけどなあ…」

「（ん？なんでだ？）」

不思議そうに首をかしげる仕草をする紅……可愛いな。

「このナイフは、料理に捕まえた魔獣の解体、細工やその他いろいろに使っていたんだよ？とくに獲物の肉が解体出来なくなるのは問題だ。」

僕は紅みたいに獲物にそのまま齧り付く訳にもいかないからね。」

本当にどうしようか？こんなナイフでも有ると無いのでは、生活が全然変わってしまう。

幸い、欲し肉や果物が沢山あるからしばらくは持つだろうけど…

「石でもナイフにするかなあ？」

問題はあまりカタ石が無いってことかな？……黒曜石でも落ちて無いかな？

「（なあかなめ、魔法で飯を出せばいいんじゃないか？イメージすれば魔法造れるんだろう？）」

「ははは、それが出来たら苦労しないよ。」

僕が覚える魔法は、恐らくあの自称神の言い草からしてゲームに出てきそうな魔法……  
つまり、回復魔法や攻撃魔法、白魔法や黒魔法みたいな分類の魔法と補助系の魔法くらいしか覚えられないと思う。  
出来たとしても、魔法で剣を強化するとか、魔力で剣を作るくらいかな……っお!?

「紅！ありがとう！君は天才だ！」

「（な、何なんだよ！いきなり／＼／＼）」

「そうだよな。無いなら造ればいいんだ。刃物を魔力で造れるようにすればいいんだ。」

なんて簡単なことだったんだろう。」

答えとは意外とすぐ近くにあるものである。BYかなめ

「（問題、解決したのか？）」

「ああ、ありがとう紅。とりあえず答えも得たし、今日の修業と行きますか？」

「（おう、解った！）」

そう言う訳で、獲物兼経験値を得る為に森に向かう事にした。

\*\*\*

しばらく進むと目の前にウサギが6匹現れた。

この森の動物はほとんど魔獣らしく、此方を見ると襲いかかってくるという物騒な連中ばかりだ。

僕と紅は身構える。ウサギとはいえ魔獣は魔獣、外見よりも力はずっと強い。

僕は以前、あのウサギの体当たりを受けて転倒し、鋭い前歯で噛みつかれそうになった時は流石に肝をつぶされた。

だってさ…元は草食獣なのに…僕が避けた所にあった木の根っこが抉れるくらい力があるなんて…。

しかも見た目ちよっとデカイ茶色いウサギさんなんだよ？

ギャップ萌えは有りません。

まあしかし、彼らは凄い力を持つものの、実は最近それらはもう僕らには通用しなかったりする。

LVが上がるごとに、僕らの肉体はどんどん強靱なモノへと変わるので、もはや当たっても最早4〜10程度のダメージだ。



それ以前にA V D…回避力の上昇による、動体視力と反射神経の向上で攻撃自体簡単に避けられる為、ココ最近は無ダメージ勝利がほとんどだ。

要するにだ。

敵が弱い為、安心して闘いに専念できるって訳。

「いくよ紅」

「(おっ!)」

短い掛け声とともに、僕はウサギに突っ込んだ。  
まずは目の前の一匹に鋭く蹴りを入れる。

最初の頃は避けられたりしたけど、身体が力に慣れ始めた今では外さない自信がある。  
型もなにも無い汚いフォームの蹴りではあるけれど、実戦の中で鍛えた無駄の無い蹴りだと思う。

ちなみに、すでにこの身体は垂直で5mの高さに跳び上がれるほどの脚力がある。  
当然そんな力で蹴れば…

「ピギイ!」

ちょっとデカイだけのウサギなんて軽く吹き飛ばせる訳で…

「まずは一匹!」

その後も似た様な感じで倒していく。

僕は今ではもうこのくらいの敵には、魔法を使う事はない。

武器であるオークスタッフも元が枝な為、コレでウサギ叩くと折れてしまう可能性がある為、肉弾戦には用いない。

だからウサギ相手には基本素手なんだけど……コレじゃまるでモンクだよ……。

正直に言つと僕は基本的に剣士が好きなのだ。

同じ前衛でも、モンクと剣士では全く異なる。

見事な剣技で相手を圧倒する剣士、そう言つのが好みなのである。

まあ重戦士よりも侍や軽戦士が好きって話なんだけどね。

そう言う訳で、好きなジョブに似せる為にも、僕は今日にも魔法で刃物を作り出す事を決意した。………安直かな？まあ良いけど……。

そうそうこの後は、まあ当然僕らの勝利な訳で、倒した内3匹程を昼飯にする為に持ち帰る。

うーん、ココに来てから随分遅しくなつた気がするよ。

その後もしばらく狩りを続け、太陽が真上に来るころ、僕はレベルを1上げ、獲物や果物も手に入れたので、一度住処の洞窟に帰還した。

僕は河原から拾つて来た石を組み上げただけの簡素なカマドに、拾つて来た木の枝を積み重ねる。

「フレイムブラスト（弱）」

そして、魔力を減らした魔法で火をつける。

魔法は実に便利だ。たとえ湿った木でも一瞬にして燃やす事が出来るからね。

ライターの油の節約になる。

そして僕はいつも通りにウサギを捌こうとして、ナイフが折れていた事を思い出してOTLだった。

仕方無いので、保存食である干し肉に手を付けることにし、腹をくちくする。

本当は焼いた肉の方が好きなんだけど、この際文句は言えない。

結局血抜きはしたけど捌けなかったウサギは、氷属性のアイシクルブラストで凍らせて保存する事にした。

洞穴の奥に竖穴を掘っており、そこに凍らせた獲物を入れ、

更にアイシクルブラストで氷を造り蓋をする　　所謂氷室ってヤ

ツだね。

こうしておけば腐る事も無いし何より長期間保存がきく。

定期的に魔法をかけ直せば良いから、冷蔵庫いらずで便利だわ。

こうして食事と後片付けも終わり、僕はいつも通り河原に行く事にした。

「さて、魔法で刃物を造るって言うってっもな〜やり方どうしよ？」

考えてみたら今覚えている呪文に、刃物を作り出せそんな単語が無

い。

という事は、呪文を弄くつての魔法構築は出来ないって事なのだ。

「とりあえず、瞑想してから考えるかな…」

僕は、もうすでに日課となった瞑想を始める。

珍しく着いて来た紅は僕のすぐ近くで寝転び、昼寝を始めた。

僕も精神集中に精を出す事にする…。

## 1時間後

あまり瞑想している訳にもいかないのです、ここいらで切り上げる。  
紅はまだ寝るらしく寝息を立てていた。

「うーん、魔法で刃物かあ」

要するに魔力をもちいて剣とかの形にするんだよね？

「魔力を手に…」

とりあえず魔力を手に集中させてみた。

ポウっとした感じの緑色の光を放つ僕の拳…うーんシユールだ。

ココまではいつも通り、この先が問題。魔力を刃物の形状にしない  
といけないのだ。

つまり拳の先から魔力を伸ばさないといけない訳で…放出すれば伸  
びるだらうけどすぐ霧散しちゃうし…

「むむむ、イメージだ…剣をイメージしてみるんだ…」  
魔力を放出！集中！収束！そしてイメージ！！………む、  
むずかしい。

放出は良い、簡単だから。問題は魔力を収束させ、それを維持する  
事だ。

魔力つてのは身体から離すと、途端に制御が難しくなる。

ブラストみたいに魔力を撃つのなら問題は無いが、  
今回みたいに魔力を制御してみようって言うのは、僕にとっては初  
めての試みだ。

難しいのは当たり前だから、コレは中々良い訓練になるかもしれな  
い…  
そう思い、兎に角魔力を放出しつづけ、それを収束させる事を目指  
してみた。

そして、今日はこの後2時間程やったが、結局のところ習得にまで  
は至らなかった。

なので、その日は訓練を打ち切った。

次の日も同じように魔力の制御と収束を行う…  
少しだけチロチロとしたモノを出す事には成功した。

ただ、どうしてもそれを維持する事が出来ない。  
おまけに太さも毛糸程度でしか無く、何ともよわよわしい。

コレを鋼線だとかいう様な武器にしてしまうのも悪くは無いだらう

けど、そう言うのには特殊な技術がいるし、それなら普通に刃物の形の方が扱いやすい。

その後も頑張ったが、結局その日もあまり成果は出せず訓練を打ち切った。

そして、魔力で刃物を造るのを目指して二日目…

僕は漸く魔力を伸ばす事に成功した。だけど…

「き、斬れない…」

葉っぱを切ろうとしたが、クニヤンとと曲がってしまう。考えてみれば当然だ。

今の今までただ伸ばす事を念頭に魔力操作をしていたのだから。

幸い魔力の形状を変えらるというのは、魔力を一定量放出し収束させるのよりも簡単だった。

だが、やはりまだ刃物の形状を安定して維持させるのが難しい。

おまけに収束が甘いので、何かに当たると分解してしまう。それに刃物の様に鋭利という訳ではないので、これでモノを斬る事は出来なかった。

それから更に二日経ち、ナイフが無くなって4日が経過した。そろそろ、ウサギの肉のストックが切れそうなので、兎に角僕はイメージを形にしようと頑張りを続けた。

そして、漸く斬れるナイフ状にする事に成功した。

「ただ手帳には魔法を覚えた事が表示されない。その事を不思議に思いつつ、とりあえず刃物を手に入れた事を喜びながら河原を後にした。」

「それで、マイホーム（洞穴）に戻り、早速氷室からウサギを取りだして、いざ調理しようと思ったんだけど…。」

「いい加減…串焼き以外が食べたいかも…」

「そう、調理器具が無いお陰で、お肉のほとんどは串焼きしかなかったのだ。」

「調味料も近くで見つけた岩塩と天然ハーブ類しかない。」

「まあぼやいても仕方ないか…」

「そう思い、ウサギを解体しようとして魔力の刃を入れると…ジューという音と共に肉が焼き切れて行く…Why？」

「どうやら魔力を込めすぎて、炎熱効果が発生したらしく刃物から熱を感じた。」

「ただ炎熱効果付きかあ…今はナイフの形状だけど、もう少し込める魔力を大きくすれば、フレイムタンみたいに炎属性の武器になりそう…。」

「ああああ！！そうか！！」

「（ど、どうしたんだ！？）」

突然大声を出した僕に驚いた紅。

ふっふっふ、僕は凄い事を発見してしまったのですよ

「ふっふっふ、紅、君はスープやポトフは好きかい？」

「（……スープは解るけど、ぼとふって何？）」

「簡単に言つと、鍋にお肉といろんな具材を入れて煮込んだモノだよ。結構おいしいよ？」

「（食べてみたいけど……鍋が無いんじゃないか？）」

「いや、あるんだなあ〜これが。見ててくれ！」

僕はそう言つと意識を集中させる。

思い出せ……あの形……あの形状……機能性……頭にかぶり易いアレ……イメージ通りならこれでうまくいく！

僕が手に持っていたナイフは形状を変えて大きくなっていく。

その形は大きなお碗に見えたが徐々に深みを増し、その姿が何であるのかが見えてきた。

そう、それは……

「じゃーん！お鍋の出来あがり！」

「（うお！？すげえー！魔力で調理器具だなんて……何でも有りだなこりゃー！）」

うんうん、ホント何でも有りだよな

でもそのお陰で、煮込み料理が出来る！

こうして思いつきで、魔力で出来た魔法の鍋が完成したんだけど……



突然、手帳からあの音が聞こえた。

そう、魔法を習得した際には必ず流れる音が手帳から聞こえたんだ！  
僕は手帳を開き、魔法の所に目をやると、新しい魔法が追加され  
ewの文字が表示されていた。

魔法

・イマジンツール

【魔力を用いる事で武器から料理器具、大工道具まで様々な道具を  
作り出せる。】

中級魔法 射程無し 基本消費魔力40（一度使用すると30分ご  
とに20消費） CP20

はー中級魔法なんだ。通りで習得が難しい訳だ。

「さて、とりあえずご飯にしようか！」

「（賛成！）」

その日の夕食は、久しぶりにスープを食べた。

魔法を解除すると、鍋が消えてしまうので、常に魔法を使用して  
たけど、元々MPが多い僕には、大して気にならない。

塩と、骨から取ったスープに果物や食べれる草やハーブを入れただ  
けの簡単な料理だったけど、久々に人間らしい食事だったと思う。

紅も意外と気に行ったらしく、がつがつ食べてくれた。

おいしいって食べてくれる人が居ると嬉しいよね！

そんな訳で素敵魔法を習得した僕、その魔法はすでにショートカットの装備枠で装備してある。  
色々試している内に、ついに自分で武器を造り出せる位に成長した。  
これである程度危険な所にもいけるだろう。

はてさて、これから一体どうなる事やら。

### 現在のステータス

HP (体力)	.....	3010 / 3010
MP (精神力)	.....	6130 / 6240
LV (現在のレベル)	.....	LV 29
EXP (現在の経験値)	.....	470 / 5556
STR (力の強さ)	.....	96
INT (知性)	.....	8560
DEX (器用さ)	.....	73
AGL (素早さ)	.....	135

CON (耐久力)	.....	69
ATK (物理攻撃力)	.....	108
MAG (魔力)	.....	8580
HIT (命中率)	.....	76
AVD (回避力)	.....	162
RDM (物理防御力)	.....	94
RST (魔法防御力)	.....	865
LUC (幸運)	.....	9
AP (アビリティの装備容量)	.....	113 / 120
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	53 / 130

## 第4章（後書き）

後書き。

うーん、魔法…いいなあ。

どうも作者のQOLです。

さて、今回も新しい魔法な訳ですが…チートですね（笑）

コレがあれば一人サバイバルも楽勝です。光熱費0円も夢ではない！

あゝいいなあ…俺も欲しいぜ等と思っている作者はある意味ヤバい  
のかもしれない。

それではまた次回に会いましょう。

## 第5章（前書き）

・前書きでいじめる。

今回かなめ君の心の内が出てきます。

## 第5章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第5章 ↓

イマジンツールを習得して、すでに一週間が経過しました。

この魔法は様々な武器や道具に形を変えることが可能な魔法であり、武器ならばオーソドックスに剣、大剣、槍、戟、斧、カマ、太刀、小太刀、弓、杖と

何でもござれ、また他にも盾等の武器で無いモノも実体化出来る。

形状は全てシンプルなモノばかりだが、魔力を込めれば込めるほど威力が上がるのは嬉しい。

自分の成長にあわせてLEVELUPする武器を手に入れたみたいだ！

また不思議な事に、オークスタッフを装備して剣を出そうとすると、何故かスタッフの先から刃が伸びて薙刀みたいな形状になる事が解った。

さらに、杖を出そうとすればスタッフの先に緑の宝石みたいな魔力の結晶が現れ、

ステータスを見てみると、武器装備によつての魔力値がかなり上昇しているのが解る。

どうやら武器を装備している手からこの魔法を使うと、装備した武

器の強化が出来る事が解った。  
武器を握っていない手から普通に武器を出せるから双剣も可能かも  
知れない。

つまり、この魔法のお陰で僕は魔法剣士になったという事です  
！良い、凄くイイ…。

他にも、のこぎりやトンカチ、みたいな大工道具にもなり、日曜大  
工の気分で椅子やベッドを造りました。  
その時の木材を削り出す際、のこぎりでは効率が悪い為、僕は何と  
も素敵な武器にもなるモノを造り出した…それは。

それは、チェンソーです！便利です！刃が回転します！エンジン音  
はしないけどフイーンっていう風を斬る音が響きます！  
何故刃が回転するかは知りません！でも超楽でした！……ただチェ  
ンソー持って森に入ると、魔獣達が異常におびえていた。何でだろ  
う？

また他にも、フライパンや鍋や包丁等の様々な調理器具にもなる。  
とくに鍋やフライパン等は、魔力を込めて炎熱変換してやると、  
カマド無しで調理が出来るという素敵仕様！

調理の幅が広がったのは言うまでも無い。

おまけに、ラインさえ繋げておけば、ある程度離れても実体化して  
いるというのもいい！

さらに最近になって気付いたんだけど、炎熱変換だけじゃ無く、  
氷変換も使える事が解った。

これは便利ですマジで！  
肉や魚をさばく時とか、果物を斬る時に熱でダメにしないって事が解ったからね。  
これを利用して食後のデザートにシャーベット作ったら紅に物凄く受けた。

この魔法が出来たお陰でどんどん料理スキルが上がっている僕であった。

そして、そろそろ本題に入ろうと思う。

朝、目が覚めると…自分の寢床の中に…



10歳くらいの見知らぬ女の子が寝ていました…マジで？

「へ？あ…え?!」

落ち付け僕…昨日は確か紅と寝た筈だ。

でも、紅が居た場所で寝息を立てているのは、紅い髪の女の子…一体誰？誰なの?!

僕は驚きで叫び声をあげそうになるのを必死で抑え、バクバクいつてる心臓の鼓動を感じながら、隣で眠る少女を観察する。

……なんだかそう書くといやらしく聞こえるけど、何もやましい事はしていない。

ただ顔を見てかなり整っているだとか、寝床が狭い為、非応無しで引っ付いてしまう少女の身体が意外と柔かくって着痩せ…ゲフンゲフン!

と、突然の事態に、混乱中だけど…どうすればいいの!?

紅!助けてくれ!何処に行ったんだよお!!ヘタレな僕を(?!?)助けて!

兎に角気を落ちつけなければ…ふう、落ち付いた。

落ち付いてもう一度彼女を観察してみる。

背丈は140cmくらいだろうか？

170cmの僕の胸のあたりに顔が来るところを見ると大体そんな所だろう。

顔はどこか幼い感じがするが、しっかりとした目が特徴的で、髪はセミロングでやや癖毛がある。

ん……？

「これって……犬耳？」

何故か…頭には犬の様な垂れ耳…ま、まじですか？

この世界に来て初めての人類（と思われる）の少女との遭遇に+でファンタジーも付いて来たよ！

でも…なんだか可愛いかな…。

その後も、なんじゃかんじゃで身もだえて動けない僕。

そして、帰ってこない紅…まじで何処行っただろう？

とりあえず、寢床から起きようとすると、その振動で目が覚めたのか、目の前の見知らぬ少女が目をこすりながら起きてきた。

「……………（目をコシコシしている）」

あ、ちょっと和む…じゃなくて！

「お、おはようございます…」

「おはようかなめ」

へ、なんで僕の名前知ってるの？  
知らない子に自分の名前を言われ、しどろもどろの僕に彼女は…

「なあかなめ…飯は？」

「え？ああ、うんすぐ作るから…」

「ごはんの催促をしてみました。

「じゃ無くて！あ、あのう？」

「ん、なんだかなめ？」

「アナタはどちら様で？」

二人の間に流れる沈黙…

「どうしたんだかなめ？まだ寝ぼけてるのか？」

「い、いや…ただ知らない女の子が自分のベッドに居たらこんな感じだと思うよ？」

「知らない？お前、俺の事忘れちゃったのか？！」

突然、泣きそうな顔をする目の前の女の子に、僕はおろおろ…どうする！どうすんの！？

「ああ、紅！何処行っちゃったんだよおお！！！」

オロロ〜ン！と僕が今ここにいない相棒の名前を呼ぶと…

「なんだ、俺の事ちゃんと覚えてんじえねえーか…朝から驚かすなよなー！」

「へ…？へ…？」

そんな事を彼女はのたまった。  
おいおい、まさか…ウソだろう？

「もしかして…紅？」

「紅は俺以外に居るっていうのか？」

目の前の少女はフンと鼻を鳴らす…。

僕はすくっとベットから立ち上がり、息を思いっきり吸います。

「なんですとおおおおおお！！！！！！」

「うわっ！うるせえ！」「おじっ！」

驚きのあまり大声を出した僕は、うるさいと殴られた…なんです。

\*\*\*

殴られて冷静になったのか僕は今、紅と一緒に朝食を食べています。

不思議だったのは、紅が普通に箸を扱えるって事。

何でも見よう見まねで覚えているのだとか…学習能力高いね。

あ、ちなみに箸は木を削って造りました。

やっぱり日本人だから箸で飯食うのが習慣化してるからね。

でも、目の前で普通に箸で飯を食う元犬の人物が居るとは想像つかなかったけどね。

それと彼女はちゃんと服着てます。  
と言っても動きやすそうな半そでシャツとキュロットだけどね。尻尾が出る穴付きの…。

とりあえず、食後のタンポポ茶を飲みながら、彼女に事情を聞いてみる事にする。

「ねえ、何で人型？になってるの？」  
「知らない」

…………… 会話終了。じゃなくて！

「いや、しらないって…」  
「ホントだぜ？朝起きたらこうなってたんだからな。」  
「それにしても落ち付いてるような気がするけど？」  
「寝ぼけてたし、かなめの方が混乱してて俺が混乱するタイミングが無かった。」  
「ああ…そうなんだ…」

ふむ、しかし一体何故？  
いくらファンタジーな世界でもこれは……………ハッ！そうか思い出した！

「なあ、もしかして自称神が付けた能力じゃ無いか？」  
「ん？そうなのか？」

「うん、たしか手帳の謝罪文の中に、そんな記述があったと思う。」

今の今まで忘れてたけど」

自分で魔法が扱えるのが楽しくて楽しくて、そこまで思考が回らなかつたんだよね。

それに日々の糧を得るのも一苦労だしさ。動物の解体って結構大変なんだよね・・・。

「…確かこの世界にいる種族の一つで、ドワーフだとか言う種族になれるらしいよ?」

「ふ〜んそうなんだ」

いや軽いですねあなた。

まああまり深く考えすぎないっていう、これが彼女の良いところなのかもね。

とりあえず手帳を懐から出した僕は再度それを読み返してみる。

すると、確かにそのような感じの文章が書いてあった。

でもドワーフね…最初の頃テンパってたからスルーして忘れてたけど…

ドワーフなんて明らかにファンタジーじゃないか…。

ドワーフという種族は妖精みたいな幻想種の一つであり、背が低いがその代わり頑強な肉体を持ち、炭鉱を掘って鉱石等を採集して生活している。有名な話だと白雪姫の七人の小人達もこれに当たるといし、某指輪物語にも戦士としての姿が描かれている。

最もゲームで出てくる姿くらいしか知らないけどね。

でも、どうやらこの世界のドワーフが僕の世界のドワーフと同じという訳じゃないみたい。

僕の世界のドワーフは、身体中が体毛に覆われ雄雌関係なしに毛深いとされているけど、

どう見ても今の紅の姿からはその特徴は無い。

むしろ頭の犬耳以外は…ホントに…人間…あ、あれ？

胸がくるしい…それに…目が…アツイ。

あれ…おか…しいな？…アタマが…イタイ

「……なめ！かなめ！」

「…え、なに？」

「お前、何で…泣いてるんだ？」

「！……！」

ナイトルの？ナンデ？ア、アレ？オカシイナ……ナミダガトマ  
ラナイよ？

「し、ごめん…ちょっと頭冷やしてくる…」

「お、おいかなめ!？」

「ゴメン…」

ダメ、オモイダスナ…おモイダシタラ…こころガ…コワレチャ  
ウ…。

僕は唐突に湧き上がってくるナニカに耐えきれなくなり、そのまま  
洞穴を飛び出した…。

\*\*\*

「ハア…ハア…クソッ！」

気が付けば僕はいつも魔法の練習をしている河原に来ていた。

「なんで…どうして?…もう諦めたじゃないか…頭では理解してた  
じゃないか!……なのに」



どうして…こんなにも苦しいの？

解ってた　いきなり異世界に放り出されて…  
もう、家族にも友達にも会えなくて…あの僕が居た世界には帰れな  
くて…

解ってた　苦しくて、苦しくて…辛くて、哀しくて…泣きたか  
った。

だけど、生きていたかったから…泣く訳にも行かなくて…

解ってた　だから、押し込めた…

苦しいなら感じなければいい…明るくすれば明るくなれる…  
そう思ってた…心の奥にしまった筈なのに…。

魔獣と戦うのだって怖かった…生きていけるのか不安だった…。  
だからこそ、抑え込んだのに…。

「紅…どうして今…人間の…ヒトの姿になるんだよう…。」

後少しで…前の世界の事忘れられそうだったのに…人の温もりを忘れかけた筈なのに…  
いま…彼女を見て人の温かさに触れたら…思い出しちゃう…耐えられなくなっちゃうよう…。  
僕が…“僕”で無くなっちゃうよう…ココロが…壊れちゃう…。

僕は泣くことも出来ず、ただひたすら…心が静まるのを待つ…  
大丈夫だよ…耐えればいいんだ。

僕が我慢すればすぐに収まるよ…苦しくても考えなければ…感じなければ…何も問題は…ナイ。

身体を丸め苦しいのが過ぎ去るのを待つ…その時背後の茂みから何かが飛び出してきた。

「かなめ！ココか！」  
「！！」

声のする方を見れば…紅が立っていた…人の姿で…。  
彼女は…僕を見つけて…安心した表情を浮かべながら…近づいてくる…近づいて…くる。

「いきなり出てくなくよ！心配「来ないで！」…かなめ?!」  
「ごめん…来ないで…今の顔…見られたく…無い」

ダメだ…今話をしたら…心が耐えられない…。

「僕なら平気だから…明日になったら戻るから…だから」

放っておいてくれ。

僕はそう言葉を紡ごうとしたが、その言葉が出る事はなかった…  
…なぜなら。

「へ？」

「……………落ちつけ」ギユ…

彼女に…抱きしめられたから…。

「な、なんで…は、離して…」

何故そんな事をするのか理解できなくて…抵抗を試みた僕…。  
だけど、紅は決して手を離そうとはしなかった。

「かなめ、苦しい時はな？動物だって泣くもんだ…」

ああ、まただ…頭が痛い…目が熱い…それに…。

「我慢なんかすんな…ここには俺しかいないぞ？」

胸が…心臓が…何よりもココロが…とても熱い…くるしい。

「な…んで、そんなこというの？…がまん…できなっ…できなく…」  
「一度泣いたら…すっきりするぞ？」

その言葉が…僕の心の中の堤防を破壊した…。

「うっ…うっ…」

「苦しかったよな？誰だって一人はさびしいモンな？」

どンドンどンドン、彼女の言葉が楔となり、心に撃ちこまれていく。いままでずっと我慢して…溜めていたモノが…あふれ出てしまっ…諦めきれなかった思い…僕のあの世界への思いが…鎖が…壊れていく…。

「う、うっ…うわあああああ！どうして…どうして！なんでこんなところに！あああああ…」

「そっだ、たまってたモン、全部吐き出しちまえ…大丈夫だから…な？」

「くそおおお！うああああ…あつあつうわああ…」

彼女にすがりつきながら…泣いた…みつともなくひたすら泣いた。平気なフリしてたけど…結構ストレスがたまっていたらしい…。

彼女はその後何も言わず…ただ無く僕を撫でてくれた。

\*\*\*

もう、どれくらい時間が経っただろうか？

気がつくと僕は気を失っていたらしく…あおむけにされていた。

段々と意識が覚醒していく…

頭はボーっとしていたけど…不思議と心が晴れている。

たまっていたストレスを吐きだしたからか…それともココで生きて行く覚悟を決めたのか？

解らないけど…多分ふっきれたんだと思う。

ようやく目をあけると、辺りは夕方らしく空が赤く染まっている……

そして目の前に紅の顔がある……………アレ？

「よう、やっと起きたか？」

何故空を見上げているのに彼女の顔が見えるのか？そして後頭部に感じる柔らかみはナニカ？  
それらを統合して導き出される答えは……………膝枕されている。

「stクア&%ツセ#%\$`【“&amp;:\$フジこーp」

「お、オイ！暴れるなよ」

ちよっ！なんで顔紅くしてんの！？ていうかハズい！！とにかく離して〜！！！！

「だから暴れんなっキャツ！」

「あっつ！！？」

混乱してもがく僕、その際振り回した手が運悪く、彼女の小さな双  
丘にヒット……………やべ。

「……………こんの」

顔がみるみる赤くなる紅…そして表情は怒りに染まる。

そして振り上げられる拳が、死神の鎌の如くゆっくりと降りてくる  
のが見える。

「バカあああ！！」  
「ギャブウウ！」

殴られた僕は10mの飛距離をマークし…そのまま軟着陸する事になった。

その後も、まだ怒りの収まらないらしい彼女が迫ってくるのが見える。

コレだけは言いたい…ワザとじゃなかったんだ…。

1時間後。

「すいませんでしたー！」

「べ、別にもういいって、っーか忘れる！」

「サー！了解です！サー！」

あの後ポコポコにされた僕は、また気絶してしまった。

彼女も何故あんなに殴ったのか解らないらしい。

自分は元々犬だから、あの程度の事では怒らない筈なのに…と不思議そうにして顔をかしげていた。

その仕草に、ちょっとだけポワワ〜ンとほのぼのとした気持ちになったのは彼女には内緒。

でもさ紅、多分君がそんな風に変った原因は、あの自称神だと思っよ？

「つか、絶対僕達の身体弄くった時に遊びを入れてるよ絶対！」

僕はゲームの様な成長システムが付いてるし、紅には人型になれるなんて絶対遊んでる。

余計にあの自称神にはイライラがたまつたよ。感謝もしてるけど…さ。

まあそんなこんなで、気が付いたら辺りはすでに真っ暗になっており、

とりあえず傷口を魔法で直す。そして絶対に彼女を怒らせない事を誓う僕。

アレはマジで怖かったです…ハイ。

あっそうそう、ところで…

「何で膝枕してくれてたの？」

「あーそれはな？…かなめ、あの後俺に抱きついてそのまま寝ちまっただろ？」

「う、うん。」

「そんな時にお前、全身の力抜けて俺を押し倒したんだよ。」

え？何…なんて言いましたこのヒト？

「へ？ふえええ！…ゴメンなさい！」

「気絶してたんだからしょうがねーって！」



頬を赤く染め、手をブンブンと振り、もういいという仕草をする紅  
…。  
うう…ゴメンよ紅、気絶してたからってそんな事してたなんて…  
恥ずかしいよお。

「それでまあ、俺が起きあがったらちようどあの形に治まったんだ  
よ！」

石の上に寝かしておくのも可哀そうだからああしてたんだ。」

「そうか…ありがとう紅」

「…この場合はどういたしまして…か？所で…」

彼女は僕の顔に自分の顔を息が吹きかかる距離までズズイっと近づ  
けてきた。

人だと認識したからだろうか？結構ドキドキしています…内心シド  
ロモドロです。

そんな僕にはお構いなしに…彼女は言葉を紡ぐ…

「元気…出たみたいだな？」

そう言うと…彼女は綺麗な頬笑みを浮かべる。

思わず見とれてしまう程の…とてもきれいな笑顔だった。

「うん、いっぱい泣いて…どうやら色々つぶっきれたみたい。」

「そうか…良かったな。」

「ああ、紅のお陰で前の世界の踏ん切りがついた。ホントにありが  
とう。」

気が付けば僕は紅を抱きしめ、ちょうどいい位置にある頭を撫でていた。

「お、おい…なんか恥ずかしいぞ！」

そう言いつつも、引き離そうとはしないので撫で続ける。すまんね？意外とキューティクルが有ってポリウムもある髪なので、心地よくてついつい撫でてしまうのだよ。

ただ、あんまりやるとまた紅にハッ倒されそうなので、ほどほどにしておいた。

「……意外と…よかった。」

「うん？なんか言った紅？」

「な、何でもねえ！」

「そう、ならいいけど……」

何故かぶつぶつ言ってたけど聞き取れなかった。

でもさ紅、あの自称神がこの世界に僕達を放置した事で、こんな事態になっちゃったけど、

とりあえずこの世界で生きて行く覚悟は付いたみたいだよ。

君が居てくれたおかげで…耐える事が出来る。

本当にありがと……いっぱいはい……ありがとね。

「そうだ紅！迷惑かけたお詫びに今日の夕飯は豪勢に作るから楽しみにしてて！」

「お、おう！そいつは楽しみだ」

僕達はそのままマイホームである洞穴に向かう。

今日一日でホントに驚く事ばかりだったけど、そのお陰で決心が  
いた。

昔誰かが言った“終わりおければ全てよし”…良い言葉だと思う。

兎に角生きてゆこう…難しく考える必要はないさ。

ココがどこであるとも…住めば都さ。

そんなことを考えながら、僕は紅と帰り道を歩いて行っ  
た。

主人公はナデポスキルLV1を習得した（これは冗談です by 作者）

## 第5章（後書き）

・後書き

つ、ついにやってしまった…。

ナデポって奴を…まあ微妙にだけどね。

どうも作者のQOLでございます。

一応今回の話は、主人公君異世界で覚悟を決めらるって感じですよ。

やっぱね？どんな人でもいきなり違う世界連れて来られたら取り乱したりもします。

作者は外国に行っただけでもヤバそうです（笑）

これからもゆっくり書いて行きますので暖かい眼で見てください。  
ではでは、また次回に…。

## 第6章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第6章 ↓

紅が人型に変身し、僕の中のわだかまりが解消されたあの日から5  
日目……。

次の日には犬に戻るかなと思っていた紅は…

「おいかなめ！こっちだ！早く行くぞ！」

「こら紅！服引っ張るな、伸びる！」

……いまだに人型です。

どうやらまだ力をコントロールできないらしく、自分では戻れない  
との事。

まあ、“別のやり方”で戻せるから、とくに問題は無いからいいん  
だけどね。

「かなめえ〜！はやく来い〜！」

「わかったから引っ張らないの！服伸びる〜！」

さて、今僕らは何をしているかというと…

「紅ストロップ！ココに隠し扉がある！」

「おお！ほんとか！？」

なんとダンジョンに来ています！

いやね？イマジンツールとか覚えたから、もつと探検してみようと思っ  
て、まだ行ったことがなかった森の南側を探検しに行った所、  
偶然にも入り口を発見したのです！

こんな面白そうなのあったら当然入るでしょ！って事でダンジョン  
探検しています。

いかにもダンジョンって感じが知的好奇心を刺激します！！  
でもたった一つだけ問題があつてね…ここ予想以上に…

「じゃあいくぞ！」

「まっつて、罠が無いか調べるから。」

罠の難易度が高いダンジョンだったんだよね。

「さて、“サーチ”」

僕の手から光の玉が現れ、周りを照らして危険なモノが無いか調べ  
てくれる。

とりあえず何もなさそうだ。

このダンジョンの来てから習得した新しい魔法……探查魔法サーチ。  
ネーミングと効果もそのままだけど、トラップが妙に多いこのダン  
ジョンでは重宝している。

この魔法を覚えたのは、最初このダンジョンに来た時に落とし穴に

はまったのが原因だった。  
結構深めで、幸いなことにトゲとかは無かったけど、このまま進むのは危険だと判断した僕は、新しく探査が出来る魔法を作る事にしたんだ。

それがサーチ：微弱な魔力を放ち、対象をスキャン出来る魔法だ。最初は簡単なモノしかスキャン出来なかったけど、何回か使う内にコツを掴み、どんなものも解析出来る様になった。

コレが意外と便利！トラップだけじゃなくて、装備や持ち物の付属効果、更には何と対象にした生き物のステータス等も解析できるのだ！

使うと僕にしか見えない空間パネルみたいなモノが現れて、そこに解析結果が現れるって感じ。

お陰でココに来てようやく紅のLVとステータスが判明したんだ。ちなみに彼女の現在のステータスはこんな感じ。

HP (体力)	.....	5 1 8 0 / 5 1 8 0
MP (精神力)	.....	1 1 3 0 / 1 1 3 0
LV (現在のレベル)	.....	LV 5 4
EXP (現在の経験値)	.....	6 7 0 / 5 5 0 3
STR (力の強さ)	.....	8 5 7 0
INT (知性)	.....	2 5 2
DEX (器用さ)	.....	3 5 0
AGL (素早さ)	.....	5 3 0
ATK (物理攻撃力)	.....	8 5 7 3
MAG (魔力)	.....	2 5 2



CON (耐久力)	.....	4067
HIT (命中率)	.....	654
AVD (回避力)	.....	530
RDM (物理防御力)	.....	4067
RST (魔法防御力)	.....	526
LUC (幸運)	.....	900
AP (アビリティの装備容量)	.....	60 / 60
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	80 / 80

どうやら彼女もあの自称神に色々ステータスのボーナスを貰ったっぽい。

僕とは違い、彼女は攻撃力に優れ、次点に耐久力、そして後はバランス良く割り振られていた。完璧に前衛向きだなコレ。

ちなみに僕は今LV29なので、彼女は僕よりもLVが高い。

まあ僕の場合、一日の前半は魔法の訓練に費やしてるから、森で毎日魔獣と戦闘をしている紅よりもLVが低いのはしょうがない。

でもさ.....彼女僕の百倍以上 幸運値高いよね?...なんだか世知辛いね。

まあ僕のステータスが変なのは、この際置いて、コレのほかに新しい手帳の機能が解った。

その機能とは：“サーチ仲間登録”。

これは文字通り、サーチで解析した生き物を仲間リストに加える機能だ。

なんでそれが解ったかというと、以前紅にサーチを掛けた際、空間パネルの隅に仲間にしますか？という表示が現れたんだ。

そんでとりあえず紅に仲間になってと言い、それを彼女が承諾すると、突然僕の手帳が淡い光を発して空中に浮かんだんだ。

これにはビックリして、その光景を見ていたんだけど、その内に手帳の光はまっすぐ紅に伸び、彼女を包み込むと、フツと消えた。

んで、その後手帳を見ると、彼女が仲間に登録されたってわけさ。

コレの良い所は、仲間リストの仲間をパーティーとして登録出来るって事。

パーティーに登録すると、特典としてどちらかが経験値を得ると、相方にもそれが反映されるっていうパーティー経験値が出来たって事。

また他にもアビリティの共有とかもあって、パーティー組んだ相方にもアビリティの効果が現れるっていう特典があったんだ。

コレのお陰でそれぞれが倒した分だけLVが上がりやすくなったのだ！便利すぎ！

あと、最初でもちよつと言ったと思うけど、パーティーに紅を入れる事で、彼女のスキル欄にある変身っていうスキルを手帳を介して操作する事が可能になった。

なので、犬型と人型を僕が操作出来るって訳だ。

まあ一応本人の気分で犬になるか人になるか決めて貰ってるけどね。

今のところ人型なのは、人間の姿での戦闘に慣れる為らしい。

でも、慣れて無い筈なのに妙に戦う姿は様になってるんだよね…何でだろ？

きつと戦闘センスが物凄いな。そうに違いない。

良く見ると、何かの武術の型っぽいけど…気のせいだ…多分。

まあそんなこんなあったけど、ただいまダンジョン探索中。

石を組んで作られたこのダンジョンは、イメージ的にはインカの空中都市マチュピチュの石組に近い。きつちりとカットされ、一ミリの間隙も無いそれは建築技術の高さを思わせる。

あー考古学者になつたみたい！あの、テンガロンハットと鞭がトレードマークの博士…

ガキ…ゴトン

「ん？なんだ？」

「なんか音がしたよね？」

コロコロコロ…

「なんだか…物凄く嫌な予感がするんだが…」

「紅もそう思う？なんと無く何だけどさコレって…」

僕は後ろを振り向く……そこには転がってくる大きな岩が…見落と  
したトラップですね、解ります。

「お、大岩が転がってくる！？……に、にげるー！！」

「くそー！！！！」

まっすぐ続く通路を全力で走り抜ける僕達。

あんなベタなトラップまであるなんて…ある意味絶句モノだね。

「いやあああー！！」

「お約束過ぎるだろうアレはあああ！！」

後ろを見ればロードローラーもビックリな大岩…

道路で潰れたカエルみたくするのは嫌です！

「紅、左にまがれ！」

「了解！」

二股に分かれた通路、僕達は左に曲がる。

転がって来た岩は右にそれてくれた為なんとかあったけど…。

「「こ、こわかったあゝ」」

こんなお約束なトラップはもうこりこりだね。  
そう思った僕はより慎重に通路を選び、石橋を叩いて渡るの精神で  
気をつけて進んだ。

だけど…不思議な事に、何故かあれからお約束な類のトラップは出  
てきていない。

ネタ切れでも起したのかな？

でもまあ、油断はできないので警戒はしておく。  
潰されるとか貫かれるとか斬られるとか言つのは勘弁だもんね。

その後もトラップに気をつけて進みながら、時折現れる魔獣も適当  
に切り捨てる。

こういった遺跡系ダンジョンにはお約束なミイラ型の魔獣も居たけ  
ど、切り捨て御免に処した。

とりあえず成仏しといてね？化けてこないでよ？怖いから。

でも、ミイラ型とかの他に、偶にゾンビ系も混ざってるらしい。  
なんでかって言うと、明らかに冒険者風のいで立ちの元人間が混ざ  
って、襲いかかって来たからね。

もつとも、死体とはいえオークスタッフに付与したイマジックツール・  
ソードで簡単に切り捨てられたけど…あんまりいい気はしないな。  
人型だから余計に…ね。

とりあえず僕に出来るのは、ミイラ系は炎熱変換を付けたイマジック  
ツール・ソード（以下E.T.ソード）で燃やして、  
比較的新しいゾンビは、一度切り捨てて装備を探ってから燃やす事  
しか…。

なんだか死体あさりみたいだけど…使えるモノを燃やすのは得策じゃないしね。  
もっともほとんどの装備が腐ってるから意味なかったけどね…！…  
…むなし。

その後も通路を歩き続ける僕たち、時折出てくるゾンビ&ミイラを倒していると、ふとこんな事を思った。

「なんだか、ゾンビ系が多いのかなめ。」

「だね、あのウイルスでもあるのかな？」

「あのウイルス？なにそれ？」

「感染させると感染者をゾンビに変えちゃう架空のウイルス。ちなみに噛まれた人も感染する。」

「げ、やだなあソレ…！とりあえず噛まれないように気をつけようぜ？」

「うん、そうだね。」

まあ多分そんなのは無いと思う、だってあの死体達は明らかに魔力で動かされてたし、  
サーチでの解析でも、生体ゴーレムとかのカテゴリに入ってたしね。多分このダンジョンで死ぬと、ダンジョンの中の魔力と何らかの魔法の力が働いてゾンビにされるんだと思う。  
ようは死ななきゃ大丈夫ってことだ。

「とりあえず奥に進もう！」

「おう！」

僕たちはずんずん遺跡の奥に進んで行った。まあ、森よりか敵は強いけど、元々異常に高い能力値の僕達。

おまけに僕は炎熱系魔法が使える為、楽勝だった。敵が死体だから、動きがゆっくりで単調なのも簡単に勝てる要因だ。

しばらく壁沿いに進むと、扉があった。

とりあえずサーチを掛けてみたが、解析結果では罫は付いていないし、中は只の部屋のような。

警戒は怠らずに部屋の中に入ってみると……そこには……！

「箱があるぜ？」

「ああ、いかにもな宝箱ってヤツだね」

部屋の中心に鎮座する宝箱……どう見ても罫です

「開けてみる？」

「？かなめ、何警戒してるんだ？」

いや……だつてねえ？

「いかにもって感じすぎて……なんだか罫っぽいんだよね。ミミックみたいな奴だつたら怖いし……」

「ミミック？」

「魔獣の一種で、宝箱や置物に擬態して、ノコノコ近づいて来た冒険者をぱっくり食べちゃうヤツだよ。身体が無機物だから武器が効きづらいのもネックだね。」

「……こわいなソレ」

まあミミックが本当に居ればね？

でもせっかくの宝箱、もし本物なら……捨て去るのはなんかもったいない。

「とりあえずサーチ入れてみるよ」

サーチを発動し、解析を掛ける。

「……………」

「どうだ？かなめ」

「……なにも無いみたいだね。でもちよつと後悔……」

「へ？何でだ？」

「宝箱の中身も解っちゃった。」

ヒュールルル

何処からともなく、さびしい風の音が聞こえた。

トラップ回避の為、致し方無いとはいえ…なんか複雑。

「あー、それでかなめ。中身は何だったんだ？」

「うーんとな？解析結果だと、三つ程装備品が入ってて、二つ武器で一つが防具だよ。武器の方はポールアックスっていう長柄武器で槍と斧の合いの子。もう一つの方は剣で、形状としてはフォルシオンっていう、力で叩き斬るっていうのを目的とした剣だと思う。」

あまり詳しくは無いけど、どちらもゲームで良く登場するから良く覚えてる。

「どっちも壊れないようにするために、魔法で強化されている以外は普通の武器だね」



「ふーん、防具は？」

「胸当て、ただし素材が凄い！魔法金属ミスリルだってさ」

ホントかは解らないけど、サーチの解析の結果はそう出ている。

しかし、ファンタジーの代名詞の魔法銀ミスリルか……ホントにどうなってるだろう……この世界。

魔法がある時点でアレなのに、さらにミスリルって……まさかオリハルコンとかもあるのか？

まさかねえ……まあいけどさ。

「なあかなめ、みすりるってなんだ？すごいのか？」

……とりあえずこの子には凄いつて事だけ教えとこ。多分詳しく言ってもわからないだろうし……。

「とりあえず、紅は胸当てと剣を装備してくれ。僕はポールアックスを貰うよ。」

「おう解った……なあかなめ」

「どうしたの？」

「いやな？防具の付け方わかんねえ……。」

「……………」

仕方無いので付けてあげました。

さて、どんどん奥に進んでいく僕達。

さっき入った部屋と似た様な部屋が幾つかあり、宝箱があると解った部屋には全て入った。

当然、宝箱は全部開けた。

「かなめ！飲み物が入ってるぞ！」

「それはジンだね。薬草を漬けた薬酒「ぶーっ！まずい！」ああ！もったいない！」

いきなり飲むなよ！？ダンジョンの医薬品は結構貴重品なんだぞ！  
？ああ…折角のお酒が…。  
他にも…

「なんか布が出てきたぞ？」

「これは…（解析中）…男性用ローブだね。かなり防御能力が高いな…ちょうどいいから装備しとこ。」

強い防具を手に入れたり…

「指輪だな？」

「シンプルなデザインだけど…（解析中）…凄いな。AGLとAVD…要するにスピードと反射神経が倍になる効果付きだなんて…コレは是非紅が付けるべきだね。紅は前衛なんだし、シンプルなデザインだから結構似合うと思うし…。」

「そ、そうか？」

「うん、さ、装備しようか？」

「……………」黙って左手を差し出す紅

「手帳でこうやって…はい装備完了！…ん？何で左手こっち向けてんの？」

「…な、何でもねえ…」

「????」

凄いアクセサリを手に入れたり…

「コ、コレは！」

「骨付き肉…だと…」

「し、しかもマンガ肉…」

「…ゴクリ。」

食べ物を見つけたり…

「紅！なんで勝手にあけたのさあ！」

「今までトラップ無しだったから平気だと思ったんだ！なんで開けた途端、魔獣が出てくるんだ！」

「そんなことより今は迎撃！」

魔獣トラップ付きだったりした。

うん、冒険してるって感じ。

そしてとつとつ…

「どつやらココが最深部みたいだね。」

「敵も弱いし、落ちてるものは良いモノばっかだし、いいダンジョンだな！」

「……………（僕らのステータスがおかしいんだと思うよ）」

色々あったけど、やっとこさ最深部にたどりついた。

目の前には今までの扉とは一線を化す、重厚なまさにソレ！って感じの扉…っーか門。

「絶対こう言うのって、ボスが住んでるんだよね。」

「そーなのかー？だったら燃えるぜ！」

「定番の王のミイラかな？それともミノタウロス系？まあ、どっちにしても倒すけどね。」

最近バトルジャンキーになりつつあるなと思いつつ僕は扉に触れる。すると力を入れていないのに扉が開き始めた。

「行くぜかなめ」

「ああ、なんだかワクワクするよ」

僕は扉の中に入った。

中はかなり広い大広間だった。

どん位かというと、学校のグラウンド位かな？

こう言うところって無駄にひろいよねえ〜と考えていると…

ゴトン…

何かが動く音が聞こえた。其方に顔を向けてみると…

「ド、ドラゴン…だど…」

「トカゲだとッ…」

「いや、トカゲでは無いと思うよ紅…」

「オオトカゲだと……」

「まずはトカゲから離れようよ」

大きなドラゴンが、カマ首を上げこちらの様子をうかがっていた。  
なにになに！？ボス戦なのか？というかこの世界ドラゴンまでいるの  
?!

室内なのにその羽根は必要あるの？というかどうやってココにはい  
ったんだ？

ご飯は何食ってんの？トイレはどうやって……ゲ、ゲフン！

……なんだか思考が別の方面にずれたけど……

「かなめ……どうする」

「相手、次第かな？」

見逃してくれる期待を込めてドラゴンを見るが……

「ゲルルルル……」

どう考えても……殺る気満々です。

まあ、どう考えても僕らはドラゴンのテリトリーに侵入した敵な訳  
だから怒るのも当然な訳で……

「しょうがない！戦つよ！紅！」

「おうともさ！俺の速さは並みじゃないぜ……！」

……彼女いつそんな決め台詞作ったんだろっ？

「よし！倒した！」

「い、一撃だと…有り得ねえ…」

先制攻撃のつもりで、ダンジョンが崩れない程度で魔法を一発。

何故かそれ一発で倒されるドラゴン…ちょ！いくらなんでも弱く無いですか？！

ココはもっと手に汗握る戦いつてモノになるんじゃないの？！

…まあ、そうなるのは勘弁だからいいですけどね。

で、倒したドラゴンなんですけど……なんだか光の粒子になって消えていきます。

多分魔法生物だから死ぬと魔力に戻るとか言う、そういうヤツだと思っ。

だって……さっきから物凄い量の魔力に還元されてるんだもん。

部屋が密閉されてるから、物凄い魔力の密度と濃度。

お陰で息苦しい位だよ。

「あゝあ、結局俺剣振って無いぜ。」

「でも怪我無しで倒せたからいいじゃないか」

「いや、でもなあ。かなめに飯食わせて貰ってるこの身分としては、せめて戦いで役に立ちたいという矜持がなあ……」

「ふふ、ありがと紅。大丈夫今でもちゃんと役に立ってるからさ。」

「そうなのか？」

「うん、さみしい時に誰かがそばに居てくれるのって嬉しいもんなんだよ？」

「うゝん、なんか俺が考えてる役に立つのとは違うよっな？」

耳をパタパタさせながら考え込む紅。

心なしか尻尾も揺れている…アカンで、その動きは可愛い過ぎる。まるで犬みたい…って彼女は元々犬か。

ま、ソレは置いといて、彼女は実際結構役にたっているんだよね。話し相手してくれるし、匂いで獲物の追跡出来るし、

何より近接戦闘のスキルが高いから、僕としてはとても助かってる。

「まあまあ、何なら家事でも覚えてみる？」

「……………遠慮したいとこだけど…役に立てるのか？」

「まあ、いつまでも僕が家事やるのも大変というか…せめて掃除位は覚えてほしいかな…なんて」

「……………考えとくぜ」

そう言って、違う方を向いた紅の頭を、僕は偉い偉いと言いながら無意識で撫でていた。

紅は撫でられる時最初の頃はピクツと反応して払ったりしたけど、

最近では僕の手を払う事はしない。  
大分僕の事を信頼してきている証だと思う。

ちなみに僕が彼女を撫でる理由は特に無い、なんかそうしたかったからだ。

なんとなくペットを撫でる感じかな？もしくは妹とか弟を撫でてやる感じ？

まあそんな感じだと思う…多分。

ちなみにそんな事してる内に、ドラゴンは身体のほぼすべてが魔力に変換されてしまった。  
後にはカギと宝珠みたいなものが残されている……。

「宝珠はともかくとして…このカギは絶対あそこのカギだね」  
「だろうな」

僕らが視線を向けた先。  
そこにあっただのは、さっきのドラゴンによって守られていた扉だった。

最初はドラゴンの影にあっただから見えなかったけど、ドラゴン死んだので今は良く見える。

「こつ言うのは大体、宝物庫への入り口なんだよね」  
「なるほど…」とこつでほうもつこつてなんだ？

「……宝箱だらけの部屋のことだよ」  
「おお！なるほどー！」



とりあえず宝珠は後で調べるとして、奥の扉へと向かう。

カギは確かにこの扉のモノだった。

南京錠みたいなヤツにカギを差し込んだ所、ガチャっといって扉が開いたんだ。

でもさ、何でドラゴンがコレのカギ持つてんだらう？

身体の中に仕込まれてたっばいから自分では開けられないだらうに……謎だ？

まあ、とりあえずその事は置いて部屋に入ると、予想どおりそこは宝物庫だった。

金銀財宝は言わずもがな、何故か金で出来た誰かの彫刻まである。

金銀財宝は持つていても使い道が今のところ無いしかさばるので、使えそうなめばしいアイテムとわずかな金貨と宝石だけを持って、僕たちは宝物庫を後にした。

ちなみに、このダンジョンを終えて、マイホームに帰ってから手帳を調べるた所。

僕はレベルが3くらい上がっていた。でも相変わらず幸運値が増えないのね……。

紅の方は5くらい上がっていた。

………相変わらず幸運値高いなあ……いいなあ。

・かなめ

HP (体力)	.....	3	2	3	0	/	3	2	3	0	
MP (精神力)	.....	6	1	3	0	/	6	5	4	0	
LV (現在のレベル)	.....	LV	3	2							
EXP (現在の経験値)	.....	2	4	7	0	/	1	0	0	5	6
STR (力の強さ)	.....	1	0	5							
INT (知性)	.....	8	9	4	0						
DEX (器用さ)	.....	8	2								
AGL (素早さ)	.....	1	9	4							
CON (耐久力)	.....	7	8								
ATK (物理攻撃力)	.....	1	1	6							
MAG (魔力)	.....	8	9	7	0						
HIT (命中率)	.....	8	5								
AVD (回避力)	.....	1	7	1							
RDM (物理防御力)	.....	1	0	3							
RST (魔法防御力)	.....	8	8	5							
LUC (幸運)	.....	9									
AP (アビリティの装備容量)	.....	1	1	3	/	1	2	9			
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	5	3	/	1	3	9				

・紅

HP (体力)	.....	6630 / 6680
MP (精神力)	.....	1200 / 1200
LV (現在のレベル)	.....	LV59
EXP (現在の経験値)	.....	2670 / 15403
STR (力の強さ)	.....	8630
INT (知性)	.....	292
DEX (器用さ)	.....	380
AGL (素早さ)	.....	600
ATK (物理攻撃力)	.....	8630
MAG (魔力)	.....	292
CON (耐久力)	.....	4700
HIT (命中率)	.....	704
AVD (回避力)	.....	530
RDM (物理防御力)	.....	4317
RST (魔法防御力)	.....	578
LUC (幸運)	.....	900
AP (アビリティの装備容量)	.....	75 / 75
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	100 / 100



## 第7章

く 出歩いて… 落っこちて・第7章く

空がどこまでも蒼く、天高く鳥が飛び去っていく中

「うん… 言い天気だね〜！」  
「そうだな！」

僕たちは今森を抜けて草原を歩いております。

何故森の外にいるかというと、実はもうあの森だとLVは上げられないからです。僕達の次のLVUPに必要な経験値は、もうあの森の魔獣の出す経験値では足りなくなっていたからね。それに最初より強くなってるからそろそろ旅に出ようって話になって、森を出る事にしたって訳さ。

それであ、今回、旅に出る事した。  
それに先駆けて、僕はあのダンジョンで得た装備品は結構装備してきてある。

防具としての服は元の世界のモノだが、その上から濃い茶系の色をした、かなり防御力の数値が高い男性用ローブを着こみ、手には愛用の手製オークスタッフ、あと背中にポールアックスを装備している。

ポールアックスさえ見なければ、その姿はまさに魔法使いに見えると思う。

…と言っても、まだ僕の場合、魔力が高いたけのひよっこなんだけどね。

もうちょっと魔法を何とかしたいとこだけど、教えてくれる師匠みたいな人が居ないから、コレ以上の魔法関連のスキルアップは無理だと思うんだ。

だって僕は元々魔法が無い世界の出身な訳で、今までなんとなく魔力行使等は行ってきたけど、レベルの高い複雑な魔法とかは流石に誰かに教えてもらうか、魔導書の様な教本でも無いとムリ。

そう言う訳で、今回の旅には、魔法関連の魔導書を見つけるか、師匠みたいな人を探すのも、僕の目的の中に入っていたりする。まあ見つかるかはわかんないけどね。

一方、紅の方はあのダンジョンの宝箱から見つけたミスリル製胸当てと、

長さが80cm程の大きさがある片刃の曲刀であるフォルシオンを背中に吊っている。

アレは本来は腰に差すモノなのだが、彼女の身長が低く腰に付けられなかったので、

鞆に紐をつけて背中から背負えるようにしたのだ。

それとアクセサリとして、反射神経とスピードが倍になる“瞬風”という銘の指輪を、  
右手の人差し指に装備していた。

コレが現在の僕たちの装備な訳だけど………とりあえず豪華過ぎな装備だよな。  
いやむしろコレ過剰装備というか、序盤の装備では無いというか……。まあいいけど、僕まだ死にたくないし、装備の能力が高いから付けてる訳で……。

そう、僕はまだ死にたくは無い、どうせ死ぬなら、この世界を回ってから死にたい……  
そして畳の上でポックリ逝くんだった……この世界に畳があるのかは知らないけど……。

その為にも、まずこの世界を歩き回って色々みて勉強しないとね！  
という訳で居心地の良い森を出て、世界への第一歩を踏み出した僕たちなのでした！  
行くあては無いけど、人が居る世界なんだから歩き続ければ、いつかは人里にたどりつけるか、  
もしくは街道みたいな道に出られると思った。  
そう言う訳で、道とかが見えないか注意して歩いている訳なんだけ  
ど

「初めて森から出たけど……人の痕跡ってモノが無いね」

「道路すらないもんな」

イザ探そうと思うと、中々見つからないモノなんだねえ。

「でも、人が居ない自然って言うのは………歩きづらいものだなあ」

「確かに。俺今人型だから歩きづらくてしょうがねえや」

「犬型に戻す？そしたら移動は楽になるんじゃない？」

「ウンにゃ、別にいい。大体犬型になったら荷物が持てないじゃねえか」

「それもそっか」

流石に食糧が入った荷物2人分を一人で持つのは辛いモノがある。

そういう事にちゃんと気を利かせる紅は、ホントありがたいし良い子だねえ。

「それにしても、見事に人工物がないなあ」

僕はピッチピチの現代日本人なので、建物も道も無い草原というのは結構珍しかったりする。

こんな感じの自然の平野がありそうなのは、日本じゃなくてニューヨークランド辺りじゃないかな？

以前テレビでやってた最後の侍のロケ地ってソコらしいしさ。

まあこうして地平線が見えそうな平野を見渡すと、所々木々がポツンポツンと生え、

その木の枝には花が咲いていたりする。

気候の感じや咲き具合を見た感じだと、どうやら季節的には春の様だ。

暖かい日差しと共に、どこからかウグイスに似た感じの声が聞こえ



てくる。

「平和だね」

「そうだな　！　かなめ」

「（コク）来てるね、それも複数」

あまり友好的でない気配。やれやれ、見た目は平和でも、あくまで見た目だけって事か。

「よう！坊主たち、景気はどうだい？イッヒヒヒ」

「景気が良いなら、俺達にちよつくら金貸してくんねえかな？」

「でなかったら身ぐるみ金目のモノおいてどっかに失せる。痛い目みたくは無いだろっ？」

「・・・肉・・・」

誰もいない筈の草原で、話しかけられる。

周りを見渡せば、小ざつぱりとした服を着た恐らく強盗か山賊みたいな連中が、

大体6人程こちらを見ながらニタニタ笑いながら近づいて来た。

おお！考えてみれば初めてこの世界の人間との遭遇だ！

でも初めてあった人間が、なんか不潔そうな野郎六人だなんて・・・  
なんか嫌。

「うーん景気は悪いほうかな？お金は無いし持ち物も今身に付けてるモノだけだよ」

ココはとりあえず普通に返事をしておいた。

本当はかなり効果であろうアイテムや、お金らしき金貨を持って来てはある。

だが、道具系は生きるのに必要だし、お金だってこの先町に行くなら必要。

故にこう答える以外は、選択肢は無い。

「そ、そうか。じゃあ着ているもん置いてきな！それで勘弁してやるよ」

「いや、そんな事されたら俺達裸だし・・・」

「僕はともかく、女の子は不味いと思いますよ？世間的に・・・」

ハハ、いくら大草原で開放的になると言ってもストリップは勘弁ですたい。

だが、この答えはお気に召さなかったらしく、盗賊の一人が刃物を抜いた。

「うるせい！つべこべ言つてねえでさっさと脱げ！」

「そんなに脱がせたいなんて…は！もしかしてロリコン！？紅の裸がそんなにみたいのか！？」

「な！なんでそんな話になるんだよ！俺達は盗賊としての仕事をだなあ！」

「そんなこと言って！いくら紅が可愛いからってソレは無いよ！この変態ども！」

なんて連中だ。こんな性犯罪者どもが往来を闊歩して居るなんて！  
許してはいけない！

あと可愛いって言葉に何故か紅が反応してるけど、そこは気にして  
はいけない！

そんな風に思考がソレしていると

「ちょ、ちょっと待て！お頭ならともかく俺はムチムチな姉ちゃん  
が好きなんだ！ガキには興味ねえ！」

「俺もだ！」

「俺も！」

盗賊の一名がそう声を上げた途端、恐らくリーダーと思われる男以  
外がそう叫んだ。

「な？！テメエら！何言ってるやがる？！」

「何って・・・俺らは至ってノーマルだって言ってるだけですぜ？」

・・・って、アレ？なんか仲間割れしてない？

「テ、テメエら！そこ動くなよ！おしおきだああ！修正してくやる  
ぜ！」

「肉」

「は！お頭の異常偏愛に俺達を混ぜるんじゃねえ！」

「なぜだ！あんなに可愛いのに！愛でたくなるだろう！？」

「だ・か・ら！仲間にしてんじゃねえ！俺達まで変態にされちまう  
んだろうが！！」

だいたいペタンの何処が良いんだ！」

「キ、キサマア〜！ゆるさんぞお〜！」

そう言つて、僕らを放置し乱闘を始める盗賊達。

結局、何がしたかつたんだコイツらは？

「何だかしらねえがナイスだかなめ！今の内に逃げるぞ！」

「え？あ・・・うん」

突然乱闘を始めた彼らをスルーして、僕達は先に進む事にした。

盗賊が居るんだから、近くに街道もあるんだろうな。

なんか背後から叫び声やらつめき声が、聞こえてきたりするけど、関係無いから放っておこう。

しばらく歩いていると、また人の気配。だが、ついさっき会ったばかりの気配だ。

「て、てめえら！待ちやがれ！」

どたどたやって来たのはさっきの盗賊連中・・・  
さっきの乱闘の所為なのか、何処となく衣服がボロボロなのがどこか哀愁を誘う。

「いや、何か御用ですか？」

「何か御用じゃねえ！テメエらは俺達の獲物なんだよ！！」

いや、というか。

「人を放置していきなり乱闘始めたのはソツチでしょうが？」

「うっ」

「しかも乱闘の理由があまりにしょぼい」

「グッ！」

「それに何かもう行っていいのかな？ツて感じもしたからね。先に  
行っただけなんですが」

「う、うるせえ！うるせえ！と・に・か・く！もう遊びはこれまで  
だ！

今度こそテメエらをブチ殺しても持ち物を奪うからな！」

そう言うと、彼らはそれぞれ短剣やら斧やら名々武器を構える。

・・・生憎だけど、こっちも武器を向けられたら黙ってはいない  
よ。

「紅・・・」

「解ってる・・・手加減は？」

「殺さない程度ならご自由に。血の匂いがあると魔獣が寄ってくる」

「了解 手加減は面倒臭いんだがなあ」

僕達も思考を切り替えて武器を構える。  
紅はフォルシオンを、僕は手に持ったオークスタッフを構え、相手の出方を伺う。

・・・・・・・・・・・・・・・・と見せかけて。

「ブラスト」 キュオオオン！  
「「「「「な、なにいいい！！！！」」」」

遠距離で放てる魔法を使って、此方から先制攻撃を喰らわしてやった。  
殺さないように魔力調整をしたブラストだけど、相手を脅かすには十分だ！

「しっ」

「ぐぎゃっ!」

紅は僕が放った魔法で出来た隙を突き、タイミング良く飛び出して前列の盗賊の意識を狩る。

・・・いささか剣に力が籠っていたのは、気のせいだと思う。人間相手とはいえ、これなら大丈夫そうだ。

「クソッ!この野郎オオオ!!」

ほぼ全員このやり方で沈められたのだが、リーダー格の男は意外にしぶとかった。

運よく僕の魔法が当らなかった彼は、何と紅の刃を避けて僕に襲いかかろうとしてきた。

恐らく魔法を使ったから、僕が魔法使いであると言う事に気が付いたのだろう。

魔法は結構操作がデリケートだし、近距離では確かに扱いづらい。

僕を射程に捉えニヤツと笑う盗賊の顔が視界に入る・・・そう速いが“視えて”いるのだ。

「イマジンツール」

「げ!そんなんアリかよ!」

「有りだ!」

「即答!?!」

僕はイマジンツールをオークスタッフに発動させた。

短槍状となった杖は、吸い込まれるかのように盗賊の頭を打ち払う。確かに速いが、ソレは人としての動き。

武術家ならともかく、動きも素人で簡単に言えば獣の動きでしか無い。

だが、同じ獣の動きなら、あの森の魔獣達の方が

「ちっ・・・き、しょう」

ドサッ

数倍は早かった。

まさかいきなり杖が光って槍になるとは思わなかった盗賊の頭。

彼は不意打ちの様な状態になり、完璧に中心を捉えた攻撃で10m程、空を飛行していた。

一応刃は潰してあるので、死にはしない筈である・・・多分。

流石に死なれたら怖いので、見つけたら回復魔法を掛けておいてやるう。

それから、わずか数分で死屍累々の山の完成である。

彼らが恐らくは捕縛用に自前で持ってきたロープで、彼ら自身を縛りあげときました。

振り返りにしたという達成感は・・・まったく有りません。

さてと、こいつらどうしてくれようか？

一応これだけ痛めつけたから、コレ以上は追っかけては来ないとはおもっ。

だが念には念を入れて・・・そんな度胸は僕には無いな。



でも、そうだ！人のいる場所の情報くらい聞き出しとか無いと。

「おじさん、ちょっと聞きたいんだけどさ？」

「な、何でございますか魔法使い殿？」

僕はあの自分はノーマルと主張していたヤツに放しかけた。

でもなんか随分おとなしくなったような感じだ。

相手が強いと、肌で感じたからなのか？・・・僕が言える事じゃないけど情けないな。

「この近くに街とかつて無い？」

「へ、へいこの近くには有りませんが、このまま南へまっすぐ歩けば、

一晩ほどでクノルの町というところに行けますあ」

ふーん、結構近いかな？・・・序でに職探しもしておこうかな。

「じゃあもう一つ質問。その町にギルドとかつてある？もしくはそれに似たヤツ」

「ギルドですかい？へい、ありませあ。かく言う俺達も時たま仕事を貰ったりするもんで」

ふーん、あるんだやっぱり。

ダンジョンとかあるし、もしかしたらって思っていたんだけど。

「情報ありがと。ハイ情報料って事で、金貨を上げるから、もう追っつてこない様にね」

「へ、あ・・・あ、ありがとございますー！！」

「ああ、なんかスリーー！！」

なんか一人にだけ金貨をあげたから、盗賊仲間だけで口論になつて  
る。

あ、ちなみに金貨は、あのダンジョンの宝物室でパクったヤツです。  
結構価値ありそうだったから十枚位頂いて置いたんだけど、やはり  
高価なモノだったか。

これは町についたら、役に立ちそうだね。

「さて、のんびり行こうか？」

「おう！・・・ところで町に行つてどうすんだ？」

「とりあえず職探しかな？なににせよ人がいるとこだと、お金が物  
を言うからね」

生きる為に人里で暮らそうと思えば、やっぱりお金は要ることだろ  
う。

そう説明したのだが・・・

「？お金が喋るのか？」

「ち、ちがうよ。ただの比喻表現」

「ひゅ？」

「・・・とりあえず、歩きながら説明してあげるよ」

「おう！わかった！」

うーん、まあ元が犬だから、あんまり知識面は良くないのは解つて  
るけど・・・。

もう少し常識的な事くらいは教えておいたほうが良いかしらん？

知識と言えば、僕も魔道書とかアイテム作成書とかが欲しい。

手作りすればお金はかからないし、経済的にも良いと思う。

当面はギルドでお金稼いで、お金貯まったら拠点となる家でも購入  
しようかなと思つてるのだ。

その旨を歩きながら、なんとか彼女にも解るように噛み砕いて説明した。

「ま、そんな訳で、適当に行こうかなーと思ってる訳」

「ギルドかあ、なんか面白そうだな！」

「紅も当然やるでしょ？」

「おう！やるぜ！面白そうだからな！」

紅はそうどこか好戦的な目で答えた。面白そうか・・・うん、確かにね。

これからの大変そうな生活よりも、僕もそう言った事に対する好奇心の方が強い。

とりあえず楽しんだ方が、楽に生きられると、ウチのじい様も言っていた様な気もするしね。

「・・・ところでさ」

「ん、何？」

「ギルドって・・・なんだ？」

「・・・町に着いたら教えるよ」

「う、すまねえ」

まあ、そんな知識しらない筈だもんね？逆に知っていた方が怖いわ！そんなこんなで、僕達は南へと進路を取った。

この先色々ありそうだけど・・・ま、適当に頑張ろうかねえ。

\*\*\*

あの後歩き続けて、夜は一晩草原で野宿をして一泊。ようやく目的地のクノルの町に到着した。

道中あの一番最初に苦しめられた、あのイノシシ（仮）の親戚みたいな奴らと出くわした。

けど、あの時よりも強くなっているお陰で難なく倒す事が出来た。

一応毛皮とか牙が売れそうな気がしたので、イマジンツールで解体して持っていくことに……。

え？イノシシ（仮）の肉はどうなったか？      ほとんどが僕と紅の

胃袋に消えました。

血抜き出来なくて少し臭かったのがアレだったけど、森の生活で一応なれたしねえ。

食べられない程じゃなかったよ。

さて話を戻すが、外から見たクノルの町は、もろに石造りと漆喰が目立つ西洋風の家が立ち並ぶ町で、それなりの規模の町らしい。

一応検問みたいなのはあったけど、町に来た目的を聞かれただけで特に何かされたりとかは無かったね。

だけど紅みたいなのドワーフ等の亜人種というのは珍しいらしくて、兵隊さんにじろじろ見られたりしたんだけど……それ以外は特に問題も無く町の中に入ることが出来たんだ。

町に入って思ったのは結構活気があるらしいって事。

町の中心には市場があり、客を呼ぶ声が辺りに響いている。

他にも何組かの冒険者らしき御一行とすれ違ったりもした。  
ちなみに紅は市場が珍しいのか、市場にあつた串焼きの屋台の前で  
目を輝かせている。

でもね紅、いかにも物欲しそうな眼で屋台を凝視しないでほしい。  
串を焼いている屋台のおじさんが、どこか困った顔して苦笑して  
るんだからさ。

まあ、それは置いといて

「ギルドかぁ・・・どこら辺にあるんだろう?」

盗賊から聞き出した情報が正しければ、この街のどこかにはギルド  
があるらしい。

しかも酒場を兼任しているらしい・・・何ともセオリーだね。

でも市場が発達しているお陰か、かなり酒場が多いんだよこの町。  
一体どれがどれなんだか・・・地道に一軒ずつ聞いて回るしかない  
かな?

「なあかなめ・・・腹減つたぜ」

「ん? ああ、そう言えばそろそろ昼時だっけ? じゃあそこら辺のお  
店で何か買って食べようか?」

「賛成だ。俺はあの串焼きが食いたい!」

「ん?・・・あゝさつき紅が凝視してたアレかい?」

「おう! 是非とも食べてみたい」

そう言って尻尾をブンブンを振る紅。よっぽど食べてみたかったん

だな。

よし決めた。とりあえず、せっかく来たんだし観光がてら見て回る事にしよう。

序でに道中回収した魔獣の牙やら毛皮やらを売って換金しときますか。

「それじゃ行くのか？」

「よし！俺について来い！」

「って、そんな慌てて……足早いな。僕がお金出さなきゃ買えないでしょうに……」

食事の事となると、俄然足が早い娘だねえ。

とりあえず迷子にならない様に、先の屋台に向かう僕だった。

\*\*\*

先の屋台の串焼きをお昼代わりにして、腹を満たした僕たち。

運良くその店員にギルドの場所を聞き出せた為、その場所に足を向けた。

屋台の店員に言われた場所には、確かに一軒の酒場があった。

周りに酒樽が積んであり、もろ酒場って感じである。

店舗自体が、何故か路地裏にあるのもお約束。

中に入ると意外と……というか大分綺麗だった。

てつきり汚い建物を予想してたんだけど予想外デス。

まあそれでも、目つきの悪い冒険者や絶対盗賊だと思われ人達も、椅子に屯してるけどね。

とりあえず、そう言う人達とは目を合わさないように気をつけて、僕たちはギルドの方のカウンターにいるお姉さんに声をかける事にしました。

「あら〜いらつしゃい〜、あなたたちみたいなお子供が〜我がギルドに何のよ〜う？依頼かしら〜？」

「いえ、依頼では無くて、ギルドの登録ってやっていますか？」

「あらあら〜、ギルドに入りたいの〜？でもでも〜それなりに強くないといけないのよ〜？」

「なんだか随分とホンワカとする喋り方するお姉さんである。話が聞きとりづらい。」

「一応〜来るもの拒まずが〜ウチのモットーだから〜試験は受けられるけど〜。どうする〜？」

「ええ、お願いします。あとこの子も受けるのでお願いします。」

「じゃあ〜二人分の〜試験料って事で〜200Gになります〜」

ちなみにこの〜Gというのはこの世界の通貨の単位の事。

金貨一枚が1000Gに相当し、銀貨はその10分の1、銅貨はさらに10分の1で

金貨の1000分の1の単位となっている。つまり銅貨1枚が10Gとなるんだよね。

更に青銅の1Gを表す小金もあるし、1000G金貨より上の白金の金貨も存在するらしい。

なお、この町に来る前にあの盗賊達にあげてしまったのは、金貨1枚……。たかが町の情報を得るのに1000Gもあげてしまった……。なんでももったいない。価値がわかっていたらなら、あげることはなかったのに実に残念である。でも道理で金貨巡ってケンカしてた訳だよ。

「じゃあ、これをお願いします」

僕はあのダンジョンで手に入れた銀貨を2枚差し出す。お姉さんはそれを受け取ると、カウンターの下から書類を探し始めた。

不思議に思ったんだけど、ああいうダンジョンで手に入れたお金って普通に使えるものなのかな？ どう見てもあのダンジョン遺跡みたいだし、普通そう言うところのお金って古いモノでしょ？ 考えたら負け……。なのかな？

僕がそんなことを考えてる内にお姉さんは書類を発見したらしく、それを一枚ずつ僕たちの前に置いた。

「じゃあこの用紙にサインをお願いしますっく…：かんじゃった」そして舌べらを咬んだらしく、いたひいたひくと唸っていた……。ドジっ子なんだろうか？



書類を書居た後、案内されたのは、酒場の奥の地下への階段。その先には、これまたお約束で闘技場みたいになっている空間だった。

うゝむ、室内闘技場みたいだから、ブラストみたいな射出系魔法は使えない。

とりあえずイマジツールで頑張るしかないかな……。

「君達には一人ずつココで五回戦してもらいます。二回戦まで勝ち進んだらギルドに入れるのでがんばってね？ちなみに三回戦以上からランクアップ審査も兼ねてるから」

相手も強くなるよ？怪我しないよう頑張ってくださいね。で、どっちからやる？」

説明を聞き、僕は紅へと振り返る。

「どっちからにする？紅」

「うゝん、俺どっちでもいいぜ？」

「じゃあ僕が最初にやるよ……とその前に」

僕は紅の肩を抱き、顔のすぐ近くに引き寄せる。

「な、なんだよ」

「しー声大きい（あのな？一応進めても三回戦で止めとくよ？）」

「（な、なんでだよ？強いほうが良いだろう？）」

「（あんまり初めから強いと、危険な任務とかばっかやらされちゃうよ。）」

別に名声が欲しい訳じゃないから、ほどほどで良いんだ。だから

「三回戦位でちょうどいい」

なんせこちらアノ神にチートなステータスにされている。  
僕の場合、下手すると魔法一つでこの町を破壊できるだろう。  
それに、あんまり手の内見せてギルド側にマークされるのも困る。  
そうだったら、生活が面白くなってしまう。

「じゃあそう言う事で頼むよ?」

「あいよ、かなめがそう言うなら仕方ねえさ。」

「ありがとう紅」 なでなで

「ガ、ガキ扱いすんじゃねーよ」

むふふ、でもでも撫で心地がいいから……ついつい撫でちゃう。

「じゃれあいもといゝ相談は終わりましたか?」

その言葉に僕たちは離れる。いけね、このヒトの事すっかり忘れてた。

ちよつと今までの行動考えたら……恥ずかし!何人前でやらかしてんの僕!?

顔が少し赤くなっちゃう……。

「は、はい。僕が先にやります」

「じゃあゝ下の入り口からゝ中に降りてくださいね?」

クスクス笑いが地味に怖いのですがお姉さん?

まあとりあえず三回戦まで勝ち進むぞゝ!

こうして僕は、ギルドに入る為の試験を受ける事になった。

出来れば、あまり強い対戦相手が、出て来ませんように！。

## 第7章（後書き）

どうも作者のQOLです！

今回のお話で、森でのサバイバルは終了です。

かなめ君たちはやっと人間の居る場所に拠点をうつす事になります。

つーか、森の中の洞窟にすむって……俺は無理だなw

一週間もたたないで干物になれる自信があります。

そう言う意味だと、かなめ君達はすごいなあ…。

まあこれからも暖かい目で見てください。

以上、作者からでした。

## 第8章（前書き）

前書き

テスト週間に入る為、

早めに来週の方も含めて投稿いたします

## 第8章

く 出歩いて… 落っこちて・第8章く

前回、ギルドに入る為の試験を受ける事になった僕達！  
やらされるのは魔獣との模擬戦…さてさてどうなる事やら。

「最初の相手はくこちらく！」

ガラガラ音を上げ開いていく鉄の門。  
暗闇の中で何か動き、此方に向かって飛び出してきた。

そのナニカの正体は……………あの森のウサギ……………はあ？

「うわ…これはまた…」

「初戦の対戦相手は魔獣リグビットです」

正直レベルが低いなんてもんじゃない…

多分あの魔獣この身体になる前の僕でも倒せるよ？

だって実質、体のでかいウサギでしかないんだモン。

とまあ、そう言う訳なので…

「はい〜一回戦通過おめでと〜ございま〜す！」

「はは…」

蹴り一発で撃沈です…なんだかおびえていたので気絶させる程度にしときました。

だってなんだかかわいそうなんだモン。

「引き続き第二回戦をおこないます〜。準備はいいですか〜？」

「いつでもどうぞ？」

「ではでは〜次の対戦相手はこちら〜」

ガラガラ音を立てて門が開く…

暗闇から出てきたのは…

「ふーふー…」

「えーと？オークかな？」

「正解です。次の相手はオークさんです」

いやあ、紅以外の亜人族初めて見たよ。

オークはRPGなんかだとゴブリンの次につよい敵だけどね…

あ、ちなみにオークってのは豚の頭を持つ人のことね？

地球の神話の中では豚顔の死神とされる事があるほどの悪人面。

有名な物語だと某指輪物語辺りに出てくるのが有名だ。

まあ目の前のオークは豚面ってよりかは、イノシシ面って感じだけどね。牙生えてるし…。

でも、自分の知識ってほとんどゲームの知識なんだな。今更ながらそう思った。

「それじゃあ、がんばってくださいい。」

僕はお姉さんのその言葉に、戦いが始まると思って身構えた…だけ  
じ。

「……………」



全然襲いかかってくる気配が無い。  
むしろ妙に優しい雰囲気の流れている…顔怖いけど。

そして目の前のオークはしゃがみこんで、床の何かを見つめている。  
なんとなく気になって、いきなり攻撃されても対処できるよう注意しながら、

僕も覗いてみると……アリの行列があるいていた。

あれ？オークって凶暴な種族じゃないの？

そう思つてオークの方を見ると…

「  
」

なんだか楽しそうにアリさんを眺めております。

「ちょっとカワムラさくん！戦ってくれないとバイト料出ませんよ？」

へ？川村さん言つたの？このオーク！？

「フゴフゴフゴ！」

「アリさん見ていたいの解りますけどとりあえずちゃんとやってください！」

お姉さん涙目……しかし、随分と温厚な性格なんだな。

しかもスタッフで一撃を加えたら何故かさつさと倒れてしまった。

コレ後から聞いたんだけど、オークさんは見た目がイノシシ面とはいえそれなりに迫力がある。

だから、大抵その迫力に負けて棄権する人が多いんだそうな。今回はちよつと最初から抜けてる所を見せられちゃったから、その迫力も無駄になってしまったんだけど。

さて、これで一応ギルドメンバーになる資格は得た訳だけど…

「む、先ほどの納得いきませんが、このまま進級試験も受けますか？」

「はい！お願いします！」

さて、気を取り直して三回目…

流石にココからは進級試験も兼ねるから、真面目になる筈！

あ、ちなみにオークの川村さん、いまだに闘技場の隅でアリスさんの隊列見えます。

なんだかそこだけ、ほのぼのとした空気が漂ってるよ…いいのかなあ？

\*\*\*

「ではでは、気を取り直して、第三回戦はじめましょう！」

すでにおなじみになった鉄の鎖がジャラジャラなって扉が開く…そしてそこから出てきたのは…

「リ、リザードマン！？」

「おしい〜！正確には竜の亜人、ドラゴニユートです〜。」

あ、ホントだ、背中にドラゴンみたいな羽根生えとる！成程、ドラゴニユートか〜。

……いやいやいや、どちらにしても手強い事には変わりはありませんからー！！

「ちなみに〜この方は〜ウチのギルドの構成員の〜ギズボンさんです〜！」

「どもーよろしゅうたのまあー！」

………何故に関西弁なんですか？しかも、構成員？！

「……すみません。魔獣だけじゃなかったんですか？」

「いいえ〜魔獣だけでは無いですよ〜？お仕事によつては対人戦もあるんですから〜。」

そーなのかー。

「まっ今回はタダのランクアップ審査や、気楽に試合感覚でいこうやないか！な？」

「は、はあ〜、そうですね」

「なんや？乗りが悪いヤツちゃの〜。おいちゃんかなしいわ〜！」

いやいや、乗りが悪いんじゃないや無くて展開に追いつけないだけです。だって目の前で八虫類顔の人が、いきなり関西弁喋った拳句にハイテンション何すよ？

流石に驚きますって…。

(ホンマは…試合ゆうても死合いしたいんやけどね…)

「え？何か言いました？」

「なんでもあらへんよ」

??…なんだ、あのテンション??

「ではでは、両者準備はいいですかあ？」

「ワイはもうOKやで〜!!」

「僕も良いですよ!!」

まあ、なんじゃかんじゃ言っても…相手は経験豊富な実力者。油断しないようにしないと…

「両者見合って〜!!」

ギズボンさんは大斧を、僕は魔法で強化したオークスタッフを構える。

「ようい〜はじめ〜!!」

お姉さんの気の抜けた声と共に、気の抜けない勝負が始まった!

「ワイからいくでエエ!!」

ギズボンさんはそう叫びながら大斧を振う。

あまり早くなかったので、つい受けとめようとしたその時…

「避けるかなめ!!」

紅が声を上げた…しかし、すでに僕の杖は大斧と接触…

ドゴン！　へ？

気が付けば僕の身体は吹き飛ばされていた…。

ステータスが高いお陰か、ダメージはあまりない…けど。

「オークスタッフ（手製）があああ！！！！」

この世界に来て最初の相棒がボツキリと折れたああああ！！

ああ、お前と過ごした日々…すぐ忘れるだろうけど忘れないよ。

「なんや？もろい杖やなあ…まるでそこら辺の河原に落ち取る枝から造ったみたいやな？」

「……………」

ギズボンさん、大正解。

アレは確かに僕の手作りでございます。材料も河原で拾った枝です。しかし…応強化はしてたのに…武器壊されちゃった…

「武器壊れたんなら戦えへんやろ？棄権しときいや？」

棄権？いやいや…

「いえ、まだ戦えます！」

「せやかて、さっきの杖がいアンさん何も持ってへんやないかい？まさか拳が武器とか言わんよな？」

「まあそれならカツコいいんですけどね？いちおう僕は……」

僕は手に魔力を集中させ収束する。それをイメージした形へと変化させる……

手から光が漏れ出したと思った瞬間、その手には一振りの魔力剣が握られていた。

「魔法使い”なモンで”

イメージツールで造り出した剣：E.T.ソードを振りバランスを確かめてみる。

剣自体魔力の塊なので重さは無く、かなり手になじむ……うん、良い出来だ。

まあ元々イメージで作り上げたものなんだから、手になじまない方がおかしい。

「くくく……クアクアクア！！凄いやんかアンさん！魔法使いやったんか？」

「正確には魔法剣士とでも呼んで欲しいかな？」

「ええわあ、アンさん……これでワイも“ある程度”本気になれるなあ？」

「……へ？」

ギズボンさんがそう言うと、途端周りに息がつまりそうな

程の………闘気が漏れ出した。

「へ、へえええ！？」

目を細め、舌舐めずりをしながらこちらを見てくるギズボンさん…  
ねえ？性格変つてませんか？

「というかアレですか？実力を隠して戦つてお眼鏡にかなつたら本気  
出すつて言う……。」

「ちよつと〜ギズボンさん！本気でしたらだめですよ！！！」

「本気ちやうで？まだ序の口や。それに今位じゃ死なんやろ？…  
多分」

多分つて何！？そんなテンプレート要らんし！

「〜か自重してください！！死にたくないです！！！」

「さてかなめやつたか？続きといこうや…存分に死合しようや  
ないか？」

「…かなり字が違う気がするんですが？」

「ハッ！男なら細かい事気にしたらアカンでえ？ああ、それとな？」

ビュッ！という音と共にかき消えるギズボンさん！？

ちよつ！速過ぎない！？眼で追えないつてどれくらいなのさ！！

「余所見しとるヒマなんて与えへんで？」

驚く僕のすぐ目の前に現れたギズボンさんは、そう言つと大斧で斬

りかかってきた！

「くっ！」

僕はただひたすら全力で横に吹っ飛ぶ事でギリギリ避ける事が出来た。

しかし斧が地面に叩きつけられた衝撃で、たたらを踏んでしまう。放たれる斧の攻撃は相変わらず単調だが、威力がさっきのとはケタ違いだ。

その一撃は種族ゆえの身体能力よって恐ろしく高い。

そして無駄の無い動作、さっきまでが“振う”だとしたら今は“打ちおろす”ってとこだ！

まだ“叩き斬る”じゃないのが幸いなのか？・・・コレが経験豊富な人の力なのか？！

「どうしたあ！防戦いっぽうやないかいっ！！」

「くっ！だあーっ！！」

僕は左手に、もう一つE.Tソードを造り出して二刀流にする。

本来は盾でも出せばいいんだろうけど、どう考えてもギズボンさんの一撃は防げない。

というかあの力だと、出した盾ごと粉碎されるのが落ちだと思う。

今の自分の魔法では、あの斧から繰り出される一撃は防ぐ事は敵わない。

だが、いなしてかわすことは出来ると予想し、僕の持つ人並み外れた集中力と動体視力をフル活用させ、

ギズボンさんが振う斧の軌道を書き換えてみた。



「やるやないか！」  
「な、なんとかなった？」

どうやらその選択は正解だったらしく、下された斧は少しだけ身体を掠ったモノの、何とか回避できた。

しかし、所詮は思いつきの付け焼刃、何とか相手と立ち回る事が出来たが時間稼ぎ程度でしかない。

おまけに、相変わらず人外さんが持つ筋力の強さは凄く、受け流すだけでも一苦労だった。

「言い判断や！正面から受け切れへんから受け流すようにするなんてなあ！」

「ハアハア。それはどうも、ゼア！」

なけなしに反撃を試みたが・・・

「おっと危ないなあ、当たったらどないすんねん？」

「当てなきゃ倒せないでしょうが！」

「それもそうやな」

彼はニカッ！っと（解りずらいけど）笑みをこぼし、大斧を振り回してくる。

「つか何このいじめ？斧の速さと力がどんどん上がってるんですけど？」

おまけにギズボンさんのほとばしる鬨気の量がどんどん上昇中だし…。

「いくで！耐えてみい！！」

「！！！！」

ギズボンさんは突然そう叫ぶと斧を上段に構え振り下ろした！  
これは必殺技的ななにかか！と脳が判断する前に身体が反応し身構えてしまう。

身構えた途端、斧から視認できる衝撃波が放たれた！ま、マジで！？

「う、うわああああ！！！」

防ぎきれなくて、僕は遭えなく吹き飛ばされる。

ええい、ココが屋内で無かったらプラスチックとかの魔法を使うのに！！  
文句を言ってもしょうがないけど、でもなんか悔しい！！

変な事考えつつも、吹き飛ばされて、壁に激突しそうになる。

だが、咄嗟に身体を捻る事で何とか激突したダメージを軽減させる事に成功した。

…代わりに背中しこたま打ったけど。内出血でもしてるのかじくじくする。

僕は背中に走る痛みをヒールウィンドを使ってごまかし、今度はこちらから斬りつけた。

放たれた斬撃は大斧で防がれるが、もっている剣は二本…もう片方で斬り払おうとした。

「な！？堅い！！！」

「鎧いらずの自慢の鱗や！どや？鎧要らんから経済的やる？」

ちょっと納得しちゃった自分が憎い…しかし、どうしてくれよう？  
あんなに堅いとは予想外だ。

ていうか、攻撃力高くて防御力半端無いって……どこの移動要塞だよ？

アレを突破するにはブラスト使えばいいんだらうけど…

流石に闘技場ぶつ壊したらダメだらう？ やり過ぎはアレだし…どうしてくれよう？

でも待てよ？ 堅いつて言うのは反面もろさもつ訳で…だとしたらアノ方法が使えるかも…。

少しかだけ泡吹かせてみようかと考えて、僕はギズボンさんから距離を取る。

剣を構成し直し、術式の中の構成を変化させた。

すると、右手の剣は蒼くなり、左手の剣は紅い色を発し始める。

「なんや？ 随分きれいな色やな？」

「ふっふっふ…今度のは痛いですよ？」

そうやって、僕はジグザグに移動しながらギズボンさんの距離を詰める。

右手を振り上げ蒼い剣を袈裟切りに振り下ろした！

「甘いで！」

当然、振り下ろされる右の剣を防ごうと、大斧を掲げる訳なんだけど…

「な、なんやて！？」

防いだはずの剣は“何事も無かったかの様に”大斧をすり抜ける。そして、斬りつけられた場所が凍りつき、パキパキ音を立てながら白くなっていく。

「“熱膨張”って知ってます？」

そう言つて僕はすでに振り下ろす動作に入っている紅い剣を、凍つた場所に打ち込んだ！

バガンツ！！

大斧は熱膨張に耐えきれずヒビが入り、所々欠けていく…これでは思い切り振る事は出来ない。

この光景に驚いているギズボンさんを尻目に、僕は再度連撃をかけたように、剣を動かす。

驚きによつて出来た隙、時間にして一秒にも満たないソレは、戦いにおいては致命的とも言える。

とてもとても長い時間…故に。

「ぐあああ！！」

「(ちよつと…やり過ぎたかな(汗))」

紅と蒼の斬撃は、彼の胸に吸い込まれた。

自分からやつといてなんだけど…痛そう(泣)

ギズボンさん御免なさい！！！！

さて攻撃を喰らつたギズボンさんだけ…

「ぐうう…効いたわ、ワイバーンのブレス浴びた時みたいやつたわ」

「うわー動かない方が良くないじゃないですか？かなり出血してますよ…」

普通に意識がある。

流石竜の血を引く亜人ドラゴニユート、耐久力が半端無い。

「確かにコレじゃ戦えへんな？解ったワイの負けや…」

「ギズボンさんが〜ギブアップしたので〜勝者イガラシくん〜！」

ボロボロの斧を見つつそうギズボンさんがそう言った。

こうしてなんとか第三戦を突破する事が出来た僕…だけど

「お姉さん、僕も限界なんで…ココでギブアップです。」

「あら〜そうなの〜？もうちょっつと見たかったけど残念ね〜。」

「じゃあ評定は後ほど教えますので〜上の客席にもどってください〜  
い」

体力は平気だけど、正直精神が限界です。

まさかあんなに強い人がいるなんて思わなかった。

この異常な程高いステータスと、手ごわい魔獣との戦いの経験が無かったら普通に負けてたと思う。

それに相手が単発の斬撃だけだったのも大きい。

これで何度も剣戟やらされたら、体力でも力でも体格でもウエイトでも劣る僕が耐えられる訳が無い。

大体僕は魔法使いタイプなんだから、あんな重量級相手に何度も剣劇なんてムリだわさ。

運が良かったのか…はたまた相手の人がそうしてくれたのか…  
でも、とりあえず言える事は……こあかった〜!!!



この後の結果だけ言うなら、紅はギズボンさんに普通に勝って、僕に言われた通り第四戦を見送り、これにて入団審査は終了した。

そして、規定まで勝ち進めていた僕達は無事ギルドに入る事が出来たのだった。

## 第9章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第9章 ↓

ギルドの試験を無事に通過した僕達は、一晩宿屋に泊まったあと、再度ギルドを訪れていた。

建物に入ってすぐ、受付してるお姉さんの所に向かう。

今日は依頼の説明とその後早速依頼を受ける事になっているのだ！  
内心ちよつと楽しみだつたりする。

「おはようございます お姉さん」

「あら～おはよう～朝から元気ね～じゃあ早速～依頼について説明するわね～」

この後は語尾が長いお陰で時間がかかるので、僕が翻訳させてもらう。

要するにギルドとは、ハローワークを兼ねた町の便利屋さんでもあり、

町の警備を担当していたりと、非常に用途が幅広くある。

そして様々な依頼を受け付け、その情報をギルドに登録した人間に



公開し、

掲示板に出されたその依頼を達成できそうな人間が受ける。

依頼主は依頼が達成されれば、報酬を支払うというシステムだ。

ちなみにすべて自己責任であり、仮に依頼中に死亡したとしても、ソレは能力が無かったという事ですまされる厳しい世界でもあるのだ。

損害賠償も自己責任：世知辛いよね。

最も、依頼が達成できなければギルドの誇厳にかかわる為、ギルドでも対策はしてある。

それが、ギルドランクと呼ばれるシステムだ。

内容は実にシンプル、依頼にはギルドランクが設定され、

その掲示されたギルドランクより己のランクが低い人間は依頼を受注出来ないというモノ。

216

ランクもギルド規定により、実力テストに合格しないと昇給出来ない為、ごまかす事は出来ない。

まあ誤魔化したとしても、それは「死に安くなるだけだから誰もしないけどね。

ちなみにギルドランクはSSS、SS、S、A、B、C、D、Eと段階を踏んで存在しており、

上のSランク以上はギルドマスタークラスな為、実質僕達のような冒険者や傭兵の場合、

ABCの五段階評価となる。

今回僕達は最初の入団審査の段階で第三戦まで勝ち進んでいるので、

DかCになるのだが、僕達は無難にCだった。

出来ればBでも良かったらしいが、途中で棄権したのでコレに落ち付いたんだと…。

まあCなら可もなく不可もなくで妥当なところだと思う。

以上が受付のお姉さんから受けた説明の中身だ。

一応これでも随分解りやすくしたんだけど…

彼女が説明した時はコレの数倍は時間が掛ったんだよね…。

せめて語尾を伸ばすのを止めてくれれば…！

やめとこ…：そう言う事を言うもんじゃないよね？

あれも、まあ個性な訳だし…。

「と、いうわけなの。わかった？」

「はいわかりました」

「じゃあじゃあ、あそこの掲示板から出来そうな依頼を見つけてきて、私に渡してね」

言われたとおり、掲示板の前に立つ。

「かなめ、どんな依頼があるんだ？俺まだあんまりこっちの字読めねえんだ。」

「えっとね…たとえば…【子守】仕事内容は忙しいから子供の世話をしてくれ、」

ギルドランクはE…報酬は1000Gってヤツとか…」

「却下…子守はした事がねえ…つかガキは嫌いだ…」

紅が苦虫を100匹噛みつぶした位に顔をしかめている。  
嫌な思い出でもあるのかな？

「じゃあ、こっちは？【農作業】芋の収穫」

「却下」

「【猫を探して】」

「却下、猫とは相性が悪い」

…まあ元犬だしね。

この後、いろんな依頼を読み上げたんだけど、あまり良いのが見つからない。

それにこの依頼ってヤツもほとんどが雑用系が多い。

まあそりゃそうだ。庶民の依頼がほとんどだからね。  
地域密着型ギルドでも目指してるのかな？

「…【実験台がほしい】」

「見るからに怪しいから却下」

内容を見ると、魔法の実験台になってくれだつて…いや、怖いから無理ッす。

「後は…【ゴブリン討伐】【大ネズミを倒して】【畑を荒らすイノシシをぶっ殺して】とか」

「……真ん中ので良いんじゃないか？最初の依頼だし、俺達戦う方が向いてるだろ？」

何だかろくなのが無くて、いい加減あきてきた紅が、ちょっと投げやりに答えを返してきた。

ちなみに、この3つの依頼：ギルドランクは共にDで、今までのがほとんどEだった事を

考えるとちよっと難易度が高い。

この掲示板にあった僕たちが出来そうな依頼は、とりあえずコレで全部なので

僕は【大ネズミを倒して】の依頼書を掲示板から外した。

「じゃあコレやろう。魔獣倒すのは慣れてるしね。」

「おう」

そう言っつて、僕は受付のお姉さんの所に戻った。

「お姉さんすいません。これをお願いします」

「はい、承りました。コレが依頼人のいるとこの地図だから、詳しい事は依頼人からきいてね」

「解りました。」

「あとあと、イガラシくんたちなら大丈夫だとおもうけど、依頼人

に失礼が無いようにね」

それじゃあ初めてののいらい頑張つてね」

そう言つてホンワカと見送つてくれるお姉さん。

いいね癒し系つてヤツかな？何だか心がいやされるよ。

問題はいまだに名前が解らないつてことかな？まあ追々解るだろうけど…。

「紅、依頼人の所に行くよ。準備良い？」

「もう出来てるから早いとこ行こうぜえ」

ありゃりゃ…あまりに暇すぎて紅がお餅みたいに垂れてくら。

とりあえず渡された地図を頼りに、依頼主の元に向かう事になった。

## クノルの町・倉庫区画

依頼人が居るのは、町の倉庫区画と呼ばれる場所だ。

クノルの町は市場が盛んな為、必然的に品物を補完する倉庫も増える事になる。

その為区画整理を行った際、ソレらを集めた区画が倉庫区画となつたらしい。

現に周りにはレンガ造りの倉庫ばかりが建ち並び、家の様な建物は数えるほどしかなかった。

依頼人が居るところは、その倉庫区画の一角にある、一際大きな倉庫が目印らしい。

それなりに区画整理が行き届いていたので、すぐに目的の場所に来る事が出来た。

「かなめくまだ着かねえのか？俺もう歩くのに飽きたぜ」

彼女はどうかやら何もしないというのが苦痛らしい。

コレはさっさと依頼人見つけないと、何かしでかすかもしれん…気をつけよう。

「もうすぐ…というかもう着いたよ？」

「ここか？このどでかい倉庫が依頼人が住んで居る場所なのか？」

「正確には職場何ただけだね。ココで倉庫番をしている人が今回の依頼人さ。」

「まあ…俺は暴れられれば問題はねえ…早いとこ挨拶しちまおうぜ？」

「だね」

彼女がコレ以上機嫌を崩さない内に、依頼を受けますか。

\*\*\*

依頼人が居る倉庫に入ったんだけど…中はかなりすごい。

大きなコンテナから、木箱まで所せましと並べられ、その上をガン

トリーレーンが行き交い、コンテナを運んだび出したりしている。  
地球の倉庫の中とそんなに変わらない設備だ。

そして何より凄いのが、ガントリーやその他の動力が、全て魔力で  
賄われている事だ。

一応魔法使いの知識や能力はあるので、場の魔力の流れがわかるん  
だけど、

ほとんどの機械製品から魔力の反応があるのが解るんだ。

魔力というのは恐ろしく効率が良いエネルギーだ。

何せそこらへんのどんなものにも含まれており、尚且つ害がある事  
も少ない。

魔法陣とかの術式を書き込むだけで、魔力の流れを操作する事が出  
来るから、汎用性も高い。

ある意味理想のエネルギーなのだ。

地球で言うところの電力が、こっちでは魔力なのかも知れない。

まあ魔力の方が利便性・汎用性共に高いけどね。

でも流石異世界。

こっちは魔法の利用法もあるんだねえ。

ゲームとかだと魔法は主に攻撃とかにしか出ないから、

こっちは言った庶民の力になってるのは珍しく感じられるんだ。

カルチャーショックってヤツですか？

とりあえず、機械の原理とかは気になったけど、依頼を先に遂行し

ようと思い、  
作業している人たちから依頼主の倉庫番の人が何処に居るのか教えて貰った。

どうやら依頼人は事務室に居るらしい。

僕たちは教えられた通りに事務室の前に行き、扉をノックしてから中に入った。

「すみません。ギルドから依頼を受けたモノですが」

「ああ、すみません。もうちょっと待つてください。この書類にサインするだけですから…っ」と

依頼主は20代くらいの線の細いお兄さんだった。

「これで良しっとな…ん？ああ、お待たせしてすみません。ギルドの方ですね？」

「はい、今回依頼を受けギルドから派遣される事になった五十嵐かなめと申します。

こちらは相棒の紅です…紅、挨拶して。」

「…どうも」

「はじめまして、私はこの事務と倉庫番を担当しているジョン・コフィーと申します。よろしく」

倉庫番のお兄さんは、見た目通り物腰が柔らかな人だった。

とりあえず、何故依頼を出したのかの理由と、何をすればいいのかを聞く事にする。

\*\*\*



「……つまり、地下倉庫に巣が？」  
「はい、とりあえず封印したんですけど、考えてみるとアソコが使えないと業務に差し支えが…」

話を要約するところだ。

以前から地下倉庫に置いておいた食料品が、ごっそりと消えてしまった事件が起こった事があつたらしい…  
最初は泥棒かと思っていたが、鍵のかけられた倉庫から出た形跡は無く、どうやら泥棒では無い事が解る。

しかし、いまだに犯人は特定できず、倉庫の持ち主や食料品の持ち主たちは頭を抱えていたらしい。  
そんなある時、作業員の一人が地下倉庫にて、何かの生き物が居るのを目撃する。

四本足だったことから魔獣では無いかとの憶測が立ち、  
そうならば討伐して貰おうという展開になったんだそう。

でもあれ？って事はつまり…実は大ネズミではない？その事を  
ジョンさんに尋ねると…

「便宜上名称が必要でしたので、四本足で倉庫に出そうな生き物と言ったら…」

ネズミ位しか思い浮かばずつい…」

だそうで…困るなあ、ちゃんと相手の情報位把握しといて欲しい…。

でないと言計な手間が増えちゃったりするんだからさ…。

「いや、すみません…。」

謝られてもしようがないんだけどね。

だがこれもお仕事、ちゃんとやりますからご心配なくという旨を伝えると、

僕は紅をつれ問題の地下倉庫へと案内して貰った。

「ここです」

案内されたのは、大きな搬入口を鎖で雁字搦めに封印を施した扉の前だった。

でもなんだろう？このとりあえず塞いどけ的な封印の仕方…。

簡単に言うと、扉の取っ手にグルグルと鎖を巻いただけ…雑なものも程があるよ！

ちなみにその事をジョンさんに尋ねると…

「急いで塞いだモノで…」

と苦笑しながら答えてくれた。ふーん、そーなのかー（もはや投槍）

いい加減真面目にやろつ…とりあえずは、このこんがらがった鎖をどうにかしないと…。

「それじゃあ…いくよ?」

「おう」

「お気をつけて…無事に戻ってこられる様祈っています」

何気に不安を煽るような事を言っ戻って行くジョンさんを尻目に、僕たちは数十分かけてやっと鎖を解いた扉に手をかける。

……というか、この扉を開けるのに一番手間取った様な気がするの  
は何故だろう?

「セーノ!」

2人で力を込めると、ギギギという金属がこすれるような音を立てて扉が開いて行く。

うーん、重い!立て付け悪いのかな?それともコレがデフォルト?

「中…暗いな?」

「とりあえず入り口付近にはいないと…」

中は薄暗く、いかにも何か出そうな感じだった。

「サーチ…」

魔力波を飛ばすけど……反応は無し、どうやら見える範疇にはいないらしいね。

「奥に行くけど、一応扉は閉めるよ?」

「ああ、逃がしたらまずいからな」

中に入った僕たちは、また2人あわせて扉を閉める……………やっぱり重いなコレ。

倉庫の中は、かなりの規模で天井が高めで床の面積も広く、軽く一軒家も入りそうな位の広さだ。

扉を閉じてから数日位なので、埃とかはあまりない。

無造作に積まれた木箱、酒瓶酒樽、何かのコンテナ…色んなモノが置いてある。

少しくらい貰ってもばれないだろうか?と頭の片隅で思ってしまっただのは僕の中の秘密だ。

「手分けして探そう。ヤバかったらお互いを呼ぶ事…いいね?」

「了解だ」

「……あと解ってるとは思うけど、ココの貨物とか傷つけたらダメだからね?」

「……………努力する」

「努力は……まあいいか…最悪敵がやった事にすれば良いし。」

少しくらいモノが壊れてもしょうがないよね?あと少し位モノが消

えても…え、犯罪？

大丈夫大丈夫、見られてなければ犯罪は成立しないんだよ

………ちよっと思いが怪しい所にズレたけど、探索を続行する事に  
した。

\*\*\*

しかし、倉庫だけあって色んなものが置いてある。

どうやら、モノによって種分けがされているらしく、現在僕が探索  
しているところには、武器屋に降ろす為だろうか？沢山の槍や剣等  
の武器達が

縄でひとまとめにされて、壁に立てかけてある。

ちよっど解析してみたけど…全部大量生産品だった。

しかし、それにしても、置いてある武器の種類は地球の製造年代か  
らしたら見事にバラバラだ。

グラディウスとブロードソードがセットで置いてあったり、サーベ  
ルとシャムシールが一緒にしばってあったりとか……いいのかなあ？

でもまあ、使えるならいいか…僕にはあまり関係ないしね。

武器にはどれにも長所短所は存在得する訳で、例えば素早い攻撃を  
出せるエストック等の剣は

斬る事には向いていなかったり、全長が2mを超えたりするトウ・  
ハンド・ソードは逆に重すぎで通常の人間には扱えなかったりする。

もつとも、魔法とかの不思議パワーがあるこの世界じゃ、そんなこ  
と関係無いかもしれないけどね。

とりあえず武器はもついいや、別のところに行こう。

\*\*\*

「今度は雑貨系かな？」

棚に綺麗に陳列されているのは、鍋、大鍋、フライパン、包丁、食器類、その他エトセトラ…

考えてみたら、僕達まだ住むところ決まってるなあ…

宿屋暮らしでも良いけど、宿代がもつたないしね…。

最悪あの森のダンジョンの中の宝物庫から金貨を持ってくれば良いんだけど…

正直往復するのがめんどいです。

とりあえず後でギルドのお姉さんに、借家って無いのか聞いておこう。

そんな事考えながら次に行こうとしたその時…

「かなめ！ちよつと来てくれッ！！」

「っどうした！紅！！」

紅が僕をよんだ！

「兎に角早く来てくれ！」

「解った待ってる！」

僕は紅の声がした方向に向かって急いで走る。  
沢山の柵や木箱を飛び越え、豆が入っている袋のわきをすり抜け、  
筋肉たるまな彫刻を横目に走り抜ける！

ようやく紅が居る所に来た僕が見たのは…

「見ろかなめ！このお肉達 うまいぜコレ」  
「……………おバカ。」

紅はココにあつたお肉屋に降ろすであろうベーコン肉の塊や、ソー  
セージ等に齧り付いていた。  
はは…そう言えば別れて探そうって言った時、妙に鼻がぴくぴくし  
てたけど…コレの所為か…。

「まったく…勝手に食べちゃだめだよ！」

「いいじゃねえーか少しくらいよお？」

「はあ…あのねえ？勝手にモノが無くなったらジョンさんにバレち

やうでしょう？依頼中に僕たちが原因で関係ないモノ壊したら、  
その費用僕たち持ち何だから気をつけてよ！」  
「わあっただよ…」

全く…目を離れた途端コレなんだから…  
しかし…本当になんて言い訳しようかな？

この時の僕は紅が仕出かしたコレをどう良い訳しようか考えて  
いた。  
しかし、得てして状況は進むらしい。

コトツ…

「…!!!!」

「聞いた？」

「ああ」

「扉…閉めたよね？」

「ああ、だからココには俺達と敵さんしか…」

カリカリカリカリカリカリカリ…。

やや暗い倉庫の中に響く謎の音…  
そして、僕達はその音の正体をすぐに知る事になった…。



## 第9章（後書き）

次の更新は2週間くらい開けます。

## 第10章

↳ 出歩いて…落っこちて・第10章↳

\* 前回のあらすじ

初めてのギルドの仕事で討伐任務をする事にした僕達。  
依頼を受けた倉庫の中を探索していた所、なにかの気配を感じ取る。  
僕たちはその正体を探るべく、モノ音のする方へと向かっていた。

\*\*\*

カリカリカリカリカリカリカリ……。。

何処からか聞こえるモノ音…

カリカリカリカリカリカリカリ……。。

正体が解らない為、妙に恐怖心が出てくる……。。

カリカリカリカリカリカリカリカリ……。

段々音が近くなつた様な気がする……。

カリカリカリカリカリカリカリカリ……。

こちらも相手が逃げないように……なるべく音を立てずに……

カリカリカリカリカ「カリカリうつせええ!!」

ちよつと紅!気付かれちゃうじゃないか!!

「良いんだよ!どうせ倒す事に代わりねえんだからな!」

「ちよつ!ちよつと紅!っもう!!」

僕と彼女は音のもとに走って行く……そして。

「見つけたぜ……」

「ま、まさかこいつが……騒動の根源!？」

僕たちが向かった場所で見たモノ……………

それは。

「クルルウ〜」

「お！結構可愛いなコイツ？」

「……………拍子抜けだぜ……………たく。」

まっ白な…本当に雪の様に白い毛並み…四本足の生き物…。  
ソレは全身雪の様に綺麗な毛並みと、2本の角が生えたトカゲの様な生き物だった…。

う…んと？何だろコイツ？

とりあえず向かった先の野菜とかが置いてある棚の辺りに居たコイツ。

まっ白い体毛がまぶしい体長20cm位の謎の生き物さんだ。

コイツを見つけた時は戦うのかと思ったんだけど…

「ククルウ！」

「おいおい！ロープを噛むなよ？ほらリングあげるからな」

何故か懐かれました…何故？

とりあえず、コイツ以外何か居ないのかと思い、この後も徹底的に探したんだけど…

この謎の生物がいた痕跡以外何も認められなかった。

「なあ、かなめよお？」

「何？」

「やっぱりコイツが犯人かあ？」

うーんどうなんだろう？

とりあえず目撃証言にあった四本足って言うのと、食料品を食べていたってところは一致するんだよね。

「うーん、調べたけど…コイツ以外生き物がいた形跡も無いしなあ

…

「じゃあ犯人はコイツに確定か？」

「だろうね。」

とりあえず白いそいつに目をやると…

「く〜？」

首をかしげてこちらを見返してくれました…やべえ…ちょー可愛い。でもコイツいったいどこから来たんだ？

まあ良いか…原因も解った事だし、とりあえずジョンさんに報告しないかね。

そう思った僕たちは再びあの重い倉庫の扉を開いて、地上へ続く階段へと足を運んだ。

この白い子を肩に乗せてね！！！！あゝなんか癒されるゝ

\*\*\*

### 事務室

事務室の前に来た僕は扉をノックする。

コンコンッ！

「開いてますよ。」

「失礼します」

僕はジョンさんがいる事務室に足を踏み入れる。

紅は外で待つて貰う事にした。詰まんない話になりそうだしね。

「ん？ああ、イガラシさんでしたか。首尾はどうでしたか？」

「あ、いやまあ…犯人を見つけたつちゃあ見つけたんですけどね？」

その時僕の服の中から何か顔を出した。最初肩に乗ってたんだけど、

何時の間にか服の中に入り込んでたんだ。マジ可愛くね？

「く〜！」

「おや？コレは…ハニーヴァイスの子供じゃないですか。珍しいですな？」

どうやらコイツはハニーヴァイスと言う種族らしいね。

まあ確かに小さくて白い体つきだし…良い名前だと思うな僕は。

「ハニーヴァイス…ですか？」

「おや？イガラシさんは知らないのですか？」

「ええ、お恥ずかしながら…遠いところから流れて来たものですか？」

とりあえずソレらしい事を言っておけば大丈夫な筈！

それに遠いところから流れて…って言うか流されてだけど…ってのはあながち嘘じゃないしね。

だって僕、ついこないだこの世界に来たばかりなんだもんよ！

ある意味突然の島流し！だから知らない事があってもしょうがないんだもん！

恥ずかしいから口には出さないけどね！

「そうなんですか？まあ確かにハニーヴァイスはこの辺の自然の中にしかいませんから、

他の地域から来た人ならば知らなくて当然でしょう。」

そう言うてにつこり微笑んでくれたジョンさん……ええ人や。

この後、このハニーヴァイスについて詳しく教えてもらった。  
何とコイツ毛皮ふわふわの癖してドラゴン種の一つなんだって！  
おまけに大きくなっても普通は大型犬サイズ。

良くて馬（ポニー程度）くらいにしか成長出来ない種類らしく、  
その大型犬サイズに至るのにも、大体数十年はかかるのだとか…。  
気性の激しいドラゴン種にしては珍しく、気は優しく力持ち！  
ペットとしても家畜としても優秀で、おまけに空も飛べる……らしい。

でも…ドラゴンねえ？

「くう？」

なんとなく、このハニーヴァイスとかいうドラゴンの一種であるとか言うコイツの方を見てたら、  
首をかしげて“どうしたの？”ってな感じな仕草をしてきました。

「何でもないよ」

そう言うて頭を撫でてやる。

「くう〜」

すると、気持ちがいいのか眼を細める仕草をしてきた…。  
あれれ？なんだかホワワ〜ンとした気分になって来たよ？



「おやおや、随分懐かれていますね？」

「そうなんですか？」

そう返しながら撫で続けている僕…うん、フワフワな毛が心地いい

「ええ、普通はかなり懐かないと、頭なんて触らせてはくれない生き物なんですよ？」

ほら、こんな風に…」

そう言って手を伸ばさずジョンさん。

ハニーヴァイスは迫ってくる手を見ると、スイツと頭を逸らして手から逃れようとする。

「…つと、あんまりやると嫌われますからね。」

とまあこんな具合に普通は頭とかは触らせてはくれないんですよ。

「

ちょっと残念そうなジョンさん。

まあ気持ちは解るかな？この子可愛いしね…。

とりあえずハニーヴァイスが可愛い生き物という事が解ったので、そろそろ話題を元に戻そうと思う。

「あのう、ジョンさん。この子どうしましょうか？」

そう僕が言つとジョンさんはうんという感じで思案顔になった。  
はて？

「うん、飼い主がいないと普通なら処分しなくちゃいけないんだけど…参ったなあ。」

その時のジョンさんの顔を見て、何を思ったのかは大体理解した。

ハニーヴァイスを処分……要するに殺すってことだけど、この真面目な青年は多分そういった事はしたくないんだと思う。

だけど、社会って言うのは残酷でコイツの事殺したくは無くても、すでにコイツは人間のモノに手を出してしまっている。

俺のモノは俺のモノ、お前のモノも俺のモノ

そう言う某ガキ大将の様な考えという訳ではないけど、それでも社会的には倉庫の中の果物を食べてしまった“害獣”として扱わなければならないし、倉庫を運営する立場から見てもそうしなければ示しが付かない。

出会ってからまだそんなに経って無いけど、彼は仕事に真面目な青年である事は見て取れた。  
そんな彼が頭を抱えるという事は…彼はとても優しい人なのだと思う。

だから

「あの、なんでしたらこちらでそのハニーヴァイスを処分しましょうか？」

「あ、いや…」

つい、口を出してしまった。はあ、僕も…ある意味甘いのか

もしれないな…。

「そう言うのの処理も…仕事の内ですから…」

「そう…ですね…解りました。お願いします…。」

ちよつと悲しそうな顔をするジョンさん。

仕方ないと思う。

だって彼は“大人”なのだから…でも。

「もつとも、僕は動物に好かれる質なので…」

“似た様なハニーヴァイス”が懐いてくるかも知れませんがね。

「…!!…ありがとう」

だからこそ…僕は手を貸してあげたいと思ったんだ。

実は正直な話こんなペットが欲しいと思ってたんだ

え？紅は違うのか？いやいや、彼女は“相棒”ですからこれまた意味が違うんだよね。

ペットは愛でる為にあるのだ！それがジャスティス！こんなかわいい子殺すなんてできません！

だから僕が“貰う”という処分をします。これでいいのです！

一応原因を取り除いたって事だから多分問題は無い筈だもん。多分。

後で紅になんて説明しようかな…。

\*\*\*

「ただ今戻りました！」

「あら〜？イガラシ君ベニちゃん、もうお仕事おわったの〜？」

あの後僕は紅と合流して、仕事が終わった事を伝えるにギルドへと足を運んでいた。

「ええ、討伐対象は大ネズミでは無くてハニーヴァイスの子供でしたけどね？ハイ書類」

「あら〜そうだったの〜？たまにあるのよね〜そう言う事〜。じゃあ今回の報酬ね〜？」

僕はお姉さんから渡された報酬の5000Gを鞆に仕舞った。

……結構重いな…コレ。

「ところで〜イガラシ君の肩に乗ってるのって〜？」

「ああ、この子ですか？帰る時に心やさしいお兄さんに託されたハニーヴァイスの子供ですよ？」

「あら〜かわいい〜 名前はあるの〜？」

「名前…ですか？」

そう言えばこの子の名前決めて無かったっけ？

う〜ん、何て名前にしようかな？

「えと、実はまだ決まっていないますよ。

だから後で考え「あらあら〜じゃあ私が決めてもいい〜？」………え？」

何故かキラキラと期待を込めた眼でこちらを見てくる受付のお姉さん。

「えと、別に良いですけど…」

「じゃあねー、えっとー、この子はまっ白だから」

「シロとか安直なのは無し…ですよ？」

「……………」

「つてオイ！当たってたのかよ！」

「まあ、初見で思いつく名前なんてそんなのだよね。」

「この後お姉さんとハニーヴァイスの名前をどうするかで長い事話し合っていた。」

「あまりに話しあいがあったのか、  
今まで黙っていた紅がハニーヴァイスを頭に載せて不満顔で僕に話しかけてきた。」

「なあ、まだ終わんねえのか？」

「あ、ごめん紅。この子の名前が決まらなくてさ」

「ん？チビの名前か？んな事今決めなくてもいいだろうが。それに  
もういい加減夕飯食いに行きてえぞ！」

「くろう…」

「見る！チビも腹減ったあつてよ！」

「見ると僕の頭の上でクターとしているハニーヴァイスの姿が…あり  
やまあ。」

「くろうん、じゃあ紅、お金上げるからこの子連れて先に何か食べるに  
言ってくれないかな？」

「解った。それじゃあ俺は市場の屋台んどこ行ってるからな！行く  
うぜチビ」

「くろう…」

ハニーヴァイスは紅に呼ばれると彼女の肩に飛び乗り、一緒にギルドから出て行った。

「さて、何て名前にしましょうか？」

「……あのね？私いま思ったんだけど」

「はい、なんですか？」

「もうあの子の名前は“チビ”ちゃんなんじゃないかしら？」  
「……あ。」

おーのー。今までの苦労は一体…なんなの？

\*\*\*

紅達を探す為、市場の屋台を回っていると、四軒目あたりで紅達を見つけた。

紅は屋台で買ったと思われる串焼きを食べ、

チビは多分市場で買ったとおもうメロンみたいな果物に首を突っ込んでもしかたもじゃ食べていた。

「ん？よう！早かったじゃねーか。どうだ？チビの名前決まったのか？」

僕を見つけた紅が話しかけてくる。

うん、決まったよ？確かにね？

「その子の名前はチビだよ」

「は？チビはチビって名前にしちゃったのか？アレだけ悩んでソレかよ…つまんねえの」

「……はあ、あのね？君がこの子の事チビチビって言ってたでしょ？」

「そういやそうだったな」

「ソレの所為でチビって名前前で定着しちゃったの！見ててみ？おいチビ」

「くうん？」

チビと呼ばれてこっちを向くハニーヴァイス。

どうやら“私のなまえはチビ”とすでにインプットされている模様。

「……………ね？」

「ゴメン。なんかゴメン。」

「良いんだけどね…良い名前つけようと思ってたら意外な伏兵に先を越されたけど…」

別に気にしてないさあ……………ハア」

「めっちゃくちゃ気にしてんじゃねえーか…」

「なんかいった？」

「うんにゃ…なんでもねえ」

とりあえず、僕らの仲間にハニーヴァイスのチビが加わった。

「と、とりあえず！コイツの名前も決まったんだし飯でも食おうぜ！」

「うん、そうやね…ところで君さっきから食べて無かった？」

「アレはオヤツだ」

「……………さいですか」

さすが紅、相変わらずの食欲だなあ。

コレだけ食べても太らないって当りが周りのダイエットに励む女性たちからひんしゆくを買いそうだ。

僕はチビを肩に乗せ、紅と一緒に他の屋台に向かう。  
はぁ、それにしても…クスン…せっかく良い名前あげようと思って  
たのになぁ…残念。

今日もこうして一日が過ぎて行っただけでした。まる。



## 第10章（後書き）

後書き。

どうもみなさんお久しぶりです。

ようやくテストあけたんで、投降もとい投稿を再開します。

という訳で今回はマスコットキャラとしてチビ竜のチビが登場！つ

ーかまんまやんw

自分のネーミングセンスのなさに脱帽したわw

しかし、どうしてくれようかコイツ…。

出したのは良いんだけど、予想以上に空気になりそうな気がする。

……ま、まあ今後の展開でどうとでもなるさ……多分。

以上グダグダなQOLからでした。

## 第11章(前書き)

- ・今回やや短め

## 第11章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第11章 ↓

暗い… 暗い… 水の中…

身体が沈む… 沈み込む…

落ちて行く… 落ちて行く…

何処までも続く… まどろみ…

ふと感じる… 明るい光…

徐々に大きく…大きく…

今度は浮かぶ…浮き上がる…

そして僕は理解する…“ああ、目覚める時間だ”…と。

窓から漏れる朝日を感じ、僕は目が覚めた。

\*\*\*

うん、ぐつどもんにん…

あたまがまだねむたいよ…うにゅ。

とりあえず顔洗おう…。

よし！顔を洗い頭がはつきりしてきた！しかし、やっぱり中世クラ

スなんだよね〜。

ん？やあ皆さんこんにちは。

今僕たちが居るのは、クノルの町一番の宿……では無く、ほどほどのお宿でございます。

ところで何が中世クラスかというと、水道とかが無いってところなんだよね。

井戸はあるんだけど、家の中に引いて無いって言うのかな？

だから顔洗うにしても、洗面器に組んでおいた水差しから水を入れて使うって感じ。

昨日の倉庫の中が結構な技術力がありそうな感じでビックリしたけど、

どうやら庶民の生活様式はそれほどのレベルでは無いみたいなんだよね。

まあ、電灯の代わりにランプとかは？

所謂ファンタジーではお約束な“魔力のこもった光る石”を利用したエコランプだったのは面白かった。

魔力があればある程強く光りるらしく、魔力持ちの人が偶に充電？

充魔？すれば良いらしい。

面白い技術だよね〜。

さて、雑談は置いておいて、そろそろ紅とチビを起さないよ。

\*\*\*

僕は隣ベッドに寝ている一人と一匹を起す為に近づいていく。  
言葉がわかるのと、昨日飯を食べて親交を深めたおかげなのか、意  
気投合したチビと紅。  
仲良く一緒のベッドで眠っております。

チビを抱き枕にして眠る紅のあどけない寝顔は、見る人が見れば涎  
モンだろっけど…

「朝だよ紅、チビ。そろそろ起きてご飯食べにいこうっ。」

あいにくと僕はその気が無いので普通に起します。え？つま  
んない？何が？

「あふあふ……おはよう……かなめ」

「くう。」

「はい、おはよう。」

まだ眠たいのか眼をこする紅と伸びをするチビ。平和だねえ。

「とりあえず朝ごはん貰ってくるから、紅は顔洗ってきなよ？一応  
人型なんだしさ」

「うう、メンドクせえから犬になる。」

「ダメだつて…まだ自分で制御出来てないでしょうが」

「けっ、人間つてのはどうしてこうめんどくさい事が好きかねえ？  
顔洗わなくても死なないだろうによ」

「はいはい、ぶつくさ言わないで顔洗っておいでよ？口元に涎付いてるよ？」

「……わあったよ。」

そう言いながら洗面台に向かう紅。

まったく、なんだか保父さんな気分だよ。

でもそう言った意味なら獣姿は楽だよねえ。

チビなんかもう自慢の白い毛繕い終わらせて、僕の肩に乗ってるしね。

「くう？」

「ん、何でもないよチビ」

「くーくあう」

「はいはい、撫でろってね。」

「くー」

チビが頭をすりよせて来たので、撫でてやると眼を細め気持ちよさそうにしている。

なんとなくだけど、僕もチビの言いたい事はわかるみたいだね。

お？紅も顔洗い終えたみたいだし、とりあえず外に繰り出しますか！

\*\*\*

朝食を適当に済ませ、とりあえずギルドに向かう。

いやーやっぱり自分で朝食造らなくて済むのって楽だね。

今まで自分で材料とって、自分で調理して食べてたもんね。

誰かに作って貰えるのがこんなに楽だなんて…癖になりそうだよ。まあそれは置いて、今日は依頼も受けるけど、受付のお姉さんにとある事を聞きに来たんだ。

「おはようございます」

「ああ、イガラシ君おはようございます。紅ちゃんとチビちゃんもおはよう」

「おう、おはようさん」

「くー！」

知り合いにはマズ挨拶！人間関係の基本でござる！！…なんてね。

「ん？なんやアンさん達、随分と早い時間にきよるんやな？」

「あ、ギズボンさん、おはようございます」

「おはようさん！」「くー！」

「はい、おはようさん。今日も元気に稼ごうや！」

そう軽い感じで掲示板に向かうギズボンさん。

でも本当、改めてみるとスゴイ世界だよなえ。

人外な人が普通に仕事してて、おまけに関西弁………そこはスルーしとこう、それよりも用事用事！

「あ、お姉さん、聞きたい事あるんですけど？」

「あら？なあに？恋人は募集中よ？」

「いや、聞きたい事違いますって…」

まあ気になる事でもあるんだけどね。

つて紅！何で睨むのさ！？え、知らない？何で怒ってんの？

……ゴメンあやまるから足踏まないでください…地味に痛いっす。



「いえ、聞きたいのはお金を預けられる所を教えてください」

「いや一回の依頼でコレだけお金が手に入ったのは良いんですけどね？正直かなり重たいものですから、金貨だから余計に…」

「僕がそう言うと、受付のお姉さんは、驚いた表情で…」

「え？もしかして今まで〱ギルドにある保管庫の事〱知らなかったの〱？」

「ええ、初耳ですけど？」

「だってこちら昨日採用になったばかりの、一応ペーパーの新米ですよ？」

「まだこっちのシステムなんて解らない事ばかりです。」

「あら〱御免なさいね〱？保管庫の事〱私が伝達してなかったのね〱？」

「ええ、ところで保管庫ってなんですか？」

「そのままの意味よ〱？貴重品を入れる場所なのよ〱一応ギルド内にあるから〱盗難は絶対に出来ないし〱」

「絶対の出来ないんですか？」

「そうよ〱？皆の大事な財産が入ってるから〱下手に盗もうとしたらギルド全体を敵に回すんですもの〱」

「誰も盗みなんてしないわ〱」

「ああ、確かに盗み辛いですねソレは。」

「一応ギルドには腕っ節が強い人たちがばかり集まるのが常だから、幾ら盗人でもココには入り辛いわ。」

「……バトルジャンキーも多そうだしね。」

「じゃあ、保管庫って僕も利用できますか？」

「うん、できるわよ。だってもうイガラシ君もこのギルドの一員な訳なんだし。」

「じゃあ登録するから。ちょっと待っててね？少し時間掛かるから。また後で来てね？」

そう言うとき彼女はカウンターの奥へと消えて行った。

「ねえ紅？ちょっと時間掛かるらしいから、ギルドの建物の中を見て回らない？」

「ん、いいぜ。ちょうど暇してたところだ。」

ちよつと待ちそうなので、ギルドの中を歩く事にした僕と紅。

考えてみたら僕たち、まだこのギルドの建物の構造を把握してないんだよね。

この先お世話になるだろうから、今の内に見て回るのも悪くない。どこに何があるのかも知りたい事だしね。

「じゃあ行くこうか2人とも？」

「あいよ」「くー！」

さてさて、どんな部屋があるのかな？

\*\*\*

ココからセリフオンリーでお送りいたします。

↓地下1F・闘技場と医務室と保管庫↓

「まずは闘技場、ココは昨日使った所だから良く知ってる。」  
「見るもんもねえし上に行こうぜ？」  
「そだね。」

〈1F・ギルドカウンター〉

「今の現在位置はココ。一言で言うならココはギルドの玄関口だ。」  
「俺達が一番良くいる場所だな」「クークー！」  
「うん、ココは民間や個人からの依頼の受注から、  
その依頼をギルドメンバーへ斡旋するのまで全部ココで執り行われるんだって。」

そうカウンターの横に置いてあったパンフレットには書いてあった。  
「

「パンフレットなんて何で置いてあるんだ？」  
「まあ一般から依頼を受けている手前、一般受けしてくれないと商売あがったりだからねえ。」

「しょうがないんだろうさ。」  
「??そんなもんなのか？俺には良くわからんが？」  
「そんなもんだよ？なお、奥の部屋は待合室と休憩室も兼ねており、  
疲れた時はちょっと休めるのだとか……」

まあその休憩室は何故か御近所の御老体たちによって占領されているらしいんだけどね。

その理由は1Fまでは一般人も出入り自由だからだ何だって。  
「良いのかそれで？」

「さあ？まあ良いんじゃない？さて1Fはコレだけだから次に行こう。」

〈2F・飯屋兼酒場〉

「さて、身体を使うお仕事には欠かせないご飯を食べる所と、お酒が飲める酒場がセットになっている二階です」

「酒は嫌いだぜ。マズイからな！」

「飯屋としてのココのお勧めは、ギルド特製ランダムランチ！

毎回味が変わるのが自慢だけど、時折殺人級のご飯があるのだとか

……」

「……………嫌な飯だな。飯くらいリラックスして食いたいぜ。」

「それは同感だね」

「くーくあう！」

「チビもそう思うっ？まあとりあえずココはコレだけだし、上に行こうか？」

〈3F・事務室〉

「肉体労働だけがギルドじゃない！ちゃんとした経営をする為に頭も使うのもギルドの仕事なのだ！」

「どうでもいいから早いとこ行こうぜ？俺数字見ると頭痛くなるんだ。」

「まあ紅はそう言っの苦手だったよね？じゃあ最後に屋上に行こうか？」

「了〜解！」「く〜く〜！」

〈ギルド屋上〉

「ココはギルドメンバーがいつでも利用可能な練兵場となっております。以上かなめウォッチングからの報告でした！」

「なあ？誰に向かって喋ってたんだ？」

「ん〜？何でか知らないけど、こっすないといけないというお言葉が……」

「電波だな……」「くー……」

「そ、そんな目でみないですよー!!」

異常…もとい以上ギルドの中の探検でした。以下から通常に戻ります。

\*\*\*

さて、ギルド内の探索も終え、1Fに戻ってくるとカウンターにお姉さんの姿が…

「あっ〜イガラシ君〜！保管庫の準備できたから〜いつでも利用可能だからね〜？」

「あ、それはありがとうございます!」

やった!これで重たい金貨から解放されるよ!

「じゃあ早速コレお願いしますね?」

「はい〜承りました〜!」

僕は今日使う分以外の金貨の入った袋を彼女に預けた。

彼女が金貨袋を保管庫に入れに行っている間に、保管庫使用の書類を書いておく。

これで一応楽に行動が出来る様になった。

常に全財産持って歩いてたら、スリに狙ってくださいって言ってる様なモンだしね。

これからも、保管庫利用してドンドン稼いで行こうかな!

「じいじのま、ギルドの楽しみかたのーっだよね

## 第12章（前書き）

- ・新キャラ登場でヤンス。

## 第12章

く 出歩いて…落っこちて・第12章く

ギルドにある依頼の掲示板を眺めていると、受付のお姉さんが保管庫から戻ってきた。

今日は午後から依頼を受けようと思っていたので、紅も交えて少しおしゃべりしていると

「そういえば、イガラシ君たちには、まだ自己紹介してませんでしたね？」

「あ、そう言えばそうですね？」

「じゃあ教えてあげるね？私の名前は？」

と、突然彼女は自己紹介を始めようとした。

おお！なんとなく気になってたお姉さんの名前が今解る！

……と、言いたいところだけど……



「た、大変だあ!!」

どうやら、そう上手く物事は進まないようだ…。

大声が聞こえたので入り口に視線を向けると、一人の青年が息を切らせて入ってきた。

うーん、なんとなくだけど、この後の展開が予想できる…。

「ケ、ケンカだあ!!」

ほらやつぱり。

「あら〜?どうしたんですか〜?」

お姉さんが緊張感の無い声で、青年Aに話しかける。しかしこのヒトが聞くと、どんな事態になっても脱力感たっぷりになるなあ。

「い、市場で親方と“アイツ”がまた!」

「あ〜、いつものやつですね〜?ほっとけば収まるんじゃないですか〜?」

「だ、ただけよう!今回は規模がちげえんだって!」

随分とあわててるな?何があつたんだろ?

親方って人と、アイツと呼ばれてる誰かがケンカしているのは解つただけだ…

「と、とにかく誰か腕のある人を送ってくれ!じゃないと市場が崩壊しちまう!」

そんな大げさな…そう思った瞬間、ドゥーン！という音と共に地面が揺れた！？

何だ！？地震…じゃない！アレは魔法的な力が働いてた！ってことは人為的！？

「親方がおっぱじめやがった…なあ姉さん！頼む！誰でも良いから…！！」

「うーんそうねえ？ギズボンさんだとやりすぎちゃうし…チラッ」

「すみません、お姉さん…何故こちらを見るんですか？」

「じゃあ〜イガラシ君お願いねえ〜？」

「えっ？何「アンタが来てくれるのか！？よし行こう！すぐ行こう！兎に角行こう！！」ちよっ！！」

え、なんで！？ていうか襟首引つ張らないで〜！！伸びる〜！！

そのまま僕は、有無を言わず青年Aに拉致られました（泣）

ちなみに紅達は僕が拉致られるのを見て慌てて追いかけてきてます。はあ、せめて状況の説明くらいしてくれよ〜！！

青年Aにズルズルというかズザザザって感じで、僕は市場に続く通りをそのまま引きづられて行く…。

とゆうか何？この羞恥プレイ…行き交う人が抵抗空しく引きずられる僕を生温かい目で見ている。

いい加減離してくださいと叫ぼうかな？

っと思った瞬間、さっきよりも大きな振動が通りを揺さぶり、青年Aがバランスを崩しかけた。

その為彼は一旦停止する、その隙を突いて何とか腕から逃れる事が出来た。

まあ実際は僕もバランスを崩してこけたからなんだけどね。

「アイタタタ…一体なにが起こってるんだ？」

「親方と“アイツ”がぶつかったんだ…」

はて？“アイツ”とは誰だぞなもし？

「ねえ…“アイツ”ってだ」「そんなことよりも行くぞ！」「ちょっと引つ張らないで〜！！」

またもや襟首掴まれて連行される僕。

気分的にはドナドナというより市中引き回しって感じかな？

「あの、さ！僕に、どうして、欲しいの！！」

言葉が途切れ途切れなのは首を引っ張られているからです。あしか

らず…。

「なに！簡単だ！お前は今現在市場で“値段交渉中”の親方と“アイツ”を止めて欲しい！」

「だから、どうなつて、るのか、説明して、ほしい！！」

「説明するより見た方が早え！！ほらもう着いたぞ！」

そう言った彼は僕を放り投げる。

着地したとこでケホケホ喉をさすっていると少し離れたところで

「いいから昨日までのレートで売りなさいです！でないと魔法使えます！」

「それだと商売あがったりなんだよ！少しは考えろ！このお子様！序でに脅迫してんじゃねえ！」

「ムキイイイ！！お子様ではありません！！！」

お髭が御立派な筋肉質のおっさん…多分親方さんと、おっさんの半分以下の身成りの良い身長少年？が声を荒げていた。

「むうまた話がそれました。そんなことよりも何故いきなり値段が倍になるんです？苛めですか？」

「だ〜から！何度も何度も説明してるだろうが！！」

鉱物の輸出入には市場とかで飽和状態にならないように値段に制限付けたりするって！！」

「だからって納得できないです！昨日通りの値段で売ります！」

「だから、そう言うのは国の役人に言ってくれ。あいつらがレート決めて、俺達はそいつに従っただけなんだからな」

「国に盾突く訳無いじゃないですか？バカなのですか？」

「おい！じゃあ何で俺に言うんだよ！！？」

「只の八当りです！」

「解った表に出る！」

「すでに出てますよ〜？」

「うがああ！！むかつくお子様だぜ！！！」

「お子様って言うな！です！」

「うるせえ！お前見たなガキンちよはお子様だつて相場が決まってるんだよ！」

「またお子様って！」

「おう！お、こ、さ、ま？」

「ムキイイ！！そこになおれです！魔法で倒してやるです！！！」

「さつきからそう言つて倒せネエじゃねえか！！このお子様！」

「また言つたああ！！許さないです！！！」

……………ゴメン、なにこのカオス？

僕は気を取り直して、僕を市中引き回しの刑にしてくれた青年Aに話しかける。

「ねえ、もしかしてこれを止めるの？」

「ああ頼む。俺達じゃアレの間に割つて入るのは無理だ」

「でも只のケンカでしょ？しばらくすれば収まるんじゃない？」

「そうだったら苦労しねえよ。周りを見てみるよ？」

そう言われ周りを見ると、辺りには破壊された屋台やら粉碎された店先やらが散乱している。

「なんか、嵐が通り過ぎた後みたいになってるけど？……………つてまさか？」

僕の言葉に、青年Aはニカツ！とある意味いい笑みを浮かべ

「正解、その嵐がアノ二人だ。」

トンでも無い事をのたまった。マ、マジですか？

「つまりアノ二人を止めろってことですか？」

「つまりも何もその通り、いい加減ここいらで止めてもらわないと、この市場が崩壊しちまうからな。」

嫌まさかそんな訳無いでしょう？たかが人が暴れた位で。

そう思い彼らの方に視線を向けると……その考えがいかにかい甘いのか  
思い知らされた。

「行きますですよ？親方さん“一つ目の炎神を司るは日照りの火災  
…炎に吞まれる！”フレイム・スロウワー！…です！」

ちっちゃい方はいきなり魔法詠唱を開始し、その小さな見た目から  
は想像もできない程の

禍々しい炎の渦を前方の親方さんに向かって撃ちだした！

………射線上にあった何件かの屋台を巻き込んで………。

「デケエだけで中身のねえ魔法が通じる訳ねえだろう！聞きわけの  
無いお子様にはゲンコツだ！喰らえ！親方流気合コブシ！！」

こっちはこっちで訳わかんない攻撃繰り出したああ！！

親方が力を込めたアツパースウィングみたいなのをした瞬間、目に見えるくらいの衝撃波が現れてちっちゃい方の炎を相殺している…な、なんて出鱈目な…。

あ、余波でこの間ご飯食べて気に言った料理店の店先が崩壊した…気に言ってたのに。

「……………つて！なんですかコレは！！」

「だから嵐みたいなものだつて？クノルの町の嫌な名物さ。」

ハハハと乾いた笑いで答える青年A……………というかアレを止めると？

「むう、イジワルな親方はキライです！エアリアル・ダガー！」

「な？詠唱破棄だと！親方流気合ガード！」

「防ぐなです！いい加減言った値段で売ります！フレイム・スロウラー！」

「そんなことしたらなあ？こちとら商売あがったりなんだよ！算数くらい習えお子様！親方流気合砲！」

「むうううう！！またお子様つて！！エアリアル・ファラリカ！！」

「そんなもん気かねええええ！親方流気合ガード！！」

……………ごめん、このカオス空間を止めるのは、僕にはちょっと荷が重すぎるんですけど？

つーか何？あの人外。

自称神からの改造を受けた僕が恐怖を感じるくらい、有り得ない光景なんですけど？

アレを止めるには魔力全開にすれば何とかなるだろうけど……正直逃げたくてたまらないのですが？

「はあああ！！今回最大の攻撃です！！！」

「おもしれええ！！俺も全力だああ！！！」

つていきなりクライマックス！？どこの戦闘民族だアンタらは！！

と、啞然としている僕に青年Aは……

「じゃあ、早速止めてきてくれ！」

「え、僕に死ねと？というか何故襟首を掴んでええええ！！！」

……目の前の人外達の放った最大級の攻撃の真つただ中に……放り投げてくれました。

あはは……短い二度目の人生だったなあ……

じゃ無い！まだ嫌だよ！僕はまだ死にたくないんだよ！！

だけど、このままだとどう考えても着弾点に直撃コース。  
考える！考えるんだ僕！生き残りたいならば考える！！

着弾点まで後2秒……

回避……不可。

逃走……不可。

防御……恐らく可能！



最適行動……魔法使用！  
術式選択……最大出力イマジンツール・シールド！

ココまで0 / 8秒：魔力収束開始！

「 防げ……」

僕は両手に今までで一番の魔力を込める…

生命の危機により、より一層高まった僕の集中力が、魔力を僕の思い描く形に具現化させる…

そして言霊を込める事で、更に強力なモノへと昇華させていく…。

「イマジンツール イーティールドオオオ×2!!!」

両手を基点に顕現した大きな盾は互いにつながり合い、僕を包み込む形で展開された。

その防御は人外2人が放った最大攻撃を

「ぬおおおおお!!!!!!」

防ぎきる事に成功した……こ、怖かったああ……死ぬかと思  
ったああ……。

「む、アナタは誰なのです？交渉の邪魔するなら容赦しませんですよ？  
よ？というか消えるです！」

「おい、坊主！危ねえだろうが？割り込みは行かんぞ？割り込みは

よ？順番守るが社会のルールだぜ？」

全ての諸悪の根源の2人が何故かそんなことを僕に言う。  
その有り得ない言い草に、たった今この二人の所為で生と死の世界  
を垣間見た僕は……

プチ

……という音が頭の中に鳴り響いてキレてしまった……というか、いい  
加減……怒っても良いよね？

「い」

「「い？」」

「いい加減にしろおおおお……！！！！！！」

キレてしまった僕は、先ほどの最大出力設定の魔力のまま

……

「IT……巨大ハリセン！！！！」  
「な、何だそれ！！」です！！」

僕のイメージを形にし、魔力を食って膨れ上がった長さ20mはありそうな超巨大ハリセンで

「頭を！冷やしなさあああい！！！！」

バシン！！！！

「ぐらうち！！！！」

バカ2人を吹き飛ばした！でもハリセンって……どうやら何か理性がまだ残っていてくれたらしいね……。

間違っただけでプラスト使わなくて良かった……そんな事したら町が地図から消えちゃうもんね。

改めて考えたら恐ろしいわな……くわばらくわばら。

\*\*\*

「……で、何か言う事は？」（黒い笑み）  
「……申し訳ございませんでしたあああ！！！！」です！！」

超巨大ハリセンの一撃の後、何とか通常サイズに戻したITハリセ

ンで、この騒動の中心人物である親方と少年……  
それといきなり放り投げてくれた青年Aを叩き廻してこの場を収める事に成功した。

「まったく、死人が出なかったから良かったものを……良い大人が何ムキになってんですか？それとそんな少年も、国が決めた適正価格なんだから

ゴチャゴチャいわないでその値段で買うか、また安くなるまで待つか、それだけの力があるんだから自分で探すとかすれば良かったでしょう？

それに青年A！よくもいきなり放り投げてくれたよね？いくら僕でもトサカに来たんだからね！？三人ともそこんとこ反省してる？

あと僕の言ってる事間違ってる？ねえ？ねえ？ねえ？」

「……」

グウの音も出ない三人……やだコレ気持ちいい……じゃなくて。

「とりあえずこのケンカはギルドが納めますから、今後は注意してください！僕からの言葉はコレで終わりです！」

「……え？それだけ？」

ポカーンとする三人……うん僕からはコレ以上ないよ？……僕からはね？

だってどうせ貴方達は市場の復興の為にこき使われるんだし……無償だよ？

かなりの範囲が巻き込まれたみたいだから、相当大変だろうなあ。同情はしないけどね。後ろからもう怒り心頭で笑みをこぼしている集団が近づいてるけど……まあ頑張ってるね。

「じゃあかなめ、帰ろうぜ?」「くーくー」

「うん……………ところで君達は、僕が大変な時なんでいなかったのかな?」

「別に……………かなめなら何とかするだろう?」

ふくん? そうなんだあ?

「ところでさあ?口の周りにソース付いてるよ?キミたち?」

「げ!?!」

「やっぱり寄り道してたんだ……………あとで説教だからね?」

「……………」

あからさまにズーンとした空気を纏いだした2人をスルーし、この場を後にする僕。

まったく、有り得ない程疲れたよ。

あ、そう言えば受付のお姉さんの名前聞くの忘れてた。

まあいずれ解るだろうから……………今日はもういいや……………疲れたし帰ろう……………。

そう思い、僕は宿に足を向けたのでありました……………はあ、疲れた。

\*おまけ

「アレ?経験値が増えてる?」

アレでも倒した事になるんだ……………経験値100しか入ってないけどねw

### かなめの現在のステータス

HP (体力)	……………	3230 / 3230
MP (精神力)	……………	6130 / 6540
LV (現在のレベル)	……………	LV32
EXP (現在の経験値)	……………	2470 / 10056
STR (力の強さ)	……………	105
INT (知性)	……………	8940
DEX (器用さ)	……………	82
AGL (素早さ)	……………	194
CON (耐久力)	……………	78
ATK (物理攻撃力)	……………	116
MAG (魔力)	……………	8970
HIT (命中率)	……………	85
AVD (回避力)	……………	171
RDM (物理防御力)	……………	103
RST (魔法防御力)	……………	885
LUC (幸運)	……………	9
AP (アビリティの装備容量)	……………	113 / 129

CP (技及び魔法の装備容量) : 53 / 139

レベルUPはしていない為、ほぼ変わらず。

## 魔法

### ・ブラスト

【魔力放出で敵を吹き飛ばす。だが熟練者が収束させれば大砲を超える威力を持たせることが可能】

最下級魔法・射程 中〜超遠距離 基本消費魔力20

必要CP15

### ・フレイムブラスト

【ブラストに炎属性を付加した魔法。直線状の炎が目標を燃やす。込める魔力量で強弱可】

最下級魔法・射程 近〜遠距離 基本消費魔力量30

必要CP20

### ・アイシクルブラスト

【ブラストに氷属性を付加した魔法。氷の光線が目標を氷結させる。込める魔力量で強弱可】

最下級魔法・射程 近〜遠距離 基本消費魔力量30

必要CP20

### ・〜ブラスト

【ブラストの派生魔法、スペルを組みかえた事による属性変化を追加】

最下級魔法・射程 中〜超遠距離 基本消費魔力20（属性により変化） 必要CP15

・イマジンツール

【魔力を用いる事で武器から料理器具、大工道具まで様々な道具を作り出せる。】

中級魔法 射程無し 基本消費魔力40（一度使用すると30分ごとに20消費） 必要CP20

・キュアウインド

【癒しの力のある風を対象に向けて放ち傷を治療する】

回復魔法 消費MP 60 必要CP30

・サーチ

【魔力波によるスキャンおよび解析を行う。】

探查魔法 消費MP 10 必要CP5

アビリティ

・警戒 必要AP 5 習得済み

【装備している間、五感が研ぎ澄まされ気配を探ることが可能になる。長く装備すると感覚を覚えスキルへと昇華する】

・経験値UP 必要AP 2 習得済み

【敵を倒した際の経験値が上昇、さらに鍛冶等の作成スキル系熟練度にも効果あり】

スキル



・家事 A

【整理整頓が好きという性格も相成り、高レベルで家事を行える。】

・悪運 EX

【どんな事に巻き込まれても生き残る。EXになると隕石の直撃ですら生き残る】

・スキル魔力操作 A

【このスキルはイメージによる魔力の操作を容易にする。今まで以上の威力の魔法が使用可能】

・魔術理解 A+

【魔法やそれに関するモノへの理解度が深まる。B以上なら立派な魔法使いレベル】

## 第13章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第13章 ↓

さて、昨日の騒動から一夜明けた次の日。

僕&紅&チビは破壊されて修復中の市場を横目に、朝からギルドへと足を運んでいた。

なんでかって？ 昨日の騒ぎの所為で、お仕事して無いからですよ！

宿代は食事付きで一日50Gくらいで泊まれる格安宿だから、今の所持金を考えればしばらくは持つけど、

それでも最終目標は拠点となる家を手に入れる事だから、なるべく使わないで貯めておきたいのだ。

ちなみにここいらの一般的な住居の価格は、数十万Gかかるそうではあ、時間掛かりそうだなあ…でも、頑張って仕事しまくれればその内たまるでしょ？

それなりに実入りがいい仕事だしね。

まあ、そう言う訳で、ギルドカウンターに来た僕達。

紅達には休憩室に先に行つて貰い昨日あったゴブリン討伐が、まだ出来るのかどうかを調べようと思ひ、掲示板に向かった訳なんです。

「ん？君は……」

「あ、昨日の怖いお兄さん」

「……………ちよつと裏に行こうか？」

何故か昨日の人外魔法少年がギルドに……………なぜ？つか怖いは余計じゃ！

\*\*\*

裏手でITハリセンをチラつかせながら“お話”をすると、普通に良い子になった少年 エルダー・シエットランド君。生意気な子供かと思ってたけど、話をすると意外と普通の感覚を持っている子だという事が解った。

でもさ、じゃあなぜ昨日暴走したんさ？僕、巻き込まれて大変だったんだよ？

お仕事出来ないくらい疲れちゃったし…まあお互い怪我は無かったから良いけどさあ…。

まあそんな事を思いながら、彼が今日ギルドに赴いた理由を聞いてみた。

ちなみに市場の片づけは自分の分のノルマはとっくに終わらせてあるから平気なんだそうです……………手際良いね。

「へー、ギルドに依頼をね」

「はいです。適正価格で売って貰えない以上、かなめさんが言ったみたいに、

この価格で探してくれる冒険者を募集する事にしたのです」

そう言うと、この魔法使い見習いのエルダー君は、依頼書を掲示板に張ろうとしていた。

まあそれは置いといて……僕は一生懸命背伸びしている彼に、こう突っ込まなければならぬ。

「イス……借りてきたら？」

「……………ハイです。」

背が足りなくて、掲示板に届かないでやんの……………ぷっ。  
彼はいそいそとイスを取りに行きました。

しばらくして戻ってきたエルダー君。

借りて来たイスによじ登り掲示板に依頼書を張り付けた。

「コレでよし！です。」

「どれどれ、どんな依頼なんだ？」

書いてあった依頼は

竜核化石求む。

・ちよつと隣国のドラニ公国に行って“化石洞窟”に行って“竜核化石”を掘りだしてきてくださいです。質が良ければ多くのお金を上げるです。

基本金300G

必要ギルドランクB

竜核化石一つで2000G差し上げますです。

だそうで…。

「ねえ、この竜核化石ってなに？」

「ん？かなめさん、この依頼受けるんですか？」

「まあ、ちよつと気になってさ。で、竜核化石って何なの？」

「竜核化石というのは、魔力を含む化石の一つで、古の竜達の生命力だとか魔力だと言われているモノが 結晶化したのだとか言われているです。純度が悪くてもコレ単体で50世帯分の明かり用魔石をチャージ する事が出来るです。」

ほう、すごいねえ。

宿屋にあった魔力ランプは、結構魔力容量があるみたいだから、かなりの保有魔力だねソレは。

「ボクは今この町のすぐ近くにある魔法学校で生徒をしてるです。その卒業までにしなければならぬ課題の一つに、自分の杖を自作するというのがあるです。」

「つまり、コレはソレの為の材料なんだ？」

「お察しの通りです。魔法使いにとって杖は相棒の様なもの… 最高の杖を造る為にもお金に糸目はつけられないのです。」

はは、スゴいねえ。ちゃんとした魔法使いが目の前にいるよ。

僕なんて自称神さまがチート改造しちゃってくれた、我流魔法使いなのね。

でも、そうかあゝ杖はいいぼうなのかあゝそうーなんかー。  
……はは、僕この間折っちゃった。

「本当は竜核化石よりもいい媒体になる竜魂石というモノもあるの  
ですが…

さすがに手持ちの資金では無理なのです。」

「竜魂石？」

「ハイです。生きた竜から手に入るらしいのですが、そうになるとギ  
ルドランクAでも無いと誰も受けてくれませんです。でもそうなる  
と依頼料が最低50000Gにはなっちゃうです。」

あはは…それは幾らなんでも、学校の生徒さんには身が重いね。  
ん？でも生きた竜？あれ？最近どこかで出会ったような？

……

……

……

あっ！

「ねえ？もしかして竜魂石って……これ？」

僕は以前、森にあったダンジョンを攻略したんだけど、その時に拾  
った宝珠を取り出して彼に見せてみた。

「……………へ？…うそ…ほ、本物の竜魂石！？こ、コレを一体どこで  
?!」

「あーそれはね？」

僕が説明しようとする

「およ？そりゃアノ遺跡みたいなダンジョンの竜が落とした宝珠じやねえか」

「あ、ちよつと紅！」

何時の間にか近くに来ていた紅に、先言われてしまった！悔しいなんか悔しい！！

「遺跡みたいなダンジョン？」

「おう、俺とかなめがこの町に来る前に居た森の中にあつたヤツだよ？」

「そこの一番奥に居たヤツ倒したら手に入ったんだ。」

「そうなのですか…あ、自己紹介がまだですね。」

初めましてボクはエルダー、エルダー・シエットランドと申します。よろしくなのです」

ぺこりと礼儀正しくお辞儀をするエルダー君。

結構良いとこの坊ちゃんなのかもしれないねえ。

「俺は紅、かなめの相棒をやっている。よろしくな。」

あと肩のコイツはチビってんだ。ホレ、挨拶しろチビ」

「くあうー！」

紅は簡単に、チビは小さな頭をぺこりと、まるでお辞儀しているか様な仕草で返した。

で、お互い自己紹介もすんだので、話を元に戻す。

「それで依頼だけど……その宝珠の方が良いヤツなんだよね？」

「はいです。詳しく調べてみないと何とも言えませんが……」

それでもかなりの魔力を秘めているみたいなので、魔導器の材料としては最高だと思っです！」

うーんそうなのか、じゃあ。

「エルダー君、ソレあげようか？」

「え！？で、でもこんな高価なモノを頂く訳には……」

「あー良いつて良いつて、タダで手に入れた様なもんだしなあ、なあかなめ？」

「そうそう、まさか一撃で倒せるだなんて思っても見なかったし……」

ホントに最初の一撃で倒れるなんて思わなかったんよ。

アレには驚いたわ、マジで。

「い、一撃で！？有り得ないです！」

「いやいや、本当なんだぜ？かなめの放った魔法で一発でのしちまっただからさ」

「それこそ有り得ないです！この竜魂石の大きさからして、中級クラスの竜である事が解るです！普通ソレ位になると対魔力が強くて魔法なんてほとんど効かないです！だから魔法で倒すなんて不可能なんです！」

「けどよお、現に倒しちゃったしな」

「確かにねえ。寿命だったのかな？」



まあ大体理由は解るんだけどね…多分、僕のこの自称神が付けた大魔力の所為だと思うし。

多分あの時撃った魔法が、あのドラゴンの耐えられる限界以上の威力があったんだと思う。

一応所障壁みたいな張ってたけど、ガラスが割れるみたいな音立ててあっさり貫通してたしね。

でも、なんかゴリ押しみたいで嫌な結末だったなあ。

「うう、それじゃあ貰う事にするです。いずれお礼はしますです」

「いや、別に礼がほしいわけじゃ…」

本当にたまたま拾っただけだしねえ？

「でも、それだとボクの気が済まないです。お二人とも、何か欲しいモノとかありませんか？です」

「いやホントに…」

「いいじゃねえかなめ、くれるって言うてるんだし、貰うのも礼儀だぜ？」

君の口から礼儀って言葉が出るとは……………予想外デス。でもまあ、確かにそうだよな。

「じゃあ、一応貰う事にするよ。」

「ハイです。では何が欲しいですか？一応それなりの資産はあるので、

ある程度ならばご用意できますですよ？」

うーん、しかしどうしてくれようか？

金はギルドで働けば手に入るし、かと言って今は別に欲しいモノがある訳でも無い。

拠点としての家は欲しいとこだが、流石に魔法学校で学生さんをしている彼に頼むのも……ん？

「ねえ？エルダー君」

「エルで良いですよ？皆からはそう呼ばれてるです。」

「そう？じゃあエル君、キミって魔法学校の学生さんだよね？」

「ハイです。ガラクトマン魔法学校で飛び級して、今は八年生のクラスにいます！」

誇らしげに胸を張って答えるエル君。

後に聞いた話だと、彼の学校は10年生まであって、

その後は社会に出ている魔法使いの所に見習いに行くんだって。

ちなみに、この後何故か彼の魔法学校の自慢話が始まったので、ちよっと割愛させてもらう。

とりあえず、彼は魔法学校で優秀である…そこまでは解った。で、ココからが本題。

「ねえ、報酬なんだけどさ？初心者向けの魔導書ってある？」

そう聞いた時、エル君は何故かポカーンとした顔になっ

た。なんか可愛い。

「か、かなめさん魔法使いだったのですか!？」

「あーまあ…なんて言うか？我流なんだけどね？」

というか、昨日魔法使ってたんだけどなあ…。

この後、何で魔法使いになったか説明する羽目になった。

勿論自称神については信じては貰えないだろうから、

何時の間にか魔力が使えるようになっていたという事にした。

やや苦しい良い訳だったけど、それでもコレを押し通したので、何とか納得して貰えた。

………べ、別にめんどくさかった訳じゃにからね！ホント何だからね!!

何故か脳内にそのフレーズが浮かんで、心内で吹いた。

毒電波でも拾ったのかな？なんか嫌だねソレ。まあそんな事よりもだ!

「で、さっきの話の続きなんだけど…」

「あ、えと…確か初心者用の魔導書の事ですね？」

「うんそう。一応魔力制御は出来るんだけど、

あくまで我流だからちゃんとしたのを知っておきたいんだ。ダメかな？」

「いえ、別にダメでは無いですが…：…：…：そんなので良いんですか？」

「うん、僕としてはそっちの方が「書店で普通に売られてますですよ？初心者クラスの魔導書なら」………：…：…：そのの？」

「ハイです。」

全然知らなかった……。  
そう言えばこの町に来てから結局色々あって、まだそう言ったお店とかはみて無いなあ……。

「あと、中級者クラスまでの魔導書なら、この町には無いですが図書館等で借りられるです。」

流石に上級者・超上級者クラスは無理ですが……」

「そうなんだ…僕達ずっと旅してたから全然知らなかったよ。教えてくれてありがとね？エル君。」

「あ、いえいえ。それほどでもないです。」

てれてれと頭を掻く仕草をするエル君。

ふーむ、しかし書店で普通に売られていたとは……

やっぱりこの世界では魔法は結構身近な存在なんだねえ。

「で、結局どうするですか？」

「うーん…どうしようかな？」

正直欲しかったモノは実は簡単に手に入るらしいし、今のところ欲しいモノは他には無いし……

「じゃあ貸し一つって事にしといてくれるかな？」

「貸しですか？」

「うんそう、貸し一つ。今のところ欲しいモノとか無いからさ、後でそう言ったのが出来た時くれれば良いから。」

「……………解りました。でも、何か困った事があつたら言ってください。」

「うん、ありがとね。」

クシャッとエル君の頭を撫でる。

エル君は一瞬アツという声を漏らしたが、その後は頭を伏せて撫でられるがままになっていた。

……………そして何故か隣に居る紅の機嫌が急降下中なんだけど  
何で？

少しの間僕はエル君の柔かい髪を撫で続け、十分に堪能したあと手を離れた。

若干エル君の機嫌がいいのは何でだろう？  
それに伴い更に低下中の紅の機嫌の事も気になるけど…。

「それじゃあエル君、僕たち今日の仕事受けなきゃなんないから」「ハイです。バイバイ…です。」

若干寂しそうな顔をしたエル君…：よし。

「違うよエル君、君は僕に借りがあるんだ。だから別れのあいさつは“またね”だよ」

「またね…ですか？」

「そう、また後で合う事になるんだからさ…：ね？」

「そう…：ですね。解りました。それではお兄さん、またね…：です。」

「ん、またねエル君」

「ほら、紅も…：」

いまだ機嫌が低下中の紅に耳打ちし、エル君の方に顔を向けさせる。何で機嫌が悪いのか解らないけど、別れのあいさつはしっかりやらないとね。

それもちゃんとした礼儀の一つだしさ。

紅はエル君の方を向き、やや視線を別の方に向けて頬を指で掻き。

「……またな」

そう小さな声でしゃべると、その間そっぽを向いてしまった。  
もう、子供っぽいなあ。

「はいです。またね……です」

エル君はやや苦笑しながらもちゃんと挨拶を返してくれた。  
うーん、大人だねえ。その後僕たちはエル君と別れ、掲示板を除き  
こむのであった。

おまけ

「ねえ……何怒ってるの？」

「……別に怒ってねえ」

「うそ！機嫌が悪い時紅の尻尾はツンって上向くんだから！」

「……っ！」

「ねえ……何か気に障るような事したなら謝るからさ。許してよ？」

「……」

「そつだ、美味しいモノでも食べに行こうか？」

「……………る」

「え？なんて言ったの？小さくて聞き取れなくて」

「……………でる」

「ごめん、もうちょっと大きな声で…」

「…俺も撫でる」

「???なんで???」

「いいから撫でろ!!」

「わ、わかった」

はて？紅ってこんな子だったかいのう???

この後、随分と長い事撫で続け、漸く開放された時には昼を回っていた。

おまけに掲示板のすぐ近くだったから、随分色んな人に見られて恥ずかしかつたあ。

でも見る人達の眼が、どことなく微笑ましいモノを見る目だったのは何故だろうか？

数日たってからこの件を思いだし、冷静に考えたら理由が理解できた為、

悶絶することになったけど、ソレはまた別のお話。

\*おまけ\*

紅の現在のステータス

HP (体力)	.....	5180 / 5180
MP (精神力)	.....	1130 / 1130
LV (現在のレベル)	.....	LV54
EXP (現在の経験値)	.....	370 / 5503
STR (力の強さ)	.....	8570
INT (知性)	.....	252
DEX (器用さ)	.....	350
AGL (素早さ)	.....	530
ATK (物理攻撃力)	.....	8573
MAG (魔力)	.....	252
CON (耐久力)	.....	4067
HIT (命中率)	.....	654
AVD (回避力)	.....	530
RDM (物理防御力)	.....	4067
RST (魔法防御力)	.....	526
LUC (幸運)	.....	900
AP (アビリティの装備容量)	.....	60 / 60
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	80 / 80



魔法および技

・無し

アビリティ

・装備自動適応 必要A P O

【人型と犬型に合わせて、装備したモノが変化する】

スキル

・変しーん

【かなめに手伝って貰って人型へ変身、徐々にコントロール出来る様になる】

・野生の勘

【気配を察知しやすくなる】

・怪力

【岩を砕く？それは初歩だろ？ といっくらの力を持つ】

・漢オトコの娘コ

【女の子だが男の子っぽい】



## 第14章

「出歩いて…落っこちて・第14章」

「やあ皆さん。今僕たちはゴブリンの集団の近くに来ています  
つていきなりすぎるか。」

「本日のお仕事は増えすぎたゴブリン達の討伐、排除、および撃退で  
ある。」

「エル君と別れた後、掲示板に張ってあった中でやりやすそうなモノ  
を選んだらこうなった。」

「何だかこれから先も戦う系ばかりやりそうな気がするけど…気に  
しない事にする。」

「ちなみに今回の依頼は討伐と書いてあるんだけど、  
実際は悪さをする前に懲らしめれば良いらしいから、わざわざ殺さ  
なくても問題は無いらしい。」

「生殺与奪は任せますってあたりが現実感たっぷりだけどね。」

「さてさて、とりあえず今日も稼がして貰いましょうか。」

\*\*\*

「という訳で、クノルの町郊外にある農園にお邪魔してい

ます」

「なに明後日の方向向いて喋ってるんだ？かなめ」

「いや、なんかこうしないといけないっていう電波が……」

「おい、疲れてんのか？色んな意味で大丈夫か？」

「クークー……！」

「だ、だいじょうぶだと思つよ？うん」

はて？なんか妙な行動が目立つなあ。自重しないと……。

まあ気を取り直して、僕達の現在位置は町の外。

そして今僕たちが向かって居るのはクノルの町にほど近い農園だ。

クノルの町一番の農園らしくて、市に並ぶ野菜のほとんどが、この農園からの出品なんだって。

だから当然農地も広い！

なんせ見渡す限り畑、畑、畑、何故か果樹園、畑、畑……

まあ兎に角、だっただ広い畑が広がっている。

畜産も行っているらしく、ちょっと離れた辺りには放牧場と思われる、柵に囲まれた場所と畜舎が確認できた。

こうして見るとかなり大規模な農園である事が解るね。

何せ畜産で出た家畜の糞を肥料として利用する為の施設とかがあつたんだもの。

え？何で解るかって？………臭いんですよ、猛烈に。

屋根付きの水槽の様な所に茶色いお山が………コレ以上は言わなくても解るでしょ？

まあ、お陰で美味しい野菜や果物が食べられる訳なんだけど

…どう考えても中世の技術では無いよねえ？

まあ…そこら辺は気にしたらアカンね…おいしいモノはおいしい訳だし…。

きつとこの世界の人間は食が大事なことである事を知っているんだ。うん、そうに違いない。

「と、ついたね。」

「でけえ家だな。」

「たしかに（笑）」

そこにあつたのは、ログハウスに似た造りをした大きな緑色の屋根が特徴的な一軒の家だった。

その大きさは…そうだな、普通の家5軒を繋げた位かな？

「本当に大農園なんだねえ。あ、ほらアソコに馬もいるよ」

ログハウスの隣、隣接というかほぼログハウスに接続している様な感じの小屋につながれている4頭の馬が見える。

どの馬も農業に使われている馬なのか、恐ろしく体つきがいい。

……蹴られたら痛いどころの話じゃなさそうだなあ。

「おう、本当だ。立派な体格してるなあ　　ジュルリ。」

「……言つとくけど、アレは他人の持ち物だからね？」

「わ、わかってらい！そんなくらい！」

どうだかねえ？つーか涎拭こうね？

「でもやっぱ農園だけあって大きな馬が多いね。」  
「確かにな。」

まあ馬の種類なんてサラブレッドくらいしか解んないけどねw

しっかし体つきがいい馬たちだなあ。足なんてかなり太くて強そう  
だ。

ん？一頭だけ足が8本ある……………うん、僕は何も見てい  
ない、見ていないっいたらみていない。

幾ら異世界でもそれは無い、つーか目の錯覚だと思う。

「と、とりあえず、依頼人の所にいこか？」

紅はコクンと頷き、僕たちはログハウスの中に入る事にした。

\*\*\*

「すみませ〜ん」

「ん？お客さんかい？」

ログハウスの奥から出てきたのは、40代くらいの姉御肌女性だっ  
た。

イメージ的には……………そう、某天空に浮かぶ城を目指す空賊の頭を若  
くした感じ？

なんか義理の息子が十数人はいそう。

「なんか、途轍もなく失礼な事考えて無いかい？」

「い、いえいえそんな！なんにも考えて無いですよ」

あ、危ない…勘が鋭いぞコノ人。

「えと…その、初めまして！ギルドから依頼を受けてきましたかなめです。こっちは相棒の」

「紅っていうんだ。よろしくな！」

「あーあの討伐依頼ね？………本当にあんた達がやるのかい？」

「あ、はい。そうですけど…」

「ふーん…」

彼女はジロジロとこっちを見ている。品定めされているみたい…。

「一応聞くんだが…あんた達ちゃんと戦えるのかい？」

「なんだと！」

「紅！………心配は無用です。こう見えてもちゃんとギルドの試験は合格していますし、ランクも一応2人ともCランクあります。」

「ほう、Cランク…ね。」

依頼人の彼女の言葉に、一瞬紅が反応したけど、声をかけて黙って貰った。

これで紅が怒って、余計に話がこじれたら敵わないからね。

「………ま、いいだろ。ゴブリン程度だしね。このあんた達でも大丈夫そうだ。」

「…けっ」

ふう、どうやら依頼人の彼女のお眼鏡には叶ったらしいね。

あと紅、小さく舌打ちしないの、相手に失礼でしょ。

「さて、あたしの自己紹介がまだだったね？この農園のオーナーを

しているエリヤだ。今回の依頼、ちゃんと果たしておくれよ？」  
「ハッ！たりめえだ！たかがゴブリン位すぐに倒してやるよオバサン！！」

ああ！！またそんな失礼な事を！！

「お、元気が良い嬢ちゃんだねえ？元気がいいのはいいことさね。」  
「解ってるじゃねえか」

カツカツカと笑うエリヤさん。紅のオバサン発言を全然気にしてないみたい。  
うっん豪快な人みたいだなあ。

「　　で？誰がオバサンだった？」  
「「ひい！」」

前言撤回！メツチャ気にしてました！！物凄い気迫です！！！！

この後とにかく必死で謝って、何とか許して貰えた。うっ、  
胃が痛い。

「さて、冗談はさて置き、話を進めたいんだが？」  
「そう…ですね。仕事の話を進めましょう…」  
「おいおいかなめ、大丈夫か？なんか気分悪そうだけど…」

ふふ、大丈夫だよ紅、時間が立てば直るから……。  
もっとも僕の具合が悪い原因の一つは君なんだけどね。



「ふう、まあいいさね。ところで、依頼したゴブリン退治だが、一つだけ条件を付け加えさせて貰いたいんだがねえ。」

条件？なんだろう？

「なに、簡単なことさね。ゴブリンを追い返すのはいいんだが、なるべく殺さない事。これが条件だ。」

「えと、生殺与奪権は任せるって依頼書にはあつた筈ですが……理由を聞いても？」

殺さずにつて…なんて厄介な。こつちはなまじ地の力が強力だから、手加減するのは難しいんだけどなあ。

「いやね、以前だったら普通に追い返してくればよかったんだけど、最近のゴブリン共はなんか数が妙に多くてねえ。」

殺しても殺してもすぐに湧くもんだから、正直後処理が物凄く大変なんだよ？斬ったら血が畑に滲みこむ所為で、その畑は

しばらくの間使い物にならないし、おまけに臭い。かと言って、以前魔法使いに魔法で焼き払って貰ったら、関係の無い畑

の農作物まで灰にされちまって、コッチとしては大損だった事もあるんでねえ…。それに残されたゴブリンの死体！あまり

に多すぎて、今じゃあ商品の被害より、連中の死体の処理費の方が高くつく位さ！

……まあそう言う訳で、出来る事ならあまり殺さないように追い返してほしいって訳なんさ。」

「あ、はは…そう…ですか。」

あまりの真剣な表情に二の句を継げない…。



「ふうん ふふふん」

ヴォーン!!

『『『『『ギヤリソ〜ン!!』『』『』『』』』』』

お、飛んでる飛んでる。

ナイスシヨツ…いやファーかな？

ヒュ〜〜ン…ドストドストドスト…

『『『『『きゆう。』『』『』『』』』』』

さて、そろそろ何が起こっているのか説明しようか？

現在、ゴブリンがよく出ると言われた畑付近にて、手に巨大ハリセンを持った紅がゴブリン達を遠く敷地の外に吹き飛ばしています。

ちなみにハリセンは僕が以前出したETハリセンのやや縮小版。大きさも4m程度しか無い奴だけど

「もういつちよ行くぜえ!!」

『『『『『ノオオオ〜!!』『』『』『』』』』』

ばっか〜ん!!

『『『『『ぎやばっす!!』『』『』『』』』』』

ソレを振うのか、紅は（汗）

アレは重さは無いけど、バランス取り辛く無いのかねえ？  
振う時に結構な風圧が掛かる筈なんだけど……まあ紅だしね。

「そのおめえら…空飛ぶ覚悟はできてるか？」

『ギヤギヤギヤ（出来てませええん！！）』

「はっ！何言ってるのかワカンネエヤ（ニヤ）」

『ギヤボ（この外道！！）』　ゴブリン、S涙目。

「とりあえず飛んどけ！」

『ギヤヤーー！！』

……おかしいな？ゴブリンの言葉はわかんない筈なんだけど…副  
音声で聞こえる気がする。

つーか哀れだねえ…止めないけどね。

ちなみにこうなった経緯を簡単に説明すると

- ・ 依頼人から不殺の要請
- ・ 剣…というか武器を持ちいた戦いは出来ない
- ・ ならば魔法で！！　　と思っただが近くに畑および家屋がある為  
巻き込む恐れがあり断念
- ・ 魔法使えない　僕テンションダダ下がり
- ・ 殺さない武器はなんか無いか？　　ハリセンがあるじゃないか！
- ・ イマジンスーツで造ってみた
- ・ 僕よりも紅の方が力が強いから任せた

と、いつい言つ訳なのや。

「はっはぁー！ ふ き と べ ー！！！」

『『『『『ギヤルソネツ！！』』』』』

おー、さっきよりも飛距離が伸びてら。

まあ、ゴブリン連中には悪いけど、紅のストレス発散に付き合っ  
貰う事にして貰う。

ココ最近全然戦いらしい戦いが無かったから、腕が鈍るって紅が嘆  
いてたからね。

ハリセンなら、どんなに強くやっても（多分）死ぬことは無いから、  
安心してブツ叩ける。

おまけに紅はその見た目よりもかなりの怪力の持ち主。

吹き飛ばされた連中は、そのまま農園の敷地外へと吹き飛ばされて  
いる。

ゴブリン達もまさか自分たちが、訳も分からない白い棒で殴られて、  
空中車田落ちを決める事になるうとは夢にも思っまい。

むしろトラウマを患って、そう簡単にはココには戻っては来ないだ  
ろう……多分。

「はは、僕たちやる事がないねチビ」

「くう……」

僕とチビはこの後、ゴブリン達が逃げ帰るまで、紅の見事なフルス

ウィングを見ているくらいしかやることが無かった。

「ひまだねー」

「くぁーっ」

あー、お空が蒼いなあ…。

「弱い！弱すぎるぜオメエらー!!」

『『『『『ギヤガウ!!』（アンタが強すぎンダ!!）』』』』』

「だから言葉ワカンエって」

『『『『『ギヤー!!』』』』』

あ、ちなみに今回経験値は入らなかった。

あまりに相手が弱すぎて、経験にならなかったらしい。

この後、結局僕に出番が回ってくる事は無かった。

あるとしても時折、紅の疲労回復の為にキュアウィンドをかけるくらいしかない。

あ、最後の一匹が宙を舞ってら、じゃあ依頼人のエリヤさんに報告にでも行きますか。

結局僕は何もしてないけど………気にしない、気にしない。

\*\*\*

エリヤさんにゴブリン討伐が終わった事を報告し終えた。

討伐があまりに早かったのには驚かれたが、意外とすんなり受け入れられた事には驚いた。

というか、討伐が終わった事はとくに知られていたらしい。

どうやって彼女は僕たちが報告するよりも速くその事を知ったのか？

その理由は実は至極簡単なこと。

見られていたのだ、ようするに遠くから、彼女のとこの小作人たちに……。

ただ別に監視していたって訳では無くて、たまたま近くの畑で作業をしていた人達なんだそう。

で、その人たちが一足先に僕たちの事を話していたと…道理でエリヤさんが知ってた訳だよ。

まあ、それよりも驚いたのは……

その小作人の人達の気配が、僕はおろか紅にすら気付かれていなかったって事！後で紅本人から聞いたから間違いない。

皆さんはご存じだろうが、僕はアビリティの警戒により気配察知が出来る。

紅は元々が野良だったから、気配を察知する能力は、アビリティを装備した僕よりもするどい。

そんな彼女すら感知出来無いなんて……。

僕も自称神による改造で、かなり非常識だけど、それ以上にこの世界の人間は非常識であったことを感じた瞬間でした。





## 第14章（後書き）

ども、作者のQOOLでございます。

さてさて、今回のお話では実質、紅無双ですw

いやはや、本来なら主人公が最強君な筈なんですが、いつの間やら紅の方が強くなっていたり…

まあかなめ君の方も、この世界においては十分最強の性能の持ち主なんですけどね。

この凸凹コンビ…ホンマどこ行くんやるか？

あと作中に家畜の糞を肥料に利用している農家の描写がありますが……  
自分農業高校に居た事があるので解るんですがアレ、マジで臭いで

す。でも、それが美味しい野菜を作るかと思うと、世界の仕組みって凄いですよね。

以上後書きの後半に関係無い事書いた作者からでした。

## 第15章(前書き)

・今回やや長めでヤンス。

## 第15章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第15章 ↓

ゴブリン討伐依頼から数週間が経過しました。

結局、ゴブリン達は懲り無かったのか知らないけど、数日後にはまた畑に来ているとギルドからの連絡で知った。

でもまあ、依頼主のエリヤさんはあんまし気にしてないみたい。

どうやら幾ら追い払っても現れる事はこれまでの経験上良くあるらしく、気にしない事にしたとか… 豪胆な人だね、ホント。

どちらにしても、また依頼書がギルドの掲示板に張り出された為、僕らはまた討伐依頼を受け、ゴブリン達を吹き飛ばしていたけど…

結局戻ってくるんだよねえ、アレらはさ。

でも農場のオーナーたるエリヤさんに見れば、

何もしないでゴブリンに荒らされるよりかは、お金払ってでもギルドに依頼した方が安いんだそう。

お陰で、家を買うという僕たちの目標には随分と近づけたけど…

なんか罪悪感。

実はコレと似た様な状況の依頼は他にもう一件あったりする。それは“畑を荒らすイノシシをぶつ殺して”という依頼で、エリヤさんのところとは違う農場だけど、似たような感じでイノシシに畑を荒らされているらしい。

ぶつちゃけ、この二件のローテーションで大分お金が貯まった事は言うまでもない。

まあそんな感じで、いつも通り依頼をすませた後紅達と別れ、日課になりつつある本屋での立ち読みをしに、本屋へと足を運んでおります。

あのエル君と親方さんの“値段交渉”という名の喧嘩に巻き込まれた町並みも、何時の間にか元に戻っていたりする。なんでも、親方さんが特に頑張ったんだとか……実際は町の人に徹夜で作業させられてたらしいんだけどね。勿論、青年Aも一緒に…。

まあ僕には関係ないって

.....

.....

.....

本屋に入り、もはや所定の位置となった窓際近くの本棚へと向かう。ココの本棚がこの世界における魔法の入門書が多く置いてある棚だからだ。

やっぱりね、オリジナルも良いですけど、ある程度ちゃんとした系統も知っておいて損は無いですよ。

「よいしょっと……」

高め位置にある本を手に取り、そのまま立ち読み。

うーん、至福の時間だなあ………買わないからお店の人には迷惑極まりないだろうけどね

流石に本屋だけあって色んな情報の宝庫である。

ここのお陰で、この世界における常識を学ぶ事が出来たと言っても過言じゃない。

例えばこのクノルの町は、グランシュバツテと呼ばれる国に属しており、隣国であるドラニ公国との国境近くにあるとか。

その昔、戦争状態だったときに砦であった名残として、今でも町全体を城壁で囲んであるとか。

現在ではドラニ公国と協定を結んだため、交易地として繁盛しているとか。

この町からホンの数時間の位置に、国营の学園都市が存在するとか。

何気に交易地である為に美味しいモノが沢山あり、そういったのを売る屋台が町の名物であるとか。

時折、嵐みたいな喧嘩をする人がいるとか。地下に謎の迷宮みたい

になった地下水道があったりとかe t c e t c …。

とにかく、この世界にはまだうとい僕のような存在にとっては、ありがたいほどの情報が沢山置いてあるのだ。

おまけに魔導書の類も置いてある　　これほど面白いところはそうは無い。

まあそう言う訳で、今日も情報収集を行おうとした矢先

バスバスバス……

「ケホッ…ハタキ使うならもうチヨイ向こうでやってくださいよ？」

「ふん、買わない客ほど邪魔なモンは無いもんじゃな」

案の定、お店の人に邪険にされちゃってたりする。

でもさ、娯楽が少ないんだし、これくらい許してほしいなあ。

「大体、本は知識を得る為のモノじゃ。しかるに中の知識に価値がある。」

なのにお主ときたらソレをタダで持っていこうとしてるのじゃからなあ。」

「まあまあラジャニさん、良いじゃないですか少しくらい」

「……4時間も居座る輩を少しとは言わん。お主も少しは自重せいで！」

このちよつと古風な喋り方…というかお爺さんみたいな喋り方をするのは、このお店の店主ラジャニさん。

長い長髪を結った、何だか侍みたいな感じのこの人は、そう言って

ハタキ箒を振り上げる。

一応このヒトの榮譽の為に言っておくが、外見の年齢は二十歳くらいである。

「…………… 本当の年齢は解らない…………… というよりか誰も知らないらしく、おまけに性別も不明だったり。。  
まあソレは置いといて、これまた埃が凄い事に…まあ、このヒト悪い人じゃ無いからなあ。立ち読みばかりかしてる僕が悪い訳で…。」

「解りました！今度ギルドの仕事でお金入ったら買いますから！！」  
「…………… 期待せんで待っておる」

そう言うのと奥に引っ込むラジャニさん。  
なんじゃかんじゃ言っても、そうこちらが言うと言つ引っ込む辺り、優しい人なんだと思う。

この本屋を見つけたのも、思えば偶然だった。

たまたまその日は人混みが凄く、ギルドのお姉さんから聞いた本屋さん人がいっぱい（といってもほとんどが立ち読み客）で全然入れなくて、

人込みから逃れようと思いついた脇道にポツンと建っていた。

娯楽の少ないこの世界、テレビもインターネットも無い為、あまりにも暇すぎる。

この際活字でも良いと考えて、あの時はこの店の戸を叩いたんだっけ…。

一応この世界の文字が読める事は、あの自称神に感謝だね。

アレのお陰でこの世界の言語が解るようにされているらしいからな。

バサバサバサ…

「ケホツ…だから少しくらい立ち読みさせてくださって…」

「それよりも、とつととギルドでも何でも良いから金を稼いでこい。」

「一つでも買ったなら一時間は立ち読みを許可してやるっぞ」

「短ッ！しかも許可がいるって立ち読みと違くない!?」

「う、うるさい！」

もう、少しくらい良いじゃんか…買わないなんて言っただけだし…。

でもなあ、多分僕の居た世界の値段に換算すると、一冊あたりの値段が安くて1万円〜で、

高いこつちの世界で言うところのハードカバーみたいなヤツだと、一冊あたり数十万円〜って言うのがザラなんだよね。

ちなみに、魔道書のほとんどは、ハードカバー系で出来ています。家すら持って無い今のところ貧乏なギルドの人間には買えませんわなw

「まったく、この私が特別に許可してやるっつというのに」  
イツときたら…」

「え？なにか言いましたか？ラジャーニさん」

「………何でも無い」

？なんだろうっ？このピトの言う事は偶に解らないなあ。

さて、こうして、いつものように、立ち読みをしていたんだけど、



しばらくして突如鐘の音が鳴り響いた。

「？ ラジャニさん、なんの音なんでしょうか？」

「はて？ 夕方を知らせる鐘にしてはちよっと速いのう？」

どうしたんだと思い本屋の入り口から顔をのぞかせると…

「ま、魔獣の群れがきたあー！！！」

マジですか？

\*\*\*

僕は急いでギルドへと向かっている。

この町の警備はギルドの管轄でもあるので、僕もギルドに所属している以上、

こう言った非常事態にはギルドに待機する事が、あらかじめ契約に盛り込まれているためだ。

紅の方は僕の警戒のスキルを全力にすると、ギルドの方角に向かい走っていたので、僕よか先にギルドに到達するだろう。

なにはともあれ、僕も急がないと……そう思い、更に足に力を込めてギルドへと急いだ。

.....

.....

.....

「遅いぜかなめッ！」

「ゴメン紅ッ！」

ギルドに入ると予想していた通り紅が先に来ていた。

　　つと今はそんな事気にしてる場合じゃなかったっけ！

すでに、何組かのギルドメンバーがチームを組んで魔物の迎撃に向かっていた。

僕達はランクがこな為、町を囲む壁の上に向かう後続の組みにまわされた。

紅は弓で、僕は魔法で上から魔物に攻撃を加える事になる。

　　ちなみに、この指示を出しているのは受付のお姉さんだ。

　　このギルドマスターはすでに迎撃に向かってしまったらしく、実質彼女が指揮を執る形になっている。

　　僕たちは、喋る暇もなく、どこか忙しないギルドを出て、他のメンバーと共に町の城壁へと向かうのであった。

\*\*\*

「いいかッ！テメエらはまだランクはC…言っちまえば、テメエらまだまだひよっこだッ！」

城壁の警備班長である老年の男性が声を張り上げる。

「だからまだ下で戦う事はないッ！そう言うのはランクが高い連中に任しておけば良い！」

俺達は下の連中が取りこぼした魔獣を、ここから魔法や矢で倒せばいい！どうだぁ簡単だろうッ！」

「「「おおー！」「」」

ギルドランクのCは、オークが倒せるレベル…しかし、ソレは単体での話…。

実質今回みたいな状況で、城壁の下に降りて戦うのは、荷が重い人達ばかりなのだ。

まあ僕と紅は平気なんだけどね。大多数に囲まれるのは森での戦いで慣れてるし。

「魔法が使えるヤツは、今の内に精神集中しとけッ！他の奴らは各々投射武器を持って準備しとけよッ？」

慌てなくて良いからしっかりやりやれッ！敵が来たら各々の判断で攻撃を加えろッ！」

ようは好き勝手やれって事だね。うん、解りやすいしギルドらしい指示だ。





その規模は前衛だけでも数百頭……  
しかし2〜3mはあるイノシシの群れがそこまできると、その迫力は恐ろしいモノがある。  
良く城壁の下に展開している人達怖く無いなあって思うよ。

「来たぞおツ！！全員ぶっぱなせツ！！！」

「ウオオツ！！！！」

別に軍隊じゃないから、各々好きに撃ち始める。

僕らの居るところから下の階層から大型の矢が発射された所を見ると、どうやらバリスタが設置されているらしい。

魔法は詠唱しないと撃つ事が出来ない人が多いので、弓の方が先に発射されたのだ。

空中に発射された矢の群れは、まるで黒い鳥の様に空間を覆い尽くし、放物線を描いて迫りくる魔獣達に降り注ぐ。

しかし、あんまり効果は無い、分厚い毛皮と脂肪が矢が致命傷を与えるのを防いでしまう為だ。

「その力は天空の双子の片割れの力、来たれ5対の風塵の刃”エアリアル・ダガーツ！！」

「断罪の斧、炎を纏いて罪人を燃やしつくせ”フレア・セルティスツ！！」

「来たれ風神の投げ斧、目の前の敵を打ち砕け！」エアリアル・ファラリカツ！」

「集まりし力は魔力、轟音と共に敵を屠れ”ブラストツ！」

「地中に隠されしは父が埋めし名剣、立ち向かうモノを切り裂け”グラランド・スクレツプツ！！！」

どごっシューシューッ!!!

魔法使い隊も各々自分の得意な魔法を放つが、如何せん距離があり過ぎて途中で霧散したり、運よく届いても減衰率が高くて、魔獣殺す程の威力が保てなかったりしていた。

僕は魔力の扱いに長けているお陰で、ブラストの魔力を収束させて細く撃ち出すことで、遠距離への攻撃を可能にしていたんだけど、それやったら周りの正規の魔法使いの人から驚かれた。

何でも、ブラストという魔法は初歩の魔法だけあり、簡単に習得できて使えるらしいんだけど、

その分魔力が霧散しやすく、武器をかたどったエアリアル・ダガーとかの魔法に比べたら威力が物凄く落ちるんだった。

ちなみにエアリアル・ダガーとかいう魔法は僕のイメージツールと似ているけど

あちらさんは密度が薄くて持てないんだそうで……閑話休題。

どごごごごごごごごごごごごごごごごごご

「怯まず撃ちまくれえッ!!」

「っっっっッ!!」

未だに途切れる事の無い魔獣の群れ。

下ではギルドランクがB以上の人達が、奮戦している。

というかね、確かにアレは次元が違うわ。

下に居るヤツの一人は在り来たりな表現だけど、眼にも止まらぬ速さで近づく魔獣達を解体しちゃってるし、ある奴は、大きなマサカリ担いで、ソレの一雑ぎで何十頭も屠っている。

見た目的にはパラディンって感じの重鎧を着けた人が、さっそうと戦場を動き回って、自身の身長と同じぐらいデカイ両刃の大剣をふるい、

剣圧で衝撃波を放って、射線上の魔獣が衝撃波喰らって宙を5mは舞っているなんて光景が、城壁の上から良く見えた。

うん、アレはね、確かに実力が同じくらいじゃないと、巻き込まれる事請け合いだね。

獅子奮迅というのか何と言つのか……正直僕達要らなくない？多分ココに居る全員、そんな事考えていると思うよ？

自分たちがやつとこさ一頭倒した時、すでに下の人達は十頭は倒してたらめげるね。

でもかと言って、この場を放棄する理由にはならない。

なので僕たちも出来るだけ魔法を使って敵を倒そうとしてただけ  
ど





内、たったの十数匹倒した所で焼け石に水である。

「くッ！一匹ずつ倒してもしょうがないッ！！なにか手はないか！？」

一匹づつだとキリがないこの状況、どうしてくれようかと思った時、僕の灰色の脳細胞が軋むかのように働き、数秒で一つの答えを導きだす。  
実戦でいきなり試す事も無くやるのは不安だけど…ちょっと実行してみる。

と言っても使うのはブラストなんだけどね。

「ブラスト」

ギユオオオ

！！

僕はブラストに多めに魔力をつぎ込んだ……僕の周りに波紋が出たけど気にしない。

魔獣の団体が固まっているところを狙い、溜めこんだブラストを発射した。

撃ちだされたブラストは、空中で華が開くかの如く分裂し、魔獣達を複数巻き込んで倒す事に成功したッ！

うわゝ魔法はイメージで操作できるけど……まさか本当にうまくいくなんて……。

序でに大量に倒したお陰で、懐の手帳からL.V.U.Pの音と、魔法を習得した時の音が聞こえるけど今は見る暇が無い。

「スゲエな坊主！！」

「コリヤ…とんでもないヤツがいたモンだ」

「本当にCランクなのかい？」

「ウヲオオオッ！なんか燃えて来たぜッ！」

「「「やったるうじゃん！！」「」」

今の僕の魔法を見て、疲れが見えていた魔法使いやギルドの戦士たちが活力を持ち直した。

イヤまさか某有名な龍玉の氣弾のイメージでココまでうまくいくとは……イメージって大事だね。

「ヤルなかなめ！よし俺もッ！！」

紅はそう言うと、いきなり下へ駆け出し、そうかと思うとすぐに戻ってきた。

「かなめッ！弓の力もつと強くしてくれッ！！」

「え？わ、解った。」

僕は言われた通り、弓の弦が更に強くなるようにイメージを送った。

「よしッ！それじゃあ一発当ててやらあッ！！」

そう言うと彼女は強化した弓の弦に、これまた大きな鉄製の矢を添え………ん？

「ねえ紅、ソレってもしかして下の……」

「応、なんか下に置いてあった大きな弓の矢だ。コイツなら強力だぜッ！！」

ニカッと笑う紅、下の方がなんか騒がしいのはこの際無視しておこう………ウン。

「さして……」

キリキリキリ……

紅はバリスタ用のもはや槍と言ってもいい鉄製の矢を、弓に添えてスツと弦を限界まで引き絞る。

僕の魔力で出来た弓は普通の弓とは違い、そう簡単には壊れないけど……

なんか紅の怪力の前ではヤバいかも…。

「あたれえー!!!」

ボシユツ!!

もはや弓が出す音じゃ無くなったソレは、遠くの方に居た数匹を貫通してそのまま地面に衝突して折れてしまった。

「チツ、思ったほど倒せないな」

「……いやあ十分凄いなと思うけど？」

弦の力が強すぎて常人じゃ引けないもんねアノ弓。周りの人も啞然として見ていたりする。

というか今思ったんだけど……

「ねえ、そのまま槍とか投げた方が強いんじゃない？」

「ん？そうなのか？」

だってアノ弓を軽々……というかスツて引けるッてどうなのよ？多分その弓使うよりも自力の方がアナタ強いですよ？

「なんとなくだけど……ちょっと為しに槍投げてみてよ？」  
「あいよ」

彼女はそう言うと、壁に立てかけてあった投的用の投槍を数本持ち  
思いっきり振り被って魔獣の群れに向かって纏めて投げつけた。

ドカドカドカドカーンッ！！

わーお、地面にクレーター出来ちゃってるよ……魔獣達の方は……  
まあアレだね。  
口には出せない状態ってヤツ？  
あいてるわ。  
簡単に言えば大きな風穴が

「よっしゃッ！！」  
「………どんだけ魔改造したんだよ自称神？」

流石の僕も今の光景に、思わずそう呟かずにはいられな  
った。

\*おまけ\*

（紅が矢を持っていった後の下の様子）

「おいッ！ココにあったバリスタ用の矢どこにやった？」

「えッ！？知らないっスよ！？そこに無いっスか！？」

「……………どこにもねえぞ？お前また」

「ち、ちがうッス！！今週はまだ備品は売ってないっス！！売ったのは先々週だからバリスタの矢はココにある筈っス！！」

「とりあえず、先々週売っぱらった分は減俸な？」

「ノオオ　　っス！！！！」

## 第15章（後書き）

・どうも作者のQOLでございます。今回は町の防衛のお話でした。やっぱり危険な魔獣がうるついている以上こういった事も有り得そうな気がするんですね。

でも、投げた槍でクレーターってw  
相変わらずベニちゃん強すぎな気がするなあ。

以上、作者からでした。

## 第16章(前書き)

・前のと続いています。



## 第16章

「出歩いて…落っこちて・第16章」

戦いは今だ続いていた、すでに日も落ちて辺りは暗くなり始めている。

下で戦っていた高ランクのギルドの人達も、城壁の中に撤退した。獣は人間よりかは夜目が効く為、夜に闘うのはある意味自殺行為である為だ。

魔獣の方も夜目が効くだけで、夜中は積極的には攻撃してこない為、今の内にそれぞれ休憩を取る運びとなった。

僕たちも、今日はもう交代して良いと言われた為、いつも泊まっている安宿に戻って来ていた。

「それにしてもよお、今日はかなり倒しちまった気がするぜ。」

隣で紅がのんびりと伸びをして身体をほぐしながら言った。

「そうだね。なんせかなりの数だったし……あッ！そう言えば！」

僕は手帳からかなりLVPの音が聞こえていたのを思い出し、どのくらい上がったのか確かめる事にした。

「さてさて、どのくらい上がったのかなあ」と

HP (体力)	.....	3600 / 3600
MP (精神力)	.....	6130 / 6350
LV (現在のレベル)	.....	LV 35
EXP (現在の経験値)	.....	2705 / 12056
STR (力の強さ)	.....	145
INT (知性)	.....	9400
DEX (器用さ)	.....	122
AGL (素早さ)	.....	234
CON (耐久力)	.....	118
ATK (物理攻撃力)	.....	146
MAG (魔力)	.....	9430
HIT (命中率)	.....	125
AVD (回避力)	.....	251
RDM (物理防御力)	.....	143
RST (魔法防御力)	.....	955
LUC (幸運)	.....	10
AP (アビリティの装備容量)	.....	113 / 129
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	53 / 139

お？おおッ！？上がってる！幸運が上がってるう！！！！ヤッタッ  
————！！！！

今まで上がらなかったけど良かったあ〜コレだけは上がらないステ  
ータスなのかと思ったよ。

しかし、イノシシ（仮）が相手なのにLVが6も上がるとは……

……はて？

まあ雲蚊の如く大軍だったからなあ、ブラストをショットガンみた  
いにして集団で屠ってたお陰かな？

「どうだかなめ？上がってるか？」

「うん！幸運がやっと上がったよッ！！」

「へえ？どれどれ……………って、一つだけじゃねえか？」

「立った一つ上がっただけでも僕にとっては大きな一歩！希望の光  
なんだよッ！！」

だって幾らなんでもあの数値はヒドイと思うんだ。

「そんなもんか？」

「そんなもんだよ……」

紅はふ〜んと言うと、もう興味が無くなったのかチビでモフモフし  
始めた。

ふう、僕にとってこの幸運値の低さは、この世界における不安の中  
でも大多数を占めてるのに……

そこんところ解って無いよなあ……………まあ解れって言う方が無茶  
か。

「そう言えばなんか魔法覚えたんだよね〜」

とりあえず話題を変える事にした。

「さてさてあの時は戦闘に集中していたからあんまり覚えて無いけど」

そう言いつつ、手帳の魔法の項目を見てみた。

## New魔法

・シエルショット

【ブラストの上位魔法、圧縮した魔力を空中にて広範囲に拡散させる。込める魔力で威力・範囲共に変化】

下級魔法・射程 中〜遠距離 消費MP50 必要CP25

ふむふむ、アレはブラストの上位魔法だったのね。成程なるほど……まあ感覚的に解ってたけどね。

僕は自分の使う魔法の事を完璧に理解している訳ではない、正直殆どフィーリングで使っている。

まあ例えて言うなら………家電みたいな感じ？

アレってさ、どうして動いているのか知らない人でも使えるじゃない？

テレビや電子レンジや冷蔵庫、エアコンがどんな原理で動いているかなんて普通の人には解らない。だけど、ソレを使う事は出来る。

僕の魔法もそれと一緒に、自称神のお陰かは知らないけど、魔力というモノを感覚的に知覚し、操作はできる。

ただ、使っている魔力がどんな原理でこうなって、ああなつてとかなんて結うのは全然解らない。

解るのは、魔法を覚えた時に脳裏に投影される理解を超えた術式やら呪文やらそんなの。

それでも魔法が使えるのは、強くイメージするだけで発動するからだ。

まあファンタジーで良くある話だよな。

お陰で色々無茶な魔法を考え付いても実行する事が出来るんだよね。感覚だよりだから手探りではある訳なんだけど

閑話休題。

(そう言えば…紅のステータスはどうなってるんだらう?)  
なんとなく気になった僕は紅に了解を取り、手帳に記された紅のステータスを覗いてみた。

HP (体力)	.....	10800 / 10800
MP (精神力)	.....	1380 / 1380
LV (現在のレベル)	.....	LV69
EXP (現在の経験値)	.....	3570 / 30501
STR (力の強さ)	.....	8920
INT (知性)	.....	360
DEX (器用さ)	.....	480
AGL (素早さ)	.....	730
ATK (物理攻撃力)	.....	9200
MAG (魔力)	.....	362
CON (耐久力)	.....	5600
HIT (命中率)	.....	804

AVD (回避力)	.....	630
RDM (物理防御力)	.....	4817
RST (魔法防御力)	.....	676
LUC (幸運)	.....	1000
AP (アビリティの装備容量)	.....	120 / 120
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	160 / 160

「.....」  
 うわぁ.....LVが10も上がってる.....。

そう言えば槍投げが有効だと知った瞬間、嬉々として投げまくってたもんね。

そりゃあLVも上がる訳だよ.....僕も鍛錬入れようかなあ。

あ、もしかして僕のレベルが6も上がったのってパーティー経験値のお陰？

道理でね〜LV上がってる訳だよ...だって彼女の方がアノ後いっばい倒してる訳だし。

彼女の幸運値も　アレ？何だか僕の目からしょっぱい水が.....  
 く、悔しくなんか無いもん。

.....

.....

.....

次の日の朝になったけど、いまだ魔獣の群れに町は囲まれている為、

厳戒態勢は解除されていない。

宿屋の女将さん曰く以前の経験から察すると、あと数日もすればいなくなるらしい。

しかし、その間は当然のことながら外部への行き来が出来なくなる。

その為経済的な損失はかなり大きいと、たまたま外で食事をしに来ていた倉庫番のジョンさんから聞いた。

一日だけで損失は数十万Gに上るらしく、出来るならば早いとこ撃退して欲しいらしい。

眼の下に隈を作って蒼白な顔して『書類が…仕事が終わらない…』とブツブツ言っている姿はあまりにも痛ましい。

戦闘している僕たちも大変だが、事務方には事務方の苦勞があるってこつたね。ご愁傷様。

それから更に数日後……。

意外とあっさり魔獣の群れは去っていき、町の防衛戦は終わりを告げた。

でも本当の仕事はその後だったりする。

「ではみなさん！剥ぎ取っちゃってくださいい〜。」

「『了解』」「『了解』」

受付のお姉さん（未だ名称不明）のユル〜イ掛け声と共に、ギルドに所属している人々が一斉に魔獣の死体に群がった。

何をしているか？理由は単純、資源の有効活用だ。

この時期になると襲ってくる魔獣達は、イノシシ（仮）が殆どであり、彼らの肉、毛皮、骨の全てが資源として使う事が出来る。

しかも元手はタダ、そんな上手いモノを放っておく程、この町のギ

ルドは甘く無い。

肉は食用に、毛皮は家具や服に、骨や牙は加工して家具や民芸品へと化けるのだ。

そう言う訳で大量の材料が必要な訳なので、町の外に転がっている死体が腐らない内に、

人海戦術で町の中に運び込むのである。

魔獣の群れの襲来はある意味自然災害……でもそれすら利用する人間の逞しさってヤツを垣間見たって感じだね。

まあそんな訳で、負傷とかはしていない人達は、殆どこの剥ぎ取り作業に参加してるんだ。

もちろん強制じゃ無いけど……そのなんて言うか場の空気がね……動けるならやらんか〜いッ！って感じなもんで……まあそう言う訳。

「さてIT包丁<sup>イマツツール</sup>ver」

僕はITで包丁を作る　　と言っても普通の包丁じゃなく

て、刃渡り1m程の解体用包丁だ。

魔力次第で長さの調整も出来る便利な代物である。

「じゃあ僕が解体するから、紅は毛皮とかの素材を運んでくれ。」

「あいよ」

「チビは………まあそこで応援してて？」

「く〜ッ！」

僕は昔取った杵柄ならぬ、森で生活している内に覚えたやり方で、素早く魔獣の身体を解体していく。

いやまさかこんな場面で役に立つなんて、人生ホント何が起ころるか解らないもんだね。



「お、アンさん達もガンバっとるなあ？」  
「あ、ギズボンさんっておおッ!？」

後ろから話しかけられ振り向くと、そこに居たのは毛玉のお化け……等では無く、大量の毛皮を一度に運んでいるギズボンさんでした。

「びつくりしたく、毛皮のお化けかと思っちゃいました」

「かかか、驚かせてすまへんなあ？一度に運んだ方が楽やさかい。」

「……いや、多すぎるだろう」

紅、そこら辺は突っ込んだらいけないよ。だってギズボンさんだし……。

「そういえばアンさん達、この町での魔獣の襲撃は初めてか？」

「そうですね、確かにこの町に来てからは初めてです。」

だってこの世界で最初の町がここだしね。

「ほうか、じゃあ素材剥ぎの作業が終わっても残ってみ？おもしろいモンが見れるで？」

「おもしろいモンって何だよギズボン？」

「紅嬢ちゃん、ソコは秘密ってヤツや。今ゆうたらおもしろう無いやろ？」

「そんなもんか？」

「そんなもんやろ？」

「そんなもんだよね」

おもしろいモノ？なんだろう？とりあえず言われた通り、作業が  
終わっても残る事にした。

.....  
.....  
.....

殆どの作業が終わりを迎えたのは正午になってからだ。た  
だりには剥ぎ取る際にでたゴミが散乱し、地面は魔獣の血を吸って  
赤黒く変色し異臭を放っている。  
僕たちはギズボンさんに言われた通り、残っているとギルドの受付  
のお姉さんが魔法使いの面々と共に現れた。

「それじゃあ、皆さん、いつも通りお願いしますねえ？」  
「.....了解」「.....」

彼らは軽く返事をする、赤黒く変色した大地を蹴って、方々に散  
らばって行った。  
なにが始まるんだろうか？

「お姉さん」  
「あや？イガラシ君とベニちゃん、どうしたの？」

何をしているのか気になって、お姉さんに話しかけた。

「あら？そう言えば、イガラシ君たちは今回見るのは初めて？」  
「はい、だからつい気になって……」  
「そうなの？でも私の口から聞くよりも見ていた方がはやい

わ〜。ほら〜始まった〜」

彼女が指さした方を見ると、方々に散らばった魔法使いたちが杖を大地に突き立てている姿が見えた。

別にコレと言って何かしてるって訳じゃあ……

「なあかなめ、なんか寒く無いか？」

「そう言えば……」

おかしいな？まだ昼間だから暖かい時間の筈なんだけど？

「うふふ〜始まりましたね〜」

受付のお姉さんはそう言うのと笑みを浮かべてこちらを見ている。  
でも何で突然気温が下がったんだらう？

バリ

「ん？コレは

霜？」

ふと気が付けばここいら一帯の地面が霜に覆われている。  
むしる地面が凍っている？なんで？

「完全に凍りつきましたね〜？それじゃあ第二段階〜おねがいしま  
〜す」

お姉さんがそう号令をかけると、遠くにいた魔法使いの人が杖を振  
う。

すると今度は風が巻き起こった。ただの風じゃあ無くて魔法の風だ。

その風は凍った地面を抉り取ると、竜巻のようにつむじを造り、中

心部に向けて抉り取った地面を集めていく。

完全に集まったと思った瞬間、その凍った土が巨大な炎に包まれて燃えていった。

どうやら魔法使い複数人が同時に操作しているらしい。

血を吸った土はその炎で完全に燃やし尽され、残ったのはあまりの熱量に解けてガラス状になった砂だけになった。

辺りは抉り取られはしたものの、血の一滴も入っていない土地に仕上がっている。

正直この工程を見て啞然としている僕と紅を尻目に、作業は最後の工程に進んでいった。

「最後仕上げ〜お願いします〜」

「了解!」

最初に地面を凍らせた魔法使いたちは、何かを蒔いた後、再度杖を大地に突き立てた。

「うそお……」

「すげえ」

思わず僕達の口からそんな声が漏れる。

目の前では魔法使いの人が付きたてた杖から、まるで波紋が広がるかのように、緑の波が荒れ地を染め上げていくのだ。

そう緑……抉り取られ無残な姿をさらしていた土地が、ドンドン緑の草に覆われていく……というか驚くなと言う方が無理だ。

まるで奇跡の様なその光景も、土地が緑の草原に変わりすぐに終わる

ことになったけど、一度見たら忘れられない程衝撃的だった。

なるほど、コレは確かにギズボンさんが言った事にも頷ける

「コレは確かに面白い。」

先ほど何か蒔いていたのは種だったんだろう……恐らく魔法か何かで一気に成長を促したんだ。

「コレほど驚き、また面白いモノはそうは無いね。」

「何だか夢みたいな感じだったな？かなめ」

「うん……正直まだ信じられないよ……でも」

「かなめ？」

「魔法って……凄いなあ。」

「ああ、そいつは同感だ」

本当に不思議な光景だった……異世界に来てから一番凄いなと思ったよ。

「そっか、今度ラジャニさんの本屋に行こう。」

「もしかしたら、さっきの魔法について何か書物があるかもしれない。」

「紅、帰ろうか？」

「ああ」

魔法って本当に凄いッ！今日はまさにその言葉が似合う日になった。



## 第17章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第17章 ↓

さて魔獣襲撃から少し後、魔法とはすばらしいと再認識したあの日から一週間経過したある日の事。

宿屋にてチビを愛でながら、僕はとある問題で頭を悩ませていた

それは。

「お金… 貯まんない」

そう、拠点として家、もしくは土地が欲しいと思っていたのだが、思ったほどお金が貯まらないのだ。

生活費諸々を差っぴいても、手元にある金は7万G……… 対して平均的な家屋の値段は約数十万G。

土地や購入時にかかる経費などを入れると百万は逝く。

ギルドの仕事は身入りが良いとはいえ、これは流石に時間が掛かる様な気がする。

しかしだ、ギルドで手っ取り早く稼ぐ方法は、危なっかしそうな依頼を受けるか、ギルドランクを上げるか無い。

だが正直、後者のほうはあまりしたく無い。

だってさ、ギルドランク上がるって事はさ？ 命の危険度上がるんだ

よ？

今はそれほどじゃないとしても、ランクが高ければ絶対危険な依頼ばかり受ける事になってしまう。

というか、あまりランクが高いと、下のランクの仕事はあんまり受けられなくなるのだ。

何故かって言うと……まあアレだよ？高レベルの剣士がドブ攫いしてたら異様でしょ？

それに強さの次元が違い過ぎる訳だから、大抵の依頼はすぐにこなしてしまう。

そんな事になったら、他のギルドの人達が仕事がなくなってしまいう訳で……。

え？僕達はいいのか？僕たちはそこら辺気を付けてやっているから良いんだよ……うん。

恨まれて殺されたくは無いからねえ……と話がズレたね。

「はあどうしようかなあ？いつその事……アノ【実験台が欲しい】とかいう依頼でも」

「怪しすぎるからやめれ。」

「あ、紅おかえり」

余程考えに没頭してたんだろう…紅が部屋に入ってくるのに気が付かなかった。

「ただいまだ……で？かなめ今度はどした？」

「いや、まあアレな話で恐縮なんですが」

僕は家を買うお金があまり貯まらない事に悩んでいたと素直に告げる。



「簡単に言やあ金がほしいと？」

「んまあ…そうなるかな？」

「そう言えばさっき長期の依頼になるけど、それなりに高額な依頼書がギルドの掲示板に張ってあったぜ？」

「マジで?!」

新しい依頼書かあ？どんな奴だろう？それに長期？

「ああ、俺も詳しくは見て無いんだけど…荷馬車の護衛だつてよ」

「へえ、面白そうだね？」

おお、荷馬車とかの護衛依頼、ファンタジーの定番ですか？

「とりあえず今日出たところらしいから、まだ受注しているヤツは少ないと思うぜ？募集も複数人らしいし…やるか？」

「うん、近頃運動不足な感じだったからね。ちよつど良いかも知れない」

護衛で町の外に行くんだから、ちよつとした旅行…小旅行だね。ハプニングは御免だけど、面白いものとか見れたらいいなあ。

そうだ！宿で埃かぶってるミスリル製のポールアックスも持って行く。外でなら振り回せるだろうしね。

そう言う訳で、掲示板を見に行く事にしたのであります。

……  
……  
……

.....  
で、やってきました掲示板の前。

さて、件の新しい依頼ってのはどれかな？  
か？

お、コレ

【荷馬車の護衛】

基本金 一日3000G程

・仕事は隣国ドラニまでの商品の護衛を求めます。出発は3日後、定員6名まで4人集まり次第締め切ります。

尚、1〜2週間ほどの長期依頼な為、出来る方のみ募集。魔獣および盗賊に襲われる可能性も有。

依頼主 ジャイオ・ゲイル

おお、隣国のドラニ公国までね？そう言えば、確かこの町はドラニ公国との国境沿いにあるんだっけ？  
この間の魔獣襲撃で沢山品物が造れたから、交易品として売りに行くってところかな？

「コレだね…じゃあ早速受け付けてくるよ」

「だな、それと旅支度もしとかねえといけねえな。」

「じゃあ、後で市場に行ってみよう。いろいろいるかもしれないしね」

「そうするか」

「お姉さん、コレお願いします」

僕は依頼書受注用の用紙をもってカウンターに向かった。

そういえばこの町の周辺から出るのは久しぶりか……旅用に外套の一つでも買っておいた方がいいかな？

あとシエラフ（寝袋）とか

食器とかはイメージツールで代用出来るから  
買わなくて良し。

あとは……まあ適当にみつくることにしよう。

受付に申し込みをした後、僕たちは市場へと足を向けた。

いつも人が絶えない市場、美味しい匂いが漂う屋台の群れを抜け、  
ひっそりとある路地裏への道へと足を向ける。

路地裏にあるのはいつもお世話になっているアノお店

「 また立ち読みしに来たか知識泥棒よ…あと紅坊主」

「 知識泥棒って…幾らなんでもひどいですよラジャニさん」

「 紅坊主言っな、紅坊主。」

立ち読みでお世話になっているラジャニさんの本屋に寄ってたりする。

ん？何のためか？それはね

「 で？お主実際何しにきたんじゃ？」

「 いや、まあ…色々調べ物を…」

調べモノの為である。勿論旅の為のね。

荷馬車の護衛としてドラニ公国に行く訳だし、その国ついて色々調べ  
調べておいた方がいいかなあ…って思ったからだ。

「 お主……この店を図書館か何かと勘違いして無いか？」

「 いえいえ、まさかそんな……貴重な情報の宝庫だとは思ってます

けどね」

「ならば一つくらい買えッ！立ち読みですませよつとすることで無いッ！」

「まあまあ あ、コレお土産のお菓子です。」

「ん？おお！すまんおう」

怒りかけたラジャニさんに、来る時に屋台で買ったワッフルに似た焼き菓子をあげると、嬉々として受け取った。

だんだん扱い方が解って来た気がする……というか甘いモノ好きなんだよなあこのヒト。

……序でに猫とかの小動物も好きだったりして……まさかね。

「……………ところでラジャニさん」

「ん？なんじゃ？」

「あのですね？ドラニ公国辺りの書籍ってどのあたりにありますか？」

「ドラニ公国？隣国のかのう？」

「はい、今度依頼で行くもので、初めて行く国ですから手に入る情報は集めておこうかなあ〜って思っています。」

「ふむ、なるほど。いい心がけじゃな。未知の事に関して調べる……いいことじゃ。」

うむつむと首を縦に振るラジャニさん。

しかし、焼き菓子一つでこの態度……良いのかなあソレで。

あ、ちなみに紅はすでに本棚の方で、勝手に本を出して読んでいる。

彼女意外な事に本を読むのは好きなのだ。

てつきり頭痛くなるとか言うかと思っただけど、自分の好きなジャンルならば問題無いらしい。

で、彼女の好きなジャンルだが……挿絵つきの料理本だったりする。勿論料理を作りたい為じゃない、挿絵の料理がうまそうだからだ。紅らしいと言えば紅らしい。

「じゃあ、奥の方借りますよ?」

すでにお菓子にパクついているラジャーニさんを尻目に、僕はさっさと店の奥の方に向かった。

……

……

……

「……ふう、読み終わったあ。」

立ち読みする事1時間、ドラニ公国の事が書かれた本を読み終えた僕はあくびをしながら背を伸ばした。

「あー…バキボキいつてる…」

立ちっぱなしで固まった身体をほぐしながら、本を本棚へと戻した。本に寄ると、ドラニ公国は国土のほとんどが山岳地帯となっているらしく、農業はあまり発達してはいない。

だけど、その代わりに製鉄などの技術が発達している鍛冶の国なんだって。

鉄や銅やソレらで作った武器、他にも貴重な鉱物を他国に輸出する事で生計を立てており、お国柄かお酒を好みさっぱりとした性格の

人間が多い…らしい。  
というか、性格ウンヌンはどうやって調べたんだろうか？  
アンケート？まさかねえ？

まあ表向きはそういった国で、実質豊富な資源により強力なそうびを持つ軍を持っている軍事大国でもあるんだそうぞ。

昔は他国との戦争に明け暮れた歴史を持つ古き鋼の国…と他の国で言われているんだって。

昔はクノルの町があるグランシュバツテとも戦争してたと本に書いてあった。

と言っても、かれこれ数十年前の話だしすでに国交も結んでいるから、両国間での問題は今のところ無い。

とりあえず、コレだけ解ればいいでしょ。

「そついえば、嫌に静かだな？」

いつもならラジャニさんのハタキが来る筈なんだけど？どうしたんだろ？

気になっていつもラジャニさんが居るカウンターの方を覗き込んだんだけど

「おおー 良し良し良しッ！！」

「くうーッ！！！！」

見なきやよかった…っ！かチビ済まん、僕には君を助ける事が出来ないよ。

アイコンタクトで助けてと言つて来るチビにそう返すと、いささか絶望に打ちひしがれたような目になった。

多分かなり長い時間拘束されてるんだろう……ご愁傷様。

僕はラジャー二さんに気付かれない様に、また店の奥へと戻って行った。

.....

.....

.....

「くう……」

「すっかりおつかれたなチビは」

「そりゃアレだけ撫でられ続けねえ？」

「くあう……」

紅の頭の上でぐったりとしているチビをみて苦笑する僕達。  
今僕達は何時も泊まっている宿への帰り道を歩いている。

「しっかし、いざ準備してみようと思つたら、寝袋くらいしか買うモノが無いなんてな」

「まあ新しい服と紅の分の外套も買ったけど、基本的に旅道具のほとんどがイマジンツールで造れるもんねえ」

紅は市場で買った寝袋を持ち、僕も新しく買った服を持つ。  
ちなみに寝袋はケルピーと呼ばれる馬に似た水の妖精の毛を使って編まれているので、耐水性がかなり高いらしい。

朝霧に濡れても大丈夫らしいので野宿には最適なんだとか。  
普通の寝袋2つ分と、やや高いお値段だったけど他のモノを買わない分出費は抑えられた。

服は…まあ普通の本綿の服だね。耐久力はまあまあだけど、防御力は皆無なヤツ。  
でもまあ元々紅はミスリル製の胸当てがあるし、僕はあのダンジョンで手に入れたマントのお陰で防御力に関しては問題無い。

紅の外套は黒いウールのマントで、コレも普通の奴だから特別な効果は無かったりする。

まああるうが無かるうが自力が強いから大丈夫。

「夕食はどうしようかな？昨日はシチューだったけど…」

「パスタなんてどうだ？」

「お、いいね。確か鷹の爪とニンニクが残ってたから、ペペロンチーノが出来るよ」

一々外食すると、出費がバカにならないので、最近は宿の女将さんに頼んで厨房を貸して貰って自炊している。

やっぱね、外食も良いんだけど自分で造った料理ってのも良いモノでさ…何より美味しいって食べてもらえるのは癖になるよ。

「……くー」

「はいはい、チビは果物があればいいんだよね？」

「…くあ」

未だクテっとしたチビ。流石に可哀そうだったので、この子の好物である果物を買っておく事にしよう。

\*\*\*

「やっ」



取り出したるはオリーブオイル、ソレをイマジンツールITにて造り出したフライパンに一ミリほどの厚さになるように入れる。

ちなみにフライパンには炎熱効果が付属されているので、すぐにオリーブオイルは熱くなってきた。

異世界だったけど食材のほとんどが元の世界と同じなのは助かったね。お陰で普通にレシピが使えるからさ。

「次は〜ニンニク〜」

薄くスライスしたニンニクを熱したオリーブオイルの中に投入！こんがりしてくるまで待つ。

「序でに鷹の爪」

鷹の爪も忘れない。これが結構味のアクセントになるからね。

「麺は茹で上がってるかな？」

ITで出来た鍋を覗き込み、中のスパゲッティを一本取り出し口に入れる。う〜ん、アルデンテ。

「よし！後はスパをフライパンに入れてっど。」

油をからませて完成じゃッ！トッピングのパセリも忘れないのが僕クオリティ。

「紅〜、ご飯出来たからお皿出して〜！」

「わかった」

出来あがったペペロンチーノをお皿に盛っていく。

香ばしいニンニクの香りが鼻孔をくすぐり、胃袋が唸り声をあげるかの如く音を出す。

今日の晩御飯はペペロンチーノと簡単なサラダ、後は果物が少しである。

「さて、それじゃあ」

「いただきます!」

「くー!」

さて今日の出来はどうかな？

「どう?おいしい?」

「おう、いけるぜ!」

そいつは良かった。誰かが美味しそうに食べてくれるとホント嬉しいねえ。

あ、ちなみになんだが、普通犬は玉ねぎとかに中毒をおこすけど紅はそういったの平気になんだって。

まあ今日の料理には入って無いけどね。

「相変わらずかなちゃんの調理はみてて飽きないね」

「あ、女将さん」

食事をしていると、宿の女将さんがやってきた。

「あの光るフライパンも魔法なんだっけ?」

「ええ、僕の魔法のひとつです」

便利だよねえ〜IT  
イマジナル

「でも良く料理するのに魔法使うなんて事考えたもんだ」

「はは、コレが結構良い訓練になるんですよ」

いやホントの話なんだよコレ。

さっきの調理だけでも、鍋とフライパンの並列使用と温度調節を同時にしてたからねえ。

魔力制御のいい訓練につながるんだよ。料理は魔法っていうけど、まさにその通りだね。

「使った後は消せるから洗いモノしなくていいなんて、こっちからしたら物凄くクウらやましいもんだ」

「確かにそうですね。」

意外と面倒だもんね食器とか洗うのって。

「そういえばいつも調理場使わせてくれてありがとうございます」

「気にしないでいいよ。いつも面白いものを見せてもらってるからね。レシピも幾つか教えてもらったし、それが代金代わりさ」

「いやでも男料理ですし……」

「いいんだよ美味しい料理だったらさ。複雑だけど美味しく無い料理よりも、簡単だけど美味しい料理の方がみんな喜べるからね。それじゃごゆっくり〜」

彼女はそう言うと、奥に引っ込んでいった。

「おかわり〜」

「はいはい〜」

美味しくご飯が食べられるって良い事だよな。

## 第17章（後書き）

・ども、最近うっかりが多い作者のQQQでございます！  
さてさて、かなめ君たちはどうやら旅に出られる様です。  
という訳で今回はその準備編だったりw

以上作者からでした！

## 第18章

「出歩いて…落っこちて・第18章」

3日後、倉庫区画にある集合地点に僕たちは来ていた。他の護衛メンバーと合流する為だ。

今回のメンバーは僕たちを含めて6名で、それにプラスして馬車を操る人が2名追加される。

ちなみに集合場所は馬車をとめておくためのスペースで、ココから護衛する馬車に乗り込むのだ。

「13番…13番…あつた！ここだ」

「馬だらけだな」

「まあ馬車止めておく場所だしね」

「クソもいつぱいだ…」

「…紅にはキツイかもね」

匂いがね…まあそれよりもだ。

「とりあえず一番乗りだねコレは」

「早かったかのか？」

「かな？まあ気軽に待とうよ」

「……正直長いしたく無いけどな」

「……くう」

気持ちは解らないでも無いけどね。

\*\*\*

「ねえ君達、ちよつと良いかい？」

「はい、なんですか？」

待ち合わせ場所の馬車乗り場にて待っていると、革製の鎧と楯とブロードソードを装備した、

いかにも冒険者らしい出で立ちの男性が話しかけてきた。

「たたずまいから察するに、まだ駆け出しッポイ感じを受けるなあ……  
Dが良くてコつてとこかな？」

「あの、聞いているかい？」

「あつ……すいません。なんでしたっけ？」

「いやあの……こつてギルドにあった護衛依頼の待ち合わせ場所だよね？」

「おろ？このヒトも一緒に行くパーティーの一人かな？」

「そうですね……あなた「ああ！よかったあ〜これたあ〜！！」……

……はい？」

「ちゃんとこれてよかったあよ〜！！！」

「えと……この場合どう反応してあげればいいのか？」

「あ、あの〜……なあ、お前誰だ？お前も護衛組の一人なのか？」

「紅もやや呆れた感じで目の前の彼に話しかける。」

「ん？ああゴメンゴメン自己紹介して無かったね？今回この依頼と一緒に護衛をする冒険者ギルドのキースだ」

「僕は五十嵐かなめ」

「紅だ。よろしくだぜ。あとコイツはチビ」

「くう！」

おお、やっぱり同じ依頼を受けた人だったのね。  
で、ところで

「あのう…何故に先ほど叫んだのでしょうか？」

「ギク」

いやギクってあーた。

「あ、あはは…実はその…オレは地図を見るのが苦手っていうか  
「方向音痴か？」

「い、いいや違うぞお！断じて違う！只単に…」

「只単に？」

「……………はい、すみません…ワタクシ方向音痴です。」

うわぁ…マジで？というか冒険者としてソレはどうなのよ？  
つーか暴露するの速いなぁ。

「方向音痴って…」

「うん、生まれつきらしくてさ。前にパーティー組んだ時なんてダ  
ンジョンの中で一人迷って一週間出られなかった。」

……………よく生きてられましたね？いやホント。

「アンタ…よく生きられたな？」

「ゴメン、僕もそう思う。」  
「あはは…笑うが良いさ…」

いや、笑わないけど…ねえ？

「それって冒険者として致命的なんじゃねえの？」

「グハッ!!」

「キ、キースさん?! ちょっと紅! いくらホントの事でも言わないであげるのも優しいさだよ!!」

「君が一番…残酷だあ…」

ボタンと倒れるキースさん…あは、止め刺しちった

\*\*\*

「まあその事は置いて」

「立ち直るのはや モガ」

「(しーッ! 下手な事言くと落ち込むから黙ってようよ!!)」

ふう、危ない危ない…下手なこと言ってまた鬱な空間が広がったら堪ったモンじゃ無い。

こつ言つのはスルーするに限るのさ。 処世術処世術。

「 という訳でオレは剣を使うんだけど、キミたちは?」

「 え? ああつと 」

ゴメン、さつきから話し全然聞いてませんでした。  
ええと多分自分の獲物自慢……だよな?

「僕は一応魔法使えるから基本はスタッフかな?」



「俺は武器ならどれでも臨機応変に使えるぜ？ちなみに今回はポールアックスとブロードソードだ」

そう言つて紅は武具を見せる　あ、僕はイマジンツールで造るから、今は持つてないよ？ココじゃあ良いスタッフ買えなかつたしね。

キースさんは紅の武器を見て少ししたらいきなり固まった。ステータス異常が表示されるなら石化つて表示されそうなくらいに。

「ね、ねえ？その武器つてもしかして魔法銀製？」

「？魔法銀？なんだそりゃ」

「魔法銀…ミスリルの事ですね？」

まあミスリル製なんて普通は手に入らないモンなあ。

「そう、ソレ！ミスリル！で、どうなの？」

「えと…確かにミスリル製ですけど？」

「本当に？」

「本当ですけど何か？」

「冒険者なら一度は手にしてみたいと思うあのミスリル製なのか？」

「さつきから言ってるけどそうですよ」

どうやらミスリルつてヤツはかなり貴重品らしいね。

いままで誰も言つてこなかったから気が付かなかつただけだよ。

「もしかして…君たちつてかなりのベテラン？」

「いいえ？僕たちこの仕事はじめて一カ月もたつて無いですよ？この武器もダンジョンで拾つたモノだし…なあ紅？」

「ああ、実質俺達のギルドランクはCだしな。」

やっぱり豪華過ぎなのかなあ？この装備。でもコレがあつたダンジ

ヨンはこの町の近くだったけどなあ？もしかして未発見のダンジョンなのかな？  
でもまあその前に

「おい、キースさん大丈夫ですかあ？」

「……………」

「ダメだ、完全に固まってやがる」

「くう」

シヨックで固まっているキースさんをおこさなきゃね。

\*\*\*

さて、なんとかシヨックから立ち直ったキースさん。

いまだ全員集まらない為、色々と会話をして情報を交換し合った。

どうやらこのキースさん、見た目通りの駆けだしで、一カ月前にギルドに入ったばかりなんだそう。

一応色々と経験は積んだものの、生来の方向音痴の所為か、とにかく良く迷う為依頼人の居る場所にたどり着けないことも多かったらしい。

この間の魔獣が襲来した時などは、自分が行くべき城壁への行き方が解らず、さまよっている内に何故か下の門から出てしまったからさあ大変。

Aランクの人の背後に周り必死で逃げ回ったお陰で助かったんだそう………というか本当に今まで良く生きてたねこのヒト。

で、キースさんの不幸話に引いていたら、徐々に周りに護衛の人が集まり始めていた。

集まったのは僕たちを含めて6人。

僕や紅、キースさんの他に、剣士さんであるルードさんや弓使いであるロアルさん、そして僕と同じく魔法使いであるシエルさんだ。

ちなみに剣士のルードさんは、物腰が静か…というか無口で何話しても反応が薄い人で、ロアルさんはややガラが悪い。

シエルさんは名前から解る通り女性であるが、なんとというか近寄りたがい雰囲気を持っている人だった。

で、人数もそろい、しばらくして指定された時間通りに依頼人がやって来たんだけど

「ありゃ？親方さん？」

「あん？オメエあん時の坊主か？」

なんと依頼主は親方さん（第12章参照）だった！

そうかあ親方さんの名前ゲイルさんっていうのかあ…全然知らなかった。

そう言えばこのヒトも商人だったっけ？最初あった時はエル君と取引してたもんね。

「なんと運が良いこつた！オメエらがこの仕事引き受けてくれるとはなあ？期待してるぜ！」

「えと、あのソレはどういう…？」

「しらねえのか？お前ら商人連中の間じゃ結構噂になってるんだぜ？仕事をキチツとこなすし、礼儀正しいってな？」

「まあ…出来る事をしていただけですし…」

「おまけに一度も依頼で失敗した事ないそうじゃねえか？それだけでもこの業界じゃ噂になるってモンだぜ？」

なんとまあ、確かに出来る事しかしてこなかったけど…出来る範囲

でしかしてこなかったしなあ。

まあギルドの仕事は信用第一だから？小さな仕事でもコツコツとちやんと出来る方が待遇がいいのかもねえ。

「それだけでもスゲエと俺は思うがな」

「あ、ありがとうございますゲイルさん」

「親方で良い、周りは皆そう呼ぶ。名前と呼ばれるとくすぐったくていけねえ」

「解りました親方」

ああ周りからの視線が痛い…でも何故かキースさんからの視線は尊敬の視線でこそばゆいよお。

「な、なんだか他の連中からの視線が変だぜかなめ？」

「う、うんそうだね。」

「さて、全員集まってる事だし、出発すんぞ？ルーズが馬車持ってきたからそれぞれ乗りこんでくれ」

「了解」

そう言つて親方さんとルーズ（12章に出てきた青年A）さんが持ってきた馬車に乗り込む僕等。

ふう、なんじゃかんじゃ何気にハードルあげてくれたけど、とりあえず僕たちは出来る事をしますかね。

\*\*\*

ガタゴトと馬車がのんびりとした歩調で街道を進む。車とかになれた現代人の感覚からしたら物凄く遅い。

僕のはんびりとした雰囲気の中で

「お尻痛い（泣）」

馬車から下りて横を歩いてた。いやだって座ってたら痛いんだもの……痔じゃないよ？

この世界は文明のレベル的にほぼ中世の時代だけあり、街道は未整備なんだよねコリが……。

で、凸凹とした道が続いている訳なんだけど、なんと馬車には衝撃を吸収するサスペンションが付いて無いのだ！

当然、長時間ゆられていれば、こういったのに慣れて無い僕とかはすぐに身体が痛くなっちゃう訳で……まあそう言う事。

とりあえずホントの事言うと恥ずかしいから、見張りっで感じて馬車の横を並走してるって訳なんさ。

でも、ホントのはんびりとした旅だなぁ。と言ってもまだ町を出てから1時間も経って無いけどね。

「考えてみりゃ久しぶりの外だよな？かなめ」

「ん？ああ、そう言えばそうだよな。結構アノ町に長い事いたモンなぁ」

歩いていると、馬車から顔だけ覗かせた紅に話しかけられた。

「あの森に居た時はまさかこんな風な生活する事になるとは思わなかったぜ」

「ふふそうだね。でもあの森か……何気に生活するには良いところだったなぁ……空気美味しかったし」

「マッ、今はこう言った風に旅出来るのも楽しいけどな」

「言えてる」

「なあ何の話してんだお前ら？」

「お、キースさん。いや暇だからちよつとね」

「確かにのんびりしてるモンなあ」

のんびり街道を歩きながら雑談をする僕たち。

その日は特に何か起こる事も無く、日が傾いたところで、野営する事となった。

\*\*\*

パチパチパチ……

薪が燃える音を聞きながら、夜の見張りを行う。

炎というモノは、獣を寄せ付けられない様にもするが、逆に寄せ付けてしまう場合もあるからだ。

そう言った訳で交代で見張りをしているのである。

暗闇に漂うは静寂……なんちゃってとか思いつつ、正直あまりにも暇である。

スキルを使えば数キロ単位での気配の察知が可能な為、ある程度きを付けていれば良いのだから。

最初のウチは星を眺めていたりしたんだけど、考えてみたらこの世界の星座と僕の居た世界との星座が符合する訳も無い。

ソレを思い出してちよい鬱になったけど、まあ満天の星空は見ていて気分が良い。

とりあえず、他の人と交代するまで、魔力を使って色々遊ぶことにした。

「…………ん」

目を閉じ意識を集中させる。

丹田や心臓から腕を通って指先に一本の線が付くよう意識して、魔力が通るラインを作ってやる。

すると、まるで血管の中を暖かい血液が巡るかのような感覚が、より一層強く感じられる様になってくる。

後は指先に集まったソレを更に収束させ、指の先にボールの様なものが浮かんでいるのをイメージしてやれば

「出来た」

1個の魔力の玉が完成するのデス。

「後は…集中ッ！」

浮かんでいる魔力球：今度はそれに魔力を更に注ぎ込む。

只注ぎ込むのでは無く、大きさをそのままに圧縮し収束させ、それでもなお魔力を注ぎ込む。

ある程度やってやればあら不思議、見た目は変わらない癖に、有り得ない程魔力を内包した球が完成した。

まあココまではいつも通りなんだけどね。

「ふん」

僕はその魔力球をそのまま投げた。

ビューンという擬音が付きそうな感じで跳んでいく魔力球。

「おっと…戻れ」

そう言うと、まるでヨーヨーの様に戻ってくる魔力球…フー危ない危ない。

あれアア見えて実質トンでも無い魔力が内包されているのから、下手に何かに当って魔力が解放されたらヤバい事になるんだよね。以前アレの3分の1程度で圧縮したヤツが壊れた時、辺り30m位が吹き飛んだ位だ。

「うん、誘導制御の方は問題無いね」

そう、実はコレ魔力の誘導制御の訓練なんだ。

ラジャーニさんの本屋にあった魔導書に記されていた訓練法の一つで、自分の身体から離れた魔力を自在に操る為の訓練法の一つなんだそうなの。

この訓練は何気に毎日行っていたりする。何故かというと魔力は身体から離れると制御が凄く難しくなるのは以前話したよね？

一応誰にも負けない魔力は持っているモノの、用心に越したことは無いし、何よりこうして未知の力を自在に操れるようになるのは面白い。それに最初のウチはまったく自分の意志では動かす事が出来なかったんだけど、最近になって遠隔操作のコツを掴むことが出来てきた。

「よつと」

魔力球を左右に動かす、ちゃんと動くことがわかったら今度は上下



前後斜めと続き、最終的には夜空をまるで鳥の様に飛翔させる。まだかなりの集中力を入れないと使えないけど、それでも大分形になつてきた事に、自然と頬がゆるんでくる。

そして、最後に魔力球を空高く打ち上げ、自身の操作が届く限界を見極める為、いけるところまで粘つてみた。

魔力を大分込めた為、かなりのスピードで飛んでいく光の玉、すでに肉眼では見えないけど感覚的につながっているのはまだ解る。

大体30kmを超えただろうか？正直かなり離れてしまった為、どれほど離れたのか解らない。

でも未だに感覚的には感じられる為、飛ばした魔力球が健在なのは解つた。

というかあまりに射程長く無いかコレ？目視出来ないところまでいけるってどうなのよ？

「まあいつか…戻つてこい」

僕はそう念じて魔力球を帰還させることにした。やっぱり規格外だよねえこのステータスは。

もうちょい練習すればホームイング弾みたいに追尾させることも可能になつたりして…。

序でにイマジナルも発動させてれば、空飛ぶ剣とか…：うわぁファンタジーというかカオス。

で、それからしばらくすると、目の前に打ち上げた時とは変わらぬ魔力球が浮かんでいた。

「ふう…」

僕はいつも通り、戻ってきた魔力球への魔力供給をとめて、霧散させてやる。

コレでいつもの訓練は終わった。  
で、見張りに戻ろうと思いき警戒のスキルを発動させる……ん？

「誰ですか？」

なんかかなり薄いけど人の気配が感じられた。この気配はたしか……

「……シエルさんですか？」

「あら、気配を消す魔法は使ってたのにバレてしまったのね」

ふと気が付けばいるシエルさん、そう言えば次の見張り役はこの人  
だっけ？

でもなんで気配消してるんですか？

「その方が面白いからよ」

どうやら顔に出てたらしい……といかアナタそんな性格でしたっけ？

「あら、面白いモノを見て喜ばない人間がいて？」

「面白い……モノ？」

「ええ、貴方の魔法……かなり面白いわ」

そりゃ神さまからのチート補正いれられてますからw

「ねえ？さっきの魔法、どこでおぼえたの？」

「えと……魔導書で覚えました」

「ホントに？誰かに師事した訳じゃ無くて？」

「ええ、ラジャニさんとこの本屋で見た魔導書をよんで……」

「ラジャニですって!？」

突然目を見開くシエルさん。

「ココんとこ姿を見ないと思ったたらクノルに居たのね…まったく」

「あ、あのシエルさん？」

「ねえラジャニにあつた事あるのよね？」

「えと、確かにあつた事ありますよ？顔見知りですし…」

ガシツ！

「え？ええ！？」

「教えなさい！クノルの何処にラジャニが居るのか！」

いきなり肩掴まれた？！うわっ！ちよつとゆすらないで！！

「い、言いますから！ゆすらないで！というか落ちついてください  
！！」

「あらごめんなさい」

あうう…頭が揺れるう…何なんだよお一体？。

彼女は興奮を抑える為一息ついた後、見てる方が底冷えする様な笑  
みで

「ふう…さて教えてくれるわよね？」

「イ、イエスマム…（ガタガタ）」

そう聞いて来た…ラジャニさん、アナター一体何したんです  
か？

この後、彼女に僕が知っている事を全て話した。

結局ラジャニさんと何があつたのかは教えては貰えなかったし、正  
直聞きたいとは思わなかった。

僕が覚えている事を全て話し終えると彼女は

「情報ありがとね？それじゃあ、おやすみなさい」

と行って帰ってしまった。

正直やっとな解放されたので、安心したのもつかの間…。

「あれ？僕見張り続行？」

結局次の交代のキースさんが来るまで、見張りを続けるハメになっ  
てしまった。

でもラジャニさんとシエルさん、意外なところで人のつながりがあ  
ったんだなあ。

そんな事を考えながら結局見張りをやっちゃった僕は甘い人なのか  
しら？まあ良いけど…。

ちなみにその次に交代に来るはずだったキースさんがまったく  
起きなかつた為、結局寝ずの番をしてしまったのは余談である。

## 第19章

く 出歩いて…落っこちて・第19章く

クノルの町を出て二日目。  
相変わらずのんびりとした旅を続けていた。

「暇だなあ」

「うん」

魔獣が出無いのは良いんだけど…：…かなり暇である。

「まあまあ、平和で良いじゃないかお二人さん」

「あ、キースさん」

ちなみに僕たちの目的地は隣国のドラニ公国領にあるクノルの町と同じく国境沿いにある町だそうな。

そこについて降りも護衛する訳なんだけど…：…ここまで暇だと眠い。

「平和なのは良いんですけど…：…」

「ああ、気がゆるんじまいそうで怖いぜ」

「はは、只の荷運びにそこまで緊張してたら疲れちゃうよ?」

「まあそうなんですけどねえ」

魔物の一つでも出てくれないと護衛の意味あるのかなあって思えちやうんだよね。

あれ？もしかして僕結構バトルジャンキーっぽい？……………ああ！平和って良いなあ！！

「でも町の外なのに全然魔獣を見かけないんだな？」

「そりゃそうだろう？けもの道ならいざ知らずだけど、ココは町と町をつなぐ街道だぞ？」

魔獣避けくらいしてあるさ」

「魔獣避けですか？」

「そう、魔獣避け。あんまし一般には知られて無いけど、

そうった効果のある結界発生機っていう魔法道具があるんだ。ほらソコの石塔もそうだよ」

キースさん指さした所にあつたのは、高さが膝くらいまでの大きさの石で出来た石塔だった。

そう言えばコレ町を出てからずっと道沿いに1km間隔で並んでた様な気がする。

「魔獣避けの石塔はガラクトマン魔法学校で20年ほど前に開発された技術でさ？」

大抵の街道には必ずと言っていいほど設置してあるだつて

「正確には22年前よ……」

キースさんの説明に呟くような声で訂正を入れたシエルさん。それに気が付いていないキースさんは話を続けた。

「という訳で魔獣避けのお陰で昔よりかは安全に旅出来る

ようになった。

けど太陽の光を触媒にしてるもんだから暗くなると効果が落ちちやっつて、

夜は平原で寝るよりかは安全だけど、魔獣が現れる様になるんだ」  
「本当は夜でも効果が落ちないヤツもあるけど…学校が開発費ケチつたのよ…」

これまたキースさんのうんちくに独り言のように訂正を入れるシエルさん。

というか何か裏側知ってるっぽい発言が入ってたような？ 気のせいかな？

「でもよお、おかげで俺達暇だぜ？」

「いや、なにも襲ってくるのは魔獣だけじゃないさ。例えば

ドス

キースさんの肩から矢が生えた?! いけないッ!

イマジンギョウシールド  
「IT大盾」

ヒュッ! カカカカカンッ!!

矢を受けたキースさんを横目に、咄嗟にITシールドを馬車が覆える位で展開した。

二台分の馬車を覆える程の盾に矢が辺り跳ね返る。

ふー、反射的にやったけど間に合ってたよ。後少しでも遅れてれば全員矢達磨にされてたよ。

警戒のスキルを切つてたのがあだになつたな。

「ちきしょう！盗賊か！」

「どうします親方さん？」

「どうしたもこうしたも迎え撃つしかねえだろ？かなめは矢の防御で動けねえだろうから……」

親方さんは僕たちを見まわす。

「シエルとロアル、お前らが弓使つてるヤツをやれ」

「はいはい、了解。」

「チツ、しかたねえな」

「残りの野郎どもは矢が来なくなつたら好きなだけ暴れるよ？」

「これで積み荷に被害でも出したらテメエらぶつ潰すからな！！」

「了解！！」

「あとルーズ！テメエは隠れてる？戦えねえんだからな？」

「もうすでに馬車の下にいますから平気です」

……あはは、親方さんという最終防衛ラインを突破できる人って少ないと思うけどなあ。

まあ連中を突破させる気はもちろん無いけどね。

「さてと、そいじゃあお仕事すつかね？　ハッ！」

ヒュンという音を立てて、ロアルさんが放った矢が相手の方に向かってすぐ飛んでいった。

そしてトスって感じで、弓を使っていた盗賊の額に突き刺さる。



「へっ！ビンゴッ！！」

そう言いつつ次々と矢をつがえるロアルさんの横では、シエルさんが詠唱を終えて魔法を放とうとしていた。

「来たれ風神の投げ斧、目の前の敵を打ち砕け！」エアリアル・ファラリカツ！」

風で出来た巨斧が、シエルさんの横に浮かび上がる。

かなりの魔力を込めているらしく、以前見た他の人の奴よりも二周り大きい。

「いけっ！」

放たれた巨斧は針路上の盗賊達を簡単に薙ぎ払った。

うわっ…すご…上と下で泣き別れの遺体がそこいらに転がってら。

あんまし凝視すると気持ち悪くなりそうなので、僕は盾を維持する事に専念することにした。

「では…いく」

「俺も掃除してくるぜ」

シエルさんの魔法で相手が動揺している間に、紅とルードが駆けていき盗賊達を次々と屠って行く。

弓使いが全滅したので僕は盾を消し、今だ矢が突き刺さっているキースさんの元に向かった。

「キースさん、大丈夫ですか？いま回復かけますから」

「君は回復魔法も使えるのか？……解った頼む」

「それじゃあ…矢抜きますから…ヨッ！」

「ウギヤっ!」

返事を返す前に不意打ちで矢を引き抜き、回復魔法キュアウィンドをかけて傷を塞いで上げた。

「……………はい、コレで良いです。とりあえず応急処置ですから、あまり動かさない方が良いでしょう?」

「イタタ…出来れば一声欲しかったけど、すまない助かった」  
「どういたしまして」

僕はキースさんの傷が塞がったのを見て問題無いと判断。  
そのまま盗賊達がどうなっているのかを見に行った。

さて、見に行った先ではもうすでに盗賊達は詰みの状態になっていた。

どうやらそれほどの規模の盗賊団では無かつたらしい。  
精々多くて30〜40人程度だったのだろう。

弓隊はロアルさんの狙撃とシエルさんの魔法で全滅。  
他の盗賊もルドさんと紅が倒している最中だった。

「でりゃあああッ!!!」  
「ぐがっ!」

紅がポールアックスを振り相手を打ち倒したが、  
長柄武器故の打ち降ろした所為で出来てしまう隙をついて、盗賊が襲いかかる。

「隙あり！」

「ハッ！隙なんてねえ！！！」

だが、彼女はポールアックスの柄を蹴りあげ、そのまま近づいてきた盗賊を斬り捨てた。

「ぎゃッ！」

「おしつ一丁あがりつてな？」

残り数人…後少しで終わるとおもったその時だった。

ドゴンッ！

「ぐうッ…！」

「ルードのおっさん！！！」

剣士のルードさんが吹き飛ばされた。

現れたのは身長3mはありそうな巨体の持ち主。

「仲間殺した…オメエら！オデ許さなイ！！！」

そして吹き飛ばした張本人、身体が異常に大きな盗賊が、棍棒を手に襲いかかって来た。

「ギガース（巨人）じゃない！！なんでこんなところにッ？！」

「コロ、殺スううう！！！」

「ガッ　！！！」

「紅ッ！！！」

シエルさんにギガースと呼ばれていた盗賊が紅を棍棒で殴りつけた。ダメージはあまりなかったみたいだけど、あのウエイト差はキツイ。ギガースは倒れた2人を標的にしたのか、棍棒を振り回しながら2人に詰め寄ってきた。

「ちくしょう！なんて堅い皮膚してやがんだ！矢が通らねえ！！」  
「普通の矢じゃ無理よ！ヒュドラの毒矢でも無い限り効果は無いわ！！」

ロアルさんの矢も当たっているのだが、どの矢も身体に弾かれてしま  
う。

「ブラストツ！」  
「グギャツ！イでえ！イでえよ！！」

僕もブラストを撃ったけど、足止め程度にしかならない。  
それどころか、痛がってはいたが、全然傷を負っていないのだ。  
一体全体、何がどうなってるんだろう???

「ギガースは強靱な肉体の中に高い魔力を持つ種族よ？魔法も効果  
は薄いわ！！」

そうなの？！というか魔法使いの天敵じゃないソレ？！  
あ、でも痛がっているから効いて無い訳じゃないんだ……。

「イダイことしやがつで！オメエから潰す！」  
「え、ちよっ！コツチくんな！！」

標的を僕に切り替えた？！っーか怖ッ！

戦車みたいに突進してくるってどうなのよ!?

「逃げなさい!」

「逃げるポーズ!」

シエルさんとロアルさんに言われなくてもすでに逃げてます!

「までー!!!」

イメージはモビルスーツ

「ええい! IT大盾」

「なっ?」

ガンっ!

イツデえ!!!!!」

目の前にIT大盾だして頭ぶつけてやったぜ!!  
よし、この間に

イメージはモビルスーツ  
「IT巨大剣!!!」

莫大な魔力にモノ言わせ、僕の身長の5倍の巨剣を造り出した!!

「只身体が大きいだけの巨人なんて、この剣で倒す!!ハアッ

」

僕は大きな剣を、ギガースに向けて振り下ろした。

ギガースは動かない、コレで勝ったと思った……だけど

「フンッ! パシンッ!」

「「白刃取りいい?!!!」」

「……ウソん」

真剣白刃取りですかああ！！！？ツワモノや…ココにツワモノがおるで…。

「ふんぎがああつ！！」

「うわったツ！！」

とまあ、ふざけた事考えてたら、ギガースに掴んだ剣を強引に跳ね除けられる。剣を持っていた僕も、その力で引きずられ体勢を崩してしまった。

「ええいコナクソ！！」

僕は巨剣を縮め、空いている左腕でIT大盾を展開し、咄嗟に防御行動に出た。

ギガースが隙の出来た僕に何をするのかは解っていたからだ。

ドゴッ！！

「ぐぐぐ…」

案の定ギガースは棍棒を僕に振り上げ、大盾に激突させていた。

お、大盾にしといてよかったあ、空中に展開できるから力比べしなくて済むわ。

ギガースの丸太みたいな腕をみたら、直に力比べなんてしたか無い

ですハイ。

さて、ギガースをIT大盾で一瞬だけ止める事が出来た。だがまだギガースは無傷：なので

「シエルショット！」

至近距離で魔法の散弾を浴びせかけた。

ギガースは視界が散弾に覆い尽くされ、生き物が取る反射的防衛として目を隠す動作を起こった。当然ソレはかなりの隙が出来る事を意味している。

「ITパイク！ヤアツ！！」

僕はその隙にITにてパイクと呼ばれる突き刺すための槍を造り出し、ギガースに向けて投擲した。

紅程では無いけど、僕もそれなりに力が強い。

おまけに今回投げた槍は先端を僕が出来る限界まで尖らせてある。

「がああああツ！！！！」

投的した槍は太ももに当り、矢以上の質量がある4m級の槍が、ギガースの岩みたいな皮膚を食い破る事に成功した！

「もう一発！！」

同じように反対側の脚にもパイクを突き立て、動きを制限させる事に成功……後は。

「紅!!」

「あいよ!!」

ザンツ! ドサ

戦闘に復帰した紅が右腕を斬りおとす! 痛みと怒りで野獣の様な咆哮をあげるギガス。ただどまだ攻撃は終わってはいない。

「先ほどの痛み…返してやる」

バシツ! ドス

シエルさんに回復魔法をかけて貰ったルードさんが、今度は左腕を斬りおとした。

コレでもう棍棒を持つ事は出来ない、だがその巨体に宿るパワーは残っているので安心は出来ない。

「チツ…とっておきなんだがよ」

ロアルさんはそう言う懐から黒い玉を取り出し、それから伸びている紐に火を付けた。

「吹き飛んじまいなツ!」

ドゴ ンツ!!!!

彼が投げた玉 レトロチックな爆弾 がギガスの足もとで炸

裂!

轟音と炎の中にギガスが包まれる!!

「破滅と勝利をもたらす魔剣 今ここによみがえれ」 テイルフィンゲツ!!」



そして止めに、詠唱を終えたシエルさんの上級魔法がギガースに襲いかかった！

魔力量からして、恐らくは奥義とか秘術とか呼ばれそうな攻撃魔法だと思う。

そして、その高魔力で出来た幾本もの闇の魔剣が、高い魔法耐性を持つ筈のギガースの胴体に次々と突き刺さっていく…。

「ぐぎぎ…」

「最後は…コレでツ！ハイブラスト！！」

最後の締めめに、僕は普段よりも多めの魔力をつぎ込んだブラストを撃ちこんだ！

あ、ちなみにハイブラストとか言っているけど、実際は只叫んだだけです。

その方がなんとなく気分が出る様な気がしたから……まあソレは置いて！

僕の強大な魔力をつぎ込んだブラストが極太のレーザーとなってギガースを包み込んだ。

ギガースは断末魔をあげる暇もなくレーザーに飲み込まれし、全身が焼け焦げていく。

ブラストが終わると、全身からプスプスという音を立てて、巨体は地面とキスをした。

確認の為にITで造った杖の先っちょでツンツンしてみたけど反応が無い。

どうやら倒す事が出来たようだった。

ふう、何とか倒せたなあ…それにしても手強い敵だった。  
しかし、とっさの事とはいえ、みんなで連携が出来るとは思わなかったけどね。

「ふう、こいつで終わりってな。そっちはどうだいルードのおっさん？」

「……………もういない」

怪我ただけで済んだ盗賊が逃げだし、積み荷に被害は出て無い…  
どうやら守ることは出来た様だ。

「なんとか終わったみてえだな？」

「おつかれ紅」

「あ、かなめ、親方。」

とりあえず戦闘が終わった事に胸を撫でおろしながら、僕は紅に近づいた。

しっかし、初めて人の斬り捨てられた死体を見たんだが…あんまり動揺とかしないなあ？

コレも自称神の改造の所為……なのかな？

でも……………だとしたらなんか最悪。

だって人の精神までひっかきまわしてくれたって事だもの…。  
まあこのくらいの事で驚いてたら、生きてはいられなかっただろうから、良いんだろうけど…さ。

なんだか自分が酷く冷酷な怪物になっちゃったみたいで……いやな気分だ。

「とりあえず被害もねえし、キースの方もかなめが直したらしいから、」

「周囲を警戒しつつこのまま進むぞ？」

「了解」「」

まあ気にしても仕方ないか、僕はまだ死にたくないし？

むしろこれくらいでも動揺しないのはプラスになる……うん。

そう、プラスに考えるんだ。落ち込んでても良い事無いからねえ。

「おゝいかなめツ！置いてくぞツ！！」

「あ、すいません親方ツ！！」

馬車が再び歩を進め、街道を進んでゆく……。

本当は殺してしまった盗賊達にお墓の一つでも立ててやりたいところだが、

この世界じゃ何時襲われるか解らない以上、出来ない相談だ。

まあ何と言うか自己満足に過ぎない事だしね？

それでも、死んでしまったら関係ないと思える僕は偽善者何だろうか？

「まっ、どうでもいっか……」

考えてもしょうがないし、何より大事なのは自分自身……うん、この世界に来てタフになったなあ。

そんな事を思いつつ、足早に進む馬車の横を走る僕であった。

ちなみに、盗賊達はどうかやら賞金首だったようで、  
後にソレを倒したと言つ事でポーナスが入ることになるとは思いも  
よらなかつた。

## 第20章（前書き）

日常編かな？多分…。

## 第20章

く出歩いて…落っこちて・第20章

「弓つてのはよ？狙うか狙わないじゃ無くて、すでに当たっているっていうビジョンが

自分の中に無いと当らねえのよ」

「へえくそうなんですか？」

「そうよ、そんでもってそのビジョンを持つ為に、自分と戦う訳だ」

「自分と戦う？」

「当らんとか、どうせダメだっていう心を持つちまうと矢はブレちまう。

迷いがある時もそうだ。その心の内面にいかにウチ勝つかが弓を放つ上で大切なことだ」

「なるほど…勉強になります」

「良いつてことよ」

クノルを離れてすでに3日目に突入した。

馬車の横を歩きながら、たまたま弓の話をしたら、

ロアルさんのうんちくが始まり色々と話してました。

流石にご自分の獲物の事だけあり、詳しいですハイ……でも

「それに見てくれよ俺のこの弓…普通は動物の骨と木を合わせて作るモンだが、珍しい事に金属製の金属弓なんだ。クロム鋳とモリブデン鋼と少量の魔法金属を合わせて作り上げたコイツは弾力性を失わずそれなのに軽くて丈夫、錆びない上に刃も取り付けてあるから近接戦にも対応可能、おまけに」

ご自分の世界に入り込みやすい人物だったようで、もう誰も聞いて無いのに説明し続けるその姿は、なんかとつてもシユールだと思う。

ちなみに何でこうなったかというところ、あの寡黙なルードさんにイマジネーションについて色々と聞かれたからなんだ。

ほら、この間のギガスとの戦いで、いきなりパイクやら杖やら武器こさえてたじゃない？

それが面白かったんだそうで…。

ルードさん、口数がものすごく少ないから、断片的な情報を組み合わせたので、

どっか抜けてそうだけど多分そんな感じ。

で、ソレを横で聞いていたロアルさんも話に参加。

気が付いたらロアルさんが自分の弓の心構えやらなんやら色々説明始めたってワケ。

「 本当ならミスリル製とかアダマントタイト製が欲しかった」

「 たんだが、そんな高価な代物は一般には出回らねえ…だから俺は  
」

この説明……はよう終わらんやろうか？

\*\*\*

……さて。

「 な、なんでこうなったんだらう？ 」

「 …………… 」

昼時に僕が馬にエサあげる為に離れた後、みんな先に食事を始めた  
筈んだけど…

戻ってみたらシエルさん以外死屍累々…なんでやねん。

「 シエルさん、僕が離れている間に一体何が？ 」

「 解らないのよ…みんなご飯食べたらず突然苦しみ出して… 」

お皿に残っているモノに目を向けると、普通に美味しそうなスープ  
が湯気を立てている。

普通の人なら出されたら食べてしまっただらう…でも魔法使いの僕に  
は解る。

なんか物凄く禍々しい魔力が、皿から溢れ出ている



のが!!。

「な、なんとというダークマター」

「ダークマターは地上に存在出来ないのよ?すぐに拡散しちゃうから専用の魔力釜が」

「いやいや、そういう魔法学的意味では無くてですね?

というかなに訳わかんない事言ってるの僕?

「今日の料理作った人は誰なんです?」

「私よ?おかしいわねえ?いつもとおんなじように作ったのに…元気が出る様に薬も混ぜたのに…」

「……明らかにソレが原因じゃないですか?シエルさん」

シエルさんが懐から取り出した、これまた危険色ばつちしな液体の入ったビン。

「フーか表示にドクロついてますよ?どう考えても原因それですね?

「あら?あたしも同じモノ食べて平気だったのだけど?」

「……ちなみになんですけど、その薬って本当に栄養剤なんですか?」

「ええ、あたしの若さの秘訣の一つなのよ?せっかくだから皆におすそわけしようと思ったのに…」

「若さについては聞いて無いですけど…材料何なんですか?」

「えーと、ドラゴンの生肝にマンドラゴラのエクス、ベヒモスの牙の粉にドライアドの花を加えて、

フングスの胞子を混ぜた上に」

「それ、魔法使いじゃ無い普通の人間が食べても、平気なんですか?」

どの材料も容易には手に入らない上、自称神から貰ったと思われる僕の中の魔法知識によると、

下手に魔法耐性が低い人間に使うとヤバいみたいなんですけど？

どれもコレも混沌やら闇やらの魔力を内包してあるモノばっかだし…  
闇属性に耐性ないと死ななくても寝込む事确实だと思つなあ…。

「……………あ！そっか！」

「忘れてたんですね？そんなんですね？」

「楊枝のほんの先つちよ程度だから大丈夫かと思つただけ…」

ちよつと〜シエルさん？コツチ向いて喋って下さ  
いヨ？

「あの…とりあえず皆を介抱しないと、なんかヤバそうですね？」  
「そうねえ、面倒臭いけどしょうがないか。全くこの程度の魔力で倒れるなんて情けない」

いや、普通食事で倒れるなんて想像出来ないと思いますよ？  
しかし紅すらも倒すとは…恐ろしいですね。

こう言うのを“敵は内にアリ”っていうんだっけ？

違うか。

「ぐお…あのいけすかねえガキが10人!？」

「ネギこわい…ネギ怖い…ネギコワイ…」

「あは…ここどこかな?…え?天国?」

「……………むう」

「弓も良いけど…剣もいいなあ…」

「か、かなめ〜…ご飯抜きは勘弁…」

皆結構うなされてるなあ…。

ちなみに上から親方、青年Aことルーズさん。  
そろそろ本気でヤバそうなとこに迷い込んでるのがキースさん。

後はまあ…台詞で解るでしょ？

「とりあえずキースさんの体力が本気でヤバそうですから、回復魔法かけときます…」

「そうねえ、じゃあかなめ君お願いね？こうなったら自然と魔力が抜けるのを待つしかないわ」

「……町につくの遅れそうですね」

「まあ…ゆつくり行くのも良いんじゃない？」

まだ昼間だし、街道沿いに居るから魔獣の心配はあまり無いけど、遅れちゃわないか心配だ。

幸いなことに予定よりも順調に進んでたらしいから時間的余裕は十分にあるんだよね。

「う、うう…ウリイイイ!!」

「はいはいキースさん、いま楽にしますからね？キュアウィンド」

「ガ、ガク…」

「いやガクって口で言う普通？」

回復魔法をちよつと意識無いくせに錯乱中のキースさんにかける。

考えてみると、この回復魔法も万能なんだよねえ。

傷を治すのは勿論のこと、傷口の消毒や解毒、解呪まで何でもござれだもん。

風邪だつて引き始めだつたら効果あるし、マジで万能っス！

まあその代わりプラストの三倍疲れやすいんだよねえ…魔力的な意味と体力的な意味でもさ。

何気に僕の魔法、体力も使いたいだし。

「おおつ…か、かなめえ〜ご飯野菜だけなんて…」

「一体紅はなんの悪夢を見てるんだろうか？というかご飯のことばっかじゃない？」

「ぐ…ガ、ガキが来るんじゃないやねえ！親方流気合砲！！」

ドゥン！！

「ミギヤっ！！」

あらら、こっちはコッチで大変な事に、意識が無いから威力は無いけどルーズさんご愁傷様。

「一応回復魔法かけとくから、まあ頑張つて？」

「…あ〜アルテミスのお弓だあ〜…」  
「……………むう」

「一方コッチは静かなモンで…というかルードさんどんな夢見てんだ？  
一人だけ沈黙を守るなんてルードさんらしいと言えばらしいんだけど…何だかなあ。」

「さて、とりあえず平らな場所に寝かさないと…」  
「私も手伝うわ」

「とりあえず、僕は倒れたメンバーそれぞれを寝袋広げた所に運ぶ事にする。」

「何気に皆を運ぶ時、魔法でシエルさんも手伝ってくれたから、罪悪感はあるみたい。」

「最初は近寄りたがい人だったけど…良い人なんですな。」

「うゝ…水くれえゝ」  
「…みずくれゝ」

実は皆…本当は起きてるんじゃないでしょうね？

\*\*\*

結局この不幸な事故（人災とも言う）の所為で、半日は強制休憩の時間になってしまった。

まあ運の良い事に、ココはすでにドラニ公国領に入っていて、町にほど近い場所だ。

町に近づけば近づくほど、強盗窃盗盗賊その他は出にくくなる。

魔獣はそうでもないが街道の魔獣避けの石塔がある為、余程の大物でも無い限り襲ってはこないだろう。

「ふいー皆なんとか落ちついたよ」

「お疲れ様ね」

まあ、その半日の間殆ど僕とシエルさんが皆の看病してたんだけどね。

「みんな意識飛んでる筈なのに動き過ぎだよホント…」

「まさか私の料理でこんな事になるなんて、思っても見なかったわ」

何故か意識無い筈なのに、寝言は言うわ技を繰り出すわ…

あまりに酷いからITT大盾裏返してかぶせちゃったくらいだもんね。

なんかITT大盾の裏で阿鼻叫喚な叫び声が2人分程聞こえたけど…

まあ大丈夫でしょ。

二三回様子見ては回復魔法乱れ撃ちしといたからね。

「まあとりあえず一息入れましょう？はいコレ」

「あ、どうもありがとうございます。お？スープですか？結局お昼食べて無かったからちよつとよかった」

ゴクゴク

「ふうー温まるなあ……………ん」

はいココで問題!!

Q みんなが倒れた時の原因は？

A シエルさんのスープ。

「あ、あのう…コレってあのスープ？」

「ええそうよ？温めなおしたの。何か問題ある？」

「いや問題ありで…あり？何とも無い？」

おかしい！確かに飲んでしまった筈だぞ？！もしかして皆が倒れたヤツじゃないのかコレ？

「あなた一応魔法使いなんですよ？これくらいの魔力でどうにかなるもんじゃないわよ」

「あ、そう言えば僕、一応魔法使いだったっけ…あ、でもちよつとくらくらするかな？」

うん、何だか胸やけツポイ感覚…いやどつちかっていうと船酔い系？

とりあえず慣れて無い感じが気持ち悪い。

「くらくらする程度なら問題ないわ。むしろ効果が出ていると考えて良いわね」

「はあ？まあ良いですけど……あ、ホントだ。だんだん治まってきた。」

なんか身体が適応したのか、飲んでも全然平気になってきた。魔力に慣れてしまえば、このスープ美味しいなあ。

「しつつかし、なんじゃかんじゃあって騒がしい護衛任務でしたね？」

「あらあら、帰りもあるんだからこの程度はまだ普通の範疇よ？」

「そうですね……もう絶対変な薬は入れないでくださいよ？」

「そうねえ確かに皆に倒れられると厄介だし“みんな”のヤツには入れない事にするわ」

なんだかある部分が強調されていたような気もするけど……まあいいか。

「ところでどう？なんか身体楽になって来たんじゃない？」

「おろ？言われてみれば」

そう言えばさつきまで介護…じゃなくて看護で疲れてたのに、なんだ楽になってるぞ？

えーと、やっぱりあの薬のお陰でしょうか？

「とりあえず魔法使いに使う分には大丈夫そうね」  
「みたいですね……皆大丈夫かな？」

ここまで気が動転してた所為でずっと介抱してたけど……  
まさか紅まで倒れるとは思っても見なかったなあ。

「多分大丈夫よ。むしろ起きたら身体が楽になっていて驚くかもしれないわよ？」

「まあ皆の場合只単に“魔力酔い”ですからね」  
「そういうこと」

魔力酔いとは 魔力に酔う事ですハイ。

え？そのまんま？仕方無いねえ、じゃあ延々ダラダラとした説明を……え？ソレはいい？

じゃあ、まあ簡単に

魔力酔いっていうのは、その名の通り自身の持つ魔力以外の強力な魔力に対する拒否反応の事だ。

この症例にかかるのは、例えば長時間高濃度の魔力に晒されたとか……何か大魔力を含む何かを体内に取り込んだ時に起こる。

本来、生物における体内に留めて置ける魔力の量は、鍛錬した・して無い等の個人差があるけども通常は一定である。その上限以上に魔力を無理やり取り込もうとすれば、当然、器たる身体が耐えきれなくなつて拒絶反応をおこすつて訳。

皆が倒れたのも、上限以上の魔力を身体の中に取りこんじゃって、その所為で身体の防衛機構が働いた結果という事だ。



ありとあらゆる…森羅万象のモノに宿る魔力は、物質だけじゃなくてアストラルとか呼ばれる領域にも関与がある訳で……。

下手すると異形の姿に原子配列変換が起こっちゃうたり、精神が破壊されて一生廃人なんてことになりかねない。

まあ簡単に言えば取り過ぎ吸いすぎには気をつけましょって事なのさ。

お酒やタバコとおんなじだね。

以上、自称神から頂いていた知識と、ラジャニさんの本屋にて手に入れた知識を

つなぎ合わせた穴だらけ魔法理論のコナーでした！あーしんど…。

「……………ふむ、楊枝程度でも副作用アリ。製品化にはまだ程遠いわね」

……………なんかシエルさんが手帳片手にブツブツ言ってるけど……。  
もう説明とかで疲れたから気にしない事にしよう…ウン。

「やっぱりバンシーの涙は強力すぎたわ…次は妖精の粉を試してみましょ。」

訂正、やっぱり気になります。

誰がこのヒト何とかしてえええ！！！

「「「「「うん」「」「」

皆ダウン中でした……アカンやん。

ちなみに次の日の朝、ダウンしていた皆さんは完全復活を果たしました。

序でお肌つやつやの、髪の毛のキューティクルも復活の、しみそばかすが消え去るのだの、

という効果が発揮され、紅除く全員が5歳は若返っていた。

そして、何故か昨日のお昼時からの記憶が、全員消え去っていました。

どうやら無意識のうちに封印したツポイです。

さ、流石現役の魔法使いの薬……恐るべし。

## 第20章（後書き）

・ども作者のQOLでっせ。

久しぶりにアクセスのヤツみたらPVが何時の間にか8万超えていました。

いやホント、この作品を読んでくださる皆様に感謝って奴ですハイ。

これからも更新遅めですけど頑張ろうと思います。

以上、作者からでした。

## 第21章

「出歩いて…落っこちて・第21章」

さてさて、あの魔力過多の料理事件の所為で半日程時間食ったけど、何とか目的の町にたどりつく事が出来た。  
全体的に見れば、何気に予定よか速かったりするから問題ない。

「で、着きましたのが国境の町ネテか。」

クノルの町よりも、強固な城壁がある以外は、殆どクノルと変わらない町並みだった。  
国境を跨いでいるとはいえ、基本的な生活様式はさほど変わらないからだと思われる。

ちなみに親方たちは持つてきた交易品を渡したり、商品のレート決めたりする作業がある為。  
丸二日はネテから離れられない…なので護衛の僕たちはそれまで自由時間なのだ。

という訳で、各々好きに行動してらって訳。

ルードさんは武器屋と鍛冶屋めぐりに行くらしいし、ロアルさんは酒場で飲みまくるらしい。

ネテは一応交易が盛んなところだから、クノルとは違った酒が楽しめるからなんだそう。

ちなみにシエルさんは昔の知り合いに会いに行くと言っていました。あの薬の材料の幾つか分けてもらうとか何とか……いつか刺されるんじゃないアノ人。

え？キースさん？アノ人は自己鍛錬してくるとか言ってますで町から出てるよ？

方向音痴なのにね……………後で捜索しないといけないかも知れない。

「おお！大ネズミのかば焼きだと！！か、かなめ！！」

「はいはい、無駄遣いしなきゃ怒らないから一々聞かなくてもいいよ？」

僕たちも僕たちなりに、観光気分でネテを散策しておりました。

「うめえ！！」

「ちよつ！何本買ってるの！？」

「軽く10本だけど？」

神さま…財布がどんどん軽くなりそうです。

……………

……………

.....

ちよつと財布の中身が心もとなくなつて、ルーと涙が出そうッス。  
まあ、いざとなればそこら辺の魔獣狩つて、毛皮なりなんなり売れば良いから？

それほど深刻に考える必要も無いけどさ。

「それにしても、人が多いねえ」

「クノルの2倍はいるんじゃないか？」

ガヤガヤと人でいっぱいの市場。

クノルの町のバーゲンの日並みの人ばかりだけど、ネテで今日はそういつたイベントは無い。

コレがネテの普通の風景なんだろうなきつと。

「でも町自体はあんまりクノルと変わらない ドンツッ！！ イ  
タツッ！」

「ぼつつと突つ立つてんなバカ野郎！！」

歩いてたら、いきなり誰かに追突された。

見れば小さな子供が、ちよつと道を抜けて走って行ってしまつてる  
らだった。

「かなめ！！あのガキ！！」

「紅、大丈夫だから！ちよつと驚いたただけだし……ソレにしても活  
気ありすぎだよ」

怒つた紅をなだめつつ、ホント活気がある場所だなあと苦笑した。

「ん？これは？」

ふと足元を見ると、小さな袋が落ちている……財布かな？  
で、拾ってみたら、どうやら何かのお守りっぽい。

「誰のだろう？」

「あん？ソレさっきのガキの落したもんだぜ？」

「解るの！？」

「おいおい、俺が元々何だったのか忘れたか？」

あ、そう言えば犬でしたねアナタ。

「ま、ココに落としておくと誰かに踏まれるかも知れないし、一応預かっておくかな？」

「良いんじゃないか？どうせ後二日はいるんだし、もしかしたらどこかでまた追突されるかもしれないぞ？」

「はは、追突はいらないかな？」

僕は袋を懐にしまい、その場を後にした。

\*\*\*

「紅ッ！見つかりそう?!」

「(任せるッ！かすかだが匂いが残ってやがるッ!!)」

はい、いきなりの事で驚きでしょうが、実は

「それにしてもスリだなんて……」

「(町中だからって気を抜いた所為だな)」

「あう……言い返せない……」

「（とにかくあのガキ追うぞ？）」

さっきの子に、財布スラれましたですハイ。

イヤね？腰巾着みたいに腰にぶら下げて置いたんだけど、それがあだになったみたい。

え？なんでスリだって解ったか？

うんとね？腰巾着自体は、一応きちんと結んでおいたから、落すと気が付く筈なんです。

何よりも決定的だったのが、腰巾着を結んだ紐が、鋭利な刃物：多分ナイフで切られてた。

紅によると、その切られた紐にさっきの子の匂いが付着してたらしいんだ。

だからスリだって解ったって訳。

しっかしなあ、クノルじゃスリなんていなかったしなあ。

紅の所為で財布の中身がカラっ穴に近かったとはいえ、一応財布は財布。

取り戻さんといけないでしょ？

「この先かな？」

「（おう！この道を通つ直ぐ抜けてやがる）」

「いそごう、時間が経つと余計に解らなくなる」

「（言われるまでもねえ…ちょっと飛ばすからちゃんとしてこいよかなめ？）」

紅はそう言つと、四本の脚で力強く地を蹴り、人の間を縫うように走り抜ける。

ついて行く僕も一苦勞だ…あ、ちなみに現在、紅には久しぶりに犬



モードになって貰っています。

犬の姿の時の方が、吸覚とかの感覚器の性能がハネ上がるからだ。

そう言う訳で、さっきの子供の追跡が始まった。

「ふう…クノルとおんなじ程度の広さだけど、それでも広すぎるよ」  
「（泣きごとと言っても始まんねえぞかなめ？）」  
「わかってるけどさあ」

一応捕捉しておくけど、クノルの大きさは円でしめしたら半径五キロはあるんだよね。

ソレで“町”って言っているくらいだから“街”になったらどれだけデカイのだろう？

「クノルよりも入り組んでいるのが厄介だね」  
「（だな）」

そうなのだ、クノルよか幾分か古い所為か、裏側の住宅街辺りは今だ区画整理が行われていない。

その所為なのか、ネテの裏町はかなり入り組んだ迷路みたいな構造をしている。

「……まだ匂い続いてる？」  
「（……おう、段々強くなってきたけど…この先か）」

紅がちらりと視線を向ける。

その先にあるのはどの世界でもおなじみな

「どう見てもスラムだね」

素敵な裏の世界の入り口でした。

クノルには無い光景だから、ちょっと新鮮な感じもあるけど、それよりもアレなのは、

ココの空気がかなり澱んでらっしゃる事だ………なんかいかにもな雰囲気。

「（周囲に気を付けた方がよさそうだな）」

「……いつでも魔法使える様にしておこう」

悪党の巣窟っていうのはスラムがセオリーだけど、実際にそうだと何だかなあって感じ。

でも………さっきの子、ココに住んでるんだろうか？

しかしどこの世界にも闇の部分はあるとは思っていたけど………元一般ピーポーからしたら現実感を伴わない事この上ない。

だいたいスラムなんて映画位でしか見た事が無いよ。

日本には………あー、あったかもしれないけど、ソコは認外だったし………うん。

とりあえず、ココまで殺伐として閑散としたトコは無かったなあ……。

「ん？」

「（……つけられてるな？）」

ふと気が付くと、先ほどからずっと後を追って来る気配。

スラムだしなあ………追剥でもする気かな？

「(どうする?)」

「んー、とりあえずは静観しよ。紅は気にせず搜索を続けて?」

「(あいよ)」

スラムっていうのは往々にして、何らかの裏組織があるってイメージがある。

もしかしたら、今付けてきている人達はそういった所に所属している人達なのかもしれない。

もしそうだとしたら、こちらから下手に手を出すのは非常にまずい。例えこの町に2日しかいないとはいえ、夜は安心して眠りたいです。

「(ぬ?)」

「紅、どうしたの?」

「(いや、匂いがこの家の中に続いている)」

「って事はココがアノ子の家って事になるのかな?」

目の前にある家は二階建て長屋の様な感じだ。微妙に小奇麗にされているところを見ると、空家という事は無さそうだ。

「これは…出てくるまで見張るしかないね」

「(だな)」

ガチャ

「え?」

「(お?)」

「ゲツ?!」

な、何と言うグッドタイミング(?!?)

あまりのタイミングの良さに僕らの時が止まった。

「　　ちい！！！」

「（テムエ、逃げる）　　ボフン　　ギャワンツ！！（クセエ

！！っーかイテエ！！）」

「紅ッ！？」

スリの子が一番最初に再起動して、いきなり何かの粉が入った袋を地面に投げつけた。

その途端紅が苦しみ出した：まさか毒？

「……やられた…コシヨウと唐辛子を混ぜた粉だ」

「がっうう！バツシュ！！（イテえそして鼻痒い！！ハックション！！）」

僕は幸い嗅がなかったから大丈夫だったけど、至近距離で浴びちゃった紅にはキツイだろう。

目から涙を流してくしゃみし続けている。

「と、とにかく目を洗わないと！！！」

「（なああああ！！！！）」

とりあえず一時撤退した。

\*\*\*

「紅、大丈夫？」

「あうう、まだシパシパしくしくするぜ…」

犬型よりも人型の方が処置がしやすかったので、人型に戻った紅。目も洗い晴れない様に一応回復魔法かけたけど、それでもつらそう

だ。

「アノガキゆるさねえ…ぜって噛みついてやる…ガブっとな」

「……ちよっと、やり過ぎだしね…お話して、お仕置きもしないといけないね」

実は僕もちよっとだけ怒りがわいてるんだあ。

大事な相棒を傷つけられたからねえ。

「さて、とりあえずスリの子の家がアジトだと思われる家に来たんだけど…やつぱりまだ無理？」

「……………だめだな、まだ鼻が効かねえ…麻痺してやがる」

ふ〜む多分この分じゃ犬型にしても、匂いで追跡は出来なさそうだなあ。

じゃあ…やる事は一つだね。

「仕方無い…家宅搜索だ!!」

「え?! いいのかそんな勝手に?」

「だって紅がそれじゃ仕方無いよ…それにこの世界、警察いないからねえ…」

「クロっ! かなめが黒い!!」

ふふふ、別に怒ってるからそんな事するんじゃないです  
よ?これは捜査の一環です。

「じゃあお邪魔します」

「おいおい、家にはカギが付いてるだろ?」

「ふっ！！」 ガキヤ

「……おい」

「え？なに？なんか言った？」

「……いや、何でもねえ…俺はもう何も言わね」

「??？へんな紅」

思いつきりノブを回したら普通に開いたから別に問題無いと思うけどなあ。

「……うん、何も無いね」

「ほんと、寝るだけの家なんじゃねえか？」

とりあえず家宅搜索を開始したんだけど、一階は何も無かった。いやもうほんと文字通りの意味で何も無い。

間取りは結構広くて、スラムの住宅にしては珍しく2LDKはある上、おまけに二階建てだ。

建物自体は古い木造の住宅なのだが、大事に使っているのが見て取れる。

でもそれだけ広いのに、置いてあるのはテーブルが一つと小さな椅子が二つ。

ソレと食器が幾つかあるだけ…。

本当に人が住んでるのかと言われれば、住んでいるとは思っけど

「きちんと掃除もしてあるし、普段使っているって事は間違いないんだろうなあ」

「だな……………」

どうにも怪しいねえ。

とりあえず残った二階を搜索しようと思ったその時だった。

「…!!かなめ!」

「帰って来た?なんで?」

扉の陰から入り口を覗き見ると、逃げた筈のアノ子が入って来ていた。

ドアが破壊されていたからか、いささか警戒している。

「紅」

「応」

警戒しつつも奥に入って来たスリの子。

物陰に隠れて気配を消して様子をつかがう僕たち。

「テメこの野郎…!!」

「…!!な!やっぱりいやがった…!!」

紅が一気に飛び出し、動けない様にスリの子を押さえつけた。さて

「どうしてこうなったかは解るよね?」

「チツ……………」

「君には選択肢が二つある」

「ぐ……………」

「さつき紅にした事を謝り財布を返して、この袋を受け取るか。お  
仕置きされて受け取るかのどちらかだ」

「……………はあ？」

「おい！かなめ！！」

スツと手をかざし紅を黙らせ、僕は懐からアノ時に拾った袋を取り出した。

「！！… 返せ！！ソレ返せ！！財布なんて返すからソレ返せ！！」

「返しても良いけど…返事は？」

「…………… 解った、ドワーフの姉ちゃんごめんなさい…な、コレで  
いいだろ！！」

「 紅、放してあげて」

「…………… 仕方ねえ。」

渋々と言った感じだったが、紅はスリの子を解放した。

強く押さえつけられた所為で赤くなった腕をさすりながら、スリの子は袋を受け取った。

「で？なんで君みたいなお子供がスリをしているの？」

「……………」

「黙ってちゃ解らないんだけどな…事によっては、僕は君を待この町の警備の人に渡さなきゃならない」

「ぐ……………」

「改めて聞くよ？なんでスリなんかてしたんだい？」



ひざまずき、目線を合わせて待つ事10分…小さな声で少しずつ訳を話し始めた。

「…病気の…」

「うん、病気の?」

「弟が居る…この家の二階」

おう、まだ人が居たのかこの家…というかまだ二階は調べて無かったけ?

「栄養のあるの食わせてえし…薬だって高額だし…もうこの家に売るもんもねえ…」

「そう…だからスリを…」

ふくん、やっぱりねえ。

一応事情を聞いてから、色々と後始末しようと思ったけど…  
どうにも嘘では無いみたいだなあコレは。

「親もいねえ俺達はこうするしかなかったんだ。この家まで売っちゃったら、もう後がねえ。」

「……………」

「仕方ねえからこうしてアタシが稼いでいたつてのに…運がねえよ…」

そう言っつてうなだれる…彼女　　というか女の子だったのね?

あまりにボロボロの服装だったから解らなかった

「おまけに兄さんから盗んだ財布には殆ど入ってねえし…貧乏だし」

「……………ほう？」

「旅銀にしても明らかに少なすぎ出し…貧乏なヤツからスツちまったと思つたよホント」

「……………それで？」

「服装は良いモノ来てたから当りだと思つたのになあ〜アタシも目が狂つたかね？」

「ふ〜ん…そうなんだ…」

旅銀は本当は結構多めに持つてたさ。

「ふあ〜、もう用はねえなら行こうぜかなめ」

その旅銀を一気に減らした張本人がすぐ隣に居るけどね！！

「ふむ、まあ訳はわかつたよ」

「え！それじゃあ！！」

「うん僕は財布が戻ってくればいいから？気にはしないよ？」

「ありがとう兄ちゃん！！」

うん、僕からは何も無いよ。僕からはね？

「まあ最も？後ろの人が謝られただけで気が済んでいればいいんだけどねえ」

「ええ？！」

「ふっふっふ、そう言う訳だから覚悟しろこのガキ。」

「そんな！！だってさっき謝つたじゃんか！！！！」

「この俺が謝られたくらいですませる訳ねえだろう？目には目をってな？」

そう言うどじりどじりと彼女ににじり寄る紅。

まあ怒気とか感じないから？只単にお仕置きするだけだろうけどね。

「く、くるなあ……！」

「悪い子にはなあ？古来から尻叩きって相場が決まってるんだよオオ！」

「い、いやああ……！」

そう言っつて彼女を抱きかかえた紅は、大きく振り被った手を振り下ろした。

そしてスパーンという素晴らしく良い音が響いた。

ま、まあ相手子供だからさ？ほどほどにね？紅さんや？

## 第22章（前書き）

注意・後半にご都合主義入ります。

## 第22章

〈 出歩いて…落っこちて・第22章〉

物事は時として予想外の方向に向かう事があると思う。  
何を考えたか、気が付けばそうになっていたなんて事は良くあることだ。

「あいたたた…」

「床が抜けるって…どうなんだよソレ」

今回も恐らく、そういった事のカテゴリーに治まるのではないかと思う。

現在僕たちが居るのは、ネテのちよつち外れにある主無き錬金術師の屋敷と言われる場所である。

で、何が何でこうなったのか？ソレはちよいと前に遡る

〈 1時間前〉

「薬がない？」

「ひつく…う、うん、この袋に入れておいたんだけど…えく」

僕の財布を盗んだスリの子

ルアリス…通称リア。

言葉遣いといい服装も男物だったから解らなかったけど、女の子だったらしい。

で、彼女は病気の弟の為に、スリをしてまで薬を買っていたのだが

……

「その薬を落としたと？」

「そう…だよ…エック…落しちまったんだよ」

…だそうで…。

話を聞いていくと、落したのは昼間にギルド（彼女も一応この町のギルドに所属していた）の仕事で、

探索依頼を受けて、探索を行っていた町外れの屋敷で落したんだそうなの。

で、その屋敷の奥の方で魔獣らしき影か何かを見つけ逃げ帰ったんだって。

ちなみにその後に、もうチヨイ小金を稼ごうと、僕の財布を狙ったんだそうなの。

「でも、どうやれば袋から落せるんだよ…」

「ヒク…穴開いてた」

「あー…そうなん…」

良く見ると、巾着袋よかやや小さめの袋の横に、穴があいている。

………まあそれなら仕方無いしねウン。

「ところでお前何時まで泣いてんだよ？」

「そ、それは手前が力いっぱい…うく…叩いたからだろうッ…！」

さて、みんなも気になっていただろうが、彼女先ほどから彼女泣きっぱなしなのだ。

どうも紅が強くなり過ぎたらしい。叩かれたお尻を未だにさすっている。

「どうしよう…あの薬が無いと弟が…トールが…ヒック、ウワーン…！」

「だー！！泣くんじゃねえ！！お前女だろうが…！」

「関係ねえ…やい！！ウエーンエーン」

「ああもつ鬱つとしい！俺達が薬探してきてやるから泣くな…！」

はい？

「あ、あの紅さん？！」

「良いだろう別に？これも何かの縁だ。」

「…ひう、本当？兄ちゃん？」

ええと、自分としてはもう用は無いから早々に立ち去るつもりだと思っただけだ…。

「うう」

「ぐ…そんな目で見られたら断れないじゃないか…」

泣き顔で心配そうに見つめられたら…断れんでしよう？  
特に相手が自分よりも年下の子供だとしたら余計に…さ。  
これで断るものなら　　僕悪人じゃん。

「　　はあゝわかったよ…探しに行こう」

「ホントか?! 兄ちゃん!!」

「とりあえず地図をくれないかな? 行き先わかんないし」

「良かったな? リア?」

とまあ、こう言う訳でしてハイ。

で、探索に来て屋敷に入ったところで、床板が腐っていたらしく落下…冒頭のシーンに戻るのだ。

「しっかし、随分と落ちたなあ…」

「ざつと俺6人分つてどこか?」

紅の身長は約1.4mだから…約8〜9mくらいか。

とりあえず怪我は無し、レベルが高くて助かったよホント。

「ふーむ、大体3、4階層分落ちたのね」

「しかも道が続いてやがる…コリヤ屋敷じゃなくてダンジョンだな」

「……………しかも、どうやら何か居るっていうのも本当みたいだね」

「だな…どうするかなめ?」

「どうするもこうするも…」

とりあえず落ちて来た穴からは出られそうもないし…。



「……とりあえず進もう、というかソレしかないと思うし」

「剣も無事だったみたいだから俺は大丈夫だぜ？」

「僕は魔法使うから元から問題無しだね。空間が狭いからポールアックスは使えなさそうだね」

「確かに、こう狭くくちや振ったが最後、壁にささつちまうよ」

「じゃあ、ポールアックスは僕が持つよ。紅はいつも通り前衛頼むよ？」

「そいじゃ、かなめもいつも通りに援護頼むぜ？」

紅が拳を出してきたので、僕も拳を出してお互いにぶつけあう。ちよっとしたおまじないみたいなものかな？ウン。

僕たちはさつさと役割とこれからどうするかを決め、警戒をしながら奥に進む事にした。

しかし、通路の方は明かりが無い為、所謂真つ暗な状態……どうしよう？

「とりあえず明かりが居るなあ……イマジン米みゆトライトよしIT懐中電灯」

「おお明るいな。これで進めるぜ」

魔力を込め過ぎると、レーザーみたいになっちゃうから、ほどほどにしてっつと……。

よし、周囲を見渡す程度ならこのくらいで良いだろう……という訳でレッツゴー……！！

さて、光源も確保したので、歩みを進めたんだけど…。

「下り坂…だと？」

「道は…この一本しか無かったよね？」

少し歩いたところで、何故か道は下り坂になりつつあった。

だけど、落つこちたアノ場所から伸びている通路はココしかなかったし、途中に分岐もない。

「ふむ、進むしか…無いよね」

「俺、じめじめした空間はキライなんだがな」

しょうがないよ、コレしか道が無いんだもん。

まあそういう訳で下り坂になっている通路を歩いて行った。

更に進んでいくと、徐々に道幅が広がっていった。

おまけに通路の壁際には、壊れてはいるモノの、何かの実験器具の様な残骸が散らばっている。

成程、確かにココの主は錬金術師だったんだね。フラスコだとかピーカーが残っているしさ。

「へ〜ほ〜」

「かなめ、よそ見しながら歩くと危ないぞ？」

ガッン

思わず珍しさでキョロキョロしてたら、壁から伸びていた出っ張りに頭を強打してしまった。

「いった〜…」  
「言わんこつちやねえ…」

呆れたように溜息をつく紅…だつてここ珍しかったんだもんよ。  
注意もおろそかになるって。

「しっかしまあ随分とゴチャゴチャ色々落ちてやがるなあ？」  
「人が居なくなつて随分と時間が立っているみたいだね。埃かぶつてるし」

「だな…もつともいなくなつたのは」  
「…人間だけだつたみたいだね」

まだちょっと遠いけど、ゆっくりながらも真つ直ぐこちらに接近してくる気配を感じた。

というか、随分と広いのね…この地下空間。

「どうやらこの一本道は随分と遠くにのびてるみたいだな」  
「確かにね。敵さんの気配の感じからするとそうみたい」

おおよそ1kmくらいだろうか？流石にこの距離だと明かりが届かないから見る事は出来ない。  
でも、確かにこの道の先に感じる事が出来る。

「まあとりあえず、小手調べってねッ!!」

僕は以前から練習していたあの魔力球を生成する。  
ちよつど良い機会だし、コレが戦いで役に立つのか実験してみようと思う。

とりあえず込めた魔力は、だいたいグレネード一発分程度。

流石にそれ以上だと、この長年放置された通路が耐えきれるか心配だからね。

「……………行けッ！」

指先に浮いていた光の玉は、そのまま一気に加速し、通路を真っ直ぐ飛んでいった。

そしてわずか数秒後に爆発音がココにまで響き、辺りの機材を揺らした。

「……………どうだ、かなめ？」

「ダメみたい、直線だったから命中はしたっポイントだけど…気配が消えて無いからまだ生きてる」

かと言ってこれ以上、威力をあげるのもねえ…ココの通路がどれだけ頑丈なのかわかんないしさ。

しかし、ラジャニさんとこの魔導書に書かれていたこの魔法、結構完成系に近づいた筈だけど…

いまだに習得の音がならないなあ……………という事はどこかまだ完成して無いってとこなのかな？

……………。  
一応魔導書に書かれていた内容だと、これで完成のハズなんだけどむう、僕の魔法習得における手帳の基準が良くわかんないよ。

もしかして何かアレンジでも加えろとも言うのだろうか？

いっその事属性付けたり、カマイタチみたいに斬撃出来る様にしてみようかな？

それともあえて趣向を変えて、回復効果を追加したりとか？

ふう、考えていても仕方ないか…

今のところ遠距離ならマニユアルで十分使えるから問題ないしね。使っている内になんとかなるでしょうン。

「さてと、しかたねえから直接叩きつぶしに行くしかねえか」

「そうみたい、準備だけはしておこう」

紅は剣を鞘から抜き、僕もイメージツールで盾と短めの剣を生成して装備する。そして、そのまま薄暗くてどこか不気味な感じがする通路の奥に向かっていった。

\*\*\*

「うわぁ…イヤ確かにココは錬金術師の屋敷だけどさぁ…何であるな魔獣が居るのさ」

「俺に聞くな！つーか動け！！」

ドンドン奥に進んでいき、道幅が5mくらいになった辺りに、その魔獣はいた。

頭は獅子、胴は山羊、尾は蛇で、ライオンの頭の両サイドにこれまた山羊の頭が付属した

「合成獣…キマイラか…よっぽどココの以前の所有者は優秀な錬金術師だったみたいだね」

RPGでも良く敵キャラとして登場するモンスター…キマイラがそこに居た。

というか今現在進行形で襲われています。ライブでピンチで

すハイ。

「ぬう、なんつー毛皮してやがんだ！堅くて中まで刃が通らねえ！  
！」

「くっ！まあグレネードに耐えられる身体は伊達じゃないか！！」

金剛石：とまではいかないモノの、その毛は大分堅いらしく、ミスリス製の剣ですら弾いてしまう。

一応先ほどのグレネードみたいな魔力球による攻撃で、傷つけてはいたモノの致命傷とは程遠い。

そして何よりもキマイラは素早く動き回り、重たい一撃を放っては引いて行くを繰り返す。

所謂ヒット&アウェイってヤツで単純な戦法だけど、キマイラの持つパワーはその戦法を必殺に変えていた。

「グルルルル……」

「なんだ？いきなり後退していく……？」

キマイラは先ほどから行っている一撃離脱戦法よりも遠くに後退した。

おかしい、何で下がるんだろう？いきなりの奇行に戸惑いを見せてしまう。

そんな事はお構いなしに、キマイラは大きく息を吸い込み始めた。  
うーん？さがって息を吸い込む？……………あ！

「紅！さがれ！！」

「ぐ……！！」

奴の意図に気付いた僕がそう言うか早いか、キマイラの口から火炎が伸び紅を覆い尽くす。かなりの火力があるらしく、床に転がっていたピーカーが飴細工のように解けるほどだった。

「　　っ！？べ、紅？」

燃えてゆく人影…ま、まさかホントに？　　思わずそう思ったけど…。

「や、やばかったあゝ」

「無事だった！！よかったあゝ。」

何とか回避できたらしい。少しだけやけどを負っているけど軽傷だし、後で魔法で回復出来る。燃えていたのは良く見ると、この旅に来る前に紅に渡した外套だった。

どうやら、あの火炎を避ける際に邪魔だったので脱ぎ捨てたらしい。

「ケツ！安モンだったけど、勿体ねえ事しやがって！」

「いや紅が無事だったからいいよ…うん。」

一瞬本当に燃やされちゃったんじゃないかって思っちゃったよ本当しかし、この火炎は強力だ…奴さんパワーも紅と同程度、もしくは上。

おまけに速さもかなりある……一人だったら危なかったかも知らない。

「紅、あの火炎に燃やされる前に倒すよ」

「応！」

でも、こっちは2人…単純計算でも負けはしない!…と思う。  
キマイラと再び対峙する僕達、僕は紅の前に出ると彼女に話しかける。

「紅、今度は僕がひきつけるよ」

「……出来んのか?」

「おいおい、僕だって戦えるよ?兎に角引き付けておくからその間に頼むよ?」

「わあった…すぐに終わらせてやるさ」

簡単に、お互いがそれぞれどう動くかを確認し、それを行動に移す。わずか十数秒の作戦会議、それでもお互いにどう動けばいいかなんて感覚で解っている。

「さあ、来いよバケモン!肉塊に変えてやるからよ」

「うわあ…紅怖い」

「なッ!相手にコウジョウを述べるのは、作法だろうが!」

「ソレは口上じゃなくて挑発だよ?というかどこで身に付けたの?そんな知識」

軽口をたたきながらも、視線はそらさず油断せず…

この身体は…目の前の敵を倒す事だけを考え、全力をもって行動する。

先ほどからこちらの行動を伺っていたキマイラも、紅の挑発に乗ったのか唸り声をあげた。

それを合図に僕は盾を構えて、そのままキマイラへ真っ直ぐ、突っ込んだ。

「ぜあああーっ!」



それに反応して、キマイラも僕の頭ほどのサイズがあるその掌で叩きつぶそうとする。

だが、こちらとてソレを甘んじて受ける訳にもいかない。

「E.T大盾！」

以前、ギガスにやった様に、キマイラの攻撃の瞬間、目の前に大盾を展開した。

空中に固定された大盾に攻撃を止められ、動きが停まったキマイラの懐に素早く潜り込む！

「のびろお！！！」

そしてそのまま、手にしていた短かめの剣に魔力を送り、ゼロ距離で一気に剣のリーチを伸ばす。

剣は比較的軟らかい腹に突き刺さり、ダメージを与える事に成功した。

「ぐるおお！！！」

「ひゃッ！あとは頼んだよッ！！！」

そう言つてキマイラが攻撃する前に、身体能力をフル活用して、その場から離脱した。

そして紅が跳びあがり、キマイラの背中に斬撃を繰り出した！！！！…だが。

「キャッ！」

「紅っ！！！」

紅の進行方向に突如として現れた尾っぽに“噛みつかれた”のだ！  
そう、キマイラは合成獣の名が表す通り、複数の生き物が合成されている。

尾っぽの方も例外では無く、大蛇で出来ていたのだ。

大蛇に噛まれた紅は、あまりの激痛に顔を歪ませた。

そして大蛇はそのまま紅をこちらへと投げ捨てた。

僕は彼女が床に衝突する寸前に、何とかキャッチする事に成功した。

「紅ッ！おいッ大丈夫なの！？」

「……クソイテエぞ…こん畜生が」

見れば尻尾の蛇にかまれた辺りが、どす黒く変色している。

毒蛇だったのか、あの蛇は…。

「紅、あんまり動かないですよ？毒が回っちゃうから！！」

「わあってる…」

本当ならキュアウィンドでもかけて治療したいところなんだけど…

「ぐるるるる」

どうにも、逃がしては貰えないッポイよねえ…どうするよ僕？

「イマジジンゼリIT大盾」

とりあえず、僕達を覆う様にシールドを展開して時間を稼ぐ事にした。

そして、シールドが攻撃を防いでいる間に紅に魔法をかけようと思っただけど…。

予想外にキマイラの力が強くて、集中していないといつ破られるか解らない。

マズイ…コレはまずいよ…このままじゃヤバイ…どうする？

「おい…かなめ」

「なに？今ちよっと話しかけると辛いんだけど…」

もうね、ガンガン殴ってくんの…魔力を多めに送って壊れない様にするので精いっぱいなんよ？

「いいから聞け…俺が囿になるからその間に倒せ」

「……冗談はやめて欲しいな紅、死ぬ気なの？」

この状況でソレは本当に笑えないよ紅。

「ちげえよ…一応まだ身体が動くからな。このまま俺が毒で死ぬ前にとっとと倒しちまおうぜ？」

「いやでも…」

「生憎だけどよお…しぶってる時間は無いんだぜ？」

じーとこちらを見つめる紅……解った。

「解った…でも紅囿はいいから逃げてくれない？」

「そいつはできねえ…俺達はいつも一緒…だろ？」

「言うと思ったよ 5数えたら守りを解く、合わせて」

「 応」

今だ続くキマイラの攻撃、解いた途端どうなるかわかんないけど…でもかけてみよう

「5、」

うわっ少しヒビが入って来た!?

「4、」

ぐぬぬぬ…もうちょっとだけ持つてえ〜!!

「3、」

い、以外と5秒って長い!?

「2、」

あと少し!あと少し!

「1ツ! バリン あ!!!」

いざ解除しようと思ったその瞬間、ガラスが碎ける様な音と共にシールドが破られた。

僕は咄嗟に紅をかばい  この世界にきて初めての激痛が身体を駆け巡る。

その衝撃で、僕は通路の壁に激突し、その壁をぶち抜いて部屋みたいなところに叩きこまれた。

その部屋は何かの保管庫らしく、巨大な試験管が所狭しと並んでいる部屋だった。

だが、こちらはそれどころでは無い。

「ぬ…あ」

息をするだけで走る激痛：さっきので肋骨をやられたっばい。  
おまけにどうやら背中を爪で抉られている…意外と冷静なのは戦う事に慣れたからなのかな？

キマイラはどうやら一番厄介な僕に狙いを定めた様で、壁を壊してゆっくりこつちに迫ってくる。

僕は動きたいのに身体が動いてくれない……そして何よりも痛かった。

意識がもろろつとしていき、徐々に瞼が重くなっていった。

そして、頭の中……いや身体の中から声が聞こえてきた。

いたい…

痛い

イタイ？

カラダが冷たくなる？シヌの？



まだ…死にたく…ないよお…。

『お前は…死にたくない…のか？』

誰かの声がする…ウン、死にたく…ない。

『じゃあ…契約するか？ちょうど暇だった』

いいよ…死なないなら…でも君…誰？

『私か？私は』

』

痛みの中で誰かの声を来たような気がした…。

その途端現実引き戻される…どうやら一瞬意識が飛んでいたらしい。

だが、目の前には厳しい現実が絶望を届けに来るところだった。

迫りくるキマイラの爪…流星にもうダメだと頭では理解

した…。

だがその瞬間、死にたくないと心が叫んだ…そして望んだ

。

「死にたく…ない」

途端、膨大な魔力が身体から溢れだしていく…。

痛みの中で、理性も思考も定まらないモノの…

まるで一番最初にこの世界に来た時のように…。

頭の中に…スペルが響いた…。

「召喚…」

その瞬間、僕の意識は完全に光に飲み込まれた…。



【ピロリン new 魔法、召喚を覚えました】

## 第22章（後書き）

・ども作者のQOLです。

何時の間にかお気に入りになり90件も登録されていて嬉しい限りです。

さて、今回はなんか最強君のテンプレらしくなりました。

一度はやってみたかったシュチュユなんですよねコレ。

ではまた次回に会いましょう。作者からでした。

## 第23章（前書き）

\*ご都合主義：入ります。

## 第23章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第23章 ↓

キマイラ戦で紅をかばい死にかけた僕。  
次に意識を取り戻すと

「……何故に膝枕なの？」

「かなめ！気が付いたのか！？」

紅に膝枕されてました……いやまあ良いんですけどね？  
でも少々羞恥心というモノもございまして……と、待て待ておいお  
い！！

「キマイラは？！キマイラはどうなったの！？」

「な、なに言ってるんだよ？かなめが倒したじゃねえか！！」

ちよつと待って？僕はかばったところまでしか覚えて  
ないよ？！

「で、でも僕死にかけてたんじゃ?!」

「おう…ソレなんだがよ」

『私が治療させて貰いました』

ん?なんじゃこの稀薄な感じのする声?というか待って…僕達以外に誰がいる!?

「だ、誰ですか貴方!？」

『おや?薄情な…先ほど契約したばかりじゃないですか』

そこに居たのは、女性…なんだけど魔力の感じが人間じゃ無いって  
言っている!!

って、うん…契約?

「あーうー?契約う???」

『あなたは、私が死にたくないのかと問いかけたら、死にたくない  
と言っていたではないですか?』

うー…ぬう?はて…???そんな事いつどこで

って思い出した!!

「あん時の声の人!？」

『思い出されましたか…まったく薄情な人だ』

ちよっと待って?アレは痛みで聞こえた幻覚じゃ?!」

『幻覚では無いですよ？目の前の私が証拠ですよ』

「って心まで読めるの!？」

「いや、口に出てたぜ？」

とりあえず落ち付け僕…おじいちゃんが言っただじゃないか？

焦ったらゲートボールだって……なんじゃいそりゃ？

この後、しばらく混乱が続き、紅からの鉄拳で沈められるまで混乱するのであった。

\*\*\*

「精霊?!君が?」

『ええ、そうです』

なんと、目の前のこのヒトは精霊……うわぁファンタジー。

見た目は髪の毛が長いやや色白の普通の女性に見えるのに…やっぱりファンタジーや。

あ、でも良く見たら、水がリング作って彼女の後ろに浮かんでら…。

しかも、今まで出会った事がない位に、べらぼうに高い魔力を感じる。

うむむ、何だか混乱してきたぞ……???

「えと、とりあえず今までの話を整理すると

「

キマイラに吹き飛ばされてかなりの重症を負った僕。  
背中に回しておいた、ミスリル製のポールアックスのお陰で、生き  
てはいたけど虫の息だった。  
つまり何時死んでもおかしく無い…なんとも危険な状態だったんだ  
わな。

で、たまたま僕が吹き飛ばされた部屋に、閉じ込められていたのが  
この精霊さん。

僕が吹き飛んできたお陰で、閉じ込められていた容器が破壊されて  
出る事が出来たらしい。

結果的に出してくれた恩もあったし、何よりも有り得ない程の魔力  
の持ち主であった僕。

ちょうど良い依り代が欲しかったので、死にかけの僕と無意識化で  
コンタクト。

そのまま契約してしまい、僕の怪我を瞬時に直し、目の前のキマイ  
ラをぬつ殺した。

「 て事なのかい？」

『 大まかに言えばそうです』

うわぁ… 本日二度目のうわぁだわ… まさか… まさか…！！

「 ご都合主義… まさかこんなところで体験する事になるうとは…」

スキル悪運発動っすか？ 幾らなんでも危機に陥って精霊と契約だな  
んて…。

なんつーかもう大分使い古された話ですなハイ。

まあ生きてるから良いけど… なんだかなあ？

「 てことは…君は僕に括られていると? 」

『 いやぁホント助かりましたよ? 私あと少して魔力不足で存在が消えてしまうところでしたしね 』

「 いや…まあそれはいいんだけど… 」

『 今までの契約者は数秒しか持たなかったですから、今回は当りを引いたって感じ です 』

「 ほうほう…… ちょい待ち、今なんて言いました? 」

何だか聞き逃してはいけない様な言葉が聞こえたのですけど?

『 えと…… 当りを引いた 』

「 もうチヨイ前 」

『 存在が消えて 』

「 戻し過ぎ、そのチヨイあと 」

『 今までの契約者は数秒しか持たない 』

「 そう! ソレだよソレ! どういう事なの? 」

『 どういう事も何も言葉通りの意味ですが? 』

数秒しか持たないって…… どのことなの?

言いまわしから考えれば、僕以前にも依り代になった人がいたって感じなのですが?

『 ええ、いましたよ? 』

何を当たり前なという感じで返してくる精霊さん……。

で、その以前寄り代にされた方はどうなっ たんですかい?

『 そうですねえ…… 例えば私を使う際に、体中の大半の魔力を持っていかれてしまっ てお亡くなり に 』



「ほう、成程……ってヤバいやん！！何僕大丈夫なの！？」

昇天なさるほどの魔力消費ってどんだけえくく！！！？

『大丈夫ですよ？』

「い、いやでもさ！？」

『だって現に生きてるじゃないですか？』

「あ…そか」

そうだった…すっかり忘れてたわ。

まあとりあえず落ちついて色々と話をして、現在の状況を教えてもらったんだけど…。

正直なところ、訳解らんですハイ。

マナやらオドだとか言われても、僕の中にある神さまから貰ったと思われる知識は、

そこら辺スルーされてるみたいで、あんまし入ってない。

とりあえず更に簡単に噛み砕いて説明して貰ったところ、精霊さんは魔力の塊の様なモノらしい。

で、身体を維持する為には相当の魔力が必要らしくて、普段は身体を薄めて漂っているんだそうなの。

勿論長時間の実体化するなんて事になれば、その消費魔力は計り知れないんだそうで……。

今までの契約者は、殆どがホンの数秒間だけ必要な時に呼び出して、精霊さんを使った。

で、その後はお話もなにも出来ず、ずっと壺に閉じ込められてしまっただけらしい。

すごく暇だったと精霊さんは語っていた。

まあ簡単に要約してしまえば燃費が悪いと？

『むしろそれだけ魔力を吸いだしたのに生きているあなたに、私は驚いていますか』

「ちなみに僕からどれだけ持っていったの？」

『ええと、完全に実体化させていただきましたけど…それでも約半分くらいですかね？』

は、半分もか……そうだと手帳で見てもよう。

どれだけ持っていていかれたかが数値で解る。

HP (体力)	6400 / 6400
MP (精神力)	5060 / 10780
LV (現在のレベル)	LV 52
EXP (現在の経験値)	20570 / 125600
STR (力の強さ)	245
INT (知性)	12040
DEX (器用さ)	162
AGL (素早さ)	274
CON (耐久力)	150
ATK (物理攻撃力)	245
MAG (魔力)	12100
HIT (命中率)	165
AVD (回避力)	254

RDM (物理防御力)	.....	176
RST (魔法防御力)	.....	1005
LUC (幸運)	.....	11
AP (アビリティの装備容量)		133 / 170
CP (技及び魔法の装備容量)	...	3 / 200

何気にレベルがかなり上がってる…キマイラ倒した所為か、というか20も上がるなんてスゴ。所謂ボス級って奴だったんだろうなあ、明らかにここら辺の魔獣とは次元が違ったしさ。

まあ、ギガースの分も加算されてるんだろう。ココ最近ステータスは見てなかったからな。

それはいいとして…成程、魔力とは言うけれど、実質持っていかけたのはMPの方なのか…。

ん？魔法の欄にも新しく習得した文字が……

### New魔法

#### ・召喚(?)

【精霊との契約により習得したモノの、状況が状況だった為契約が不完全。その為全MPの半分を常に消費】

上級精霊魔法・射程 基本無し 消費MP 全体の5割 必要  
CP50

わお…不完全ながらも新しい魔法にカテゴリーされたんだ？  
ん？良く見ればもう一つあるぞ？何何

## New魔法

・エレメンタルミサイル

【精霊と契約した事で習得した。元はラジヤニさんところの魔法】  
中級魔法・射程 近  
消費MP 作る魔力球により変  
動（基本50） 必要CP40

おろろ？なんで？！何時の間にかグレネードみたいだった魔法が進化してる？?!

しかも射程 って何？！全宇宙カバーっすか？！洒落になんねえ…。  
ど、どんだけ神さまからの補正掛かってんだよ？！しまいには創造魔法でも覚えるってか？！

今更だけど…自らの身体に恐怖した…なんちゃって。

しっかし魔法のにもアレだね？あの自称神さまは何させたいんだろうか？

正直この魔法全力で使ったら、戦略級の威力を発揮しちゃうと思うんだけど…。

でも流石にこれはちょいやり過ぎでないかい神さまよ？

強すぎる力是要らないんだけどなあ…平穩に暮らしたいっていうのもあるし。

まあそれはさて置き

「ねえ？契約が不完全ツポイというのは本当？！」

『え？！まさかそんな筈は！！』

「！！すみません…」

「いや謝らなくても良いけどさ…なんか不都合でもアンの？」

『いいえこれと言つては…ただ』

「ただ？」

『常に私が召喚され続けるってところでしょ？なので半分以上魔力の回復が出来ません』

ふん、そうなん？でも普段半分以上魔力使った為しは無いしなあ。

……なんだ別に問題無いじゃん。

『でもどうして契約が不完全だつて解つたんですか？私ですら言われるまで気が付かなかったのに』

「いや、まあ…」

どうしたもんだらうか？色々と教えるべき？嫌でもなあ…。  
ちよいと聞いてみよう…。

「ねえ、ちよつと聞くけど、この契約つて一生モノ？」

『えと言い方がアレですけどその通りです。基本契約者が死なない限り、私は宿り続けます』

そうか…じゃあ教えても問題無いね。

紅にも視線を送ると、コクンと頷いてくれた。

「じゃあ先ほどの答えなんだけど、長いけど聞かない？」

『ハイお願いします……実を言つと人と話すのなんて久しぶりで楽しみです』

「はは、そうかい？それじゃあね

」

この後、僕は初めてこの世界の住人に、自分たちはこの世界来た異世界人である事を話した。

最初は若干疑っていた精霊さんだったが、話を聞いていくうちに色々と質問してきた。

それに答えられるモノは答え、さらに前の世界から持ち込んだガラクタを見せようやく納得して貰えた

『 異世界の人間だなんて驚きです』

「はは、まあ普通そんな体験なんてしないからねえ」

「俺に至っては元犬だしな」

『元犬って…全然そうは見えないですね』

まあ確かに。

さて何時の間にか紅も話に加わり、説明会の筈が雑談会とかした。で、ある程度お話をして満足したのか、精霊さんはこんな事を言った。

『ソレにしても凄い神さまだったんですね。肉体改造を行った上に魔力付与、おまけに若干の精神操作までするなんて』

「まあ、半分は遊びなんだと僕は思うよ？幾らなんでも強すぎるもん」

「だな、ソレでいてちゃんと制御できるんだから不思議でしょうがねえ」

「精神操作と言っても、生命を奪う事に対する抵抗感をなくす程度だしなあ。」

『それでも、普通はそこまでしないモノだと思いますよ？』

そりゃそうだ、神さまなんてのは普通は不干涉な存在な訳だしさ。

つまりだ、あの自称神さまは

「よっぽど暇だったんだね。あの神さま」

「片手間に改造してくれたにしては上出来すぎるもんな」

『そんなんでいいんでしょうか?』

いいんじゃない?ご本人はソレで満足してるみたいだしさ。

あ、そう言えば

「ねえ今の今まで聞くタイミングがなくて聞いて無かったけど、キミの名前はなんて言うの?」

『私ですか?ええと私自身は人工的に作られた精霊なんですけど…』

「精霊って人工的に作れるの?!」

ふへえ流石ファンタジー。

『ええ、意志を持たない低級な精霊はどこにでもいますからね。それらを集めて濃縮還元すると私の様な存在になるんです』

濃縮還元って…まあ良いけど。

『確か前の契約者が付けてくれたのは、私が水属性でしたから……』  
「から?」

『四大精霊からあやかってウインディーネと呼んでいました』  
「ウインディーネ…」

そ、それはまた有名な名前から取ったのね…作った人随分と自信家だったのかな?

「それじゃあ、親しみを込めてウインディと呼ぶけどいいかい?」

『いいですよ!むしろ大歓迎です!マスター!』

「ま、ますたー?!」

ちよっ！いきなり何を言ってるんですか貴方？！

「かなめ…？」

「いや…えと、どういう事なのウィンディ？」

『一応私の契約者ですし、それ相応の感で呼んでみたのですが…嫌でしたか？』

「いえ個人的には全然……ゴメンなさい、やっぱりムリッス…だから紅睨まないで怖い」

冗談抜きで、僕の隣で笑っている紅が怖いです…しかも目が笑って無い。

笑顔を言うのは最も原始的な攻撃の意志を表すもので…。

えと…その…とりあえずごめんなさい、調子こいてすいませんでした。

『それじゃあ、何とお呼びすればいいですか？』

「うん…じゃあ下の名前で頼むよ？かなめって呼んで」

『解りました。ではかなめ様とお呼びしますね？』

うん、さっきのマスター発言よりかはマシだね。

まだ紅の目線が痛いけど、まあ気にしないでおこっ…心臓が痛くなりそうだから。

「それじゃあ、お互い自己紹介も済んだし、上に戻るうか？」

『あ、私この施設の事なら覚えてますので、道案内出来ますよ？』

「お、じゃあ道案内頼むよ」

『はい！任せてください！』

は…やれやれ、漸く地上に戻る事が出来そうだ。



とりあえず道が解らない僕達は、ウィンディのあとについて行く事にした。

「まあアレだ…生きていてくれた良かったぜホント」

「紅…………アレ？そう言えば紅も毒を受けてたんじゃ？」

『私が治療しておきました。アフターサービスです』

「あ、そなの？」

なんとまあ随分と親切な精霊さんなこつて…。

## 第23章（後書き）

\*どもQOQでございます。

一応説明編？って感じですが……書き終わった後、うわやっちまったと思いました。

でもまあある程度のご都合主義が入ってこそ、ファンタジーには味が出ると思ったのでそのままにw

しかし、良くもまあ生き残っちゃったなあ……スキル悪運EX……うらやましいなあ……。

以上、何故か主人公のスキルが欲しいと思った作者からでした。

## 第24話

く 出歩いて… 落っこちて・第24章

さて前回、新しく僕達のパーティに加わった人工精霊のウィンディーネさん。

キマイラとの戦闘のドサクサで僕が契約してしまったが為、彼女は僕に括られる存在となった。

しかも、微妙に契約が不完全だった所為で、常に顕在しっぱなしというおまけ付きである。

普通ならば、魔力を吸い取られて搾りカスみたいになってしまうところを、僕は持ち前の大魔力のお陰で大丈夫だった。

…ご都合主義だと笑いたければ笑えばいいさ、コツチも訳わかんないんだもん。

恐らく…ココに来てスキル悪運EXが発動してくれたのではないかと、僕は睨んでいる。

でもなあ…どうせならあの時キマイラにやられるちょい前に、発動して欲しかったわ。

任意での発動が出来ないと言うのは何とも不便なものである……結

果的には助かったから良いけどさ。  
ちなみに、彼女と紅とは何故か仲が良い、僕を助けてくれたから好感が持てるんだそうだ。

まあその事はとりあえず置いておく事にしよう。

問題は彼女：人工精霊のウィンディの事だ。

何故彼女はこんなボロボロな地下の施設に閉じ込められていたのか？

こう言っちゃ悪いけど、人工精霊なんて高値で売れそうな気がするんだよね。

普通なら売られていてもおかしく無いと思うんだ。

何せこの主無き錬金術師の屋敷は、何十年も前に運営が立ちゆかなくなつて廃棄されたらしいからね。

金目のものは殆ど無いと、リアからは聞いてたんだけど…でも、どうもソレは地上の屋敷だけだったらしい。

何故なら、この地下施設の方には、廃棄されてから誰かが来たかのような形跡が全く無かった。

という事は、地下の方はこれまで手つかずであつた事が容易に想像できる。

恐らくは上に置いておけない様な危険なモノや、失敗作を地下に保管していたのではないだろうか？

表に出す事が憚られるから、地下の秘密の部屋に隠すなんてよくある話だと思うしね。

まあ…閉じ込められていたご本人に聞いても良く解らないそうだから

ら真相はどうだか判らないんだけどね！

「しっかし、随分と広いねこの地下施設」

『元は天然の洞窟だったモノを、研究用の施設へ改築したんだそうです』

「洞窟？これがか？面影が全然残ってねえぞ？」

さて、彼女はズーッと昔に、この地下施設に容器に入れられて保管されていた事は解った。

そういう訳で先ほどから、現在彼女にこの地下施設の案内をして貰っております。

『何世代もかけて少しずつ、変えていったんだそうです。研究で出来た新技術も導入して』

「つまり、この施設自体が、錬金術師の研究成果な訳だ」

『その通りです。ちなみに私が作られたのも、このくらいに施設が出来てからでした。』

「ふへえそうなんだ？」

「そう言えば話し変えっけど、この施設どん位大きさなんだ？」

『およそ…7〜8kmくらいだったかと記録しています』

うわぁ、ソレはまた随分と大規模な施設だったのね。

それだけでかければ、経営難になった時に維持するのも大変そうだなわ。

それだけ凄い施設なんだから、お宝の一つや二つ落ちて無いかな？

『あ、ソレはムリですよ？』

「え？何で？……というかこころ読んだ？」

『まあ…つながってますし…イヤでしたら読まれない様にと念じれば大丈夫です』

さいで。というか“つながってます”のところで頬を染めんで下さい。  
ちよい恥ずかしいです。

『まあなんて言いましょうか…ココは所謂危険物保管庫だったんですよね。だから置いてあるものは使えないモノばかりで、百害あって一利無しですから、持ち出さない事をお勧めします』

「やっぱりそうなんだ。地下にある錬金術の研究施設だしね…ちなみにどんなのがあったのか解る？」

『えっと…たしか“生物を不死生物に変える粉”とかがありましたね』

ソレなんてグールパウダー？

『あとは“一日中引きこもりたくなる薬”とか“異性に興味が持たなくなる薬”とか…』

「？ソレのどこが危険なんだ？」

『前者は一生人前に出ようとしません。なので餓死します。』

「ウゲ…最悪だなソレ」

『後者は文字通りで、男性は女性に興味が出無くなり逆もしかりです…問題は』

「あー！ちよい待ち、大体予想が付いたから、そこから先は良いよ」

なんてこつたい！確かに危険すぎるモノだそりゃ！！

紅が俺にも教えるおーって騒いでるけど、良い子は知らなくていいんだよ！うん。

\*\*\*

「そう言えばさ。ウィンディはパーティーに登録しないのか？かなめ」

今だ続く地下施設の通路を歩いていると、紅が突然そんな事を言った。

ふむ、そう言えばココまで色々ゴタゴタしてたから、すっかり忘れてたね。

あのキマイラを倒せる程の精霊だし、きっと相当強いんだろうなあ…。

ちなみにウィンディの方は意味が良く解っていないので、首をかしている。

なので、一応サーチ仲間登録の事について説明する事にした。

結果はあっさりとOKしてくれた。

というか是非お願いしますと迫られたので怖かった。

「じゃ、じゃあ…やるよ？」

『お、お願いします』

な、なんだか緊張するなあ…。

「……………サーチ」

僕がスペルを言うとサーチの魔法が発動し、目の前に魔力で出来た

球体が出現する。

ココからCTスキャンの如く、微弱な魔力波を対象に照射して、解析するのだ。

さてさて、彼女のステータスはどんなのかな？

HP (体力)	.....	20000 / 20000	(暫定的なモノ)
MP (精神力)	.....	/	
LV (現在のレベル)	.....	LV (無し)	
EXP (現在の経験値)	.....	0 / 0	
STR (力の強さ)	.....	(無し)	
INT (知性)	.....	(無し)	
DEX (器用さ)	.....	(無し)	
AGL (素早さ)	.....	(無し)	
CON (耐久力)	.....	(無し)	
ATK (物理攻撃力)	.....	(無し)	
MAG (魔力)	.....	(無し)	
HIT (命中率)	.....	(無し)	
AVD (回避力)	.....	(無し)	
RDM (物理防御力)	.....	(無し)	
RST (魔法防御力)	.....	(無し)	
LUC (幸運)	.....	(無し)	
CP (技及び魔法の装備容量)	.....	(無し)	



1 精霊なので、基本的には契約者の魔力に依存する。故にLV・ステータス等は存在しない。

2 契約者に括られている所為で、分類的には外せない装備品（呪われている？）扱い。

（　　？　　）……………ポカーン。

ハッ！あまりにも衝撃的すぎて意識が変な所に行ってた！！

ええと、この説明の感じだと……………パーティーに登録不可って事なのかな？

というか装備品扱い　しかも呪われ系　コレ本人に言うの辛いんですけど？

『あ、あのかなめ様、どうかなさったのですか？先ほどからお顔の色がすぐれませんか？』

「い、いやダイジョーブだよウィンディ……………」

い、いけない！こんな事いえないよう…………ど、どうしよう？

嘘でも付いたほうがいいのかなあ？でもばれた時が可哀そうだし…………  
よし。

「えと…………ね？落ちついて来てほしいんだけど……………」

『は、はい』

ギョクン…………と唾を飲み込む僕…………というか何故ココまで近況しているのだろう？まあ良いけど…………。

と、とりあえずオブラートに包んで事情を説明する事にしようウン。

「なんか、すでに僕に括られているから…登録が出来ないんだ…」  
『そうなんですかあ…残念です』

なんか色々足りてないけど、口から出たのはこの言葉だけでした。  
う、ウソじゃない…むしろ本当の事なんだけど…うう、何だろこの  
の感じ？

なんかウィンディが酷くガツクシとしている姿が、僕にすごい罪悪  
感を覚えさせる。

し、仕方ないじゃん！これ以上どうやってオブラートに包めと？  
素直に貴方はモノ扱いデス…だなんて言えるわけ無いじゃん！！

しかも表示は“呪い？”の装備品扱いなんだよ？  
可愛そ過ぎて僕の口からはいえないよ…。

「ま、仕方ねえさウィンディ。そう言う事もあるんだろう。なあか  
なめ？」

「う、うんそうだね」  
『まあいいです。かなめ様に括られているのだからパーティーに居  
るのと変わらないです』

ちよつと残念そうだけど、前向きな発言をするウィンディさん…。  
うう、ゴメン…なんかホントすいません（泣）

「そう…だね。うん、すでにウィンディは仲間だもんね」  
「そう言う訳だな。改めてよろしくだぜ」

『はい！よろしくお願ひしますね？かなめ様、紅様』

うう、何だかウィンディの笑顔が痛いです…ハイ。

\*\*\*

さて、ウィンディがサーチ仲間登録が出来ないという事が判明したので、歩を進める事にした僕達。

とりあえず、あのサーチの時に出た表示の事は、僕の胸の内にしていいこんでおく事にした。

別にサーチ仲間登録出来ないからって仲間じゃ無いって訳じゃないモンね！うん！

……………というか、そう思わないと精神的になんか罪悪感が酷いんですよ。

まあそれはもう良いと言う事にしましょう。こればかりはどうしようもないからね。

さて、しばらく歩いてみると、たまたま僕の後ろを歩いていた紅が僕の後ろ姿を見て声を出した。

「かなめ、お前の服…背中が凄い事になってるぜ？」

「そだね」

仕方ないじゃん…キマイラにやられちゃったんだしさ。

実は今僕の背中中、キマイラに受けた爪後の所為で、服に大きな穴があいている状態なのだ。

お気に入りだったローブも、無残に切り裂かれて今じゃボロ布状態だ。

『どれどれ…うわぁ、コレは酷いです』

「だろ？これは酷いぜ…」

「しかたないよ。ココじゃ着替えなんて手に入らないしさ？上に戻るまでこのままさ。」

「でも…なあ？」

『ええ、コレはちょっと酷すぎますよ。肩甲骨が丸見え……うふ』  
「ウィンディ？」

『は！いい、いいえ何でもないです！ハイ！！』

な、なんかすごい寒気が一瞬来たんだけど…何なんだろう？

『と、とりあえずそのままでは風邪をひくかもしれないので、着替えを調達しましょう！』

「でも、こんなところにそんなモノあるの？」

『大丈夫です！私の記憶が正確ならば、この先に試作品の装備品倉庫がある筈ですから！』

へえーそんなんもあるんだ………あれ？

「ねえウィンディ？」

『何でしょうか？』

「この地下施設って危険なモノを置いておく為の施設だよね？」

『ええ…そうですね』

「もしかしてその装備品って危険なモノなんじゃないの？」

『……………ダイジョーブです……………多分』

多分って…やっぱり。

「まあ良いじゃねえか。見るだけみてくればよ？」

「でも紅さんや？流石に危険な装備品とかは欲しく無いんだけど？」

「大丈夫なんじゃねえの？そんなに危険な代物だったら、とっくに壊されてっだろ？な、ウィンディ？」

『え？　　は、はい！そうです。確かにあまりに危険なモノは廃棄されたか、もしくは分解されてしまっているので、置いてあるのはそれほど危険ではないモノばかりの筈です！』

「……………それほど危険じゃ無いって事は…少しは危険なんだ？」

そう言うと顔をそむけるウィンディ……………まあ良いか、確かにこのままだと正直寒いしね。

「はあ…解ったよ。案内頼む」  
『解りました』

さてさて、蛇が出るか鬼がでるのか……………どっちもヤダなあ。  
そんな事を考えつつ、ウィンディについて行った。

中に入ると、普通に天井に届くくらいの大きな棚が整列し、いかにも倉庫って感じ。

しかも奥の方が見えないくらいだからかなり広い場所の様だ。

おまけに本当に色々あるらしく、置いてあるモノは魔力を纏わせているのが殆どである。

その魔力もピンキリ…禍々しいモノから、神聖な感じのモノまで千差万別っていうのもスゴイ。

『それじゃあ、私についてきて下さいね？こころ辺の棚はジャンクばかりですが、

厄介な効果が付与されている場合があるので、迂闊に御手に取られない様に気をつけてください』

「わ、わかった」

あまりにも危険な感じを受けるので、僕たちは素直に彼女に従って、後について行く事にした。

しばらく奥の方に進むと、とある棚の前で彼女は立ち止った。

明らかに置いてあるモノの力が強いモノばかりの棚である。

彼女はフワツと浮かび上がり、上の棚を物色して幾つかのモノを持って降りてきた。

『ええと、まずはこれなんてどうです？』

そう言って彼女が持ち出してきたのは、耳の無い猫だか狸だか分らない着ぐるみ…しかも蒼い。

おまけに、ソレは所謂海賊版の着ぐるみであり、お隣の国の某ランドで歩き廻っているヤツと同じだった。イメージつかない人は、両目の間がみよーに離れている蒼狸の着ぐるみだと考えてくれれば良い。

「ゴメン…コレはムリ…ビジュアル的に」

「そうですかあ…まあこれは“外せなくなる”程度の呪いが付いている程度だったのですけど仕方ないですね」

「いや…それ結構洒落にならないくらい危険だとも思うよ」

羞恥プレイなんて目じゃ無いね…この着ぐるみは。

でも良くある呪われ系装備とか着てる人ってお風呂とかトイレどうすんだろう？

まさか着たまま…想像したら最悪の生活だねウン。

「他には何かあるの？」

「ええと…コレとかはどうですか？」

次に取り出したのは……リクルートスーツ？

「ええと、昔居た“伝説のきぎよーせんし”という人達が身に付けた装備だそうです。なんでもこれを着れば24時間働けるのだそうです…」

「いやまあ確かに、その通りだけどさあ…肝心の呪いは？」

「ええと、着たら最後ワーカーホリックにかかる呪いです。強靱な精神力が無い人はずっと働き続けて…最後には過労死するという恐ろしい呪いですハイ」

うん見た目は高級スーツだけど、コレも洒落にならない呪いだね。という訳で

「却下」

流石に過労死で最後は迎えたくない…というか何故リクルートスーツがこの世界に？

『じゃあ、こちらなんてどうですか？これは特に呪いの類は憑いていないモノです』  
「ふ〜ん、どれどれ？」

次に彼女が持ってきたのは、何故か和風の赤揃えという赤い鎧…しかも額当てと胴の部分に、金の刺繍で6個の丸が描かれている。

『この機能はただ一つ！死んだ持ち主を安全にあの世へ』

「ああ解った…うん、死後も安心な装備なのは解ったよ  
でも却下」

性能高そうだけど、なんとなく本能が拒絶するんだ。  
着たら最後…熱血漢になるって！！

「おいかなめ、俺も探してみたけど、これなんてどうだ？」  
「ん？紅？」

彼女が手に持っていたのは……………首輪？

「どうだ？良い皮で出来てるぜ？」  
「いや…その、気持ちは嬉しいんだけど、僕人間だしそう言うのはちよっと…」

『おお、むしろ裸なのを逆手にとって、首輪だけにするとは！流石



です紅さん!」

どっちにしろ却下! 身体を覆えるヤツにしてください!!

「ちえっ…せっかく探したのによお…」

『でもその首輪、付けた相手を絶対服従させる効果ついてるヤツですよっ。』

……………聞かなかった事にしよう…ウン。

\*\*\*

その後も色々と出るわでるわ

『これはどうですっ。』

「何故に体操服? しかも短パン短く無いッ?! はみ出ちゃうよ(何が!?)」

とか

「これもよさそうだぜ?」

「これなんて闘剣士? というかむしろ裸に近いでしょコレ?」

とか

『これなんてかなめ様が来たら似合いそうなんですけど…』  
「執事服とかマジですか? ……でもちよつと良いカモ」

とか

「この鎧なんてどうだ？V字型の角飾りがカツコイイだろ！！」  
「……なんか、赤い一つ目に追いかけれそうだね」

とか

『これは賢い方にしか見えない衣です』

「じゃあ人類の9割は見えないね？却下」

とか

「これなんてどうだ？上下がくっ付いた服なんて珍しいぜ？」

「ソレはツナギってという服だよ？でも着たら最後お尻が心配だから止めておくよ」

だとか：なかなか良いモノが見つからない。

というか後半の服は絶対に来たくないです！色んな意味で！！

探してくれている2人には悪いけど、まともなヤツなんて無いんじゃないだろうか？

いい加減2人も鬱憤がたまってきたようで、不機嫌そうな表情で僕を見ている。

『もう…わがままな人ですねえ。かなめ様は』

いや、何で僕が悪いって感じになってるんですかウィンデ  
イさん？

「だよなあ？俺達がこんなに頑張ってるのに、文句垂れて着ようともしないもんな」

いやいやいや紅さん?! ソレの殆どには呪いが掛かってるんですよ?!

『いい加減決めて貰えませんか? 先に進みませんか?』

「そうだなかなめ? 俺達はルアリスの弟に薬を持って帰らねえといけねえんだろ? もたもたしてらんねえよ」

「そうだけど…でもさあ、呪われるのはホント勘弁してほしいよ」

幾ら性能が良くても、僕はリスクになるものは欲しくは無いんですけど?

真面目な話、ココにあるヤツは質が悪い事に、性能だけは一級品みたいなんだよね。

確かに見た目とか、軽いバッドステータスや呪いを我慢すればいいんだろうけど…やっぱムリっす。

「たく、なんかそんなに気にいらねえんだかなめ? 性能は良いヤツばかりだろ?」

「だって…呪われるのは嫌だし…」

「だったらさあ? 装備品についた呪いの解呪とか何とかすれば良いんじゃないかねえのか?」

あ。

『おお! その手がありましたね!』

「あのソレ僕のセリ」だろ? やっぱリウィンディは良い奴だな!」

いやちよつと」

『でも解呪なんて出来るんですか?』

「ええと…それは「確かなめが覚えてる回復魔法の効果の一つに解呪が付いてたぜ?」あの…」

『それなら、私がその回復魔法の術式から解呪だけを抜き出して増

幅、強力な奴を使えば…』

「どんな呪われた装備でも解呪可能って訳だ！」

「　　うう…もう良いっす」

何故だか知らないけど…僕を抜きに2人で盛り上がったちゃってるよ。クスン、哀しいなあなんか…。

「じゃ、まあ」

『そう言う訳で…』

「え…え？なに、何なの？」

無視されてやや落ち込んでいた僕に、2人は良い笑顔を向けながら

「『呪いは関係無しにカツコイイヤツ探してきます（るぜ）！！！！』」

といい、倉庫の奥に向かって走って行ってしまいました。

「ちよっ！あ

　　いつちゃった」

呆然と2人の後ろ姿を見るしかなかった僕。

だ、大丈夫なのかな？！

## 敵の一覧(前書き)

\*感想に要望があったのでUP。

\*2魔獣追加

## 敵の一覧

? 1 紅（改造前）

\* かなめ君を一番最初に危機に陥れた強敵。野良犬生活で鍛えた足腰でかなめ君を追い詰めた。

? 2 イノシシ（仮）

\* 正式名称現在不明、異世界で初めて戦った敵で有ると同時にボスの存在。自称神さまにより魔改造されたかなめ君の手によって倒され、彼らの身体の一部となった。

? 3 大きなウサギ（リグラビット）

\* かなめ君が一番最初に居た森に生息する魔獣、見た目はかわいらしいものの、その前歯は人間など普通に解体出来る……とは言うものの、素早い程度で動きが単調な為、慣れた冒険者なら蹴るだけで倒せる。森での主食でもあった。

? 4 大蛇

\* 主に森に生息している魔獣、全長6m程ありその長い身体で巻きついて、相手を絞め殺そうとするのが主な戦法、だが動きが遅い。ちなみに毒は持っていない為、落ちついて戦えば簡単に倒せる。

? 5 カエル

\* 体長1m程のカエル、基本無害。

? 6 大きな蜂

\* 森に生息する巨大蜂、羽根を広げると最大2mを超えるモノもある。だが所詮は虫であり雑魚。

? 7 生贄兵

\* かなめ君達が住んでいた森の南側のダンジョンに現れる敵で、簡単に言えばミイラ。元々はダンジョンを守護する為に建造の際、生きたまま建築材にされた哀しき兵士たちである。ダンジョンの構造自体が魔法陣のようになるように作られており、彼らはその影響で侵入者を迎撃する役目を担う。まあ実際は、只単に驚かせるのが目的であり、正直戦闘力は皆無。なにせ死んでから何百年と経過しているから風化が激しい為、動き回るだけで精いっぱいなのである。

? 8 犠<sup>ソレヒ</sup>牲者

\* ダンジョンに来た冒険者のなれの果て、彼らはミイラ達に襲われそのまま……と、言いたいところであるが、実際はダンジョンの畏にかかり死んだ冒険者達である。ダンジョンの魔導的構造により、死んだ後アンデッドモンスター<sup>ソレヒ</sup>の如く動き回る存在になってしまった。こちらも実質動き回るだけなので、戦闘力は皆無なのだが、時折武器を所持している事があるので、注意が必要である。ちなみに彼らに噛まれたとしてもお仲間になる事は無い。

? 9 エンシエント・ドラゴン(老)

\* ダンジョンのボス、宝物庫を守護する為に卵の段階でダンジョンに設置された。古代の技術で製造された人工ドラゴンであり、魔力で身体を形成する事で不死に近い寿命を持つ半面、所詮人工物ではない為、知能の発達が認められず、おまけにあまりに長い間放置すると、ボケと身体疾病をおこしてしまう失敗作でもある。その為ダンジョンには、エンシエント・ドラゴンを調整する為の魔導器が設置されていたのだが、かなめ君達が来るウン十年前も前に停止していた。自然界のドラゴンでもそうなのだが、余分な魔力を結晶にする性質がある為、倒すと竜魂石が手に入るのはお約束。

? 10 盗賊 A / B / C / D / E

\*数多ある盗賊集団の一つ、アイアンメイデンの構成員。つまりはモブ。ギルドランク的にはDという底辺ギリギリの実力である。街道を根城とし、そこを通る商人を襲って収入を得ているのだが、基本的に人を殺す事は無い。だがソレは義賊ぶっているからでは無く、只単にヘタレだからである。

? 1 1 盗賊頭

\*ロリコン野郎、だが少女は愛でるものという考えの元に行動する変態という名の紳士。というか自分の盗賊団の名前を決めたのもコイツ。だが一応、盗賊達を纏めていた頭と言っただけはあり、それに強く、ギルドランクはC Bの間程度の実力である。手加減されていたとはいえ、紅の攻撃を避けられるくらいAGLが高い。だが魔法の耐性は低かった為、かなめ君の魔法により吹き飛ばされた。(ちゃんとして生きています)

? 1 2 草原イノシシ(仮)

\*森のイノシシと大差無し。

? 1 3 リグラビット(ギルド入団試験)

\*森にいた大ウサギと大差はない。

? 1 4 オーク

\*亜人種の一つであり、基本的には能天気で温厚。だが中には人に危害を加えるモノもあり、力もかなり強い。彼らは独特の階級制度を持つコミュニティを持っており、そのコミュニティからハブられたオークはハグレと呼ばれ、通常よりも強いとされる。ちなみになめ君と戦ったカワムラさんもハグレであるが、ハブられた理由があまりに能天気すぎたからであり、実力は通常のオークである。

? 1 5 ギズボン・ウェルシエ



\*ギルドの構成員。ドラゴンの血を引くドラゴニユート族であり、その強さはギルドランク的にはS Aの間となっている。彼はギルドの試験官のバイトをしており、強い新人を待ち望むバトルジャンキーでもあった。その為、かなめ君は運悪く彼の目に止まってしまい“ある程度”本気を出されてしまったのである。基本魔獣関連の討伐依頼しかこなさない為、ギルドに屯っている。

?16 エルダー・シエツトランド

\*ガラクトマン魔法学校で学生をしている少年。幼いながらもその実力は高く、そりが合わない親方とのケンカによって、商店街を壊滅に導くほどである。ギルドに所属している訳ではない為、ギルドランクは無いのだが、ギルドランクに換算するならその戦闘能力はAとなる。怒ったかなめ君の大ハリセンで吹っ飛ばされた。

?17

親方<sup>ゲイル</sup>

\*クノルの町で商人ギルドに所属する商人の一人、面倒見の良さから周りから親方と親しまれている。裸一貫で商売してきた為、そんな所そこの傭兵よか強く、我流の気功（本人曰く、気合）で敵を圧倒する実力の持ち主。何故かエルダー君との相性が壊滅的に悪く、顔を合わせるたびに毎回ケンカしてしまい、その度に町を破壊してしまう。

?18 ゴ布林

\*体長30cm程の大きさの亜人種で、口と耳が大きくまた尖っており、とても醜い顔をしている。そして恐ろしく弱く、人間の子供相手に10人掛かりで襲い掛かる程である。だがその半面恐ろしく繁殖力が強く、その繁殖力は台所の黒い悪魔を越えるほど。クノルの町郊外のゴ布林達はかなめ君制作のハリセンにより、紅が吹き飛ばした。

? 19 イノシシ（仮）の群れ

\* 季節によってえさ場を変えるイノシシ（仮）の群れであり、クノルの町がちょうど彼らの針路上に存在している為、戦闘となった。実力は通常の奴と変わらないのだが、数が多い為前に出て戦う事は危険である。その為クノルでは彼らと戦う際、A以上のギルドランクのある冒険者しか、前衛に出さない。また彼らの身体は、アイテム製造の素材に使用できる為、町にとっては天災であると同時に恵みでもあった。

? 20 盗賊団（ネテに続く街道に出現）

\* 数多ある盗賊団の一つであり、賞金が掛けられていた。基本的に弓で商隊を襲って皆殺しにしてから積み荷を奪う。アイアンメイデンの盗賊達とは別次元のプロ集団であり、盗賊団の名前すら盗賊団で通っていた。

? 21 ギガース

\* 巨人種の一つであり、通常の人間の三倍の体躯と怪力を持ってして戦うパワーファイター。ネテに向かう街道にてかなめ達を襲った盗賊達の仲間であり、その高い耐久力とパワーと魔法耐性によって、かなめ君達を苦しめた。

? 21 キマイラ

\* “主無き錬金術師の屋敷”の地下に存在した、廃棄された危険物保管庫区画に居た合成獣の一種。元々は軍事利用を目的とした生物兵器開発の一環で、錬金術を用い改造を施した生物のなれの果てであり、制御の難しさや運用の不透明さから廃棄された。だが後に拘束術式のかけられたオリを自力で破り、地下空間をたださまよう魔獣となった。所謂ボス級。

?22 モスフングス

\*行つてしまえば巨大キノコ。そして動く。旅人を襲う。立派に魔獣してます。

菌糸類に過剰な魔力を与えて作られた合成生物とも、自然発生した生物とも言われている。

また、元は孢子を付けられた人間であつたともされ、動き回るのは生前の習慣であるという説もある。

普段はエネルギーの消耗を抑える為じつとしていますが、人間等の気配を察知して動き出す。

しかし、動き自体は緩慢かつ単調な為、普通の冒険者でもそう苦労はしない。

だが、フングス達の厄介なところは、死体を一匹放置しただけでも増えてしまう所にある。

おまけに個体によつて、様々な効果を持つ孢子を持っており、傘を揺らした際は注意が必要。

一匹でも見かけたら、すぐさま魔法使いに頼んで焼却処分する事をお勧めする。

まれに食べられる変種も存在しているらしい。

?23 タロス

\*魔法強化が施された、青銅製の試作自動人形、簡単にいえばゴーレムである。

ガラクトマン魔法学校のゴーレム研究会により生み出された、試作汎用型作業ゴーレムだ。

コンセプトは人間に近い動作、汚れがすぐに落ちると言うモノで、その成果はタロスのボディ随所に見る事が出来る。

特に火属性の魔導術式を刻みこんだ事により、一瞬で身体を白熱化

させられる燃焼システム。

瞬間的で範囲が限定されているとはいえ、その熱量はすさまじく、刀剣の類を溶かしてしまうほど。

だが実はコレ、本来は身体を掃除する為の機構で、ソレを流用した防御システムであったりする。

身長3m程ある為、汚れた際に水で洗うのが一苦労だったと制作者が感じ、だったら汚れは炎で焼いちまおうと言う考えの元、取り付けられた機構である。

その為、瞬間・限定的な起動しか行えない上、無理して連続稼働させると壊れてしまうという仕様になっている。

尚、一応作業用ゴーレムと言う事になっているが、その実軍事利用も可能な為、武装を強化されたタイプが、グランシユバツテ王国に少数配備予定されていたりする。

その時に出た賞金を研究費に回し、今日もゴー研は“アブナイ発明品”を作り続けている。

なんとかに刃物、マッドに研究費、というやつである。

この敵さんの一覧表は徐々に増えて行く……………等。

## 第25章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第25章 ↓

さて、彼女たちが集めに行ってくれて大分服が集まった。  
なので、その中でも性能が良くて、なるべく恥ずかしく無いモノを  
選ぶ事になりました。

ちなみに持つて来たものには全て呪いが掛かっていたんだけど、驚  
いた事にウインディが解呪をすぐに習得したのだ。

何でも、僕が覚えているキュアウインドのスペルから、解呪部分だ  
けを抽出し強化したんだとか…。

僕と契約して色々つながって… リンクしているからこそ出来るん  
だそうで… すごいねホント。

そして僕が審査員を務めて、厳しい最終審査をクリアした装備達  
がそろった。

で、これらがその装備品達である

- ・ 頭                    伊達メガネ
- ・ 胴体                アルケミスト・ジャケット+フード付きマント
- ・ 腕                    アルケミスト・グローブ
- ・ 腰回り               黒革のズボン(サイドポケット多め) + ウエスト

ポーチ

・脚

アーマーグリーブ（膝下まで）

やや地味だけどさ、コレでも大分マシになった方なんだよ？

最初なんてチエインメールの上に、プレートアーマーを装備させようとしていたからね。

僕はただでさえ魔法使い系のステータスなのに、鎧なんかして身体の動きを阻害してどないすんねんって思ったよ。

てな訳で、とにかく動きやすそうなヤツを集めたらあら不思議、妙に地味な装備でまとまってくれたのでありました。

………というかプレートアーマーなんて着てたら町中歩けないけどね！なんかカツコ悪いし。

ちなみに、呪いは解除した筈なのに、この服装を見た途端……

何故か脳裏に銀髪の本ムンクルスが浮かんだけど……何でだろう？

\*\*\*

「とりあえず着てみたけど……どう？」

『地味ですね』

「地味だな」

「………地味の方が良いと思うよウン。」

いいんだよコレで、僕の体は貧弱坊やみたいに細いんだから、鎧なんて絶対似合わないんだしさ！

………うう、何故か言ってて哀しくなった。

でもまあ、それでも装備に付いている効果はかなり凄い。

ジャケットには体力を増強する効果が付いていたし、マントは魔法ダメージ半減が付いていた。

グローブには滑り止めと力増強の効果が付き、ズボンには何故か自動回復の効果が付属してた。

グリーブにも速さがグンとUPする効果付きで、ジャンプ力も増強されるらしい。

しかも、これらの装備品の防御力は魔法術式により強化され、そこから辺の鎧よりも高かったりする。

おまけに以前来ていたローブよりも頑丈と来たもんだ。丸洗いも勿論OKなのがうれしいね！

あ、ソレと伊達メガネの方はステータスが上がる訳じゃないけど、絶対に壊れない効果付きだった。

絶対に壊れないって所が凄いなホント。為に踏んづけてみたけど、傷ひとつ付かなかったよ。

コレも魔法の一つらしいんだけど、そこら辺は良く知らないから、後でラジャニさんとこで調べようウン。

ああ、ソレと…ちなみになんだけど。

当然解呪する前ジャケットには“生命力を吸い取る”呪いが憑いていた。

マントには“水を浴びると触手が生えて増殖”という謎の呪いが付いていたとサーチで判明した。

グローブも“怪しい薬を作る”呪いが憑いており、ズボンとグリーブにも“足が萎える”呪い憑き。

しかもグリーブにはプラスして“水虫にかかる”呪い憑きだったのが恐怖だったね。

流石ちよいと危険なモノが納められている倉庫…色んな意味で半端ないわコレわ。

勿論これらは解析が終わった後、ウィンディのサポートを受けて、全部解呪しておいた。

一つでも残っていると大変だからね！色んな意味でさ？

「さあ！服も変えたし、心機一転頑張ろう！」

『「おー！…！」』

とりあえず、この主無き錬金術師の屋敷から出る事にしようウン。

\*\*\*

地下通路を徘徊する事およそ30分。

意外と出口は倉庫から地下めの距離にあったらしく、上に続く階段にたどり着けた。

「はあ、ようやく出口か」

「どんだけ広いだよこの地下空間」

『まあ、増改築を繰り返してましたからねえ。私がいた時からあまり改装されて無かったのは行幸かと…』

そーなのかい、と僕が納得しかけた時、彼女は小声で

『 ……トラップの位置も変わってなくて良かった』

とか言っていたけど…全力でスルーする事にしました  
無事に付けたから問題ないもんね？ね？



階段を上がると目の前に湯手を塞ぐかのように、一人が通り抜けられる程度の扉が現れた。

ギギギギギギ…………… バタンツ

そして、ウィンディが何かスイッチの様なものを操作すると、いかにもな音を出して開いて行く…。

しかし、こついったところの扉の開く音って、何か来た事あるなあ…狙ってるんじゃないだろうか？

「ふう、ようやくカビ臭い所から帰れたぜ」

『おつかれさまです』

僕が扉から這い出ると、その後が続いて紅も出て来た。

「さてと…ココは屋敷のどのあたりなんだろう？」

ぐるりと辺りを見回す…どうやら今僕たちがいる場所は、どうやら研究室の一室らしい。

僕たちが出て来た扉は、壁の中に上手い事隠されていた様だ。

そう言えば、僕達あのスリの女の子のリアに頼まれて、ココに薬を探しに来たんだっけ…。

「ねえウィンディ、この屋敷の最奥ってこの部屋？」

『え？ええそう…ですね。確かにココが屋敷の最奥です』

ふうん、てことはこの部屋のどこかに薬が落ちているって訳だね。  
僕が何か落ちていないか、イマジンホタルトライト EDT懐中電灯を使った。

「うわあ、改めて見ると埃だらけだね」

「でもつい最近、誰か来てたみたいだな。足元の埃の一部が薄くな  
つてるところがあるぜ？かなめ」

『足跡：みたいですね。ちょうど子供くらいの大きさの』

ふむ、どうやらココで間違いなさそうだね。

「皆、手分けして何か落ちていないか探してくれないかな？」

「OK、良いぜ。元々その為に来てたんだしな」

『ええと、良くわからないけど、お手伝いします』

僕たちは手分けして、この部屋の中を搜索する事にした。

一応紅にはイマジンホタルトライト EDT懐中電灯を渡してある。

ウィンディの方は、自分自身で光を出せるそうなので、問題無しだ。

さてと…とりあえず最初の目的である落し物を見  
つける事にしましょうか。

そう思い、埃がつもっている床を明かりで照らしつつ、辺りを見て  
回る。

しかし、流石は錬金術師の研究室、色んなものが置いてあるなあ。

中でも目を引いたのは、フラスコや試験管、ソレとアルコールラン

プを組み合わせ、ソレをチューブでつないだ蒸留装置みたいな大きなヤツ。  
ソレと、何故か釜戸があつて、そこにかけてある……なんて言うか  
魔女が薬作る時に“イイ〜ヒツヒ”とか言って使つていそうな半球  
状の大鍋だつた

……………試験管はともかく、鍋は何に使うんだろうか？

「ふうん、薬も豊富なんだあ」

本当は薬を探していたんだけど、なんとなく…ふと眼を逸らした先  
にあつたのは薬品棚。

面白そうなのでついつい脚がそつちに…好奇心が優先されてしまう  
僕であつた。

ふむ、多少荒らされているが、どうやらこの研究室で使われていた  
材料や完成品の様だ。

なんとなく僕はソレらの薬品に目を向けたのだが……。

「え？……ちょい待ち、イヤイヤまさかねえ？」

たまたま読みとつた薬の瓶のラベルを見て動揺し、動きを止めてし  
まった。

まさかと思い、薬品棚から薬の瓶を取り出し、ラベルを良く見てみ  
る。

そこに書かれていたのは

「試作型のエリクサー、だつて？」

エリクサーなんてファンタジー世界じゃかなりスゴイ薬だつたはずだ！

エリクサーは、確か錬金術によつてもたらされる霊薬の一種で、賢者の石を用いて生成される……もしくは液体版賢者の石とされる程のシロモノで、万病を癒す他、不老不死の効果があるとされるモノであつたはず。そもそも賢者の石自体が、あらゆる金属を黄金へと変化させ、地水火風の錬金術に置ける四大元素を全て内包した、第五万能元素とも言われており、当然錬金術師たちが長年追い求め続ける、錬金術に置ける一つの到達点であると言つても過言ではないらしい。僕の居た世界では水銀や硫黄を使い生成しようとしていたらしく、またエリクサー程ではないが、怪我人や病人を治療し、人々の精神を高める効果もあつたとされている。まあゲームの世界では大抵がHPMPを全快させるとかの様に大幅にスケールダウンした仕様だつたけど、それでもその名を冠しているという事はかなりの薬の筈である。

以上、長々脳内ウンチクのコーナーでした。

ちなみに何故僕がこんな事を知っているのか？……昔読んだ錬金術の本が面白くて覚えてました。

まあそれはともかく、コレは結構なお宝だね。試作品とはいえお金になりそうだ。

それに例え売れなくても、もしかしたらリアの弟であるツール君の治療に使えるかも知れない。

うーん、正義感ぶるつもりは無いけど、助けられそうな人を放っておくのは目覚めが悪いしね。

……………ん？なんか、良く見たらラベルに小さな文字が書いてあるぞ？

「……………制作者…シエル」

こんなスゴイ薬が、ココに残され（廃棄され）ている理由が解った気がする。

てか、シエルさんの名前をこんな所で見るなんて、実は結構有名人？でもコレ…下手に使ったら使った人が二度と起きない気が……というか起きないだろうなあ。

まあ考えてもわかんないので、僕はそつと危険な薬を元の位置に戻しておいた。

\*\*\*

「そつちなんかあつたあ？」

「まだ見付かんねえ、かなめのほうは？」

「僕もまだみつかからないよ、ウインディは？」

『瓶は幾つか見つけたんですが、恐らくココの薬瓶でしょうね』

ふむ、入口付近に落ちていると思ったけど、見つからないなあ。  
一応リアから聞いた話だと、薬は小瓶に入っているそうだから、どこか転がって行ったのか？

「実は薬品棚と壁の隙間にあったりして……」

意外と探してみると、そう言ったところに迷い込んでいたりするよねえ〜。

とりあえず、そこに明かりを照らしてみた。

「え〜と、落ちているのは…釘、銅貨、なんかの紙

」

う〜ん落ちているのはゴミばかりか。

「お！あつた！コレじゃねえか?!」

「え？本当紅!?!」

『やりましたね！紅さん!』

とりあえず、確認つと……うん、ラベルに書かれた表示からしてコレがそうだね。

僕は紅からその小瓶を貰い受けると、鞆の中にしまった。

コツコツコツコツ……

薄暗い洋館に足音が不気味に響く……………なんてね。

「しっかし、案外簡単に見つけちゃったけど、出なかつたなあ」

「ん？何が？」

「いやホレ、アイツ言ってたじゃねえか“屋敷の奥で魔獣らしき影を見てにげた”ってさ」

そう言えばそんな事を言っていた様な…。

「ねえウィンディ？キマイラってあの個体だけ？」

『ええと…たしか私がいた時点ではすでに研究が打ち切られて、あのキマイラしか残ってはいませんでしたけど…』

「じゃあさ？他に魔獣とか居たりするの？」

ウィンディはやや考え込むかの様に、米神に指を置く。

『うん、実験用として捕えられていたのが数体居たかと…でも、キマイラほど強くは無いですから、捕縛術式が生きている檻から出られる個体は居ないと思います』

ふむ、なら大丈夫かな？大方あの子が見たのは、外から迷い込んだ魔獣か動物だったりしてね。

でもこういう時に限って、何か出たりするんだよなあ…僕、運が低いから…。

そう思ったのもつかの間

……ぼんつと、何かか脚に触れた様な気がした。

「#%&（）&%\$%?!?????」

辺りに気を配っていたが、突然の不意打ちに流石に驚いた僕は、声にならない声を上げていた。

強い力こそ持っているものの、基本的に僕はビビりで怖がりである。なので、実はこの洋館のホラー成分で、結構ガクガク来ていたんだよね…コレが。

そして気が付けば、必死に脚にからみついていた何かに、必死にストンピングを敢行していた。



## 第26章

「出歩いて…落っこちて・第26章」

「はあ…はあ…はあ…何んなんだ一体？」

「いきなりどうしたんだよ？かなめ」

『そうですよ、いきなり足元に蹴りを連発して…』

いや、何かが僕の脚を掴んだんだって！驚いてつい蹴りまくっちゃったけど…なんなんだ？

「なんだ？カーテンの布か？」

「それにしても…大きい様な？」

薄暗いのでイメージを伴った電灯で照らすと、そこにあったのは大きな布。はて？コレが脚に絡まったんだらうか？

【うう…】

『「！？」』

「い、いま声が聞こえたよね?!」

「なんだ？かなめ、ビビってんのか？」

「うんビビってるよお？お兄さんはとっても怖い」

『というか声はあの布から聞こえませんでした？』

恐る恐る、大きい布を照らせば、なんかフルフル震えていた。

僕は……その布に手をかけ……

「ていっ！」

勢いよく剥ぎ取った！そこにいたのは

505

「うう……いたい……というか、限界……」

「へえ?! キ、キースさん!? なんで血塗れなの?!」

「かなめ! そんな事よりも治療してやらネエと死ぬぞコイツ!」

『あらら、大変ですね。あ、心拍が……』

「「わー!」!」

何故か血だまりに沈むキースさんであった。大慌てで治療を施すことにした。

\*\*\*

「うっん……」

「あ、気が付いた」

「あれ？かなめくん？なんでココに？……というかオレ……あれ？  
はて？」

頭に？マークを浮かべ、頭を傾げるキースさん……というか

「あの、なんでキースさんが、この屋敷にいるんですか？」

「えッ？……聞いてくれるかああ？?!」

「うわっ！泣きながら近づかないで！顔の穴という穴から体液が！  
というか服に着くからヤメイ!!」

いきなり泣きながら僕に迫りくるキースさん……気色悪。

「何してんだ……キース？」

『いきなり何してるんですか？あなたは……？』

「あ、紅ちゃんとえーと……どなたですか？」

「ふう、とりあえずお互いにおちつきましようよ、ね？」

何故か黒い瘴気を纏わせた、紅とウィンディに阻まれたキースさん。  
でもキースさんはその事に気が付かず、普通にしている……意外と  
大物？

まあ、どうしてこの屋敷に居たのか、お互いに情報を交換する事に  
しよう、ウン。

「じゃあオレから話すよ、アレは一日前のお事じゃったあ」

「なあ、何で語り部風なんだ？」

「気分なんじゃ無い？」

『似合っていないですねえ』

「そこッ！聞こえてるぞ！……まあいい、話を戻すけど、オレは昨日から鍛錬に出てただろう？」

そこからの彼の話はこうだった

僕達から離れ、町を出たキースさん、自己鍛錬に選んだのは実戦経験を積める魔獣との戦闘だった。

平原に出た彼は「よし！やるぞお！」ってな感じで付近に生息する魔獣を狩り始める。

数刻の間はクノル周辺にも生息するイノシシを狩っていた。

だが、ふと違う魔物も狩ってみたくなったのである。

なので、そのまま森に入り、森に居る魔獣を狩ろうとしたのがいけなかった。

彼は…キースさんは方向音痴なのだ。

しかもダンジョンで迷って1週間出られなかった猛者なのだ。

そんな彼が、町が見えなくなるような森の中に入ったらどうなるか？

当然のことながら「迷った…」と、こうなる訳である。

キースさんは、もう毎度のことなので、とりあえず歩けばどこかに出られるであろうと動いた。

だが、コレは迷った時にはしてはいけない事である。

何か遠くの山だとか、目印を付けて歩くならばともかく。

なんの目印も無しに森を歩きまわるのは、非常に危険だからである。同じような景色が続く為、何時の間にか同じところをグルグルが有り得るからだ。

キースさんも、その事は冒険者の基礎として知っては居た…という

か最初に教わる事だ。

だが、こういう時に限って思い出さないの、そのまま歩き続けてしまったのだ。

その為、彼はかなりの時間森の中をさまよってしまった。

いい加減疲れた彼は、たまたま生えていた大きなキノコに腰かけた。だが、普通大きなキノコなんて森にあるだろうか？……あるわけがない。

彼が腰かけてしまったのは、別名徘徊キノコとも言われるモスフングスであった。

驚いた彼は、そのまま腰かけていたキノコを剣で一閃。打ち倒す事が出来た。

しかし、ソコはフングスの群生地だったらしく、打ち倒した際に上げた断末魔に導かれ。

多くのフングスが、彼の近くに集まり始めてしまった。

キースさんも流石にコレは分が悪いと、その場を逃げ出す事を決意する。

なぜならフングスはソレー匹なら、それ程脅威ではない。

だが集団となり、おまけに胞子を放出し始めると、状況は変わる。

フングスの胞子には、個体によっては吸い込んだだけで、麻痺等を起させる事があるからだ。

魔法で炎系が使えるならば、元が植物な為焼き払えるのだが、キースさんは魔法が使えない。

なので、その場から回れ右をして、駆けだしたのである。

だが、どうやらフングス達もおいそれとは逃がしてはくれなかったらしい。

人間というエサを求めたフングスが、森の暗がりという暗がりから、わらわらと這い出て来たのだ。

ソレをみたキースさんは、マジでヤバいと言う事を理解、そのまま全速力で森を駆け抜けた。

なんとか森から脱出したモノの、ずっと走り続けた所為で息も絶え絶えになった。

その為、どこかで休みたかったのだが、草原に休めそうな場所は無い。

おまけに町がどっちの方向にあるのか解らず、途方に暮れかけた。

かと言って町に行く為に、森に戻るのは論外である。

現在森の中は、キノコ祭り開催中だったからだ、流石に仲間入りはしたく無い。

その為、恐らくコツチであろうと歩く事数分、運よくポツンと建つ屋敷を見つけたのだそうだ。

普通ならこんな所に建っている建物で、しかも手入れが為されていないと見れば引き返しただろう。

だが、彼はものすごく疲れていた、下手したらそのまま平原にねっ転がるくらい。

誰もいないとはいえ、家の中の方が安全だと思った彼は、屋敷に入る事にしたのだ。

しかし、扉があかない、実はソコは勝手口だったのであるが、疲れた彼はそんな事解らない。

表の方に回れば、玄関があるのだが、そこまで頭が回らなかった彼は窓から侵入したのだ。

そして窓から入る際、カーテンが身体に引っ掛かり巻き付けてしまった。

しかし、疲れていたの、むしろカーテンですら暖かい布団のように思えて、そのまま熟睡。そして現在に至る

と、こつこつという訳なんだそう。

「とまあ、オレの話は以上だ」

話しを終えたキースさんであったが、それを聞かされた僕たちの反応はというと

「うーん、なんて言うか…自業自得？」

「この場合自滅の方が似合うんじゃないのか？」

『と、言うよりも根本的な問題として、方向音痴の方が一人で森に入るの、どうかと…』

意外と散々に言っていたりする。

僕と紅の場合、この人ならしょうがないという諦めも混じっていたりするけどね。

まあ、そこら辺は置いておこうウン。

「で、オレは話したから、今度はそっちの番だ。」

「うん、実は」

僕も財布をスラれて、スリの子を探しだし、そのスリの子の弟君の為にこの屋敷に来て、地下施設に迷い込み、キマイラに襲われて瀕死になりかけ、精霊のウィンディに助けられた。

と、言うような感じで話した。ちなみにウソは言っていない。

精霊と聞いた辺りでキースさんは驚いてはいたけど、怖がったりとか敵意をもったりはしなかった。むしろ好意的に接してくれる……というか。

「ねえ君、名前はなんて言うの?」

『ええと、ウインディーネと申します。愛称はウインディです』

「へえ、いい名前だね?あのさ、後でオレと一緒に町の商店街にでも行かないかい?」

『あ、いや…そのう』

どう見ても口説き落そうとしているね。キースさん。

まあ彼女が嫌がるような事をする人ではないだろうけどね。ちよつとムカつて来たけど…。

『残念ですけど、私はかなめ様のモノですし…』

はい?

見ればキースさんが、ギギギと擬音が付きそうな感じで振り返って僕を見ている。

あ、あはは…コレはまた…。

「…かなめ?」

「紅、先に言うておくけど、僕は何にもしていない」

頼むからワラって背後に立たないでくれよ…。



「あとウィンディ、なに言ってるの？月並みな言葉で申し訳ないけど、僕は君の事をモノとして見てないよ？」

『そう…ですか。』

「うん、出会ってからまだ時間は経って無いけど、仲間だと思ってるよ？」

ふと思ったんだけど、この台詞って意外と口にするのハズいのね？はてなあ？僕はこんなクサイ台詞をいうのはキャラじゃないんだけどなあ。

『モノでは無い…仲間…離れられない二人…つまり』

「あ、あの一、ウィンディ？どつたの？」

『つまり、かなめ様と私は一心同体な訳ですよね？』

「何がつまりなのかわかんないけど、君自身が契約でそう思ったじゃないか」

なんか様子を変やな？どうしたんやるか？

『つまり私とかなめ様はパートナーという事ですね』

「ちよつと待て！かなめの相棒は俺だ！」

『では私は2号さんでいいです』

「よし！それなら許す」

「あのちよつと二人とも！」

なんか話が変な方向に転がってはいないか？

「ああ、美女と美少女がお前の為にケンカしてるぜ？」

「いや僕としては何が何だか…」

「……………どうせそう言うと思ったよ！！ドチクショー！！！！！！！」

「?????」

\*\*\*

とりあえずその場は治まったので、屋敷から出る。

今度は入口じゃなくて、窓から出る事にした、玄関付近はやバそうだったからね。

そういう訳で、なんとかネテの町に戻ってくる事が出来た。

キースさんとは、町の入口でわかれており、ココにはいない。

それに約束の事もある、ルアリスの弟君のツール君に薬を届けなくてはならない。

なんか探しに行つて、危険な目にあつたけど、ココまで来たんだからやり遂げたい。

そう…僕は思っていた。

とまあなんか偉そうなこと言ってるけど、とつとと終わらせたいだけである。

なんせ危うく死に掛けたからなあ、ウィンディという新たな仲間が出来たという事をプライマイしても、流石にこれ以上厄介事はゴメンである。

流石に背中を何度も引き裂かれないと思う人間はおるまい？居たら変態だと思つウソ。

とりあえずルアリス姉弟たちの家に着いた僕たち。  
ウィンディは僕の中に入って待機できるらしいので、中に入って貰った。

正直色々と説明するのが面倒臭いし、弟の世話で大変なルアリスに話したとしても迷惑だろう。

何でココまで遅くなったかを聞かれたら、たまたま地下道があつて落つこちたつて事にすればいい。

例え僕が危うく死にかけたのだとしても、薬を探しに行くと言つたのは僕達だし（主に紅だが…）

その事で気に病んで貰つたら、僕としては居心地が悪い。

なので、その事を事前に紅とウィンディの二人に説明し、理解して貰った。

僕はドアのノブに手をかけて、ノックもせずに入った。

「おーい、リアいるかー？」

「薬、探してきたよ」

「……………ノックくらいしろよ」

どうやら、食事の準備をしていたらしい。

普段着にシンプルなエプロンを付けた少女が、僕達を出迎えてくれた。

「はい、多分この瓶でしょ？」

「ああ、確かにコレだ……その、ありがと」

「いいよ別に（コレで義務は果たしたからね）」

僕はコレで終わりだとおもい、この場を後にしようとする。  
だが

「あ、あのさ！今からメシにするんだけど…お礼に食っていかねえか？」

その言葉に、僕たちは顔を見合わせ…。

「「「お願いします」」」

そう答えた。だってずっと地下に居たから腹ペコだったんだよウン。  
そついう訳で、ご相伴にありつくことにした。

## 第26章（後書き）

\*気が付けばお気に入り登録が250人になってビックリしたQ  
OLです。

さて、ちよつと次回の投稿は間を開けます。

多分12月終わるまでには戻ってこれるかと思いますが…。

まあのんびりと行きましようハイ。

以上作者からでした。

## 第27章

く 出歩いて…落っこちて・第27章く

さて、ようやくクノルの町に戻ってまいりました。  
帰りは敵さん出て来んかったので、楽なモンだったわ。  
しっかし9日も町に居なかつたから、なんか懐かしいなあ。

「今回の旅もコレで終わりかあ」

「コレで終わりかと思うと、なんか寂しいモノがあるね」

「キースさんもそう思うんだ？」

「そりゃね。短い間だったけど、同じ釜の飯を食べた者同士だし」  
「いえてる」

まあ同じ釜の飯を食べて倒れた者同士、仲間意識の一つ芽生えるわなあ。

キースさんと談笑していると、今度はシエルさんが寄ってきた。

「あら、二人して内緒話？」

「おろ、シエルさん。まあ内緒話ってほどでも無いんだが…」

「うん…もうすぐ旅が終わると思うと…ね？」

「ああ、成程。でも案外別の仕事で一緒になつたりしてね」  
「確かにありそうだ」

ギルドは色々な仕事を請け負っているからねえ、確かに有り得ない話じゃ無いね。

「もしそうだった時は、またよろしくな！かなめくん、紅ちゃん、ウインデイ！」

「おう、任しとけ！」

「こちらこそ」

まあ一緒に仕事する事になったら、キースさんはよく見張っておかないとね。  
只でさえ道に迷いやすいんだから、フラフラされたら敵わないよウン。

「ねえ、ウインデイって誰？」

「ああ、かなめくんの精」「仲間の名前です」「モガモガ……！」

危なかったあ、キースさんに口止めしとくの忘れてた。

人工精霊なんて珍しい存在なんだからあんまり知られない様に。

「ねえ紅ちゃん、ウインデイってだあれ？」

「うん？俺達の仲間で精霊だ」

ちよつ！紅いいいい！！！！！！何いきなりバラしちゃってるんですかああああ！！！！！！

「かなめくん」

「は、はい……」

「説明して……くれるわよね」

「……………はい」

う、恨むぞ紅…。

結局、色々と全部説明する羽目になった僕。でも不思議な事に、彼女はあんまり興味を示さなかった。

どうしてなのか聞いたところ、彼女曰く

『あら、人工精霊だったら、私だって持ってるわよ。もっとも自我は無いけどね』

だそうで、そりゃ自分も持ってたら興味は無いわなあ。

ちなみに今欲しいのは天然モノの高位精霊で、自我持ちだったら尚良しなんだそうで…。

自我持ち…助手にでもするのかんね？シエルさんなら有り得そうだがどな。

\*\*\*

さて、倉庫街に着いた辺りで、僕らは解散する事と相成った。

護衛期間の給金は、大金になるだろうからギルドの保管庫に直接支払われるそうだ。

そして皆と別れ、なじみの宿で一休み……とは問屋が下さなかつた。

「かなめ君」

「あ、シエルさん。どうしたんですか？忘れ物でも？」



「あら、忘れものと言えば忘れものね、ラジヤニの件よ。お店の場所、知ってるんでしょ？」

「え、ええ…良くお世話になってますし…」

そう言えばこのヒト、ラジヤニさんの事知ってたなあ。

只ならぬ仲……と言う訳でもなさそうだし、と言うかラジヤニさんは女？男？

どうにも年齢不詳で性別わかんないんだよなあ…このヒトも結構年齢不詳だけどね。

でも意外と年食ってそうだよな。

「かなめ君、今なにか良からぬこと考えなかった？私の歳とか…」

「い、いいえ、滅相も無いです！ハイ」

す、するどい…女性って言うのは、どうしてまあこういう事に関しては勘が鋭いのだろうか？

というか、そういった事を気にするって事はやっぱり…

「…かなめ君？」

「さあラジヤニさんの所に行きましょう。急ぎましょう」

あぶなかった、コレ以上変な事を考えたら、彼女の魔法を喰らわされそうだ。

と言うか既に魔力が腕に集まってたし……怖。

「く〜？」

「ああ、チビ…慰めてくれるのかい？ありがとう」

「くうくう」

今までフードの中に居たチビが、慰めてくれるかの様に僕の頬をチ

口チロと舐める。

……そう言えば、この子もオスメスどっちなんだっけ？

「さあ、キリキリ案内しなさい！」

「か、かなめ！急いだ方がよさそうだぜ？」

「う、うん」

背中当たるチリチリとした魔力を感じつつ、僕はシエルさんを路地裏の道へと案内していく。

ちなみに、商店街の人達は危機管理能力が、かなりしっかりしているらしい。

人込みでいっぱいの通りが、僕たちが近づいただけで、モーセの海を割ったアレみたくなった。

そのお陰で簡単に、ラジャニさんの店にたどりつくことが出来たけど……。

何故かすれ違う人達が、若干同情の視線を向けてきた……キニシタラ負けだよな？

「ラジャニさん、いますかー？」

「ん？これまた随分と久しいの？お主、何時かえって来た？」

僕が先頭になって、店の中に入る。

ラジャニさんは書棚の整理をしていたらしく、その手には沢山の本

を抱えていた。

「ついさっきです。おとなりのネテまで行って来たので、大変でした」

「そうかそうか、まあお主が無事で何よりじゃのう」

「心配してくれたんですか？嬉しいなあ」

「お主に死なれたら、今まで立ち読みされた分がもつたいないからの」  
「あ、そつちスか？」

こんな風にほんわかとした空気を作っていた僕たちだったけど……。

「久しいわね？ラジヤニ…いいえ、ラジエル・レン・デイモール？」

「ツ！！？お、お前はツ！！シ、シエルなのか？！！」

僕の後ろに居るシエルさんの言葉に、ラジヤニさんは固まった。

ドサドサドサと、手に持っていた本が、床に散らばっていく。

あはは、やっぱり知り合いなんだ？と言うか

「ラジエル？ラジヤニじゃないの？」

「ガラクトマン魔法学校をまた抜けだしたと思ったら、今回はこんな近くに居たなんてね？」

「私がどこでどうしようが、私の勝手じゃろつが！」

どうやらラジヤニ…いやラジエルさんか？このヒトは魔法学校の関係者らしい。

シエルさんも、やっぱり魔法学校の人間だったのね。

「そういう訳にもいかないのよ、レン。あなたが居なくてどんだけ研究が滞ってる事か…」

「ふん、どうせ頭でつかちな役人どもからの催促じゃろっ？そんなもの放っておいて構わん！」

「そういう訳にもいかないの！あなた自分の立場解って言っているんでしょねッ！」

「しらん！私は好きな様にやるのじゃ！」

なんかヒートアップしてるけど、この場合止めようとしたら、こっちに被害が出そうだなあ。

かと言って逃げたくても、ラジエルさんとシエルさんに挟まれて逃げられないし…どうしょ？

あ、紅の奴自分だけ逃げやがった！しかも良く見たらチビまで！！う、恨むぞおお前ら…。

「とつかお主じゃお主！何故シエル何ぞ連れて気おつた！？」

「い、いや、なんか今回の仕事でたまたま一緒になっちゃって…」

「単なるお小遣い稼ぎのつもりだったんだけどねえ、情報つてのは意外なところにあるものね」

「くう、流石にこんな所から私の居場所が特定されるなんて、予想出来なかった！」

悔しそうに地団駄を踏むラジエルさん。

「しかし、シエルに見つかつたからにはこんな所には居られない！」

「あら、既に結界を張つてあるから転移は出来ないわよ？」

「な、なんじゃと！キシヤマーッ！」

「以前それで逃げられたからね、何度も同じ手は通じないわよ？」

あ、さつきからへんな感じがしたのはその所為なんだ？成程なるほど。

「いい加減諦めて、私の実験台……ゲフン、研究の為に戻って居らっしゃい」

「い、いやじゃ！まだ私は自由を楽しむんじゃっ！」

「あのお、僕関係なさそう何で、帰っても良いですか？」

この何とも言えない痴話喧嘩の間に挟まれているのは結構疲れるんで……。

「お主！……いや待てよ……じゃが、いや逝けるか？」

「ちよつとー、ラジャ……ラジェルさん？なんかニュアンスが怪しい言葉が聞こえたのですが？」

「レンで良い、親しいモノは皆そう呼ぶ……おいシエル！」

「あら？覚悟は出来たのかしら？」

僕の言っている事の後半は無視してくれた、ラジャニことラジェルことレンさん。

何故かこのヒト、シエルさんを近くに呼び、ゴシヨゴシヨと内緒話をし始めた。

「…… なら……逝ける ……？」

「問題…無い… ……それに独学……… 柔軟性… ……」

……… 漏れ出ている言葉を聞くと、若干嫌な予感がする。

「それなら……指名って事なら………」

「ギルドじゃし、逝けるじゃろ？それじゃ、そういう事で」

「解ったわレン。でもあなたもたまには顔見せないさいよ？」

「わかっておるわい」

「わかつているなら良いわ。それじゃまたねレン」

シエルさんはそう言うと、さっさと店を出て行ってしまった。  
なんか内緒話をしていただけ、何を話していたんだろうか？

\*\*\*

この後は特に何も無く、解散となった。

薄情にも僕を置いて逃げた一人と一匹には、ぐりぐりをかましておいた。

「全く、紅もチビも酷いよ。僕だけ置き去りにしてさ」

「う、面目ねえ」

「くう……」

『全くです。私なんて外に出るに出られなくて、なんかすごく疲れ  
ました』

逃げたくなるのも解らんでも無いけど、少しは空気読もうよ……。  
いや、読んだから逃げたのか？……まあ良いけどね。

「とりあえず、ギルドにでも顔だそつか？」

「そうだな、今回の仕事の報酬の確認もしてえしな」

『私はどうしましょうか？』

「うーん、背中の水のリングさえ気にしなければ、普通の人間と変わ  
らないから、そのままでもいいんじゃない？」

『じゃあ、背中の中のリングだけ、消しておきますね』

そうやって彼女は背中の水で出来たリングを消した。

後で聞いたんだけど、背中の中のリングは自在に収納可能なんだって。

序でに、より人間に近くなるように、姿を変える事にした彼女。  
と言っても、髪の毛の色を水色から紺色に変えた程度だけだね。

「……………」それじゃあ行きますか?」

「おう」

『ええ、行きましょう』

ギルドに着いた僕たちは、迷わずカウンターのお姉さんに話しかける。

そう言えばこのヒトの本名、今だ聞いて無いんだよね。

普段からお姉さんで通してるから、「コミュニケーション困らないしなあ。

ま、何時か聞けば良いや、とりあえず仕事の報酬報酬。

「お姉さん、お久しぶりです」

「あら〜ベニちゃん〜イガラシ君じゃな〜い? ひさしぶり〜。元気〜?」

ああ、久々に聞くなあ、この間延びした感じの声。

「ええ、元気ですよ。お姉さんは?」

「私は〜いつも元気よ〜。ああ、そうそう〜仕事のお給金が〜保管庫に振り込まれてるわ〜」

「へえ、どれどれ?」

僕は現在の残高が載っている本を覗き込む。

「ええと……お、ようやく10万G突破したんだ」

「一気に増えたわね〜。……ところでイガラシ君〜」

「ん？なんですか？」

「あなたの〜、後ろに居る女の人は一休どこのどなたなのかしら〜？」

あ、ウィンディのこと紹介すんの忘れてた。コリヤうつかりだ。

「彼女は、今回の旅で色々あって仲間になったウィンディーネです」

『ご紹介にあずかりました、ウィンディーネと申します。よろしく』

「あらあら、ご丁寧にどうも〜。私はこのギルドで受付をしている〜」

お、今まで全く不明だったお姉さんの名前が、ついに解るのか！？

……………そう思った瞬間。

ドシャツ！ガラガラドドン！！

「〜と、言います〜。よろしく〜」

なんかものすごいタイミングで、大きな音が外から聞こえ、お姉さんの名前だけが聞こえない。

……………と言うか、外で一体何があった？

「おいおい、酒樽積んだ馬車が事故ったみたいだぜ？」

「本当かッ？」

「おお、しかも酒が垂れ流しみたになってやがる」

「ソレは大変だな。よし、片付けるのを手伝ってやることにしよう」

「やれやれ、商人も可哀そうに。片付けと称して酒の半分はお前の胃に消えるんだらう？」



「当然。」

ああ、そう…成程。事故ならしょうがないねえ。

「……………これでよし、一応このギルドでは、あなたはイガラシ君のパーティに認定されたわ」  
『ええ、解りました』

…つて、そおイツ！？何僕抜きで話を進め取るんですか？！

「あ、イガラシ君、彼女を、あなたをリーダーにしたパーティのメンバーにしておいたから」

「いやいやいや…何なのか説明をお願いしますよお姉さん。と言うか名前教えてください」

「私の名前？私じゃあね」

…とりあえず、彼女の説明は長つたらしくて、すごく時間が掛かる為、僕が要訳させてもらう。

書類1枚ハイ仲間　とまあ、長々話したけど内容は実に簡単な事であった。

ええと、まあコレじゃわかんないだろうからもうちょい深く言つとね？

ギルドのメンバーになるには、ギルドの試験を受けてギルドランクをつけなきゃならない。

だけどパーティに関しては、ギルドメンバーでなくても良いから、この制限が無いんだそうだ。

その代わりに、ギルドメンバーじゃ無い奴をパーティに入れた際は、仕事を受けても、そいつの給料は自分の懐から出さないといけない。要するに、強かろうが弱かろうが、責任は仲間に入れたリーダーにあるんだってさ。

で、一応規則として、パーティを組んだ場合はギルドに申請を出さないといけないんだって。

パーティ登録が出来るのは、人数が3人になってからなんだそう。ちなみにパーティを組むと、若干報酬に色付けてもらえるらしい。

まあ大体こんな感じの内容だった。

「…… と言う訳なの、解ったイガラシ君？」

「ええ、まあ解りました」

「あと、私の名前はね？」

「はい」

おお、ようやく解るのか！

「かなめ、いい加減帰ろうぜえ」

「あら？ そう言えばかなり長い話してたのね？ じゃあ話はまた今度という事で」

「え？ ココまで伸ばしといてソレ？」

『かなめ様、世界には時としてどうしても解らない事もあります』

「いや、ここで使う言葉じゃないからソレ」

僕は待ちくたびれた紅に腕をひつつかまれて、そのままギルドの外に出てしまった。

ああ、また名前聞けなかった…もう謎のお姉さんでいいや。

そしてこの時、僕は知らなかった。

僕がギルドを出た少し後に、何かの書類を持ったシエルさんが来ていたのを…。

## 第27章（後書き）

久々に何とか時間が出来て書けたので投稿。

だけど、最近スランプなので、また遅れるかもしれない。  
以上作者からでした。

## 第28章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第28章 ↓

さて、ネテの町から戻ってから一週間の時間が流れた。やることは普段と変わらず、町の雑用やゴブリン&イノシシ退治。残った時間の大半は、魔法の研究に費やした日々だった。

ところで僕は最近気になる事がある。

ソレは紅の事だ。彼女はクノルに戻ってから、良く一人で外に出る様になった。彼女は仕事が終わると、ウィンディと一緒に、よく町の外に出ている。

彼女のレベルは、既にこの町の周辺の魔獣の強さを、蚊に刺された程度に感じるほどに強い。

だから、別に外に出ているも心配は無いんだけど、その理由を教えてください。

一緒に着いて行ったウィンディに訪ねても『紅さんとの約束でお教えできないんです』との一点張り。

偶に怪我して返ってくるから、何かしらの戦闘をしていたのは解っ

てるんだけど…。

理由を教えてもらえない僕としては、気が気じゃ無かったりする。だってほら、大事な仲間が怪我してるのを見るって言うのは、あんまり良い気分じゃないしね？

でも、僕は彼女たちを信じて待つことにした。

いつか理由を話してくれることを信じて……そしてある日の事。

「なあ、かなめ」

「ん？なに紅」

いつものように、ギルドで依頼（町の雑用）を受けに行こうとしたら、紅に呼びとめられた。

もしかして話してくれる気にもなったのかな？

「あのよう…ちょっと聞きたいんだが、レンのとこってさ？」

「うん？レンさんの所が？」

「色々…そのう、本置いてあるよなあ？」

「そりゃ本屋だからね。一応。」

ラジャーニさん…いやラジエルさん…いやレンさんか？もうラジャーニで良いや…やっぱりレンさんで。

アソコは何故だかわかんないけど、ジャンルが恐ろしく多岐にわたってる。

魔導書もあるし、料理のレシピ本、建築関係、地図や法律書の様な実用的なモノから、

パズルやゲーム、何故か脳トレみたいな本まで置いてあったりする。

他にも、僕なんかは多分この先あんまり関係が無さそうな本も存在する。

例えば気功術に書かれた本とかなんて、魔法がある僕にはそうそう読む事も無いモノだ。

まあヒマつぶしに読んだりしたから、それなりに理解してるけどね。

「何か読みたい本でもあるの？」

「いやさ…かなめは魔法が使えるだろう？」

そりゃ魔法使いだしね。自己流だけどさ。

「俺もさ、もうそろそろ殴りかかるだけじゃなくて、何かしら技でも覚えたいな…」と

「あー成程、そういう事…」

「かなめ？そういう事ってどういう事だ？」

「いやさ？最近すり傷だらけで返ってくるのって…特訓でもしてたんでしょ？」

いい加減自己流じゃ限界だって思ったのかな？

でも、正直君のそのパワーなら、下手なワザとかは要らない気がするなあ。

「あー、やっぱ解つちまってたか？」

「そりゃね。一応僕は君の相棒を自称したいんでさ？」

頭の後ろを搔いている紅を見ながらそう答える僕。

一応君とはさ？この世界に放り込まれた同士だしねえ。

仲間意識はちゃんとして持っているんだよ。

「とりあえず、一から話を聞かせてよ」

「……………」

「……………まあ、言いたくないって言うなら良いけどさ」

「いや…話すからちょっと待て、上手い事言葉にできなくてよ」

どうやら話してくれる気になったらしい。

僕は近くにあった椅子を手に取り、彼女が口を開くまで座って待つことにした。

………

………

………

理由は、なんて言うか…やっぱり僕が原因だったと言うべきか。

ポツリポツリと、少しづつ話してくれた内容は、そんな感じだった。

この間、あの『主無き錬金術師の屋敷』の地下に居たキマイラに、僕が殺されかけた時。

毒に倒れて見ている事しか出来なかった自分に齒がゆさを感じたんだって。

あの時は、僕が無事でウィンディも仲間になったりで、色々あって忘れてたんだけど、こっちに戻ってから、もっと強くなるにはどうすれば良い？と考える様になっただけらしい。

町での雑用みたいな仕事を終えた後は、僕から離れ一人で鍛錬をしていたんだそう。

と言っても、彼女は魔獣と戦う以外の鍛錬とかのやり方なんて知らない。

最初は剣の素振りみたいなことをしていたが、何かが違うと感じた



らしい。

しかもこの間は、魔獣とかと戦ったりした訳じゃ無かったので、レベルUPも無かった。

コレじゃまずいと感じた彼女は、必死に考えを巡らしたらしい。そして考えたあげく出たのは、とりあえず知り合いにでも相談しようって事だった。

だから、監督と言うかオブザーバーと言うか、ウィンディに相談したんだそう。

ああ見えてウィンディは、かなり長い事存在している人工精霊。だから、何か知っているかもと言う考えに至ったらしい。

そこにたどりついたことは、凄いと思う。

僕には相談なしって言うところが、ちょっと寂しいけど…。けど問題は、相談された彼女もあまり役には立てなかった事だ。

確かに彼女は作られてから、かなり長い事存在していたらしい。けどその存在のあり方は、殆ど封印されていた時間の方が長かったのだ。

ウィンディが知っている戦い方は、所謂自分専用の技であり、とても生き物には真似できない。

長く生きている間に、それまでの契約した人には、気まぐれで知識を教えてくれた人もいたらしいけど、それでも紅のように身体を使った戦い方をするタイプについては殆ど知らなかった。

「…で、レンさんに行きついたと?」

「ああ、アソコだったらソレ位あるんじゃないかと思ってさ?」

まあ確かに。

「でも、何でソレを僕に？そのままレンさんとこ行けば良かったんじゃないの？」

「いやさ、ウインディに言われたんだ。せめてかなめに一言言ってから行けっつてさ」

「そうなの？」

「ああ、他にもさ“戦いで失敗したくらいなんですか、その程度で落ち込んで、一人でやろうとするなんて愚かにも程があります。出来なければ出来ないと考え、出来る人間に助言を請う事は恥ずかしくも何ともないんです”ってな？他にも何か言われたけど、コレが一番覚えてら」

へー流石は長生き、ソレらしい事も言えるんだねえ。

「他にも“かなめ様に迷惑をかけたくないのは解りますが、心配をかけるのも頂けません”とか…」

「まあ、僕彼女に君が何してるのか聞いたからね…心配だったんだよ。」

何故か外から帰ってくると、怪我してたからなあ。

ソレを見ている僕としては心配だった訳で……アレ？

「そう言えば、毎回小さな怪我してたけど、魔獣と戦った訳じゃ無いのに何で怪我してんの？」

「いや、これは…」

『説明しましょう！』

「わっ！」

いきなり後ろから声がして、思わずイスから転げ落ちそうになった。

誰だと思って後ろを見ると…

「ちよつとウインディ！驚かさないでよ！」

「すみません、いい加減見てるのに飽きたので…」

「飽きたって…あ、そうか今日は“中”に居たんだけ？」

彼女は完全に実体化してるから単独行動もとれるけど、基本僕に括られてる。

だから、休む時は僕の中に入ってるんだってさ。原理は不明だけど。

『さて、何故紅さんが怪我していたかと言いますと。』

「スルーして話進めるのね」

『私と模擬戦をしていたからです』

「はあ？」

模擬戦って言ったたら、疑似的に戦うって事だよな？

??でもウインディと紅が戦う??

師匠おおお！！

このヴァカ弟子があっ！

………なんか変なビジョンが見えた。  
コレじゃ無い…コレじゃ無いって、ウン。

「ウインディと模擬戦かあ」

『でもコレは鍛錬にならなかつたんですよね』

「え？何で？」

僕がそう聞くと、何故か紅から陰鬱な空気が流れて来た。

見れば、紅の顔が陰になっでいて、表情が見えないくらい暗い。  
な、なにがあつたんだ？

「……アレはねえよ。中距離からのハメ殺しなんて…俺が手も足も  
出せないなんて…」

『まあ、自分の得意な戦闘範囲は各々違いますから、今回は私が良  
い位置に居たんですよ』

「えーと、その…ご愁傷様？」

とりあえず、これくらいしかかける言葉が見つからないや。

そういえば僕は、彼女が戦つとこ見たことが無いなあ。

今度ちゃんと見せてもらおう。どれだけ戦えるのか見たいし…まあ、  
もつとも？

「はあ」

『た、溜息を吐くと、幸せが逃げちゃいますよ？』

「そう、なのか？」

アレだけ紅をへこませられるんだから、相当強い事は確かだね。  
彼女は怒らせない様にしよう…ウン。

.....

.....

.....

「話が脱線したけど、そろそろ元に戻そうか？」

「さんせいだぜ」

『私もです』

若干混乱が発生したが、いい加減話を進めたい。

「とりあえず、紅は新しく技を覚えたいで良いんだよね？」

「ああ、そうだ」

「問題は、レンさんが本を貸してくれるかってとこだなあ……最悪買  
うか」

そう言えば、気にいった人にしか売らないって言ってたから、案外  
趣味なのかもね。

蔵書も以上に多いし、つーか元々研究者だったらしいから、アレく  
らい当然なのかもね。

「とりあえず、レンさんのところで、探してみようか？」

『それが良いでしょうね』

「そうだな……なあ、かなめ」

「ん？なに？」

今日の仕事はキャンセルかあとか思いながら、部屋を出ようとする  
と、紅に呼びとめられた

「今まで黙ってて…心配かけて…ごめんなさい」  
「……………その言葉が聞けたから、もう良いよ」

でも、出来れば今度からはちゃんと教えておいてほしいな。  
そう言いつつ、今度こそ部屋を後にした。

\*\*\*

「はあ？必殺技が欲しいと？」

「いや、必殺技って言うか、所謂技とか奥義が覚えたいらしくて」

「要するに必殺技じゃろうが？」

「あはは…そうですね」

とりあえず、レンさんの本屋に来ている僕達。

気やそれ系統の本があるところは知っているけど、一応店主である  
レンさんにお伺いを立てた。

「確かに、ウチの蔵書の中には、気功術の類が書かれた書物は、有  
るにはあるが…」

「……………やっぱり、高いですか？」

手持ちのお金で足りるだろうか？あんまし高いと、今回は見送りに  
…。

「おや？珍しい。お主本をかうつもりじゃったか」

「流石にそういった類のモノは、立ち読みした位じゃ覚えられませ  
んからね」

というか、立ち読みするの確定してたんかい。  
まあ普段が普段だったから、何とも言えないんだけど…。

「ふむ、しかし紅嬢がなあ…気功術は扱いが難しいんじやが」  
「心配しなくても、彼女は僕よりもずっと身体を使う事に関しては上ですよ」

「じゃろつな。お主よか力はあるだろつさ」

はっはっは、僕なんて魔力で身体を強化しても、素面の紅と同等でしか無いんだよね。

………もつと、魔法覚えようかな。空飛ぶのとか…時間でも止めるだとか。

「ふむ、まあ良いじゃろつ。しばし待て」

そう言うと店の奥に引っ込むレンさん。

すぐに戻って来たこのヒトの手には、一冊の本が握られていた。

「コレが、初級から上級までの気功の扱い方を示した本じゃ。

世界でもココまでまとめられた本は少ないから、かなりのレアものじゃ」

「うわ、本当に高そう…」

「革張りの表紙、金細工…コレ本当に本か？」

『少なくとも美術品的な価値もありそうですね』

「じゃから言っておろつ？レアものじゃと」

恐らくは何かしらの幻想種の皮を使った表紙に、金の刺繍と細工が施されたその本は、

素人目から見ても、かなり値段が張るモノだと言う事が解る。ていうか…。

「さあ紅、諦めようか？」

「早ッ！早いよかなめ！せめて値段を聞いてから……」

「ちなみにコイツ一つで家が立つぞ？」

「……うん、諦めようか」

「そんなあ〜うう……。」

だ、だってしょうがないじゃん！今の全財産を出しても買えないよソレ！

「うう〜」

「そ、そんな目で見たってダメだって……」

紅にそう言つと、耳を伏せ、尻尾も力なく垂れてしまった。

しかし、諦めきれないのか、涙を溜めて上目使いでこちらを見ながら、うう〜と唸っている。

「うう〜」

「だからダメだって……」

「うう〜」

「いや…だから。そんな顔しないで、な？」

そう言つて、僕は彼女の頭に手を置き、小さな子供をあやすかのよう  
うに撫でた。

「わう〜」

「……………」

撫でてあげると、目を細めて気持ちよさそうな顔になり、尻尾をちぎれんばかりに振る紅。



……何、この可愛い生き物？

「でもさ、今回は諦めようよ？」

「！ううう！！」

でも、やっぱり諦めきれない様子。

うーん、僕としても何時も世話になっている紅に、プレゼントのつくらい…。

あれ？普段家事とかの世話しているのは、主に僕なんじゃ？

『かなめ様、いい加減諦めたらどうですか？男は甲斐性ですよ？』

「…どうして君がそんな言葉を知っているのか、少しばかり問い詰めたいんだけど？」

『あら、問い詰めたいだなんて…ふふふ』

「前言撤回、その晒い方はやめてください。マジで」

その美味しく頂きます的な感じに晒わないでくれ…寿命が縮みそう  
だ。

こうして若干カオスになっている僕らを見て、溜息を吐きつつも、  
レンさんが口を出してきた。

「いちやいちゃしとるとこ悪いんじやが、お主らでも何とかなる方  
法があるんじやが？」

「本当ですか?!レンさん!」

「ウソついてどうする。まあ最も、本屋としてはあんまり推奨でき  
るやり方ではないがのう」

そう言うと、レンさんはカウンターの下から何かを取り出した。

それは

「羊皮紙？」

「それと羽根ペン？」

『コレはインクですね？』

「お前たちでも何とかなる方法、それは本じゃ無くて知識のみ手に入れれば良い」

「それは……」

レンさんが言いたい事が解った僕は、良いのかという視線を送る。  
一応はこれを商売にしているのに、そんな事を……。

「勿論、一ページ辺り金貨一枚くらいは頂くがな？」

「あはは……やっぱりタダじゃないんですね？」

「当たり前じゃ莫迦者。そんなことしたら本屋の意味が無いじゃろうが！」

そう言っつてフンと顔をそむけるレンさん。  
でも、コレは確かにありがたいなあ。

「なあ、かなめ？」

「ん？なに紅？」

「さつきからそっちだけ納得してるけど、俺にも説明してくれねえか？」

『私にもお願いします』

あら？紅はともかくウィンディも解らなかつたのか？

……微妙に彼女もどこか抜けてるのね。

「じゃあレンさん、説明をどうぞ」

「な！私が言うのか？……しかたないのう。いいか一回しか言わんからちゃんと聞けよ？」

「……ゴク……」

「本を買わずにすむ方法はな？」

レンさんはそう言うと、羊皮紙を広げインクに羽根ペンを付ける。それを紅に手渡すと、ある意味紅には辛いかもしれない言葉を続けた。

「写本を作れば良い」

レンさんの言葉に、紅の尻尾が石のように固まった。

ま、僕も手伝うから、ガンバレ紅！負けるな紅！

すぐく大変だろうけど、これくらい頑張ろう？

そしてこの後、紅が再起動を果たした時に、彼女が不満げに唸ったのは言うまでも無い。

## 第28章（後書き）

\*ども、作者のQOLでやんす。

久々に書けたので投稿。次回は、来年かな？  
以上作者からでした。

## 第29章

く 出歩いて…落っこちて・第29章く

「指名…ですか？」

「ええ、そうなの。」

その日、一人でギルドに訪れていた僕は、受付のお姉さんに呼ばれた。

何でも、僕個人に対して依頼が入っているらしい。

「でも、そう言ったのって、もっと有名にならないと普通は来ないんじゃない？」

「あら、そうでもないわ。定期的に来る依頼とかで、依頼主に気に居られたりしたら、こんな風に指名を受けるとかってザラなのよ。例えばギルドランクが低くても、依頼主にとっては威張りくさった高ランク保持者よりも、低ランクでも丁寧な人の方が好みますって人もいるしね。」

「へえ、そうなんだあ。」

まあ確かに、納得かな？

「あと、一応指名って形だから、ギルドとしては信用を落とさな

い為に、今回の依頼、拒否権はないわ。ギルドの一員と言う事を考えて行動してね？」

「うわ、それは大変そうだ。ところで僕個人の依頼らしいですけど、紅達は連れて行っても良いんですか？」

「うん、依頼書には一人で来いとは書いて無いから、そこら辺の判断は任せるわ。」

でも、もしも依頼人がイガラシ君一人って言った場合は、残念だけれど……。」

「解りました」

僕はいつも通り、依頼書や依頼先の書かれた地図を受け取ると、ギルドを後にする。

つい何時もの感覚で、依頼を受けた僕だったが、この時何で自分に指名が来ているのかと言う疑問を、すっぱりと忘れていた。

そして、とりあえずココに居ない紅達と合流する為に、道を歩いて行った。

\*\*\*

クノルの町を囲う城壁にある、大きな門をくぐり抜け外に出る。

この門は普段開けっぱなしだから、実質出入自由なんだよね。

そこで、僕はそのまま壁沿いに歩き、少し開けている所に来た。

何でココに来たか？それはね

「おーい、紅ー？ウインディ？いる？」

「お！かなめ仕事か？ ビュンツ！ うわっ！あぶねえって！」

僕に気が付いて、駆け寄ろうとした紅のすぐ目の前を、何かが通過した。

それは、紅のすぐ足もとを挟りとり、そのまま空中を飛んで、ウイ

ンデイのところに戻って行った。

『ほらほら、よそ見はダメですよ？行きなさい私の水達…』

「おいッ！ちよつと待ってッ！」

『実戦で待ったなんて無いんです！』

そう言うと、彼女が普段背中に浮かべている水のリングが、形を変えてムチの様になる。

彼女はそれに触れることなく、自在に操っているみたいだ。

えーと、と言うか…いまやっているのは、実戦じゃなくて訓練の筈なのでは？

「とりあえず、お仕事の話があるから、早めに切り上げて欲しいんだけど？」

『では後一戦だけお待ちいただけますか？』

「お、おいッ！」

「良いよ、仕事は実質明日からだし」

「かなめ〜」

一応訓練の途中ツпойしね。

キリの良いところまでやった方が良いでしょう。

『それじゃあ、遠慮なく…』

「だー！解ったからいきなり始めようとすんじゃねえッ！！」

二人は距離を取った。僕はこの二人の模擬戦に巻き込まれない様に彼女たちからかなり離れる。

そして用心の為に、イマジンペヤカシールドIT大盾を展開して、もしもに備える。

さてさて、二人の闘いを、フードに隠れているチビと一緒に見る事にしますかね。

『行きますよ？ウォーターアロー！！』

ウィンディがそう言うと、彼女の周りに浮かぶ水のリングから、棒状の水が射出される。

込められた魔力量から察するに、かなり手加減を加えてあるらしい。確か、かなり魔力を減らすことで、殺傷力を抑えられるんだよね。

「ハアツ！」

紅も只見ているだけでは無く、飛来してきた水の矢を、剣で叩き落す。

良く漫画とかでこういった描写を見るけど、実際叩き落すにはかなりの動体視力が必要なのだ。

しかも、さっきの矢は水で出来ている為、本物の矢よりも落すのが難しい。

『流石にこの程度では、やられませんか？』

「たりめえだ。何回コレを喰らって、水浸しになった事か…」

『クス、そうですね。では、コレはどうですか？』

「やらせねえよッ！」

ドンという音が聞こえそうなくらいの速さで、ウィンディに突っ込む紅。

対してウィンディはその場から動かずに、紅に向けて手をかざした。

『避けられるかしら？アクア・ストリングス！』

彼女の指先から、細い糸のような水が、紅に向けて放たれる。

紅はぎよっとした顔を見ると、サイドステップを踏んで水を避けた。



糸のような水は、そのまま近くの岩に当たり、見事に貫通。  
しかもウィンディが腕を振るった途端、まるで豆腐の如く岩が切れ  
てしまった。

「おいッ！今のは当たったら死ぬだろうがッ！！」

『だって避けられるでしょう？少しくらい危険が無いと訓練の意味  
が…』

いやいやいや、やり過ぎるのはまずいと僕は思いますよ？ウィンデ  
イ。

だけど、水で出来た鋼糸か…コレ本当に紅に不利だね。

紅は接近戦型だから、相手に近づかないと、その力を発揮しづらい。  
だけどウィンディは、中々遠距離が得意そうだから、そうそう接近  
は許さないだろう。

さて、紅はどうするんだろうか？

『それと、いい加減アレ、使ったらどうですか？』

「……いや、まだ安定しねえ、あと疲れるし」

『別に使わないのは勝手ですけど、下手したら死にますよ？』

「ゲッ?!」

『アクア・ストリングス！連射！！』

ウィンディは、どうやら紅が言った今の台詞に、少しばかり怒りを  
覚えたらしい。

連射される水の糸、しかもウォーターアローも混じって、隙間の無  
い弾の壁を形成していた。

「うわっ！よッ！ホッ！」

『ほらほら、疲れるなんていい加減なこと言わないで使いましょう』

？』

「ええい！こなクソオオツ！！」

対する紅は、身体能力をフルに使って、紙一重で避けているけど……  
掠り始めているから、命中するのも時間の問題かな？

「掠った！掠ったぞオイツ！！」

『魔力量増やしましたから、辺りどこ悪いと怪我じゃ済まないですよお？』

ああ、ウィンディ……ものすごく楽しそう……。  
やっぱりS何だろうか？彼女……。

『逃げるだけじゃ倒せませんよ？』

「うっせい！それどころじゃねえってのー！！」

確かに、それどころじゃ無さそうだよねえ。

常人じゃ絶対避けられないのを避けてるんだもの。

僕だったら魔法を使わないと、絶対ぼこぼこにされてるね。

『はあ……コレも結構疲れるんですけど……』

「……チツ、だったら使ってやるぜー！」

紅はウィンディが溜息をついたのを見て、少しばかり青筋を額に浮かべている。

彼女、負けず嫌いだモンなあ……その紅を上手い事乗せるウィンディも、凄いと思うけど。

「……セイツ！」

『やっと使いましたか』

紅が全身に気合を入れた途端、彼女の身体が一瞬発光し、すぐに元に戻る。

見た目はあまり変わっていない様に見えるけど、先ほどと違い彼女は水を避け無くなった。

と言っても諦めたわけでは無く、只単に避ける必要がなくなっただけである。

彼女が気合を込めた途端、彼女は水鋼系にあたっても全くの無傷で居られるのが、その証拠だ。

「コレで、水の系は怖くねえぜ！」

『でもまだ4分しか持たないんじゃないやありませんでしたっけ？その気功術の初歩』

「……たりめえだ。そんなすぐ使えたら苦労しねえよ」

そう、彼女が行ったのは、気を発現させ身体能力及び、その防御力を一気に上昇させる技である。

もっとも、技と言うよりかは、気を身体に纏った際の副次的効果なので、厳密には技じゃ無いけど。

「今度はこつちから逝くツ！」

『字が違うような？』

「問答無用おおー！」

『使いどころが違いますよ？！ソレ！？』

先ほどよりも、もっと早いスピードで、一気にウィンディの至近距離に詰め寄った紅。

練習用の木剣でウィンディに斬りかかろうとしたが、ウィンディが空に浮かんで後退した為、カラ振りで終わってしまった。

しかし、彼女は諦めずに、そのまま大地を踏みしめ思いっきり飛びあがった。  
気を使う事にはまだ慣れていない彼女は、短期決戦で決めようと考えたらしい。

「はあああッ！」

『くッ！これくらいでッ！』

だが、ウインディは魔力を込めた水のリングを自分の周りで回転させる。

それリングは、紅が放った斬撃を受けとめ、さらに受けとめた所以外の水が触手のように伸びる。

ソレらは紅に向かって、まるで……あー誘導ミサイルの様に逃げる彼女を追いかけた。

「うわっと、毎度、気色悪い動きだなソレ！うひゃっ！」

『そうですか？光を反射して綺麗だと思いますけど……』

一応自身の身体の一部であるので、そう言われるとあんまし良い気分ではない様だ。

紅は一度地面に降り立ち、再度木剣を構える。

というか、ウインディは物凄い殺傷能力高い技使ってるんだけど……なんで紅は律儀に木剣で、模擬戦をしてるんだらうか？

これくらい危険だったら、真剣で模擬戦しても問題無いような気がするんだけど……。

「落ちろあッ！」

『調子に乗らないでッ！』

紅は思いつきり力を込めて、木剣を振るう。

どうやら無意識らしいが、気功術により強化が行われているらしい。

『私の水系がッ?!』

「へっ! まだまだああ!」

だって、岩を切り取るくらいの水系が、木で出来ている筈の剣で壊せるわけがない。

恐らく紅自身も気がついてはいないだろうけど、傍から見れば一目瞭然だ。

「でやああああッ! ! ! ! !」

『くっ、ならこの攻撃なら! !』

ウィンディはさらに魔力を高め、周辺の水気を集め始めた。

紅の攻撃を水のリングで逸らしながらも、強大な水滴が空中に現れる。

『潰されなさい! アクエリアス・ハンマー! !』

「なあああ! ! !ゴボボ! !」

うわあ… 凄いつて言うかなんて言うか…。

紅の居た辺りが水没してる。というか、コレは本当に模擬戦か?

『はあ… はあ… これなら』

紅は水滴にのみ込まれて、浮かんでこない。

ま、まさか溺れた?!

と僕が思った瞬間!

ザッパアアツ!!!

「油断大敵いいいッ!!!」

『え? きゃあああ!?!』

水の中から紅が飛び出し、ウィンディに掴みかかる。

飛んだ勢いで、そのまま放物線を描き、地面へと着地…というか墜  
落した二人。

そのままゴロゴロ転がり、紅は木剣を、ウィンディは魔力を込めた  
手を相手の首にかざした。

「……………これは、引き分けか?」

『……………みたいですね』

二人はそう言い、お互いに手を下した。  
と言うか……………。

「明らかにやり過ぎじゃ無い?」

「くうー…」

少し離れたところで、僕とチビは先ほどの闘いを見て冷や汗を流し  
ていた。

イメージシールド  
IT大盾をドーム状に展開してたから水没しなかったけど、流石に  
心臓に悪い。

止めれば良かったって?…アノ二人の間に入る勇氣なんて持って無  
いよ僕は…。

情けない言っちなよ?こっちだって、まさかココまでスゴイ事になる  
なんて予想できなかったんだ。

ソレはさて置き

「ねえー、おわつたー？」

「ああ、終わった…ぜ…」

『べ、紅さん?!………って寝てますね』

突然、グラツと重心を崩した紅を慌てて支えたウィンディはそう呟いた。

まあまだ慣れていない気功術を使って、ココまで動き回ったんだし？  
幾ら改造済みの僕たちでも辛いものがあるだろうさ。

「これじゃ話は出来そうもないね？取りあえず宿に戻るのか？」

『すみませんかなめ様…あ、紅さんは私が』

「ううん、僕が運ぶよ。君も疲れたでしょ？」

『ああと…その、それじゃあお願いします』

「はいはい」

僕は紅を背中に担ぐと、そのまま町に向けて歩きだす。

ウィンディは僕の横に並んで一緒に着いて来た。

しっかしまあ眠ってしまうほど、動き回るなんて、紅は凄いなあ。

それにさっきの水の中からの強襲は見事だった。

でも彼女は確かドワーフの身体とおんなじだった筈だ。

ドワーフと言う種族は、確かカナヅチである事が多い。

丈夫に出来ている分、見た目よりも身体の比重が重いから、水に沈みやすいんだ。

まあ、担いでいる僕からすれば全然軽いから、ソレは無いみたいだ  
けどね。

「くかあ〜すぴ〜」

「ふふ、いい気なもんだなあ」

『ああ、紅さんは寝顔も可愛いんですねえ〜ハフウ』

……ちよつとお隣が紅の寝顔にときめいていたけど、無視して門の中に入ってしまった。

\*\*\*

「ん〜……はふ？」

「あ、紅起きた？」

僕がチビを愛でていると紅が目を覚ました。

まだ眠たいらしく、目をコシコシと擦っている。

ああ、なんか和むわあ……。

「……ココは？」

「いつもの宿だよ。アノ後紅眠っちゃったからココまで連れて来たんだ」

「そーなのか？」

「そ、だから顔洗って来た方が良くないよ？」

「…ん、わかった」

ととととと、洗面器を持って井戸に向かう紅。

寝ぼけている所為か、千鳥足状態だ。

『あ〜、可愛いらしいですねえ』

「ウインディ……」

『いやだつて戦っている時はアレだけ闘志むき出しなのに、今は全くの無防備なんですよ？』

「だからどつたの？」



『なんか、こつクルものがありませんか？』

「いや、全然。いつも見てるし」

『そうなんですか？あんなに可愛いのに…』

「……………（彼女ってこんな性格だったっけ？）」

『うふふ、今度訓練で勝ったら、ペナルティって事で着せ替えでもしちやおつかしら…』

だめだコイツ、早く何とかしないと…。

しばらくして、顔を洗いすっきりした紅が戻って来たので、今回の仕事について説明する事にした。

「ふ〜ん、ご指名ねえ？」

「別に断る理由も無いし…というか雰囲気的に断れないらしいから受けようと思うんだ」

「いいんじゃないか？なあ？」

『ええ、かなめ様が決めた事なら、私たちは付いて行くだけですし』  
「先方が僕だけって言ったなら、君たちは留守番だけど？」

ピシッと固まる紅とウィンディ。

「よし、止めようか？かなめよ」

『……………私はかなめ様の中に居れば良いか』

「まあ向う次第だから、今はわかんないんだけどね」

「というか、考えたら俺も犬になっていれば良いのか……」  
『相手が動物にアレルギー持っていたらダメですけどね』

まあとりあえず、どうなるかは依頼主に合えば解るって事で良いんじゃないかな？

さてと、とりあえずどこに行けばいいのかな？……………マジ？

「かなめ、どうした？」

『かなめ様？』

「依頼主と会うところか……ガラクトマン魔法学校って書いてある  
どうしよう？嫌な予感しかしない。  
というか依頼人は誰なんだ？」

「依頼人は……………シエルさんだ」

「……………逃げた方が良く無いか？」

『ダメですよ。一応コレ正規のお仕事なんですから。  
下手に断ると噂が広まって、この手の業界じゃお仕事出来なくなり  
ますよ？』

「あつう……ちゃんと書類貰う前に、目を通しておけば良かった」

うう、時折僕ってこういうポカしちゃうんだ……。

シエルさんかあ……悪い人じゃないのは解ってるんだけど……。

「正直苦手なんだけどなあ……アノ人」

『後悔先に立たずですね』

「てかさ？何でシエルがかなめを指名してるんだよ？」

「ううん、ソレも僕にはちよつとわかんない」

僕なんか彼女にしたっけ？

「はあ、どっちにしる拒否権ないらしいんだよなあコレ」

『じゃあ、しょうがないですね』

「諦めて行くとするか。な、かなめ？」

「そうだね。それにシエルさんだったら二人を除け者にはしないだろっし……」

『……今回は除け者でも良いんですけどね』

「言えてるぜ。嫌な予感がぶんぶんするからな」

いたしかたないさ。覚悟を決めて逝きましょうや？

「とりあえず、今日はもう休もう？どっちにしる依頼人に会えるのは明日からだしさ？」

「賛成、俺まだ寝たりねえからちようどいいや」

『そうですね……私も今日は予想外に消耗してしまいましたから……』

「じゃ、寝るか？」

「『賛成』」

こうして、今日はもう床に就くことにした。

ガラクトマン魔法学校か……どんなとこなんだろうか？

案外、悪い予感もするけど、それ以上に面白い学校だったりして……。

そんな事を考えつつ、僕の意識は闇に落ちて行った。

\*\*\*

・ウインディの技

ウォーターアロー

【自身を構成する水を棒状にして発射するだけの技】

射程 中～遠距離

消費MP (使った分だけ消耗)

必要CPO

アクア・ストリングス

【魔力により圧縮した水をワイヤー並の細さで射出、対象を切り  
りできる】

射程 近～中距離

消費MP (使った分だけ消耗)

必要CPO

水環の守り

【普段は背中にあるリングを周辺に浮かべ防御する。敵の攻撃を受  
けると自動で発動】

射程 近距離

消費MP (使った分だけ消耗)

必要CPO

水環の手

【普段は背中にあるリングを周辺に浮かべ、そこから触手を出し攻  
撃する】

射程 近～遠距離

消費MP (使った分だけ消耗)

必要CPO

アクエリアス・ハンマー

【空气中の水分を集め、巨大な水の槌を形成する。環境によって威力が変化】

射程 中〜遠距離

消費MP (使うとかなり消耗)

必要CPO

尚、ウィンディの技名は、あくまでかなめ達が名づけたものである。

本来、これらの技を使う事は彼女にとって、呼吸するのと同義なのである。

まあ本人は結構気に入っているので、技名を叫んだりしているのは御愛嬌。

ちなみにこれらはごく一部で、まだまだ色々と技があったりする。

## 第29章（後書き）

\* 新年最初の投稿だぜ！今年もよろしく！！

## 第30章

「出歩いて…落っこちて・第30章」

「大きいなあ」

「くあ」

「デケエ」

『これは…何ともはや…以前見たころよりも大きい』

僕たちは、クノルの町を出て、半日の距離にある、門の前に来ていた。

門の周りは6mはありそうな塀に囲まれており、中には広大な規模の施設が乱立している。

もはやそれは一つの町と言っても良いかもしれない。その名も

「ここが、ガラクトマン魔法学校かあ」

「学校ってよりかは、町だよなあ？」

『最初の頃は只の屋敷一つだったのに、随分大きくなりましたねえ』

ガラクトマン魔法学校、グランシユバツテ唯一の魔法学校である。

また、魔法研究…なかでも“魔法汎用技術転用”の研究は他に類を見ない規模なのだとか。

まあ簡単に言えば、小学校から大学、はたまた専門研究施設まで備えたモンスターってところかな？

と言っか、ウインディ…何故知っている？

「ところでよう、かなめ…本当にココ、入るのか？」

「……気持ちは解らんでも無い」

なんか、さつきから壁の向こう側から、ガシंगाシンの、シューポソッ！だの…。

なんだか怪しい音が響き渡っていて、なんて言うか…その。

『ここだけ異界って感じですねえ』

「……言わないでウインディ、気が滅入るよ」

『あ、ごめんなさい』

ふう、とりあえずココに居る間は退屈する事は無さそうだ。

と言っか、何かトラブルに巻き込まれる気がするの、

気のせいだろうか？

「……で？どうやって入る？」

「うん、何でもギルドからの書類が通行証になるんだって」

『まあとりあえず中に入りましょう？ココに居てもしょうがなさそうですし…』

「そうだね、一応ココ門の前だし」

『あ、私はかなめ様の中に入ってます。あんまり人に見られるのもアレなので』

まあ、ここはクノルと違って、ウインディの魔力を感じられる人間



が多そうだもんねえ。  
しょうがないと言えばしょうがないか……。

ウィンディが僕の中に入り、門の詰め所に居た守衛さんに書類を見せる。

連絡は来ていたらしく、そのまますんなりと門の中に入れてもらった。

「塀の内側は、やっぱり広いねえ」

「と言うか、俺達浮いてるよなあ？」

円状の塀の中には、増設されていったと思われる建物が、モザイクのように立ち並び。

さりとて外観を崩す事も無く、どこことなく調和が図られている。

車なら2台は楽々通れそうな大きな道路が、中心部に向かって伸び。その先には時計塔を兼ねた尖塔が、堂々と天に向かって伸びていた。

そして、周りの人達は皆、制服だと思われるローブを身にまとっている。

対してこちらは、紅は動きやすい事を考慮した露出度の高い服。地味ではあるモノの、質実剛健なレザー系装備+マント姿の僕である。

布製の所謂魔法使いルックな生徒たちの中、僕たちはかなり異質で目立っているのは明白だった。

なんだか奇異の視線を感じ、どことなく気恥しいんだよね。

「…シエルさんのところに急ごう。彼女の研究室は研究棟にあるらしい」

「場所は？」

「フツ、ぬかりない…さっき守衛さんに聞いた」

「じゃあ急ごうぜ」

そして僕たちは、この場から逃げ去るかのように急ぎ足で、研究棟へと駆けて行った。

まあどちらにしても、仕事の都合上、繋留しないとイケないんだけど……。

気分の問題ってヤツ……かな？まあそうしてってくれるとありがたいな、うん。

……

……

……

研究棟は門前広場からすぐ目の前にあった。

なんでかって言うと、その魔法使いたちは、研究の為にちょっと外に出るらしい。

だから、門の近くにあった方が、何かと都合が良いだつてさ。

まあ、理由はそれだけでは無いらしいんだけど…。

「で、シエルさん。僕は何をすれば良いんですか？」

「あら、久しぶりに会えたのに、もう仕事の話？せつかちね」

さて、その研究棟の一角。シエルさんの居城ならぬ研究室に、僕たちは赴いていた。

こざっぱりとした応接室の様な場所で、調和を乱さない程度の調度品が置かれている部屋だ。

シエルさんに出迎えられた僕たちは、せつかく来たって事でティータイムと洒落こんでいた。

「いや、せつかちつて言うか…俺達仕事しに来たんじゃねえか」

「と言うか、僕としては何されるのかが、ものすごく不安だったり？」

「あら、それ程大変な事じゃないわ？只単に実験体に…って何離れてるの？戻りなさい」

笑みを浮かべながら、何気に一番聞きたくは無い単語が出て来たので、思わず距離を取っていた。

あなたがソレ言うつと洒落にならんですよ、ハイ。

「…僕、モルモット？」

「あら、ソレは只のジョークよ？…何ならそうしても」

「はい、何の仕事をするんですか？！ジョークも良いですけど仕事の話をお願いします」

「残念ね」

モ、モルモットだけは慎んでお断りいたしますッ！！！！

「ふう、まああなたを読んだ理由はね？私の助手をしてほしいって事なのよ」

「助手…ですか？」

「そう、助手。と言っても専門的な知識はそう要らないわ。ある程度魔力に精通してればいいの」

「……………モルモットのフラグの予感」

「フラグ？…とかは良く解らないけど、少なくとも普通に助手だから安心して？」

「その言葉…信じても？」

「なによ？別に新薬の実験台になって欲しいなんて……………少ししか考えてないわよ？」

「……………」

少し考えてるんかい？

「やってほしいのは、研究材料となるアーティファクトの鑑定…確かあなた鑑定出来るのよね？」

「ええつと、はい出来ます」

サーチ使えば良いんですよね？

「ソレと、私が講師をしている授業を、偶に手伝ってほしいのだけど…」

「講師？授業？」

「ああ、この間旅から戻った後、復帰したのよ。こっく見えても学校の先生なのよ？」

「そうなんですか」

ふと生徒相手に新薬実験をしているビジョンが浮かんだので、必死に頭を振ってもみ消した。

いくらこのヒトがマッドでも、そこまではしない……………と思ったい。

「どうしたの？頭なんて振って」

「いいえ何でもありません」

「そう。ソレと後は新魔法の実験の手伝いよ？むしろ、これは簡単かも知れないわね」

「そうなんですか？」

「だって、あなた人工精霊従えているでしょう？」

「ウインディの事ですね？」

「ええ、彼女が協力すれば、魔法構築式や魔力の流れの解析なんて朝飯前よ」

「そうなん？と心の中でウインディに聞いてみると、僕の中のウインディから肯定の返事が来た。

へえ、そんな事も出来るんだ？面白いなあ。

「報酬としては、お金か現物かで支払われるけど問題は無いわね？」

「ええ。……現物って何がもらえるんです？」

「そうですね…報酬金額とおんなじ程度のモノを貰えるわ。希望すれば変更も可能よ？」

「……家って貰えませんか？」

「家？そう言えばクノル郊外に、ウチの名義の今は使われていない廃屋に近いモノがあったけど？」

「それでも良いです。壊れてるのなら自前で直せますから」

伊達に森の中で、自給自足はしてなかったんですよ？

工作とかが結構上手くなったと思うんだ。うん。

「ま、一応学校側に貰って良いか聞いてみるけど、ダメなら諦めなさい？」

「了解です」

良し！上手くいけば当初の目的である、家を手に入れるって言う目標が叶うぞ！！！！

考えてみればあの森の洞窟を出て、結構な時間が経っている。ここまで長かったなあ…いやホント。

「じゃ、まあそういう事だから。とりあえず3カ月は頼んだわよ？」

「け、結構長いツスね？」

「ふふ意外と時間は早く過ぎ去るモノよ？気が付いたら終わってるわ」

「そんなもんですかね？」

「そんなモノよ。あ、あなた達が住む場所なんだけど、研究室の一室を開けて置いたわ」

「じゃ、ソコ使わせてもらいますね？」

「ええ、一応ベッドだけは入れてあるわ」

おう、ソレはありがたいね。

「感謝します」

「礼には及ばないわ。あと、仕事は明日からだから、今日は学校内でも見学してなさい」

「解りました。それじゃ…」

僕たちは部屋を出て行くことと思い、席を立った。

「あ、忘れるところだったわ。ハイコレ」

「っと…これは？」

部屋を出ようとしたところで、何かを思い出したシエルさんから、何かを投げ渡された。

手の中にあっただのは、小さな木のチョーカー。

「ソレ、ココでの身分証代わりだから無くさないでね？」  
「了解です。……へえ魔法刻印で識別できる術式かあ」  
「あら、やっぱり解るのね。まあソレ位の術式、ココでは基礎なのだけどね」

よく見れば、裏側の木目に隠れて、小さな文字がびっしり書かれてる。

こんな小さいヤツでも、マジックアイテムなんだなあ。

「それじゃ今度こそ」

「はいはい、それじゃあ、また明日ね？」

シエルさんは、僕たちが部屋から出ると、パタパタ手を振った。

「あ、住む部屋はココから右に曲がってつきあたりよ？」

「了解です」

こうして、この学園での仕事がスタートする事となった。

\*\*\*

「食用ロツク鳥がキロ当たり50G〜？高いなあ〜」

「“硬派な貴方にお届けする、食用コカトリスの卵 Lパック10個入り10G”…誰が買うんだ？」

部屋に荷物を置いた後、見学がてら購買へと足を運んでいた。しかし流石は魔法学校、信じられないものが食用で売られていたりする。

「おい、かなめフェニックス焼きだつてさ」

「……………本物じゃ無いよね？流石に」

「……………有り得そうだから困る。」

でも、もしそうなら、そこら辺じゅうに、不老不死の人で溢れ返っているだろうから違うか？

まあ、実際に売られていたのは、普通のネギま串だった。何でも焼き方に拘りがあるんだとか。

「おお！“らみあさんが作る特製力チューシャ”が150Gだよ！  
や、安い」

「らみあつて…あ、マジもんか…」

雑貨屋みたいな店にて、売っている店子が、リアルにラミアでした。ラミアって良くモンスター扱いだけど、ココだと亜人扱いなのかしらん？

なおラミアと言うのは、上半身女性で下半身が蛇という生き物である。

地球の方だと、海神ポセイドンの娘であり、美しい娘だった為、主神ゼウスに見初められたんだけど、ゼウスの妻ヘラに嫉妬を買い、呪われた所為で、今のような姿にされてしまったらしい。

まあ、そこで店子してるラミアは、普通に女の子みただったけどね。

そう言えば、どうやって子ども作るのかが、良く解らない不思議な種族だなあ。

……………ちよつと無粋かしらん？

「おもしれえモンが売ってんなあ〜オツ“夜道も安心 ウイル・オ・



ウイスプランタン”？」

「…………沼地付近じゃ注意しないとイケなさそうだね」

ちなみにウィル・オ・ウイスプは、鬼火とか人魂の事。

夜、コイツの光に着いて行くと、行き先は底なし沼か崖とかに案内されるらしい。

売られているランタンを見れば……おうおう、元気に動き回ってら。

そんなこんなで、色んな店が立ち並ぶ購買エリアを歩いていると、何故か屋台が一件。

そこから、どこか懐かしい、焦がしたソースの香りが漂ってきた。

あ、もしかしてこの匂いは……

『（あら、ミニクラーケン焼きが売ってますね？）』

「「たこ焼きちゃん！」」

『（ちがいます。ミニクラーケンです！）』

さすが異世界、ちょっと認識が違ったらしい。

あ、ウインディとは僕達つながってるので、心の声で会話可能です。そういう事にしてください。原理不明なんで…。

さて、ミニクラーケン焼きに、ちょっと後ろ髪をひかれる思いながらも、探索を続ける。

何せ、今晚の夕飯をどうしようかという難題も含まれているのだ。とりあえず普通の食材が売っている店：安ければ最高：が見つければ良いんだけど。

「なんだ？この大きな金網小屋？」

「ええと…“食用ロック鳥のヒナ掴みどり 制限時間内に捕まえた分だけ 一回150G”」

「・・・なんて言うか、すげえな」

「よし、紅GO！」

「え、何で?!」

「君なら沢山捕まえられる！食費浮く！ちょうど良い！と言っ訳で行って来い！」

「・・・了解、かなめ」

そう言い残し、若干諦めの表情で、紅は小屋に入って行った。

紅ヒナ鳥と格闘中・・・しばらくお待ちください。

「つたく、てこずらせやがって……」

「まあまあ、お陰で大分食費が浮きそうだよ」

『（……あのお店、つぶれないか心配ですね）』

かなり大量に捕まえた事は、語る必要はないだろう。

後日、その小屋に“赤い髪の人お断り”の看板が立っていたのは余談だけだね。

紅は今、さっきので傷ついたところを舐めている。

何でも妙に強いヒナがいたんだってさ。

そつえば居たなあ、一匹だけ「フシユルルル……」とか言ってたヤツ。

「でもお陰で、今夜はおいしいものが食べられるよ」

「ま、それだけが救いだな。しかしコイツらヒナの癖にデケェな」

そつ、ロツク鳥と言うのは、本来全長100mに達する巨鳥である。

一応、猛禽類らしい姿かたちをしているんだけど、この世界では何故か食用になっていたりする。

味は部位にも依るが、意外と淡泊で臭みが無い……らしい。

尚、食用とはいえ、ヒナの大きさはそこら辺の鶏よか二回りほど大きい。

七面鳥クラスだと言えば、想像が付くであろうか？

「ふっふっふ、羽根抜いて血抜きしたら、ローストにするか…いや、フライも捨てがたい…」

「あー、かなめ？顔が何だか悪たくみしてる悪役みてえだぞ？」

む、失礼な、今晚の夕餉の献立を考えているだけじゃないか？

あつシチューも捨てがたい！……いつぱいあるし後日になれば作れるな、うん。

「ま、とりあえず部屋にもどろうか？調味料さえあれば僕はどこでも調理出来るしね」

「だな、とりあえずハラペコだ」

「くう！」

「ははチビの果物もちゃくんと買って有るから安心して？」

「くあう」

フードから顔をのぞかせたチビを撫でる。

しかし、思うと僕たちの環境適応力は並みじゃ無いねえ…。

ドン

「あ、ごめんなさい」

「いいえ、こちらこそ前を見て無かったです」

離しながら歩いていたら、道の角で誰かにぶつかっちゃった。

慌てて相手に謝ったんだけど、そこに居たのは

「ん？あ！エル君。久しぶり！」

「え？もしかして、かなめさん！？」

「俺達も居るぜ？」

「紅さんにチビちゃんもですかあ？？！というか何故ガラクトマンに？？？！」

でした。

以前、知り合いになったエルダー・シエットランド君

### 第30章（後書き）

\*最近、色々とアドバイスになる感想が増えてきて感激している作者です。

励まし一言がある感想が来ると、本当に嬉しいと感じる今日この頃。

さて、今回からしばらく、舞台はガラクトマン魔法学校になります。

魔法学校…そしてマッドウィッチのシエルさん、個性的な生徒達。

……強く生きるよ、かなめ。

以上作者からでした。

## 第31章

「出歩いて…落っこちて・第31章」

\*あらすじだぜ。

ギルドからの指名を受けて、ガラクトマン魔法学校にやって来たかなめ達。

指名したのはシエルさん、仕事内容は彼女の助手（モルモットでは無い…多分）。

都市の様な学校内の購買エリアにて、夕飯のお買いもの。

そして、エル君と再開、今に至る。

\*\*\*

「…………じゃあ、上がって。と言ってもまだ何にも置いて無いけどね」

「それじゃあ、失礼いたしますです」

エル君と久しぶりに会った僕たちは、立ち話も何だっけ事でエル君を僕たちの部屋に招待した。

ちなみに、僕たちが寝泊まりする部屋には、大きなベッドが一つあ

る程度で家具の類は無い。

かわりに置いてあるのは、フラスコやらビーカーやら蒸留水やら大鍋やら……。

なんだか理科の実験器具の様なモノが、片付けられることなく部屋のテーブルの半分を占拠している。

「……なんて言うか、その」

「はは、片づけして無いからね。ゴメンね？ゴチャゴチャしてて」「あ、いえ。そんなことは」

とりあえず紅にテーブルの上を片づけるように言い、僕は僕で買って来たモノを調理する。

一応研究室だから、火を扱えるスペースがあるからね。

調理をしようと台の前に立っていると、ガシャンやら誰かの悲鳴っぽいのが聞こえたけど。

気にははいけない……気には……うん。

……

……

……

とりあえず散らばった欠片を片づけ、料理を並べる。

今回は時間が無かったので、若鳥（ロック鳥）の香草焼きしか作れなかったけど、まあいいか。

後は、コレと買ってきたパンとワインと……。

「……」



「ん、どうしたエル坊？」

「イヤそのなんて言うか、豪華ですね？」

「はは、こっちに来てから僕ばっか家事してるからね。料理のレパートリーが増えたよ」

「……（これはそういう問題なんでしょう？）」

食器は木製……って言うか作ったヤツを取り出してっと。よし、完成、後は食べるだけ。

「それじゃ、頂こうか？」

「おう！ハラペコダぜ！」

「本当、美味しそうです、ハイ」

そいつは重畳ってね。

「「頂きます」」

「？板抱きます…ってなんですか？」

「食事の前のあいさつだぜ。でも何で食前に言うんだっけ？」

「うーん、僕も詳しい理由は覚えてないんだけど、確か命を頂くから頂きますだったかな？」

「へえ〜初めて知りました」

まあ、この世界で知っている人は、いないだろうねえ。

\*\*\*

食事の後は軽く雑談会。

各々の近況とか、最近起こった事を肴に、まったりとした時間が流

れた。

「……わあ、かなめさん達も大変でしたね。まさか盗賊団にギガースがいたなんて」

「アレは魔法使いにとっては天敵だよ」

「前衛系もキツイと思うぜ？俺でも一対一になったら逃げるね」

とりあえず、この間の隣町までの護衛依頼の話で盛り上がる。なんじゃかんじやで、この手の冒険譚みたいな話は受けが良い。

「そう言えば…かなめさん、何か雰囲気変わりましたね？」

「ん、そうかな？」

「はい、なんて言いますか…なんか魔力の性質が変わったって言うか…」

ああ、やっぱりこの子には気付かれたか…。

「実は」

僕は新しく仲間に加わったウィンディとの出会いを説明した。

ウィンディについて話したら驚かれたけど、それよりも先に忠告を受けた。

何でもこの学園内で、この手の精霊を持っているのは教師陣を除いて皆無らしい。

でも、精霊持ちは自然であろうが人工であろうが、魔法使いにおける一種のステータスなんだって。

当然、魔法学校の生徒にも精霊持ちが居るけど、大抵の人は貴族の名家である事が多い。

何故かと言うと、親から子へ受け継がれた精霊とかが殆どなんだそ

うな。

つまり、精霊持ちは魔法使いとしてかなりの力を持っていると考えられてしまう。

それが貴族や教師陣だったら問題は無いが、僕のようにギルド所属だと話が変わってくる。

どうも魔法学校の人間の中には、ギルドの魔法使いを下に見ている輩が存在しているらしい。

だから下手したら、ウィンディを狙って、そいつらが何かしらの行動を起すかも知れない。

後、純粹に研究者な人もいるので、其方に見つかった方が厄介かも知れないとの事。

要するに、あまり多くの人に見られれば、夜道がそら恐ろしい事になる。

・・・流石にソレは怖い。3か月もココに居るのに、毎日警戒なんてイヤすぎる。

とりあえず彼女には、出ている時は人間に偽装しておいてもらう事にしよう。

「そういえばエル君、ココ最近どう？杖造り上手い事いつてる？」

「はい、竜魂石という最高の核を手に入れましたし、刻み込む術式も選別が済んでいるです。」

後はデザインや外装その他を造るだけですな」

「はは、そうなんだ」

「やっぱり形はアレか？普通に杖の形にしちまうのか？」

「ええ、やっぱり一番最初の相棒ですし、ココは伝統に習い、杖の形にしようと思っています」

伝統的な杖の形か……ヘッド部分に宝石が付いた杖かな？

もしくは、杖の先にランタンの如く、紐で吊るしてあるとか？ 案外魔法の力で浮いてたりして。

「術式を刻む……ねえ？」

僕が作った最初のオークスタッフには、そんなの付けなかった。

というか、考えて見たら、川辺で拾った枝で造る杖って、この世界じゃないだろうなあ。

僕がそんな事を考えていると

「はいです。僕は一通り魔法が扱えるので、単純に補助の術式にしているです。人によつては一属性に特化させる人もいるそうですけど、僕の場合は全体をある程度のレベルで扱えればいいので、補助の術式だけにしたんです。それに自分にあつた魔法陣を組むのつて意外と難しいですから、初心者ならやはりこういう補助の術式からだって先生にも言われました。ちなみに僕が刻んだ術式は、ダヌ術式の亜種なのです。それに加えて、攻性を持たせる為ルーグ術式を加えることで、全体的なバランスを取ることに成功したのです！……まあ、この術式理論自体は、30年程前に既に作られていたらしいのですが、それでも自分に似合つた術式と言う意味ではコレが一番なのです。なお、本来ダヌ系統の術式は

こうして、スイッチが入ってしまったのか、エル君の魔法ウンチクが始まってしまふ。

かなり長い事、自分で考えた術式の精度、発揮できる力についての関係を聞かされ続けた。

最初こそ、何とか聞いてたんだけど、聞くうちに更に熱が入っちゃったのか、

専門用語がどんどん増えてしまい、専門家じゃない僕には良く解らなくなってきた。

と言っか、何故魔法術式の話が、広域魔法魔法使用時の変換効率についての話になるんだ？

そう言えば僕の魔法も、どうやらエル君が言っていたダヌとかの系統と、

その他、色んな系統の魔法が、ごちゃ混ぜになっているみたいである。

彼の話聞いていても、良く解らなかつたのはその所為らしい。

己が魔法を勘で使用しているのが良く解ったわ。

この分じゃ、自分の魔法について完全に理解するには、後10数年はかかりそうだ。

まあ、魔法の習得自体は、別に完璧に理解しなくても良いみたいだから、習得可能なんだけどね。

#### 閑話休題

「まあそんな訳で、僕の杖はかなりのモノになりそうです」

「……へ、へえ、凄いなあ。エル君は」

「いえいえ、それ程でも無いです。これでも次席なのです」

ゴメン、この話はとくに僕の理解の範囲越えてるよ。  
というか、コレだけスゴイ知識持っていて、次席なんかい？  
まあそれはさて置き

「もうそろそろ、お開きにしようか？明日も学校有るんでしょう？」  
「あ、そうですね。もう結構遅い時間ですし、お暇させてもらおうです」

「うん、紅起きて、エル君が帰るってさ」  
「うん…なあに？」

エル君のウンチクが始まった時点で、早々とフネを扱いで夢の国に旅立っていた紅。

とりあえず見送りをさせる為に起そうとしたんだけど。

「あと…5分」

「ちよつと紅！…寝ちゃった」

「お疲れだったのでしょうか？僕に構わず寝かせておいてあげてくださいです」

「うん、ごめんね？」

「いえいえ」

大人だねえエル君。それに比べて紅は

「うん ギュ」

「くあ！？」 抱き枕にされている。

チビを抱き枕に熟睡か。やっぱり子供だわ。

ちなみにウィンディも、僕の中で寝てるらしくて出てこない。  
なので見送りは僕だけだ。

「それじゃあねエル君。またヒマがあつたらら飯でも食べよう？」

「はい、それじゃあ失礼しますです」

「お休み」

「お休みなさいです」

こうして、色々あつた一日が過ぎて行く。まあ、僕のやる事は変わらない。

生活基盤が魔法学校に移つただけで、僕がやることと言えば、生きる糧を得る程度なのだ。

と言うか、高説掲げようが、人間誰しもそんなもんだらう。

家を手に入れる目標は、ほぼ完遂しているしね。

問題は成功報酬として貰えるかだけど、まあ貰えなかつたら前の生活に戻るだけさ。

「明日は、シエルさんのところかあ…何時くらいに行けばいいんだらうか？」

そう言えば時間聞いてなかつたと思い、まあ朝に行けばいいだらうと考え、今日は寝ることにした。

\*\*\*

次の日。

「来たわね？それじゃあ早速、これらを鑑定して欲しいんだけど」  
次の日になり、さっそく僕は仕事をする事となった。  
やる事は至って簡単、アーティファクトの鑑定だ。

「これらを鑑定しておけばいいんですか？」  
「そう、ダンジョンで発掘された、何らかのインゴットなのは解っているんだけど」

眼前にあったのは、黒と銀が大理石状に混ざっている、変な模様をしたインゴットだった。

「じゃあ、とりあえずやってみます。“サーチ”」

使う機会が無かったので、今回久々に使う解析魔法サーチ。  
魔力球を空間に浮かべ、そこから魔力波を照射する事で、対象をスキャンする事が出来る。

二度三度、魔力波が対象を撫でるかの様に照射され、ほんの数秒で解析が終わった。

その結果が、僕にしか見えないパネルに解析結果が投影される。

えくと、何々？

「解析結果出ました。これは…ダマスカス鉄鋼らしいです」

「あらそうなの？普通の堪比べると、色が違うんだけど」

「混ぜられている鉱石の中にダークマターが少量混じっています。多



分コレの所為ですね」

「なんだ、てことは他は普通のダマスカスとおんなじって事ね？」

「ダマスカスって解析結果からすると、多分」

ダマスカスカあ、コレも地球じゃ架空の合金だった様な気がするな。

「ま、この間のネテに行った時に強奪…拾ったモノだからしかたないか」

「（このヒト…ネテで何してたんだろう？）」

「それじゃ、次行くわよ？結構おいから半日かかるかもねえ」

「解りました。ドンドン行きましょう！」

とにかく仕事だし、真面目にやってしっかり終わらよう。

僕は次々と出されるアイテムやアーティファクトや鉱物を鑑定していった。

.....

.....

.....

「はい、コレで今日のところはラストよ。そう言えば紅ちゃんはどうしたの？」

「ん、紅ですか？彼女だったら、ウィンディ連れて外で鍛錬してますよ」

お昼に近づきつつある中、ようやく最後の鑑定をしていると、そう聞かれたので答えた。

「鍛錬？」

「はい、彼女新しく技を覚えたいらしくて、その下準備として気功術を覚えようとしてるんですよ」

「へえ、気功術かぁ。もう気を出せるの？」

ふむ、気功術を出せると言えば、出せているのかな？

でも手帳に記載が出ないから、習得までは行っていないみたいだ。

「僕は専門家じゃないんで良く解らないんですけど、ある程度は出せるみたいですよ？」

「あら、随分と習得が早いよね？この間の旅からそれ程月日も経ってないのに」

「元々素養があつたんでしょう。気功術は魔力じゃ無くて、己の生命力がモノを言いますから」

「たしかに、あの子は生命力に満ち溢れてるものね」  
「ですね」

でも、まだほんの少ししか扱えないんだよなあ。

元々自称神から貰った能力じゃないから、習得が遅いのもかもしれないな。

「でも、気功術ねえ？そう言えば東魔研にソレの使い手が居たわね」

「東魔研ですか？あ、コレさっきのヤツの調査した結果です」

「ありがと。そう東洋魔法研究会、略して東魔研よ」

なんじゃそりゃ？響きからすると、日本的な感じがするんだけど？  
コレはアレか“東の国はジパング”的なノリなのかな？

「東洋だとコッチとは違う魔法体系で、中には気を使う魔術や魔法

もあるらしいわ。気功術も元々東洋から流れて来たモノを、こつちの人間が改造したものらしいしね」

「そうなんですかあ」

成程、どうやらファンタジーの王道っぽく、東の国はアジアっぽいみたいだ。

今度調べて見よう。もしかしたら日本みたいな国があるかも知れない。

「つと、つい話しこんじゃったわね。今日はもう上がってもいいわ」

「あれ？もう良いんですか？」

「ええ、魔法の連続使用で疲れたでしょう？だから今日はもういいわ」

「・・・そうですか、じゃあ今日はもう上がらせてもらいます」

本当はそれほど疲れて無いんだけど、まあいいか。

とりあえず、今日は終わりらしいので、そのままシエルさんの研究室をあとにした。

\*\*\*

さて、シエルさんの研究室を出て、僕は学校の中庭にあるベンチに

腰かけていた。

「うーん、午後がヒマになっちゃったなあ」

「く〜?」

理由は暇だったからである。

久々にチビを膝の上ののせて愛でながら、午後はどうしようかとぼんやり考えていた。

「くうん」

「お、ココか?ココがええノンか?オリオリ」

その前にチビを撫でるけどね!!

「紅達と合流でもしようかなあ?」

多分魔法学校の外に居るだろうから、出ればすぐ見つかるだろうけどね。

あ、でも

「魔導書を読み、図書館を利用するのも、捨てがたいかな?」

学校と銘打っているんだし、きっと色々なジャンルの書物があるだろう。

貸出はして貰えなさそうだけど、閲覧くらいは問題無いだろう、うん。

「あの、植物を一気に成長させる魔法とか、覚えてみたいかなあ」

「くー」

「あ、ゴメン手が止まってた」

午後のやわらかな日差しが、ぼかぼかと降り注ぎ、何とも言えない気持ちよさを与えてくれる。

ああ、いいなあ平和って。これで縁側と緑茶でもあれば最高だね。うん。

「東洋があるんだから、お茶くらい無いかなあ？」

「くー？」

「ああ、ごめんまた止まってた」

そろそろチビにムツ　ロウさん張りの奥義でも繰り出そうとか考えていた。

ソレにしても、本当にぼかぼかして気持ちが良いなあ。

「・・・ふわあゝ・・・チビ、僕ちよつとだけ寝るけどいい？」

「くあうー！」

僕がそう訪ねると、チビは任せとけと言うかの如く、首を上下させた。

頭が良いなあ、人語理解してるんじゃないだろうか？

「それじゃあ、少しだけ・・・」

すぴー。

.....

.....

.....

ドッゴォー！ンッ！！！！！！！

「な、なんだあ！？イテッ！！」

何かが衝突したかのような音が、突如辺りに響き渡った！  
そして、それに驚いてベンチから落ちた。

「アイタタタ…なんだっていうんだ」

落ちて痛くなった腰をさすりつつ、辺りを見渡す。  
ココから見える時計塔の短針は、まだ全然動いていない。

どうやら、寝入ってからまだ全然時間が立っていない様だ。

というか寝入った途端に、音が鳴ったと言う方が正しい。

一体何が起きたのか、とりあえず当たりの様子を伺って見たところ、ちようど近くに学生らしき二人組がいたので、彼らに聞き耳を立ててみた。

「おい！なんだ！何があった！」

「落ち付け、“いつものやつ”だ。今日はややデカイがな」

「“いつものやつ”っていうと・・・なんだ、ゴー研の奴らか？」

「そういう事だ」

ゴー研？なんだろう、何かの略称かな？

「とりあえず、ココから離れよう。巻き込まれてはかなわん」

「だな、流石に・・・！！ヤバい！もう来てる！」

「な！？今回は早いな。流石新型！」

「冗談行っている場合か！！行くぞ！“タロス”にロックオンされるのは御免だ！！」

そう言つと、この場から走りさる二人の学生。

とりあえず、この轟音の原因は学校内では良く起こることだつてことは解つたけど…。

「“ゴー研”とか“タロス”とかって・・・なんだろう？」

アノ二人、かなり慌てていたから、余程スゴイものなのかな？  
でもロックオンされるって言うのはどういう事だろう？  
ネテみたく、キマイラみたいな生物兵器でもいるのだろうか？

ゴゴゴゴゴゴ                    ！！

「今度はな・・・に!？」

何かが崩れ落ちるかの様な音がする方を見て、僕は何が起きたのか  
すぐに理解した。

ガシン…ガシン…

恐らく研究室の一つだろう。建物の一角が崩れ落ち居ている。

ガシン…ガシン…

そして、恐らくその原因となったであろう者・・・  
いやモノが、こちらにゆっくりと歩いてくるのが見えた。

黄色み掛かった銀色、恐らく青銅製のボディを持つソレ。

3mはありそうな人型<sup>ヒトカタ</sup>…がっしりとした手足。

二つの紅い眼を持つソレは、ゆっくりとだが確実に近づいてくる。



「も、もしかして、アレが“タロス”？」

お、思いっきりロボットじゃないか……っていや待て。

ココは魔法学校だから、アレはロボットと言っよりも……って事は！？

「もしかして、ゴーレム？」

ぐぼーん

………なんか正解って言われたかの様に、眼が光ったような。

ガシנגアシン

と…いつか…。

ガシנגアシンガシנגアシン！！

なんかこっちに来る……イヤ！間違いなく、僕目がけて近づいて来てるッ！！

ちよつと！ゴーレムさん！！僕何かあなたに悪い事しましたかッ？！

『エモノ発見、攻撃システム、サドウ』

「……あー、“ロックオン”って、こういう事かあ。」  
成程、目についた動く者は標的って訳かあ。お兄さん知らなかったなあ。

あはははは……。

ガシנגアシングアシングアシン！！

「……チビ、逃げるよ！！」

「く、くう！！」

唐突の事態に、現実逃避として心の中で笑っていたけど、そうもいかないみたいだ！

タロスにロックオンされた僕は、とにかく逃げる為にくるつと後ろを向いた。

そして身体能力をフルに使い、クラウドで思いっきり駆けだした。

『エモノ逃亡、追跡、開始ダ』  
ぐぼーん

そしてタロスも、僕を標的にしているので、当然ついて来た。  
ど、どうなっちゃうの僕？！べ、紅！ウィンディ！！

「いやああああ！！！！」  
『マデー！！！！』

ガシングアシングアシングアシン！！！！

本当に誰かお助けええええ!!!

### 第31章（後書き）

ロボならぬゴーレム登場！

魔法学校なら一台はあると作者は（勝手に）思っている。  
良いよねゴーレム。

### 第32章（前書き）

\*あらすじ\*

- ・かなめ、エル君を部屋に呼ぶ。
  - ・最初のお仕事、鑑定作業。
  - ・東洋と呼ばれる地方がある事をする。
  - ・謎のゴーレムに追われて、絶賛逃亡中。
- 今ココ。

## 第32章

く 出歩いて…落っこちて・第32章く

『マテヤーーー!!』

ガシンガシンガシン!!

「なんでこうなるーーー!!」

僕は、ゴーレムであるタロスにロックオンされて、全力で逃げている。

何故全力か？タロスは見た目が鈍重なくせに、バカみたいに脚が早いからである。

つまり、今の僕は久々のライブでピンチってヤツなのだ!

『標的、逃走、ロックオン、投擲開始』  
ぶおん！！

何時の間に拾ったのか解らないけど、壁の一部だと思われる瓦礫を、プロ野球選手張りの、とても綺麗なフォームで投擲してきた。僕目がけて……。

「ぬうおおおお！！！！」

ズズン！！

んな！？小さなクレーターが出来てるよ？！

思わずキャラじゃ無い声で叫んじやったけど、こっちも必死だ！！

「ちよっ！！」

ズズン！！

「まっ！！」

ズズン！！

「やめてッ！！」

ズズン！！

ど、どうしようっ…多分アレこの学校で造られたモノでだともう。

壊せるけど、勝手に壊した後で弁償とか言われたくないし……。

「……って、考えてる場合でもなあいつ!」  
ズズン!!

スongoい至近距離に着弾(?)した瓦礫を見て、冷や汗が流れる。  
何だか段々コントロールが上がっている様な?と言うか学校側で対処してよ!!

「うわっ!!イマジンゼレザシールド!!イT大盾!!」  
ドガン!!

よそ見していた所為で、跳んできた瓦礫に当たってしまった!  
やば、跳んでくる瓦礫が多過ぎて避けられない!?  
っ!か何?あの瓦礫の量は一体どこから……

『フン!』  
ガシっ!ガラガラ

……って、近くの建物からもぎ取ってるのね。

「くう!IT大盾×2!!」  
ドガガガガガン!!!



ぐう！なんとという馬鹿力！！大盾を手で持ってたから、衝撃で手がしびれて来た！  
キマイラの時みたいに、貫通するほどの威力は無いのが幸いってところか。

「ってまた来たあああ！！！」

どうやらタロスさん、数で押し切る作戦に切り替えられた模様。小さくて人間の頭、大きくて上半身くらいの大きさの瓦礫が、ビュンビュンと数十個ほど、僕目がけ飛来してくる。

「もういやだあ！！シエルショット！！！」

アレだけの数の瓦礫を相手するのは、いくらIT大盾でも荷が重いと判断。

ブラストの上位魔法で、射線が拡散するシエルショットで迎撃を行った。

バガガガガンッ！！！！

「良しっ！！」

そして迎撃は成功した。僕に命中する瓦礫だけを全部叩き落せたの

だ。

「少しくらい傷がついても、コレは正当防衛だよな？」

僕は魔法を発動し、イマジネーション I T エア・ジャベリンを形成、そのまま投げつけた。

本邦初公開だけど、風の属性付与により投擲距離と貫通性が大幅UPした特製槍だ。

思いつきり投げたジャベリンは、風を纏って一気に加速し、タロスへと直進する！

そして、ジャベリンがそのままタロスの身体に命中するかと思ったその瞬間。

『魔力探知、魔法攻撃、確認、熱焼防御起動』

とたん、黄色味がかつたタロスの身体が、赤銅色に変わった。

そしてそのままタロスは、迫りくるジャベリンを避けようともせず、そのまま受け止めた。

否、受けとめたのでは無く

バシユン

「うそん……」

当たる直前に、ジャベリンがタロスが発するあまりの熱量に、実体化を解いて蒸発してしまった。

……な、なんて言う出鱈目なツ??!!

「そんな防御方法なんて、なんかひきょうだああああ!!!!!!」

『エモノ、逃ゲルナ』

驚きつつも、逃走する僕を“ぐぼーん”と眼を光らせながら追いかけてよとするタロス。

でも、流石にアノ熱量は機体に負担をかけるらしく、若干移動速度が低下しているのが幸いか。

おまけに、自らの足元が、瞬間的とはいえ己が出した熱量により陥没していた。

そのお陰で脚を取られて、まだ上手く動けない様だ。

ちなみに足元は石畳であり、ソレを溶かす熱量なんてトンでも無い熱量なんだけど。

タロスの半径2mくらいしか溶けていないので、何らかの魔法的処置が施されてるんだらうなあ。

「もう追いかけて来るなああああ!!」

『マテー』

ガシンガシンガシン

何でだろう？タロスの脚は少し壊れたお陰でもう全然速く無いのに、全く振りきれないのは？

もしかしてアレですか？某ホッケー選手のマスクをかぶったチエンソー同好会の人間からは、

絶対に逃げられないというアノ謎の原理とおなじなんですか？！

と、とにかく逃げ切らないとマズイ、何かこう煙幕的なモノはないか？！

ぼくぼくチーンってやっているヒマは無い!!何か何か・・・!!

ピコーン!!平目板　じゃなくて閃いた!!これなら・・・

・って！

「ああ、もう！思いついたけど、なんで設定し忘れてるかな僕!!」

一つだけ思いついたけど、手帳で装備しとくの忘れてたから、マニュアルで行わないといけない。

「ッ!“ 集められ凝縮されし力” っとわ!？」

ズズン

難しい魔法なので詠唱を開始したら、タロスも瓦礫を投げるのを再開した。

紙一重で横に避けたから、何とか耐えたけど、当たったらマズイ！！

「精霊の契約の名の元に」っなは！！」

ズズン

また至近弾、だけど今詠唱をやめる訳にもいかない。

「今放たれる”のっほっ！！」

バゴン！！

呪文に込められた言霊に答え、逃げ回る僕の周りに、魔力が集まり始める。

「敵を押し流せ”ドッせいッ！！」

ドゴン！！

今度は巨大な岩が跳んできたが、何とか回避成功。掠ったけど。そして集まる魔力の弾、その数は十数個に及ぶ。

「大いなる水滴”うひゃっ!?”  
ザリリッ!バカン!!」

掠った!掠ったよ!!だけど、もう最後の工程に属性をつけられて魔法は完成だ!!

「エレメンタル・ミサイル!!!!!!」

放たれるのは、魔力の誘導弾。以前ネテの屋敷地下にて一度使用した魔法である。

しかもウィンディとの契約によって、かなりバージョンアップした魔法だ。

水の属性が付いた魔力の弾数十個が、まるで急流の如くタロスへと殺到する!

『魔法攻撃確認 熱焼防御』

しかし、当然魔力に反応して、タロスがまた白熱化して防御しようとする。

だけど、その行動は読んでいた！！

ボシユウウウウ！！！！

『！！！？？』

誘導弾がタロスに命中した瞬間、爆発が起こり辺り一面白い煙に包まれた。

タロスはいきなり視界が遮られた事と、状況把握が出来ない事による混乱で動きを止めている。

何をしたのかというと簡単な事である。水蒸気爆発を利用したのだ。

エレメンタル・ミサイルは、ウィンディとの契約により水属性が付けられている。

魔力により、空気中の水分を集めて圧縮した弾であるからその本質は水なのだ。

つまり形成される弾は、ある意味純粋な水に近い。

それが瞬間的に金属ですら融解させてしまうような熱量を誇るタロスに命中すればどうなるか？

水分が一気に気体にかわり、急激に膨張する事で、あたかも爆発したような現象が起こるのだ。

まあ普通なら、水弾自体も到達する前に消えちゃうんだけどね。

それでも大丈夫だったのは、タロスの防御機構が常時発動型では無

く、  
攻撃が来た時のみ、瞬間的に発動するタイプの防御機構だったから、  
何とかなったのである。  
水弾は一斉に撃った訳では無い、発射する際に多少間隔をずらして  
発射したのだ。

最初の弾幕は熱により消滅したが、次弾幕は白熱しているタロスの  
ボディに命中。

後は結果を見ればわかる通り、爆発とあたりに水蒸気による煙幕が  
出来たって訳なのである。

そういう訳で、僕は視界が隠れているその隙に、全力を出してタロ  
スから離れようとした。

だが

『動体センサー、感知。エモノノ距離把握、フィストフアング発射』

どうやら僕の認識は甘かったらしい。

白い煙の中からゴツイ手が伸び、僕を目掛けて発射された。  
視覚だけに頼っていた訳では無かったらしい。というか

「ロケトパンチイイ?！」

いや、まあロボットにそういうの付けるのは、ある意味ロマンです  
けどね?!



一体どこの誰だタロスを作ったヤツは？……この学校の生徒かな。

ドンッ！グワシッ！！

「ぐあッー！」

『目標捕捉、サア覚悟シロ』

そして、変な事考えてしまった所為で、とてもゴツイ手に捕まってしまった。

ギリギリギリ！！

「ひぐうっ！」

タロスの手は、僕の身体を凄い力で締め付ける！

普通の人間なら、スプラッタになる事、請け合いだと思うくらい強力な圧力だ！

だが僕の場合、自称神からの改造+今までのレベルUPにより、そこまでのダメージは無い。

その代わり

「くぁ・・・く、くるしい・・・ひぐあっ！」

圧力が足りない為、非常に微妙な締め付けの所為で、気絶する事す

ら俣ならない。  
それどころか、意識がある分、余計に苦しみが鮮烈に感じられて質が悪い。  
抜けだそうにも・・・その、なんて言うか変な感じにしまっちゃって、動けない。

ぐぼーん

「う・・・わっ・・・しめつけ・・・るなあぁあ!!」

痛い！冗談抜きで地味に痛い！

感覚的に言えば、立ち上がるうとして天井に頭打ち付けて、ダンスに小指打ったくらい痛い！

本当に微妙に痛い・・・くっ、もうコイツマジで壊してもいいかな?!

『エモノノ耐久性高シ、熱焼防御システムニヨル破壊、外殻損傷ニヨリ起動不可』

な、なんかタロスがブツブツ言ってるんだけど・・・すごく嫌な予感がする。

『理想的破壊、“グルグルブン回シテ叩キツケル”事ヲ推奨、実行』

え、!?グルグルぶん回すって・・・まさか?

タロスは僕を捕まえている腕から伸びる鎖を持つと、思いつき引きよせた！

「うっひゃあああ！！！」

『フンッ！』

タロスに引つ張られた僕は宙を舞う。

僕が跳んだのを確認すると、タロスは手首をモーターみたいに回し始めた。

その力が鎖を通じて僕に伝わり、タロスを中心にして僕は円運動を開始した。

「うわうっ！！・・・だれかあああ！！とめてえええええ！！！」

回転する世界、逆転する天地、そしてそのスピードはドンドン速くなっていく。

そして身体を絞め付ける強烈な遠心力が、僕の身体を蝕んでいった。

そして何よりも問題なのは

「（づぶ・・・もう、だめ、目が回って・・・酔いそう）」

僕の胃袋からのオーババリミツツが、限界に達しそうになっていた  
と言う事だった。  
でもそんな事はお構いなしに、回すスピードはドンドン速くなり、  
世界が線に見えて来た。  
もう色んな意味でムリ！限界！で、出ちゃううう！！  
と覚  
悟したその時。

「きこう気功牙剣！！」

どこか聞き覚えのある声と共に、僕にかかる遠心力が激減し、その  
まま放り出された。  
放物線を描き、一直線に近くの建物に飛び続ける僕。  
当たったら・・・グチャってなるのかな？とか一瞬考え、そして  
激突した。

だけど

ぶにょんッ！

『ま、間に合いましたあ』

固い感触は無く、あったのはとてもやわらかい何かにつつかれた感  
触。

朦朧とした頭でも解ったのは、このやわらかいモノがクッションに  
なってくれたと言う事。

「無事か！かなめ」

『まったく・・・かなめ様は、なんで気が付けば厄介事に巻き込ま  
れているんですか？寿命が縮むかと思っちゃいましたよ？』

聞いた事のある声、この声は

「うっ、ごめん。紅、ウィンディ」

信頼出来る僕の仲間達だった。

見れば僕と壁との間に、大きな水玉が浮かんでいる。

どうやら僕は、ウインディが作りだしたこの水玉に包まれたお陰で、建物との直撃を免れた様だ。

「ま、かなめが厄介事に巻き込まれるのは、いつもの事だしな」

『そうですね。まあ私たちが助ければ良いだけですけど』

「ちげえねえ」

・・・なんかボロクソに言われてるかのような？というか。

「そういえば、二人とも何でココに？」

「なんでって、コレだけデカイ音立ててりゃ、俺の耳に届くって」

『野次馬がてら見に來ただけでしたけど、かなめ様が巻き込まれていたとは想定外でした』

どうやら鍛錬していた所にまで、轟音が届いていたらしい。

うう・・・しかし、面目無い。

「うっ、面目無い」

「・・・ま、それは良いとしてだ。アレ何でぶっ壊さないんだよ？」

そう言っつて紅が指さしたのはタロス。

『そうですね。かなめ様の力なら、跡形も無く吹き飛ばせたでしょうに』

「……場所が悪過ぎるんだよ」

何せココは魔法学校のと真ん中、タロス位ならブラストで事足りたんだけど……。

「下手に魔法使っつて、辺りに被害が出たら眼もあてられないよ。おまけに、アレはこの学校の所有物だろうから、下手に壊したら、シエルさんに迷惑かけちゃうよ」

「でもソレでかなめが傷つくのは、俺はいやだぞ？」

『私んです！命が掛かっつてるのに、自重なんてしないでください！』

嬉しい事行っつてくれるね二人とも。

「……言っつておくけど、僕だっつて命が惜しいよ？」

「じゃあ、何で？」

「言っつたでしょ？僕がココでアレ壊して責任がシエルさんに行くかもしれないっつて」

『あっ！』

「そっついうこと……か」

どうやら察して貰えた様である。

「たしかに、シエルさんに借りを作ったあげく、怒らせたら・・・」  
『明日の陽の目は見れませんね。むしろ生きるのが辛い身体にされたりして・・・』

「・・・とりあえずこの話は後にしよう。タロスが再起動しそうだ」  
見れば、紅の攻撃で一時的に動きを止めていたタロスが、小刻みに振動している。

「どうやら、自己回復機能も付いているらしい、なんて厄介な自動人形オートマ!!」

「・・・さて、どうするよ?」  
「・・・逃げるしかないかな、今は」  
『でも、いざとなったら破壊しましょう。襲われたのはこちらですから、正当防衛です』

そう言うと紅は剣を構え、ウィンディは水のリングを展開、僕もI Tで杖を造り出した。  
睨みあふ僕達、どちらかが動けばすぐに追いかけてこの再開だ。どうやって逃げるべきかと、考えを巡らしていたその時。

「そこのお前達!時計塔へ向かってにげろ!!」



凜と響く声が、辺りに響いた。

### 第33章

「出歩いて…落っこちて・第33章」

あらずじなのかー

\*タロスから逃げまわる。しかし何かの法則でもあるのか逃げきれない。

\*迫る瓦礫の弾幕、あまりの多さに魔法を使った。

\*せいとうぼうえいと言う事で、タロスを行動不能にすべく魔法発射、しかし防がれる。

\*油断して捕まり、グルグル回され眼を回す。駆け付けた紅達に助けられる。

\*反撃か？それとも逃亡か？と言うところで、謎の音が聞こえた。

今ココ

\*\*\*

「そこのお前達！死にたくなければ時計塔へ向かって逃げる！！」

聞きなれないけど、凜と良く通る声が辺りに響く。

「だれだおまえは！？」

紅が警戒し、問いかける。

声が聞こえた場所に居たのは

「ワタシか？ワタシは・・・いや、今はそれどころではない」

栗色の豊かな髪を腰のあたりまで伸ばし、どこかギリシヤの彫刻を  
思わせる顔立ち。

理知的なコバルトグリーンの瞳を持つ、この学校の制服を来た女子  
生徒だった。

「説明は後で行う！出来ればこちらの言う通りにしてほしい！」

その手には大きな翼の飾りが付いた、槍のように先端がとがっている杖を握っている。

見た目の感じからして、彼女はこの学校の上級学年の生徒であるようだ。

彼女はタロスから視線を離すことなく、僕達の前に進み出た。

どうやらココでようやく、この事態を収拾してくれる人間が現れた様である。

「・・・アレ、結構強いけど、逃げて大丈夫？」

一応心配して声をかけてみる。

生半可な強さでは、返り打ちに会うのがオチだ。

「平気だ。アレは自壊を始めている。逃げる分には問題無い」

僕の心配をよそに、淡々と言葉が返ってくる。

その声はただ事実を告げているだけという風な感じだ。

「ふっ」

こつちを向いてはいないけど、きっと彼女の顔は笑っている。

何故だか解らないけど、なんかそんな風に感じた。

「ようは・・・僕達に一緒に後退してほしいと？」

「物わかりが良くて助かる」

「お、おい待てよ！いきなりそんな事を　　！」

突如現れた人物を警戒していたからか、紅が声を荒げた。

「紅」

「んぐう・・・」

僕は紅が突つかかろうとしたのを、手をかざして黙らせる。

「後で説明して貰えるんでしょう？」

「無論だ」

・・・どうやら、ブラフじゃ無いみたいだ。

「解った。紅！ウィンディ！」

『解りました！後退します！』

「・・・ツチ！どうなってもしらねえぞ！！」

「ついて来い！絶対離されるなよ？」

彼女はそう言うと、全身に魔力を通して強化し、一気に後方へと飛び去った。

僕たちもそれに習い僕は魔力で、紅は気で、ウィンディは自前で空を飛びそれぞれ後退する。

『再起動完了ダ。エモノ対象増加、逃亡開始、追尾スル。高速移動用システム展開』

ガチャン・・・ギューイイイイン！！

タロスが完全に再起動し、僕達をエモノとして認識し直したみたい。おまけに脚部から車輪が展開。どうやら逃げる僕達を追いかける気は満々の様である。

「な！さっきはあんなの出て来なかったのに？！」

「まずいな・・・装備術式へのプロテクトが、機体が損傷した時に外れたか？」

驚愕の声を漏らす僕に、時計塔へと続く道を走り続けながら、謎の女生徒はそう呟く。

「随分、アレの構造に詳しいんですね？」  
「……説明は後だ！飛ばすぞ！！」

彼女は僕の質問に答えることなく、そのままスピードを上げた。  
僕達も同じくスピードを上げる。

「……なあかなめ、どう思う？」  
「なに？」

紅が僕に近寄り、走りながら脚は止めずに小声で問いかけてくる。

「正直なところ、信用できんのか？アレ」  
「うーん、どうだろう？」

紅が至極当然な疑問を漏らす。

しかし全速力で走っているのに良く喋れるよね？僕達。

「大丈夫だと思うよ？」  
「何だよ？」  
「そうだね……」

一瞬すれ違った時に見た彼女の眼、そして今なお彼女から放たれる  
雰囲気。

そのどれもが、彼女は信用に値する人間であると、僕の勘が告げて  
いた。

不思議な感じ……普通は疑うモノだけど、なんて言っただろうか？

「勘……じゃなくて、カリスマかな？」  
「なんじゃそりゃ？ワケわかんね」

まあねえ。

「僕もそう思うよ」

「おいおい」

「お前達！喋ってないで、脚を動かせ！！」

案内として先頭を走る彼女から叱責が飛んできたので、話を打ち切る僕達。

時たまに、初対面であつても逆らえない雰囲気を持つ人っているらしいけど……。

多分、今日の前を走っているこのヒトがそうなんだろうなあ。

そんな事を考えつつ、僕たちは彼女の跡を追いかけた。

\*\*\*

ガラクトマン魔法学校は、中央に大きなレンガ造りの棟が鎮座して

いる。

それは中央棟と呼ばれ、この学校設立以来から立てられている建築物の一つである。

また、その中央棟には大きな時計塔が付いており、東西南北から文字盤を見る事が出来る。

ガラクトマン魔法学校では、この時計塔より高い構造物は無い。その為、目印にするにはちょうどいい建物と言えるのだ。ちなみに、外観の感じはロンドンの時計塔そっくりである。

その時計塔の前には広場があり、現在僕達はそこに逃れていた。

「あう、何で僕までタロスの暴走に巻き込まれているんです？」

「あはは・・・ゴメン巻きこんじゃって？」

隣に居るエル君が溜息をついている。だってしょうがないじゃん

「あのまま放っておいたら、タロスの餌食だったろうしね」

「・・・時計塔に行かないで、とっとと教室に行くべきだったです。タロスから離れたところだったから油断してしまいました・・・です」

車輪が出て早くなったタロスから逃れる為に、建物の間を縫ってジグザグに逃げていたんだけど。

こっちもまさかタロスから逃げている道の途中で、エル君と会う事になるとは思わなかった。

たまたま建物から出て来たところを、謎の女子生徒がひつつかんで



連れて来ちゃったんだよね。

「まさかエル君が彼女と知り合いだなんてね」

「・・・腐れ縁ですよ。彼女とは」

僕たちを先導していた謎の女子生徒は、どうやらエル君と知り合いだったようなのだ。

エル君は彼女を見た瞬間、思いっきり回れ右をしようとしてたんだが、

彼女は彼を有無を言わずひつつかんで、ココまで連れて（強制連行）きた。

「あう、杖の外装作りに手間取って、部屋を出るのが遅くなったのが悪かったです」

「え〜と、なんて言うか、ご愁傷様？」

「エル坊も案外トラブルに巻き込まれやすいんだな？」

「・・・そうだったのはあなた達が来てからの様な気がします、ハイ」

あはは、まあじゃれあいはさて置き

「・・・で、ココまで来たんだけど、なにか策があるんですよね？」

僕はココまで連れて来た謎の女子生徒に問いかける。

今僕達がいるココには、数名の生徒達が忙しなく動き回っていた。

現在位置の時計塔前広場を囲むように、

1 m程の円錐に四角い箱を浮かべた様な装置が、彼らの手によって

設置されてゆく。  
どうやら流れでる魔力の感じから察するに、特殊な魔導機械であるようだ。

「無論だ。ヴァル！」

「あいよ会長。こっちの準備は出来ている」

謎の女子生徒が誰かの名を呼ぶと、装置の近くで作業していた男子生徒がこちらにやって来た。

彼女との掛け合いから察するに、どうやら彼女の部下の様な立場らしい。

「そうか、ご苦労だった」

「そう思うなら休ませてくれ会長……」

あまり寝ていないのか、彼の眼の下に隈が出来ている。

「コレが終わってからだ」

「……了解した。まあぼちぼち行くかね」

そう言つて、フラフラと装置のところに歩いていく。

どこか飄々とした雰囲気を持っている感じだ。

しかし服装は赤い帽子をかぶり、腕が隠れてしまつほど長い袖のついた制服の上に、

これまたヨレヨレの白衣を身につけており、だらしない感じなんだけど何故か似合つてる。

いやむしろ見た感じからすると、コレは博士風ファッションというところだろうか？

いやむしろハカセ？・・・なんか銜えタバコが妙に似合いそうな  
そんな感じ。

「そいじゃ、会長とお前さん達はコツチの方に来てほしい」  
「ほれ、時間が無いんだからいそぐんだ」

彼は手に小さな操作機を持って戻ってくると、僕たちが四の五の言  
う前に指示をだした。

僕たちは彼と謎の女子生徒らに背中を押されて、何かの装置の後ろ  
に立たされた。

それにもう、僕達が恨み事を含めて何か言う暇なんて無かった。何  
故なら

『エモノ発見~~~~~!』

既にタロスはすぐ近くに迫っていたからだ。

「来たな？そりじゃ全員配置につけ」

ヨレヨレの白衣の男子生徒は、そう言って今まで作業していた他の生徒を下がらせる。

全員が下がるのを確認した彼も、後退しようとしていたのだが、ふと何かを思い出したかのように踵を返すと、小走りでこちらに駆けよってきた。

「そうそう、会長とお前さん等はココより先には出ない様に、下手すると死ぬから」

彼はチョークで書かれた線を指さしそう言い残す。

そして、先に退避した生徒たちを追い物陰に隠れた。

隠れた彼らは『安全第一』とこの世界の言葉で書かれたヘルメットを着用している。

一体どこから取り出したんだらう？

「さあ、そろそろタロスが来るぞ？覚悟は良いか？」

なんとなく動く事が憚られる雰囲気とでも言えばいいかな？

動けない空気だったので、僕たちは大人しく指示に従っていた。

ちなみにエル君も“何で僕まで・・・”と呟きつつも指示に従っている。

ギューン、ガシン、ぐぼーん

『エモノ、破壊スル』

僕達から12〜14 m程離れたところで止まったタロスは、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

先の紅の攻撃により、右腕から先が取れてしまっているが、胴体が無事な為まだ動いている。

タロスが僕達にあと5mというところまで近づいたその瞬間

「スタン・フィールド作動・・・つてな」

さっきの赤い帽子の人が、何時の間にか持っていた手元のスイッチを押した。

バリバリバリバリ!!!!!!

『!!!!!!』

その瞬間、辺りは青白い閃光に包まれ

キューン・・・ズン

其の閃光が消えた時、アレだけしつこかったタロスは膝をついていた。

イオン臭が漂っている事から、どうやら魔法を用いた強烈な電磁場を使ったようだ。

大電流が青銅製という伝導率が高いタロスの中を駆け巡り、制御用術式をショートさせたのかな？

しかし、人工的に落雷を発生させる装置ってあるけど、僕たちよく感電しなかったなあ・・・。

「ほい、終わり・・・っと、さて解体ショーといきますか」

「一時的にショートさせたとはいえ、内部機構がどうなっているか

心配だな」

「ですな。あー誰か外れた腕持って来てくれ。壊れてても貴重品だからな」

なんか、僕たち放置で目の前でタロスの解体が行われている。

アレだけ騒いだ割には、タロスは随分とあっさりとした幕引きであった。

ああ、しかも経験値が入らないや・・・自分で手を下して無いし・・・はあ。

.....

.....

.....

目の前でタロスの解体が行われていく中、作業の邪魔なので片隅に追いやられた僕達。

「あの・・・」

「うん？・・・ああ君たちが、どうした？」

とりあえず、ただ立っているのも時間の無駄なので、あの謎の女子生徒に話しかけてみた。

「どうしたって・・・説明して貰えるのでは？」

「ああ、そうだったな。まあここじゃアレだ？場所を変えることにしよう。ついて来てくれ」

「解りました」

僕達4人はなんだか若干諦めた顔をして、彼女の後ろについて行った。

\*\*\*

彼女に率いられてやって来たのは、学生用研究棟の一室だった。それなりに年季の入った扉の鍵を開け、招き入れられる。

ガチャ

「まあ狭いところだが、遠慮せずに入ってくれてかまわん」

「それじゃ、失礼します」

「邪魔するぜー」

『お邪魔いたします』

中は金属、木材、岩石に至るまで、様々な“材料”が所せましと置かれており、確かにやや狭い。

僕たちが中に入ると、殿だったあの赤い帽子の人が扉を閉めた。

「あの、何で僕までココに居るのです？僕は授業が・・・」

「いまさら向かっても間に合わんさ。それにお前は既に課題を終えている。今更出る意味はないだろう？」

「いやそれは、そうですね・・・」

「あのおう」

このまま放っておくと、軽く流されてしまいそうなので、僕は二人の間に入りこむ。

「こっちとしては、そろそろ自己紹介とかして貰えるとありがたいんですけど？」

「ふむ、確かにタロス捕獲を手伝って貰った君達に名乗らないのは失礼だ」

「会長……また有無を言わず連れて来たんですか？」

赤い帽子の人が若干呆れた眼で彼女を見る。

「どうやら、そう言った事は日常茶飯事の様だ」

「だが彼女はそんな視線どこ吹く風と言った感じで構えていた。」

「なに、説明するヒマが無かっただけさ。それはさて置き君達、お茶でも飲むかな？」

「あ、頂きます」

「了解した。ヴァル！」

彼女は赤い帽子の彼を呼ぶ、彼は若干顔をしかめた。

「え、たまには会長が入れてくださいよ」

「何を言う。自慢ではないがワタシの家事全般に置ける技能は須く全滅だ。大体ワタシよりもヴァルが入れた方が何倍も美味しいではないか」

「……はあ、5人分お持ちしますよ」

「いや、お前を含めて6人分だ」

「はいはい」

そう言うと、彼は渋々ながら奥の方に引っ込んでいった。

「なんだろう……この熟年夫婦なノリ？」

「さて、彼がお茶を入れている間にワタシも自己紹介しておくことにしよう。私の名前はクレア・デイスパテル。自律魔導人形研究会、通称ゴー研の会長を務めさせてもらっている。クレアと呼んでくれてかまわん」



「あ、僕はクノルの町のギルドに所属している五十嵐かなめです」  
「俺はかなめの相棒をしている五十嵐 紅だ。紅で良いぜ？」  
『私はウィンディーネ・イガラシと申します。ウィンディーと呼んでください』

目の前の女子生徒ことクレアさんが自己紹介をしてくれたので、僕たちも自己紹介で返す。

「というかウィンディと紅。なんでさりげなく、僕の名字使ってるの？」

「ふむ、イガラシカナメ・・・珍しい名だな」

「そうですね？」

「いや、ここらでは珍しいだけだ。ワタシは良い名だと思うよ？カナメ・・・うむ、いい響きだ」

いきなり呼び捨てかい。

「カナメ、ベニ、ウィンディ・・・よし、覚えてぞ」  
「そ、それはどうも」

な、なぜだ？なんか妙な迫力が・・・コレがカリスマと言うモノなの？

「会長、また悪い癖出てますよ？初対面の人間に覇気を飛ばさんといてください」

「む？漏れているのか？」

「ええ、奥に居る俺にまで感じ取れる程でしたよ？あ、これお茶なの？」

そう言ってお茶を差し出してくれたのは、あの赤い帽子の人だった。

ああ、ありがとう帽子の人、この雰囲気を変えてくれて。  
彼が入れてくれたお茶を飲んで、少しだけ気分が落ち着いてきた。

「・・・良いお茶ですね？紅茶ですか？」

「安モンだがな？それなりに上手いから愛用してる品ってヤツさ」

「コレこの学校の購買でも買えますか？えーと・・・」

「ヴァルだ。ヴァルカン・H・ウルカヌス。ゴ－研での副会長兼研究主任みたいな事もやっている」

そう言うのと彼は手を出してきた。

「五十嵐かなめです。よろしくウルカヌスさん」

「ヴァルでいい。ちなみに質問の回答だが、欲しい場合は喫茶店で分けてもらう事をお勧めする」

ギョ

彼とは軽く握手を交わし、その後紅とウィンディとも挨拶を終えた。そして、用はすんだとばかりに、彼はそのまま部屋の隅にあったパイプいすに腰掛けた。

「そう言えばエル君」

「ハイなんですか？かなめさん」

「この人たちと知り合いなの？さっき腐れ縁とか言っていたけど」

「ふむ、腐れ縁か・・・言い得て妙だな」

僕の言葉を聞いたクレアさんがそう漏らす。

「現にその通りでしょうが、クレア会長」

「なに、ソレもこれも君が首を縦に振らなかつたからだ。それよりも今日この場に居るのだから」

「入らないですよ。ゴー研に入ったら魔法の研究時間がつぶれてしまうです」

「相変わらず辛辣だな。その魔法の才をゴー研で使えば、かなり世の中の役に立つと言うのに」

「だからって、無理やり入会書にサインを書かせようとする人は苦手です」

「はっは、これはこれは……ずいぶんと嫌われたものだ」

「嫌いじゃないです……それでも、苦手なモノは苦手です」

どうやらエル君は彼らにちよつと苦手意識があるようだ。

「さて、前置きはこれくらいでいいだろう」

彼女がそう言うと、部屋の空気が真面目なモノへと彩られていく。アレ？またアノなんか逆らえないオーラが……。

「先ほどは事情が事情であつたとはいえ……」

彼女は立ち上がると僕たちの方を向き

「我々の作り上げた作品であるタロスの暴走に巻きこんでしまい本当に申し訳なかった」

そう謝罪し、見ていてすがすがしい程の最敬礼をした。

だがすぐに顔を上げると、僕達全員を見渡し、言葉を続ける。

「自動魔導人形研究会の長として、今ココに非礼を詫びよう。許していただきたい」

そして再度、彼女はこうべを下げた。

「……僕達に被害は、あまりありませんでしたから」  
「……そうか、感謝する」

いや、まあ巻きこまれた手前、ちょっと腹に据えかねるモノがありますけどね？

何と言うか……逆らえないオーラってヤツを感じると言うか。まあ、なんにせよ

「あなたほどの女史に、ココまでされたら、此方も許さない訳にはいきませんよ」

人を屈服させる程のカリスマ、それとそれに伴う覇気と言うモノは恐ろしいモノである。

こういうのは抵抗すると苦しいから、適当に流しておくのが一番だ。無論まだ憤りのなモノはあるけどね。一々気にしても意味が無い。軽い？軽くて結構。無駄な争いするよかましだ。ただでさえ幸運値低いんだから。

「会長……また覇気が漏れ出てます」  
「む？すまん。今止める」

彼女がそう言った途端、部屋に充満していた威圧感と言える圧力が霧散した。

どうやら、彼女は無意識のうちにオーラをまき散らすタイプの人間の様である。

僕の後ろではウィンディや紅、それとエル君が覇気に当てられ真っ青な顔をしていた。

『「うづ、苦しかった」』

？息苦しかったけど、そんなに顔を青くするような事なのかな？

「アレ？みんなどうかしたの？」

「……なんで、かなめはアレ受けて平気なんだよ」

いや何でって聞かれても……。

「ん、解んない。僕はちょっと圧迫感を感じただけだったし……」

「……かなめは、色んな意味でスゲエな」

『私ですら苦しかったと言うのに……かなめ様、恐ろしい子!!』

いや色んな意味とか子ってなんだよ子って？

大体ヴァルさんだって平気そうじゃないか。

「いや、俺の場合は慣れた。会長に初めてあつた人間は大抵あなる」

「……慣れるというのも、大概にスゴイ気もするんだけど？」

「気の所為だ」

「いやだけど……」

「気の所為だ」

「でも」

「気の所為だ」

「……了解しました」

どうやらこの話題は掘り下げられたくは無いらしい。

ヴァルさんに強制的に終わらせられてしまった。

しかしクレアさんも凄いなあ。

あそこまで威圧感を与えられる程の覇気を出せるとなると、もう「  
レは武技の領域だね。  
戦っている時にあの覇気を出されたら身体硬直しそうだから、なん  
か勝てる気がしないよ。」

まあ、僕が魔力を全力で出せば別だろうけど・・・しないけどね。  
なるべくなら敵対したく無いなあ。穏便に行きたい。うん。

こうして、すさまじい覇気を常に放つクレア女史。  
それを受けても飄々とした態度を崩さないヴァルさん。  
この二人との邂逅と、タロスに関する謝罪を受け取った。

.....

.....

.....

「ん？そう言えばエル坊が静か・・・っておいどうした?!」

「.....」

「.....気絶してやがる。覇気にあてられたのか」

「.....」

「ん？ウィンディ、どうかしたのか？」

「いえ、別に・・・言えない、この子も結構可愛いから、あんなこ  
とやこんなことを!..!」

「言いたくないけど、本心ダダ漏れだぞ？」

『はあっ!..?』

次回へと続く・・・のだ。



### 第33章（後書き）

\*ああ、ようやく書けた。最近スランプだ・・・。



## 第34話

く 出歩いて…落っこちて・第34章く

クレアさんの覇気にあてられて気絶したエル君を放っておくわけにもいかず、

仕方が無いので、部屋の隅を借りて彼を寝かせておいてもらう事にしました。

この子も力はあるんだけど、こういったプレッシャーには弱かったのね。

さて、ただ待つだけではアレだろうって事で気を利かせてくれたクレアさんが、

お茶のお代わりとお茶菓子を出してくれたので、そのままお茶会になっちゃった。

タロスの事についてのお詫びは先ほど終わったので、コレは純粹な好意だと言う訳だ。

「すみません。なんだか居座るような形になってしまって…」

「はっは、気にするな。その程度で目くじら立てるほど、ワタシは狭義では無いさ」

なんとまあ、懐の広いお方だなあ。

「しかし、このお菓子美味しいですねえ。どこのお店のヤツかな？」  
「ん？そのクッキーを作ったのはソコの男だぞ？」

クレアさんはヴァルさんを指さして、そう言った。

「嘘！？こんなにおいしいのを！？」

「マジかっ！？」

隣でクッキーを口いっぱいにはうばっていた紅も驚きの声をあげる。

「いやまあ・・・適当に粉混ぜて、形作って焼いただけなんだがなあ」

「コイツはワタシよりも家事が得意だからな。特に菓子は我がゴ―  
研内でも人気がある」

何故か得意そうに笑うクレアさん。

「なんで会長が得意げなのは問いませぬがね。ま、昔から器用だ  
っただけって事ですな」

「照れるな照れるな、誇っても良いぞ？ワタシが認めているのだからな」

言葉だけ聞いたなら、かなり偉そうな言葉なのに、彼女が言つと妙  
に様になってるなあ。

「おい、かなめ。是非ともヴァルからコレの作り方を教えてもらえ  
いやむしろ習え！」

「ちよつと、首つかんで揺らさないでよ！」

『あらあら、紅さんったら』

どうやら紅はこの味が気に入ったらしい。  
後で秘かに教えてもらおう。

.....

.....

.....

「そう言えば、なんだっけココはあの・・・ゴー、なんだっけ？」  
「ゴー研だよ紅、ゴー研。自動魔導人形、ゴーレムを主に研究している」

「そうそう、そいつだ。ゴーレムだっけか？俺達を襲ってきたあいつもそうなのか？」

「・・・まさか、知らなかった？」

「うぐ、いやだってよお。俺、ゴーレムなんて見たことないしさ」

どうやら、今まで受け答えしてたのは、ただ周りに合わせていただけらしい。

「・・・やっぱり、ある程度勉強をさせるべきかしら？」

「ふむ、ベニは今までゴーレムを見たことが無かったのか？」

「お、おお。何で金属なのに動けるんだ？それが解んなくてよう」

まあ確かに、全金属製の人形が人と変わらぬ動作で動き周り、おまけに喋るんだもんな。

前にいた世界でも、ロボットとかこっちで言うゴーレムに近いヤツはあったけど。

アレだけ動けて、おまけにパワーがあるロボットはいなかったなあ。

「なるほど。心配するなべ二。ワタシとてゴ－研の長。解りやすくゴ－レムについて教えてやるう」

「え？あ、ああ。頼むぜ」

お、どうやらゴ－レムについて語ってくれるらしい。

「ではヴァル。頼んだ」

「・・・いや、会長自身が教えるのでは無かつたんですかい？」

「はっは、何を隠そう。ワタシは説明べたなのだぞ？」

「はあ、解りましたよ。まあ簡単に言うとな」

ご本人ではなく、ヴァルさんがゴ－レムについて語ってくれました。普通この流れだと、ご本人からの高説が流れると思っただけに、ちよつとだけずつこけそうになつたのは秘密だ。

「ゴ－レムって言うのはだな魔法刻印や術式を幾柄にも組み合わせで作られる人形の事だ」

彼はそう言いながらも懐を何故かゴソゴソと探っている。

「お前さん達が相手したウチのタロスは勿論のこと、泥人形に術式を込めたマッドゴ－レム、岩石を材料にしたストーンゴ－レム等がある」

「タロスは、金属で出来ていたぞ？」

「ああ、タロスを含め金属製のもそのまんまメタルゴ－レムに分類される。もっともタロスの場合は自律思考が可能なタイプだから、純正のゴ－レムとはまた違うんだがな」

「え？動く人形はゴ－レムと違うのか？」

「ゴ－レムって言うのは、大抵自我の様なものは持たせない。命令された事をただひたすら実行するのが普通なのさ。だから、そう言

った意味では、タロスは従来のゴーレムと異なるって訳」

そう言えば、やけに言葉を喋ってたよなあタロスのヤツ。

自我はともかく、アレは明らかに状況判断が出来る程度の知能を持っていた。

「あと特殊な例で、遺跡とかに置いてある雨水の排水溝として作られた石造に魔力が宿り、長年放置された事で出来た傷が偶然にも魔法刻印を刻んじまって動き出す、ガーゴイルってヤツもある。」

「へー」

「ちなみにガーゴイルの場合は、憑依とかで動き出す事があるから、その場合リビングスタチューって名称になるけどな」

「「そーなのか」」

ヴァルさんからの解りやすい説明を聞いて、思わず僕も納得してしまふ。

「後な？ウチのタロスは東洋からの技術を一部流用している。自我があるのもそのせいだろう」

「東洋の技術？」

「ああ、こっちでは珍しい紙を使ったペーパーゴーレムなんだが、確か何て言っただかな？」

ああ・・・やっぱり、東の国はジパング的なんだ。

「まあ見た方が速い。ホレ」

「何だコレ？」

先ほどからゴソゴソやっていたヴァルさんは、紅に一枚の紙を投げ渡した。

「お前さんは、気を扱えるんだろう？それを持って気を出してみな？」

「お、おう・・・ハッ！」

彼女は言われた通りに、気を発現させ身体に纏わせた。

その瞬間

「！！なんだ？！力が吸われる？！」

「あー心配すんな。そのままでもいい」

気がまるでスポンジが水を吸うかの如く、彼女が持っている紙の中に吸い込まれていく。

紙が光を放ち、良く見れば長方形だった紙が、少しづつ形を変えて行くのが見えた。

やがて光が徐々におさまっていき、不確定だった形がドンドン解りやすい形へと変化する。

「まあコイツがタロスの機構の一部に流用されている、ここらでは珍しい」

ぼんっ！

「ペーパーゴーレム・・・シキガミだ」

軽い音と共に、小さな人型が現れた。

それは

「え？！これって」

「お、俺の姿・・・なのか？」

『…………』

そこに居たのは、紅そのものよりもどこか幼い感じだが、まるで生きているかのように動いている、紅の姿をした式神であった。

耳としっぽをパタパタと動かし、あたりをキョロキョロと見まわしている。

「ほう、なかなか愛らしい姿をしているな？」

クレアさんの言う通り、シキガミ紅ちゃんは、どこか幼子の様な感じがして庇護欲を誘う。

ニコニコと無邪気に笑う姿は、まさに幼子のソレであり、とてととと、よるめつきながら歩くその姿に、どこか小動物的な魅力を感じさせてくれる。

「これはまた、本当に可愛いね」

「か、かなめ、可愛いつて…………」

すると、どうだろう。キョロキョロと周りを見ていたシキガミ紅ちゃんは、

僕の顔を見た途端満面の笑みを浮かべた。そして

「かなめえ〜」

ぼふ

舌足らずな口調で、僕に抱きついてきたのだ！

後ずさりながらも、僕は胸に飛び込んできてしまったこの子を受けとめる。

「え?! しゃ、喋るんですか?」

「ああ、だから言ったろ? タロスの機構に一部流用してるって」

僕の驚きとは関係無しに、シキガミ紅ちゃんは頭をぐりぐりとさせて気持ちよさそうにしている。

尻尾なんか、そりやもうフィーバーしちゃって、ブンブンと音が出るくらいに振られている。

思わずこの子の頭を撫でてやると、これまた気持ちよさそうに目を細めた。

「……暖かい。コレが式神だなんて、ちょっと信じられないなあ。」

「随分とよく動くんですね?」

「まあ、向うじゃ身代わりを任せたりするらしいから、結構本物っぽく出来てるんだよ」

「へえそうなんだ……よしよし」

「……(うらやましい)」

撫でてもらう事が気に行ったのか大人しくしているシキガミ……シキ紅ちゃん。

そして、何故か羨ましそうな目でシキ紅ちゃんを見ている紅本人。

「ココまで愛らしいと、ぜひ一匹欲しいと思ってしまっつな」

「ええ、確かに……」

「わっ?」

クリアさんの言葉に反応して、頭をクイツと傾げる仕草をするシキ紅ちゃん。

な、なんだろう、ほわわわ〜んとした気分になって来た。



「ぬう、なかなかの威力だ」

クレアさんも、どうやらおんなじことを感じたらしい。

「まあこういった風に、知能があるゴーレムもある・・・ところで後ろの人、大丈夫かい？」

相変わらず、飄々とした態度を崩さないヴァルさんに関心しつつ、後ろを見やる。

後ろの人っていったら、ウインディしかいないんだが・・・。

見ればウインディの視線は、ずっとシキ紅ちゃんに固定されたままだ。

「えーと、ウインディ？」

『・・・・・・・・』

うわ、微動だにしないよ。よし。

「この子、だっこしてみる？」

『！...！』

思いつきりブンブンと首を縦に振るウインディ。

「じゃ、落さない様にね？」

『コクコク』

もはや喋る事も忘れたかの様に、シキ紅ちゃんをそっつとだっこするウインディ。

キョトンとしていたシキ紅ちゃんは、相手が見知った相手だと解る

と途端笑顔になった。  
そして

「ういんり〜！（ぐりぐり）」

『………………………………………………………………………………！グハ  
ッ！』

「吐血ッ？！ちょっ！ウインディ！？」

舌足らずな口調で名前を呼び、彼女に抱きつくシキ紅ちゃん。  
そして、スリスリ攻撃を受けたウインディは吐血した。

一瞬倒れるかと思ったが、手の中にシキ紅ちゃんがいるのを思い出  
したのか、

ハツとした表情になり、そのままソファーの方にポスンと腰を下ろ  
したウインディ。

シキ紅ちゃんは、その動きが面白かったのかキャツキャと笑ってい  
る。

『……………わっ……………』

「……………わ？」「……………」

『我が生涯にッ！…一片の悔い無しいいッ！…！  
ッ！…！』 ガハ

「ウ、ウインディイイイイ！！」

彼女は叫び終わると、再度吐血。そのままソファーへと轟沈した。

……………

……………

.....

「ウインディ！ダメだ、気絶してる」

「それでも、コイツから手を離さないのは流石だぜ・・・なんか複雑だけどな」

ちなみにシキ紅ちゃんは何が起きたのか解らず、相変わらずキョロキョロしてたりする。

あ、吐血と言ったけど、彼女の場合は赤い水であった事をココに述べておく。

.....

.....

.....

「あー、まあゴーレムに関する事は以上だが・・・あんた大丈夫なのか？」

『全然平気です』

先ほど思いつきり吐血してぶっ倒れたばかりだと言うのに、満面の笑みを浮かべて膝の上にシキ紅ちゃんを乗せている彼女。正直、引く。

「ま、まあ本人が平気って言うのなら、別に良いんだが、いい加減返し」

『なんですか？何か言いました？』

「……いや」

どうやらまだモフモフしていたらしい。

……後でちゃんと返すように言っておかないと。

「ん？ここは……？」

「お、かなめ、エル坊が気が付いたみたいだぜ？」

おお、ようやく目を覚ました。

しかし、アレだけ騒いでいたのに、なかなか起きなかったねエル君？

「む？気が付いたか。エルダー」

「……あ、クレアさん、コレはご迷惑をおかけしましたです」

「ふむ、気にするな。ワタシの覇気を受けて、耐えていられる者はそうはいないからな」

「でもかなめさんとかヴァルさんは、気絶していなかったのに……」

「まあコイツは慣れってヤツだ。気にしたら負けだぞ？エルダー君」

若干悟った様な顔で語るヴァルさん。

ああ、このヒトもかなりの苦勞人なんだなあ……とか思った。

\*\*\*

「さて、エルダーも気が付いた事だ。そろそろお開きとしようか」

しばらくして、

ヴァルさんにあのクッキーの作り方を伝授して貰っていると、クレアさんがそう切り出した。

そう言えば、気が付けば外は既に茜色に染まっている。

「そうですね。今日のところは帰らせてもらいます。お茶とお菓子ありがとうございます」

「ごちそうさまです」

「お、帰るのか？それじゃヴァル、クレア、またな」

『ごちそうさまでした（ふふふ、術式は理解したわ・・・）』

帰る準備をして、部屋から準に出て行く。

パタンと扉を閉めて、僕たちはゴ－研を後にした。

帰り道の途中で、疲れた顔をしたエル君と解れ、僕たちは自分たちの部屋へと帰っていく。

しかし、魔法学校に来て二日目でコレか・・・死にはしないだろうけど大丈夫だろうか？

なんとなくココでの生活に、不安を覚えた1日であった。

\*おまけ：かなめ達が帰った後。

「・・・ふむ、しかし彼らはなかなかの人材であったな」

「ですな。この学園の生徒で無いのが悔やまれますわ」

「ふふ、確かにな。特にかなめと言ったか？彼ならばワタシの右腕にふさわしい」

「・・・以前エルダーにしたみたいに、いきなり入部届け持って突撃はしないでくださいよ？」

「む、失礼な。幾らワタシでもそこまでの事は」

「文字通り物理的に突撃して、針路上の建物を崩壊させた人に言われたくはありませんな？」

「ぐ・・・」

「おまけにソレの修繕費は、我が研究会からの出費でしたしね」

「・・・解った。彼らには手を出さんさ」

「（出す気はあったのか・・・ああ、でも研究材料としても申し分なかったな彼は。おしいな）」

「だが、ワタシ個人として気にいった！それならば懇意にしても問題はあるまい？」

「会長がなさりたいようにすればいいのでは？個人的になら俺もですがね（研究対象として）」

かなめくん、何故かトラブルの芽は尽きない様だ。彼の明  
日はどっちだ！

第34話(後書き)

ウィンディが・・・。



## 第35章

〈 出歩いて…落っこちて・第35章〉

魔法学校で生活を始めて、2週間が経過した。

あのタロスとのトラブル以外特に目立ったトラブルに巻き込まれる事も無く。

平和と安穩の内に、シエルさんのお仕事をしている僕である。

紅はついに気功術を修めた・・・と、言っても初歩の初歩を修めただけで、まだまだ道は長い。

タロスに僕が捕まった際に彼女が使用した技と、肉体強化が使える様になっただけでも凄いけど。

手帳の方に、技として記述が出たので、彼女もこれからは楽に使えるだろう。

最近では獣形態の時に、気功術が応用できないか試行錯誤しているらしい。

彼女は結構ガンバリ屋だから、恐らく何かしらの成果が出ると思う。それを手伝っているウィンディも、ハアハア言いながら彼女との訓練に付きあっていた。

そして、今日もシエルさんのところでお仕事だ。

さあ今日も一日ガンバロー！！

「では紹介するわ。今日の特別授業を受け持ってくれる。かなめくんよ」

「・・・ご紹介にあずかりました。五十嵐かなめです。今日一日よろしくお願いいたします」

さて、現実逃避はおしまいにしようか？

今僕は、何故かシエルさんの受け持つクラスの教壇に立たされている。

どうしてこんなことになったのか？それは少しばかり前に遡る。

\*\*\*

ガラクトマンに来て5日目、その日仕事が少し長引いたのと、研究室から近いという理由で、シエルさんを僕たちが使っている部屋に呼び、料理をふるまう機会があった。

「それじゃ、すぐ作りますから、そこで寛いでいてください」

「ええ、ありがと」

この間、たまたまゴミ捨て場に行った時に拾ったソファを直したものに座って貰い、

僕は何時ものように、調理台に使っている壁際の机の前に立った。そう、いつも通り……。

「あら？調理器具も何も無いじゃないの」

「ん？ああ、僕はそう言うの要らないんですよ」

「じゃあどうやって料理を作るつもり？」

「簡単です。調理器具が無いなら作ればいいんですから……」

そう言っただけはいつも通り魔法を発動させる。

普段通りイマメンタルで調理を開始したのだ。

本日の料理は簡単美味しい、田舎風ミネストローネ。

田舎風って言っても、只単に具材がやや少ないだけの事である。というかミネストローネ自体が、田舎風スープだもんな。

名前の意味なんて“ごちゃ混ぜ”と言うのだから、

イタリア人のネーミングセンスって言うのは意外とストレートだ。

何せ鍋の中は、色んな野菜と肉少量、そしてホールトマトが混ざり合ってカオス状態である。

実能的を得ているネーミングだと思う。まあこの世界にイタリア人はいないけどね。

「さてと……ブイヨンを出して……」

「あら、そのお鍋は……?」

「ん? コレですか? 僕が作ったブイヨンが入ってるんですよ」

この世界には固形ブイヨンやコンソメの素の様な便利商品が無いのである。

ちようど鳥はあったから、数種類のハーブを加えてその他香味野菜等と一緒に煮込んでみた。

そしたら、ちようど良い塩梅のコンソメっぽくなったから、大量につくって保存した。

「ちがうわ。鍋の中身の事じゃなくて、その鍋の事よ。なんで鍋から魔力を感じるの?」

「え? だってコレ僕の魔法で出したイマツル魔法お・な・べ ですよん」

「……星をつけるのはやめなさい」

いやまあ、なんて言うかノリで……。

「と言うか何? あなたずっとこの鍋を出し続けてるの?」

「だってそうしないと、せっかく作ったブイヨンがもったいないじゃないですか」

シエルさんは、何当たり前のことを聞くんだろうか?

幸いITだから、温度の調節は自由自在なんだよね。  
レイラインを繋げておけば、魔力切れで鍋が消えるなんて事も無いし。

「・・・そう、まあいいわ。料理に戻ってもいいわよ」

「? わかりました」

何故か微妙な表情をしつつも、テーブルに戻るシエルさんはて、どうかしたのだろうか？

「ま、いつか」

とりあえずチャツチャと作らないと、ウチの欠食児童が唸りを上げてしまう。

まあ後は刻んだ野菜を鍋に放り込むだけだから、時間掛かっても20分くらいだ。

間の工程はちょっと省くけど、それでも食べられるモノという事に  
かわりは無い。

疲れてると良くやる手抜きカレーを作るみたいなものである。

最悪具材を鍋に放り込むだけで完成するというあの手軽さだ。

ああ、そう言えばカレーとか食べたいなあ。カレールウがこっちは無いし・・・。

贅沢言わんから、この際インドカレーでも構わないや。

案外どこかにあるかもしれない。この世界あつちと似てるところあるしね。

「おっと、沸騰してきたから温度ゆるめてっと・・・」

しかし良いよねえ、圧力鍋ってさ？時間短縮がすぐにできる。

おまけに僕には、水に関してはプロフェッショナルであるウィンディが居る。

彼女との契約により、僕は以前よりも水系統に関する操作能力が上がっているのだ。

具材の中の水分を操作して、出汁を具材に滲みこませるなんて芸当も今じゃ出来る。

感覚的に水分子自体を操作して、鍋全体に熱がいきわたるようにするの朝飯前である。

細かいところはウィンディより下位の精霊さんから手伝って貰えばいいから楽なのだ。

一応人工とはいえウィンディは自我持ちの高位精霊さんである。

分類的には自然界における中位の精霊とおんなじ位の力量だ。

なので、自分よか下の位の精霊さんを従わせる事も理論上可能なのだ。

もっとも平和主義者の彼女は、同族を無理やり従わせるのはなんとなく嫌らしい。

なので大抵は、まずはお話をしてから手伝いをお願いするんだそうなの。

コレの陰で、消費するMPコストの削減に一役買っていたりする。

……段々、精霊術師にもなれそうな気がしてくるのは気のせいだろうか？

ちなみに、やろうと思えば水分子達を振動させ、電子レンジの如く温めるのも可能である。

……と言うか一気にお湯にしたい時は、大抵そうやって沸かしている。

本気でやれば、たったの1秒で大きめのお風呂一杯分のお湯が瞬時に沸かせるのだ。

最も、ものすごく疲れるから、普段は火属性を付与した魔法で沸かしているんだけどね！

そんな訳で、僕は微妙に魔法でチヨコチヨコ操作しつつ、ミネストローネを作っていた。

そして、しばらくして、周りに良い匂いが漂い始めたのであった。

.....

.....

「あ、紅！お皿出してー！」  
「りょう〜かい〜」

.....

.....

「ふう、おいしかったわ」  
「お粗末さまでした」

全員が食べ終わったので、鍋に残ったミネストローネを木の器に入れる。

「アイシクルブラスト」

そして威力を落し物質的な干渉を起さないよう調整したアイシクルブラストで一気に凍らせた。

こうする事で、作った料理のおいしさを落さず、次の日も美味しく食べられるのである。

これはいわば、生活の中で身に付けた知恵ってヤツなのだ。

後はこれに氷の刻印を刻めば、明日の夕がたまで普通に待つ。

魔法ってやっぱり凄いなあ。冷蔵庫要らずって所ありがたいよホント。

「……」

そんな僕を見つめる視線を感じる。

視線の出所はシエルさんだ。

「それにしても、良くそこまで出来るわね？」

「まあ、生きてくのに必要でしたから」

僕はちよつと苦笑しながらもそう答えた。

人の居ない森に住むとなつたのはまだいいけど、人間らしい食事が出来なかつたしね。

やっぱ衣食住は人間を構成する重要なファクターだよ。うん。



「複数制御だけじゃなくて、長期間の術式維持まで出来るなんて結構凄いわよ?」

「え? そうなんですか?」

「そりゃね。私ならともかく、普通ココまで細かい魔法を扱える人間ってすくないんじゃない?」

そんなものかしらねえ? 普通に使っちゃってるモンだからそういった実感わかないんだよね。

だってもはや生活基盤の一部だし・・・魔法は。

「普段からどんな魔法鍛錬してるの?」

「ええっと、基本は偶に瞑想する程度ですね」

「・・・それだけ? 命を削るかのような修業をした訳でも無いの?」

うーん、ぶっちゃけやったのは最初のサバイバル程度だしなあ。

それ程凄い訓練とかはしてないし、精々魔力の流れを感知出来る様にした程度だし。

あとは・・・。

「あとは今さっきやってた事も、鍛錬と言ったら鍛錬でしょうね」

「今さっきって・・・あの調理してるのが!??」

僕の答えに驚愕の視線を向けるシエルさん。

いや、だってああいった料理に魔法使うのは、かなりの鍛錬になるんですよ?」

温度調節の為に常に簡易サーチみたいに魔力を流して微妙な温度変化を考え。

鍋を魔力で形成しつつ、それを一定の温度に保ち続け。調理の時間短縮の為に、複数の調理器具を同時使用&並列術式制御して。

尚且つ流れる様にスピーディに、それでいて正確に鍋の中の対流も考えて。

料理が残ったら、保存の為に連続レイライン確保をしつつ料理を凍らせて。

数え上げたらキリが無い位、色々やっています。ハイ。

普通ココまでやらないけど、美味しい料理を作る為なら妥協はあんまししません。

・・・偶に手は抜くけど。

「まあそんな感じですよ」

「成程ねえ。“料理は魔法”ってワケ？」

「上手いですね。僕なら“魔法は台所で作られる”とか考えてました」

「言い得て妙ね」

魔女とかだったら、イメージ的に大鍋の前でイイ〜ヒツヒとかやっている絵が思いつくんだ。

まあ、そんな事する人がいたら、とりあえず頭の病院逝きだけだね。

「でも・・・これは確かに良い訓練になるわ」

「でしょう？結構コレでやると覚えるの速いんですよ。食事は毎日食べなくちゃいけないから習慣になるし」

「そうね、凄いなと思うわ・・・ねえかなめくん」

「ハイ、なんですか？」

この時、ついつい自分の得意分野を褒めてもらえて内心喜んでいた僕。  
なので

「今度、この調理魔法について授業をしてくれないかしら？」

「ハイ、いいで・・・はい？」

「言質はとったわ。それじゃ、かなめくん。ごちそうさま」

「え・・・あ、ちょシエルさん!？」

こうして、気が付けば授業を行うという事にされてしまっていた。そう言う訳で、雇い主であるシエルさんの“お願い”を断る訳にもいかず。

(謎の薬片手に持って、ニッコリと邪気のない笑みで言われたら・・・)

正直、この時返事さえしなかったらと何度か思ったけど後の祭り。特別授業って事で、一回だけの特別授業をさせられる羽目になってしまった。

僕は人にモノを教えるなんて事した事が無いんだけどなあ。

どちらにしる、こういった事には色々と時間が掛かるだろうと、この時は高を括っていた。

しかし、シエルさんは・・・考えて見ればものすごく優秀な人でした。

ギルド所属の僕を、実戦を知る魔法使いの講師って事で書類を作成してくれたのです。

お陰で想定外のボーナス付いたけど、何だかなあ。

そして場面は最初に戻るのである。

\*\*\*

とりあえず教壇に立った僕は事前に用意しておいたカンペ通りに講義をする事にする。

教えるのは、このクラスは十年生までであるガラクトマン魔法学校の五年生達である。

人数はざっと見ておよそ20名くらいだから1クラス分つてところかな？

所謂、ようやく魔法使いとしての第一歩を踏み出した子供たちで、魔力の出し方が理解できる程度の力しか今はもっていない。

しかし、ココから鍛え続けることにより、挫折しなければ高みを目指す事も可能な子達である。

年齢的には13〜15つてところかな？飛び級制度もあるからどうだかわかんないけど・・・。

一応一度つきりとはいえ、未来を背負う子供たちの授業を任される訳で・・・。

正直、かなり緊張しておりますですハイ。口調も丁寧になるわさ。

「さて、僕は一応魔法使いではありませんが、その実こういった魔法学校には通った事が無い、所謂我流の魔法使いというヤツです。高度な魔法理論を習った訳でも、高次元で高尚な考えをもつ様な人間ではありません」

とりあえず、己の事を軽く紹介する。

ちなみに上のは事実ではあるが、自称神からのボーナスにより感覚

的に大抵解るので問題無し。  
今のところクラスの子達は大人しく聞いてくれているようだ。

「で、皆さんとあまり年が離れていない私が招かれたのは、皆さんが魔法使いとして社会に出る際に、これをしておくと役に立つかもと、シエル女史に目をつけられ・・・もとい、先に社会に出ている魔法使いの先輩として、教えて欲しいとの要望があったからです」

若干本音がポロリと出てしまいそうになった。  
あぶないあぶない。

「まあこうしてダラダラ喋って授業を進めるのもいいのですが、ソレだと皆さんの貴重な時間を無駄にしまいそうです。なので、今回は普段シエル女史がどういった授業を展開しているのかは知りませんが、せっかくの特別授業なので今日は楽しんでいこうと思っています。ココまでで何か質問はありますか？」

ココまで一気に喋ったので、クラスの子達の表情が見れなかった。  
なので今見て見た。  
教壇から見ているので。生徒たちのする色々な表情がココから見える。

戸惑う顔、驚く顔、めんどくさいと考えている顔、純粹に楽しみにしている顔など様々だ。

「質問が無いみたいなので「ハイ！」・・・ええっと何か？」

質問が無いかと思ったら、律儀に一人だけ手を上げてくれた子がいた。

手を挙げている以上、無視する訳にもいかないので、続きを促す。

「カナメ先生は、ギルドに所属している現役魔法使いですよな？」

「うん、そうだけど？」

「カナメ先生はどんな魔法が使えるんですか!？」

うわっ、超純粋な目でコツチ見てる。

あーうー、何だか心の奥を見透かされてるみたいで落ちつかないよ  
お。

「先生？」

「ん？ああ、ごめん。少し考え事をしました・・・そうですね。  
攻撃と回復が少々つてところでしょうか。後はオリジナルが少々」

実は攻撃魔法はまだ初歩くらいなんだよねえ。

ブラストは本来初心者位が使う魔法だからさ？

馬鹿みたいにドデカイ魔力があるおかげで、ちよつとした戦略兵器  
並みに出来るけど・・・。

「オリジナルつてどんな魔法ですか？」

「うーん、いま見せてあげても良いんだけど、ソレは授業の中でと  
言う事で」

「わかりました!」

うん、元気よく返事してくれた。

子供は元気が一番だよな!

「他に質問は・・・ないみたいなので、これから授業を開始します。  
まずは皆さんの座っている机の真ん中に、布が掛かっているモノが  
ありますね？その布を外してください」

おいてあるのは、今回の為にシエルさんが学校の魔法道具鍛冶師に

特別に作らせた代物である。

イヤね、まさかこんなに早く作るとは思わなかったさ。

まあもう解っているとは思うが、置いてあったのは所謂調理器具達。フライパンとポウルとマナ板とナイフ、包丁の調理基本セットである。

料理は余程こつたモノでなければ、これだけの調理器具で作る事が出来るのである。

「さて、そこにある調理器具達は、シエル女史に頼み“特別”に作って貰った調理器具達です。使い方は今から説明します。カマドを使わない調理法を皆さんにはして貰いますのでそのつもりで」

ざわつと動揺が広がる。この世界では一部の魔法関連の施設を除き、今だカマドを使っている。

その為、火も使わずに調理は出来ないと普通は考える事だろう。

最も、僕の場合はこのフライパンすら使わなくても、調理できるんだけど……。

「さて、釜戸も無しにどうやって調理をするかなのですが……」

僕は手もとのフライパンを手に持つ。フライパンの形は僕の居た世界とおんなじだ。

そのフライパンの底には薄いながらも小さな溝が掘りこんである。この溝が、今回重要な役目を果たしているのである。

「今回は皆さんはまだ魔力制御が不安定という事で、その制御を兼ねてこのフライパンを使います」

僕はそう言って、フライパンに少量の油をひき、魔力をフライパン

に流し込む。

魔力はフライパンの底に掘られた溝にそって進み、一つの術式を構成した。

途端、フライパンは熱されて、陽炎が立ち上る程になっていた。

「っと、やり過ぎた。まあこのように今回使われる調理器具には、このように簡単な魔法術式が掘られており、魔力を流し込むことで反応します」

僕は用意された食材から卵を取り出して、最近覚えたので片手で卵を割ってフライパンに乗せた。

熱されたフライパンの上のった卵は見る間に白くなり、目玉焼きに変っていく。

「一見簡単そうですが、今僕は一定量の魔力放出、放出維持、放出魔力量の調節の三つを同時に行っています。今言ったどれかが一つでも崩れると……」

僕は半ばワザと込める魔力量をあげる。すると

ポフン！

途端目玉焼きから黒煙が上がり、フライパンの中身はダークマターへと変化してしまった。

ちよっともったいないけど、実演は大事なのである。

「……ケホツ。まあこのように、なっちゃいます」

そして、予想外の煙がもくもくと出た上、至近距離にいた僕は思いっきりかぶった。



若干部屋が煙い。とりあえず窓を全開にして風属性の魔法で換気を行った。

実践するのは良いけど、ちゃんと考えないとダメだ。失敗失敗。

「それじゃあ練習も兼ねて、簡単な卵焼きからやってみましょう。順番を決めてフライパンを持ってください」

「……………はい！」

この授業、簡単に言えば調理実習見たいな感じなので、シエルさんが気を利かせて、通常一時間辺り1時間半程度なのだが、2連続きに繋げて3時間取ってくれている。

こういった料理を教えるって言うのは、調理の合間に説明入れたりして時間を食うから、これ位がちょうどいいんだよね。

各々全員がフライパンを手に取ったのを確認し、まずは魔力を込めるといふ事をして貰う。

もちろんフライパンが熱くなるので、魔力を込めたら不用意に触らない様に注意しておく。

「あ、言い忘れてましたが、ココで作った料理は皆さんのお昼になるので、なるべく失敗しない様にね」

こう声を掛けたら、俄然やる気が向上したグループがあった。やはり食にかける情熱は人間どこでも変わらん人がいるのだろう。そんな事考えつつも、次に作る料理を準備する僕であった。



### 第35章（後書き）

はて？魔法訓練の話の筈が、何故か料理に・・・。  
まあいいか。

## 第36章

「出歩いて…落っこちて・第36章」

「いやはや、ようやく授業が終わったよ。え？授業の話はどうなったかって？みんな普通に良い子でしたよ？こちらの言う事には素直に返事してくれたしさ。全然手が掛からなくて、むしろこっちが拍子抜けしちゃったくらいだわさ。」

最後に目には見えない下級精霊さん達に頼んで、ビーフシチューを一瞬で作ったら驚かれたけどね。材料入れて瞬間的に沸騰させて水操って出汁しみこませればもう完成だもん。頑張り過ぎてMPかなり消費したけど、面白かったなあ。

「まあそう言う訳で、色々あって授業が終わったんですけど」

「何が色々なのかは知らないけど、次の仕事よ」

「どうやら休みなしでまた仕事の様です。

残業代が出ないんだよねえ。」

「で、お次は何をすればいいんですか？」

「温室に行つて、魔法薬の材料を取つて来て頂戴」

「え、またですか？この間みたいにマンドラゴラひっこ抜かせようとするのはヤですよ」

「僕が知らない事をいいことに、この人マンドラゴラ引き抜かせようとすんだもん。ちなみにマンドラゴラは元の世界にも存在するが、こっちのヤツはファンタジーのまんま……つまり、叫ぶし動きます。」

「おまけにひっこ抜く時の叫び声を近距離で聞けば、下手すると死ぬ。冗談抜きで……ヤバい。どうやら呪いの一種らしいんだけど、即効性が高く、レジスト出来ないマジでヤバいらしい。偶々気が付いたウィンディのお陰で抜かなかつたけど、もし抜いてたらどうなつてたか……。」

「で、抜かせようとしたご本人曰く「魔力耐性が見たかったのに……」と残念そうでした。」

「ダメだこのヒト。」

「じゃ、お願いね」

「……了解」

「あ！後、魔法薬の調合の仕方も覚えてもらつたわよ？」

「え！魔法薬ですか？」

「そう、かなめくんはかなり繊細な魔力制御が出来るって解ったから、ソレ位出来ると思ったのよ。感謝しなさい。魔法薬については一流のこの私から、手取り足取り教えてもらえるのだから」

「どうやら選択肢は無いらしい・・・悪寒を感じるのは気のせいですか先生。」

「了解しました。それじゃ帰ってきたらお願いしますね」

「ええ、それじゃ改めて行ってらっしゃい」

まあ、そう言う訳で、本日の午後のお仕事。

薬用植物温室での薬草採取へ行ってきまゝす。

\*\*\*

「ふんふん〜ふん」

「く〜く〜!」

「天气が良いと、なんとなく歌いたくなるよね？実際は歌わないけど、なんとなく気分が良かったので、鼻歌を歌いながら温室へと向かっていた。」

「チビも僕の後ろをふわふわ飛びながらついて来ていた。何時もは肩に乗っているんだけど、今日は飛びたい気分らしい。」

「鼻歌に会わせて声を出すので、一緒に歌おうとしてくれているかのように。可愛い奴め。」

「おや？カナメではないか。奇遇だな」

「ああクレアさん、こんにちは」

のんびりと温室に向かう途中、ゴー研の部長さんであるクレアさんに話しかけられた。

「今日もまたシエル女史に頼まれた仕事か？」

「ええ、今日は薬用植物温室の方で材料集めです。クレアさんは？」  
「私は貸し出している作業用ゴーレムの調整作業だ。ちなみに目的地も同じだ」

そう言っつて、片手に持った道具箱を掲げて見せるクレアさん。見た目と違い、ゴー研の長をやっているだけあり、魔導機械関係に強いのだろう。今日はあの特徴的な杖は持っていない様である。

「じゃ、一緒に行きますか？目的地も同じことだし」

「そうだな。そうさせて貰おう。後、敬語は必要ないと前も言ったぞ？」

「あつと、ごめん。コレでいい？」

「うむ、ソレでいいぞ」

そういつて同じ道を並んで歩く。最初はこのヒトの覇気がきつかったけど、最近は慣れたのでそうでもない。紅とウインディも慣れて来たので、このヒトとは普通に友人関係を結んでいる。

「ところでどうだった？タロスの方は」

「ふむ、やはり無理が祟ったらしくてな？オーバーホールでも直せないらしい」

あの後、破壊されたタロスも、ゴー研の人達に回収されて色々調

べられたらしい。東洋の術式との融合が不完全なのか、試作段階で暴走が起こってしまうタロス。新しい概念を積んでいただけあり、かなり詳しく調べられていたのだ。

「やっぱりね。アレだけひび割れてた所に電撃だもの」

「流石にやり過ぎた。術式を刻むコア自体が破損していたからな」

「成程、それなら修復は出来無い訳だ」

それ程ゴーレムに詳しい訳ではないけど、ソレ位解る。

「元々が新概念術式をブチ込んだだけのモノコックだ。アレだけ動いて壊れない筈が無い」

「自分よりも大きな壁をちぎって投げていたからね。僕その被害者」

何らかの重量軽減術式を組まれていたらしいけど、元が青銅だからどうしても強度が無い。元々試作品な上、動かす事が出来るか証明するのが目的であったのだ。戦闘行為を行うなんて、最初から計算には入っていなかったのである。

「まあお陰で改善点が沢山見つけられた。後継機には生かせるだろうな」

そう言っつてうんうんと頷くクレアさん。

しかしそうになると、ヴァルさん辺りが大変だろうなあ。

「でも、戦闘用では無かったにしても、なんか攻撃手段が付いていた様な？」

「そこら辺は私も知らん。元々の設計図には無かったモノだ」

足から車輪を出して高速移動したり、あの腕を飛ばす機構なんか



特にね。

あと身体を発熱させるアレも、場合によっては武器になる。

「まあ見当はついてる。ヴァルの悪い癖だ」

「ヴァルさんの悪い癖？」

「あいつは普段はまともだが、いざ研究開発となると歯止めがきかん。気が付けば作業用ゴーレムが、重槍を持った戦闘ゴーレムに改造されていた事もある」

「あー、所謂“マッド”さん何ですね？しかもシエルさんとかレンさんとは毛色が違うタイプの。」

「それだけならまだ良いんだが、熱中するあまり元々のスペックを度外視する事があつてな？」

「総じてバランスが悪いと？」

「その通りだ。先に話した改造作業用ゴーレム何ぞ、槍が重たすぎて腕が外れた」

「・・・ヴァルさん、どこか抜けてるんだ」

「普段が普段だから、そうは見えんのだがな」

面白い話を聞いた。ヴァルさんの意外な一面って感じ？

「まあそんな訳で、晴れてタロス2号機の建造が決まった上、予算もおりたがな」

「アレだけの騒ぎが起きたのに、案外普通なんだね？」

「まあ、作業用だけでは無く国防にも回しているからな。ああつとそこら辺は機密だから、今のはオフレコで頼むぞ？」

「了解、こっちは何も聞いていない」

ゴーレムと言うのは、簡単に兵器に転用が可能だ。旧来の簡単な

命令をするだけのゴーレムですら、防衛とかならかなり手ごわい敵となる。何せ死なないし、特殊な技を用いない剣や弓くらい簡単に跳ね返してしまう。おまけにその重量だけでも、人間とかを簡単に踏みつぶす武器になるんだからなあ。

「さてと、話をしていたら温室が見えて来たな」

「温室ってよりかは、植物園に見るんだけどね」

「確かにな」

見れば行く道の先に、大きな温室ガラスが見えて来た。この中は温度や湿度を調整出来る術式が組み立ており季節の植物が植えられている。温室ってよりかは、確かに植物園と言われた方がしっくりくるであろう。

「それじゃ、僕はこっちだから」

「ああ、またなカナメ」

彼女はゴーレムが作業できるほど大きい温室に向かうらしい。僕は僕で薬品の調合に使う方は、別の温室だからココで彼女とお別れだ。とりあえず立ち並ぶドームの中で一番小さな温室へと向かった。

「相変わらずだけど、ホントゴチャゴチャしてるよな。ココ」

既に何度か来て、勝手知ったるなんとやらと言った感じに温室に入る。中は薬草の種類別に仕分けされてはいるが、その種類が雑多

な為、ものすごくカラフル。いやむしろカオスと言うべきか……。

「すいませ〜ん。シエルさんに頼まれて来たんですけど〜！」

「話しは聞いています。適当に持つて行って良いですよ。」

とりあえず温室を管理している人に許可をもらい。取って来いと  
言われた植物や薬草を籠に入れて行く。流石にマンドラゴラの様な  
命にかかわるような物は指定されていないな。

「そう言えば、ついこの間とつたのに、何でこんなに成長が早いん  
だろう？」

以前、かなり大量にココから薬草を抜いていった事があつたんだ  
けど。

次の日に来たら普通に元に戻っていたんだよね。

「もしかして、あの魔法とおんなじ奴かな？」

脳裏に浮かぶのは、以前クノルでイノシシが大量に押し寄せた後  
の事。血や肉変で大変なことになっていた城門を、一気に元の草地  
に変えたあの魔法。レンさんのところで探そうと思っただけど、どん  
な分野に入るのか解らず探すのを断念したアレ。

「……そう言えば、微弱だけど精霊さんの気配も感じるような？」

最近ウィンディの力で精霊さんの力を借りていた成果と言うか所  
為なのかな？この目で見えることは出来ないけど、存在を感じることは  
出来る様になって来たんだよね。手帳にはまだ記載が出ないから、  
習得しているって訳でも無いみたいだけど……。

「?????…まだ解んないや。っと、早く戻らないとシエルさんの実験台にされてしまう!」

あんまり遅れるとマジでありえたので、僕は急いで研究棟に戻ることにした。

\*\*\*

「持つてきましたよっと!」

「あらありがと、じゃソコ置いておいて、貴方はこっちに来なさい」  
「……………」

「何よ?」

「モ、モルモツ……………」

「モルモツトじゃないから安心しなさい。ソレと私はそこまで外道じゃないわよ!…多分」

多分って!?!?ねえ多分って何!?

「煩いわねえ、あんまり煩いと本気でモルモツトにするわよ?」

「…………ツ…………!!」

「…………ゴメン、実験で気が立っていただけだから、本気にしないで頂戴」

「あ、いいえ。こっちこそ失礼な反応を…………」

とか言いつつ、物陰からシエルさんの反応をうかがっている僕であつた。

「時間は有限なのだから早く来なさい!」

「す、すみません。身体が勝手に反応しちゃって」

そう言いつつ物陰から出てくる僕。

気が付かない内に何度か実験されかけて、既にトラウマってるんだ。

まさか出されたお茶に薬入れているとか有り得ないでしょ？

「・・・全く、もっと役に立って欲しいから色々教えてと言つのに、あなたときたら・・・」

「め、面目無いです」

「まあいいわ。それよりも、その機材を取って頂戴。あなたにも魔法薬作りを手伝って貰うから」

「りよ、了解」

ここは言われた通りにしよう。僕はフラスコなどの機材を集め、シエルさんの隣に立った。

「さて、これから魔法薬の生成を習得して貰うんだけど、準備は出来てるわね？」

「あ、あのシエルさん、魔法薬と普通の薬品とどう違うんですか？」

呆れられた。嫌だつてシエルさん、僕魔法薬関係は素人なんですけど？

「まあ簡単に分類すると、ただ調合するのが薬品、それに魔法も加えるのが魔法薬」

「・・・案外シンプルなんですな」

「そ、難しく考える必要は無いの。AとBを足したら偶に謎の物体Xが出来る程度よ」

そ、それはソレで不安なんですが？しかしシエルさんはそんな事お構いなしに、次々と簡単だと言う魔法薬の生成法を説明してくれる。僕は内心ヒィヒィ言いながら、急いでメモを取っていった。一度しか教えてくれないからメモを取らないと覚えきれない。

「それじゃ、基礎の基礎の基礎のポーション系からやってみて頂戴」  
「りよ、了解です」

そして、待ったなしのいきなりの実践。

なんかスパルタだなあとか思いつつも、僕はフラスコとビーカーと試験管を手に持った。

.....

.....

.....

アレから夕方近くまでかかり、ようやく基礎の基礎にまで到達できた。

「えと・・・この混合液に魔力をあてながら、火の属性を加えて・・・」

「流石試作品とはいえ、以前エリクサーまで作り上げたシエルさんだ。」

でもそう言えば、何であの薬は放置されてたんだらう？

「ねえシエルさん」

「何かしら？なにか失敗した？」

「いいえ、ただちよつと・・・以前ネテの町の廃墟で、シエルさんの作ったとみられる試作型エリクサーを見たんですけど、なんでアソコに放置してあるんですか？」

「あら、貴方アレ見たの？やあね。若気の至りを見られちゃうなんて・・・」

「てことは、偽物ですか？」

「当たり前よ。液体の賢者の石なんて当時の私だと作れないわ」

ふへえ〜、シエルさんでも出来ない事あったんだ。

「あら何よその目、言っておくけど出来ない訳じゃないのよ？」

あ、作れるんだ。やっぱり凄いなあ。

「精霊が作れそうなくらい凝縮した、世界を構成する地水火風の4大元素を全て制御して、さらに高密度高濃度しなきゃ作れないのよねえ。しかも失敗したらヘタすると辺り一面吹き飛ばし・・・高密度になっても意識が出て来ちゃったら、ただの精霊に分離しちゃうし・・・」

「もはや薬品の域を超えていますね」

「だから奇跡の薬なのよ」

左様で・・・。

「ところで、手元見て無いとダメよ？その魔法薬変化しやすいんだから」

「え？ああ!？」

見れば手元のポーションは、ミドリの煙を出し始めている。失敗だ。ああ、なんてこつたい、せつかくの耐熱ポーションがやり直し

かああ……。複数の薬品を混ぜ合わせた混合薬を更に別の混合薬と混ぜ合わせなきゃいけないのに。

「あううう」

「ハイ、やり直しね。明日の実験に使いたいから、耐熱ポーションはあと10個作っておいてね？」

「あゝい、解りましたああ……」

ちなみに耐熱ポーションとは、飲むとかなりの熱さでも防ぐことが可能な魔法薬である。火属性の魔法に対しても効果があり、これを呑んだ後はしばらく火属性魔法は効果が薄い。鍛冶屋さんに結構人気のポーションでもあり、オレンジ味などが売られている。

「うぐぐ、ストック無しだからまた最初からかあ」

正直、魔法薬作るの舐めてました。ものすごく繊細な作業です。目隠してして針の穴に糸を入れるくらいだね。

〜

「あや？手帳が……」

これは、久しぶりに技能習得でもしたのかな？

「かなめく〜ん？急いでねえ？」

「ハ、ハイッ！只今！！！」

手、手帳みてるヒマが無いよおッ！！

僕はそんな事を心の内で叫びつつ、作業に没頭する事にした。



\*\*\*

「ただいま」

「お帰り、かなめ」

『おかえりなさい、かなめ様』

部屋に戻ると、既に紅とウィンディは戻って来ていた。  
なんかお帰りと言って貰えるのっていいよね。

「どうでした？今日のお仕事」

「疲れたよお。まさか講義の後、シエルさんから魔法薬調合を教え  
込まれるなんて思わなかった」

「あー、道理で何時もより薬品臭いんだな」

そう言ってクンクンと僕の匂いを嗅ぐ紅。

「こーら、はしたないからやめなさい」

「へいへい」

「へいじゃなくてハイ」

「はいよ」

もう、まあ良いけどさ。

「さてと、夕飯作ろうかなあ」

何時ものようにエプロン姿に……随分とこなれたな。僕も。  
最近若干家事の分担表でも作ろうかしらとか考えてたりする。

「ふむ、今日はグラタンと行こうかな」

マカロニに芋に玉ねぎチーズとかクリームもあるしね。マッシュルームはお好みで、後は色々とってね。仕込みは終了。オーブンは無い、だけど作ればいいから問題無し。

「イマジンセルIT・・・いや、別の方法を試してみよう」

ふと思いついた方法を試してみる。大分慣れて来たから、恐らくいける筈。

僕は眼をつぶると、辺りに漂う気配を探る感覚で精霊さんを探した。

(いた)

魔力あげるからグラタン作るの手伝って・・・とイメージした。するとどうだろう、目の前のグラタンが一瞬にして火に包まれたでは無いか。ある程度火が通った事を、精霊さんからの報告で聞き、ありがとうとMPを少し分けてあげた。

空気中の魔力を元に行っている彼らにとって、人間の持つ魔力もまた食事の様なもの。

分けてあげると喜ぶと言うのは、ココ最近になってから知った。

くく

「ん？また手帳？」

そう言えば、久々に手帳が更新したんだっけ？

僕はグラタンの皿をテーブルに乗せてから、手帳を開いてみた。

## New skill

### ・魔法薬生成

【叩き込まれた匠の技、繊細な魔力制御がいるが、様々な薬が作れる】

### ・薬草・薬品知識

【覚えた魔法薬関連知識。このスキルにより、薬品の種類などが解りやすくなる】

### ・触媒体質？

【ウィンディによって生じたスキル。彼女のお陰でドンドン精霊系に好かれるようになる】

## New ability

### ・精霊祈願

【下級精霊のみだが、頼むと色々してくれるようになった。一部の魔法にMP削減効果あり】

### ・精霊の瞳

【少しずつだが、世界へのピントを変えられる様になった。下級精霊を感じやすくなる】

ふむ、これまた面白いスキルとアビリティだわさ。

そうかあ、ついに精霊さんも味方になってくれたって感じか。レオンさんとこの本によれば、自然界の精霊は自然そのものらしい。異世界に来たけど、自然が味方についてくれる様になったのなら心強い。

そう思いつつ、僕は手帳を閉じて胸ポケットへとしまった。

ああ、この先どんなことがあるんだろう。久々に愉快的気分になった事に気を良くし、食事を行う僕であった。

## 第37章

「出歩いて…落っこちて・第37章」

「煮詰まったわ」

ある日の研究室、僕がポーションの増産をしていると、シエルさんが突然そう言った。

「……はあ？それがなにか？」

「煮詰まった時はおいしいモノが食べたいのよ」

「まあ、そう言う時もあるんじゃないか？」

おっと、いけない早く混ぜなきゃ……。

「じ〜〜〜」

「……」

「ココは確か冷やすんだよね。」

「じ〜〜〜」

「……」

ええと、試薬Bを熱しながら、風の元素を・・・精霊さんお願い。

「じ〜〜〜」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんですか？」

「ケーキ買ってきて」

「どこに？」

「クノル」

今からツスか？

「食べたいの〜!!」

「だあー！解りましたからひつつかないでください！セクハラですよ！」

「なによ、美人に抱きつかれたんだからよろこびなさい？」

「・・・・・・・・はあ、最初と全然人が違うじゃないですか」

「あら？誰しも初対面の相手では仮面をかぶるモノではなくて？」

いやまあ、ソレはそうですけどね？

仮面をかぶらなくなってくれたって事は信頼されたって事かな？

この場合喜んでいいのか、はたまた迷惑だと思えばいいのか悩みどころだな。

「・・・・・・・・買いに行けと言いますけど、その分経費で落ちますか？」

「安心なさい、キチンとお金は渡してあげるわ。一人でお使いにいけるわよね？」

「いけますよっ！でもクノルからだと今から出たら帰ってくるの夕方ですよ？」

この魔法学校とクノルとでは片道半日の距離がある。

急いだとしても今から出たら頑張っても帰ってくるのは夕方である

う。

「ケーキなんて生物を持って帰るには遠すぎますよ」

「あら？貴方魔法が使えるでしょ？」

「・・・冷やして持って帰って来いと？本気ですか？」

「本気よ？それと出来ればお昼までに食べたいわ」

なんですと？

「ええ！？そんな！後3時間もありませんよ！？」

「そう言う訳だから頑張つてね？遅れたら・・・うふふ」

「ヒツ！？行つてきます！」

「はいはい行つてらっしゃい。あれ代金と買い物メモね？」

「いつてきますうう！！」

なんであの人は薬入り試験管片手に笑顔で晒うかな！？

嫌ああ死にたくないよおお！！魔法で直せるけど臨死体験は嫌ああッ！

僕は急いでクノルへと向かった。死への恐怖は時に人間の限界を引き出すのである。

途中の平野を駆け、山道を走り抜け、行きはよいよいと言う感じでクノルに着いた僕。

シエルさんに言われたモノを購入し、魔法により冷凍。

後は帰るだけなのだが

「ま、間に合わない・・・」

ココからガラクトマンまでは歩きの場合、片道で半日程はかかる距離。  
一応ずっと走り抜けたので、かなりの時間短縮は出来たと思う。

しかし途中は曲がりくねった山道となっている。

魔獣避け対策が施されているので、道自体は安全であるのだが。

「もうすぐお昼だけど・・・間に合わない」

半日かかる距離をものすごく頑張って2時間に縮めた僕をほめて欲しい。

ケーキ買う時に店員に顔色を心配されるほど頑張ったのである。

本当にどうしてくれようか？

「うう、直線距離ならなんとか間に合いそうなのに、いつその事空でも飛べたら！」

本当にそう思う。途中の山道が曲がりくねっているのが悪いのだ。  
今から間に合わせるには、いつそ空でも飛ぶしか　　！！

「飛ぶ・・・飛ぶ？　　そうか飛べばいいんだ！！ははは！」

僕自身は自力では飛べないけど、多分魔法を使えば行ける！  
間に合わせる事が出来る！魔法薬飲まされない！NOMOLモット！



この時、良い解決策を思い付いたモノの思い付いた場所が町の中心だった。

その所為で周りから白い目が凄かった事に気がついた。

その事で急に恥ずかしくなり、足早に町の外へと逃げたのであった。外に逃げた僕は急いで魔法を使う。使うのは当然あの魔法。

「行くぞ！ET大盾！」

そう人が2〜3人くらい乗っても平気そうな盾を作りだすこの魔法。しかもあまりの大きさに自らでは扱えないが、浮かべたり手を触れず動かしたり出来る。

もう解るだろうが、手も触れずに動かせるのである。

「よし、とべ大盾！」

つまりはそういう事、自ら飛べるのだから、それに乗れば飛べるのである。

「よし！浮いたったた！うわあた！」

もつともバランスを取るのが難しかったのであるが。

乗って座って見たのはいいが、バランスがうまくとれず落ちた。

しかも危うくケーキを潰しかけたので冷や汗ものである。

「いつつ、良い案だと思ったんだけど……」

打った所をさすりながらポツリとそう呟く。

しかし、どちらにしろこのままでは間に合わない。

間に合わなければどうなるか……考えたくもない。

「くそ！もう一度だ！」

今度は座るのでは無く立って乗ってみた。スケボーの要領である。立って乗ると意外とバランスを取りやすかった。

一応用心の為に足をスノーボードの如く固定、このまま自らの意志で飛ばしてみた。

「よし、行ける……けど遅い！」

いざ飛ばしてみたが、案外遅いのだ。速さにして走る速さ程度である。

元々盾は飛ぶものでは無いのだから仕方ないと言えば仕方ない。だけでもっと早く飛べないと飛ぶ意味が無い。

「何かないか！なんかないか！……そうだ！精霊さん！」

目の前から吹き付ける空気抵抗が結構ブレーキになっていたので精霊さんに頼む。

少し魔力を消耗するけど風の下級精霊さんが空気抵抗を弱めてくれた。

なので少しスピードが出る。

「うう、もっと、もっと早く！」

だけどまだ遅い、速さ的には自転車で全速力出した程度。

やっとこさギリギリに着けるかどうかって所である。

しかし今の僕にそんなの考える余裕は無い。シエルさんのお仕置きだけは嫌なのだ。

なにせ以前試験薬を投与されたマウスが……ああ！思い出した  
くもない！

必要に迫られている為、ものすごく混乱している。なにか、何か  
いか！

こうジェット機の如く……ジェット機？

「いやいや、流石にジェット機は作れない」

幾らITでも構造がよくわからない機械類は作れない。

ジェットエンジンの構造が解るなら、本物と同程度の力は出せるだ  
ろう。

だがそれが解らない以上、飛ばしても今と同じくらいしか速度は出  
ない。

逆にジェット機なんて複雑なモノを作ろうとすればそれだけで無駄  
に魔力を消耗する。

かと言って大盾にジェットエンジンをつけたところで小さくて役に  
立たない。

プロペラは、なんとなくなくスピードが出そうな気がしなかった。

ロケットなら違うだろう。アレはもっと力強いから……ロケット？

「ロケット！そうだロケットだ！ブラストを使えば！」

ブラストを長く放出し続ければ、反動で速度が出せるのではないか？  
特にロケットをイメージしてやれば……。

「やってみよう……ブラスト」

腕の先では無く、道具の延長からと言う事で大盾の後ろから噴出さ

せた。

普段は反動を無しにしているが、意識的にソレを外してみる。すると……。

「う、うわああああッッ!!!!」

恐ろしくスピードが出た。成功したらしい。

しかし若干早すぎる気がする。

早くなれと願っていたのに、いざ早くなると早すぎとかどんだけえと思ったが早いもんは早い。

クノルに行く際走り抜けた山道を眼下に、そのまま飛び続ける。だが

「さ、さむい……」

低空で飛行しているがコレだけ早いと風が強い。

精霊さんに頼んで耐えられる程度に抑えてあるが、それでも体感温度は寒いのだ。

おまけにそれでドンドン表面温度が下がって行くのでマジで寒い。

早くつけと願ったらまたスピードが上がってしまったので余計に寒い。

しかしお陰でガラクトマン魔法学校が目と鼻の先までに迫って来た。とりあえずガラクトマンのちかくの平野に降り立ち、急いで研究棟へと向かうのであった。

「シエルさん！買ってきました！」

僕が慌てて研究室に入ると

「あら、お帰りなさい。どこに行ってたの？」

「いや、貴方に頼まれてケーキを買いに……」

「ああ、そう言えばそうだったわね。御苦労さま」

何故か普通になっているシエルさんが居た。WHY？

「あ、あれ？煮詰まってるケーキ食べたいんじゃない？」

「あの後スツて答えが出たのよ！それがもう嬉しくて嬉しくて！」

「……つまり僕のしたことって」

「無駄じゃないわよ？ケーキ食べたかったのは本当だしね」

新薬の配合について悩んでいたのだが、ふっと思いついたんだそう  
だ。

そしたらそれが大当たりで、作りたかった魔法薬が完成したと言っ  
ていた。

何の薬かは知らない……どうせ凄い効果の薬何だとは思っけどね。

「……はあ、それじゃコレどうしますか？」

「うーん、おやつ時に食べたいから冷やしておいてくれる？」

僕は冷蔵庫か何かなんだろうか？

「了解しました。後で立て替え分頼みますよ？あとつかれたのでち  
よっと休みます」

「はいはい、今日はどちらにしろ殆ど仕事は無いからもう上がって  
もいいわよ」

「失礼します」

片手にケーキの入った紙箱をもち、研究室を後にする。

ケーキは・・・部屋においておこう。  
氷属性の下級精霊さんに頼んで冷やしておけば良い、一日くらい持つよ。

ドツと疲れが出たのだが、気にせず研究室を後にする。  
僕のこの苦労は何だったのだろうか？そう思うとやるせない。

部屋にケーキを置き、精霊さんに後を頼んだ後部屋を出た。  
あ、考えてみたら今クルにはレンさん達もいるんだった。  
序でに会ってくればよかったなと思ったけど後の祭りってヤツだね。

とりあえず、ふとしたことで覚えた空を飛ぶ方法をもう少し確認してみる事にしよう。

どうやらＩＴの延長線と言う事で、新魔法という扱いにはならない様である。

しかし、急いでいたとはいえ何故盾に乗るかな？  
魔法使いの空飛ぶ乗り物と言ったら

「試してみよう。ＩＴ篇」

やっぱりコレでしょう？イメージ的にはコレが結構解りやすい。

「さて・・・ココじゃ狭いな」

流石に何時も使っている部屋じゃ狭くて練習できない。  
どうせ午後はオフな訳だし、ちょっと外に行って確かめることにした。

\*\*\*

とりあえずどうだったかの結果だけ述べよう。箒は無理でした。飛ばうとしたんだけどね・・・食い込むですよ。あえて何がとはいいませんけど箒じゃ空は飛ばません。

「中東の人が魔法のじゅうたん使うの解る気がする」

あれなら乗り心地は箒よか何倍も良いだろう。少し痛むお尻をさすりながら僕はそう思った。

「やっぱり大盾の改造版が一番乗りやすかったかな？」

そう、魔法のじゅうたんも試してはみた。だけど、どうしてもクニヤンクニヤンとしているので微妙なのである。

スピードも走る程度しか出せないし空気抵抗が大きすぎるのだ。あれなら板状になっている大盾に乗った方が早いと思う。

「E.T.シールドボードって所か・・・先をとがらせたら攻撃も行けるかも・・・」

問題はスピードだろう、ソレと防寒対策も必要だ。

スピードについてはプラスチックが推進力として使えるのが解ったのでソレを利用する。

ただの魔力放出ではなくてエアプラスチックのように風を伴えばもっと早く出来るだろう。

防寒については風の精霊さんに頼んで、断熱率を上げてやるくらいだろうか？

もしくは火の精霊さんに頼んで、少しだけ周りの空気を暖めて貰うとかそういう感じ。

おお、意外と使えそうになってきたじゃないか！

「よし、後は練習あるのみ！がんばるか」

この日の午後は空を飛ぶ練習に費やした。

ああ、早い所家が欲しい、このままじゃいつシエルさんに実験台にされるか……。

五体満足で楽しく生きることが目的に頑張らなきゃと思った。

\*\*\*

出て来た人たち。

\*五十嵐かなめ

言わずと知れた主人公

\*紅

元犬のドワーフ、赤毛

\*自称神（監視者）

放置プレイ大好物、遊びと実益を兼ねてかなめ達を魔改造

\*受付のお姉さん

名前が何時までも解らない謎の人。



\*ギズボン・ウエルシエ  
ドラゴニユート、関西弁

\*エルダー・シエットランド  
ガラクトマン魔法学校の生徒、礼儀正しいが何気に周りが見えて無い

\*<sup>ゲイル</sup>親方

商人ギルドに所属する凄腕親方、我流で覚えた気合で戦う

\*ルーズ

親方の手下1

\*ラジヤニ（ラジエル・レン・デイモール）

本屋の店主、その正体はガラクトマン魔法学校の研究者

\*キース

冒険者、スーパー方向音痴、初心者用ダンジョンで一週間さまよえる

\*シエル

凄腕魔法使い、そしてガラクトマン魔法学校の教師兼研究者でもある

\*ルード&amp;ロアル

剣士と弓兵、今後出るかは未定

\*ルアリス&amp;トール

ネテの町で暮らす姉弟、姉はスリが出来るシーフさん。弟は病弱

\*ヴァルカン・H・ウルカヌス

自称ヴァル、他称改造バカ。ゴーレム研究会副会長を務めるガラクトマン魔法学校の生徒。

魔法金属精錬が得意で変な発明品を生み出す事でも有名（悪い意味で）

一部お菓子作りでも有名だったりする。家事能力は高い。

\*クレア・デイスパテール

ガラクトマン魔法学校のゴー研ことゴーレム研究会の会長。

女房役のヴァルと共に日夜ゴーレムについて研究している。

一応長であるので、ゴーレム等の魔道技術に関してはかなりの物。しかし実力をもって押し通る事もあるので技術者と言えるかは怪しい。

## 第38章

「出歩いて…落っこちて・第38章」

今日はシエルさんに頼まれた魔法薬の過去の臨床記録を探す為、ガラクトマン魔法学校の図書室に訪れていた。

古今東西とまではいかないらしいが、それでも過去数十年で集められた蔵書の数はかなり多く、古書のように装丁に年季が入っている書物やらスクロールとかもあれば、まるで新書コーナーのように綺麗なグリモワールも置いてあったりもする。

まあ綺麗な奴ほど年代的には最近の物らしいので、新書と言えなくもなかったりするらしい。

「本当、大きな図書館」

「外部記憶の山ですね」

ちなみに今日はウィンディも一緒だったりする。紅は本読むと頭痛くなるから犬形態になってチビと一緒に平野で遊んでくるのだそうだ。

まあ彼女は本を読むより体を動かす方が性に合っているだろうしね。最近特にからだを動かすような事は無かったし、ちょうどいいんだろう。

「さてと、何処にあるんだろうか」

「何の本を探すんですたっけ？」

「ん？えーと確か・・・」

一応種類別に種分けされているので、探すのは簡単だった。目録がちゃんと作ってある為、大体の位置は絞り込める。そして何なく目的の書物を探し出すことが出来たのであった。

『見つけましたね。どうします？もう戻りますか？』

「どうしよう」

すぐに見つけた為、まだ制限時間いっぱい時間が残っている。学園関係者以外は許可をもらわないと図書館には入れないので、すこしだけ勿体無いと僕は思った。

「まだすこしココにいたい。魔道書とか読みたいし」

『では時間になったらお知らせしますね？かなめ様は熱中すると周りが見えなくなりますから』

「うん、頼んだ」

せっかくコレだけのグリモワールが大量にある訳だし、色々読んでみたい。元の世界では見られないという知的好奇心と知識欲が僕の心を刺激するのである。

そう言う訳で、仕事の途中だが少しだけ寄り道をして、色々と本をあさる事にした。良い子は真似したらダメだよ？とか脳内で言ってみてアホかと思った。

「えーと、それじゃ・・・まずは普段は拝めない様な魔法はっつ

」

一口に魔法と言っても、その種類は結構様々である。個人で使用可能なやつから大規模な儀式があるモノのあるし、暮らしに役立て

られる魔法シリーズなどもある。

もつともあまりに危険な力が込められている様な魔法書の類は、こんな生徒が見れらそうな場所には置いてはいない。当たり前である、好奇心が強い生徒が面白半分で死者降霊術とかをやられたりしたらたまったものでは無い。

故においてある魔法書は、ある程度以上の破壊関連が書かれている場合、許可をもらわないと入れない書庫におかれる訳だ。危険なら破棄すればいいと思うのだが、人間が持つ好奇心や知識欲はダメとわかっていても止められないらしい。

まあソレはさて置き、久々に読む活字を嬉々として記憶していく僕。殆どがITで代用できる所為で覚える必要は無いのだが、この本を読むという行為にこそ、面白さを感じているので問題無い。

まあ、魔法書の中に普通に空を飛ぶ魔法があったことに、ちょっとだけ落ち込んだけど、僕の方法の方が早いから良いもんね……。一応落下対策の為に覚えておくことにした。高いところは怖いです。

他にも物に術を刻む刻印術とかの本も読んでおいた。そろそろ自前で魔法アイテムを作ってみたいお年頃。まあ流石に技術的な話なので、実地的な所は詳しくそんな人に教わるしかないだろう。

「……教えてくれそうな人なら約一名知っているけどね」

さて、そうやって色々読んで回っていると、一つ気になる魔法書を発見したのであった。

どうやらかなり古い魔法書らしく、装丁の所々に傷あとや隅っこが欠けた様子が見られたが、一応読めるようになっていた。

その題名は

「『時間制御魔法』？こ、これはもしかして『加速』とか『時間停止』とかが出来る魔法！？」

題名から恐らくそう言う魔法だろうと思ひ、その魔法書を手に取った。どこか欠けた装丁も、表紙についている傷痕も、長い時を過ごしてきたと感じさせてくれる。

時間制御と名のつくからには、例えば物体の時間を加速できるとかだったら嬉しい。それこそ安物のワインを瞬時に熟成出来るとかに使えると思うのだ。

それだけでは無く、漬物もすぐに作れるし、ハムやベーコンのように熟成が必要な食品、大豆があるなら納豆やみそが作れるかもしれない。

それを思うと、この魔法書のページをめくる手が止まらない。一文字一文字忘れない様に読みふけて行く。僕はそのまま、この本の知識を得る作業に没頭したのであった。

理論的には、対象の時間を制御する方法、それを利用した自身の時間を加速させつつも遅くし、周囲の時空の流れから出る方法等が書かれていた。

要は前者の場合例えば酒の熟成を早めたり出来る。対象の時間を操作出来るからだ。後者は簡単に言えば時を止めてその中を動き回る方法だ。コレを使うと周りからは瞬間移動したかのように見える事請け合いです。

なお後者の時間を加速させつつも遅くと言うのは、時間の流れから出た際、ドンドンと己だけは時間が加速して進む為、己の時間を遅くして老化等を防ぐという方法だ。

これによって、あたかも時間が停止したような世界が、己の周りに広がると言う訳である。

それ以外には時間停止における注意事項的な事が書かれていた。なんでも時間停止中に物体を殴ったりすると、その物体は普通に殴られた程度の衝撃を時間停止が解かれた際に受けるらしい。

その際、何度も同じ場所を殴りまくってから時間停止を解除すると、衝撃全てがとある一点の時間に集中して発生する為、物体がそれに耐えきれず崩壊する事があるそう。

なお、当然ソレは己にも返ってくる諸刃の剣であり、岩をも砕くくらいに殴りつけた後時間停止を解除したら、己の拳にもそれが表れて、大怪我を負う可能性があるらしい。

「……ようは遠距離武器とかで一点集中すれば良いんじゃないの？」

それなら別段怪我はしないだろうにな。そう思い僕は魔法書を閉

じた。まだ理解には程遠いが、一応一区切りまで読んだのでちょっと休憩する為だ。かなりの概念理論であるから、そこら辺の説明は省いておく。

正直ある程度理解できたとはいえ言葉で何と言えはいいかわかない。所々に魔法刻印付いてたから、読んただけでもある程度理解は出来る親切設計なのが地味に嬉しいね。

「うん、でもこの本って・・・」

しかし不思議なことに、魔法書の内容としては、許可をもらわな  
いと入れない書庫行きのような気がする。時間操作とか時間停止出来  
たら無敵じゃね？

でも、何故か普通の本棚においてあったりする所が、むしろ怪し  
いかな。

「まあ、後で実験してみればいいか」

とりあえず内容はそれなりに理解した。時間停止の術式構築なら  
なんとか扱えそうだ。シエルさんのお使いの後で実験してみれば良  
い。

そう考えていると、ウィンディがこちらにやってくるのを感じた。  
そろそろ時間らしい。

『かなめ様、もうそろそろ』

「あ、うん。わかった。呼びに来てくれたありがとうウィンディ」

『いえいえ、それなりに楽しみましたから』

「そうなの？」

はて？何か面白い本でも見つけたのかな？



『ここは魔力を帯びたそれなりに古い文献が多いので、人工精霊が自然発生してまして、彼らと色々とお話していたんですよ』

「？自然発生なんてするの？」

図書室に現れる精霊とか、ファンタジーだね。

『ええ、と言っても私の様に目的があつて作られた訳では無いのでとてもその存在は稀薄です。ああ、でもかなめ様ならもしかしたら見えるかも知れませんか』

「そなの？じゃあやつてみようかな」

『では目を凝らしてあちらにある魔法書のたなを見てみてください』  
「どれ……」

じーっと目を皿のようにして、ウィンディに言われたたなを見つめて見る。うーん、良く解らないけど、何だか目が痛くなってきた。

「……だめだ、見えないや」

『どうやらまだ早すぎたようですね。まあ見えたとしても光の玉のようなものですけどね』

どうやら存在が不確定で形を持っていないのが多いらしい。

それでもちよつと見てみたいっていう好奇心はあつただけど・

・まあいいか。

「それじゃ、言われた本を持っていく事にしますか」

『ですね』

既に言われた本は見つけてある。図書室の司書さんにシエルさんから借りると言われたという旨を話し、目的の本を借りてから、と

りあえず図書室を後にした。

\*\*\*

今日のお仕事を終えて、部屋へと戻った僕。

部屋には紅とチビがクターっしてしていた。最近戦闘やら身体動かす仕事が無くてつまらないんだそうだ。

まああと二カ月と少しだけだから辛抱して欲しい所である。

さて、ソレはソレとして、僕はさっそく図書室で見つけたあの時間制御魔法を使ってみることにする。

やるのは一番簡単な自身の加速、まあ所謂時間停止と言うヤツである。

コレが基本らしいので、コレが出来れば後のは大抵出来る……らしい。

本にはそう書いてあった。

「むむむむむ……」

だが、やはり全くやったことが無い魔法と言うのは難しい。やり方というか勝手が掴めないんだよね。

なので、部屋でしばらくうろうろんとかぬぐんとかやっている。

「まーた何やってんだかなめ？」

流石に気になったのか紅が話しかけてきた。

「いや時間を操作を試してみようかなって」

「……頭大丈夫か？どこかぶつけて無いか？」

「……くー」

あ、普通ならそうおもっよね。

「ちがう、そういう魔法の本を見つけたの!」

「ああ、ああ、解ってる。きっとシエルの仕事が見つすぎたんだ。ゆっくり休もう。な?」

「いや、だから」

なんかこう言ってる事を信じてもらえなくて、しかも優しくされると凄く凹む。

『かなめ様の仰っている事はほんとうですよ?』

「そーなのか?」

『はい、図書館の子たちに聞きましたから』

図書館の子たち・・・ああ、自然発生した精霊さん達の事ね。

「まあ僕はいいとして、最近はどうなの紅? 気功術の方は上手いってる?」

「ぼちぼち、って所かね。身体にまとわせるまでは出来た。だが攻撃や防御に回すのがまだ難しい」

『あら、それにしても私の水を弾き返せるレベルの気功を30分も持続させてるじゃないですか?』

おー、ソレはまた凄い。

「ま、日々努力してるからな。少しは成果が出なきゃやってられねえぜ」

「ふむ、じゃあ僕と模擬戦とかしても大丈夫かな? ブラスト連射でも大丈夫そうだし」

僕がそう冗談をいうと、それを本気にしたのか彼女はブンブンと首を振って、無理だから、かなめの魔法は純粹に強力すぎてまだ無理だから！と叫ばれた。

「いや、冗談だから・・・」

「本当だな？俺はまだあの極太光線あびて死ぬとかは御免だぞオイ！」

「そんなに凄いですか？かなめ様の魔法？」

「ああ、初級の魔法の癖に、天に穴開くくらいだぞ？」

「・・・本当に？」

「こんなウソついてなんになるんだよ？」

「もしもーし、一応使う本人がここにもいますよー？」

仲間はずれは良くないと思うんだ。

「ところで、ブラスト以外だと他にはどんな魔法を覚えてるんですか？」

「えーと、そうだなあ」

ブラスト以外だと、まず<sup>イマッシュル</sup>イーTでしょ？それにサーチにエレメンタル・ミサイルにシエルショット・・・あれ？

「・・・」

「意外と・・・というか、かなりレパトリーは少ないですね」

「ええと、その・・・イーTの汎用性が良すぎて覚える必要が無かったって言うか・・・」

そう、イメージと魔力量次第で何でもできちゃうイーTのお陰で、特に覚える必要が無かった。

な、何だろう？この敗北感と言うか何と言うか……。

『10歳の魔法使い見習いでも、もう少し色々覚えてますよ？』

「ぐはっ！」

ウィンディの何気ない言葉が、僕の心にダイレクトヒットする。

うう、だって教えてくれる師匠なんていなかったし……覚えなくてもなんとかなったし。

でも何か負けた気がして、部屋の隅でいじけてみた。

『何でしたら、私が色々と教えましょうか？特に精霊魔法とか……』

』

「……？精霊魔法？」

『エレメンタルミサイルの様なものです。私から力を借りて使う魔法の事です。何気に基本は出来ているみたいですけど、大技は持っていないんじゃないみたいですし、私と契約しているのに水系統の魔法が無いなんてどうなんですか？』

「あ、いや……なんか面目無い」

そうだよ。一応ウィンディは水系統の人工精霊。

その契約者たる僕が水系統を使えないとか、そんなおかしな話は無いよね。

「じゃ、その……教えてくれますか？」

『ええ、勿論お教えいたしますわ。ソレと序でに時間制御魔法の方も見て差し上げます。精霊である私の方がそう言ったのの制御とかには精通してるでしょうから』

なんかトントン拍子に、ウィンディがいろいろと教えてくれる運びとなった。

勿論出来るのは仕事の後か休日程度だけど、それでも教えてくれる先生がいるのはありがたい。

『ふふふ、コレでかなめ様に私の事を“先生”と呼ばせることができるわあ〜』

「あ、またトリップ入った」

「ほっとけかなめ、一度トリップしたらそう簡単に戻って来ないから」

どこか遠い目をしている紅、どうやら何度も見た光景の様だ。チビをあやししながら、めんどくさそうにこちらを見ている。

「あ、そう言えば、ウィンディの教え方ってどんなんだろ？」

「……まあ主に実地だ。“習うより慣れる”だからな。ソレとかなめ」

「ん？なに紅？」

「死ぬな。俺が言えるのはそれだけだ」  
「……」

ゴメン、君の様子見ていると、どうも冗談じゃないみたいだから笑えない。

ウィンディはウィンディで、いまだ身もだえしている。

うーん、最初出会った時はもうチヨイまともだと思ったんだけど

『ああ！そして！そしてあんなことまで！！きゃ〜』

実体化が長く続いている所為で、人間の生気に当てられたのかな？  
にしては欲望が半端無い様な気がしないでもないような……。

「……で、あれはいつまでかかるの？」

「……知らん。長い時は数時間続くぞ？」

「まじで？」

「マジで」

『うふふふふ』

僕……ちよつと早まったかな？

何かそんな言葉が脳裏をよぎったが、すべては後の祭り。

そして今日もまた何事も無く？終わった。

さて、それから数日が経過した。

実際なにか起きることなく、僕はシエルさんの仕事を手伝う毎日を送り、今日はシエルさんがオフなので、自動的に僕もオフの日となった。

「精霊さん、お願いします」

「はい、良いでしょう。大分空気中の水を集められるようになりましたね」

「先生のお陰だよ」

『あら、お上手』

丁度良いので、ウインディに魔法を習う時間に当てている。

もともと制御は問題無いし、魔力も膨大な為、すぐに身体が覚えてくれるのはありがたい。

もっとも覚えられたのは基本的な水を操る方法くらいだけ。

「さてと、今日の所はこれくらいにして、今日ちょっとヴァルさんに呼ばれてるからそろそろ行くところか？」

『そうですね。行きましよう。紅さん行きますよー！』

「おう！わかったぜ！」

紅は剣の素振りを止めると此方へとよってきた。

そして僕らはヴァルさんのいるゴー研へと足を向けたのであった。



## 第39章

「出歩いて…落っこちて・第39章」

今日はオフの日を利用して久々に全員でお出かけ、しかもなんとダンジョンに来ています。

「うへえ、久々に来たけど・・・」

「またゾンビが増えているというかなんて言うか」

「新しく主が現れたのかも知れませんか」

「・・・と言っても、以前ドラゴンを倒したあのダンジョン何だけどね。」

「そう僕たちは懐かしのあの森にあるドラゴンが巣くっていたあのダンジョンに来ているのだ。」

「ウィンディは初めて来たけど、そこら辺は気にしてはいけない。」

「そう言えば漂う魔力と言うか妖力というか・・・」  
「濁ってるな。しかも随分強力だ」

「なんて言うのか、良く霊地とか呼ばれる様な廃墟のオカルトスポットに行くとする。そこで夕刻の薄暗い時間帯に廃墟の中に居るかの様な淀んだ感じだと言えば良いだろうか？」

「つまりは淀んでいると言う事である。」

「この辺は環境が良いですから、この感じからすると上位アンデッ

トかもしれません』

「ソレって吸血鬼とか？」

「だけど遺跡に吸血鬼とか、イメージがなんか違うぜ」

ゾンビの方は別段強くなったとかは無いらしく、以前と変わらずダンジョンの力で動いているようである。しかし、気配からするとゾンビ以外にも何か住みついたようだ。

これは用心して進まねばなるまい。初めて感じる気配が沢山いるのが解るからだ。

「しっかし、またココにくることになるとはねえ？」

「うん、まさかヴァルさんに頼まれた場所がココだったなんて」

実は今回、この遺跡ダンジョンに訪れたのは、オフの日を利用してヴァルさんにちょっとした頼まれごとをされたからだ。ちょうどヒマだったし、運動にも良いかなあって思って二つ返事で引き受けたのである。

ちなみにココまでは空を飛んできた。最近なんとか出来る様になったんだよね。

ITシールドボードに紅とニケツして・・・この場合ニケツとか言うんだらうか？

『たしか最奥の宝物庫から、ある物を探して来て欲しいんですよ？』

「うん、なんでも最古のドールがあるかもしれないんだって・・・で、研究したいから」

「とって来いって訳だ。つまりは簡単なお使いだな」

お使いとは言うものの、その実中身はかなりデンジャラスなお使

いだと僕は思う。

ちなみにドールとは人形の事を指すけど、この場合は魔法によって動く人形だと考えて欲しい。うーんどんなのかなあ？動くパペット人形とかだったら面白い。

でも最古のドールって言うくらいなんだから・・・藁人形とか？まさかね。

とりあえず入口付近にいたゾンビ達を、僕は威力を抑えたフレイルムブラストで火葬し、紅は気功で一瞬身体を強化した後、剣の腹でゾンビをホームランし、ウインディは指先から圧縮した水流を放ちゾンビを両断しつつ奥に向かった。

一応前に来たことがあるので、ある程度罫の配置は覚えているけど、主が変わった事で、もしかしたら新しい罫が設置されているかもしれないので、サーチをかけながら進む。

そして案の定

「うーん、槍とは古風な・・・」

「か、かなめ！？大丈夫か！？」

「なんとか隙間に入ったから無事だよー」

新罫が設置されていたりした。

なんか通路に穴が空いていたのは解ってたけど、まさか槍が出てくるとは思わなんだ。

サーチかけてたのに気がつかないなんて、何かしらの魔法処置でもされてたのかしらん？

ちなみに冷静に分析してるのは、怖すぎて現実を直視しなくなつたからです。

現在膝関節がガクガクブルブルと超振動を起しております。

………膀胱が空で良かったと思つた日であつた。

『この壁の色が少し違いますから、設置されたのは大分最近の様ですね』

「そついや以前来た時は、ココで大岩に追いかけられたっけ」

「あー、そついやそんな事もあつたなあ」

あんな某アグレッシブな考古学者さんみたいな体験をしたのは生れてはじめてだったなあ。

もつとも、普通はみんな初めてだろうけどね。

「しかしこの分じゃ何が設置されている事やら」

『私が先頭を努めましょう。本体を液化化させれば、物理的な罫は効果を為しませんし』

ちよいと心苦しいけど、彼女に頼むことにした。彼女は身体を液体にすることが出来る。

水系統の精霊ならではと言つか、精霊さんなら誰しも身体を自分の特性に似合つた姿に変えられるのだ。

風の精霊なら身体を空気出来るし、土なら土、火なら火つてな具合にね。

普段ウィンディが人の身体でいられるのは僕から大量のMPを持つて逝つて具現化しているからだそう。その構成を液体にすれば、物理的な攻撃はほぼ無効化出来ると言つ訳である。

この後は下に向かう階段に付くまで、適当にゾンビを相手にして

進んだ。

しかし、ココのゾンビも、レベルが上がっている僕達にとっては、もはや経験値にならない。

というか最近手帳の様子がおかしい。ステータスの表示がしにくくなってきているのだ。

まあ別段力が抜けるだとか、体に変調が出ているとかの様な症状は出て無いんだけど……。

「ん？なあかなめ、なんか“カラカラ”音が聞こえねえか？」

「……うん？ゴメン聞いて無かった。なんだって？」

ちょっと考え事をしていた所為で、紅が話しかけて来たことに気がつかなかった。

なんだって？カラカラ音がした、だっけ？

「……そんな音するの？僕には何も聞こえないけど」

「さっきから俺の耳にはカラカラ聞こえるぜ？それも段々近づいてくるような……」

うーん、僕には聞こえないんだけど、紅は耳が良いから聞こえるのかな？

警戒のアビリティで気配を感知してみると、確かに何か近づいてくる。

「この先、その曲がり角から、何か来る」

ダンジョン内で遭遇する“カラカラ”と言う音……なんとなく想像がつくけど、僕は音が聞こえてくる方へ顔を向ける。

最初に見えたのはとても細い手足、真っ白でまるで骨の様

カシャン、カシャン、カラカラカラ

いや、むしろ骨だった。鎧付きの骨がカラカラと骨を鳴らしながらダンジョン内を闊歩してる。

「アレはスケルトンだね」

『魔法で疑似生命を与えられたか、悪霊が憑依したのかは知りませんが悪趣味な事です』

僕の言葉に捕捉してくれるウインディ。

スケルトンは相変わらずゆっくりとこちらに向けて闊歩してきている。

まだこちらを捉えてはいないらしい、目とか無いのにどうやって周り見てるんだろう？

「とりあえず粉碎するか燃やすかしないと、永遠に戦いを止めない戦闘マシンだ」

「じゃ、ぶっ飛ばしていいのか？」

「むしろゾンビとそう強さは変わらないんじゃないかな？それに問題は別にあるし」

「ん？なんか問題あるのか？」

ソレはね？と、僕が説明しようとしたその時！

「あぶねえッ！」

ヒュカ！

僕がいた所に矢が突き刺さった。

紅がとっさに押し出してくれなかったら、背中に突き刺さっていた事だろう。

「……スケルトンの厄介な所は」

カラカラカラカラ

「その人海戦術も馬鹿らしく見える程の数だ」

後ろを見れば、通路を埋め尽くさんがばかりのスケルトン達がつてくるのが見える。

先程の矢はどうやらスケルトン達の中に、弓兵に相当するヤツがいたらしい。

見れば何体か弓を掲げている骨がいるのが見て取れた。

「ま、大抵のスケルトンの単体での能力は、普通の人間よりも弱いらしい。書物にはそうあった」

「……ハッ！これくらい敵がいた方が壊し甲斐があるってモンだぜ！」

『ふふ、ゴミはゴミです。幾ら集まろうが敵じゃないですね』

僕たちはそれぞれ戦闘態勢を取る。

僕はITで振り回しやすそうな錫杖を作りだし、紅は剣を抜いて気功術で強化する。

ウィンディは身体の周りに浮いているバレーボール大の水滴の数をドンドン増やしていた。

ま、倒しちゃった方が後腐れが無くて良いし、帰り道も安全になるだろう。

と言っ訳で

「火葬？氷葬？水葬？土葬？それとも珍しい雷葬とでも行くっか？」

「粉みじんに変えてやるぜ！」

『水は全てを押し流す・・・チリに帰る物は、きれいさっぱり流して差し上げますわ』

カラカラと音を立てながら迫る骨達、ただ目の前の動くものを壊す事しか出来ない哀れな骨達。

そして、そいつらとのバトルが

「エレメンタル・ミサイル！」

僕の魔法によって、切って落とされた。

放たれたのはエレメンタル・ミサイルの炎バージョン。  
当たった対象を炎に包みこみ燃やし尽す魔法である。

対人戦に使うには、流石にちよつと躊躇出来る魔法であるが、相手が人じゃ無いアンデットの様な存在なら遠慮することなく使用出来る。そして効果はかなり有効だったようで、複数放ったエレメンタル・ミサイルは付近に立っていた2〜3体も巻き込んで骨を灰へと変えていた。

「オラアッ！」

そして、スケルトンを数体燃やした事で出来た穴に、紅が壁を走



り抜けて降り立つと、剣を振り回すことでミキサーの様に骨を骨くずへと変えて行った。

『消えなさい、ウォーターアロー！』

その工程を3〜4回続けた所で、ウインディが水滴を圧縮させた水の矢を、いまだ残っている骨達に向けて放った。その数合わせて40発以上、しかも以前紅の模擬戦で使用した様な、威力を抑えたモノでは無く、キチンと魔力を練り込んだ魔法の矢である。

バシャバシャーン！

当然威力はケタ違いな訳で、水の矢にあたった骨達は纏めてトラツクに激突されたかのように、空中を舞っていた。衝撃で空中分解を起すほどのだから、かなりの衝撃である。

そして更にアクアストリングスで切り裂くという追い討ちをかけているのだからすさまじい。

「何だあ？ゾンビよりもろいな」

「そりゃ風化してるしねえ。唯一の怖さはその数の多さだけど、もうすぐ全滅出来ちゃうし」

既に大半の骨を灰にしたり屑に変えたり水で洗い流したりしている。

このペースで行けば、スケルトン達が消えるのも時間の問題だろう。

幾らこのダンジョンが広くても、無限に魔獣が増えると言う訳ではないのだから。

『それじゃ、数も少なくなりましたし、敵を利用して時間制御魔法

を試してみましよう。かなめ様』

「え、！？」

もう何体目かは忘れたけど、骨さんをエド錫杖で粉碎してたらウインデイがいきなりそう言ったので、僕は驚いた。まだ時間制御魔法は制御が難しくて……。

『あら、だからこそ実戦で鍛えるんじゃないやありませんか』

「いや、だけど……」

「諦めるかなめ、彼女は一度決めたら引かない。というか、そんな面白そうなことを逃すヤツじゃ無いだろう？」

『あら、随分な言われようですね？ソレは確かに面白そうだったというでもありますけど』

彼女はクスクスと笑いながらそう言いつつも、敵を倒して行く。

『かなめ様の力になる。それだけは確かですわ。というかやれ』

「……了解しました」

ある意味諦めた僕は彼女の言う通りに魔法を展開する。

紅とウインデイに足止めて貰い、とりあえず時間制御魔法の詠唱を開始した。

「 我は黄昏の調律師 ” 」

言霊使用により、周辺のマナ及び目に見えない程の下級精霊たちがざわめく。

「 我は虚構の先触れ 」

僕の中の魔力が空間に広がり、キラキラとした光の粉のようになる。

「 我は事象を選ぶ裁定者 」

詠唱が続くにつれて、僕の目の前に光で出来た魔法陣が展開されていった。

「 我はオータンを描くもの 」

繊細な魔力制御を行いつつも、僕は最後のスペルを口にする。

「 我は 悠久の時間の中の零れ人 」

そして世界から、音という音が消えさった。

別に色が消えるだとか、動くとか加速線が見えるだとかそう言った現象は起きない。

ただ、まるで世界が停止したかの様に、周辺から音が消えただけなのだ。

その中で自分は普通に動くことが出来る。もっとも相対的に見たら、今の僕は光の速さすら超えて動いている事になるんだろうけど、そこら辺は考えても解らないのでパス。

使えちゃうんだから、使わないと勿体無くて事でよろしく。

さて、無事に時間を止めた訳だけど、これにはかなの問題があったりする。

ソレは体力の消耗が著しいって事、魔力の方は普通の魔法より多いかなあって感じ（勿論普通の魔法使いなら気絶出来るほど）なのだが、何故か体力も消耗するのである。

ウィンディ曰く、空間圧縮による時間制御を無意識かで行っていたりするので、それに対する身体強化の副作用ではないかとの事。一体何のことなのかよくわからないけど、様は使えば疲労がたまると言っ事である。

おまけにどんなに魔力を込めても、今の僕では30秒しか時間から逃れられない。

だから今いそいで色々と下準備している最中だったりした。

やることは簡単、至近距離で敵を取り囲むようにプラストを撃ちこみ、その際ただの魔力の塊が浮いている状態なので、ソレごと敵をITで作った二つの巨大ボウルの中に閉じ込める。

後はそのボウルが壊れない様に、耐圧の効果を持たせておけば準備完了である。

ボコボコボンッ!!!!

そして30秒という時間が過ぎ去り、周りに音が戻ってくる。

目の前では中でブラストが暴れたのだろう。内圧でボコボコに変形したイーボウルが見て取れた。

中に突っ込んでおいた敵がどうなったかは・・・まあ見れば解るが粉々だろう。

「あうう・・・」

だけど、こつちもものすごく疲れた。

水泳で20分連続で泳いだ時程度だろうか？身体が疲労感で重たく感じる。

コレでまだ時間制御の初歩だって言うんだから、習得はまだまだ先っぽい。

「おお！？さつきまで後ろに居た筈のかなめが!？」

『どうやら成功したみたいですけど・・・そこに居るとスケルトン達がいっぱいよってきますよ?』

おう、そうだった。今の僕の位置は標的にしたスケルトンを挟んで反対側。

ちょうど敵さんのド真ん中に居るわけで、とにかく慌てて紅達の所へと戻る僕だった。

\*\*\*

さて、奥に行けば行くほど、スケルトン達との遭遇率が上がっていった。

曲がり角でぶつかった事もある。コレがラブコメだったら、そこから恋のお話と行きそうだが、生憎ぶつかったのはスレンダ―を通り過ぎた骨だけの魔獣である。ラブコメのラの字もありゃしない。

「そついや、何気に良い装備してるねコイツら」

『鋼製のブロードソードは標準で、鎧も鋼製。しかも槍とかのオプションを持っている個体もいますね。コレはボスはかなりの資産家の様で』

ふと見れば、高く売れるものではないが、需要があるので安くもない鋼製の武器と防具で武装している。かなりの量だから、持ち帰れたらお金になるだろうなあ。まあ問題は

「こつ言つのでって売れねえかな？」

「誰が運ぶのさ？」

「ソレもそつか」

なんか空間圧縮が出来る魔法とかあったら良いんだけど……。こんど調べてみようかな？何でも入る袋とか作ってみたい。

とりあえず、このダンジョン制覇したら、ヴァルさんに色々と教えてもらうんだ。

そう言えば、こつ言つた骨の敵もアンデットに分類されるけど、銀の武器とか効くのかな？

あーでも、銀の武器は吸血鬼とかそつち系かな？どうもそこら辺度忘れしちゃって。

まあとりあえず出てくる骨達を壊しつつ、奥へと進んだ訳だが・

。

「ねえ、なんか感じない？」

「何かいるみたいだぜ？ソレもココの連中とは次元が違うのが」

『まあ、勝てるレベルではあるみたいですが・・・』

もう少し進んで、下の階層に行く為の階段がある部屋までもう少しと行ったところなのだが、そこにつながる扉から異様な気配が漏れているのに気が付いた。

一応殆どがスケルトンの気配なのだが、その数が半端じゃ無い上、感じる気配のなかには同じスケルトンでもどうも上位種みたいなのがあるようである。

「警戒した方がよさそうだね」

「そうだな。景気づけに入ったら一発頼むぜ？かなめ」

『水系統を使つてくださいな。私もサポートしますから』

「わかった。それじゃ、行くよ！」

そして僕たちは、下へ行く階段へ続く部屋へと踏み入れた！

### 第39章（後書き）

\* 久々にダンジョンに連れて来てみたぜ。



## 第40章

く 出歩いて…落っこちて・第40章く

カラカラカラ

骨の擦れ合う音が、狭い部屋の中を木霊する。

カラカラカラ

狭い部屋に広がるのは、かつての兵達つわものたちの亡き骸。

カラカラ…カラ

そして兵達の首から落された髑髏が、床の上で止まった。

…とか言うとかツッコいけど、実際はスケルトン達とバトルしている最中だった。

「だあ！もう面倒臭え！」

「これは魔力の供給源やってるキングを先にやらないとイタチゴッコだね」

部屋に突入し、魔法で押し流してウィンディが斬り、紅が粉碎する。

それだけで済むと思ってたんだけど、この部屋には厄介なヤツが数体いた。

その名も“スケルトンキング”大きな骸骨さんである。

ここのスケルトン達はどうやら魔法で作られたスケルトン達らしく、魔力があれば復活出来るタイプの面倒臭い連中だった様なのだ。しかもスケルトンキングはバラバラにされたスケルトンでも、魔法によって再構築させる事が出来るらしく、お陰で倒しても倒しても敵が減らないのである。

粉碎しても破片さえ残っていれば再生させるとか反則だと思っただ。

おまけに複数のスケルトンキングがいるお陰で、どれか一体倒しても瞬時に再生されてしまう。

何と言う無限ループ、再生用の魔力もこの部屋にひかれた魔法陣から供給されている様だし、どうやら魔力切れを待つて殲滅とかは無理っぽい。どうしよう？

「おい！かなめ！プラストとかでどうにか何ねえのかよ？！」

「出来なくはないけど、コレ以上出力上げると、最悪この部屋崩壊するかもよ？」

「げ、マジかよ？」

うん、本当です。さつきからフレイムブラストを撃つても、天井がぱらぱらはがれおちてきているからね。流石に生き埋めにされたら助からないだろうから遠慮したいよ僕は。

というか、既にこの部屋の天井自体もろくなってきたみたいだし、下に用事があるからこの部屋を瓦礫で埋める訳にもいかない。さて、本当にどうしてくれよう？

「結局、スケルトンキングは何体居るんだ？」

「他のスケルトン達に紛れ込んでいますが、恐らく7体程かと。大きいのですぐに解ります」

ひーふーみーと・・・おお、見えているのは確かに7体か・・・。

シエルショットで同時撃ち・・・は壁とかまで攻撃するから崩壊の危険ありだしなあ。

かと言ってエレメンタル・ミサイルでもソレは同じか。

「純粋に火属性の攻撃でもあれば、灰も残さず焼きつくせるんだが・・・」

「そんなのレパトリーが今だ魔法使い見習いにも負けているかなめ様が覚えている訳無いでしょう？」

「ですよー、何だか落ち込みたいところだけど、現在戦闘中だから我慢する。」

「なら火を使わずに骨を粉碎させる？どうやって？風属性で吹き飛ばすは上記と同じでNG。」

「風の起すカマイタチで切り刻んでも再生される。」

「倒すには破片も残さないということが必須。」

「燃やせる火属性が一番楽なんだけど・・・イヤ待てよ？」

一応帰りとかの事を考えたら、倒すことが良いって考えてたけど、でも目的はこの下の宝物庫にあるお宝な訳で、別にココに居るスケルトン達を相手にする必要はない訳だ。

あーあ、全く大きな魔力を持つている癖に、必要な時に使えないんだから……。

「紅！下がってエーシールドボードへ乗って！」  
「おう！わかった！」

僕はエーシールドボードを作ると、紅を招き寄せボードの上に立った。

「ウィンディ、力をかして」  
『なにか思い付いたんですね？……どうぞ』

そしてウィンディの精霊としての力をかりて、魔法を編み込んでいく。

そこらに居る水属性の精霊さん達にも協力して貰い、僕の持つ膨大な魔力を水に変換した。

「いくぞ！マディストリーム！」

ウィンディの背中の水リングの様に、僕の背後を回る魔法陣から大量の水が放出される。

ソレらは部屋の中を水浸しにする程の量の水で、どんどん魔法陣が噴き出した。

その光景はまさにその魔法の名前の通り“濁流”である。

もっとも、そんな大層な名前が付いているが、只単にドバドバと

大量の水を垂れ流す魔法でしか無い・・・が、それは置いておく、せつかく覚えたのになんか悲しくなるから。

さて、こうしている内に、やがてその水は部屋の床に膝くらいまで貯まる程になった。

「よし！お次は」

僕は更に精霊さんに手伝って貰い、この部屋に散らばった水を少し操り、押し流されて壁の付近で固まっているスケルトン達に、まるでスライムのように巻きつかせた。

「後は コレ！」

ここまでくれば、後は仕上げを御覧あれってね！

僕は瞬時に、別の魔法を準備して展開する。

その魔法はサバイバルの時にお世話になったあの魔法。

「 アイシクルブラスト！」

青いレーザーが床一面に広がった水面にブチ当たり、衝撃で発生した波ごと凍らせていく。

水に絡み付かれている所為で上手く動けないスケルトン達を、そのまま氷の中に閉じ込めた。

「・・・よし」

スケルトン達の脅威は数だが、素体の力は全然強く無い。

だって筋肉もついて無い訳だし、ソレが魔法の力でなんとか人間並みの筋力を持っているだけなのだ。さて、普通の人間を氷の中に閉じ込めて、自分の筋力だけで氷を破壊して脱出しろと言われて出

来るだろうか？

「なんつーか、気味の悪いオブジェの完成って感じだな」

答えはNO、無理である。

壁付近に押し流され、大量の水の中に入っていたスケルトン達は、どこぞの猟奇殺人の如く氷の壁の中に閉じ込められていると言っ姿になっていた。

僕はそれを更に凍らせて、溶かされない限りは万が一にも出られないように補強した。

コレでとりあえず2〜3日立たないと、コイツらはこの氷から抜け出すことは叶わないだろう。

『さすがかなめ様、段々精霊の力の制御力も上がっていますね』  
「……すごく疲れるけどね」

がつつり魔力を喰われた拳句、体力的な方もがつちり持つて行かれた為身体が重たく感じる。

しいてこの状態を言い表すなら、シエルさんに毒もられた時の様な感じだろうか？

……その時のことを思い出してちよつと泣きたくなった。

まあお茶に毒を盛られるなんて最近じゃよくある事。

ご本人曰く毒では無く高濃度に濃縮された試作の魔力回復剤や起爆剤らしい。

ソレを僕にのませてデータを取って居るんだそう。

“最近良いモルモットが届いたから実験がらくねー”と言っていたのを聞き、涙で枕を濡らした事もあるけど……紅が慰めてくれたから問題無い、ウン。

『ですが、詰めが甘いです』

「ほへ？」

『ホラあそこ、下へ続く入口まで塞いでどうするんですか？』

「あ」

ちよつとトリップしてたけど、すぐさま現実に戻される。

ウィンディに示されて見た先には、大きな氷塊に包まれている下への扉が見て取れた。

どうやらそこまで気が回せなかったらしい。

これでは下の階に降りる事もままらないだろう。

「あう……どうしよう？」

『はあ、仕方ないですね。紅さん？』

「おう、なんだ？」

『剣でココの氷だけ砕いてください……他の所は壊したらダメですよ？』

「任せとけ、俺はそこまでへマじゃねえからな」

そして紅によって氷塊が壊され、下へと続く階段への扉が使えるようになる。

うう、頑張ったんだけど、なんか空振りした気分（実際その通りだが……）

とにかくココに居ても気味の悪い髑髏達しか居ないので、下に降りることにした。

部屋毎凍らせたからか、なんか空気が寒かったなあ。

久々にきたボスの部屋と言うか、以前ドラゴンが居て宝物庫へ続く道があった部屋の前に来ている。　ココは全然変わらないなあとか思っていたら、中から変な笑い声が聞こえて来た。

なんか部屋の反響の所為か、風が隙間を通る時の感じの声で気味が悪いのだが、この部屋の奥に用事がある為、今は逃げるワケにも行かない。

幸い膨大な魔力とウィンディの扱きのお陰で、ある程度のレベルの敵ならば負けることは無いと思う。

とりあえず、僕は自分が作った魔力回復薬を服用しておく。

コイツはシエルさんのと違って、キチンとした臨床データの元に造り出されたモノだ。

所謂、既製品と同じ製法で作られたヤツである。副作用は無い。僕はそれを飲んで、魔力を少し回復させた。

ちなみにこれ、小さな瓶にはいつているんだが、なんとなく僕の居た世界の栄養ドリンクに見えなくもない。

さて、少しは魔力も回復したので、そっと音を立てずに部屋の中に入った。

「ぬふふ！この部屋は最高だわさ！これ程高濃度に竜の魔力が残されておるとは！死んだのはごく最近かな？これならばこの魔法も上手く行くはずだ！」

どうやら中の人物？は有頂天になっているらしい。

入った事に気が付いた様子もない。でも一体何をしているのだろ



うか？

見れば床一面に何かしらの文様が描かれている事は解る。多分魔術文字か何かだろう。

さつき戦ったスケルトンキング達に魔力を供給していた紋様とも似ている。

たぶんさつきの魔獣達は今そこでバカ笑い真つ最中の人物によるものだろうな。

とりあえず気がつかれずに宝物庫の方に進むことにする。

幸い周辺には天井の一部が崩れて瓦礫が落ちている為隠れて進むことは容易だ。

なので紅、ウィンディ、僕のフードの中に居るチビに音を立てない様に指示し、僕たちは抜き足差し足でゆっくりと進んでいった。

所謂、“すにーきんぐみっしょん”ってヤツである。

「ぬ？・・・ああ！？ココの魔力には竜魂石が含まれておらんと！？ま、周りに落ちておらぬか！？」

なんかさつきからハイテンションだった人物が、更に煩くなった。竜魂石？って言うと、エル君にあげちゃったドラゴンから出て来た結晶の事だっけ？

それなら僕が回収してエル君にあげちゃったから、この場にはもうないだろうなあ。

なんかタンタンって音が聞こえるから、地団駄でも踏んでるのかねえ？

「・・・ない・・・ないのか・・・グスン。勿体無いのお。まあ良い、とりあえず」

ん？不味いこっちに近づいてくる！紅達ちよっと僕のそばへ来て

！早く！

先の人物が来るのを見て、僕は慌ててITボウル・インビジブルVerを発動させる！

「…………ちよつと前にネタに考えた光学迷彩が役に立つとはね。仕掛けは簡単、前も使った事があるITボウルの空間を歪曲させ、中のモノを見えにくくするだけの簡単な魔法である。」

空間歪曲については、時間制御魔法からの派生技みたいなもので、ソレを利用してみた。

時間と空間と言うのは密接にたらウンちゃらと書かれていたけど、良く解らない。

まあ使えるんだから良いんじゃない？

「ん？なにか物音が聞えた様な？」

少し身動きしたら音が聞こえたらしい。こちらに来たヤツの頭に「！」のマークが見えそうなくらい周りをきよるきよると見回している。

だがその距離なら、僕等を確認する事は出来ない。精霊さんに頼んでもつと解りにくくしてるからな！

もつとも近寄られたら一発でバレるんだけど、こちら辺は暗いからバレ無いかも知れない。

「…………自分でやっておいて、随分と弱きだわさ。まあ僕らしいけど。」

「ひそひそ（おい、これ本当に相手に見えないんだろうな？）」

「ひそひそ（知らない、実際使うの初めてだし）」

「ひそひそ（ちょ！なんでそんなの使ってるの！？）」

「ひそひそ（ウソウソ、冗談。何度か実験して、ある程度以上離れられたら本当に見えないらしいんだ）」

「ひそひそ（なんだ、そうなのか）」

「ひそひそ（コレ以上近づかれると、風景に違和感を感じてバレるかも知れないけどね）」

『ひそひそ（それよりも静かにしませんと、相手に気付かれますよ？）』

おっと失敬、僕たちは慌てて口をつぐむ。

ちなみに近づいてきた奴さんは、床にしゃがみこみ何かを書いては消している最中だ。

どうやら魔法陣の紋様を書き換えているようである。

しかし、随分とまあ複雑な術式だ事・・・僕には少ししか理解できないや。

恐らくかなり膨大な魔力を用いた儀式魔法なんだと思うな。

この部屋自体が元々魔力を逃がさない構造な為か、そこらじゅうに魔力が貯まっている。

少し淀んで下級精霊さんもえっちらおっちら見られるけど・・・。まあそう言った類の魔法には随分と相性がいい訳で。

「ククク、でもコレだけの魔力さえあれば、例え魔力の塊である竜魂石が無くても、我が長年の野望を成就できる！」

野望？野望って何だろう？ふと目の前でしゃがみこんで一心不乱に魔法陣の修正を行っている人物の言葉に、好奇心が刺激される。

どちらにしろ、奴さんが動かない限りこちらも動けないのだから、強制的に聞くしかない。

早い所やることをやって、この部屋を出て行ってはくれないだろうか？

まああの人物がココに住んでいると言うのなら話は別だが、どうも住む場所は別の部屋っぱいしね。この部屋は広すぎて落ち着かないのかもしれない。

しかし、これで“世界征服”的な野望だったら……まあ別にどうもしいけど

「コレで私の身体を大きく出来る！この身体になって数百年！長かつたわさ！」

『「ブツ！」』

「ツ！？だ、だれ？！だれぞそこにおるのか！？」

その時、とりあえず視線が魔法陣を向いている今の内に、ゆつくりと音を立てずに動いて、宝物庫の扉の前に向かっていたんだけど、その人物が言った言葉に、僕等は噴き出してしまった

「で、出てこないと我が魔法で薙ぎ払うぞ！」

「……あーまあ。聞くつもりは無かったんだが」

『まさかココであんな独り言を仰るとは思いませんでしたので』

なんか魔法を使おうとしている感じだったので、どうせ見つかるならと姿を見せることにした。

姿隠している状態だと、みんな密着しているので、固まって殺られる可能性も考えての事である。

こうやって姿を表せば、少なくとも三人の内の誰かに意識が行きやすい。

全員一気に全滅などは防げると言う訳だ。

しかし、まあ何と言おうか

「ううう……そこにゃおりえ！せいばいしてくれりゅ……  
噛んじやった」

今現在僕達の前に居らっしゃる人物は、ちんちくりんな身体をし

た子供だったのだから。

もつとも目の前の子供から感じる魔力の気配はかなり濃厚でそれだけでかなりの熟練者であると言う事がうかがえる。

だが、見た目はどう見ても子供な上、そんな存在が真面目に魔法陣を描きながら、言った野望が背を高くすることである。

これを笑うな言う方が難しいだろう。

「ッ！！我が名はグレット！偉大なる不死の魔法使い、アンデットの王リッチ」なり！我が野望を聞かれたからには生かしては逃がさん！」

仕切り直しと言ったばかりに、名乗りをするグレットさん？

とりあえず数百年生きてるらしいし、リッチと言うのも聞いたことがある。

魔法の研究は良く言われているように数百年や数千年規模の観測が必要な魔法とかも存在する。

到底人間の寿命では、そこまで生きられない為、魔法使いの中には身体に魔術的な施術を施し、死なない身体に造り変えることがあると言う。

リッチとはいわば魔法使いが自力でアンデットと化したモノの総称なのだ。

そうか、さっきのスケルトンもグレットの仕業だな？

リッチとはネクロマンシーに長けている事が多いらしいから十中八九そうだろう。

しかし何だ？この威圧感？今までこれ程のを感じたのは・・・クレアさんと初めて会った時位だ。

って事はこの人物・・・グレットはかなりの強者と言う事か！

「どうした？動く事も出来ないか？」

そういつて虚空に手をかざすと、グレットの手の中に杖が現れた。アポーツ？いや、魔力から具現化させた！？

「ツ！僕は　魔法使いの五十嵐かなめ！」

「俺はかなめの相棒の紅！」

『私はかなめ様と契約した人工精霊のウィンディ！』

相手の魔力と気迫に負けない為に、僕たちも腹から声を出して気合を入れる。

あの時笑わなければよかったとか少し思ったけど、今更遅いからね。

「ふん、例え魔法使いあいてでも容赦はせん！死んで我の下僕に加わるがいい！」

「じょーだん。僕はまだ色んなモノが見たいから遠慮する！」

「俺だって色々美味しいモノをまだ喰いてえからパスだ！」

『この二人についていくのが私の今の楽しみ。むしろ其方こそ気をつけなさい！』

グレットの問いかけに、僕等はそう答えた。

一触即発、どちらかが先に動いたら即戦闘開始だろう。

そして先に動いたのは

「はっ！よくぞ言った！リツチたる我と戦える事を光栄に思え！」

グレットの方だった。

僕たちは魔力が渦巻くグレットと対峙し、戦闘を開始した。



第41章(前書き)

うーん、むずかしい。



## 第41章

「出歩いて…落っこちて・第41章」

突発的に起こった戦闘、その理由は“野望を聞かれた”という些細なモノだが、己の持つ価値観とやらは人それぞれだし、人が戦う理由とはそう言ったモノの方が多い。

だが、価値観が違えば人はぶつかるのが世の常である。

そして、今僕の前でも、ホンの“些細”な事で生じた争いが起こるうとしていた。

「まずは小手調べという」

正直、戦いたくないのが本音である。

このダンジョンに来た目的は、ヴァルさんに頼まれた最古の魔導<sup>トル</sup>人形を探す事。

なので、この戦闘は本来なら回避されるはずだった。

「ハッ！偉そうに何様だつての！行くぜチビ助！」

「チ、チビ助とか言うんじゃないッ！」

「紅、あおらないの！幾ら本当のことでもね！ソレが礼儀ってヤツだよ！」

「お前が一番無礼だああッ！見てろおお」

でも、その野望がねえ…魔法で背を大きくするとかだったもんで…。

ソレでつい僕達三人は嘔き出してしまい、その所為で見つかったか……。

はぁ、間抜けすぎる。ソレで見つかってしまった自分がね。

僕はどこか抜けてるとは理解しているけど、コレじゃホントに只の間抜けじゃないか。

「現れる！我が元に集いし死屍達よ！無限の軍勢に吞まれ新たな死屍とかせ！」

『ん！？これは召喚魔法！』

「軍勢を呼び出す？……スケルトンか！？」

色々と考えたところで止まってくれそうな雰囲気じゃ無い。

安直かもしれないが、ここはやはり戦って相手を止めるべきだろう。

むしろ相手がやる気満々な為、こちらも手を抜けないのだ！

「くくく、倒しても倒れぬ軍勢に吞みこまれて、我が下僕となるがいい！さあ来い我が下僕！“戦う為に蒔かれた者達”（ウォー・スパルティ）！！」

グレットがそう叫ぶと、5つの魔法陣が現れグレットを中心にして回り始める。

そのまま魔法陣は線と線で結ばれていき、大魔法陣が展開された。

「ッ！なんて魔力！」

『流石は不死の魔法使い、周辺の術式から必要な魔力を集めていませ』

僕よりか……いや、僕と並ぶ位の魔力が渦巻いていくのが解る。ピシピシと遺跡の内壁にひび割れが生じるくらいの振動が魔法陣

から発せられていた。

しかも、目の前の存在が持つ研磨されている魔法技術は、恐らく僕よりもずっと上である。

……コレは本気で不味いかも知れない。

【【【カラカラカラ】】】

「げ！またあの骨かよ！」

『スケルトンキングも混じっています！気をつけて！』

魔法陣を通して行われる召喚によって、不死の兵士……。

いや、疲れる事のない兵士たちが再び僕達と対峙する。

とりあえず、することはアレで良い……

「よし！ブラスト！」

まずはブラストでけん制、敵の動きを止めてやる。

その際に紅が前列のスケルトンをまとめて数体叩き斬った。

当然キングの力で、スケルトン達は再生されるけどソレが狙い目。

「ウインディ！」

『はい！』

魔力を用いてスケルトンキングはスケルトン達を再生させる。

だがその間スケルトンキングは動かなくなるのは、さっきの戦闘で見えていた。

つまり仲間の再生中は絶大な隙が生じていると言う事だ！

『アクエリアス・ハンマー！』

ドパアアアンツ！

そして襲い掛かる大量の水、水滴が意思を持っているかの如く、スケルトン達を包み込む。

さて、ここまでくれば後はご理解いただける事であろう。

「アイシクルブラスト！」

カキーン！！ズズン！！

凍らせて閉じ込めるだけです。フリージングして鮮度をそのままにっね。

敵は魔力がある限り再生しちゃうし、それなら凍らせて閉じ込めた方が早い。

さっきと同じ戦法だけど、シンプルな分効果はある。

「あ、あらー……」

なお、それをみてグレットは口をあぐりと開けて驚いていた。

なにせ先ほど召喚したスケルトン達は、巨大な水滴を凍らせた氷山の様な氷の中に閉じ込められている。流石にこれには意表をつかれたらしい。

「ぼつつと突っ立ってんじゃねえ！」

そしてそこに紅が飛びこんだ。至近距離での加速なら、僕よりも速さは上の彼女だ。

既にレンジに捉えられたグレットは避けられない……のだが。

ガン！

「イツツウー！」

何かバリアみたいな壁に防がれた！魔法障壁か！？

思いつき振りかぶっていただけに、その衝撃はかなりのモノだったらしい。

紅の手が、剣を持つ手が震えている。

「ふん、やみくもに突っ込んでくるとは　お前はバカか？」

「なに？ぎゃんっ！」

『「紅！」さん！』

その時、グレットの足元から骨の腕が伸び、ソレが握る剣が紅の腹部に打たれた。

反動で後方に飛ぶ紅、気功術のお陰で怪我はしていないけど、入ると思った攻撃が防がれた事に驚いていた。魔法障壁・・・厄介だな。

「我は魔法使い故、懐に入られると弱い・・・だが、当然ソレの対策くらいした」

「ソレが魔法障壁とさっきの・・・」

「ああ、我の忠実なる下僕達だ」

そう言つと、先ほど紅を吹き飛ばした腕が、ゆっくりと魔法陣から現れる。

「死体は良い、煩わしい事もしがらみも何も無い。ただそこにあるだけだ」

グレットはそう呟きながら、呪文を詠唱し新しい魔法陣を展開した。

そして、また魔法陣から4体のスケルトン達が現れた。

しかも、今まで相手していたのとは明らかに装備が違う。

大きさもスケルトンキングより小さいけど、無駄な動きを全然し

ていない。

これは一体！？

「ふふふ、英雄とまでは行かなくとも、こ奴らは全員かなりの力を持った者たちだった。最も我に戦いを挑んで、いまはこうして忠実なる下僕とかしたかな」

「負けるとそいつらの仲間入りってワケか・・・」

「ほう、犬の癖に察しが良いな？ 正解者にはこ奴等の相手をして貰おうか？」

「ゲー！？」

グレットがそう言うと、新しく召喚されたスケルトン・・・區別する為にスケルトンエリートとでも呼称しよう。そいつらが束になつて突撃していった。

僕等と少し離れていた事が災いし、完全に分断されてしまう。

「くー！ウィンディ！」

『はい！援護しに行きます！』

紅の援護の為に、彼女の元へ向かおうとしたが、その瞬間

ズザザザッ！

いきなり僕の目の前に何かが複数飛来し、床の上に突き刺さる。

どうやら槍の様な魔法弾をグレットが放ったようだ。後一步でも前に出てたら串刺しだったよ？！

「どこへ行く？貴様の相手は我だろう？」

くッ! どうやら分断するのが目的か!

紅の方は奮戦してるけど、流石に4体1は多勢に無勢か……。

「ウインディ! 先行って!」

『は、はい!』

僕はグレットから目を離さずに、ウインディに紅の援護に向かわせた。

グレットは止めるかと思ったのだが、今度はそれをしなかった。何でだ?

「おやおや、せっかく精霊の力を借りれると言うのに」

「僕だけだつて戦えるから問題ない」

「ほう? 言いはるの。さて、精霊と契約した人間の骨は、どんな魔獣と化するかのう?」

そうグレットが言った瞬間、ゾワゾワとした感覚が、僕の背筋を走る。

いままでこんな感じたことが……いや、一回だけある。

この感覚はギルド所属のドラゴニートのギズボンさんと、初めて対峙したあの時とそっくりだ。

獣じゃなくて、知性を持つモノが出す殺気とでも言えばいいんだろっか?

でも、ギズボンさんと対峙した時よりもずっと強く感じ取れる。強者で知性を持つ敵が放つ殺気か……ちょっと……怖いかな……。

「……ほう、怖いのか? 御同輩?」

「え？」  
「手が震えているぞ？」

そう言われ、思わず自分の腕を掴む……別に何ともなっていない。

見ればニヤニヤと口角を釣り上げてこちらを見ているグレット・遊ばれた！

「我と対峙する輩だろうから、それなりに覚悟はあるのかと思ってしたが……とんだ鼻垂れ小僧も紛れ込んでいた様だな？」

「はあ？えつと……覚悟ですか？」

「一々敵の言葉に惑わされるな、このたわけめが。全く かなりの魔力を持っていたから、我の下僕にふさわしいかと思ったのだが、これは勘が外れたな……つまらん相手だ」

途端、場の雰囲気が変わった。

それは蔑みと憐れみと……それと、見下した感情。

僕はいま、目の前の相手に完全に舐められている？

ガキだと思われている？ あそう。

「……随分と露骨な挑発だ。なんか逆に冷静になったよ」

「おや？若いから今ので少しは逆上するかと思っただが？」

そうは言いますがね？そこまで露骨にいわれると逆に冷静になれるわ。

「……ガキだつて事くらい理解している。覚悟？そんなもの元から持って無い。今の僕に出来るのはこの尋常じゃ無い魔力に任せただけだし、今も現状に流されてるだけさ……で、ソレが何？」



元々この世界に来たのはほぼ偶然、命のやり取りとか何ぞ、食べる為の狩りとかは別として、今の今まで全然考えた事も試しもなかったさ。そんな事しなくても、僕は力が使えた。

だからソレを使つて、生きる為に今まで戦っていたにすぎないのである。

僕だつて、まだ人生何もしてないのに、そう簡単には死にたくは無いからね。

大体、人間一人ひとり全部が、戦いとかに覚悟持つて挑んでる訳じゃないでしょう・・・？

それに覚悟だなんて言葉は、軽々しく使つていいモノじゃ無い。

迷いがあるのに、覚悟を決めたなんてどう考えてもウソでしか無いからだ。

ソレなら、迷いがある間は覚悟は無いと僕は言う。ソレはウソにはならないから。

僕だつていまだに生き物に手をかける時はとてもイヤだ。

盗賊を相手に戦つたつて、それは人間を殺すことにかわりは無い。でも倒さなきゃ自分が死ぬなら倒すしかない。

そこにあるのは覚悟云々よりも、必要だからそうしたと言つ理念である。

覚悟を決めていたとかなんて、後から幾らでも理由付けは出来るのだ。

だからこそ、僕はこの世界に来て最近思う様になったのだ。

覚悟したなんて軽々しく使つちやいけないと言つ事を・・・。

「僕の目的は小さくても良いから家をもって、のんびりと日々を過ごす事、魔法の習得だって面白い。色んな人との付き合いだってある。覚悟が足りない？元から覚悟なんてしてないから良いんだよ」  
「……黙っておれば、好き勝手を言いおってからに」

どうやら覚悟も無しに戦いに応じたことを、自分を格下に見たと捉えられたようだ。

だが僕はここではつきりと言うが、そんなつもりは毛頭ない。  
本当になんにも考えずに生きていたから、覚悟なんてして無かっただけなのだ。

なんか色々和不味い様な気がしなくてもないが、のんびりと生きる以外に目標とか立てて無いもんね。そんな目標に命のやり取りの覚悟なんて、普通含まないし。

「あら？君からすれば僕の方こそ取るに足らない存在なんでしょう？だったらソレで良いじゃないか。人の価値観なんて人それぞれ、己の信じるままに戦うだけでしか無い」

とりあえず、冷静な判断を落させる為、適当にあおって挑発してみた。

するとグレットの額に、目で解るくらいの血管が浮かんだのが見て取れた。

本当に長い事生きたリツチなんだろう？妙に沸点が低い様な気がしないでも……

「くくく、良く言った。もう手加減は無しだ。このたわけめ」

「手加減なんてしてたのかい？」

「……は！行くぞ小僧！」

「にゃ！？IT大盾！」

いきなり無詠唱で、さつきと同じ魔法弾が放たれる。  
慌てて大盾で食い止め、グレットが居た場所を見るが

「いない！？上か！」

「おそい！“穿て！”シャドウパイク！」

そして黒色の槍の様な魔法弾が、更に大量に現れて視界を塞がれる。

「ちい！なら！」

ソレらが放たれそうになる瞬間、僕は盾を維持しながらシエルシヨットで対抗する。

白と黒の激突、圧縮魔力の結合解除により爆発と閃光が視界をまた遮った。

周囲に爆風がふきあれる

「ふっ！小僧！ヤルじゃないか！」

「褒められても嬉しくないけどね！」

あの程度の魔法じゃ大盾は破れないけど、どっちにしるじり貧になつてしまふ。

あちらさんは外部から供給する元があるから、まだ魔力に余裕があるみたいだけど、こちらは魔力はあるけど、先の戦闘とかで大分疲れが出てきている。

体力の方は休憩入れないと、手持ちの薬じゃ回復出来なかったからなあ。

「ほつれ！ポーンハンマー！」

「つと！やば！」

お次は巨大な骨の拳が魔法陣から出現し、接近してくる。  
・・・一体何の骨何だろうか？大きさからすると巨人系？

ドゴーン！

「こら貴様！御同輩の魔法使いなら避けるんじゃない！当たらないだろう！」

「ンナ無茶な！」

案なので殴られたら、潰されちゃうよ！だから僕は絶対避けるね！  
だけど、もう体力がないから、ちよつと不味い。

あーもう、最近研究ばつかだったからなあ。

もう少し身体動かしておけばよかった！

「ちい！（“我は黄昏の調律師、我は虚構の先触れ”）」

「防ぐだけじゃ、我は倒せんぞ！」

ズガガガン！

シャドウパイクの魔法が大盾に突き刺さる。

それも一本じゃ無い、何十本という魔法の槍が突き刺さっている  
のである。

普通なら対象にあたれば消える魔法なのに、状態維持できるとか  
どうよソレ？

「・・・（“我は事象を選ぶ、我はオータンを描くもの”）」

「どうした？先ほどからダンマリを決めて？何を企む？」

「企みを考えてるんだから邪魔しないでよ」

「ほっ！それは悪かった　なあッ！」

小声で詠唱して、ソレを維持しながらの問答をするという・・・。

今まで調理をする中で魔法を鍛えていなかったら出来なかった芸当を行う僕。

だが、戦闘中だからこそ、相手は待つてくれなかった。複数の魔法の槍、僕は詠唱を途絶えさせないよう気をつけて大盾で防御した。

「小僧が何を企むか知らんが、もう倒させてもらおう！」　きたれ！オイングスの槍」

そしてグレットを中心に、膨大な魔力がその手に収束された棒状魔法陣に呑みこまれていった。魔力を得るにつれて、魔法陣が紅色を宿し始めて行く。

詠唱全部は聞えなかったが、恐らく早口の高速詠唱で組み上げた奥義魔法だ。

まさか、シエルさんの奥義ティルフィングみたいなものなのか？！

772

「ちい！エレメンタルミサイル！」

「無駄だ！精霊が力を貸していない精霊魔法何ぞ見かけただけだ！」

詠唱を中断させる事が出来ないものかと、魔法弾を連発するが、目の前のリッチの持つ強力な魔法障壁に阻まれて全然攻撃が届かない。

今の僕の切り札である魔法の詠唱中だから、無詠唱で出来る魔法じゃ……。

だが、そういうしている内に、どうやら時間切れになってしまったようだ。

「魔法ごと穿て」ガ・　　ジャルグツ！！！！」

そして、深紅の魔力光を伴った、伝説の槍の名をもつ魔法が、僕目掛けて放たれた。

深紅の魔法の槍は針路にある魔法弾を消し飛ばして、僕が展開していた大盾にブチ当たった。

ヴウアアアア

一瞬の均衡、だがそれはガ・ジャルグの持つ魔法効果により一気に崩されていく。

ガ・ジャルグの纏う深紅の魔法が、僕の大盾を浸食し食いちぎって罅を入れていった。

そう、ガ・ジャルグの持つ効果は　魔法の無効化。

「　ッ！（「我は　悠久の時間の中　）」

僕は急いで、だが慌てずに、きっちりとスペルを詠み、術式を組み上げる。

僕の造る大盾の防御力は、最近ウィンディの訓練のお陰で上がっているが、それでも解る。

もう後数秒も、この盾が守る力を持つことはできないと言う事を  
そして。

ズガアアア　「　」　の零れ人”」

深紅の槍が大盾を貫くのと、僕が詠唱を終えて魔法が顕現するのと

はほぼ同時だった。

眼前に迫る槍の切っ先が、あわや僕の胸元に突き刺さるかと思った瞬間！

ピタッ

「ま、まにあつたあゝ」

深紅の槍の切っ先が、僕の胸ポケットの辺りで、軽く刺さって停止したのを見て、僕は止まった世界の中で思わずため息を吐く。危うく串刺しとなる所だったんだから、ため息の一つくらい出ちゃうよホント。

まあそうやって驚きながらも、僕は身体を動かした。

いそいでこの場を離れて、色々と仕掛けをしなければ・・・30秒は長い様で短いのだから。

僕はグレットのすぐ下に立ち、それぞれのブラストがちょうどグレットを挟み込む形で相殺出来る様に、勘を働かせて複数のブラストを配置させていく。

魔法による挟撃、それが今僕に出来る奥義みたいなモノである。

もつとも、すさまじく魔力と体力とMPと精神的なモノを疲労させる上、

種を明かせば奥義とも呼べない稚拙なモノだから、奥義だなんて死んでも呼べないけどね。

アアアンツ！

同時に4個出しながら展開し、なんとか20個ちかく配置を終え

た所で、僕の時間魔法の効果は切れてしまった。あ、あれ？まだ20秒も経って無いのに何で？

ってそうか、もう僕の体力の限界って事か・・・身体が動かないぜ。

「 ははは！ バガガガン！ はあーっ！！??？」

僕を倒したと思い、口角を歪め思いつきり笑っていたグレットだったが、

僕が一瞬で逃げ去っていたことと、魔法障壁を揺さぶるブラストに驚きの叫びをあげていた。

そして

「オガ！ゲゲ！のぐう！」

時間が元に戻り、解放されたブラストによって不意をつかれたグレットは打ちのめされて行く。

魔法障壁も、流石に全方位からのブラストの直撃には耐えきれなかった様だ。

先の深紅の魔法槍が当たったと確信して気が緩んだのもあるんだろっ。

最初のブラストが当たった時に、バリンってガラスが割れるかのような感じがしたもんね。

「んのおおおお！！！」 ドガン！ガラガラガラ・・・



そして、最後のブラストによって吹き飛んだグレットは、壁に叩きつけられて瓦礫の中に沈んだのであった。とりあえず

「も、もう動けない・・・くた」

僕は体力の限界で、その場に倒れ込んでしまった。意識はあるけど身体が動きたくないと思鳴を上げている。

スケルトンエリート達も制御者が気絶した事により動かなくなつたので、

慌てて紅達が近寄ってくる所を見つつ、僕は横たわっているしか無かったのであった。

## 第42章（前書き）

\* 今回の小説では初めての、敵の内心を描写しています。

そう言っのがイヤという方は、ブラウザバックお願いします。

そう言っのがOKと言っ方はお進みください。

ソレでは本編をどうぞ。

## 第42章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第42章 ↓

なんか地下遺跡に巣くっていた敵さんであるリッチを倒した僕達。倒したと言うモノの、正直ギリギリだった感は否めない。

紅は傷だらけ、ウィンディも貯蓄していた魔力を消耗している。

僕に至ってはこの遺跡に来て連続して使用した時間制御魔法の所為で、

体力を限界まで使ってしまったようで、一応意識はあるんだがしばらく満足に動かせそうにない。

しかも、なにかが抜けて行くような感じもしないでもないんだけど… 気のせいかな？

それはさて置き、僕たちはグレットと名乗ったリッチという不死の魔法使いの怪物を倒した。

…と、言う風に成るのだろう、一応の建前で言うのなら。

もつとも、相手はなんか子供の様に背が小さい女性… というか女の子である。

リッチというのは、此方の世界においても、強大な力を欲した魔法使いが、

所謂外法を用いて自らの肉体をアンデット化させて不死へと至った者の事を指すらしい。

だが、ちょうど僕の隣で気絶したままウィンディによって縛られ

ているグレットは、アンデットには全然見えない。

血の気が通った肉体、生氣あふれる表情、

身体のどこにも欠損の様な所は無く、むしろ身だしなみもきつちりと整えられている。

こんな所に居らず、またあの様な野望さえ気かなかつたら、

町で出会ったとしても只の魔力が高い人間という程度でしか認識できないと思えるほど、美しい身体をしていたのだ。

あ、勿論変な意味でじゃなくて、イメージしたアンデットとかと比べたらという意味である。

『ふう、ようやく供給用魔法陣を削り終えました』

「流石はどんくらい昔からあるか解んねえ遺跡だぜ。ミスリルで出来た剣がデコボコになるかと思っちまったぜ」

すこしばかり彼女を観察していたら、紅達が戻ってきた。

彼女たちには、グレットが目を覚ました時にいきなり攻撃してこない様に、

遺跡の中に付けられた魔法刻印を解除しに行つて貰っていたのだ。

どうもあれほどの魔力を扱う為に、彼女はこの遺跡にかなりの術式を仕掛けたらしく、

そこから魔力を供給していたのである。

だから、ウインディ達が現在動けない僕の代わりにソレらを解除しに行つたのだ。

術式の探知はウインディが出来るので、ウインディが探し出し、それにどんな呪術的トラップがあるか解らないので、壁ごと刻印を紅に削つて貰つたと言う訳だ。

こうしておけば、仮にグレットが目覚めても、いきなり大魔法で襲われるという事はない。

少なくとも、行使する為に必要な魔力が無ければ術は使えないのだから、良い方法だとはおもう。

正直またあのレベルのバトルをする気にはなれないからね。

「・・・ツ！うう」

「ん？ 寝言？」

ふと気づくと、お隣で寝ているグレットが少しうなされていた。

どうも夢見が悪い模様で、眉間にしわを寄せて、歯をギリギリと鳴らしている。

ふむ、リッチになる前は元は人間だって言うし、何か辛いことでもあったのかねえ？

そこら辺は僕等には解らないとだから、どちらにしろどうしようもなかった。

「うぐぐ・・・」

「おうおう、随分とうなされてらあ」

『かなめ様、もしかして何か呪いでも掛けたんですか？』

「いや、そんな事する力無いし、というか呪術関連はまだ習得して無い」

『あ、習得するきはあるんだ・・・』

そりゃ魔法関連は面白いから、色々習得してみるつもりだよ？

ソレはさて置き、本当に苦しそうにうなされてる。

ホント、どんな夢を見ているんだろうかねえ？

S i d e ? ? ? ? ?

夢を見ていた、懐かしくて、暖かくて、忌まわしいあの夢を・  
・・。

『 ちゃん！一緒に遊ぼうよ！』  
『 ・ ・ ・ ・ ・ うん 』

小さな頃一人で居ると・ ・ ・ 近所の孤児の子に声をかけられた。

『 これ、なんか珍しい石、きつと魔石だと思うから ちゃん  
にあげるね？』  
『 ・ ・ ・ ・ ・ うん、ありがとう 』

それはずっと昔の事だ。霞が掛ったかのようにおぼろげだが、  
今でも思い出せる。

『 へえ！ ちゃんは魔法使いなんだ！？すごい！』  
『 ・ ・ ・ ・ ・ へへ 』

何時も魔法書とにらめっこ、することは魔法の特訓、上手く

言っても次の特訓。

『ねえねえ、                   ちゃん？魔法使いつて私でも成れるかな？』

『……努力次第だとおもう』

何か上手くいつても、褒められる事は無かった日々。

何時しか感じた憤りを解消する手段を、自分は魔法の研究や鍛錬以外に見いだせなかった。

『ねえねえ、この構成見てくれない？どう思う？』

『……ここが違う、ここは複数のラインを引いて安定させないと危ないよ』

でもそんな日々が続くある日、自分は友と呼べる子と出会えた。

『やた！ついに私も魔法使いなのね！やっと                   に追い付いた』

『わ！』  
『……おめでとう』

1人は嫌だったから、話し相手がほしかったから……。

何時しか魔法使いとなったその子と、友達となれた事に後悔

は無かった。

『見てみて！』

！私、王立魔導研究大学の研究員になれたわ

『！』  
『……すごい、流石だね』

何時しか、自分たちは成長し、お互いに研究に没頭する日々。

だが、友情が果てる事は無く、良く一緒に遊んだのも覚えて  
いる。

『 …… 私は新しい魔法理論に基づいて、魔導機械を作ってみ  
たの』

『これは……凄い、周囲の魔力を用いて動くんだ？……きつと  
皆の生活が楽になる』

だから、その時は、まだ、あんな事になるなんて思わなかつ  
た。

『 …… 以上が、研究所事故の詳細です。彼女の家族は昔に他界  
してまして、貴方に伝える様にと伝言が……一応遺体は引き取れ  
ますが？』

『……うそだ……うそだよね？』

『



その日、自分は友を失った。それ以降の事は良く覚えてはいない。

ただ、彼女の遺体を引き取り、自分は何かに取り憑かれた用に“ある研究”に没頭した。

『 …… 4属性は全て揃った。血も肉も揃った。術式も安定可動中…… もうすぐだよ』

人の道を踏み外した研究の一つ、魂の固定と強化、そして器の製作。

『 もうすぐ…… また一緒に遊べるよ？』

今はそれほどではないが、自分の居た国では研究が禁じられていた魔法だった。

『 …… 禁術、アーノウン ナ ペティヤーノン』

当然、どんな物語にもある通り、その行為は失敗する。

なんて事はない、術式に綻びがあり、それに気がつかずに敢行した己の所為。

使った術式が突如反転し、自らに襲い掛かっただけの事。

『・・・ツ、彼女は・・・？え！？あ、ああ』

気が付けば、反転した術式で彼女の遺体は消え、自分と融合するに至った。

皮肉な事に彼女がもう死なないように色々な禁術を用いた為、死ぬことが無い身体・・・おとぎ話の怪物であるリッチと同じ身体と成っていた。

『違う・・・こんな事したかったんじゃない　また会いたかっただけなのに・・・』

唯一違うのは、理性を保てる術式を持たせてしまった事。

リッチは己の研究に必要なない思考は切り捨ててしまう。

だが自分は偶然に不死と化した器に、人間の精神を入れてしまった。

『　　！外法魔法の違法研究！人体実験！死体略取の罪により』

貴様を捕縛する！」

『！！』

そして、人の道を踏み外していた自分には、追手が差し向けられる様になった。

自業自得と晒いたければ晒えば良い、当時の自分に彼女以外は無かったのだから。

まさか・・・自分が彼女の肉体と同じとなり、若返るなんて思わなかったのだから。

いつしか時は流れ、私がかつて居た国は滅亡してしまった。

それと共に、リッチへと至る外法も失われたが、私には関係ない事だった。

だが“理性をもった生きたリッチ”つまりは不老不死としての時の権力者に追われる日々が待っていた。

そっとしておいてほしかった自分は、追手をことごとく排除していった。

そして、そうやって追手を排除した事で、いつしかおとぎ話の怪物リッチは実在するという噂が、いろんな国に伝わって行った。

不死の魔法使いリッチ・ザ・グレット……何時しか、それが自分の名前となっていた。

そして、ここまで夢を見た後、自分は……我は現実へと引き戻されていった。

自分の犯した罪の記憶というものは、いつ見ても嫌なモノだと思いつつ、我は目を覚ました。

……

……

……

「……いつつ？身体が動かない？」

「あ、気が付いた？」

「な！貴様！この水で出来た縄を解け！」

そして、起きて最初に見たのは、何故か自分を倒した男が、すぐ横で横たわっているという無防備な状況だった。

幾ら縄で縛ったと言っても、魔法使いを放置するとは何事か？

しかもあまつさえ、その隣に寝そべるとか……常識的におかしい。

そのあまりの無防備さに、此方が何故か頭痛を感じたのは気の所

為では無い事だろう。

自分を倒したヤツが、ここまで阿呆だとは、正直認めたくなかった。

S i d e o u t

\*\*\*

S i d e か な め

どうやら目が覚めたらしい。ものすごく怒りの目で僕を睨んでます。

もっとも、ウィンディの水で縛られているので、身動き一つ取ることが出来ない。

さらにもし魔法をつかおうとしても、ウィンディが感知して妨害するだろうから、魔法は使えない事だろう。

ん？どんな妨害かって？ソレはまあ実に簡単な方法で

「うひゃひゃひゃひゃっ！！！！？」

「あ、魔法使おうとしたんだ？」

「き、きしゃま！いったいなに！？ふひゃっ！？」

いきなり笑いだしたグレット、良く見ると彼女の身体に巻きついている水の縄の形状が少し変化しており、簡単言えばちいさな手の平が沢山現れているという状態である。

あーまあ簡単に言いますとですね。魔法使おうとすると

「ヒーツヒツヒツヒー!!」このナワをほどひえーっ!!」  
「ウィンディ、少しくすぐるのやめて、グレットがなんて言ったか解んない」

『十分解りますよ？ナワ程ケと言っています』

その手の平達があくすぐりを仕掛けると言うものです。

魔法の詠唱には結構集中力がある為、

ソレを阻害されると魔法が発動しないのは古来からの鉄則でもあるので、

ソレを利用していただきました。

ぶつちやけ、触覚が無かったらどうしようも無かったけど、

魔法を喰らった時や壁に叩きつけられた衝撃で気絶したところを見ると、

触覚もあるみたいなのでやった。後悔はしていない。

「とりあえず、用事が済んだら出て行きますから」

「はあはあ、だったら早く出ていけ消えろくんこの痴れ者が!」

「はいはい・・・というかもう少ししないと動けないので勘弁」

「なにぃ!?! だったら今の内ッ!! きやははは!?!」

「あ、まったくすぐられてるぜ」

『はい、悪だくみはだめですよ〜』

尚、この後何回かくすぐられ、いい加減学習したのか大人しくなった。

うらみがましい目はそのままだったけど、いきなり魔法を撃たれるよかマシである。

そうこうしている内に、なんとか立てるくらいには体力が回復し

てきた。

「……うん、一応歩けるかな」

「おいおい、大丈夫か？かなめよお」

「まあ只単に疲れただけだしね」

しかし、おかしいな。

何時もならこれくらい休めば魔力も回復するんだけど……。  
普段よりも消耗がはげしかった所為なのかな？

「ま、一応動けるんだし、宝物庫の方を見に行こうぜ？」

「あれ？さつき見て来たんじゃないの？刻印探しにさ？」

『アツチの方には反応がありませんでしたので、まだ宝物庫には入ってませんよ？』

「ま、そう言うことだ。考えてみればお金になるもんばっかだったしな」

「あー！そうだった！」

考えてみればこの宝物庫のお金使えば家が建ったのでは？

……。今更過ぎて少し目頭が熱いけど、気にしない気にしない。  
い。

とにかく、久々の宝物庫を開けてみようかと思っただけど……。

「あれま」

「鍵が変わってやがる」

以前のカギとは違い、大きさ的には2？ペットと同じ様な大きさのドラムが扉に付いていた。

しかも、そのドラムには幾つかの数字が刻まれており、決まった数字を入れる事で解除される様である。

「……どう見ても、良く自転車の鍵に付けるアレとそっくりである。」

「コレ、もしかしてグレットが付けたの？」

「……」

『だんまりですか？（にやり）』

「ひっ！あ、ああ、そうだ。我が付け変えた。そして番号は我しか知らん」

「教えてくれる訳……ないよね？」

「ああ、もう価値もないとはいえ、お前らには教えない。例え擦られてもな！」

「際ですか……ふむ、どうしようかな？」

「多分そう簡単には教えてくれないだろうし。」

「たらこの扉」

「お、良く見

「こうなったらシエルさん特製のお薬を！」

「……と行きたいが、流星にもってないしな。」

「の石なんじゃねえか」

「なんだ、只

「かと言ってこのまま黙って引き下がるって訳にも……」



というか

「せーのっ！」

「で、紅はさっきからなにを  
「ドッセイ!!」

どごーん!!!

ギー・・・ボタン

「オシ！開いたぜ！」

『「」・・・』

あー、とりあえず説明を入れるとするなら・・・まあ解ると思  
うけど。

紅の気功術のこもった拳の一発で、宝物庫の扉がぶっ壊れた。  
いや、確かに鍵が掛かっては居たけど、力づくとか・・・。

「おい、御同輩」

「・・・なんですか」

「我が言つべきことでは無いかも知れんが・・・キッチンと手綱くら  
い持っておけ」

「・・・すんません」

敵のグレットにまで呆れられているんですけど？

というかなんてことしてくれてんの！

もし衝撃で遺跡崩れたらどうするつもりだったのさ！

「あ……まあ大丈夫だったんだし、コマケエ事は気にすんな！」  
『「「気にするよ……！」」』

な、なんか頭痛くなってきた。

……もう少し紅には周辺を見て判断すると言っ事が必要だね。

「と、とりあえず宝物庫の中に行くよ。ウィンディ、彼女のこと見張ってて」

『了解です』

「……チッ」

とりあえず紅を連れて、宝物庫の中へと入る事にした。

紅は手元に置いとかないと危険過ぎるよ全く。

\*\*\*

さて、久々に宝物庫に来た訳なのだが

「………無い」

「………ああ、無いな」

この場合、ひゅるる〜という風の擬音が入ることが望ましいの  
だろうか？

生憎、この場所は地下な為風が流れると言っ事がないのだが……

。 っで大事なのはソコじゃ無い！え？なんで？なんでないん？

「ま、前まで結構な金銀財宝あつたよね？」

「あ、ああ。もううずたかく積まれたって感じで・・・というかこの像だけは残ってたんだな」

「あー、リアル過ぎる像ね」

何故か金で出来たあの彫像だけは残っている。

というか、マジでアレだけあつた金銀の山はどこに行った？

とにかく理由を知っていきそうな人物である、グレットの元に僕たちは走った！

「なに？宝物庫に財宝がない？それは我が使いこんだからな。無いのも仕方あるまいて」

「あ、そうなんだー」

「何せ最近は戦も起らん。お陰で下僕用の死体が中々確保できなくな？闇組織から例え骨格のみとはいえ、いざ買つとなるとそれなりに金が」

「いや、チヨイ待ち。え？だつて君リツチでしょ？」

「そうだ」

「だつたら自分で死体造るとか出来るんじゃないの？僕とかみみたいな冒険者を襲つたりしてさ？」

「たわけ、そのようなことをしたら、すぐに討伐対象になつてしまつ。そんな事になつたらまた住処を移動しなきゃならなくなるんだぞ？面倒臭いではないか」

いや、面倒臭いってあーた……。  
しかし知らなかった。まさかあの骨達は買ったモノだったなんて。  
。。。

闇組織とか……。もしかしてマフィア的な何か？

だとしたらあの骨達って元は……。まあ僕とは関係ない、うん関係無しさ。

「ソレと、この遺跡を改装する為の材料費もある。魔法の研究は邪魔されたくは無いからな」

「改装費って……。」

「人件費が無いとはいえ、それなりに材料も厳選したらからな」

「道理で妙に丈夫な訳だぜ」

「一応手に入る中でも最硬の素材を使っている。数百年は壊れん」

「でもソレってつぎはぎって事だよね？他の元の部分は大丈夫な訳？」

古い革の水袋にわざわざ新しい革を当てるバカはいない。

そんな事したら、お互いに親和性が取れず崩壊してしまうからだ。

「ふん、抜かりは無い。魔法で色々としてむしろ遺跡全体の強度も上げてあるのだ」

「……。にしては稀に崩れて来たけど」

「……。部分的にはそうなる所もある。魔法とて万能ではない」

「はあ、まあこの遺跡に来た理由は、ある人に頼まれて最古のドールを手に入れることだしな」

とは言ったモノの、まさか全然金目の物が一つも残っていないとは、ちよつと内心残念だと思った。

こんなことならもう少し位盗つて……もとい貰つておくべきだった

ふむ、後悔先に立たずとはこういう事か……はあ。

「最古のドール？もしかして宝物庫にあつた、異国の古い人形のことかえ？」

「そうだけど……まさかそれまで売つたとか？」

「いや、何かしらの力を持った人形であつたから、後で研究しようと残してはある……ソレが欲しいのか？」

「あー、まあソレが目的のモノなら、ソレが目的で来た訳だし」

出来るならソレを持ち帰つて、とつとと寝たいのが心情だ。  
なんか気分が悪くなつてきたからね。

僕がそう言つと、グレットは少し考え込む様に顔を伏せる。  
はて？

「ソレをくれてやるから、とつとと出ていけ」

「どこにあるか知つてんのか？」

「……ああ、恐らく我しか知らんだろう」

『どうしますかなめ様？』

うーん、僕等としては人形さえ手に入ればいい訳だし……

僕は少し離れて考えた。そして考えが決まつたので彼女等の元に

戻る。

「グレット、案内して欲しい。でも用心のために縄は外せない」

「かまわん、貴様らが出て行ってくれるならな」

そう言うのと脚だけで器用に立ち上がるグレット。

そのままグレットは宝物庫の方へと足を向けた。

「……どうした？早くこんかい」

そう言われて、僕と紅とウィンディはお互いに顔を見合わせた。

まあ場所を知っていると言うのなら、案内して貰おう。

そう言う訳でずんずんと進んでいくグレットの後に続いて、僕達はまた宝物庫へと降りた。

## 第43章

く 出歩いて…落っこちて・第43章く

「コレが古のドールだ」

「こ、これって…」

「おいおい、マジかよ…」

『…良い趣味してますね』

リッチのグレットに着いていくと、何故かあの像の前にやってきた。

そして上の会話である…えと、まさかコレが…。

「どこを見ている？幾らなんでも我はそんな気色の悪い人形を研究しようとは思わんぞ？」

あ、ですよー。

流石にアレが最古のドールだったら、持ち帰る気も失せるところだった。

なにせ金ぴかのマッチョの男の像「確かこの中だ」ってええええええ！？

ゴトン

「開いた。さあ中にあるモノを持って行け」

グレットは脚で像の腹を蹴った。  
するとナニカのスイッチが入ったのか、像の腹が開いてそこに空洞が出来る。

その中には、小さな布袋が掛けられた何かが安置されていた。

『「」』

「な、なんだ？」

「・・・安置場所が悪い」

「う、煩い！とつと持つて出ていけ！」

気持ち悪いけど、考えてみれば中々理にかなった保管場所だ。

だってまさか金の彫像の中が空洞で、モノを保管出来るとか普通は解らない。

もっとも、この場合宝物庫に金銀財宝が一緒にあった場合の話である。

何も無い部屋に、この像だけあるのはどこか不気味だ。

「とりあえず現物を確認させてもらおうよ？」

「・・・はん、勝手にしろ」

フンといった感じに、顔をそむけたグレット。

それを横目に、僕は掛けられた布を外した。

「へえ〜、なんかゴテゴテとした飾りが着いてやがる」

「・・・うそん」

『面白い服を着た人形ですね。ひらひらとしてて、動きずらそう・・・』

そこにあっただのは、織物で作られた服飾に飾られた人形。



非常にリアルな造形だが、僕はこの人形の服飾を見たことがある気がした。

確か、そう数年前に……。

「えーと、そうだ思い出した。日本史の教科書！」

「ん？知ってるのか？かなめ」

「あー、うん。昔よんだ本に出ていた資料とそっくりでさ」

その人形の服飾は、昔やった日本史の教科書に乗っていた、当時の女性の衣服そっくりだった。

一つ思い出すと記憶がまるで数珠つなぎの様に次々と思いだせる。歴史的には飛鳥や古墳時代系の、和服だけど和服っぽくない感じの服。

聖徳太子の着ていた服とかに似ているとでも言った方が解りやすいだろうか？

しかし、本当に精巧に作られている。こう言った人形はあまり見たことが無い。

和製人形はひな人形しか見たことが無かったけど、異世界でちょっと趣向は違うけど、

こう言った人形を拝めるとは思わなかった。

「……ん？袖の部分に何か縫ってある」

『これは、文字みたいですね』

「お、本当だ。金色の糸で小せえけどキチンと書いてあるな」  
ピク

何気なく人形を見ていると、ふと袖口に何か文字が塗ってあるのを見つけた。

どうやらこの地域の文字では無く、ここからだと言われられる

辺りの文字だ。

その文字がどことなく漢字に似ているのはお約束。

「えっと、これは“哭”か？んで“沢”と“女”そんで“神”

うーん、人形の感じからして昔っぽく『ナキサワメノカミ』と読めばいいのかな？」

「ナキサワメノカミだと！？」

『あれ？どうかしましたか？グレットさん？』

「……なんでもない」

何故か名前を読んだら、グレットが反応した。

でもぶすーっとしてるから、聞いても教えてはくれないだろうなあ。

……一応僕達敵だしね。

でも本当に不思議な人形である。どこか水の気配を感じるのだ。

それに見た目からは想像も出来ないような力を秘めていた。

しかしながら、どこか優しさを持ち合わせているのである。

でも、それに加えて正反対の様な悲しい感じも感じた。何でだろう？

『名前からすると、どこかの女神さまをモチーフにした人形でしょうか？』

「多分、東洋の方から流れたモノじゃないかな？」

「ほっ」

僕がそう推測したことを言うと、グレットは少し驚いた顔をしていた。

多分、僕のような人間がそんなことを知っているとは思わなかったんじゃないかな。

まあこの世界で、こんな姿かたちをしてる物がありそうなのは、東洋位だしね。

「俺にも持たせてくれ」

「ん、どうぞ紅」

「あんがと、おおう、本当に良く出来てやがる」

そう言うと彼女は人形をひっくり返し・・・あー、なんて言うのかな。

服の中を覗き込んでいます。

「紅、やめなさい。ソレは幾らなんでも可哀そうだ」

『そうですよ。貴女は女の子なんですから、そんなはしたないことをしてはダメです』

「お、おお。すまねえ」

僕は紅から人形を貰うと、最初に包んであった布に包み直した。ソレを脇に抱えて、グレットの方を向く。

「それじゃ、グレット。騒がして悪かったね。僕たちはもう目的を果たしたから帰るね」

「・・・とつと消える御同輩。私の気が変わらない内にな」

「はん、負けた癖によ・・・」

「紅!・・・それじゃ、さようなら不死の魔法使いさん」

そして僕等は宝物庫から出て、来た道を戻り外に出た。

グレットを拘束していた縄は、念の為外に出てから解除すると約束した。

既に戦意が無いことはわかってはいるが、一応敵同士である。警戒するに越したことは無い。

僕に負けたと言う事もあり、彼女は睨みつけては来た。だが、それ以上は魔力すら練ろつとしなかつた為、特に問題無く外に出る事が出来た。

僕はウィンディに頼み、約束通りに拘束を解除した後、ITワールドボードを展開。

そのまま空を飛んで、ガラクトマン魔法学校へと帰還したのであった。

この時、僕にとっては重大な事が起きていた事に、僕はまだ気が付いていなかった。

\*\*\*

#### ガラクトマン魔法学校・研究棟

学校へと帰還した僕たちは、門番の人に身分証代わりのチョーカ―を確認して貰う。

このチョーカーには魔法刻印が施され、これ自体が魔法学校における身分証と成るのだ。

シエルさんが用意してくれたモノなので、別に特に問題無く学校の中に入った。

「御苦労さまです」

「ん」

もつとも、門番の人とは既に顔見知りではあるので、多少は融通が利く。

一々手続きが面倒なので、ちょっとした外出なら目をつぶって貰えるのだ。

紅が修業で外に出る時も大体そうしている。暗黙の了解というやつである。

……まあ蛇足です。

そのまま、ヴァルさん達がいると思うゴー研のある研究棟へと足を運ぶ。

ゴー研が使っている研究棟は、遠くからでもすぐに解るほど特徴的だ。

何せ研究している物が物な為、どちらかと言えばハンガーに近い。

ゴー研に所属する学生も、普段は汚れても良い様な作業着姿なのだ。

遠くからでも、この学校の中では異彩を放つ為、良く解るのである。

とりあえず、ヴァルさんを探す為に、近くで作業していたゴー研の学生に話しかけた。

「こんにちはー」

「うん？かなめくんと紅さんか？いらっしやい。今日は何か御用？」

「あ、ミルドさん。ヴァルさん来てますか？」

恐らくは次のタロスに使われるであろう部品を、チェックしていた女の子が振り向いた。

髪をおさげにし丸眼鏡を掛けて、作業着姿が似合う彼女は、ミルド・バチエックさん。

ゴーレムが好きな女性で、ゴー研におけるゴーレムの整備の殆どを請け負っている人である。

ここには何度か来てるので、それなりに顔見知りだ。

「彼なら研究室にこもりっぱなしよ。そろそろ気分転換に出て来ないと、死んじゃうかもね」

「あの人ならソレで本望だとか良いそうですね。普通に真顔で」

「言うわねえ〜きつと。あ、ヴァルに何か様があったんでしょ？早く行っておあげなさいな」

「了解です。それじゃ」

「じゃあな〜」

「はいはい、それじゃあね」

適当に会話を返した後、研究室に足を向けた。

あの人は結構常識人だから、トップ二人が実質アレだし、案外苦勞人かもねえ。

そんな事考えつつも、ヴァルさんがいる研究室にそつと入る。

この研究室に入る時は、扉はそつとあけなければならない。

何故なら、普通に開けようとすると、テンプレの様に試作品パーツが降って来るからだ。

ヴァルさんは何度もパーツ雪崩に埋まった経験があるので、もう慣れたらしい。

・・・片づければ良いんじゃないかと突っ込みたいな。

「こんにちは、ヴァルさんいる？」

「おーい、ヴァルよう。どこにいるか返事しろよ」

「お、お前ら帰ってきたか。首尾はどうだった？」

「ばっちり、ヴァルさんに頼まれてた最古の魔導人形ドール探して来たよ」

僕は小脇に抱えていた布を、彼にかかげて見せた。

「おお、見せてくれ！」

「ここ置いときます。僕は魔導人形とかは詳しくは解らないですけど、結構な力持ってますよコレ」  
「そりゃ楽しみだ。研究意欲湧いてくる」

なんか既にドールに夢中なヴァルさん。

研究者モードでも呼べばいいかな？もう周りが見えていない。人形の構成素材をしらべ、分解の前に解析魔法をかけて内部構造まで調べようとしていた。

「・・・帰るか？」

「うん、なんか疲れたしね。ヴァルさん、僕等帰りますね」

「この素材は絹？いや、絹は絹でも魔蚕の絹か。道理で耐久性が  
ん？帰るのか？それじゃな」

僕等はまだ用事がすんだので、彼をその場に残して、自分たちの部屋へと帰る事にした。

もうヴァルさんは目の前の研究対象に夢中である。

どこか子供っぽいそれに苦笑しながら、僕たちは研究室を後にしたのだった。

\*\*\*

さて、無事に何時も使ってる部屋に戻ってきた。  
結構長い間帰って無かった様に感じられるなあ。

そう言えばもう治まったけど、グレット戦の後に感じた身体から抜ける感じはなんだったんだろう？

「くうくう」

「ん？どうしたのチビ？」

「く」

ん？僕の胸のあたりを見てる？・・・ってああそっぴや。

「ああ、そう言えば戦闘でここに穴開いてたんだ。教えてくれてありがとうね」

「くう」

チビは尻尾を振ってそう答えると、

既にベッドにダイブしてウィンディに窘められている紅の元に飛んで行った。

「・・・はあ、裁縫かあ。面倒臭いなあ」

裁縫は出来無くは無い。家庭科の授業で可も無く不可も無く程度には出来る。

針はイマージュルIEDで作れるし、糸の方は買って有るから問題無い。

まあそう言うのと面倒臭さとは別物なただけだね。

「そう言えば、胸ポケットに手帳入れてあったんだっけ」

このステータスが現れる手帳、一応何か魔法的な守りが付いている手帳らしい。

以前うつかり焚火に落とす、燃やしそうになった時も燃えなかつたんだよね。

なので、特に心配はしてなかった・・・のだが。

「・・・うそ、そんな」

「ん？どうしたかなめ？」

『かなめさま？』



この世界に来て何カ月も経っている。

それなりに経験を積んでいるので、もうあまり驚かないと思っていたが……。

「て、手帳に……大きな穴があいちやってる」

流石にこれには驚いた。そして僕等に流れる沈黙。

「そっぴやそんなん持つてたなあ」

『ソレって何か意味あるんですか?』

「うん、一応ステータスを数値化してくれて、覚えたアビリティが表示されてただけど……」

ソレと魔法のセットの設定とか色々。

でも最近操作しなくても、無詠唱とかのやり方解ってきたから、あんまり手帳で操作しなくなって来たんだっただけ。

「なんで壊れたんだろう?というか何時だ?」

「アレじゃねえか?グレットとの戦闘の最中」

『そう言えば、その胸の部分は、グレットの魔法が少し掠ったからでしたよね?』

「そっぴや、あの魔法。魔法の無効化が付いてたみたいだし……」

『原因はソレですね。いやはや私それに当たらなくて良かったです』

そっぴや人工精霊だもんねウィンディはさ。

そんな魔法使われたら消滅しちゃうか。

しかし、うん、身体自体には特に何も影響は出て無いみたいだけど……。

「うーん、困った。なんか抜けたような気がする」

「自称神のご加護でも消えたか？」

「うわ、どうなんだろう？」

「サーチとかで調べられないんですか？」

「やってみるよ・・・あれ？ステータスが表示されない?!」

うーむ、今まで表示されていたステータス系統が表示されなくなつた。

一応解析結果はキチンと出るから、使用に問題は無いけど何だかなあ。

ためしに紅に向けてみたけど、ステータスはやはり表示されなくなつていた。

そう言えば、帰りに魔獣見ても、緑のバーが表示されて無かつたっけな。

結構遠かつたから、効果範囲外なのかと思つてたんだけど・・・。

「どうやら自称神様からの、手帳のサービスは無くなつたらしいね」

「身体に施された方は、身体が残っているから大丈夫って訳なのか」

「確かに魔力も相変わらず大量に供給されてますね」

「でも大変だ。この先何か覚えたとしても、ソレを知る機会が無くなつちやつた」

今まで何か習得出来た時は手帳を見ていたのだ。

ソレが出来なくなつたのは結構痛手だなあ。一応指標にしてた訳だし。

だけど、ウインディは僕のソレを聞いて

『え?でも覚えることは出来るじゃないですか。手帳とか関係無し

に

「……そういやそうだった」

あくまで手帳の機能はステータスが見られると言う事だったしね。日常生活や戦闘にはあまり影響があるとは思えない。

しいて言うならアビリティの確認が取れなくなった程度だろう。それとMPの消費……まあコレは疲労度とかで大体解るから問題無いか。

でもコレで本当に異世界に来たって言う事になるんだろうな。だってそうでしょう？今まではゲームみたいなシステムがおまけで着いていた。

だけどこれからはそう言ったのが無くなり、自分の力で歩いていく事になるんだ。

まあ、大魔力は残して貰ってるし、身体能力も引き上げて貰ってるけど。

ソコはスルーという事で……だめ？

しかし、ステータスがサーチでも表示されなくなっただよね？これはレベルアップの機能が消えたって事になるんだろうか？それとも確認出来なくなっただけなのかな？

手帳と共に失われた感覚もある事だし、その感覚の原因はコレかも知れない。

うーん、考えても仕方ないとはいえ、もしレベルアップ機能が消えていたとしたら……。

これから先、力は自分の力で研磨してかなきゃいけないって事だろう。

ビギナー期間の終了ですって事になってしまったのか……。もっとレベル上げておけばよかったと思っても後の祭りだなあ。

「ま、身体には特に影響は出てないし、大丈夫だろう」

「ならいい、かなめが無事ならさ」

『でも何かあつたら、とにかく報告してくださいよ？あなたには死んで欲しくない』

ウィンディの言葉の後半は、いつもよりもトーンを落した真面目な声だった。

僕は彼女の方を向き、その目を見返しながら返事をする。

「……うん、何か変な具合になったら教えるよ」

『絶対ですよ？私はまだこの世界を見ていたんですから』

「解ってる……大丈夫だよ。僕は悪運は強いからそう簡単には死なないさ」

『ええ　だと良いのですけど』

解らない事を考えても仕方が無い。

こればかりは調べ方も解らないから、調べようも無い。

それなら現状を常に意識して生活するしか方法は無い。

でも、いざそう思うと……なんか不安かな。

「かなめ」

「……ん、まあ何か良く解らない事になったけど、これからもよろしく」

「おう！」

『はい！』

僕がそう言うと、彼女たちも応えてくれた。

「くう！」

「あはは、そういえばお前も居たねチビ」

「くう」

チビもちゃんと返事を返してくれた。

まあ不安だけど、それでも仲間がいる。

それだけでも、十分心強い事じゃないか。

「……さて、とりあえず　休まない？」

「ああ、賛成だぜ。なんかもうくたくただ」

『私かなめ様の中に戻っても良いですか？』

「うん、いいよ」

色々と不安な事はある。だけど考えてみたら前の世界でも日々不安に生きていた。

そう考えたら、只普段の世界に戻っただけなんだ。

ファンタジーな世界に居る所為で忘れかけたけど、ここは夢じゃ無くて現実。

なら、そこに生きる人間も、僕の世界と同じく日々不安に過ごしているたりする。

当然、その世界の住人となった僕だって……。

「そんじゃ、おつかれ」

「ふあゝ、おう……おつかれかなめ」

でも、悲観してもらえない。

僕はまだ生きているんだ。それに魔法の事も良く知りたい。

家だって欲しい。だから今は立ち止まらずに頑張るさ。

った。

そう思いつつ、身体を休める為にベッドに入った僕たちだ

### 第43章（後書き）

\*手帳が壊れてしまった主人公、こうして彼はファンタジーからリアルへと完全に移行したのであった。

・・・まあ、生活は全然変わんないと言っ畷w  
それではまた次回に。

## 第44話

↓ 出歩いて… 落っこちて・第44話 ↓

さて、手帳の効果は消えた。

だが、肉体改造された所は結局そのままなので、実質生活は変わらなかった。

なので、今日もシエルさんと共に薬品研究をしていたのだが

「しっかしまあ・・・随分とご立派になったねチビ」

「ぐる？」

なんでこうなったんだろっかね？と、僕は大きくなってしまったチビを見上げてそう呟いた。

\*\*\*

ことの発端は、複数の魔法薬品を調合していた時の事。

シエルさんの実験（僕自体は彼女がどんな実験をしているのかは知らない）の為の薬品で、それぞれ強壮薬やそのた様々な効果が付い



た魔法薬達。

僕はソレらの実験に使う薬品の準備を言い渡され、急いで調合している最中だった。

「えーと、こっちの薬は薬品棚に戻してっと・・・こっちは後は熱するだけか」

この魔法薬を作れるようになるまで、かなり時間掛かったなあ〜とか思いつつ作業を行う。

だが、所謂魔女の大鍋と呼ばれる丸型鍋で薬品を熱して居る最中にソレは起きた。

「くう！」

「おわつと!？」

ここ最近かまってやれなかったチビが、悪戯序でにじゃれついて来たのである。

何時もなら、抱きしめて撫でまわして、杖を投げたりして遊んでやればいい。

だが、その時の僕は、腕一杯に魔法薬を持って運んでいる最中だったのである。

ひゅーーーん・・・ばちゃん

「あ」

当然突然の事にバランスを崩し、魔法薬の幾つかが僕の手から離れて、

あろうことが大鍋の中に落ちてしまった。

・・・シユシユシユシユ　　ボンツ！！！！

「うひゃっ!?!」

当然の如く薬液が異常反応を起し、ケミカルな色合いの薬液が鍋から噴きこぼれた。

そして運の悪い事に、その薬液が飛んだ先には、チビが飛んでいたのである。

ばちゃ

「・・・・・・・・くううううッ!?!?!?!」

「チ、チビッ!?!」

放物線を描く薬液は、そのままチビを直撃した。ちなみに直前で鍋で熱していた薬液である。

当然かかれれば火傷するくらいに熱い為、チビが熱さで悲鳴を上げて転げ回っていた。

慌てた僕は近くの机の上に置いてあった水差しの水をチビに慌てて掛けてしまったのだが

「きゆううううう!!!」

「へあ!?こ、これも薬!?紛らわしい入れ物に入れないでよッ!」

実はソレも水差しでは無く、薬品が入った瓶で中身も水薬だったのだ。

一体何の薬なのか、まだラベル張る前だったから効果は不明。

ただ言えるのは、様々な魔法薬が混ざり合った謎の物体X、まさにそんな液体を被っちゃったんだからさあ大変。とにかく回復魔法掛けながら、薬品を洗い流す為にチビを抱えて外へと飛び出した。

だが、この時忘れていたんだけど、この薬って魔法薬だったんだよね。

だから下手に魔法なんて使おうものなら、どんな変化を起すことが解らない。

でも慌てていた僕は、そんな事気にせず、魔法を使っていたのだ。

.....

.....

.....

「量を調節して・・・マディストリーム！」

ドボボボボツ！！！！

「く、くう〜」

「我慢して！早く薬を落さないと！」

チビが水で洗われる事を嫌がって身体をよじるが、急いで薬液を落さないと大変な事になる。

かなりの薬品が混ざり合った、どんな効果があるか解らない薬品。下手したら劇薬化しているかもしれない以上、とにかく洗わなければならぬ。

魔力量を調節して、濁流をホースから出る程度の水量にしてチビを洗う。

薬品を浴びた場合の対処法は、大抵まずは迅速に付着した薬品を洗い流す事なのだ。

ああ、白かった毛並みが、ちょっとくすんだ灰色・・・いやコレは銀色？

とにかく掛った薬品の所為か、チビの毛色が変わってしまった。

一応一通り薬液は洗い落した物の、チビは全身に薬液が掛かっていた。

もしかしたら、少し呑みこんでしまっているかもしれないな。

「とにかく、一度シエルさんと呼んできた方が

」

と、ここまで僕が言いかけた時だった。

「くあう！くううう・・・」

「ん？ち、チビッ！？」

とりあえず目の前で起こった事を、簡単に説明いたしますとですね？

どうやら薬液の効果は消えていなかったらしく、なんか光を発しながらチビが徐々に大きくなっていくのが見えました。感じ的には、某紅白のボールに入ってるモンスターが進化しちゃう姿に似てるかも・・・。

「へ？へえええッ！？ち、チビが」

「・・・ゲル？」

「チビが・・・大きくなっちゃった」

そして話は冒頭へと続いたのである。

\*\*\*

あ後はビッグになってしまったチビを、シエルさんに診せる事にした。

いや、一応呪いとかも解呪できるキュアウィンドを使ったんだよ？  
だけどやけどは治ったのに、戻る気配が全然無くってさ……。

「どうなってるんでしょう？」

「うーん、どんな薬品を被ったのか解らないわけ？」

「実は……」

主人公説明中。

「成程、カクテルみたいになった謎の魔法薬Xを被っちゃった訳か」

「せ、先生、この子は治るでしょうか？」

「残念ですが……私でも無理でしょう」

「そ、そんな」

ガクツと打ちひしがれる僕。

そしてシエルさんが僕の肩に手を置き

「はい、おふざけは」ここまでよ。ちょっと真面目な話にしましょう」

「はい」

意外とシエルさんはノリが良い事が判明した。

さて、ここからは真面目に行こう。

「実際大丈夫なんでしょうか？」

「一応聞いた感じだと、どの薬品も混ぜた程度ではこんな反応起さないわ。貴方ここに来るまで何かしなかった？」

「ええと、チビが火傷してたので回復魔法を」

「原因はソレね。ただでさえ不安定な魔法薬に魔力を当てたら変化もするわよ」

魔法薬とは、色んな属性の魔法や魔力を混ぜ合わせ、媒体に固定させるモノだ。

それ故、魔力とかを浴びると、品質が変化してしまいやすい。

どうやら今回は僕が原因で、チビがデカくなってしまったようである。

「というか、ハニーヴァイスって大きくなっても2mが限度じゃないですか？今のチビ軽く7m越えてますよ？」

「背中に乗れるんじゃないかしら？」

「ええ、乗れると思います・・・じゃなくて」

「聞かれても解らないわ。私は魔法薬の権威ではあるけど、ドラゴン種についてはある程度までしか知らないモノ」

ソレもそうだった。シエルさんの専門って魔法薬だった。流石にドラゴンの生態については知らない筈。

「でも、とりあえずハニーヴァイスはこんな成長の仕方はしないわ。やっぱり薬品の所為ね。多分大気中の魔力を集めて、大きくなったんだと思うけど・・・」

「あ、やっぱりですか？」

薬の影響で変化が起きると、どうも魔法では直せないらしいね。うーん、やっぱり生命体だからかな？そこら辺の線引きが良く解らない。

どちらにしても、すぐ戻すことは無理っぽいし・・・え？何故かって？

薬液は残ってるけど、呑んでこうなったのか被ってこうなったのか解らないんだ。

あるいはその両方かも知れないし、治癒魔法の魔力の影響もあるかもしれない。

そうなるともうお手上げ、魔法じゃ手が出せないし、下手に治療薬は使えないし・・・。



「どっしょよ……」

「あら、ただ大きいだけで、特に問題は無いんじゃないの？」

「うーん、普通はそうなんですけど、食費が……」

「……所帯じみてるとは思ってたけどそこまでとはね。あんましコマコマ気にしていると、モテないわよ？」

ズガン、シエルさんの言葉により、ハートに60%のダメージ！  
うう、いいもん別に……家事が得意な男の子だって別にいいじゃないですか。

一応、他の二人も掃除とかは手伝ってくれるけどさ。  
紅とかまだ料理作れないし、安くあげるには自分で作るしかないし……。

ああ、所帯じみてると言う事に実感がわいてきた。

「ちょ、ちよつとかなめくん!？」

「……何でしょうか？ちよつと自覚したらこうなっただけですから大丈夫ですよ」

「……いきなり暗いオーラ出さないで欲しいわね。なんなら精神薬でも処方しようか？」

「いや、遠慮しておきます」

それだけはきっぱりと断った。だってまだ怖いモン。

昨日だって、また僕のお茶のカップの淵に何か得体のしれない薬塗ろうとしてたし……。

僕、なんで今まで平気何だろうか？

「ふう、一応解毒剤みたいなのは作ってみるけど、期待はしないでね？」

「この大きさを戻してもらえらなら、僕は全然かまいませんとも」

「その代わり、今回の実験は違う日に持ち越したからね」

「了解です。……すみません、迷惑かけて」

「別に良いわ。これも広義的にとれば実験になるし、かなめ君は何時もちゃんと手伝ってくれてるしね。　　ねえ、何ならちゃんとした助手やらない？かなめ君がその気なら、席は空けておくわよ？」

助手か、案外良いかもしれないな。

何気に薬品とかって結構需要あるから、食いっぱぐれは少ないだろうしね。

別にギルド入ったのは、手っ取り早くお金が欲しかったからだし、そのお金が居る目的である家を手に入れると言うのも、今やっていける助手の仕事を終えれば報酬で貰えるからなんとかなる。

「うーん、考えておきます。今はそれよりも……」

「そうね。チビちゃんなんとかしないと、色々和不味いわ」

別に大きいだけなら、自前でエサを採って来いって言うから良いんだけど。

(まあ、チビが採って来られるかは別にしてだけどね)  
問題は今僕らが住んでいるココが、一応国立の教育機関だって言う事だ。

流石にココまで大きいと目立つからねえ。

下手すると授業の妨害になるかもって事で、退去させられちゃうかも知れないんだよ。

そうなったら、依頼の遂行にかなりの影響が出てしまう・・・可能性が高い。

それに7m近くもあつたら、好き勝手に放置おく訳にもいかない。誰かが付いて居ないと、下手したら警備の人とかが来てしまうかもしれないのだ。

「それじゃ、ちょっと急いで色々と調べてくるわ」

「お願いします。僕が魔法でココの場所を誤魔化して置いた方が良いでしょうか?」

「その方が良いかもしれないわね。でもココから動かないこと。いいわね?」

「はい、よろしくお願いします」

シエルさんが研究室に戻るのを見送りつつ、僕はチビの方を見上

げた。

ああ、大きくなっても、モフモフ感は健在なのね。

「ぐう？」

「うんにゃ、なんでもない」

でも、目立つ事この上ないので、僕はエーボウル・インビジブル  
Verを発動させチビを覆い隠した。

これでよっぽど近づかれなければ、バレる事はないと思う。多  
分。

\*\*\*

「スゲエカツコいいなチビッ！」

「ぐるー！」

『……………あれ、本当にチビなんですか？』

「チビだよ。薬浴びた所為でああなってるけどね」

さて、チビと二人で大人しくシエルさんが帰ってくるのを待つて  
いた僕。

しばらくして紅とウィンディも、外から帰ってきたので合流した。

ちなみに、紅は匂いでこの場所に僕が居たのが解ったんだと、流石は元犬、嗅覚が鋭いね。

「むむ！背中に乗ると高いとこまで見えるぞ！？」

「紅、あんまりチビが嫌がる様な事は」

「嫌がる？嫌かチビ？」

「ぐあう（ブンブン）」

「嫌じゃねってよ」

「……首振ると随分と迫力あるね」

『全くですね』

今まで肩に乗れるサイズだったのが、いきなり人が背中に乗れそうなくらいの大きさである。

その迫力は押して測るべきだろう。

「よくよく見ると、ハニーヴァイスの面影がある」

『別の竜に見えるでしょうね』

まっ白い毛並みはそのままに、少しばかり2本角が大きくなって

いる。

四肢の爪の大分伸びており、攻撃力も高そうだ。顔つきも、今までの可愛らしいから、どちらかと言えばカッコいいになった。

しかも性格はおとなしいまま、なんとまあ……。

「チビをここに放置なんてしたら最後。研究されちゃうんじゃないかな？」

『魔法学校ですしねえ。案外否定できないかも……』

「ほれほれ、こちよこちよこちよ」

「ヴァウ！グル」

って紅！チビの鼻を尻尾でくすぐらないの！  
なに悪戯してるかな君は！ と僕が注意しかけたその時。

「ヴァ、ヴァ……ヴァックシュウウン！！！！」

シュボッ！

「ひゃう！？あ、あっちいいいい！！！！」

チビがくしゃみして、その口から火を吹いていた。

……OK、落ちつこう。ハニーヴァイスはブレスを吐け

たかな？

少なくとも、一瞬だけ1m大の火球を口から出したように見えただけど？

しかもそれが命中した地面が、ちよつとした穴があいてるし・・・

『か、かなめ様あ？』

僕が考えていると、ウィンディが声を掛けて来た。  
なんだろう？僕は考え事をしていると言つのにね？

『出来れば現実逃避は止めて、紅さんを助けた方がよろしいのでは？』

「・・・そう言えばそうだね」

「あつっううううう！！！」

火球が掠つた所為で、少しばかり尻尾が燃えた紅。

熱さで脚り回る彼女にエレメンタルミサイルの水属性。

威力落したバージョンを当てて火を消化してやり、キュアウィンドで治療した。

そしてこのヤロウ！ってな感じでチビに突進しようとした紅を宥めつつ。

紅に火傷させちゃったので、シヨボーンとなったチビを撫でて慰めた。

何だかものすごく疲れた様な気がするけど、気の所為だと思つ事にしたのだった。

\*\*\*

さて、それから更に時間が立ち、お昼も過ぎてちょうどおやつ時と言ったところ。

僕自身はこのイーボウル・インビジブルverの維持の為に動けない為、ご飯は紅達に買って来てもらった。チビの分は・・・購買地区で適当に沢山買ってきてもらった。

こういつ時雑食性なのはありがたいと思う。何でも食べてくれるしね。

そして、食後は静かにシエルさんを待っていた筈・・・なのだが

「ほう、これがハニーヴァイスだというのか？」

「ふーん、確かに面影はあるねえ。でもこんなデカイヤツは見たことが無いな」

「ソレは僕も同じです。はい」

「・・・いや、何で居るんですかお三方？」

紅とウィンディは、お菓子を買いに購買にまた出かけている。少しばかりヒマなので、チビに寄りかかり本を読んでいた所、聞き覚えのある声があった。



チビの影から首だけ出して覗いてみると、これまた見たことがある三人。

ゴー研の長クレアさんと、それを支えるヴァルさん。

僕より若い優秀な魔法使いのエルダー君が、チビを見上げていたのだ。

何で？この場所は隠してある筈なのに居るの？

「何故って、これだけ目立つ様な隠し方をすればばれるぞ？」

「え?!そんなに解る?」

だとしたら不味いぞ。せつかく隠してあると言うのに。

だが、クレアさんの後ろに立っていたヴァルさんとエル君は、クレアさんのその言葉に少々あきれたように溜息を吐いた。

「いや、普通は気が付かないと俺は思うぞ?勘で見つけるなんて会  
長くらいだ」

「僕もそう思うです。かなり近づかないと、ここに何かあるなんて  
解らなかつたからです。ハイ」

「む、ソレでは私が変わりたいではないか。お前たちとて感じたこと  
だろう?」

「「いえ、全然」」

あー、まあなんて言いましょうか？

彼女もまた規格外な人間ってヤツなんでしょうねえ。

ソレはさて置き、勝手に来ちゃったお三方に、この竜がチビであると言う事を説明する羽目になった僕。ここに至る経緯を話し、現在シエルさん待ちである言う事を伝えた。

そしたら何故かクレアさんからおしかりを受けた。

何でも、友なのだから相談してくれても良いだろうにこの事。

そう言っただけで貰えたのは嬉しいんだけど、僕はチビを隠す為に動けなかったし、クレアさん達はゴーレムを研究してるんだから、相談しても・・・ねえ？

尚、その時エル君も全く同じ事を考えていたのか、うんうんと首を縦に振っていたのを見た。

クレアさんがソレもそうかと、少し残念そうにしていたので、そう言ってくれるだけで十分だと言う事は伝えておいたのだった。

とりあえず、はやくシエルさん戻って来てくれないかなあ。

第45話(前書き)

改編したすた

## 第45話

く 出歩いて…落っこちて・第45話く

さて、前回巨大化したチビを元に戻す為、シエルさんを待っていた所、エル君達がやってきた。

結局彼らもやじ馬で来てしまっただけで、何か解決策があると言  
う訳ではない。

仕方がないので、シエルさんが来るまで待つ事になった。

あれ？授業無いの？と聞いたところ、クリアさんもヴァルさんも  
最終学年らしい。

だから実質もう授業は殆ど無く、卒業課題も出来ているとの事。

エル君は二人より年下だけど、それでも飛び級しているので二人  
と同じ理由である。

秀才っているもんだねえくと改めてエル君を見たら、照れていた。  
なんか可愛い。

「色々と持って来たわよ・・・って、なんか人間増えてるわね」

「僕の友人たちです」

「あー、紹介とかはいらないわ。全員授業で受け持ったこと有るか  
ら」

そして待つ事数刻後、シエルさんも戻って来たのでさっそく色々  
と薬を試すことにした。

シエルさんは持ってきた袋から、どう考えても自然には出ない色  
合いの薬瓶を幾つか取り出した。

蛍光色やら、普通に禍々しい紫色までさまざまである。

そして一つだけ、普通に透明な水薬の瓶があったが、

そのほかがかなり禍々しいのに対し、

一つだけコレだと何故かそこはかたなく不気味さを感じるんだが  
・・・。

「・・・くう」

流石に本能でヤバいと感じ取ったのか、薬が袋から出るたびに後ずさるうつとしているチビ。

あんまり動かれると魔法で隠しているエリヤから出てしまいそうなので、チビを宥める事にした。

「チビ、怖がらなくても大丈夫。シエルさんの薬は僕も飲んだこと有るけど、大丈夫だよ・・・」

多分ねと言うのは、心の中だけにとどめておこう。

実際僕の身体に異常が出たことはこれまでは一度も無い。

かなりの回数で何かを盛られていたらしいのだが、身体が自覚症状を出さないのだ。

投与されていた薬は後で調べたら中に劇薬もあったのだが、

強化された身体の所為か、そう言ったのにも耐性があったのかもしない。

もっとも、手帳が無くなった今では、もう確認はもうできないけど。

ある意味そう言った事ばかりされると、今更と言う感じになって

くる。

人間ってなれる生き物なんだよねえ。

「さあ口を開けなさい！もっと大きく開くのよ！！」

「く、くう〜！！！」

さて、とにかく嫌がるチビの口に、嬉々として次々と薬を投げ入れていくシエルさん。

だが、どうも効果が現れない。正確には現れてはいるのだが……。

その現れ方が色が変わったり、グルグル目になって気絶したりと、あまり体の大きさには関係のない効果ばかりだった。

ビクンビクンと痙攣するチビを、僕たちは遠巻きにしか見ている事しか出来なかった。

手に泡立つ暗褐色のドロドロとした液体を、嬉々としてチビの口に流し込むシエルさん。

その姿はまさに魔女。僕達の誰ひとりとして、正直用がなければ

近寄りたいと感じなかったのである。

それに下手に割って入ったら、彼女がその手に持った薬を投げつけて来そうで怖い。

一体どんな調合が為されたポーションなのかは、見ただけでは判断が出来ない為に余計に恐怖を煽ってくる。

研究者と言うものは実験を邪魔される事を何よりも嫌う節がある。

ソレは魔法使いであるが研究者でもあるシエルさんにも当てはまる事なのだ。

「むう、これでもダメか。妖精薬系統なら混沌としても行けるかと思っただけだ」

とは言つモノの、シエルさんは基本真面目な方だから、やっていることが一見めちゃくちゃに見えても、それはキチンと考察して考えてからやっている筈である。

「でも竜種は良いわねえ。もとがハニーヴァイスでも、ココまで変化するとすさまじい魔法耐性だわ。 実験台に丁度良い・・・」

ぼそりと何かを言っていた気がするけど、本当に早く元に戻らないかな？チビ。



.....  
.....  
.....  
さて、アレから30分程度経過した。

「く、くくくう……」

「ダメね。無効化、浄化、洗浄、認識変換。どれも効果が無いわ」

そういうシエルさんの後ろには、白い体毛が更なるはかなさを湛えた……

灰の様に白い色に変わり、文字通り燃え尽きた様にクタツとして  
いるチビの姿があった。

気の所為かは知らないが、漫画的に口から何かエクトプラズミック  
な白い靄が立ち上っている。

「シエル先生、チビは大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ。何故だか知らないけど、妙に体力があるの。本当にどんな薬が混ざった時に出来たんだか」

チビのあまりの様子に流石に不憫に思ったのか、エル君がシエルさんにそう聞いていた。

確かになんかあと一押しで、口の靄が完全に身体から切り離されて天に昇って行きそうな感じだ。

薬は製法容量をまもって正しく飲まない、毒にもなるのである。

まあ、魔法薬にはそんな制限はあまりないんだけどね。

「・・・しかし、効果が無い訳でもないのだな」

「ですな。微妙ですが、チビ竜の身体に変化が起こっている。全く効いて無いわけじゃない」

「そう、効いて無い訳じゃない。だけど、何故か元に戻らないのよ」

「ふむ、流石のシエル女史にも難しいのですね。もっと薬を上げたらダメなのですか？」

「コレ以上は流石にね。アレでも一応影響が出にくい様に調整してあるのよ？」

「「「（・・・あれで？）」「」」

全員でチビの方を向くと、なんか天から光が・・・って召される直前!?

天使が見えるのは幻覚に違いない! そうに違いないんだ! もしくは精霊の目の暴走!

「チ、チビ! 眠っちゃだめだ! 寝たら死んじゃうって!」

「死ぬなー! チビいい!」

『あ、あとで美味しい果物買ってあげますから! チビちゃん!』

美味しい果物と聞いた途端、目を開いて力を振り絞って立ち上がるチビ。

そして弱々しげだったけど、クウと一鳴きしていた。

しかし食欲があると言う事は、なんとか持ち直したと言うところだろうか?

美味しいモノには目が無いのかもしれないねえ。

「あ、危なかったあ。後少しで召されるどころだった」

『食べ物につられて還ってきたっていうのが、地味に凄いですけど』

クターとはしているが、チビはなんとか帰ってきた。

しかし、本当にどうしよう？シエルさんの薬も効かないなんて・  
。

「……一つだけ、解決策はあるわ」

「え？本当ですか?!」

「ええ、だけど元に戻るって訳じゃないの。薬の効果に上書きする形で行う事になるから」

つまりは、もう薬の無効化や解毒的な事は無理だから、それだったら違う薬で上書きしてしまおうって事。ただ問題としては、只でさえ変な薬を被って色んな効果が出ている以上、どうなるか解らないと言っ事でもある。

「どうする？ちょっと危険かもしれないけど」

「……お願いします」

「いいの？後戻りはできなくなるわよ？」

「はい、このままだと、一緒に居られなくなるかも知れませんが……」

こんなに大きいと人目に付く、幾ら大人しいとはいえ竜種なのだ。人によっては討伐しろと騒ぎ立てるかもしれない。

そうになったら、チビとは一緒に居られなくなってしまふ。

人がいる限り、何処に行こうとこの問題は付いてきそうだしね。

「・・・解ったわ。ちょっと待ってなさい」

シエルさんはそう言うので一度研究棟へと戻って行った。

そして、帰ってきた彼女の手には、小さな小壘が握られていた。

どうやら、それが魔法薬らしい。

「古代の魔導書をひも解いて、近年になって完成した古代魔法薬の試薬よ。古代魔法薬は今の魔法薬の効き目なんて目じゃなくらい強力だから、上書きが可能だとおもうわ」

「古代魔法薬ですか？」

「そう、古代魔法薬。今はコレだけしか無いから、かなりのレアな薬よ」

「そ、そんな貴重品を使って、大丈夫なんですか？」

金額的にとは聞けない。なんか怖いから。

シエルさんは僕の問いに、にっこりと笑顔になる。

あゝ、なんか概視感……。

「実はコレ、まだ実験したことが無いのよ？だから今回初めて生き物に使うの」

「……………そうですか」

「あら、随分と淡泊な反応ね？もう少し、怖がるかと思ったんだけど」

「いえ、なれましたから……それにシエルさんの薬なんですから、大丈夫ですよ」

「……………信用されてるわね。ま、とりあえずチビ！」

「くうっ!？」

いきなりシエルさんに呼ばれ、ビクンと身体を震わせるチビ。

彼女はそんなことはお構いなしに話を続ける。

「ちょっと苦しいかもしれないけど、我慢してね？」

「く、くうううううううううう！……！！！」

そして、嫌がるチビを無詠唱の魔法で拘束し、口の中に薬液を放り込んだのだった。

「ごめんよお、だけど耐えてくれチビ！でもホントゴメン！と、心の中で思った僕たちだった。」

.....

.....

.....

「「「「「「「」」」」」」」」」」

「くう？」

古代の薬は、一応成功したらしい。

チビの身体の大きいさも、元のサイズに戻っている。

これならなんとか生活できる のだが。

ポフン!

「きゅくるうつー!」

チビは魔力の光に包まれ、魔力残照の煙に包まれたかと思うと、次の瞬間巨大化していた。

チビはスキル変幻自在を覚えたというテロップが流れた僕の頭はある意味末期でしょうか?

「シエルさん、これって……」

「あー、多分だけど竜の肉体が魔法的な作用に順応したんじゃない……かな?」

「いや、幾らなんでもそいつは……」

「ありえんな」

「でっけえ……」

『あら、可愛いじゃないですか?』

「」「」「」「」「」「」  
「」「」「」「」「」  
「」「」「」「」「」  
「」「」「」「」「」



いやはや、大きさ自由自在とかすごく便利だけどさ。

うーん、まっいつか。チビは一応無事だった訳だし。

とりあえずコレでこの騒動は一応の収まりを見せる事になる。

だが後に大きくなれるようになった弊害で、見た目よりもかなり食べるようになった

その為、食費が嵩むようになるとは、この時の僕は予想だにして無かったのだった。

\*\*\*

あ後は皆で夕食を食べた。

チビが異常に食欲旺盛になっていたのは驚いたけど、沢山ストックはある為問題は無かった。

だが、夕食会は何故なのかは知らないが、何時の間にか宴会に発展していた。

シエルさんがどこからか、お酒を持ちこんでいたのだ。

クレアさんとヴァルさんもご相伴にあずかり、僕も酔わない程度に飲んだのである。

ただ、シエルさんが結構飲む人で……一緒になって呑まんとけばよかった。

そして酔っぱらって寝ちゃったシエルさん以外は、そのまま自分の部屋に戻って行った。

部屋に残ったのは、酔っぱらってベッドを占領したシエルさん。

シエルさんに無理に飲まされて、コップ一杯で撃沈した紅。

食べて眠くなったのか、そのまま眠ってしまったチビ。

ソレと僕とウィンディが残されたのであった。

『皆さんよく呑みましたねえ』

「うん、楽しかった」

『ええ、本当に……ねえ、かなめ様？』

「なに、ウィンディ？」

食器をとりあえず流し台にしている洗面台に置いてみると、ウイ

ンデイが話しかけて来た。

『ありがとございます。私と契約してくださって・・・』

「うん？どうしたの急に？」

『いえ、ただ唐突に、そう思っただけですわ』

彼女は膝枕してあげているチビの白い毛並みを撫でながら、そう静かに呟いた。

契約か、あの時は死にたくないって感じだったから、考えずに契約しちゃったけどね。

今思えば知らない相手といきなり契約とか、無茶したもんだと思う。

そう言えば、アレからもう何日経過してるんだろうか？

『もうかれこれ2カ月くらいです』

「あれ？声に出てた？」

『いいえ、顔を見れば解りますわ』

むう、僕は考えが表情に出やすいのだろうか？

そう思っている僕を、彼女はクスクスと笑顔で見ている。

『新しく、家族が増えましたね』

「ううん、チビは元々家族さ。ただ姿がちょっと変わったただけだよ」

『うふふ、そうでした。ごめんねチビちゃん』

彼女はそう言うと、すーすーと寝息を立てているチビを優しく撫でる。

気持ちいいのかくすぐったいのか、少し身をよじるチビ。

「……くう」

『ふふ、可愛いわね』

「はは、まるでお母さんとその子供って感じだね」

『お母さん……ですか？ ソレも良いかも知れませんね』

彼女は僕の言葉に一瞬キョトンとしたが、すぐに穏やかな表情になった。

そして、隣で眠っている紅に寝相が悪くて下がってしまったシー

ツを掛け直してあげている。

言った自分でもう一回言うのもあれだが、その姿は本当に母親みたいだった。

精霊と言うものに、親子の概念は基本存在しない。

何故なら自然そのモノでもある彼らは、気が付けばそこに居たという風に生まれるからだ。

人工精霊である彼女も例外では無い。むしろ自然界の精霊と違い、長い事封印されていたのだから、そう言った人間の持つ情と言うものは理解しづらい事だっただろう。

だが、彼女は変わった。

何時頃からだろうか？紅とよく一緒に居る様になったのは？

何時頃からだろうか？掃除洗濯をするようになったのは？

何時頃からだろうか？そんな風に、優しく微笑むようになったのは？

ソレもこれも、全部この世界ですごしたわずかな時間の間に、身につけて行ったものだ。

僕というイレギュラーな存在が、契約したお陰ですっと実体化し

ていられる。

その間に、彼女は眠っていた時よりもずっと濃い経験を積んだのだ。

だからこそ、彼女にも変化があったのだろう。

・・・あーそうか、さっきのありがとうは、そういう意味か。

『この子にも、変外の制御方とかを教えないといけませんね』

「そうだね。まさか巨大化と小型化が出来るようになる何て思わなかったよ」

『頭はきつと良いですから、きつとすぐに制御をマスターするでしょう。・・・ねえかなめ様？』

「何？」

『・・・ずっと一緒に、こうして穏やかに過ごしたいですね』

「はは、少なくとも、僕が寿命が来るか、不慮の事故でも無い限りは大丈夫さ」

それまではずっと一緒だよ。だってもう僕たちは

「僕たちは、家族でしょ？」

『・・・はい』

見間違いだろうか？この時僕は彼女の目元が少し光った様に見えるた。

もう一度よく見てみたが、彼女はランプの明かりの中笑顔でたたずんでいる。

うーん、目の錯覚ってヤツだろうか？

『さ、かなめ様ももうお休みにならねないと、明日もシエルさんのお仕事があるのでしょうか？』

「そう言えばそうだった。・・・この分じゃ明日も大変そうだ」

ベッドを半分占領しているシエルさん、絶対二日酔いやりそうだから、仕事中機嫌悪いかも。

そう思うと、早く体力回復させとかないと不味い気がしてきた。

「それじゃ、僕は床で寝るよ」

『体痛くなりますよ？』

「大丈夫、<sup>イマジンツール</sup>ITもあるしね」

僕はそういうとITで布団を造り出した。以前の世界でよく使っていた布団である。

最近はITも一度に沢山魔力を込めれば、長時間長持ちする事も解ったし、寝ている間くらいは供給しなくても平気だと思う。

部屋の魔力式ランプを消し、僕は魔法で造り出した布団にもぐりこむ。

この学校に来てもう2カ月か、あと一カ月はあるとはいえ、随分早かった気もするや。

「それじゃお休みウィンディ」

『はい、おやすみなさいかなめ様』

こうして夜は更けて行く。この世界に来て何度夜を越えたかはもう解らない。

だけど、こうして毎日色々あって、僕は結構充実しているんだろくなあ。

そう考えつつ、僕の意識は段々と薄くなり、睡魔に吞まれたのだった。



『ずっと穏やかに・・・か。大丈夫ですよかなめ様、貴方の身体も  
少しずつ変化しますからね。だからきつと、平穏に生きていきます。  
きつと』

## 第45話（後書き）

チビの人化が不評だった為変更しました。

こういった風な指摘が来ると、俺はホイホイ変更しちゃっぜ。

ソレではノシ

第46話(前書き)

改訂しました

## 第46話

↓ 出歩いて… 落っこちて・第46話 ↓

さて、チビが大きくなったり小さくなれるようになった日から、さらに一カ月が経過した。

結局チビは元には戻らず、巨大化も小型化もどちらも出来るままとなってしまうた。

だが、竜のブレスそのままな火球を吹けると、元が竜だから対魔力能力が高い。

ある意味前衛にうってつけな為、現在紅が主体となって鍛えている最中である。

その他は、特に何かあった訳ではないので、書くことが無いから割愛。

何かやっていた事と言えば、いつもと変わらずシエルさんの研究の手伝い。

後は紅との模擬戦、ウインディが魔法の訓練をしてくれ、偶にゴ―研に遊びに行くくらいだ。

他はエル君が僕の魔法であるイマジンツールを、

参考に見てみたいと聞いてきたので教えたことかな？

最初聞かれた際、あまりにあっさりと、イマジンツールについて喋ったら茫然とされた。

普通魔法使いは自ら作りだしたオリジナルは秘匿するらしい。

どうもそこから辺僕は疎いんだよなあ。

まあ秘密にしたところでどうにかなる魔法じゃ無いから良いけど。

それにE.Tは誰にでも出来る魔法じゃ無い。

かなりのイメージと集中、それと継続した魔力運用が出来なければ扱えない魔法だ。

そこから辺チートレベルで持っている僕だからこそ扱える魔法であると考えている。

もっとも、エル君は1個だけ小さなナイフみたいなのが作れたけどね。1日で……。

まあこんな風に色々な事があつたが、僕の契約期間はこれで終了である。

今僕はシエルさんの研究室で、研究の最後のお手伝いをしている最中だ。

この後は報酬として貰える建物と土地を見せてもらおうと言う約束になっている。

長かったようで、今思うと短く感じられるのだから不思議なものである。

「シエルさん、これでどうですか？」

「ん？どれどれ・・・」

彼女はそう言うと、完成した魔法薬を魔力を当てて反応を調べたりして吟味する。

これは、以前チビがかぶってしまった様な未完成品とは違つ。

魔力を当てられても中身が変質しないように、保存液と呼ばれる

薬が配合された完成品だ。

彼女はしばらく火や水とかの様な属性を当て、中身を調べた後薬を作業台に置いた。

ど、どうだろう今度は？

「うん、ちゃんと言われた通りに作ってあるわね。貴方は今、傷薬・消毒・解毒の3点セットのポーションを作ることが出来る。基礎がようやく出来るくらいには成っているわ」

「本当ですか！？よかったです」

どうやら合格レベルらしい。

実の所、最後の手伝いとは名ばかりに、僕が彼女の助手として、何処ら辺までできる様になったかと言うのを計る目的もあった。

あの基礎3点を覚えるのだって、結構大変だった。

消毒は文字通りの意味だし、傷薬は所謂ゲームに出る様なポーションの事だ。

だが解毒が一番難しかった。何せ解毒とは言うが毒だって色々種類がある。

神経毒や溶解毒、生物系やケミカルなモノまで種類は恐ろしく多い。

特殊な呪いの様な類で無い限り、大抵の毒物に対し効果を発揮できる魔法薬。

ソレが“解毒”と呼ばれるポーションなのである。

何せ蛇毒や虫さされ、果ては植物の毒までこのポーション一つで解毒する事が可能だ。

流石は魔法薬、僕の世界では信じられない様な効果である。

「基礎が出来るようになったから、これ以上は自力で力を付けて行きなさい。

知識や技術を得る事も大切だけど、どんなことも経験に勝るモノは無いのだから」

「はい！ありがとうございますシエルさん！」

実を言うと、最近こう言った薬作りが面白くなってきたのだ。

色々な効果がある薬を作るのは、確かに大変なのだがやりがいがある。



いつその事薬師にでもなって見ようかしらん?とか考えていると

「さて、これでかなめ君は最後の助手としての仕事なのよねえ?」

「はい、今日が最終日です。この後も何か?」

「うーん、本当は人手欲しかったけど・・・まあ良いわ。それよりもこれ、ハイ」

「これは?」

彼女はそう言うと、僕に何か古びた表紙をした広辞苑サイズの本を差し出してきた。

かなり使いこまれてはいるが、丁寧に使われていたと言う感じである。

なんだろうかと思って本を眺めていると、シエルさんは微笑ましそうに口を開いた。

「私からの個人的なプレゼントよ。せっかく魔法薬の基礎が作れる程度にはなれたんだもの。ココでおしまいつ言つのは、勿体無いわ」

「と言つ事は・・・」

僕はそう思い本を開ける。表紙の裏に恐らく目次らしきものがあったので目を通した。

中身はどうかやら、この世界の文字で書かれた魔法薬のレシピであるようだった。

「私が若いころに作った、基礎の魔法薬が書かれたグリモワールよ」

「シエルさん……」

僕は声も出なかった。グリモワールと言うのは奥義書の事。

こここの図書室にある様なモノはそれ用のモノだが、これは明らかに個人のモノだ。

つまり文字通りの奥義の様なものであり、簡単に他の魔法使いに見せて良いモノでは無い。

例えソレが基礎的な魔法薬の本であっても、書いた本人の性質が現れるからだ。

「なんて顔してるのよ？ 貴方は魔法薬に関しては私の弟子みたいなものなのよ？」

だからソレ位のグリモワールくらい師匠の私の許可があれば読んでも構わないわ」

「シエルさん……いえ師匠と呼ばせてください」

「いやよ」

感極まってそう言ったら、普通に断られた。

思わずガクンとこけたのは僕の所為じゃ無い。

「いい？貴方の立場は弟子“みたい”なモノであり、私のお手伝い。それ以上でも以下でも無いわ。それに私弟子は取らない主義なの」

「なんか言っている事が矛盾してるような？」

「……まあ簡単に言えば、対等って事なのよ。お疲れ様かなめ君。これまで本当に助かったわ」

彼女は、どこか寂しそうな、ソレでいて楽しそうな表情で笑った。

「シエルさん……はい！こちらこそ貴重な研究時間の間に色々とお教えていただき、感謝します！」

「ええ！感謝しなさい！」

「つてええ〜！そう返しますか〜？」

そう言って僕等は笑いあつ。

何、仕事の契約期間が終わつただけで、いつでも会えるんだ。

こつこつ笑える関係の方が、僕には丁度良い。

「それじゃあ、一応準備がありますので」

「ええ、そうね。引きとめてわるかつたわね」

「いえいえ、ソレではまた後で」

「ええ。午後に門のところだね・・・そうだ、他の所にもあいさつ回りに行つておきなさい。お世話になった人もいるんですよ？」

「了解です」

そして僕は、シエルさんの研究室を後にした。

\*\*\*

「こんには、ミルドさん」

「ん？ああ、かなめさん今日は。今日はウチの大将に御用？」

「うんソレもあるけど、実際は僕の契約期間が過ぎるから、お別れをね」

食材をおまけして貰ったりした購買や、よく魔法薬の材料を仕入れに行った薬用植物温室。

その人達には、すでに挨拶周りを済ませている。

後、残っていて知り合いがいるのは、ココくらいだ。

「ああ、そう言えばかなめさんは、元々この学校の生徒さんじゃありませんものね」

「そう言う事だね。ここにも愛着がわいてきたところだから、少しさみしいかな」

「ふふ、こちらもです。そっかー、お別れですか・・・そう言えば紅さんは？」

少し下がった眼鏡の位置を直しながら彼女はそう聞いてきた。

僕はすこし苦笑の表情を浮かべながら、彼女の問いに答える。

「彼女は修業中・・・と言いたるところだけど、実際は何かこういう湿っぽい苦手なんだってさ」

「彼女らしいですね」

別にどっか遠くに行っちゃうわけじゃないんだけど・・・まあ気分ってヤツかね。

その気持ちも解らんでも無いが、後でちゃんとあいさつ回りはさせるつもりである。

お世話にあつた人や、親しい人達にちゃんと挨拶をするのは、礼儀だからな。

「そう言えば前に行っていた、タロスの2号機ってアレ？」

「ええ、運動試験機だった1号機の制御術式を受け継いだ、いわば弟君ですね」

「術式を・・・大丈夫ですかね？」

追いかけてくるアレは怖かったから、思わずそう聞いた。

「あ、今度は暴走もしませんし、変な改造もさせてませんよ？」

こちらとしてもあの騒動は色々大変でしたからね。  
アレで人的被害でも出てたらゴ－研がお取りつぶしになるところで  
したよ」

そうケラケラ笑うミルドさんだが、僕は追いかけて回されたから、  
ある意味被害者なんだよね。

ガントリーレーンから鎖で釣り上げられているタロス二号機は、  
まだ人型を為してはいない。

だが基本的なフレームは完成しているらしく、取りつける準備の  
為か近くの棚に手足がおかれている。

「アレが完成するのを、見てみたかった様な気もするけど」

「なんなら起動試験の時に呼びましょうか？」

そう彼女は言ってくれるが、僕は頭を振る。

そしてここに来た目的を思い出し、彼女に訪ねた。

「ううん。僕は部外者だからね。そこまでは、ね。所でヴァル  
さん達は？」

「あー、会長もヴァルさんも、今はちょっと学生会の方ですね。大  
方予算申請でしょうけど」

そっか、そう言えばココ大規模だから忘れてたけど、一応学生組織なんだよね。

予算は生徒会の方から捻出してる訳だから、しばらくは帰って来れないか。

「今頃生徒会長が、ウチの会長の覇気に当てられて泡吹いて無けりや良いんですけどね」

「……やりかねないだろうなあ。ソレを止めるヴアルさんの姿が目には浮かぶ。」

「そっか……じゃあ、伝言頼める？僕は午後になったらココを出なきゃいけないんだ」

「午後にはですか？速いですね。でも了解しました。かなめさんが来たことをお伝えしておきます」

「うん、ありがとう。今度遊びにでもこれたら、何か皆に差し入れでもするよ」

僕はゴーレム関係は素人だから、ここに来てても手伝えることは無い。



でも只遊びに来るだけだと、なんか心苦しかったので、僕は何度か差し入れを作って持ってきた事がある。

それなりに好評だったが、ヴァルさんの作ったのには及ばないらしいのが、ちよつと残念。

「あはは、みんな喜びますよ。それじゃあ、かなめさん」

「うん、それじゃまたね」

うし！これで一応回らなきゃいけない所は全部回ったぜ。

はー、すっかりこの学校に3カ月もいたのかー。

「・・・ちよつち、寂しいもんだねえ。やっぱり」

とりあえず、部屋を引き払う準備は終わっている。

後は報酬の確認だけだし、貰える報酬は何と家だからね。

一体どんな家なのか・・・今から楽しみだなあ。

\*\*\*

午後となり、一応あいさつ回り（チビと紅も後でひっ捕まえてやらせた）も終わった僕たち。

そのまま学校の門の所に集まっていた。報酬となる家の場所まで案内して貰うからである。

しばらくして、シエルさんが門の所にやってきた。

「全員居るわね？それじゃ、向かうわよ」

彼女はそう言つと僕達に歩くよう促し、彼女が頼んでおいた馬車の所に案内する。

僕は空を飛べるが、彼女は飛べないので、道案内をして貰う為に今回は馬車で移動なのだ。

そして適度に馬車に揺られる事2時間弱。

そろそろお尻が痛くなりそうになってきた所で、馬車がギイっという音と共に止まる。

どうやら目的地に着いたらしい。位置的にはガラクトマンとクノル間の森の中ってところか。

「街道近くに隣接されてるの。すこし小道を抜けなきゃいけないけどね」

そういわれ、街道から伸びる小道に入るシエルさんを追って、僕らも後に続く。

よくみると、小道にもちゃんと魔獣避けの石塔が並んでいる。

ん？でも少し街道にあるのと形が違う？

「この小道とこの先の家に付けられている魔獣避けは、学校側の試作モデルなのよ」

「試作モデルですか？」

僕が不思議そうに石塔を見ていた事に気が付いたのだろう。

彼女は歩きながら、僕に説明をしてくれた。

「そう、街道沿いののが正式タイプだけど、安価に仕上げる為に太陽の光を触媒にしているわ。だけどこっちの試作魔獣避け石塔はね？ 大気中の魔力を使用するタイプなのよ。だから夜でもここいらの魔獣程度なら完璧に避ける事が出来るの」

成程ねー。試作だからこそ最新の技術が付けられている訳か。

道理で街道から外れてる小道なのに、魔獣が一匹も出ない訳だ。

「序でに言うと、この小道沿いの森には、この石塔が幾つも分散して立てられているから、魔獣はほぼいないわ。稀に強い個体が居たりするけど、ほぼそう言う事は起こらないから安心して」

この先の家の周辺に魔獣は殆ど現れないわ      と更に捕捉をしてくれるシエルさん。

まあこの先住むかも知れないのに、魔獣が出まくる様な家だったら少し困る。

でも、なんか試作品を使っで有るとか・・・。

もしかしてこの先の家にも何かしてあるのかな？

そんなことを考えていると、少し視界が開けた。どうやら森の中の広場に出たらしい。

大体広さ的にはテニスコート程度だろうか？その真ん中にポツンと家が建っていた。

「さ、着いたわ。この家が貴方達に報酬として渡される家よ」

「おお、よく見ると2階建てだ」

「緑っぱい屋根と・・・木造か」

「・・・くう！」

『意外と手入れが行き届いてますね』

うん、中々いい家だと思う。

屋根は濃い緑色の塗料を施された三角屋根。

壁は丸太を組んだログハウス調、窓にはちゃんと雨戸も取り付けられる。

見た目は地味だけど、頑丈で長く使えそうな感じだ。

「後で中は自分たちで見て貰おうことになるだろうけど、この家は地上2階建ての試験用木造住宅の一つよ。色々なテストを兼ねて、

森の中に作られたモノの完成品なの」

シエルさんの説明によると、対魔獣対策用の実験施設として、学校は幾つかこう言った建物を保有しているらしい。

この家は特に魔獣対策を念頭に置いて作られた家で、外壁は一見すると木造であるが、中に錆びない様に魔法処理が施された鉄板が仕込まれているそうなの。

また、魔法使いが住む為の実験モデルも兼ねていたので、地下に工房的な場所も完備。

水道は地下水から魔法で組み上げ、灯りも試作型の魔力ランプで取ってある。

そして性能や機能検査が終わったので、この家を報酬として貰えるんだそうなの。

ソレを聞いた僕は、け、結構お高いんじゃないの？と脳内で考えた。

だってなんか聞いてると至れる付くせりの機能ばかりである。

僕らがクノルで拠点にしていた宿屋は井戸だったし、学校もそうだった。

「ただどこにきて水道があるのだ。蛇口をひねると水が出てくるとか……。」

「本当はこの試作品達も取り外してから、貴方達に渡される予定だったのよ」

「……予定だった？」

「そう予定だった。だけど私がソレをやめさせて、そのままの形で貴方達の報酬にしたの。頑張ってくれたからね。モルモ……もとい、実験にもちゃんと参加してくれてたし」

「一瞬間きたくないような単語が混ざっていた様な気もするが、気にしないようにしよう。」

「むう、しかし……」

「なんか、本当にシエルさんには頭が上がりません。こんな素晴らしい住居が貰えるなんて」

「ふふ、もつと感謝しなさい。……まあ一応一つだけ守って欲しい事はあるわ」

「何ですか？」

「一応見ての通り、この家は試作品の塊でもある。だから、もし引き払う時は必ず学校側に一言連絡を入れなさい。ソレとギルドの仕事」

事とかで遠征に出る場合は、必ず出る前に家に結界を張る事。もし賊とかに入りこまれたら厄介だもの」

それ以外なら家を建て直そうが、増築しようが全部貴方の自由よ。

とシエルさんは言ってきた。これはもう本当に頭が上がりん。足向けて寝られない。

「それじゃあ、後はこの書類を渡しておくわ。この周辺の土地の権利書とかね」

「はい、ありがとうございます。シエルさん」

「いいのよ、性能試験は終わってるけど、いまだモニターとかは欲しかったから」

あ、やっぱりそう言うのもあるんだ。

「言うておくけど、別にレポートとかはいらないわよ?」

え? そうなの?

「あくまでもちゃんと住めるかの意味だから、貴方達が住めば住むほど、ソレが結果になるの」



あー、そう言う事ですか。つまりは僕らは長期的なモニターな訳だ。

魔獣などの危険あふれる世界で、家一つで安心してすめるかと言うヤツのね。

とりあえず貰った書類は、かばんに入れておくことにしよう

「それじゃあ、私はこれで一度戻るわね。あとは好きにしても良いわよ」

「え、もう行くんですか？」

「まだまだ実験スケジュールはあるのよ。ねえホント助手やらない？」

「あ、あはは、まあ考えておきます」

「やるなら絶対連絡しなさい？良い給料で雇ってあげるから」

そう言うと彼女は、この場を去って行った。

ソレを見送った後、とりあえず僕らも家の中に入ったのだった。

\*\*\*

家の中は、一階は台所やお風呂やトイレの水回りが集中し、リビングが一つある構造だった。

二階へは、リビングから吹き抜けのようになっていている空間にある階段から上がり、寝室が二つある。一階はお客が来ても大丈夫で二階はプライベートスペースと言った感じか。

地下室の方は途中まで石造りで、半分は魔法で強化されたコンクリートの様な物で出来ていた。

暗いのかと思えば、試作型の魔力ランプが明るい為それ程では無く、むしろ明るい。

またシエルさんの所でも扱った様な、魔法薬生成に使える設備もあった。

「こりゃ本当至れり尽くせりだわさ」

「ん？こつちにも扉が・・・」

僕は紅と一緒に地下室を見に来たのだが、いやーホント研究室と大差ないわ。

流石に地下だけあって少し狭いけど、でも一人で研究する程度には十分すぎる。

……ポーションでも作って売って歩こうかな？

「ふうん、食糧庫じゃねえか？ココ」

「えー！？ ホントだ」

そして地下研究室の隣には地下食糧庫へと入れる扉もあった。

こちらの食糧庫は、上の台所とも戸板一枚でつながっているらしい。

もっとも、今は食材を補給していないので、食糧庫は空っぽだけだね

「ふーむ、後で氷属性の刻印を刻んで……あ、そうだ。時間を遅くする刻印を刻んでおけば」

「へえ、ココから台所につながってたんだ」

「ってちょっと待って、おいてかないでよお」

とりあえず、この後は食材を仕入れにクノルまで行かないといけないな。

ガラクトマンは、僕たちはもう部外者だから、入れないだろうし・  
。。。

さあて、ITシールドボードで一つ飛びしてきますかねえ。

\*\*\*

「あれ？なんか人数が増えてる様な？」

「「「おかえり」」」

一人で一度クノルに行つて食材を購入した僕。

その後、大きなリュックを背負つて帰宅したのだが

「エル君、ヴァルさん、それにクレアにシエルさんも？！よく見たらレンさんまで！」

「やあカナメ、私に伝言のみとは水臭いな。だから此方から出向いてやったぞ」

「まあ、本当は引越し祝いとかも兼ねてんだがね」

「僕はまたこの人に捕まって・・・でも、かなめさんの所に来たかったからちよつど良かったです」

「ふふふ、お酒も持ってきたから今日はパーティーよ！」

「クノルに行っておったのか？どうやら入れ違いじゃったようだな」

片道2時間もあるのに、みんなでお祝いに来てくれたんだ。

なんだろう？とつても嬉しいや・・・よおっし！

「そ、それじゃ！すぐに料理とか色々作ります！」

「よし！手伝おう・・・ヴァルがな」

「はいはい、ま、会長に手伝わせるよかマシでしょう」

「それはどういう意味かな？」

「・・・覇気は止めてください。つーか以前俺ん家の調理場破壊したじゃないですか」

「うぐう・・・」

調理場破壊？何したんだろう？つとそんな事よりも早い所作ろう。

せつかく集まってくれたみたいだし、もてなさないのもアレだし

ね。

「あの、どうでもいいですけど、かなめさん行っちゃいましたですよ？」

「っと、この話は後にしよう。ヴァルよ！手伝って来い！」

「りょーかい」

『私もお手伝いしに行ってきますわ』

「おう、行ってこい行ってこい」

「つまみも作っておいと、かなめ君に伝えておいてね」

『クスツ、解りましたわ』

この後はまだ使われていなかった台所を余すことなく使い。

ヴァルさんとウィンディも手伝って、引っ越し祝いのパーティの準備をした。

やるとは思っていなかったのに、家庭料理的な食材しか無かったけど、それでも皆は喜んでくれた。

その日は夜遅くまで皆で騒ぎ、シエルさんが持ち込んだお酒を飲んだりした。

結局皆泊って行く羽目になり、急きよ寝る場所を作った。

勿論予備の毛布程度じゃ足りなかったたので、僕のＩＴを使って布団を作ったのだ。

ちょっと疲れたけど、それなりに楽しかった。

何だかちょっと合宿みたいだったしね。

女性陣は二階の部屋で、レンさん、僕、ヴァルさんはリビングで雑魚寝した。

そして次の日の朝早く、みんなそれぞれの場所へと戻って行った。

でもレンさん、あなた何時の間に転移方陣を刻んでおいたのですか？

しかもクノルとガラクトマンの両方につながるゲート作っちゃって……。

クノルはともかく、ガラクトマンは許可居るんじゃないの？

まあ、行き来がしやすくなるのには賛成だけども。

「……………ふう、さてと今日はどうし」かなめ！大変だ！」「どうし

たの!？」

そして慌てて入ってきた紅、一体何が

「昨日の宴会で、食材全部食われちまってるぜ！」

「……………また買いに行くのか」

うう、結構食料品の荷物を背負うの大変だったのに…………。

シールドボードに乗せたら、二人乗り出来そうも無かったから一人で運んだのに…………。

『かなめ様、安心してください。レンさんの残したゲートを使ってクノルに行けばいいんですよ』

「……………よし、今日はとにかく全員でお買い物だ!チビも手伝ってね?」

「くあう!」

そして我らは引越しをした次の日に、さっそく食材の補給へと向かったのだった。





## 第46話（後書き）

\* 終わりじゃないけど一区切り。

この後は少し改訂とかしたいので、少し更新が遅れます。

ソレではまた次回に

## 第47話（前書き）

\*かなり遅くなりましたが、やく一カ月ぶりの投降です。

ですが次回の投稿は未定・・・また一カ月もたっちゃったらごめん下さい。

チビの部分を結構改訂しました。

## 第47話

「出歩いて…落っこちて・第47話」

さて、新しく家を手に入れて、新生活がスタートした僕達。  
そして最近の僕は

「こつちとこつちを混ぜて　すこし火力足りないかな？」

日がな一日、魔法薬の研究を続けていた。

実を言うと、これまで家を買う為に溜めて来たお金がある為、無駄遣いをしなければ生きていけるほどの金額がある。だから、実質働かなくても大丈夫なのである。

もっとも、何かあるかは解らないし、引きこもるつもりも毛頭ないので、定期的にギルドから仕事を請け負ってはいるが、その数も家を手に入れる前に比べたら圧倒的に減った。

時間的な余裕も生まれ、魔法薬研究以外の魔法研究みたいなものもめり出している。一応魔法使いを名乗っている以上、もう少し色々魔法が使えないと格好が付かないからだ。

そして、時間制御魔法をもちいて　発酵物を瞬時に作れるよう

になった。魔法万歳。

その研究成果は、我が家の食卓での食事レベルを引き上げ、潤す結果となっており、段々日本の味的なモノも再現できるようになってきた。

大豆と塩はなんとかあったので、見よう見まねでミソ的なモノを作ってみようとしたのだが、今の所、ミソっぽい何かしかできないのが偶に傷だけだね。この間は失敗して納豆になっていた。

ちなみに納豆はすぐに作れたりする。蒸した大豆に藁束を入れて時間を操れば30秒もしない内に完成だ。意外な事に紅とかは納豆は平気らしく、曰く「野良のころにゴミ箱に良く入ってた」んだそう。

元々この世界の住人たちである、チビとウインディには不評だけど、なんとなく食べたくなる時には作っていたりする。……案外パンともあうもんだ。醤油が無いとちょっと味気ないが。

「……安定しない……ならば、猿の指とカエルの卵を……序でに彼岸華も」

「なぐにしてみた？かなめ」

「おわつと！！　　って紅か。ふう、脅かさないでよ」

「俺が入ってきたことに気が付かないお前が悪い」

相変わらず魔法薬調合に夢中になり過ぎて、誰かが来た事に気が付かなかった。

夢中になれることがあるのはいいことだと言うが、やり過ぎという言葉もあるから自重しなければなるまい。

「何かよう？ご飯はさっき作ったよね？」

「お前さんが俺に対してどう思っているのか小一時間くらい問い詰めたところだが、要件はちと違う。客だ」

「お客さん？それってシエルさん？レンさん？それともギルドの誰か？」

「あー、まあある意味ギルドの誰かって言うのは正しいのかもしれないが」

「????？」

なんか紅の歯切れが悪い。

ついてくれば解るとの事だったので、とりあえずラボから顔を出すことにした。

しかし、中々造れないなあ・・・魔法芳香剤。

\*\*\*

地下のラボから上がって、客がいるっていう居間の方に行くところ  
に居たのは……。

「あら？キースさん？」

「や、やあ久しぶりだな」

方向音痴の癖して冒険者やってるキースさんが、若干居心地悪そうにイスに座っていた。

キースさんは以前、荷馬車の護衛以来で一緒にやったギルドの冒険者の一人だ。

アレから少しはレベルを上げたのか、彼は中堅の冒険者クラスには到達している。

だが相変わらず、パーティーを組んで貰える事は少ないらしい。彼のもはや才能とも言ってもいい方向音痴を超えた方向音痴がある所為だ。

タダの方向音痴と言っなかれ、彼の場合秒目を離れた隙に居なくなるとか言うレベルじゃ無く、一緒に居ても居なくなると言う猛者なのだ。

ダンジョンでソレやられると、パーティの面々は当然探しに行かなければならない為、探索の時間を削られてしまう。その為彼はソロで冒険していることが多い。

そんな彼が何用得ウチに来たんだろうか？

「久しぶりですね。この間市場で会って以来でしたっけ？」

「うん！オレが市場で迷つてるときに偶然会って以来だ」

「あの時も迷つてたんですか？」

「あー、はは。いやまあ、あれはもはやオレのアイデンティティみたいなもんだし」

おいおい、方向音痴を個性にしないでくださいよ。

タダのなら問題無いけど、貴方は気が付けば周りにも影響出さじやないですか。

とりあえず台所にいたウィンディにお茶を頼み、彼にふるまう。

一応客人だしね彼。お茶の一つも出さないというのもあれだもん。

「それで、今日は何か用があつて？」

「いや、用があつたと言えはあつただけど・・・なんて言えばいいか予定にはなかつたと言つか」

「??????」

お茶を振舞い、今日来た理由を聞いてみたのだが・・・。

どういふ事だろう？



「うーん、実は用つてのは、かなめくんは最近魔法薬が作れるようになったんだって？」

「ええまあ、素人の薬つて事でギルドに安く買って貰いましたけど・・・」

塗り薬にも飲み薬にもなる回復薬系ポーションは、薬草と水があれば結構簡単に作れる。

薬草に関しては自家栽培を試している為、ストックに余裕があったから大量に作った事があった。

あまりに沢山出来た所為で、地下の薬品棚が一杯になってしまいかけたので、その大量の薬をギルドの方で使えないか交渉しに行ったのだ。

相場よか非常に安く買ったたかれたが、元手がほぼタダだし、幾らでも量産が聞くので特に気にしてはいなかったけど、その薬がどうかしたのだろうか？

「でさ、用つてのはその薬をオレに安く売って欲しいってことなんだ。ほら、オレって方向音痴じゃない？気が付けば魔獣に囲まれていることが多くてさ。回復魔法とか覚えてない剣士だし、回復薬は必須だけど、消費が多くて・・・」

「あー、そう言う事ですか」

確かに冒険してる者にとって、魔法の回復薬は欠かせないファーストエイドだろう。

怪我に病気に身体異常と何でもござれなもの、回復魔法が自前では扱えない人にとっては生命線に等しい。

たった一つの魔法薬が、たった一つの消毒薬が、たった一つの解毒剤が依頼によっては運命を分ける事もありうるのだ。

「まあ理由はそれだけじゃなくて、以前オレ怪我してギルドの医務室で治療受けた時金が殆どなくてさ。安くていいからって言ったなら医者がかねめくんが作った薬持ってきたんだよ」

そういつてズズズと差し出した紅茶を飲むキースさん。

あんときはさんさんだったよ漏らしていた。

「まあ素人の作ったモノだし効果は期待できないとか思われてたんでしょうね」

「ところがどっこい、安さに目がくらんだオレは医者からそれを購入して使った。どうなったと思う？」

「えーと、ある程度回復した？」

まあ一応効く用にした訳だし・・・何か副作用でもあったんだろっか？

「いや、心配しなくてもちやんと効いてたよ？」

「……口に出してましたか？」

「表情見れば解るよ」

さいで。

「それはさて置き、さすがに全回復とは行かなかったけど、殆どの怪我が治っちまった。医者が目を丸くしてたくらいだぜ。おまけにすぐに効く用にも思っ、かなめくんの薬を飲んだんだけどそれがまた美味しかったんだ。美味しい薬なんて普通は無いからね」

普通魔法の回復薬系は無味無臭である。

または強烈な苦み、渋み、甘み、辛み、絡みのどれかが付属するというのが、この世界における世間一般の認識だ。以前作った耐熱ポーションとはまた違っているのである。

え？最後の字が少し違う？いやいや蠢く魔法薬つてもあるんだよ？

スライムみたいなヤツが傷口から入り込んで治療するタイプの塗り薬。

初めてその薬の存在を知った時はものすごく気持ち悪いと思ったけどね。

効くには効きそうだけど、心にべつの傷を負わされそうだから僕なら使わないだろうなあ。

そう言えばなんとなく作った薬のいくつかがあまりに味気ないから、効果を損なわない程度に味付けしたんだっけ。ただ単に簡単にジューズとかとブレンドしただけなんだけど・・・誰か考え付かなかったのかしらん？耐熱ポーシオンにはオレンジ味とかあるのに、おかしな話だよな。

でもあの薬の作り方はシエルさんに教わったものだし、効果的にはあまり市販のと大差ない筈だけど・・・フルーツジューズと混ぜた時に少し成分が変化しちゃったのかな？

あとでもう一度作って調べとかないと・・・。

「まあ良いですよ。自家製で数はあまり多くは作れませんが、傷薬のポーシオンは他の薬を作る時の土台としてよく造りますから、ソレのあまりでよければ」

「助かるなあ。こんなにすぐに了承してもらえると本当に助かるよ」

「まあ価格としては相場の半額程度で良いですか？」

「・・・もう少しまけられない？」

「ん〜、手間がいりますからね〜（実際はそれほどじゃないけど）」

「むむっ、まあそれでも安いからいいか」

ちなみに普通は傷薬と解毒と消毒の三点セットで売られている為、バラで買う事は少ない。

だが彼の希望でそれぞれ別個で購入、それぞれが欲しい時は事前

注文と言う事にした。

味付きが好評だったので、一応ソレも飲み薬専用って事で作ることにしておいた。

飲むだけで回復出来るだけでもすごいのに、味付きが欲しいとか人間ってのは欲が出るものだなあ。

「・・・あれでも本来の予定じゃないとか？」

「ん？うん。まあね。実はもっと後に来る筈で、今日はべつの仕事があっただんだ」

「????でも今キースさんはここに」

「そう、何故かココに居る。しかもオレはこの家への行き方についてはまだ聞いていなかったのにもかかわらずね。それはつまり」

「っ、つまり？」

ゴキユっ と唾を飲み込む僕。

彼は某クイズ番組が良くやっていた無駄に溜める様な感じで溜めを作った。

そして、その口が開かれ

「俺が方向音痴であらぬ方向に行ったら何故かココに辿り着いていたのさ」

その答えを聞いて、イスからこけた僕は悪くないだろう。

「ほ、方向音痴ですか？」

「そ、本当ならゴブリン退治をしに農場に行く途中だったんだけどねえ、なんで森の中に居たんだろうか？」

「いや、僕に聞かれても」

もはや幸運とかそんなレベルじゃないよソレ。

迷うって言うのは迷った最初は本人気が付かないだろうし、無意識でこつちに來たって事？

考えてみると荷馬車の依頼からそれなりに彼も数をこなしているらしいし……。

それでも大抵生きて帰って来れるとか、凄まじい幸運だ。

以前は見れた僕のステータスの幸運値の百倍はあるんじゃないだろうか？

なにかに愛されてるんじゃないかな、キースさんって……。

「……ま、いいか」

とりあえず考えない事にした。考えたところで解らないもの。

・・・  
んで、僕は地下室へと向かった。

キースさんには適当にくつろいでいいよと言い、僕はラボにある保管庫へ向かう。

そこに作った薬は大抵この保管庫の薬だの中に保管してあるのだ。

ちなみにこの保管庫には僕が手を加えて、時間制御術式とかもろもろ弄ってある。

その為、個々におかれた薬は品質が通常の数百倍は長持ちするし品質が変わらない。

いやはや、時間制御魔法覚えておいてよかったよ、ウン。

「えーと、回復薬はこっちで・・・」

棚から適当に選び、ソレを近くの机に並べる。とりあえずは300ml程度の瓶を5つ。

飲み分ければ一個につき3回の使用が可能だから、計15回分の回復薬だ。

一応味付き、今回はリンゴ味というかリンゴの果汁を加えただけ。耐熱ポーションのオレンジ味はいわば作る過程で出来る人工的な味な為、果汁とかはいれない。

とりあえず果汁を入れた傷薬ポーションだが、キースさんから聞いた話だと少し品質に変化が見られるらしい。それを調べる為に解析の魔法サーチを使う事にした。

ステータスは表示されなく放ったけど、成分を調べる等の解析魔法として使える。というか本来はそっちがメインらしい。ステータスが見れたのはあの手帳のお陰だったのだろう。閑話休題。

「さて、サーチ」

魔法を発動させると、小さな魔力の球体が現れ、そこから平べったい光が出て、目の前のポーションを解析していく、イメージ的にはSFのデータスキャン的な感じかな。

しばらくして解析が終了し、僕にしか見えていない魔法のウィンドウに目を通す。

様々な成分が表の用に羅列され、知識の無い人間からしてみれば何かと思うかもしれない。

だが、シエルさんに叩きこまれた知識と、レンさんのところで相変わらず立ち読みした知識があれば大抵解る。

どうやらそれ程大した変化もなく、副作用的なモノは無いと判断出来た。

あるとすれば、何故か筋肉疲労を和らげる効果がある程度。多分新鮮なフルーツを使用したからだと思われる。

「ふむ、大丈夫っぽいね」



味見もしてみる、もともと無味無臭だったから、特これと言って変な味はしない。

ただ少しリンゴの風味が追加されているだけだ。

しかし味的には水と割った様な感じがした為、はちみつでも混ぜてみようと思う。

適当にはちみつを混ぜて、良い塩梅になったところで保存薬と混ぜて品質がこれ以上変質しない様にする。

これでこのポーションはこの世界では珍しい“果物風味”傷薬と言ふ事になった。

後はこれを上にいるキースさんに持って行ってあげるだけだ。

ふと、瓶にも改造を施しておこうと思ひ、そう簡単に割れない様にする術式を刻んでおいた。

戦闘をおこなう冒険者である人間には、結構ありがたいサービスだと思ふ。

僕は薬を布袋に入れて、地下室を出た。

「はい、もってきたよキースさん」

「お、早いね」

「ストックしてあるからね。とりあえず今回はリンゴはちみつ味、よかったら感想聞かせてよ」

「なるほろ、オレにリピーターをやれって事だな？よし任せろ！見事達成してやる」

「はは・・・（別に依頼じゃないんだけどなー）」

微妙にずれていらっしやるが、まあ僕としては定期的な収入が得られそうなので問題無い。

彼が冒険者を続ける以上、回復薬は必ずいるだろうからね。

ちよつと腹黒いかなとか思いつつも、そろそろ仕事に戻ると言うので玄関までお見送り。

「でも大丈夫？」

「なにが？」

「いやだって、個々に来る時も方向音痴のソレで来ちゃったんでしょっつ。」

「・・・あ」

ぼくぼくぼくチーンという音が聞こえた気がした。

「・・・誰かに案内させましょうか？」

「うっ、お願い出来るっ。」

よっしゃ、任せとけとばかりに彼の肩をポンと叩く。  
流石にうなだれている彼を放置するのも忍びない。

さて、誰に任せようか・・・ここは無難にウィンディでいいかな？  
あ、でも僕からあんまり遠くには離れられないんだっけ。  
それじゃ紅にお願いしよう、うん。

「ちょっと紅を呼んできますよ。彼女なら貴方も安心だろうし」

「紅ちゃんか。うん、たのむよ」

とりあえず紅を呼んだ。

何処に居たのかは知らないけど案外すぐに来たから部屋に居たんだろう。

彼女にキースさんを以前ゴブリン退治に行ったあの農場へと連れていく用に頼む。

紅もキースさんの方向音痴の凄まじさは知っているので、すぐに了承してくれた。

背中のベルトに愛用のミスリルソードを取りつけ外套を羽織る。

「んじゃ、いくべ・・・っとそうだ、かなめーチビも連れてっていいか？久々の散歩だしさ」

「ん？いいよー。心配ないとは思っけど気をつけてね」

彼女がチビを呼びに行く、あの子も今は部屋に居る筈だしね。

「チビって確かあの小さい童の子供だっけ？」

「ええ、まあ。もっとも少し変化してますけど」

「へえ大きくでもなったのかい？」

「うん、ある意味そうですね」

「?」

ある意味ね。そう、ある意味。大事なことから二度言ってみた。紅が呼びに行き、すこししてトタトタという足音が聞こえてくる。

「お、きたね。久しぶりチビ」

「くう！」

紅の肩に乗っかっているチビに、キースさんは軽く挨拶をする。チビもそこら辺は理解しているのか、鳴き声で返事を返した。

「……あれ?でもどこら辺が大きいの？」

「それは外に出れば解りますよ」

ここは家の中だしね。流石にここでは大きくなれない。  
そんな訳でさっさと外に出る僕たち、キースさんは首をかしげつ  
つも追従してくる。

とりあえず家を出て、家と森との境目にある、やや開けたところ  
まで移動した。

それじゃチビ、頼んだよ、というとチビはくう！と返事を返す。

チビは紅の肩から降りると、パタパタと僕達から少し離れた所に  
移動した。

「ん？何をするつもりなんだい？」

「見てれば解ります。ほら、始まった」

チビはすこし首を下げ、踏ん張るかのような姿勢になっていた。  
くくくと少し苦しそうというか、集中しようとしているかの様な  
感じで鳴く。

キースさんには見えていないようだが、ウィンディとの契約を交  
わしている僕には、精霊の眼を通じて、感覚的に魔力がチビに集中  
していく様が見て取れた。

そしてその魔力が一定量を超えた瞬間、凄まじい光が辺りを包み  
込む。

「ひえっ！なんだ！？というか目がぐ～目がぐ～！！」

「あ、直視すると目が眩みますよ？」

「そーいうことはもっと早く伝えてとお願いしたい！」

目元を抑えて、のたうちまわっているキースさんの眼を魔法で治療してやり、なんとか落ちつかせてやる。その頃には魔力光も大分収まり、ようやくチビの姿が見えるようになった。

雪の様な真っ白い毛並みは、そのままに巨大化し、2本のつのも雄々しさを増している。だが、その毛並みは大きくなったにも関わらず、非常に柔らかかで細かな毛並みであり、あの小型状態の時のモフモフとしたフワフワ感は消えていない。

むしろコレで大丈夫なのかと思うのだが、この状態のチビの体毛は刃物でも容易にはキレないのだ。羊毛を取る際の鋏を借りて、切ってみようとした事があったが、あまりに柔らかすぎて刃が通らず、ミスリル製のフォルシオンでも切れない上、柔らかかな毛並みが衝撃を吸収する為か打撃にも強い。

おまけに魔法にも耐性があるので、防御力は非常に高い状態にあると言えるだろう。元がハニーヴァイスとは思えない位の変化であるが、竜種を研究している人間はグランシュバツテ王国にはいないらしいので、研究用として狙われる事は無いだろう。何より飼い竜な訳だし、勝手に持って行くものなら飼い主（僕）の怒りを買う事になるだろうしね。

「はへ〜、なるほど確かに家の中じゃ見せられないわな」

「この状態だと背中に人を乗せられますから、かなりの速さでイケ

ますよ？」

「……乗り心地は？」

「毛がモフモフして最高」

「乗った！」

そんな訳で一応帰りの時の為に紅と相乗りするキースさん。

大きくなったチビの背中は大分スペースがある為、詰めれば4人5人は行ける。

チビの長めの体毛に腕をからませたのを確認し、チビに飛び立つ様合図した。

チビは非常に頭が良く、僕たちといった事がある所へなら飛んでゆく事が出来る。

そしてキースさんは飛びたつチビに揺られて、僕らの家を後にした。

それを見送った僕は、あー、また葉増産しておこうと思いつつ家へと戻ったのだった。

第47話（後書き）

しかしただどなかなか改訂が進まないのに新話出すとか・・・おれって・・・。

ひゃっはー、やっぱり我慢できねえ！新話投下だ！

って感じなんだろうなあ。オレの頭大丈夫かな？



## 第48話（前書き）

一カ月どころか、一カ月半以上も間を開けてしまいました。

こんなダメな作者が書いておりますが、何時も読んで下さる方々に感謝です。

それでは長々書いてしまいましたが、本編をどうぞ。

## 第48話

く 出歩いて…落っこちて・第48話く

「 yeah、相変わらず毎日を薬品作りという地味で爺むさい趣味で過ごしているかなめです。」

「 でも薬品作りも生業となつて来たから、必ずしも趣味と言えるかは微妙何ですけどね。」

「 最近は森にあるキノコ類を集めたり、苔を採取したりすることにハマってます。」

「 菌糸類は非常に種類が豊富で、魔力で変化しやすいから実験には最適です。」

「 ただ、ちょっとやり過ぎて菌糸類がモンスターみたくなってるけど…。」

「 ちゃんと処理したので大丈夫 だと思いたい。」

「 …… 　　そして今日もそう言った実験で一日が始まると思っていた。」

「 「孢子く リンプんく たまねぎく 序でにアヒルの雛くを魔力と共にブチ込んでく」」

即興で思い付いた謎の歌を歌いながら、いつものように魔法薬の調合をしていた。

ちなみに歌の内容と、今調合中の薬品の材料とは全く関係がない。流石に胞子とリンプンと玉ねぎとアヒルの雛だけじゃ薬にはならないからね。

これにプラスして、例えば何やら属性が内包された鉱石を混ぜたりとかしないと意味がない。

魔法薬を作るのに、そんなところらの材料で作れてしまっても困る。それでは先人たちが苦労して作り上げた意味が無いからだ。

ミリ単位以下の、もはや勘に頼るほかない程の正確性も試されるのである。

とはいえ僕が造る魔法薬は、例え鉱石が無くても自力で付与させる事も可能ではある。

実際回復薬系はハーブとかの組み合わせ＋魔法と魔力だけで良い。ピーカーとフラスコとアルコールランプ、それと蒸留機と魔女の鍋があれば最適だ。

「じつくりちよろちよろ弱火でじつくり、沸騰させない事がコツさ」

誰に言うつでもなく、独り言を言っていると、後ろから足音が聞えて来た。

ちらりと見れば紅が階段を下って、此方へと歩いてくる。

地下の研究室に来るって事は・・・もうお昼時かな？

「かなめ〜今良いか？」

「ん？うん、大丈夫だよ」

半ば完成していた魔法薬を火から降ろし、鍋置きの上に置いた。  
やや大きめのビーカーに入っている薄緑色の液体からは、どこか  
乾草の様な匂いが漂い。

部屋の中に充満していく、うん悪くない匂いだ。

「何か用かな？いま丁度“渋い香水シリーズ乾草編”を作っていた  
ところなんだけど」

「草の匂いがすると思ってたらソレの所為か。ああ、そうそう、ま  
た来てるぜ？」

「また？・・・ああ、キースさんね」

「また薬が欲しいんだとさ。でもこの間渡したばつかな気がするけ  
どな」

「ま、あの人の事だしねえ。また何処かで迷ってたんでしょ。ちょ  
っと待っててもらえるように伝えてくれる？僕は適当に薬を見つ  
くろっておくからさ」

「アイ解った。伝えてくるぜ」

彼女が尻尾をパタパタさせながら上に戻っていくのを見送りつつ、  
僕は薬品棚に足を向けた。

アレから結構な頻度でキースさんが来るようになっていた。どうにも安くて効き目がある薬に味をしめたらしい（味覚的な意味でも）

その為、結構まとめて買って言うてくれる為、こちらとしては定期購入の収入が入る。

お陰であんまりギルドの仕事をしなくても生活できるようになってしまった。

腕を鈍らせない為、偶に仕事を貰うけど月に数度の頻度でしか無い。

まあ楽っちゃ楽だから、今の所この生活に不満は全然ない。むしろ幸せと言えるだろうね。

「えーと、味付き・・・味付き・・・あった」

下の棚から両手で抱えるくらいの壺を取り出し、台の上に乗せた。この中に回復薬（味付き）が入っているのである。

余りに頻繁に来るもんだから、大量生産して大きな壺に入れて保存しておいたのだ。

そして漏斗をさした空き瓶を取り寄せて、薬を瓶に詰めていく。

一個当たりで6回分、ソレを系10個分、6×10で60回分の薬だ。

コレだけあれば、怪我してもそうそう無くならないだろう。

まあ本当はあまり使用頻度が無い方が良いんだけどね。

怪我也病気もしないに越したことは無いのだから。

「……偶にはサービスしといて上げようかな」

ふと、薬品棚で目に付いた風邪薬の様な内服薬のセットも付けてあげることにした。

冒険者という職業柄、外で野宿はザラだから意外と風邪を引きやすい。

風邪と言うのは様々な病気と合併しやすい為、初期段階での治療が必要なのだ。

その為、意外とこういつた風邪薬とかは重宝される。

まあ実際は風邪薬じゃなくて、熱を下げる薬とか咽の炎症を沈めるとかそう言うのだけど。

元の世界にあったような抗生物質の薬が無いのだから仕方が無いと言える。

でも魔法薬はあるが、抗生物質とかはまだ造られていないっていうのが不思議である。

まあ元の世界でも風邪の特効薬は造られて無かったしね。

この世界の魔法薬を研究すれば、案外造れるかもしれないな。

とはいえこの世界にノーベル賞は無いんだけど……話しがずれた。

「さて……悠久の時間の中の零れ人」

短縮した呪文を詠唱すると、世界から音が消える。

何をしたのかと言えば、時を止めただけ。

正確には時の流れというモノから抜け出した状態だ。  
え？何でそんなことしたのかって？それは

「 3 / 2 / 1 . . . お待たせしましたキースさん」

「はっあつととど！？い、いきなりかなめくんが現れた！？」

いたずらの為である。

時を止めていきなりキースさんの前に現れた。別に深い意味は無い。  
い。

しいて言うなら、自分は魔法使だからからかうのも好きだった事だ。

まあその為に態々短縮詠唱とかを使うなんてやり過ぎたかな？ちよつと反省。

そして驚いて飲んでいたお茶を取りこぼしそうになっていたキースさんと、僕は対面する位置に座る。僕が座るとスツと横からウィンディが、僕の分のお茶を出してくれた。

とりあえず一口飲む。水属性が強い精霊のウィンディが入れてくれたお茶は、成分が調整されていて美味しい。

「ふう、おいしい。さて、とりあえず60回分の回復薬です」

そう言っつて瓶を渡すと「お、悪いね」と言っつて、彼は料金を支払った。

相場よりかは安いだろうけど、今回はちょっと多めだからそれなりのお金を貰う。

それを懐にしまうと、ふと気になった事を聞いて見る事にした。

「所でキースさん、なんか妙に薬の補給品度が上がってますけど、そんなに仕事受けてるんですか？」

「ん？ああ……実は結構大変な仕事があつてさ」

「大穴？」

「うん、まあ言っちまえば、ね。盗賊退治つて奴さ」

「盗賊……」

盗賊退治、一見簡単そうに見えるが実はかなり難しい。

何故なら魔獣討伐と違い相手は人間だからである。

それに盗賊と言っつても、質や規模にはピンからキリまであるのだ。義賊もいれば完全な悪賊もいるし、小規模から万を超える大規模な集団まである。

しかもソレらは絶えずこの世界の中を移動している為、所在地がつかめない事が多い。



山賊とは違い移動する為、基本的には被害が出た所にギルドが人を派遣していく。

そうして防衛を行うという仕事が多いが、キースさんが受けたのは討伐系の仕事だった。

「この時期そう言ったのが回遊してくるんだよ。んでクノルも狙われているらしくて、斥候団みたいなのも時々来るんだ。そう言う訳で俺達ギルドの人間が盗賊団の対処をしているって訳だ」

「成程」

道理で薬の使用頻度が高い訳だ。

魔獣とかと違って、盗賊だと剣や弓矢や槍や時たま魔法を使ってくる奴もいるらしい。

そう言った人間相手に戦う訳だから怪我する頻度も上がるってモんだ。

最近はクノルに行って無いから、そういった話を聞いて無かったよ。

「まあウチにはAクラスのギルド員が常に一人や二人いるから、盗賊が攻めてきてもそうそうに落されないだろうけどね。元々が国境を守る為の砦だった町だから防衛力も高い」

「道理で薬の補充比率が高い訳ですね。成程」

「ああ、てな訳でまた頼むよ。意外とこの薬仲間内でも人気でさ？」

「……まさか仲間内で売ったりしてないですよね？」

「え？いや、今はまだ手渡したりした程度だけど……売ったら不味いのか？」

「はあ、全くこの人は……。」

「あのですね。この薬はあくまで僕の好意という事で売ってるんです。だから値段もすごく安いでしょう？効果もそれなりだし。もし下手に人に売ってるのがばれると、僕が商人ギルドから目をつけられて下手したら暗殺者に殺されちゃいますよ」

「げ！そうなのか！？ 気をつけるよ」

暗殺者は若干大袈裟かもしれないけど、実際ギルドに目をつけられるのは不味い。

先にシマ展開していたのは商人ギルドの方なのだから、僕の方が新参になるわけだ。

それに冒険者ギルドにも、薬や武器専門の卸業者は存在している。

幾ら安いからって僕が造った薬とかが出回ると、以前からの薬が使われなくなる。

そうなれば商人たちは面白くは無いだろう。

彼らの商売を横取りしたという形となるのだから。

まあキースさんはちゃんと理解してくれたみたいで、友達にタダ

で緊急時に渡すだけにする事にしたそう。うんづん、ソレが良いよ。むやみやたらに敵を作る必要なんて無いのさ。」

「それじゃ、また薬が無くなったらくるよ。」

「ええ、ああそつだ。何時も買ってくれる薬の方におまけ付けときました。」

「お、悪いね。こりゃこれからもココで買わないとなあ。」

「はは、それじゃこちらでも量産しておきますかな。お願いしますよ常連さん。」

「ああ、任されよ魔法薬師さんよ。それじゃあな。」

こうして僕が造った薬を手に、キースさんは帰って行った。ソレで済んだら、平和だったのかもしれない。だけど実際平和に過ごせるといふのは、この世界じゃ稀な訳で。。。

キースさんが帰っていった日から、更に数週間後

「キースさんが戻って来ない？」

「そうなのよ、あの人配達依頼で戻らないなんて初めてだよ」

その日、久しぶりにギルドに赴いていた僕は、キースさんが行方不明になった事を聞いた。

どうやら盗賊討伐以外で受けた依頼で行方不明になってしまったらしい。

帰還期限を過ぎても戻って来なかったのである。

キースさんはある意味奇跡じゃないかレベルの方向音痴ではある。だけど、その実ちゃんと期限には間に合うという迷い方をする不思議な人間だった。

だからこそ彼は首になることは無かったし、冒険者としてやって来れたのである。

しかし、今回はその運も尽きてしまったらしい。

とある所に配達をしに行つて、帰って来ないという話だ。

「しかし、一体どこまで行つたんですか？」

「クノルから出て南西にある湖のほとりにポツンとある村よ。水没している遺跡の近く何だけど、水系の魔獣が多くいて普通の配達の人じゃいけないからウチに依頼が来てたのよ」

要するにキースさんはその依頼を受けて、一人で配達しに行つちやつた訳なのか。

んで、どうという理由かは不明だけど、今だ帰還してないと……。

「で、お姉さんは僕にその話を聞かせてどうしてほしんですか？」

「ん？んふふ」

お姉さんが目を細めて笑っている、まあ大体予想はつく。

「かなめくんには、この依頼を受けて欲しいの」

「ほいほい、ソレじゃあ行ってきます」

「おねがいね。その代わりに薬の販売には目をつぶっておくから」

「げ！バレてました？」

「ギルドの情報網は結構優秀よ？それに最近妙にキースくんの回復薬が充実してたしね」

「……まあ、営利目的じゃないからいいか。」

商人ギルドに目をつけられる可能性はあるけど、個人相手だしね。大々的に売らない限りは大丈夫だと思う。法律もないしね。

とりあえずギルドを後にした僕は、歩きながら依頼書を確認する。案の定、キースさんの探索、もしくは消息を辿る依頼が入っていた。

受付のお姉さんが何を思ってコレを僕に渡したのかはわからない。

けど、キースさんとは知らない間柄じゃないしね。

ああ見えてあの人は僕のお得意様になる訳だし、それに友達だ。探しに行くのも、やぶさかじゃないというか、むしろ心配だから喜んで受けよう。

とりあえずすべきことは

「薬とかいろいろ準備しないと・・・久々の旅かな？」

家に帰って旅の準備でもしますかね。

\*\*\*

さて、一度家に戻った僕は薬だにある薬を持てるだけ持ち家を出た。

今回は何とひとりで依頼を受ける事にした。

考えてみれば今まで大抵紅とかと一緒にだったから初めての試みで

ある。

とはいえ、ウェンディはその性質上、僕の中に居るのであるが気にしない。

「うんと、なんかのほんとしてる人通らなかった？え、僕？いや僕じゃなくて金髪系の人」

とりあえず家の方は紅に任せてある。

一緒に行きたがったものの、家に誰も残さないのは不安なのだ。

この世界は強盗空き巣が結構あるからね。万が一の為に紅はお留守番という訳だ。

見た目少女だけど、彼女に勝てる人間は少ないから大丈夫だとは思う。

「この先に村があるの？うん、ありがとう。コレお礼ね？」

所で僕はさつきから何をしているのかと言うと、道を聞いているのだ。

ちなみに聞いている相手は人間では無い。かと言って亜人とかでもない。

僕が話を聞いていたのは、道端にいた精霊さん達である。

精霊と言う存在は何処にでもいる、いわばこの世界を構成する空気の様なモノ。

彼らと上手く接触出来れば、これほど楽しい事は無い。

魔法の使用効率も上昇するし、何よりも色々な事が理解できるよ

うになるからだ。

あ、それと話を聞くとと言っても言語で会話している訳じゃないよ？道端に居るのはあくまでも下級精霊しかいない。

幾らウエインディと契約したお陰で精霊が知覚できる僕でも、彼らと話せる訳じゃない。

意思があるというのは解るけど、それを伝える言葉の様な術を持っていないからだ。

だけど、それでも何を伝えたいのかはおぼろげに理解する事が出来る。

イメージを送ってきたり、フヨフヨと動き回ったり、組み体操したりして伝えてくれる。

人間で言うところのボディランゲージみたいな感じだろうか？

ソレのお返しに魔力を分けると、下級精霊たちに非常に喜ばれる。

何と無くだけど、動物にご飯を上げた時の気分ってヤツかな？それに近い。

そしてどういう原理か知らないけど、この事は他の場所の精霊にも解るらしいのだ。

お陰でドンドン魔法の使い勝手が上がっている様な気がするよ。

ともかく、こんな感じでのんびりと道を精霊さん達に聞いて旅をした。

情報によれば、別にこのあたりで魔獣とかが一杯でたとか言う訳では無さそうだ。

そしてやはり、キースさんの様な人間が帰って来たという情報も



無い。

以前ここを村に向けて通ったのはキースさんのみであるらしい。月に一度クノルから商人がいくか行かないかの村だ。キースさんと誰かを間違えるという事は少ないだろう。

.....

.....

.....

さて、旅とは言ったものの、実を言えばその道のりは非常に短い。僕は空を飛べるため、間の工程を非常に短縮する事が出来た為である。

もつとも、それでも普通に歩いて一日程度の位置にある村らしいので飛ぶ必要も無い。

ただ少し走っただけで半日程度に縮める事が出来た。

草原を走り、小さな森を抜けて、湖へと到達する。

クノルから南西にある湖、正式な名は無いらしい。

けど、湖周辺に白い砂利が多い事から白の湖と呼ばれている。

「.....うん、あそこかな？」

湖についたので辺りを見回せば、対岸という訳ではないが少し遠くに集落が見えた。

それ以外に人の居そうな場所が無さそうなので、おそらくそこがそうなのだろう。

周辺の精霊さんにも確かめたから、恐らく間違いは無い筈だ。

「・・・すんすん、魚の匂いかな？」

その村へと向けて歩いていくと、魚の匂いを感じる事が出来た。何でだろうと思ったのだが、すぐにわかった。

この村はいわゆる漁村であり、湖の魚を漁師さんが引き上げている。

そしてそれをさばき、日持ちさせるために天日干しにしているのだ。

そのさばいた魚の匂いが、村の周辺にも流れているのだろう。

まあ魚は嫌いじゃないから特に問題は無い。

多少匂いが付きそうだが、お手製の魔法消臭剤もあるから大丈夫だ。

とりあえず村の門番と思わしき人物の元へとより、話しかける事にした。

「あの、すみません」

「……………」

門番の人に話しかけるが、何やら元気が無い。

何と言うか上の空というか、力が出ないといった感じだろうか？

門番なのにソレで良いのかと一瞬思ったけど、ソレは口に出さないでおこう。

「あ、あのう。すみません！」

「……………あ？あんだ、誰？」

「クノルのギルドから派遣された五十嵐と言います」

「あ、ああ……そのイガラシさんが何のようかい？見ての通りこの村には何も無いが……」

「えーと、以前この村に訪れているギルドの人が居る筈なんですけど、ご存じ無いでしょうか？」

「……………ギルドの人間？」

「その人を探しています」

門番さんは答えるのも億劫といった感じで、壁に寄りかかりながら応えてくる。

何でココまで元気が無さそうなのだろうか？

そう思っていると、門番さんが何かを思い出したかのように手を

ポンとする。

「ああ、あの薬をぎよーさん分けてくれた人か・・・」

「薬？もしかしてこの薬と同じ薬ですか？」

「おお、それだ。なんであんたが？」

「僕の手製ですから」

「何と・・・」

「どうやら間違いなくこの村にキースさんは訪れていたらしい。  
いまだ滞在しているのだろうか？その事を尋ねると門番はかぶりをふった。

「昨日まではいた。入れ違いだ」

「入れ違い？彼は帰ろうとしたのですか？」

「いや、この村の現状をみて良い薬を貰って来ると言って出て行ったきりだ」

「この後聞きだした話によると、どうやらこの村は今病気が蔓延しているらしい。

体力が低下し、元気が出ない上、原因が分からないらしい。

唯一魔法薬系を服用すると、一時的に体調が回復するのだそうだ。漁に出ているから人が居ないと思っていたんだけど、どうやら違っただけだね。

「なるほど、だからキースさん帰って来なかったんだ」

あの人はお人よしだ。大方この村の現状を見て自分の薬を分け与えたのだろう。

村の規模から考えれば焼け石に水だっただろうけど、関わっちゃった所為か余計に見捨てられなかったんだ。

んで、倒れた村人の看病とかも買って出たんだろう。

聞くところやらその通りらしく、昨日まで不眠不休で看病を行っていたらしい。

……非常にいやな予感がする。

僕は門番さんに情報をありがとうと言い、村を後にした。

そして一応近隣の精霊さん達にキースさんが通って無いかを聞いて探す。

でも、大体彼が行きそうな場所が解ったので、そっちに向かう事にしたのだった。

第48話(後書き)

次回更新未定、気が向いたら、かな。

## 第49章（前書き）

忘れられてしまったかもしれませんが、ものすごい久しぶりに投稿します。久々にこっちを書いたのでちょっと感じ変わったかも知れませんがお許しを。

## 第49章

↓ 出歩いて… 落っこちて・第49章 ↓

キースさんはどうやら病魔に侵された村を救いたいと思い、治療の為の薬を手に入れる為に村を出たという。彼の知り合いで今現在、病気に効く薬を扱っているのは、ギルドお抱えのお医者さんかガラクトマンか自前で薬を生成出来る僕くらいである。

そしてギルドの方には向かっていなかった。道すがらに浮遊していた精霊さんたちから教えてもらったので見間違いがなければ信用できる情報だ。あれらには嘘という概念がない。だから下級精霊たちの情報は確かなのだ。

しかしそうなると思えば彼が行きそうなのは僕のところかガラクトマン魔法学校くらいのもだろう。ちょっと他に薬を扱ってそうなるころは僕には判らない。彼が今なにを考えて何処に行くつもりなのか、ソレは本人にしか解らないから今の僕はただ彼に追い付けるように空を飛んでいた。

そして<sup>イマジンセル</sup>ITを使い、盾を変形させて飛行する事数十分。



時折のんびりと浮遊している意思疎通がなんとか取れる下級精霊さんたちにキースさんの特徴を教え、此方に来ていないかを聞いて回っていた。下級精霊は人間のように言葉を発する訳ではないので何を言っているのかを理解するのに時間が掛った。

理解してみれば話すことなんかないよとケタケタ笑っているヤツだけだったりとかいたしね。それはともかく、思った通りキースさんは僕の家を指指そうとしていたらしい。

だが彼の性質を考えるとそれが上手くいく訳もなく、途中で何故かクノルとも魔法学校とも勿論僕の家とも違う方角へ針路が変わっていた。下級精霊さんらはそっから先は見えないという風に身振り手振り言っただけなので、本当に何処に行っただのか解らなくなってしまった。

仕方なしに、更に数十分周囲を搜索する。この近くに居ることは精霊さんたちの情報で判っていた。だから、もしかしたらまたこの近辺に居るかもしれないと思い探した。でもあの人の事だし、やっぱり道に迷ってるのだろうか？

そして探すこと十数分、見事キースさんを見つけはしたのだが

「ぬおおおおおおおおお！……………」



って冷静に解説してるんじゃないか！

「エレメンタルミサイル！」

詠唱は圧縮。精霊さん、ちからを貸して

意思が通じたのか色んな色の魔力で出来た球が僕の周りに浮かび、それらが今まさにかじられかけているキースさんを襲う魔獣へと向かって行き、そのまま特に抵抗もなくズバンとキャリオンクローラの頭部を貫いた。

パーンという音と共に・・・あゝ、正直とてもお食事中だったから見せられない様な光景が広がってしまった。スプラッタ状態になっってしまったが、コレでキースさんがなんとか助かったから問題無いだろう。良い子は真似しないでね？おにーさんとの約束だ。

「おおおおお・・・齧られ・・・てない？あれ？クローラーが・・・って、クサツ！？なんかネツチャリした液体ががががってかなめくん！？」

巨大芋虫の体液を全身に浴びたキースさんはその中でのたうち回っていた。原色丸出しの芋虫の血液は何と言うか青い。地味な色合

いだが、それがまた芋虫の原色丸出しなお肌をより気持ち悪く引き立たせていた。

というか、こんな気持ちの悪い生き物の体液を浴びてしまってキースさんは大丈夫なのだろうか？正直自分はどうなるのはお断りしたいところ。もっともこの光景は僕が魔法を使ってキースさんを助けたからなのだが・・・気にはいけない。

「キースさん、驚くか混乱するかどれかにしましょうよ」

異臭が漂うキースさんに周囲の水系の下級精霊さんたちにお問い合わせして水をぶっかけてもらった・・・消防車の放水みたいになって吹き飛んだけど僕は気にしない。

「ひ、酷いよかなめくん・・・」

「やっと見つけましたよキースさん。ギルドから搜索依頼が来てたので探しに来ました」

「うい！？・・・あっちゃ、あとで受付の姐御に怒られるぜ・・・つてそれよりもかなめくん！一緒に来てくれ！君の力があるんだっ」

「村で起きた病気の治療薬が居るんですね？持てるだけ持ってきてますよ」

「それは都合が良い！とにかく行くっ！」

まあそう言うとは思っていた。なので彼とあの村まで飛んで戻った。俺の苦勞つて一体・・・とかキースさんが呟いているけど仕方ないですよ。今の今まで何処にも連絡を入れないで単独で行動していたのはキースさん何ですから・・・。

まあ急いでいたっていう理由もあったんでろうし、僕が強く言うこともできないけど・・・それでも、心配はしたんだと、心の中で思った。

さて村に到着した後、僕はすぐに持ちこんだ薬を病氣の人に分け与えた。村の人達が掛っていた病氣は僕の知識程度では判らない病氣だったけど、対症療法と魔法の薬という反則的な効果を持つ薬で治療にあたった。

勿論僕は医者では無いし、あくまで病氣などに効く薬や体力を上げる薬を持ってきているだけである。だがそれでも病氣の人達には効果的だったらしく、そのお陰か死者をこれ以上出すことなく終息した。

伊達に魔法学校の教授の助手をしていた訳ではない。とはいえそこでならっていた薬が効いてなんとかなったことに陰で胸を撫でお

るしたりしたりはした。病気に効く薬とかでも細かく分かれているのかと思えばそうでもないらしい。

でも、ほぼすべての病気に効果があるのとかまで元居た世界だったらノーベル賞レベルだろう薬や普通に風邪薬と同じ効能だったりとピンキリだったりする。そんな薬さえあれば大抵はなんとかなるんだそう。もっとも作るのに時間が掛るからあまり出回らないらしいけどね。

まあそんな事はいい。大事なのはキースさんを無事発見して村の病気をなんとかできたという事だろう。とりあえずギルドに報告に戻る前に、村にありつたけの薬を届けた後、僕はキースさんを伴って村をあとにした。

本当は飛んで帰れば良かったんだけど、受付のおねーさんを怖がったキースさんが牛歩戦法とか言って僕を引きとめたので帰りは歩きだった。そんなことしたら余計に怒りを買っただけだと思うけど。。。

「いやはや、かなめくんが来てくれたよ」

「たすかったよじゃないですよ。危うく森の肥やしになっちゃったところだったじゃないですか。もう少し遅かったらどうなってた事か」

「まあ、良いじゃないか。俺は無事、村も助かり、帰路につく。うん、問題無い」

「あ、あなたは・・・まあいいです。僕が怒らなくてもギルドの人が怒るでしょうしね」

若干、僕怒ってますという感じで彼にそう言ってやった。するとキースさんは面白いくらいにうるたえてみせる。うるたえるくらいなら最初から連絡の一つでも入れてくれれば良いのに・・・でも何でこんなことをしたのかふと聞いてみたくなった僕は、彼に尋ねてみた。

「え？なんで村を助けようとしたかって？・・・なんでだろうなあ」

「なんでって、何か目的があったとかじゃないんですか？」

キースさんは首を傾げながら言うが、ギルドに所属している人が報酬もなにも考えずに行動するとは僕には思えなかった。無償で慈善をするなんて僕みたいなもの好きくらいだろうと・・・だがキースさんは若干はにかみながらこう答えた。

「困っている人を助けるのに、立場や目的は関係ないよ」

自分がそうしたかったからそうしたと、彼は何の気負いもなく述べた。清々しさを感じさせるような即答ぶりに、呆れを通り越して

感心してしまった。だが同時にこの人はギルドとかは似合わないんじゃないかと、そうも感じた。

ギルドというのは、言っただけで悪いけどお金目当ての人間が多い。かくいう僕も最初はこの世界での生活基盤としてお金が欲しかったからギルドの戸を叩いていた。だからてっきりキースさんも同じ穴のむじなだと考えていた。

「もちろん報酬が出たことに越したことはないけどさ。ああいう村を見るとどうも生れ故郷思いだしちまってさ」

帰り道を歩きながら彼はそう話を続け、僕も話のタネにはなるだろうと続きを促した。何てことはない。彼の故郷はクノルから山を二つ越えたところにあったという名前もない様な集落だったらしい。

あった。過去形なのは、つまりそう言う事なのだろう。この世界には病に効く薬は確かにある。どんな病気も治せる治療師も存在する。だがそれが全ての人々に行き渡るかは別の話。彼の故郷は、あの村のとは違うが流行り病で人が消え去った。

だからだろう、たまたま立ち寄った村が病魔に侵されているのを見て手を貸したのは……。人は良くある話だと言いかもしれないが、彼にとっては見過ごせる話では無かったということ。ただそれだけだ。

「……でもせめて何処かに連絡入れてからにして下さいよ」



「いやー、すまんすまん。でもさ、そうしたらかなめくんが助けてくれるだろ？」

友達だし、と彼はそう呟いた。

「まったく、ハタ迷惑な友達もいたものですね」

口ではそう言ったが、なぜか不思議と嫌では無かった。

この人は良くも悪くもギルドの仕事には向いていない。自分の身を顧みないというか、そんなこと考えもせずに行動していたあたり、それが素なのだろう。周囲に迷惑をかけてしまうという迷惑な人。

だけど、それが良い。

人が人に迷惑をかけるのは当たり前。そして困った人に手を差し伸べるのも不自然なことじゃない。こういう人が1人くらい居た方が、殺伐とした世の中にも救いがあると言うものだろう。

とはいえ、そうなるとこの人が何かする度に僕がなんとかしなきゃならないのかという考えにいたるが、まあいいかと思ったのはここだけの話。

\*\*\*

キースさんを般若と化した受付のおねーさんの元へと送り届け、僕はそのまま家へと帰って来ていた。ギルドから出る際に誰かが奥の部屋へと引き摺られていく音を聞いたけど、別に興味はわかかなかったのでその場を後にしている。とぼつちりは嫌なのだ。

家ではチビと犬形態の紅が庭に寝そべり、水の人工精霊ウィンデイが洗濯物を干していた。尚このウィンデイは僕の中に居るウィンデイが造り出した分身である。脆いから戦闘等には使えないが家事などには有効活用できるのが強みだ。

それにしても、この家の周辺は平和そのものである。空気が違うとはこの事だろう。この家には魔獣避けの対策が施されているので敵が近寄る事は殆ど無いのだし、平穏が流れるのもわかる。

「ただいまー」

「あら、おかえりなさい。キースさん見つかりました？」

「ん」

「あら・・・はい握手っつと」

分身ウィンディが成果を聞いてきたので、口で説明するよりも早  
いだろうと彼女と握手した。これにより分身は僕の中にいた本体か  
ら記憶を見ることになる。口では長々説明せねばならない事もこの  
方法なら一瞬だった。

本体の記憶を見た彼女はあらあらといった風に頬を緩ませただけ  
で、とくになにか言うこともなく仕事へと戻っていった。おもった  
よりも興味をひかなかったのかもしれないし、キースさんという存  
在は彼女にとってはその程度の認識なのかもしれない。

自分から聞いておいて実はそれ程興味がなかったというの、ま  
たなんとも言えないと腹の内ではやくが僕の中の本体が優先順位が  
家事の方に傾いていただけですと述べた。ウチではキースさんの扱  
いは家事以下だと判明した。ある意味可哀そうだった。

その後、僕の気配に気づいて起きた紅とチビを伴い家の戸を潜り  
中へ入る。今日は一日大変だったが、知り合いの面白い一面が見れ  
たので特に不満はない。強いてあるとするなら腹が減ったーと紅が  
じゃれつきながら噛みついてくることくらいだろう。

適当な材料でホットケーキもどきを作り、蜂蜜をかけて出してや  
ればチビ共々紅は目を輝かせながらおやつへと齧り付く。もともと  
犬なのにアレルギーがどうたらとか消化できないのではという考え  
が一瞬よぎったけど、まあ摩訶不思議世界なのだし摩訶不思議な原  
理が働くのだろうと随分と前に納得していたので気にはしなかった。

僕の中にいたウインディを実体化して別れ、僕は僕でまた地下研究室へと戻り、薬品の製造を行う。何せ沢山あった薬をありったけ持って行った上に、病気の村人処方して残った分を全部あげてしまった為、ストックが全てそこについていたのだ。また一から作り直しかと考えると少し気が滅入るが、一度作ったものなのでできないこともない。

作業机にポツンと置かれたシエルさんから贈られた基礎魔法薬のグリモワールからこれまで作った薬のページを開き、必要なモノを集めレッツ調合。丸い形状をしたいかにも魔女が使いそうという釜に薬草や鉱石をブチマケて何故かある蒸留用の装置にかけたりして薬の生産を進めたのだった。

\*\*\*

それから数日後、いそいそと魔法薬作りに専念していると来客があった。誰が来るのかは勘だが判っていたので、ストックで作った薬を幾つか持ちだして持つて行く。若干冷える地下室から地上上がった僕はゆっくりとした歩調で客間へと向かった。

客間に行けば見慣れた金髪が見えた。まあ誰だかは言わなくてもわかるだろう。

「やあかなめくん、ひさしぶり」

「そろそろ来るんじゃないかと思ってましたよ。はいこれ」

「おお、ありがとう。じゃあこっちもこの間迷惑かけたお詫び」

「……（菓子折りってこの世界にもあったんだ。中身は違っっぱいけど）」

言わずもがなキースさんである。どうやら今日は前回迷惑かけた謝罪も兼ねてウチに寄ったらしい。薬も欲しがるだろうと思っていたので持ってきたら案の定受け取ってすぐに彼は自分の懐に収めていた。まあそれだけ重宝されていると思えば悪い気はしない。

「でもギルドをクビにされなくてよかったですね」

「あはは、その代わりこつてり絞られてしばらくは謹慎だよ。それが解けてもしばらくは報酬は半分に減らされちまうんだぜ。戦士系はお金が掛るってのにさ」

「ははは……ところで謹慎中はどうするんです？」

「ん〜、しばらく休んでなかったし良い機会だから、ちょっと故郷まで戻ってみるよ」

「え、でもそれって……」

彼の故郷はかつてあった……今はもうないと聞いたけど、墓参りみたいなものだろうか。

「ときどきは顔見せてやらないと心配されるからな！じっちゃんばっちゃんに」

「……ああ、そういふこと」

どつやらちよつと僕はすこしばかり勘違いをしていた様だ。彼の故郷は完全には無くなってはいない。ただ人はいるけどもう村とは呼べる規模では無くなったということ……僕が思っていたことが顔に出たのか、キースさんはんだんだと頷いた。

「てなわけですり帰って来れないから、まあ今回はその挨拶」

「そうですか。ん、ちよつと待っていてください」

キースさんを客間に残し僕は地下の保管庫へ。たしか幾つか試しに作ったのがあった筈・・・あったこれこれ。幾つか薬瓶をもって客間へと戻った。

「これ、試作なんですけど、僕が作った薬草酒なんでもって上げてください」

あげたのは半ば趣味で作ったお酒に薬草を漬け込んだ薬酒だった。シエルさんが魔法薬を研究してた上、そこで助手として働いていた僕は必然的に薬草と触れあう機会が多く、どういう効果の薬草やハーブがあるか知っていた。

今回持ってきたのは身体の血行を良くし鎮静作用のあるハーブを、街で買ったジャガイモから作られたって言うお酒を自前で蒸留して漬け込んだものだ。ちよつとキツイけど薄めれば身体が中から温まるお酒・・・もといお薬である。

「え？いいの？お酒もらっちゃって？」

「さりげなく結構沢山作ってあるので大丈夫ですよ」

「わ、わるいなあ。なんか」

「いいえ、気にしないでくださいな。今度請求しますから」

「タダじゃないのっ!？」

「冗談ですよ」

請求するの言葉に本気でハネ上がった彼の姿を見て思わず頬が緩む。

それを見たキースさんも恥ずかしそうに頭を掻きながら、今日はこれで帰ると言って薬と薬酒を片手に玄関へと向かおうとしたので、僕も彼の後に続いてお見送りをしに玄関へと向かった。

「それじゃ、道中気をつけて」

「薬と酒ありがとな。じっちゃんとかに良い土産できたわ」

またいずれと言葉を返し、キースさんが見えなくなるまで見送った後、僕は家に戻った。彼にはまだ帰れるところに故郷がある。羨ましい限りだ。僕とか紅は戻れないから余計にそう思ってしまう。ホームシックではないので羨ましくおもっても恨めしいとかは思わないけどね。

彼が無事に故郷に着けることを祈りつつ、無くなった分の薬をまた作るうと裏の薬草畑へと足を向けたのだった。



## 第49章（後書き）

どうも、かなり長いこと放置していた作者のQOLです。

今回は・・・書けるか未定ですのでまた間があいたらゴメンナサイ。

ソレでは失礼ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0923h/>

---

出歩いて...落っこちて...

2011年5月29日10時50分発行